
魔法先生ネギま！～誰が為に何を成す...～

グニル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま！〜誰が為に何を成す…〜

【Nコード】

N6873N

【作者名】

グニル

【あらすじ】

テンプレートの如く事故に巻き込まれ死んでしまった主人公草薙亮。そこで会ったのは神様と名乗る青年だった。神様の導きでネギまの世界へと降り立った彼はこの世界で何を成すのか。ご都合主義の処女作品、その上不定期更新と最悪な状況ですがご容赦ください。

この作品を見る際は原作を一度読んでいるほうがいいです。作者の表現だけでは分からないところが多々あります。

プロローグ(前書き)

追記、6月15日に設定修正して再アップしました。

プロローグ

プロローグ

Side 草薙 亮

はじめまして、俺の名前は草薙 亮。

ついさっきまで人間をやっていた。

過去形なのは…俺が今…多分死んでいるからだ。

時間的には一時間前、大学の帰りに横断歩道を渡っているときに、居眠り運転のトラックに撥ねられて呆気なく俺の人生は終了したらしい。

まあ現実世界の両親は既に死別してるし、生活費稼ぐためにバイトと学校の往復だったから親しい人もいないせいで悲しむ人なんていないから別に良かったような気もするんだけど…

なんか言ってる悲しくなってきたな。

一回状況を確認するか…

「いやー、死んだら幽白みたいに霊体になれるって思ったけどやっぱり無理だったんだ」

実感が沸く沸かないの話ではない。実際に俺の目の前にはどこまでも続く雲のような白い空間が無限に続いており、俺の体はそこに浮いている状態だ。

こんな光景や体験が現実世界にあるわけが無い。実感が無いのは多分死ぬときの記憶が曖昧だからだろう。ということとは恐らく即死

だったのか。

痛みを感じないで死ねたのは幸いと言つべきだろう。

さて、そんなことを考えているうちにもう一時間が経とうとしていた。

ということはそろそろ…

そう思った瞬間目の前が巨大な光に包まれ、あまりの眩しさに目をつぶる。

光が収まった頃に目を開けるとそこには俺と同じように宙に浮かぶ少年がいた。

「はじめまして、草薙 亮さん・・・だよな？」

「はあ、そうだけど…あなたは死神か何かかい？」

「死神って…まあその様子だと死んだことは理解してるみたいだね」

やっぱり俺は死んだんだな。これでしつかりとした確証が持てた。

「よし！覚悟は決まった！地獄でも天国でも連れて行きやがれ！」

そういうと相手は困った顔をした。

「いや、そう焦ると損をするよ。とりあえず僕の話聞いてくれな
いかなあ」

「え？だって俺死んだんだろ？俺一応見たことと体験したことは信

じることにしてるんだけど」

「まあそこら辺の話もまとめてさせてもらつよ。あ、自己紹介がまだだったね。見た目はあれだけど一応神様だ」

「死神じゃなくて神様か。見た目的にはどっちかって言うと天使の方が説得力あるんだがまあいいや。で、話って？」

「姿なんてどうでもなるもさ」

そう言つて神様と名乗つた少年が一瞬眩しい光に包まれ、俺がまたも瞬間目を閉じる。目を開くと先ほどの少年の姿は無く初老の男性が立っていた。

「ね？」

「ああ、分かった。見た目のことは気にしないよ」

そついつと神様が再度もとの少年の姿に戻る。

「それで話のことなんだけどさ。君は転生する気があるかい？」

はい？ 転生つてあの死んだ奴がもう一回世に生を受けるつていうアレか？

「ま、概ねそんな感じ」

心の中読めるのか…

「一応神だからね。それくらいは容易いもんだよ」

「というか何でそんなことを聞くんだ？輪廻転生は勝手に回るようなもんじゃないのか」

「へえ、よく知ってるね。そう、輪廻転生は閻魔の下でしっかりと回るようになってる。ただし君はちよつとイレギュラーなんだ」

「イレギュラー？どこにでもいるような平凡な俺が？」

「そう、本来君は別の世界に生まれるはずだった。平行世界っていうのかな？いや異世界って言ったほうがいいのかもしれないね」

異世界って…俺そんなところに生まれる予定だったのか…

「そう、本当はね。こちらの手違いだ」

神様でも手違いってのはあるんだな。

「それは全くもって弁解のしようもない。まあ一度生を持った生き物を神の力で殺すって言うのはあまり良いもんじゃないんでね。君が死ぬまで待つてたって訳」

「そう聞くと俺の死を待つてた死神みたいだな」

「まあ否定はしないよ。一応生も死も操れるからね。でもまあ生まれたからにはその人がその世界で何を成し遂げるか興味沸くじゃないか」

「まあ分からなくは無いかな？」

「で、どうかな？一応21年前のことだけどこっちの手違いだし、今の世界以外なら転生させてあげることができるけど」

つまり俺はまた人生をやり直す機会があると…そういうことか。

あれ？でもそしたら今の記憶とかどうなるんだ？結局転生しちゃうと忘れるんじゃない？

「あー、それは大丈夫。それは融通してあげるよ。肉体も知識もサービスしてあげる。流石に無理なものは無理だけど」

「意外と神様つてのも狭量なんだな」

「それは心外な。世界のバランスを調整してると言っただけだしね」

好きな世界か…ぶっちゃけ行きたい世界なんて無いんだよねー。俺はあの世界の日本が好きだったし、あの世界以外の場所つて言うてもなあ。

「まあ迷うのも無理は無いけど転生にも時間つてものがあってね。あと10分後くらいにはできなくなっちゃうよ」

「ちょー！そんな重要なこと早く言ってくれよ！」

あー、くっそー！分からん！余計混乱してきたぞ！

「あのさ、君つて魔法とか興味ないかな？」

「魔法？つてそういう世界にもいけるのか！？」

「うわ、さつきと食いつきが違うね。なんかやってみたいことでもあるのかい？」

「そりゃ神様よー！俺はドラ エ世代だぜ！魔法なんてファンタジーの世界懂れない方が無理ってもんよ！」

うはー！魔法の世界に行けるのか！こりゃ死んだのもあながち嫌なことじゃないかもな！

「魔法世界つと。それでいいのかい？」

「おう！もちのろんよー！」

「えーつと…うわ、漫画だけどいい？」

え、漫画？リリカルな はとか？

「いや、魔法先生ネギま！っていう漫画の世界」

「あー、まあそこでもいいや」

本当はド クエの世界が良かったんだけど…よく考えたら魔物とかに殺される可能性も考えたらあのラブコメ風…いや、今はバトルものだったか？

つかあれほとんど目が留まったときしか読んでなかったからストリー全く知らんのよね。とりあえず魔法が使える学園物の世界だつてことくらいしか知らないんだけど…まあいつか

「そうかい。じゃあ時期はどこがいい？」

「え？それも選べるの？」

「さっきから言ってるけど一応神だからね」

「んー、じゃあ原作始まるちょい前くらいで」

「分かった。原作が始まる一月前に設定しておくよ。じゃあ最後に一つ、なにか欲しい能力は無いかい？」

「能力？」

「そう。いくらこつちで身体能力を強化したって言ってもそれは人間を超えるほどではない。実際に君の強化加減は向こうの世界で言うタカミチ・T・高畑っていう魔法先生とより多少強いくらいだからね。魔力は一応ネギ・スプリングフィールドっていう子供先生よりちょっと少ないくらいにしておいたけど…それくらいなら能力なしだと一般人に埋もれてしまっくんじゃないかい？」

「さっきは世界を壊さないのが仕事の一部とか言ってたくせに…」

「それこそ言つたる？一度生を持った人間が何を成し遂げるか興味があるってさ。で？後1分だけどうする？」

「げ！もうそんなんか！？えーと…えつとー！

「んー、じゃあ君は何が好きだい？」

「え？んー、今は将棋とかチェスかな…あ！」

「あ！思いついた！」

「どつやら思いついたようだね」

「ああ、俺はこの能力がいい！頼むぜ神様！」

「了解…つと丁度時間みたいだ。頭で思い浮かべてるだけで良いよ。その能力は付加しておくから。じゃあね草薙 亮。君があの世界で何を成し遂げるのか。それとも何もしないのか。天から見届けさせてもらおうよ」

・ああ、ありがとつな神様・

俺の言葉はもう言葉にならなかった。既に体が光に包まれて半透明になっっている

「礼を言われる筋合いは無いよ。元々の原因はこっちにあるからね」

・もう俺みたいなのを出すんじゃないぞ・

「分かってるよ…」

釘くらいは刺しておかないとな。神様も苦笑いしながら手を振ってきやがる。

つと、そうこうするうちに意識が無くなってきやがった…どつちかと言つと眠気かな…少し、眠ろうか…

S i d e o u t

Side 神様

「行ったか…」

ようやく仕事が一ツ片付いた。こういう一ツ前の神様の仕事を押し付けられるんだ。新人神様ってのも楽じゃないよ。

って、またそうこうする内に新しい転生準備人だ。一体前の神様は何人間違えた世界に送ってるんだよ…

名簿あつたけどリスト長すぎて何人が把握してないんだよな！。まあ仕事も世界を見るだけだし暇だからいいんだけど…流石にこう頻繁だと参っちゃうよ。

「さて、またさっきのやり方でいいか。今度はどの世界が開いてるのかな」と

今度のはさっきの草薙 亮より状況を把握できてないみたいだ。だったら転生とか言わずにそのままのあの世行きを進めてみようかな？

「はじめまして さん…だよな？」

Side Out

プロローグ（後書き）

はじめまして、グニルと申します。読む専から脱出するために書き始めました。

軽い気持ちで書きましたが大変ですね。

改めて名作者様たちに感謝と尊敬を。

初投稿なので下手だとは思いますがそれでも良い方はどうぞご覧ください。

とりあえず自分の為…(前書き)

追記、6月16日修正

とりあえず自分の為…

Side 草薙 亮

「で…」

目が覚めると、そこは暗がりだった。

暗さに目がなれないせいで周囲に何も見えない。

幸い月明かりはあるため、慣れるのにはそこまで時間はかかりそうにない。

直ぐに目が慣れてきた。見渡すと辺り一面に広がる木、木、木。

どこやらどこかの森の中のようだ。

「そういえば降りる場所は指定してなかったな…失敗した。樹海とかだったらどうするべ」

とりあえずこういうときは動かないに限る。朝まで待って周囲を探るほうが懸命だ。

そう、焦らない焦らない。一休み一休み。

神様がどうやら俺の荷物も一緒に創ってくれたようだ。近くには死ぬ前まで持っていたリュックが転がっている。こういう所は気が利くんだな。

とりあえずリュックを拾おうとして…

「お、おい兄ちゃん」

はい、何かに話しかけられましたが無視します。
だってこんな場所に人がいるはずが無いじゃないですか、
しかも明らかに俺の後ろから月明かりを消すくらい巨大な人影な
んでねえ……

「む、聞こえんかったのか？おい兄ちゃん！」

無視作戦は失敗でした。やっぱり人を無視するのは良くないよね、
うん。

意を決して俺は振り向く。きつとただとても大きい人だと信じて・
・

「はい、なんでしょ……う……」

そこにいたのは頭の左右に角があり、口からは牙を生やし、人よ
りも圧倒的に大きな体格を誇る生き物。

鬼……だった。

「すまんなあ、聞こえんかったか。ちよっくら道を尋ねたいんだが」

「へ？」

「ここから麻帆良学園に行くにはどう行ったら見つかりにくいかね
え？」

この鬼はここを麻帆良学園と言った。そのくらいは一応知ってい
る。確か主人公たちが生活している学園都市の名前だ。

つまりここは既に麻帆良学園の敷地内でこの鬼はここに侵入してきた外敵ってことか？

俺が入ってきた時点で誰も俺を捕まえに来ないってことはこの鬼たちと戦っていたからって所か…

「おーい兄ちゃん、聞こえとるか？」

は！考えてる場合じゃない。とりあえずごまかさないと。

「いやー、俺も最近ここに来たばかりなんで迷っちゃったんですよ」

「なんじゃ、兄ちゃん迷子かい。そりゃあすまんかったなあ」

「いえいえ、それじゃあ俺はこれで…」

ふう、とりあえず急場は凌いだかな？ていうか鬼って見た目と違っていい人…？

「まあ、気の毒だが死んでくれや」

…はい？…

背後で急に殺気が膨れ上がる。体中に冷や汗が噴出したが体は考える前に素早くしゃがんだ。その上を鬼の豪腕が唸りを上げてすぐ横の木を粉碎した！

「ちょ！何するんですか！」

そついいながらも素早く起き上がって鬼の間合いから脱出する。

神様に身体能力上げてもらってなかったら今ので死んでいたところだ！

流石に生き返ったばかりでまた死ぬのは御免被りたい。

「すまんなあ兄ちゃん。見られた人間は殺せって言われとるんだ。まあ運が無かったと思って諦めてくれや！」

鬼がそついうと持っていた木を放り投げってくる。迫る大木！無くなる命・・・！冗談じゃねえ！

咄嗟に横に避けて逃げ出す。やはり体の反応は転生前と全く別物だ。体格は変わってないのに不思議なものだ。まあ今はそんなこと考えてる場合じゃない！

荷物は惜しいが鬼の反対側だ。はっきり言って命のほうの方が万倍大事だ。

「俺が見たくて見たわけじゃないのにー！」

「姿見られた以上は同じことじゃー！」

なんで本物の鬼とこんな夜の森で本当の鬼ごっこせにやならんだ！捕まったら交代無しの即死ってリアル鬼ごっこじゃねえぞ！しかも俺佐藤さんじゃねえし！

しかも鬼の発する殺気で体が萎縮しちまってる。上手く動けん！

一応木々の狭いところを狙って通っているのにそんなのお構いなしに鬼はなぎ倒してくる。

しかもそのなぎ倒した木をそのまま投げってくるから始末が悪い。回避するたびに距離が縮まる。

「あ！」

暗さもあいまって突出していた木に・・・躓いた！

「ここまでのようじゃな兄ちゃん。ま、往生してくれや」

オワタ、俺のネギま！での物語… たった一時間も経たずに完！

振りかぶった鬼の腕が俺の頭に振り下ろされ…… ことはなかった。

「え？」

俺が疑問の声を上げると鬼が次の瞬間には頭から真っ二つになり消滅した。

その鬼の背後には巨大な野太刀を構える女の子がいた。

「ふう…」

凜々しい顔つきに長い髪をサイドテールでまとめている。しかし体つきからすると中学生くらいだろうか？とりあえず立ち上がった体に付いた土を落とす。

「えっと、ありがとでいいのかな？」

そういって少女に近づこうとすると…

「うおー！」

何故か野太刀を首に突きつけられました…反射的に両腕を上げて
敵意の無いことをアピール！

当たる当たる！いやもう当たってる！

「失礼しますが貴方を拘束させていただきました」

少女が凜とした表情を崩さずに言い放つ。てかよく見ると可愛い
子だな。将来は美人確定だ。

「えっと…とりあえず理由は？」

「ぬけぬけと…とりあえず来てもらいましょうか。ここではまた奴
らが来るかもしれないので」

「あー、うん。了解」

うん、これで首の野太刀を引いてくれれば文句は無いんだけどな
あ…

そんなことを思いつつ両手を挙げたまま（下げようとしたら野太
刀押し付けて来るんだもん！）少女の前に立って道案内どおりに進
む。先ほどまで俺の通ってきた道をほぼ逆走だ。

ちょっと歩くと獣道に出た。どうやら鬼と会ったすぐ近くにあっ
たらしい。暗すぎて気づかなかったんだなあ。

「あ、そういえば…あのさあ、荷物とつて来ていいかなあ？」

「ダメです」

ですよ〜

もしかしてつてダメもとでいってみたけどやっぱりダメだったか。まあ俺は不法侵入者だしな。後で探しに来るか。

獣道をそのまま進むと場所が開けてきた。そのまま進むと…

「うわ…」

そこに現れたのは西洋風の町並みだった。

あれ？ここって麻帆良学園・・・でいいんだよなー？こんな森あったんだなあ。

辺りをきよるきよると見回すとそれらしき樹が見つかった。いや、見つかったと言つかあれはでかすぎだろ…めちゃくちゃでかいな。

200mはあるんじゃないか？

なんでさつき鬼に追いかけられた時気づかなかったんだ…

つか鬼も気づけよ！

「行って下さい」

んー、まだ犯罪者扱いっぽい。いい加減その野太刀をしまつて欲しいところだ。突きつけるのをやめてはいるが未だに抜き身のその刀身は月の光を反射して妖しく輝いている。

そのまま世界樹の下まで案内される。うん、やっぱり間近で見ると迫力が違うな。なんて思っていると後ろから刀を納める音が聞こえた。

「来てください」

そのまま俺を追い越すと世界樹の下まで歩き出す。無論俺を自分の間に合に入れてたままなのだが。世界樹の下の広場に着くと10人ほどの人たちが集まっていた。上は30くらいで下は中学生くらいだろうか？考えていると少女に一人の男が話しかけた。

「やあ刹那君：その人は？」

「高畑先生。この人が先ほど結界内に急に現れた謎の魔力の正体です」

「ほう、この人が？」

眼鏡、無精髭、煙草にスーツとくればこの人がこの場のリーダー格のようだ。少女の言葉からこの人が神様の言ってた人だろう。ということとは俺はこの人より少し動ける程度の身体能力ということになる。

で、刹那君って言ったつてことはこの子の名前は刹那らしい。まああんな野太刀使ってる時点で大体検討はついてたんだけど…確か苗字は桜咲、だったか。

で、こんな話をするということはここにいる人たちは大体魔法関係の学校関係者って所か。っと考えてる場合じゃない。高畑さんに刹那と呼ばれた少女は報告をし合っているみたいだ。とりあえず一応聞くことは聞いておかないと。いきなり名前を呼んだらそれこそ変人だ。

「あの一…」

「ああ、すまないね。幾つか質問させてもらって良いかな？」

「はあ、答えられる範囲なら」

さすがにいきなり名前を聞くわけにもいかないか。疑い晴らすのが最優先だね。

「まず名前を聞こうかな」

「草薙 亮です」

「ふむ、質問に答える気はあるようだね」

「まあ・・・そうですね」

「じゃあ次、君はなぜあんなところにいたのかな？」

おいでなすった。結構直球で来るなあ。もうちょっと回りくどく来るかと思ったのに。

「気がついたらあそこにいました」

「気がついたら？」

「そんな言い分が通ると思っているのか！」

刹那が食って掛かる。ごもつとも、俺も通るなんて思っちゃいないが真実だ。これ以外に言いようが無い。

だからって野太刀に手を掛けるのはやめてもらえないかなあちよつと！

転生したなんて言っても逆に信じてもらえないからな。これを押

し通すしかないんでねえ。転生なんて出だしたらそれこそ精神病棟にでも入れられかねない。

「まあまあ刹那君、落ち着いて」

「しかし高畑先生！」

「この人の目は嘘はついていない。それは僕が保障しよう」

「くっ！」

おお、流石先生。生徒をなだめるのはお手の物だな。

「しかし無条件で信じるわけにもいかないなあ」

「まあ俺もそこまで都合よく行くとは思ってないよ」

「では一時的にこちらに身柄を預けてもらう、と言つことでもいいかな？」

「それで疑いが晴れるなら喜んで」

ふむ、案外すんなり言ったな。一週間くらい軟禁されるのは覚悟していたんだけど…しっかしまあどうやって介入しようかねえ。

他の魔法関係者はいつの間にか帰っていたし刹那に至ってはこちらを見てもない。相当ご立腹だ。同じ立場だったら俺も同じようにするだろうがもう少し愛想よくだなあ…

あ、そうだ。聞き忘れてた。

「ではこちらへ、草薙君」
「ああ、一ついいかな？」
「うん、なんだい？」
「あんたと彼女の名前は？」

Side out

Side 桜咲 刹那

この男は一体何者なのだろう？いきなり結界内に現れて膨大な魔力を放ったと思ったら鬼に追われているときにその魔力は消えていた。わざと自分の存在を示した？

違う。そもそもこの草薙 亮と名乗った男はこちらに敵意がないどころかこつちが殺気をぶつけても知らぬ存ぜぬで通してくる。

嘘ではない。それは自分自身でも分かっている。しかし真実も語っていない。多分そうだろう。でないが高畑先生があんな説明だけで済ますわけではない。

しばらく待てば他の先生の魔法などで情報を聞き出せるかもしれないがそれでは遅いかも知らない。

状況によってはあの男を処分せねばならないかもしれない。とにかくお嬢様に危害がある可能性は1%でもつぶしておかなければならない。

私は…この手でお嬢様を守ると決めたのだから…

S
i
d
e
o
u
t

流れとはいえ学園の為…（前書き）

追記、6月17日修正

流れとはいえ学園の為：

Side 草薙 亮

「んー…ん？ここは…」

見上げると見たこともない天井が目の前に広がっていた。

「あー、そうか。こつちの世界に来たんだっけか」

自分がネギまの世界に来たことを思い出す。

確か昨日は学校の一室に見張りありで入れられたんだっけか。ちなみに見張りは高畑さんだ。未知の相手だから強力な駒を置いておこうって魂胆かな。

ぱっと見ても高畑さんより強い人はいなさそうだったし。

とりあえず布団を出て昨日は見なかった部屋を見渡す。4畳ほどの小さい部屋だ。押入れも台所も無く布団が一式と窓があるだけ。独房と言えなくも無いが窓は格子もはまっておらず一人は余裕で通れる大きさがある。

「つかこれって逃げてくれと言わんばかりだよな…」

この部屋は二階だ。外は木など無いがちょっと気をつければ窓から逃げようと思えば普通に逃げられる。

俺自身は逃げる必要性が無いから逃げなかったがこれが本当に敵だったらどうするつもりなんだろう？

そんなことを考えていると入口のドアがノックされた。

「どうぞ」

「やあ、起きていたのか」

高畑さんだ。というより本当に夜中の間見張っていたのだろうか？だとしたら先生ってのは大変な仕事だな。いや、先生としてではなく魔法使いとして、だろうか？

「よく寝られたかい？」

「おかげさまで」

「それは良かった。ここは本来生徒用の部屋でね。大人の君では少々寝苦しいんじゃないかとしんぱいしてたんだ」

んー、いまいち高畑さんの性格が分からない。昨日の夜から正体不明の俺に対して何故か非常に礼儀正しい。

こっちとしてはありがたいのだが逆に恐縮してしまう。昨日いた桜咲って子よりはマシだけど・・・

朝起きたらまたあの世だったなんてことも冗談じゃなさそうだな。

「寝床があっただけでもありがたいですよ。昨日は野宿覚悟してましたから」

「そうだね。で、何で君は逃げなかったんだい？」

「はい？」

「逃げようと思えば君はその窓から逃げられたはずだ。なのにそれをしなかった理由は？」

やっぱり逃げることも前提でこの部屋に泊めたのか。

全くいい度胸と言うか甘いのか。この場合は自陣の戦力に自信があるっていうことだろうな。

「そりゃあそうですねけど逃げるようなことをした記憶はありませんが」

「それでも一応君は不審者なのだけけどね」

「う…なかなか核心を突いてきますね」

そう、結局魔法関係では何もしてないと言っても俺のいたところはこの麻帆良学園都市の私有地。つまりは不法侵入だ。警察に突き出されれば立派に犯罪者となる。

そんなことで頭を悩ませていると高畑さんが急に笑い出した。

「ははは！まあ君が考えてるようなことはしないから安心したまえ。それよりこの学園の学園長が呼んでるんだ。一緒に来てくれるかな？」

「学園長が俺のことを？」

「ああ、昨日のことを学園長に報告したら一度会いたいと仰ってね。どうだろうっ？」

ふむ、ここの学園長に会うのにデメリットは感じない。まあその

まま警察直行って言う考え方もあるが高畑さんは昨日と今日少し話
しただけでも信頼できる人物のようだ。

というより人に嫌味を言っても嫌味に感じさせない性格なんだろ
う。

「分かりました。直ぐに会わせてもらいます」

「ああ、今すぐじゃなくても良いよ。朝食もまだだろう？」

「でもここにはなにも…」

高畑さんが俺の言葉を遮って袋を顔の前に突き出す。

「差し入れだよ」

「どうも」

やっぱり高畑さんは信用できる人間のようだ。いや、決して朝食に
つられたとかそういうわけじゃないよ？

- 30分後 -

場所は学園長室。そして今俺は今学園長の前にいる

というかこの人本当に人間か？物語に出てくる仙人みたいに後頭
部が長い。

「学園長。彼が草薙 亮君です」

「おお、彼がそうか」

高畑さんの話を聞いて学園長が俺の方を見る。む、いきなり目つきが鋭くなつたな。なるほど、学園長って言うだけあってその眼力は本当みたいだ。

こつちも学園長を見る。30秒ほど向き合っただろうか。急に学園長が目を見てくるのをやめた。

「ふおつふおつふお。なるほど、タカミチ君の言つとおり悪い人間ではないようじゃの」

目は既に元の優しい老人に戻っていた。俺の体はかなりの量の汗をかいている。

きつつかった。流石にあの眼力を正面から受け止めるのはきつい。

「で、草薙君。君はこれからどうするつもりじゃ？」

「へ？」

「タカミチ君の話によると君はいつの間にかここに居たそうじゃな」

「信じるんですか？俺の言い分を」

「すべて鵜呑みにするわけではない。そうじゃの、真実半分語らな部分半分というところかの」

「む…それでその語ってない部分を聞かないんですか？」

この学園長すげえ。伝え聞いた話だけ聞いてここまで分かるのか。

「なに、誰しも皆には知られたくないことの二つや三つあるものじや。」

改めて組織のトップってカリスマいるんだな。こんだけ器でかい奴なかないぞ。

「しかしこのまま君を帰すわけには行かんのじゃな」

「ちなみにその理由は？」

「君から聞いた情報を少し調べたがの、君に該当する『草薙 亮』と言う戸籍は存在しなかった」

「げ…」

まあいきなり転生した奴が戸籍やら住所やら持つてるわけ無いわな。

「さらに君が昨日見たものにも問題がある。昨日君が追いかけられたものが何か分かっているかな？」

「多分鬼…ですかね？」

「そのとおりじゃ。そしてそれを見てしまった君は必然的にその部分の記憶を抹消せねばならない」

「魔法の秘匿主義…ってやつですね」

「む…」

後ろの高畑さんが少し警戒の態勢を強めた。

まずい。俺今まで一般人つてことになってたんだっけ。一応それくらいは俺の扱いからみても分かったつもりだったんだが・・・

口は災いの元とは良く言ったもんだ。

「ほ、何じゃ。君は魔法使いなのかね？」

「いえ、そういうわけでは・・・」

「いやいや、隠さんでもええ。君が発した魔力は大体の魔法関係者が気づいておる。今頃魔法使いだと言われても驚きはせんわい」

「そ、それはどうも」

「しかしなぜ今は魔力を発していないのかのう？見たところ何か特別なことをして押さえつけておるでもなし。魔力そのものが君からないようじゃ」

「それについては俺にもわかりません。鬼に見つかったのもそれが原因かもしれませんが・・・あ」

「ふむ、思い当たる節があるようじゃの」

あの時持っていて今持っていないもの。そう、あの神様が創ったリュックだ。

あのリュックになんらかの魔法道具なりが入っていれば説明がつく。

「えと、あの時落としたリュックだと・・・」

「リュック、ふむ。これのことか」

「あ、はい。それです」

学園長が机の下から取り出したのはあの時見たリュックだった。

「悪いと思ったが中を見させてもらったぞい」

「いえ、それくらいは全然」

「しかし中には魔力を感じさせるようなものは無かったがのう」

そう言っただけで学園長は俺にリュックを渡してくれた。一応中を確認する。

死んだときの学部のノート、教科書、筆記用具…チェス盤に将棋盤？こんなもの入れてたっけ？

そう思ってその二つを手を取った瞬間…

「ふお！？」

「な！？」

二人の反応が一瞬にして変わった。その反応に驚いて俺は慌ててその二つをリュックに戻す。

「ふむ、どうやらその二つが君にとっての魔法具らしいのう」

「しかし我々が触ったときはこのような魔力は生まれませんでした。

「一体これは…」

「うーん、これは神様に頼んだ能力のせいかな。」

「草薙君。これは一体…」

「えっと…自分じゃ分からなかったんですけど…」

「学園長」

「ふむ、草薙君。今君がその二つを手を取った瞬間いきなり巨大な魔力が君の体から発生したのじゃ。君には分からなかったかな？」

「はい、自分では変化が無かったように思いますけど」

「ふつむ、自覚なしか。これは厄介じゃのう」

学園長はしばらく考えこんでしまった。高畑さんは俺のチェス盤と将棋盤を改めて調べなおしている。一分くらい考えていた学園長が口を開いた。

「時に君はこれからどうするのか？」

「はい？どうするのかというけど…」

「君には戸籍が無い。ということは職に就くことも…いや、荷物内容から学生かの。学校に行くことも住むところを見つけてくることもできんか？」

「…どうしましょ？」

む、いい性格してるぞこの爺さん。こっちが今自分たちを頼るしかないと分かりきった上でこの質問を投げかけてきやがった。ってことは次にかけてくる言葉は…

「どつじやろつ？そちらが良ければここで働かんかね？」

ほら来たー！

むろん有難くはある。というより今の状況でこの申し出を受けない奴はいないだろう。居たとしたらそれは法治国家日本でサバイバルで生きていける自信がある奴だけだ。
残念ながら俺にそこまでの自信は無い。

「嬉しいですけど…俺はまだ年齢も21で大学生ですよ？」

「何心配いらん。君には来年入ってくる先生の副担任をしてもらいたいのじゃ」

「副担任？それ以前に副担任でも教員免許とかないんですけど」

「戸籍が無い者がなに言うとるんじゃ。それでの、来年入ってくる先生なんじゃが実は10歳なんじゃ」

話し聞けよ…ていうか10歳!?

「10歳!?日本でそれ大丈夫なんですか？」

「うむ、飛び級で既に大学も出ておる。いわゆる天才じゃな」

「いるんですねー。そういうのって」

「しかしいくら知識はあっても10歳じゃ。精神的なものや肉体的なものは養われておらん。そこで君にそれを手伝って欲しいのじゃ」

なるほどねー。まあそういう理由なら納得かな。しかし10歳ねえ…

あ、そうか。それがこの世界の主人公なんだったか。

「それから学園広域予備指導員と中等部女子寮の管理人も頼もつかの」

「はい？」

「が、学園長!？」

俺と高畑さんの声が被る。そりゃあそうだろう。いきなり役職が増えすぎだ。

「まあ慌てるな。一つずつ説明するわい。まず学園広域指導員についてじゃが…」

無駄に話が長かったので省略して説明するところということらしい。今現在学園広域指導員は圧倒的にその規模と不釣り合いなくらい足りておらず、俺のところに来るのが遅れたのも人員不足が原因だと言うこと。そもそもは魔法などで管理していたらしいが最近細かいところには目が行き届かなくなってるらしい。

普段は学園都市の警備が主な仕事ということだ。予備がついてるのは俺が十分な素質を持っているが戦闘訓練不足ということが分かっているからだろう。

女子寮の管理人は今年で管理人との契約が切れ、新しい人材を探していたから。とそれだけで他意はないらしい。言葉どおりなら、だが。

高畑さんに言えわせれば素性の知れないものをそこまでの役職につけるのは抵抗があるのだろう。

しかしある考えが浮かんだのか少し抗議の声を上げただけでまた黙った。こういうのはストレートに聞いてみるに限る。

「別に俺はかまいませんが…高畑さんの言うとおり俺みたいな素性の知れないものをそこまでの役職につけていいんですか？」

「君は敵なのかね？」

「いえ、違いますけど」

「なら問題はないのではないかな？」

この爺さん、器がでかいのか抜けているのか何か企んでいるのか。多分後者だろうなあ。こういうのを狸爺と世間ではいうんだろう。

「分かりました。そちらがいいと仰るなら私は有難くその申し出を受けさせてもらいます」

「おお、やってくれるか。ではタカミチ君」

「はい、学園長」

「亮君に学園を案内してやってくれ。ついでに女子寮もな」

「分かりました。これからよろしく。草薙君」

「亮で構いませんよ」

「そうか、じゃあ行くつか。亮君。僕もタカミチでかまわないよ」

「あー、そうそう亮君。自分の能力が分かったら教えてほしいの」

「不利にならない程度なら教えますよ。自分もよく分かっていないので」

そういうと学園長はバルタン星人のように笑った。

さてこれからどうなることやら。今からの俺次第だな。今すべきはこの将棋とチェスで何ができるかだが…

「ま、頑張ってみましようかね」

「うん、頑張ると良いよ」

高畑さんが答えた。独り言聞かれてたのか…

Side out

Side タカミチ・T・高畑

学園長にも困ったものだ。確かに亮君が何の能力が分からないけど魔力を持っているとはいえ学園の広域指導員をしてもらうたなんて。

確かにこういう不確定な要素は目の届かないところに置くより目の届くところに置いて監視するのが良いんだろっけど…

まあ亮君は悪い人ではなさそうだからその心配も少ないけど他の魔法先生や魔法生徒がなんて言うか。

新学期が始まるまで後一月。なにも起こらなければいいんだけど、無理かなあ。

そんなことを思いつつ僕はタバコに火をつけた。

S i d e o u t

我が王の為…（前書き）

追記6月18日修正

我が王の為…

4話

S i d e 草薙 亮

学園長に会ったその日の夜。俺は世界樹の下で神様が入っていた将棋盤とチェス盤を目の前に胡坐をかいている。

時間は既に11時50分。あと10分で日が変わる。春先とはいえまだ風が強い上に寒い。さっさと済ませてしまわなければ。

これだけの学園都市だと今でも起きてる人がいそうなものだが、今は人つ子一人いない。

後で知ったことだがここには状況によって人払いの魔法がかけられるそうだ。やっぱり魔法は便利だな…

俺も後々覚えていかないとやっていけないんじゃないだろうか…

さらに今は学園長に頼んで強力な魔法結界を張ってもらっている。俺の発する魔力が外に漏れないようにだ。

頼んだら結構簡単に承諾してくれたので拍子抜けだったがやはり見張りは立てるらしい。

気配は感じないが何人かの魔法先生は配置すると事前に言われた。まあ今はそんなことを気にしてもしょうがない。

一日麻帆良学園都市を見回った後で部屋に戻ったときは既に夜。広すぎるだろこの学園。

何の変哲も無いゲーム盤。ついでだと荷物を点検したときに見つけ

たのは先ほどまでは無かった一通の手紙だった。内容は…

『やあ、神様だ。この手紙は君が一人のときにししか見えないようになってから安心してくれ。本題だけど今から君の能力について説明するよ。覚えてるかどうかは知らないけど君が望んだ能力は『チェス、将棋の駒を自分の使い間として召喚する』っていう能力だ。君もずいぶん面白い能力を望んだものだよ。さて、この能力だけ当然制限があるよ。大まかに分けて3つ。まず一つ目は同時に複数の使い間を召喚することはできないってこと。二つ目は召喚する駒はそれぞれ得手不得手がある。3つ目は召喚する駒によって消費する魔力が違っていてこと。貴重な駒ほど消費魔力は大きくなるから注意するように。あとそっちの世界にいる人に言われたかもしれないけど今は君に魔力は無い状態だよ。能力を得るにはそれに付いている駒を自分の駒のところに当てるように。後は細かいから自分で色々試しながら掌握してよ。あ、危ない危ない。最重要なことを忘れてた。自身の体に両方の駒は共存できないよ。チェスの場合はチェスの駒のみ、将棋の場合は将棋の駒のみしか取り入れられないから気をつけてね。ちなみに取り入れた後は3ヶ月は取り除けないから要注意。』

本当に危ねえな！今ポーンと歩兵取ってたぞ！つか三ヶ月！？原作だって記憶が正しければ夏休みまでしかいってないからどっちか一回ずつしか使えねえってことじゃねえか！

とりあえず駒を胸に当てれば自分の体に魔力が宿るらしい。

「つか何で三ヶ月なんだよ…」

あいつ面倒でどっちか固定したかったんじゃないやねえだろうな！

「三ヶ月変更できないのは痛いけどやっぱり最初は駒数少ないチェスからかな」

そう考えた俺は歩兵の駒を置いてポーンを自分の胸に当てる。

「うおー！」

胸に当てたポーンの駒は服をすり抜け俺の体にめり込んでいき直ぐに俺の体に溶け込んだ。その後には何も残っていない。

とりあえず他の駒も同じように胸に当てて自分に取り込んでいく。なんか気持ち悪いな。

「あれ？」

クイーンを取り込んだ後に一つ足りないことに気づいた。王の駒が無いのだ。将棋もチェックすると王将がない。

「ミスったのか神様？」

『それは貴方が我々の王だからです』

「誰だ！」

いきなりかけられた声に周囲を見渡すが誰もいない。いや、今は声をかけられたと言うより頭の中に直接声が響いた感じだ。

「てことはもしかして」

『はい、失礼ですが王よ。魔力を失礼してもよろしいですか？』

「あ、ああ。構わないけど!？」

答えきる前に右手が急に光だした。更に急激に自分の中の一部が抜けるような感覚。

闇に慣れきった目が光で眩む。光が収まり前を見ると、そこには黒いスーツに身を包んだ5人の人物が立っていた。俺にはそれが何なのかが感覚的に理解できた。

それでも言葉を発せないでいるとその5人は俺に向かって一斉に片膝を突いた。

「えつとー…」

「状況が理解できませんか？我が王よ」

5人の内の一人が声を発する。

いや、状況は理解している。俺の立場も理解している。ただなんと言えればいいのか分からないだけだ。

目の前にいるのは明らかに肉体を持った人。まさか俺から召喚された駒だとは思えないからだ。

それでも意を決して声を発する。

「いや、大丈夫だ。とりあえず君たちは俺がさつき取り込んだチエスの駒ということで良いのか？」

「はい、そのとおりです。そして我らの王は貴方様。ご理解いただ

けましたか？」

さきほど話しかけてきた一人、女性が答える。

はつきり分かった。なるほど。流石神様だ。俺の思ったとおりの能力を与えてくれた。

「あれ？でも確か神様は一人ずつしか召喚できないって言ってなかったか？」

「それについては初回だけのサービスだと伝えてくれと承っております」

「相変わらずだなあの神様も」

苦笑いしながら女性に返す。

「王の魔力を勝手に使い負担を掛けたこと、お詫びいたします」

「いや、いいよ。ちょっとダルいだけだ。もうなれたよ。それより今から仲間になる君たちの自己紹介を頼めるかな？」

「仲間？いえ、我々は…」

「駒だつて言うんだろ？良いんだよ。俺はそっちのほうが気兼ねなく接することができる。そっちは対応変えなくて良いからさ」

「おう！中々話の分かる王様じゃねえか！」

今まで黙っていた男が豪快に立ち上がる。

「貴様！王に向かってなんと口使いを！」

「いいじゃねえか。俺らの王様は器のでかい人物のようだぜ？」

「そういうこと。では君から自己紹介してくれないかな？」

「おう！」

そういつと男は俺の前にやってきた。

「俺の階級は兵士！^{ポーン}専門は格闘戦で近接戦闘のエキスパートだ。よろしくな」

「おう、よろしく」

次に進み出たのは兵士よりも若い青年だった。

「我が階級は騎士^{ナイト}。騎士として我が槍を王に捧げることをお約束いたします」

「堅苦しいな。もう少しやわらかくできないのか？」

「これが素であるために、申し訳ありません」

「まあそれならしょうがないか」

次は身長が二メートル以上はあろうかと言う巨漢だ。

「私の階級は城兵^{ルック}。私が呼び出された場合貴方には傷一つさせませ

ん

「攻撃はできるのか？」

「もちろんです。いざとなればこの豪腕をお見せしましょうぞ」

その城兵の胸くらいしかない老人がいつの間にか目の前にいた。

「ワシの階級は僧正ソウジウ。特技は魔術というところですかのう。その分近接戦は不得意じゃ。ワシを呼び出す際は十分注意するようにの。若き王よ」

「忠告痛み入るよ」

「ほほほ、人間常に精進じゃて」

最後は最初に言葉を発した女性だった。

「改めまして王よ。私の階級は女王クイーン。私を呼ぶ際には僧正以上の注意を。私は強いですが貴方の魔力もかなりいたたくことになります。そうなれば魔法使い相手には勝てなくなります。くれぐれもお気を付けを」

「ありがとう。さてこれで全員か。では俺の番かな？俺の名は草薙亮。成り行きとはいえ君らの王になれたことを誇りに思う。これから俺の力になってくれ」

そういつと5人ともちから強くうなずいた。

あ、そういえば一つ気になることが。

「そついえば君らに名前は無いのか？」

「はい、我らは駒。草薙様の行うことの道具と思ってくださいれば…」

「ダメだなー」

「は？」

「言つたる。君らはそれで良いとしても俺は仲間として接したいんだ。もし良ければ俺が名前をつけても良いか？」

「ほほほ、名前を頂戴できるとな。我が王はなんと面白い考えをお持ちなことか」

「で？いいのか？」

「王の命であるならば」

その日、俺に5人の仲間が誕生した。

S i d e o u t

我が王の為…（後書き）

やっとこさ主人公の能力を出すことができました。
これまでに4話かかるって…他の人の用にはやっぱり行かないですね。

とりあえずここで名前を言っていけます。以降この名前が出てきたらその階級のキャラだと思ってください。

兵士 デギオン

古代ローマ隊長階級 デクリオンより

騎士 エクイス

古代ローマ騎士階級 エクイテスより

城兵 ケリア

古代ローマ隊長階級 ケントウリアより

僧正 ミトム

古代ローマ上級階級 トリブヌス・ミリトゥムより

女王 テディア

古代ローマ女神 ディスコルディアより

こんな感じで補足やらあとがきで書いていくつもりです。
将棋にしなかつたのは駒が多すぎて出すの無理だろうなーとか思っ
たからです。ようは挫折しましたorz

こんな行き当たりばったりで進めますがこれからよろしくお願

します。

気高き剣士の為…(前書き)

追記、6月18日修正

気高き剣士の為…

Side 草薙 亮

「えー、今日からこのクラスで高畑先生の副担任を勤めさせていただく草薙亮です。このような時期で短い期間ではありますがよろしくおねがいします」

今俺は高畑さんの教室2-Aの教壇にいる。テディアたちを取り込んだその次の日にいきなりだがこれも仕事だと思えば楽なものだ。バイトのほうがいきなりだったことあるしな。起きた瞬間電話鳴って一時間後に来てくれって言われたときはマジ勘弁wwwだったもんな。

「……」

「????」

しかしなんで反応が無いんだ？声の大きさは教室全体に聞こえるくらいの大きさで言ったはずなんだが…
もしかして嫌われてるとかそんなだったり…!？

「「「か…」」」

か？家？蚊？なんだ？思いつかな。

「「「かつこいいー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」」」

「うおー！」

み、耳が！耳がー！！一体何ヘルツ出すんだこのクラスだけで！

「彼女はいるんですか？」「どこの出身ですか？」「何歳ですか？」
「どこに住んでるんですか？」

おおう、仮にもホームルーム中だというのにほとんどが席を立って目の前にいるっていうのはどうなんだろう。

「はいはい、皆。静かにね。まだホームルーム中だよ」

女の子パワーに押されていた俺を助けてくれたのはタカミチさんだった。パンパンと手をたたくと生徒たちは渋々といった様子で席に戻る。

「うん。でも休み時間ならいくらでも話しかけてかまわないよ。ただし、草薙先生に迷惑をかけるような質問はしないように」

「「「はい」」」

「では草薙先生。授業は見学と言うことでよろしいですか？」

「あ、はい。勝手も分からないのでしばらくは高畑先生の授業を見学させていただきます」

ふむ、暴走癖はあるけど聞き分けは良いみたいだな。高畑さんだからなのかもしれないが。授業が始まるので俺は見学するために窓際に移動する。

教室を一瞥すると皆が思い思いの視線でこちらを見ていた。ほと

んどが好意、興味、殺気：殺気！？

視線の先を見ると、桜咲 刹那がいた。そういえば先ほど貰った名簿を確認したとき彼女の名前もあった。

その他にも二人。えっと・・・名簿を見て名前を確認する。龍宮 真名とエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルか。

こちらはどっちかという監視みたいな感じだ。明らかな殺意は感じない。

一応刹那に向かって手を振ってこごう。あ、そっぽ向かれた。信用ねえなあ。

まあ初対面があれではしょうがないんだけど・・・

???

なんかまた別の視線を感じる。すぐ横：なんか半透明な人がいるんだぞ・・・

あの子は…相坂 さよ？名簿にはあるけど他の人には見えていないらしい。

『草薙先生ですかー。見えないと思いますけどよろしく願いします』

現に声に出したのに周りの席の女子たちは気づいていない。

そっか、彼女は俺が見えないと思ってるのか。まあ普通は幽霊なんて見えないんだが。一応挨拶された身だし…

「うん、よろしくな」

聞こえるか聞こえないかの声で返しておいた。相坂は目をぱちくりしていた。

『え？え？？私の声が聞こえたんですか！？もしかして私が見えるんですか?!』

グルグルと俺の周りを飛び回る。いいからじっとしておいてくれ。さっきから授業が聞こえん。

しばらく無視していると彼女は諦めたのか自分の席に戻った。ちよっと涙ぐんでいる。

悪いことしたかな…まあ今は話しかけるわけにはいかない。せめてもう少し待ってくれ。

つかなんで俺に幽霊が見えるんだ？これも神様のいたずらなのか…便利なのか不便なのか。幽霊なんて見えないほうが余計なこと気にしなくていいんだけどなあ。

その時授業終了のチャイムが鳴り響いた。

『お、じゃあ今日はここまで。皆、ちゃんと予習復習を行っておくよ』

高畑先生がそういうと教室を出て行く。ありゃー、結局あまり授業聞けなかったな。俺も出て行くことすると…

『草薙せんせい…』

一斉に生徒たちに囲まれた。

しまった！窓際にいたせいで逃げ損ねた。つか一人ずつ質問してくれないとなんて言ってるか分からん！

「はいはい！皆静粛にー！」

一人の生徒がその場を仕切り始める。

「先生も困ってるし、ここは報道部突撃班のこの朝倉 和美におまかせをー」

「えー！」「朝倉ずるい！」「そうだそうだー！」

「だまらっしゃい！スクープは私のものだ！」

本音そつちかよ。つか俺なんかスクープなるネタなんて…あるっ
ちやあるなあ

「じゃあまず名前は！」

「草薙 亮だ」

「年齢は？」

「21」

「出身は？」

「東京都」

うん、一応世界は違うけど間違っではないよな。

「じゃあお待ちかねの質問！彼女はいるの？」

「いない、絶賛募集中だ」

質問に来ていた生徒たちが「おー！」とか「きゃー！」とか言っている。というか俺はそんなにかっこいいのか？普通だと思っただが。

「では次、なんでこんな時期に先生になっただんですか」

う、意外と痛いところをついてくる。

「まあ・・・前からこっちにくる予定になっていただけだな。ちよっとした手違いでその手続きが遅れたんだ」

「ふーん、先生っていうのも大変なんだねー」

これは完全に嘘だがまあしょうがない。魔法関係とか転生うんたらのことを話すわけにいかんからな。というよりマイクを向けるのはやめて欲しいんだが。

「じゃあ次の・・・」

「あー、すまん。朝倉さん。俺もう行かないと」

流石にこれ以上の質問はぼろが出る可能性がある。三十六計逃げるにしかずってな。生徒の波を割って教室の外に出る。

「あ、先生！まだ質問は終わってませんよ！」

「また今度なー！」

教室を出ると次の授業があるからなのか、廊下には出るが追っ
はこない。

ふう、現役のパワーにはついていけないな。

ん？おじさん臭いって？あのパワーを見た後で言えるなら言っ
てみる！

「で？いつまで隠れてるんだ？」

教室を出た後も、いや俺が出る前から廊下の角にいる気配に向か
って言い放つ。隠れてるつもりなのだろうか。気配が駄々漏れだ。
転生前はこんなことできなかったのに今ははっきりと感じられる。

「気づきましたか」

「なんだ、桜咲か」

角から現れたのは桜咲だった。

「草薙さん。貴方の目的は何ですか？」

「目的？そんなモンねえよ」

「まだ白を切るつもりですか…」

そういつて桜咲は肩の竹刀袋に手をかける。竹刀袋として大きい

それには恐らく前に見たあの野太刀が入っているはずだ。

「白を切るって言うてもなあ。そしたらお前はどんな答えを望んでいるんだ？」

「なに？」

「俺が敵だったらいいのか？利用しに来たといえいいのか？それとも…」

俺は腕組みを解きつつ刹那の横を通り過ぎる。刹那は未だに竹刀袋に手をかけたままだ。

「お前の大切な人を傷つけに来たといえれば満足か？」

「貴様！」

先ほどまで様子見程度だった気迫が一気に殺気レベルにまで膨れ上がり俺の背中に突き刺さる。

まるで抜き身の刀身だ。こんなんじゃ人の命は守れても自分の命が先に折れるぞ。

「んー、まあ今のは冗談だ。気にするな」

「貴様、どこで木乃香お嬢様のことを！」

「んー？学園長の爺さんが言ってたぞ」

そんなの嘘だけだな。つかお嬢様って近衛のことか。そういえば学園長の苗字も近衛だったかな。

しかしまあ刹那って結構墓穴掘るタイプだな。今まで気づかなかったのにわざわざ名前言ったらいかなだろ・・・
まあこれで桜咲があこの学園長に詰め寄っても俺は知らん！

「くっ！あの人は・・・」

「あのさあ、一つ聞きたいんだけど」

「なんです」

殺気は抑えたか。それでもそれに近い気迫は浴びてて気持ちのいいモンじゃないな。

「桜咲自身は近衛のことをどう思ってるんだ？」

「…貴方に答える義理は無い」

ま、そうだろね。まだ会って二日だしな。

「じゃあ大事に思ってるとして一つ忠告だ。その性格を直しておけよ。じゃないと俺は敵じゃないからいいが敵じゃない奴も敵に回すことになるぞ。それに、多分近衛自身に対しても上手く接してやれてなんじゃないか？」

「よ、余計なお世話です！」

桜咲が顔を真っ赤にして怒鳴ってくる。

「はは、じゃあな桜咲。また後で会おう」

とにもかくにも俺はまだ信用されるようなことはなにもしていない。まずは行動、そして結果だ。
とりあえず俺自身には何も怪しいことは無いんだから堂々としていよう。

俺はそう思いながら職員室に向かって歩き出した。

Side out

Side 桜咲 刹那

(その性格を治しておけ。じゃないと俺は敵じゃないからいいが敵じゃない奴も敵に回すことになるぞ。それに、木乃香自身に対しても上手く接してやれてなんじゃないか)

全く！何だというのだあの男は！ここに来たばかりなのに偉そうなことを！わずか一日で知った風な口を！

私がどれほどの思いでこのかお嬢様守ってるかも知らずに…

「11のちゃん…」

はっ！いけない、私の使命はこのかお嬢様をお守りすること。そのためにはこのかお嬢様に近づくと不確定要素は必要以上に警戒しているてもいいくらいだ。

このかお嬢様をお守りするためならこの命惜しくは無い！

…とりあえず学園長に会いに行こう。あの男のことを聞いたうえで
なぜこのかお嬢様のことを話したのかも聞かなければ…

S i d e o u t

このクラスの為…(前書き)

追記、6月19日修正

このクラスの為…

Side エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル

「えー、今日からこのクラスで高畑生の副担任を勤めさせていただきます。草薙亮です。このような時期で短い期間ではありますがよろしくおねがいします」

ふん、こいつがこの間現れた魔力の持ち主の正体か。結界を通らないでどうやって入ったのかと思ったが…

なんのことはない。その時魔力が消えていただけということか。

しかし昨日の夜から魔力が消えるようなことはないな。むしろ安定しているくらいだ。とりあえず奴のことを調べておくか。

「茶々丸」

「はい、マスター」

「奴のことを夜までに調べる。奴のことならどんなことでも構わん。私に知らせろ」

「分かりました」

これで多少なりとも情報が集まるだろう。さて、暇だが授業を受けるか。下手に目をつけられると厄介だ…寝るけどな。

.....

「…スタ…マスター」

「ん…」

「お目覚めになりましたか。マスター」

「ん、茶々丸…今何時だ」

「現在最後の授業が終了したところです」

「そうか、では帰ろう」

私としたことが寝すぎてしまったようだ。あの男のせいで余計な時間起きていたせいだな。

「しかしマスター」

「なんだ？」

「今から草薙先生の歓迎会をするそうです。一人も帰るなどの指示が出ています」

「む…そんなの私には関係ないだろう」

「しかし既に出入り口は確保されています」

茶々丸に言われて見ると既に教室の出口は前は鳴滝姉妹と長瀬楓。

後ろは龍宮真名と朝倉和美によって固められている。ここにいない面子は恐らく買出しといったところだ。

「寝過ごした罰か…」

「いかがいたしましたしょうマスター。突破も一応は可能ですが」

「いや、突破するのも面倒だ。どうせならここで晩飯も済ませてしまおう」

「はい、それからマスター。草薙先生の件ですが」

「お、もう調べ終わったのか。結果は？」

「持てる全ての情報源を洗いましたが結果はUnknown。不明です」

「何？魔法関係でもか」

「はい、魔法世界の情報も合わせての結果です」

茶々丸でも不明か…爺辺りの妨害か？となればそれほどの人物ということだが…

これは直接聞く必要があるそうだな。そういう面ではこの歓迎会も余計なものではないらしい。

「茶々丸。私はもう一眠りする。始まる頃に起こせ」

「分かりました。しかし…」

「何だ？」

「今から寝るのは不可能と思われませう」

確かにこの歓迎会の準備をしている状況で寝るのは不可能…か。と
いうかうるさいなこいつら！

Side out

Side 草薙 亮

「「「ようこそ！草薙先生ー！！」」」

桜咲に連れられて教室に入った俺に浴びせられたのは朝と同様の
大声とクラッカーの飾り紙だった。

「ささ、座った座った！」

「主役は中央ネ」

「？なんで草薙先生は呆けてるんだ？」

「さあ？」

流されるままに教室の中央に用意された机に座らせられる。

いやだつてさ…桜咲がいきなり放課後になつたらいつもの表情で
ついてきてください！」って言うんだぜ！

行き場所聞いても「黙ってついてきてくれればいいです」だぜ！
下手したらこのままあの野太刀の錆になるのも覚悟してたんだけど
…やばい、緩んだら泣けてきた。

「あ！草薙先生泣いてる！」

「きつと感動の涙ネ」

「このくらいで大げさやな」

好きなように言え！俺は命があるだけ嬉しいんだ！

改めて見渡してみると高畑さんもいる。放課後見えないと思っただらこつちの手伝いに来てたのか。

自己紹介した後は俺を中心にした歓迎という名の宴会が始まった。俺も質問に答えつつ生徒たちと交友を深めるよう努力しようか。そう思っていると鮮やかな長い金髪の少女。雪広あやかが話しかけてきた。

「改めまして草薙先生。ようこそ2-Aへ。私、このクラスの委員長を勤めさせていただいている雪広あやかと申します。以後お見知りおきを」

「ああ、よろしく。草薙亮だ。それからそんな畏まらなくていいぞ」

「いえ、素がこの喋り方なのです。お気に触りましたか？」

「いやいや、むしろ中学生でそれが素なら素晴らしいことだと思う」

「よ

「あら、お上手ですこと」

あははー、うふふーみたいな空気を自然に出している。

そういえば高畑さんに聞いたが、雪広はこの世界で有数の財閥、雪広財閥の次女らしい。つまりは生粹のお嬢様というわけだ。

ならばこの雰囲気も頷ける。雪広自身の心構えみたいな物もあるんだろうけどな。

「あー！いいんちよが草薙先生にアタックしてるー」

「ひゅーひゅー！」「がんばれいいんちよー！」

「振られるに100円！」「おーけーに300円！」

「な！皆さん！」

雪広の顔が真っ赤になる。あれじゃあ誤解されても仕方ないかなあ。

というか後ろのほう！人の恋路でトトカルチョを始めるんじゃないかねえ！

雪広が真っ赤になりながら他の生徒たちを蹴散らす。キヤーキヤーと四方に散らばっていく生徒たち。

案外強いぞこの子。

「付き合っただったら逆玉の輿だね、草薙先生」

「高畑先生。冗談でもそういうのはやめてください」

「はっはっは、すまないね」

高畑さんがコップを持ちながら横に立った。

「どう思うっ？」

「何がですか？」

「このクラスが、だよ」

「そうですね。いいクラスだと思いますよ」

二人して騒いでいるクラスの少女たちを見る。いつの間にか雪広対ピンクのツインテールの少女、神楽坂明日菜という形でバトルが始まっている。

しかしどういふ状態でも結局トトカルチョはやるんだな、この生徒は。それともここではこれが普通なのか？

「どういふところも含めて」

「はは、全く耳が痛い」

「うん、でもいいクラスだよ」

「ありがとう」

一部除いてな、高畑さん。

「じゃあそろそろ僕は止めてくるよ」

「はいはい、怪我しないようにな」

「少なくとも君よりはその心配はないよ」

そういつと高畑さんは円の中心に入っていく。

「高畑先生」

おいおい、アスナの方は明らかに違う理由で戦いをやめたぞ。

「おー！明日菜のオヤジ趣味が始まった！」

「まき絵ー！」

桃色の髪をした女の子、佐々木まき絵に対して明日菜がとび蹴りを放つが上半身を反らして見事に回避する。

うお！柔らかか！今上半身が地面に着きそうなくらい曲がったぞ！

「草薙先生」

「ん？」

いきなり横から声がした。見ると関節が明らかに人間でない人、いやロボット？がいた。確か名前は…

「格線さん…だよな？」

「はい、実はマス…エヴァンジェリンさんがこれが終わったあと屋上で話があると…」

今なんていいかけた？まあいいか。仲が良ければなんか別の呼び方があるのも普通なのだろう。

男の常識に女の、しかも女子中学生の常識を当てはめてはいけない。

しかし改めてみるとこのロボットもすごい技術力だ。耳のロボ的な部分がないと人間と見分けがつかない。というより普通に会話してる時点でおかしい。

「今じゃダメなのか？」

「はい、なるべく人に聞かれたくない話だそうです」

「おーけー、分かった。そう伝えておいてくれ」

「ありがとうございます」

格線はそういうとペコリとお辞儀をしてエヴァンジェリンのところに戻っていった。

そしてそのロボットと普通に会話する俺もどうなのよ・・・多分ここでは細かいことなんだろうなあ。

「どうせ魔法関係だろうなあ。てかそれ以外に思いつかんし・・・」

面倒だ。あれだけ殺気を当てておいて呼び出すとか戦る気満々じゃないか。

俺今戦闘手段って召喚しかないんだよね。気配察知と反射能力だけは鬼と刹那のおかげでちょびつと鍛えられたんだけど。

断つたら後が怖いし……いくしかないか。

.....

「もうすっかり夜だな」

結局俺の歓迎会が終わったのは開始から3時間後の8時半近く。更に片付けを手伝っていたため既に9時を回っている。片付けの時点でエヴァンジェリンも格線もいなかったため30分以上待たせていることになる。

「よつと」

屋上のドアを開けると上にきれいな満月が輝いていた。明かりがいらないくらいだが学園都市というだけあって満月の明かりにも負けないくらい中心部は光っている。

「やあ、満月がきれいだな。草薙先生？」

いきなり背後から声がした。入口の上、いたのは予想通りエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルだった。金髪の長い髪が風で巻き上げられ、キラキラと月の光を反射している。

「で？話っているのはなんだ？」

「検討はついでるんだらう？」

「んー、まあ、大体な」

つづことはやっぱり魔法関係だよな。さて、やっぱり高畑さんに相談しておくべきだった！。

そんなことを考えているとエヴァンジェリンが言葉を続ける。

「単刀直入に言おう。お前は一体何者だ？」

「おおう、いきなり年上にお前か。中々な単刀直入だ」

「そつちじゃない！お前は何者が聞いているんだ！」

「何者かってなあ…俺はただの教職者兼魔法使い見習いだよ？」

魔法なんて何一つ使えないけどな！

「お前のことを調べようとしたらすべての情報がUnknownだったんだ。ただのっていうことはあるまい」

ありや、もう調べられてるのか。だが転生のことと言ってもなあ。信じてもらえないだろうしいきなり初対面でそんなこと言う奴は変人って言われるしな。

それに一生徒にそんなこと言って噂が広まったらそれこそ勘弁だ。女子中学生の情報網を甘く見てはいけない。

「そりゃただのミスじゃないのか？こんな一般人の情報なんて腐るほどあるかないかのどつちかだろ」

「あくまで白を切りとおすか…いいだろう、その正体を暴いてやる」

やっぱりこうなるのねー！

エヴァンジェリンは何か液体の入ったビンを取り出す。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！魔法の射手！氷の3矢！」

「マジかー！！！」

詠唱とともにビンが弾け魔法によって作られた3本の氷の矢が俺に迫る。

媒介を使ってる分威力は低いだろう（多分）がなんの障壁も張れない今の俺に当たれば致命傷になりかねない！

しかもタイミング的に今から避けても意味がない！

「さあ！お前の力を見せてみる！」

「くそつたれー！」

どうとでもなれやあああああ！！！！

Side out

Side エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！」

まずは様子見だ！

「魔法の射手！氷の3矢！」

「マジかー！！！」

叫んでいる。避ける気もないのか？まあ避けたとしても追尾性能付きだな！

「さあ！お前の力を見せてみる！」

「くそつたれー！」

叫んだ瞬間に奴が光に包まれる

「なっ！」

なんだこの魔力！先ほどまでこれほどの魔力は出ていなかった。

「出でよ城兵！」

光が収まった時には消え去った魔法の矢と先ほどまではいなかった巨大な男が立っていた。

いや、それはいい。一人を呼び出すのは苦労するとはいえ準備さえできていれば出来ないことではない。

問題なのは弱まっているとはいえ私の魔法を打ち消したことだ。

「貴様っ！」

思わず声が漏れる。戦えないことはない。だがこの目の前の巨漢が私の魔法を打ち消した能力者だということは手持ちの魔法薬では足りない可能性が大きい。

「茶々丸！」

「はい、マスター」

なりふり構ってられない。

「あの巨漢を抑えろ！後は私がやる！」

「分かりましたマスター」

茶々丸が巨漢に突進する。

「ケリア！頼む！」

「了解した、我が王よ！」

ケリアと呼ばれた巨漢が茶々丸と対峙する。あの豪腕からの一撃は脅威だろうが茶々丸にはそれを上回る速度がある。当たらなければどうということはない！

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！」

今もっているすべての魔法薬を展開、出し惜しみは無しだ。今撃てる最強の魔法で見極める！

「氷爆！！！」

茶々丸は発動の瞬間に離脱してるのは確認済み。巨漢は茶々丸を攻撃したと思われる腕を振り下ろした体制、奴にいたっては動いてすらない。完全に捕らえた！

直撃、爆風と氷が満月を隠す。

だが…

「ば、馬鹿な…」

それが収まった先には全く無傷の巨漢と奴がいた。

「王よ、怪我はありませんか？」

「あ、ああ。助かった」

巨漢が感情のない声で奴に話しかける。私の魔法を止めたというのに随分と余裕じゃないか…

「茶々丸！」

呼ぶと茶々丸がすぐに横に着く。

「草薙！今日は引かせてもらうが覚えておけよ！」

「やられ役のテンプレだぞそれ」

「う、うるさい！いいか、これで終わったと思わないことだな！」

屋上からとび降り、茶々丸の肩に乗る。続けたいが最早魔法薬がない。悔しいが仕方ない

「そう…仕方ない…仕方…ない」

「マスター？」

「あのくそつたれがー！本当に覚えておけよー！次こそは私の本気を見せてやる！」

「マスター、楽しそうですね」

「そう見えるなら葉加瀬に見てもらったほうがいいぞポケロボ」

Side out

Side 草薙 亮

「た、助かった…すまんなケリア」

呼び出したケリアの腰あたりを叩きながら言う。実際ケリアがいなかったら俺はやばかった。本当は背中を叩きたいところだが如何せんそうすると手をのばさなければならぬ

「いえ、王を守るのが私の役目ですので」

「それでも、さ。ありがとう」

「もつたいないお言葉です。では戻ります」

「ああ、また何かあったらよろしくな」

…あれ？いつまでたってもケリアが戻らない。なんで？

「あの、王よ。魔力供給を切っていたただかないと…」

「あ、それ俺の役目？」

「はい」

魔力をきるって…とりあえずイメージでコンセントを引き抜く光景をケリアに当てはめる

やったことないから分からないけど…これでいいのかな？

そうするとケリアの体が光り始めた。

「これでいいのか？」

「はい、では…」

そうとうとケリアは光の玉になって俺の体に戻った。

「便利すぎるだろ」

しかし疲れた…さっさと戻ろっ。

新学期までは寮の管理人室は使えないので朝の部屋（監視室）が俺の部屋だ。

「ではああー！」

部屋に入ると引いてあった布団にダイブする。そのまま俺の意識は闇へと吸い込まれていった。

S i d e o u t

このクラスの為…（後書き）

えー、初めての戦闘でしたけど如何でしたでしょうか？
難しいですね…書いてみてはじめて分かります。

原作には後1、2話で入る予定ですのでお待ちください。
さて…こっからどうしようかな…

身を守る為…(前書き)

追記、6月19日修正

身を守る為…

Side 草薙亮

エヴァンジェリンに襲われた次の日、土曜日。学校が休みのため俺は高畑さんを尋ねていた。その理由は…

「俺に戦闘を教えてください！」

「ず、随分いきなりだね」

高畑さんも引いてるよ。まあ学校の廊下で挨拶交わした後いきなり言われりゃ誰だって引くか。

ちなみに土曜日だろうが先生は色々あるため実質な休みは日曜だけ。俺も勉強の一環としてくるように言われていた。

「で？そう言うからには何か理由があるんだろう？」

「まあ、昨日ちょっと一悶着ありまして、自分の無力さを痛感したというか…」

あの時の俺は本当に何もできなかった。あの神様にもらった召喚のう力がなければ間違いなく俺の命はなかったはずだ。

高畑さんは俺の様子から大体の事情を察したようだ。

「なるほど、自分の力を知るのはいいことだね。しかし僕では君に教えることはできない」

「な、何でなんですか!？」

「僕の戦闘スタイルは独特だね。人に教えられるようなものではないんだよ」

「それでも!この学園で今俺に戦闘を教えくれそうな人は貴方しかないんです。お願いします!」

人目も憚らず頭を下げる。人はいないけどね。

正直他の魔法先生たちの俺への評価は悪い。

いきなりパツと出の、しかも不審者である俺に信用などおけるはずもない。

うーん、と唸っていたタカミチさんがしばらく考えた後答える。

「確かに今の時点で僕しかいないのは分かる。とりあえず僕の戦闘スタイルを見てみるかい?それを見てからでも僕から教わるかどうか決めるのは遅くはないと思うけど」

「はい!よろしくお願いします」

「じゃあ仕事が終わってからの時間を空けておいてくれ」

そういうと高畑さんは職員室に入っていった。

よし!一応これで何とかなればいいんだが…

.....

仕事があるといつても土曜日はやはり通常よりも早く終わる。職員会議、それが終わったならある程度書類仕事を片付けて終了だ。大體は昼過ぎに終わる。

「では草薙先生、行きましようか」

「うっす！お疲れっした！」

職員室を出る際に一礼してドアを閉める。

高畑さんの後をついていくとそのまま森に入っていく

「えっと...どこに？」

「まあついてくれば分かるよ」

またこのパターンか...これだと毎回悪いことが起きるんだよねー

「うん、この辺でいいかな？」

そこは辺り一面森の偶然できた広場みたいなところ。俺が最初に現れた辺りと同じくらいかもしれない。

「で？ここで何を？」

「言つたる？僕のスタイルは独特だ。僕が教えてあげられるのは…」
そう言ってる途中で高畑さんから急激な気迫が膨れ上がる。いや、
気迫とかの問題じゃない。これはもう殺気のレベルだ！

「あ…う…」

「実戦レベルでの回避と反撃訓練しかない。大丈夫、手加減はする
さ。死なない程度にはね」

「滅茶苦茶ー！戦闘スタイル見せてくれるんじゃないんですか
ー！？」

「いや、案外そうでもない。僕の見立てでは君は魔力も戦闘の素質
も十分にある。足りないのは知識と経験だ。これさえ積みめば君はす
ぐに強くなる。それに…わざわざ自分の弱点を見せる人がいるかい
？」

笑顔で言われたよ。確かに戦闘スタイル教えてくれるなんて虫の
いい話だと思つたがそういうことなのか。

それ以前に高畑さんも俺に全幅の信頼を置いてるくれてるわけじ
やないしね…

でもそういえば神様が俺の身体能力はタカミチより少し強いぐら
いって言ってたな。なら…

「分かりました。お願いします」

俺はそう言つて構える。構えると言つてもボクシングの見よう見
まねで拳を構えるだけだ。

高畑さんが両手をスーツのポケットに突っ込んだ。
あれが高畑さんの先頭スタイルなんだろうか…

そう思った瞬間頭が後ろに吹き飛んだ。

「がつ！」

まるで頭を金槌で殴られたような衝撃が走る。

なんじゃこりゃ！なにされたか瞬間が全然見えん！

倒れそうになる体を右足を下げること踏ん張る。

「ほっ…」

高畑さんが意外そうな声を上げた。とりあえず防御！

気の使い方なんて分からないが何事もイメージだ。自分の前面に障壁を張る感じで…腕で顔面を防ぐ！

「いでででででで！」

謎の攻撃の連打、連打、連打！

こりゃもうただの虐めレベルだ。

威力は変わらないんだろう、気を集中したおかげなのかどうかは分からないがさっきよりは痛くない・・・けど正直痛え！

というより当たったところの感覚がなくなってきた。

「どうした！正面の防御を固めてるだけじゃダメだぞ！」

そう高畑さんが言った瞬間正面からの攻撃が止まる。変わって来るのは背後からの殺気！

「瞬間移動!!?」

咄嗟に身をかがめて頭部への攻撃を避ける。

「そうだ！避けられないのだけ防御するんだ！そうすれば致命傷になることはない！」

そういつと高畑さんは俺の死角へと移動するようにして攻撃を続ける。

「どちくしょうがー！」

俺はというと回避と防御の連続。避けれる攻撃はなるべく紙一重で避けるように意識して直撃コースのものだけ防御する。

というかなんかどんどん威力上がってる!?

「うひー！」

頭を掠った攻撃が後ろの木を粉碎する。

「余所見をしてる暇はないよー！」

「助けてくれー！ー！ー！ー！ー！」

.....

夕方になってやっと高畑さんのしごきが終わった。体中あざだらけの泥まみれだ。もう一歩も動けん……

「いや、すごいじゃないかリョウ君。初見で僕の攻撃をここまで避けられたのは初めてだよ」

「そ……そりゃど……うも……」

息も絶え絶えだ。ここまで動いたこと人生で……前世でもない。

「やっぱり僕の予想通り君に足りないのは実戦だよ。しばらくは暇なときだけでも僕が相手をしてあげよう」

「お……おねがい……します……」

無理……落ちる……

.....

「あれ？」

目が覚めたときはいつもの部屋にいた。電気はつけていないため部屋は真っ暗だ。暗さからして今は夜中って所か。

「痛っ！」

体中が痛い！筋肉痛と打撲か…

布団の周りを見渡すと一枚のメモが置いてあった。

「高畑さんかな？」

電気をつけて確認するとやはりそのメモは高畑さんのものだった。

『目が覚めたかな？あの後君は気を失ったから君の部屋の布団に寝かせておいた。今日は目が覚めないと思うからもう帰るよ。ではまた月曜日に。タカミチ・T・高畑』

んー、今日はもう起きないって今何時だよ…夜中の2時か…そりゃ帰るな。

俺も朝まで寝るか…

.....

ドンドンドン！

「んあ？」

もう朝か…ありゃ、まだ8時じゃねえか。誰だよ日曜のこんな時間…

ドンドンドン！

「はいはい！うるさいな〜」

うわ、寝癖がひどい。こりゃ手間取るぞ。手櫛で髪の毛のひどい部分だけを直しながらドアを開ける。

「リヨウ君！」

「うお！タカミチさん！？何ですかこんな日曜の朝っぱらから！」

まさか魔法関係でなにかあったのか！？

「何言ってるんですか！今日は月曜日ですよ！」

「へ？」

「ほらー！」

そういつと高畑さんは俺に携帯の画面を見せ付ける。そこには確かに月曜日と表示されていた…ってことは

「俺は…日曜日丸々寝てたってことかー！」

「早く用意してください！もうホームルーム始まります。僕は先に行きますよ！」

「あ、…はい！」

どつりで腹が減るはずだ。

「ってそんなこと考えてる場合じゃない！」

即行で着替えて部屋を出る。ちなみにスーツはまだ持っていないのでシャツにジーパンと言うラフな格好だ。本当は日曜に行こうと思っただけど仕方ない。

結局教室に着いたのはホームルームが終わった直後だった。その後一週間俺は2 - Aの生徒から遅刻先生と呼ばれることになる…

S i d e o u t

生徒の為…（前書き）

追記、修正6月19日

生徒の為…

Side 草薙亮

「おらぁ！」

高畑さんの稽古（というなの実戦）を始めて既に3週間近く経った。

一応型も糞も無いが高畑さんに迫れるくらいになった…と思う。というのも高畑さんは未だに接近戦と居合い拳（拳速を魔力で極限まで高め、常人には全く目に見えない速度でパンチを放つ…らしい）のみだからだ。

こういう人なら絶対なにか奥の手を隠し持っているに違いない。

「おっと」

しかも迫れると言ってもまだまだだ。型がない分攻撃は読まれにくいが直線的な攻撃が多いため大体がいなされるかカウンターを合わせられる。

「ふん！」

偶にフェイントを入れても簡単に読まれる。有効打が入ったことは今まで一度もない。

逆にフェイントとはこうだと言わんばかりにやり返されるのだからたまらない。

「はっ！」

「げふ！」

見事にフェイントに引つかかった俺の鳩尾に拳が突き刺さる。それでも意識を保っていられるのは気の使い方を覚えてきたからだ。直撃する場所に気を集中することで普段以上の防御力を上げることが出来る。

それでも高畑さんの威力はすさまじく、しかもその隙に距離をとられてしまう。

「くっそ！」

言ってる間に居合い拳の嵐が飛んでくる！
こればかりはどうしようもない。

多少のダメージは仕方ないと覚悟して腕を前に体制を低くして高畑さんに突っ込む。

接近戦に持ち込まないとこちらとしては手の出しようがない。当然高畑さんも距離を離しながら居合い拳を放ってくる。

(ここだ！)

一気に足に気を込め、地面を蹴る。俺がこの3週間で学んだのは実戦形式だけではない。

高畑さんの技も見よう見まねで盗むように努力している。結果他は無理だったが瞬動術(足に魔力や気を集中させて地面を蹴る)の真似事だけはできるようになった。

ただし…

「まだまだ制御が甘いぞ！」

高畑さんを追い越してしまった。そう、瞬動術は気の制御が非常に難しい。

細かい調整を戦闘中にこなさなければならぬのでついつい力が入って行き過ぎてしまうことがほとんどだ。

つまり俺の瞬動術はまだ似非^{エセ}瞬動術ということになる。

結局その日もタカミチさんに一撃を入れられることもなく日が暮れてしまった。

- - - - -

「染みるー！」

タカミチと別れた後部屋の水道で傷口を洗う。この部屋も三週間前と比べればずいぶん物が増えた。

ん？風呂は入ったよ？入った瞬間痛みで出るけどな！

スーツ、教本、冷蔵庫、テレビなどそろそろ布団を敷いたら足の踏み場がなくなってきたくらいだ。あと一週間でこの部屋と別れると分かったらこんな所でも愛着が沸く。

片付けるものもないので寝巻きにジャージに着替えて布団に潜り込む。

「さて、明日も授業か…」

ちなみにクラスの名前は全員覚えた。その中でも驚いたのは龍宮真名も侵入者を撃退する仕事についていたことだ。

桜咲ほどではないが夜の警備にも顔を出す。

なんでも自分は傭兵みたいなたち位置らしい。傭兵ということは報酬次第で敵に回る可能性もあるということだ・・・
まあ未だ不審者扱いの俺が言うことじゃないけどな。

桜咲はと言うと未だに俺を信用し切れていないらしい。やはり最初の挨拶がマズ過ぎたか。

「って！今日警備の日じゃん！」

思い出して慌てて布団から飛び出す。

プンプンプン…

枕元に置いてあった携帯が鳴った。この携帯は学園長が不便だろうと手配してくれたものだ。

大体の魔法関係者と教員の番号とアドレスが入っている。

「はい、草薙です」

『く、く、草薙先生ですか？佐倉です』

「ああ、佐倉さんか」

電話の人物は佐倉愛衣だった。この子は確か無詠唱もできる秀才

って言う話だ。見た目は本当にただの中学生だけだ。

『草薙先生？聞こえてますか？』

「あ、ごめん。で、用件は？」

『は、はい。もう集合時間ですよ？他の人たちは集まっているので連絡しなさいってお姉さまが…』

「あー、今向かってる。5分以内につくって伝えておいてくれ！じやあー！」

『あ！草薙先せ…』

佐倉の話が終わる前に携帯を切る。誰かに代わられてグチグチ言われたらもつと遅れちまう！急いで靴を取って履くと窓を開け窓枠に足をかける。

えっと、目標は世界樹の丘だから…

考えながら足に気を溜める。瞬動術の応用だ。

思いつきり窓枠を蹴ると体が宙に浮くように空に舞い上がる。

「うひょおおおおおおおー！」

この感覚は何度やっても最高だ。ただ跳躍しているだけなので疑似ジェットコースターのようなことができる。まだそこまで高い跳躍はできないためなるべく低い位置のものを足場に蹴りあがる。

世界樹の下に着いたときには5分ジャストだった。

「よし！ぴったり！」

「ぴったりじゃありません！」

「うおー！」

俺の後ろから聞きなれた声がした。

「よう、桜咲」

「5分遅刻です。他の方はもう警備に向かいましたよ」

「なんだ、今日の相方はお前か」

警備は何か起こったときのために通常2人1組で行われる。今日の相方は桜咲のようだ。桜咲はムスツとした表情のまま広場を降りていく。

「悪かったですね。行きますよ」

「おっ」

さて、今日も暇な警備にでますかね。

S i d e o u t

この人は相変わらずだ。この学園に来た頃から掴み所がなくてイマイチ考えていることが分からない。今も警備中だというのに大きな欠伸をしている。

「もう少し真面目にしていただけませんか？」

「うお！桜咲って後ろに目があるのか？」

「それだけ大きな声で欠伸をすれば分かります！」

「あ、そうか。すまん」

頭をかきながら頭を軽く下げてくる。全く…確かに今までこちらに敵対するような動きはない。授業はしっかりやるし生徒のことに関しても真面目だ。

何故かエヴァンジェリンさんとは仲が悪いようだけどそれは今は関係ない。

だが油断するわけにはいかない。学園長に聞いてものりくらりと避けられてしまった。そこまで情報を秘匿するような人物なのだろうか？

「むー」

後ろで彼の声が聞こえる。

「どうしましたか！」

「見る桜咲！猫だ！」

「は？」

「おーよしよし、こっちおいでー」

舌をチツチツとならし猫を呼び込む。その姿はとても刺客とは思えないほどのどかで…って！

「何してるんですか！」

思わず大声を出してしまった。

「あー、ねこー」

「ねこー、ではありません！今は警備中なのですよ！」

「すまんすまん」

この人はまた悪びれもなく！

「…」

何だ、この気は…

ピピピピ…

携帯電話が鳴ったので素早く出る。

「はい、桜咲です」

『葛葉です。緊急事態のため用件だけ伝えます』

電話は葛葉さんだった。

『学園の結界を越えた侵入者あり。数は侵入時点で4人。結界に入ってから数は数が増えつつあるので召喚士と思われる。貴方と草薙先生は手近な西側の防御に向かいなさい。以上です』

「分かりました！」

電話を切ると彼に向き直る。彼は先ほどの猫の行った方向をまだ見ている。

「草薙先生！」

「は、はいはい！」

全くこの人は非常事態だというのに！

「敵です。数は不明ですが召喚士のように侵入した後召喚を行っているようです。私たちはこのまま西側の防御に向かいます！」

「オーケー了解！」

急に顔つきが変わる。こういうところの分別はあるんだからいつも真面目にやっていたらいいのに…

「行きます。遅れたら置いていきますよ」

「大丈夫だ！」

足に気を溜めて一気に跳躍する。そうすると彼も同じように私についてきた。

あれほどのこと、以前は出来るような雰囲気はなかったのに…

「桜咲！本気でいけ！俺も付いていく！」

「わ、分かりました！」

気の量を上げて加速する。少し遅れたが彼も付いてきた。やはり前とは違う…

「で？場所は！？」

「そろそろ…この辺りです」

太い木の枝を見つけて飛び移る。辺りが森のため姿は見えないが強い気配を多数感じる。

「また森かよー。最近森ばかり行ってる気がするぜ」

彼が軽口を叩く。

「黙ってください。もう敵の間近です…」

「分かってる。殺気をひしひしと感じるぜ。数は30ってところか。かなり多いな」

「分かるんですか？」

「なんとなくな」

「な、なんとなくって…」

なんとなくでこんな森の中の殺気を全て読み取れるものか。私にだって近場にいる10体ほどの位置が分かる程度だ。いや、そのことは置いておこう。

今は目の前の敵に集中しなければならない。

「草薙先生、奇襲をかけます」

「こちらの数が少ないときの常套手段だ。敵がこちらに気づいてないうちに大半の敵を片付ける。」

「確かにその方が良さそうだ。じゃあ俺が先鋒で敵をひきつける」

「は？」

「桜咲の刀じゃここはきついだろ。俺があらかた倒す」

ムツとした。馬鹿にしてもらっては困る。私のほうが彼よりはるかに場数を踏んでいるのだ。

「確かに本来はそうですが、神鳴流にそのようなことは関係ありません。私が先に行きます！援護をおねがいます！」

そういうと木の枝を蹴って一番手近な敵に切りかかる。あの木の

後ろ！

「神鳴流奥義……」

抜刀しながら気を放つ。気を刀に集中し、一気に解き放つ！

「斬岩剣！！」

夕凧に溜められた気が放たれ辺りの木を薙ぎ払う！これで5体は倒したはずだ。振りぬいた体制のところを右から2体、左から1体。どちらも下の上程度の鬼。大したことはない！

瞬動で右の2体の背後に回りこみ夕凧を横に振りぬく。残るは左の1体！この位置からなら真正面だ！

振り下ろしてきた腕を避け唐竹に夕凧を振り下ろす。

「はっ！」

気合の声とともに振り下ろした夕凧は安々と鬼の体を切り裂いた。

「ぶっ」

とりあえずこちら辺の敵は一掃したか。

「いやー、桜咲すごいなあ。俺の援護って…援護いらんじゃん」

後ろから彼の声がする。

「次に行きます。戦う気がないなら帰って結構ですよ。足手まとい

ですから」

それだけ言って次の手近な敵に向かって跳ぶ。彼の気配は一定距離を保って付いてくる。

彼に私の力を認めさせる！そうすればお嬢様にも迂闊に手を出せなくなるはずだ。

「はあっ！」

迎撃してきた敵の一撃をいなして遠心力で切る。

単体では敵わないと分かったのか複数が周囲からかかってくる。その考え自体が甘い！

「神鳴流奥義：百烈桜華斬！」

円を描くように夕風を振るい一気に敵を切り裂く。彼は…いつの間にかいない！？

大方そこら辺の鬼とでも戦っているんだろうが…
見失うとは…

「おうおう嬢ちゃん、殺し合い中に余所見とは随分余裕だなあ！」

巨大な声とともに体中の毛が逆立つような感覚が体を襲う。声の方向に向き直って巨大な気配に備える。

木々を割って現れたのは巨大な鬼。それもただ巨大なだけじゃない…明らかに今還してきた鬼たちとは別格だ。

「今までの見せてもらった、その年で神鳴流の使い手とは恐れ入るわ！だが一人で来たのは失敗だったんじゃないか？」

今なぎ倒した木をそのまま引き抜き肩に担ぐ。力だけでも相当なものだが、相手を見る知能も持ち合わせている。しかし完全なパワータイプだ。一撃さえ避ければ倒せる！

「ふん、貴様らなど私一人で十分だ！行くぞ！」

再び気を足に集中しその鬼に向かって飛び掛ろうとし…

「あつー！」

転んだ。いや、正確には転ばされた！？

足元を見ると土の中から手が生え出ており、それがしっかりと足首を握っている。

「くっ！」

その土の手に夕凧を突き立てる。大したことはなく一突きしただけでその手は土に還るが…

「なに！？？」

再び手が地面から生えてきた。しかも一つではなく複数。足を引っ張られそのまま地面に倒される。

「あつー！」

起き上がろうとする両手両足をその土の手に押さえ込まれた。

一つ一つの力は大したことはないがこう複数あると振りほどけない！

「だから言つたろう、嬢ちゃん。一人で来たのは失敗なんじゃないかってな」

先ほどの鬼が笑いながら近寄ってきた。

「すまんなあ嬢ちゃん。ワシらもこんなのは嫌なんだが召喚者の命令は絶対だしな」

「ひ、卑怯者め！」

「なんと言われようとも…目の前の任務遂行が第一だ！」

鬼の手に握られた木が振り下ろされた。

このかお嬢様…お守りできなかった私をお許してください…

「行け！騎士！」

そんな声が聞こえた。その瞬間に振り下ろしていた腕が根元から吹き飛び木が他の鬼に直撃した。

「うおおおお！？」

鬼の叫びが聞こえる。

私の足元には巨大な西洋の突撃槍を構えた青年がいた。多分あの

青年が鬼の腕を吹き飛ばしたのだろう

「な、なにが…」

状況が飲み込めない。とりあえず目の前の青年は仲間と考えてよさそうだが…

「桜咲！無事か！」

後ろから声が聞こえる。ダメだ、今彼がここに来ても…

「いけない草薙さん！」

「良かった。無事だったか…」

「草薙先生、早く逃げて！あの鬼はそこら辺にいる雑魚とは別格です！」

「エクイス、お前は召喚士を倒せ。こいつは俺がやる」

「よろしいのですか？」

「お前の機動力ならここら辺一気に探せるだろ。頼む」

「分かりました。お気をつけて、王よ」

彼を王と呼んだ青年が夜空に舞い上がる。いや、それは跳躍なのだろうがすさまじい速度だ。恐らく私でも追いつけない。

「ぬっ！逃がさん！」

右腕を吹き飛ばされた鬼が青年を追いかけてよと背中の中を羽を広げる。

こいつ飛べるのか!?

「おいおい、お前の相手は俺がするっての……」

その羽が次の瞬間には穴だらけになった。鬼が苦痛に声を上げる。今のは気弾!? 散弾の要領で放つたのか!

「ぐう、貴様もさっきの小僧の仲間か!? 叩き潰してくれるわ!」

鬼が完全に彼を捕らえた。しかし何故か彼は避けようとしなない。両腕を頭の上で交差させ防御の体制に入る。

「な、なんで!」

叫んだ瞬間に鬼の腕が振り下ろされた。

ガン!

金槌で鉄を叩いたような音が響き……彼の頭部から多量の血が噴出す。その血が私の制服に飛び散る。まるで鮮やかな紋様のように……

「あ……ああ……」

死んだ……あの豪腕の一撃を頭部にもらって生きていられるわけがない。防御したみたいだけどダメだったんだ……

「なんで…なんで避けなかつたんですか！」

最早聞こえるわけではない言葉を叩きつけずにはいられない。あんな一撃は避けようと思えば避けられたはずだ。

「よく体を張ったな。その心意気は天晴れだ」

鬼が言う。心意気？何のことだ。

「なんだ嬢ちゃん分からののか？こいつはな、お前を庇ったんだよ」

「え…どういつ…」

「分からののか？ここでこいつが避けたら俺の腕は嬢ちゃんに直撃する。まあ俺がわざと間合いを被せたんだがな」

「な!?!」

じゃあ彼は…草薙先生は私を庇うために…

「気概は十分。だが死んでしまつては意味がない。弱いものを庇うなど戦場では致命傷よ」

「そんな…馬鹿な…そんなことが…」

声が震える。私を庇って死ぬなんて…そんな馬鹿なことが…足手まといは私のほうじゃないか！一人で突出して、敵の罠に嵌まつて、あげく盾になつてもらつて人を殺してしまつた…

「うあああああああ!!!!!!」

これも私が未熟なせいだ！私が入前であの力を使おうとしなかったから！あの力さえ使っていたらこのように地面に縫いつけられるなど醜態をさらさず草薙先生に庇って殺すこともなかったのに！！

「無駄だ嬢ちゃん。その手は術者が倒れない限り消えん。さて、そろそろ止めを刺させてもらおうか」

「おい…」

「な！貴様何故生きている！？」

立ったまま死んだと思っていた影が…喋った…生きて…いた？

「勝手に殺すんじゃないよ…」

「く、草薙さん！？」

「俺の生徒に…手を出すんじゃないよ！」

草薙先生が鬼の鳩尾に拳を叩き込む。

「ぐお！」

私は夢でも見ているのだろうか。死体が動くことなどあるのだろうか？否、生きていたとしてもあの衝撃と出血をもってすれば本来はとっくに意識を失っていてもおかしくはない。

そこまでボロボロの人が一撃であの鬼にダメージを与えている。

「なめるな小僧があ！」

鬼がその腕を横に薙ぎ払う。私を無視して完全に草薙先生だけを捕らえに行つた一撃を、避けた！？

「へ、タカミチの攻撃に比べたら速度はノロノロだな！」

草薙さんが右手を振りかぶる。その右手には目に見えるほど集中された密度の気。

「おらあ！」

気合の声とともにその右手を鬼に叩き込んだ

「なめるなと言っただろう！」

その右手を鬼が防いだ！？あの腕をひりきつた体制から無理に体を起こして腕が拳に被るようにもって来る。

それを見た瞬間体が軽くなる。見ると土の手が消えていた。何故か、そんなことは後回しでいい！

落ちている夕風を拾う。

「やれ！刹那！」

「なに！？いつの間に拘束が！」

「神鳴流奥義！」

一気に夕凧に気を流し込む！これで決める！！！！

「斬魔剣！！！！」

腕のない右肩から一気に袈裟切りに振り下ろす。

（決まった！）

腕に伝わってくる感触が完全に相手を仕留めたことを実感させてくれる。

「ははは、やはり慣れんことはするもんじゃないな」

鬼は既に半分還りかかっている。

「すまんな嬢ちゃん兄ちゃん。今度会ったときは正々堂々やるつや」

「ふん、二度と御免だ」

「お、俺も勘弁…あんな一撃はもう二度と喰らいたくない…」

「そりゃ残念だ。じゃあな」

鬼はそういつと霧散する。気づくと周囲の他の鬼たちも消えていた。先ほどの青年が術士を倒したのだろう。

そう考えたとき隣でドサリ、と音がした。

「く、草薙先生！」

「くそ…血を流しすぎた…」

月明かりでも分かるくらい草薙さんの顔が真っ青になっているのが分かる。体に触れると異常なほどに冷たかった。

「待っていてください！すぐに救護を呼びます！」

携帯電話を取り出し電話をかけようとするが…

「くっ！」

電話は無常にも圏外を示している。

「刹那…」

「すみません、草薙さん！貴方を運びます！」

倒れこんだ体を起こし肩の下に体を回す。その体は非常に重くて自分だけでは引きずらないと運べない。

「いい…刹那…動かすな」

「しかしそれでは先生が！」

「降ろしてくれ…」

「わ、分かりました」

心底苦しそうな声に渋々言われたとおりに木に背中を預けさせるように下ろす。

「お前一人で行け…助けを呼ぶにしても呼ばないにしても…お前一人のほうが早い」

「しかしまだ敵がいる可能性のある場所に置いていくわけには！」

「桜咲刹那！」

いきなり怒鳴られて背筋を伸ばす。

「行け…俺は大丈夫だ…簡単に死にはしないって…」

そんな…真っ青な顔で笑顔を作ったってこっちの心配が募るだけじゃないですか…

「くっ…分かりました。ただし約束してください。私が戻るまで生きていてくださいよ！」

「分かって…るって」

不安だがここは草薙さんの言うとおりで。私が運ぶより応援を呼んで戻ったほうが早い！

不安を残して私は学園へと走り出した。

Side out

意識がはつきりしない…頭が痛い。思考は…できぬ。じゃないと今こんなこと考えられない。

目は…開かない。開けようとしても開かない。

手は…動く。腕は動かないが手は握ったりはできる。

足…も動く。痺れている様な感覚は抜けないが軽く曲げる程度なら可能だ。

音は…聞こえなくはない。ぼんやりとだが聞こえるがはつきりした音は聞こえない。

「う…あ…」

声も辛うじて出る。それが分かるということは耳も大丈夫だ。しかし言葉にはならない。意識が覚醒してないせいか。

鼻は…効く。何か、柔らかいにおいがするが…なんの匂いだろ

うか？

「が…あ、痛っ！」

痛みで意識が覚醒する。その勢いでゆっくりと目が開く。

広がったのはいつもの部屋ではなく白い天井。頭が痛いので目だけで辺りを見る。頭の横には点滴が置かれており俺の腕につながっている。

そして何故か重い胸の辺りを見ると…

「桜咲…？」

そこには俺の胸に突っ伏して寝ている刹那の顔があった。とりあえずそれは置いておこう。

いや、非常に可愛い寝顔だとは認めるよ。思わず手を置いて撫でちゃったり…柔らかい…さっきの匂いは刹那の髪の毛の匂いか。

顔も動かせるようになったので頭は痛みが少しずらす。どうやらここは病室のようだ。

その時ドアが開いた。

「お、目が覚めたかい？」

「やあ、先生。気分はどうかかな？」

高畑さんと龍宮だった。高畑さんは何か袋を持っている。

「お見舞いだよ。果物だけどね」

「私は高畑先生の付き添いだ。残念ながら何も無いよ」

桜咲を撫でていた手とは逆の手を上げて感謝するポーズをとる。

「さて、説明をしようかな。聞きたいだろ。君があの後どうなったか」

高畑さんの言葉に可能な限り頷く。

話の内容はこんな感じだった。

あの後助けを呼びに向かっていた桜咲に高畑さん、龍宮のグループが現場の近くで偶然接触。

どうやら自分たちの担当する箇所を終えて救援に向かっていたらしい。そして俺のところに来た後応急処置を施し病院に搬送したということだ。

一時は失血と出血で本当に危ない状態だったらしい。

そういうところを聞くと俺もまだ運があるみたいだ。

話を聞いているうちに感覚が戻ってきた。言葉も出る。

「で、桜咲は？」

「うん？」

「彼女に怪我はなかったのか？」

「ああ、彼女には擦り傷以外目立った外傷はないよ」

「そうか…良かった」

それが分かると俺は張っていた糸が切れたようにベッドに倒れこむ。

「よほど気になっていたようだね」

「そりゃあ彼女は俺の生徒だからな」

「ほう…」

「じゃあ私が怪我をしたら草薙先生は心配してくれるのかな？」

「当然だろ」

龍宮が冗談めかした調子で言うが俺は至って真面目だ。そんなことを話していると胸元の桜咲がうめき声を上げる

「お、起きたようだね」

「おはよう桜咲」

「ん…くさなぎ、さん？」

目がまだ寝ぼけている。次の瞬間には覚醒した。

「く、草薙さん！目が覚めたのですか！」

「ああ、おかげさまでな」

「よ、よかった…このままもう目が覚めないのではと…」

桜咲が目元に少し涙を溜めている。うん、やっぱり女の子だな。

「大丈夫だよ刹那。ほら、もう元気だか…痛っ！」

無理して動かしたせいで体に痛みが走る。

「ああ！もう無理しないでください！」

「す、すまん」

慌てて桜咲が俺を支えてくる。

「刹那君にお礼を言っておきなよ？リョウ君」

「え？」

「彼女は君が目覚めるまでずっとここにいたんだからね」

「た、高畑先生！」

「え？マジで？」

「う、まあ私のせいですし…」

「変わるといったのだが聞かなくてね」

「た、龍宮！」

「そっか、心配してくれたんだな。ありがとう」

そういつて頭を撫でてやると桜咲齒顔を真っ赤にしてその手を振り払う。

「げ、元気になったんらしいんです！では、私は授業がありますので！」

そういうと桜咲は病室を飛び出していこうとして……こちらを振り返った。

「名前……」

「うん？」

「名前がいいです。あの時呼んだみたいに……」

あの時？ああ、あの鬼と戦い時か叫んだやつか。

いいんだらうか？未だに俺は不審者なのは変わりないと思うんだけど……

まあ、本人が言うんだから無下に断るのも無礼というものだろう。

「分かった。ありがとう刹那」

「では、私はこれで！」

夕日のせいなのかそれとも照れてるのか、顔を少し赤らめた刹那はそのまま病室を出て行った。

「あ、行っちゃった」

「ふふふ、あそこまで刹那が世話を焼くとはね」

龍宮がくすくすと笑いながら言う。

「ちなみに二人とも、俺はどのくらい寝てた？」

「3日だよ。クラスには階段で転んで怪我をしたということで休みとなっている」

「そりゃあ随分間抜けな理由で3日も休んだもんだ」

「仕方ないだろう。本当の理由は話すわけにはいかないしな」

そりゃそうだ。てことはもう原作まであと丁度一週間ってことか。

「ん？」

なんか廊下が騒がしい。そう思った矢先に病室のドアが勢いよく開いた。

「くっさなぎせんせー！」

「お見舞いに来たよー！！！」

2・Aの面々だった。

「あー！草薙先生起きてるー！」

「なんだー！今日もお見舞い食べられると思ったのにー」

「お、お姉ちゃん！」

おい、その双子姉。俺が復帰したら覚えてるよ…

え、ていうかこの人数ってほぼクラス全員じゃね？

「高畑さん、今何時？」

「ん？もう5時を回ってるけど？」

刹那よ…その言い訳は苦しいぞ。

結局2・Aの面々は騒ぐだけ騒いで看護婦さんと高畑さんに追いつ出されるまで残っていた。

ちなみに俺は全治一週間。復帰できるのは原作突入と同時にこ

とらしい。天のいたずらってか？それとも神様のきまぐれか。

てか、俺あんなに騒がしい状況でも眠ってたんだな…

マジで危なかったと俺は改めて実感した。

S i d e o u t

生徒の為…（後書き）

えー、やっと終わりました。結構長くなりましたがいかがでしたでしょうか？

自分が予定してたのとかかなり変わってしまったんですが、実際書いてると変わってくるものですね。

今回は騎士^{ナイト}エクスに登場してもらいました。本当は原作突入までに全部だしたかったんですができませんでした。無理に突っ込むと自分の中で物語がぶっ壊れそうだったので…

今回は一回分オリジナルキャラの能力紹介や説明を入れたいと思っています。

まあ予定は未定なんですけど…

こんな行き当たりばったりで進めますがこれからよろしくお願ひします

作者の為にオリキャラ紹介を成す…（本編ではないので注意）

草薙（以下草）「草薙亮と〜！」

「「「「「召喚駒たちの〜」「」「」

「「「「「自己紹介コーナー」「」「」

草「はい、やってまいりましたこのコーナー。これは作者が書いているオリジナルキャラと設定について俺たちが作者に代わって紹介する場所だ」

テディア（以下テ）「あの、王よ…私たちがこのようなことをする必要はないように感じるんですが…」

草「何言ってるんだテディア！」

テ「は？」

草「これは作者も設定が分かりずらくて混乱しそうなのに読者が余計混乱しないようにとの作者の計らいだ！」

テ「はあ…」

草「まあようは安定しなかったキャラをここで公に公開することであやふやになるのを防ごうって魂胆だな」

デギオン（以下デ）「なるほどな！」

エクイス（以下エ）「確かにそのほうが分かりやすいですね。作者にも読者にも」

草「もつとぶっちゃけると本来ここまでにお前ら全員を出すはずだったのに作者の技量不足で出せなかったからここで補足しちゃうって意味も含まれている！」

デ「ず、随分とぶっちゃけたな……」

ミトム（以下ミ）「ほほ、正直なのはいいことじゃて」

草「んじゃあ早速紹介のほうを始めるぜい！ちなみにここでは

名前、

チエスのクラス
階級、

武器、

特技（戦い方）、

性格

特徴（見た目）、

消費魔力（草薙を10としてどれだけの魔力供給を行うか）、

喋り方、

の以上8つを主として紹介したいと思う。技とかはまだ決まっていから仮だな。そのうち出てきたら後書きやらまたこういうの作って一度入れるってさ」

ケリア（以下ケ）「左様ですか」

草「お、ケリアがやっとしやべった。お前は無口でいかな」

ケ「申し訳ありません」

草「ちなみに俺は上の消費魔力の部分がなから注意だ」

テ「確かに消費魔力も何もありませんもんね」

草「そういうこと！じゃあ最初は…」

デ「王！俺から頼むぜ！」

草「…あのさあ、分かりづらいから全員で俺のことを王って呼ぶの止めない？」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

草「もういいや。そんなじゃあ紹介するぜ」

名前、デギオン

階級、兵士^{ボーン}

武器、特になし

特技、近接戦闘（武器も使えるがもっぱら格闘がメイン）。近接戦闘では誰にも負けない自信があるらしい。

性格、派手好き、バトルマニア

特徴、188cmと長身。金髪をオールバックに纏め上げている。

消費魔力、1〜2

喋り方、かなりフランク。王である草薙に対してもそんなに飾りのない言葉で話しかける。

草「こんな感じか？」

デ「おう、いい感じじゃね？」

テ「だから貴方は王に対する言葉使いを直しなさいと何度言えば！」

デ「うっせえ！王がいつて言っただからいいんだよ！」

草「まあまあ二人とも、ほれ次行くぞ。次はエクイスな」

エ「よろしく願います」

名前、エクイス

階級、騎士^{ナイト}

武器、突撃槍

特技、高速戦闘をメインとした中距離戦。高速移動からの突進は脅威

性格、物静かで5人の中では一番大人しい。

特徴、5人の中で二番目に背の低い160cm。髪は赤みが入った黒の短髪。

消費魔力、2〜3

喋り方、性格と同じで普段はのんびりとした調子で話す。ただ戦闘状態に入ると途端に厳しくなる

エ「ありがとうございます」

草「なんか訂正かけるところあるか？」

エ「いえ、ほぼ大丈夫です」

草「ほぼ？」

エ「細かいことなのでそこは追々・・・」

草「そうか、じゃあ次はー…ケリア！」

ケ「了承です」

名前、ケリア

階級、城兵^{ルーク}

武器、背に背負っているからだの半分ほどの巨大な盾

特技、防衛を主とし、最も高い対魔力、対物理防御力を誇る。体格を生かしてたタツクルや拳の攻撃も強烈。

性格、寡黙

特徴、2 mを超える巨漢。坊主頭。

消費魔力、3～5

喋り方、抑揚のない声で必要最低限のことだけ喋る。たまに冷静に突っ込むことも？

草「最後のなんだよ…」

ケ「作者が迷ったのでは？」

草「ま、しょうがないか。よし次！」

ミ「ほほほほ、こつ来たら次はワシですよ」

名前、ミトム

階級、僧正^{ベシヨウシヤ}

武器、杖

特技、魔法を駆使用する後衛。固定砲台から数での足止めと幅広い役をこなす。その分近接戦闘は全くできない。

性格、常に笑顔を絶やさないムードメーカー的存在。怒ると怖い。しい。

特徴、いつもドラ エ?の僧侶のような帽子を被っているため身長は不明。ただし頭の位置が明らかにエクイスより低いため最も背が低いと思われる。髪は白髪。

消費魔力、1〜8

喋り方、テンプレ的なおじいさん言葉。魔法使用時は声が変わる

草「え？なんでこんなに消費魔力前後すんの？」

ミ「まあワシの魔法は小さいのからでかいのまであるから。使用した魔法によって王から供給を受けるのじゃ」

草「なるほど…」

ミ「言ったじゃろ？ワシを出すときは慎重に、との」

草「分かった。改めて気をつける。よし！最後テディア！」

テ「あ、はい」

名前、テディア

階級、女王クイーン

武器、西洋の剣、一般的なロングソード

特技、近接戦闘から魔法戦までありとあらゆる戦闘のエキスパート、ただし一番の得意技はそれらを合わせた魔法剣

性格、王に対して忠実。このことに関してなら我を忘れることも。

特徴、女性としては高めの177cm。黒の髪を後ろでまとめている、いわゆるポニーテール

消費魔力、9

喋り方、他の駒以外には誰に対しても敬語。敵に対してのみタメ口

草「9つておいおい」

テ「ですから私を呼ぶ際は」

草「分かってる。ミトム以上の注意を…だろ？」

テ「はい」

草「ちなみに登場時に全員黒のスーツだったのはチエスの黒いほうの駒を取り込んだって設定で白だったら白いスーツだったらしい」

デ「あの服動きづらいんだよな」

エ「戦闘時はもちろん戦闘服に変わってます。参考までに僕は胴体と足の一部が西洋甲冑、ケリアは全身重鎧です」

草「作者の設定では俺が考えた服装で出てくるらしい。先の二回は何も考えなしだったからスーツで出てきたけどな」

エ「せめて戦闘に適した服装にして欲しいです」

草「次から気をつける」

ケ「王、そろそろ王の紹介…」

草「あ、そうか。分かった。よし！皆お待ちかね主人公の俺の紹介だ！」

名前、クサナギ草薙 リョウ亮

階級、キング王

武器、今のところ特になし。

特技、主に型のない全身と気を使った格闘戦、本人いわく喧嘩殺法。召喚による戦闘要員の召喚

性格、何もないときはお気楽思考の楽道家。ただしON/OFFしつかり切り替えられるので授業時や戦闘時は至って真面目

特徴、185cmとやや長身。髪は少し茶色を含んだ黒。長めの髪を軽く後ろに寄せている（モン　ンのレウスレイヤーに近い形）

喋り方、基本的に年上以外は呼び捨てタメ口。年上でも親しい人にはタメ口になる。今のところはタカミチとエヴァンジェリン、学園長の3人のみ。しつかりした場所ではちゃんと敬語

草「どうだ！これで満足か！」

テ「作者いわくこれから魔法も使えるようにする予定そうですよ」

ミ「またどんな特訓をつけられるか楽しみじゃのう」

草「え？マジで？」

デ「下手したらエヴァンジュリンにあの坊主と一緒に稽古つけられるんじゃないの？」

ケ「ありえる」

エ「確かに」

草「俺オワタ＼（＾o＾）／」

ミ「そうならないように他の者に習うしかないの」

草「そうだ！ミトムが教えてくれ！」

ミ「それは無理じゃ。ワシが使う術式はこの世界とは全く別物じゃからな」

草「…」

テ「えつと…王？」

草「とりあえず終わりかな」

テ「あ、王。作者から追加で言って欲しいことがあるそうです。今手紙が」

草「えつと何々？」

『おはこんばんわ。今まで見ていただいた方はありがとうございます。見よう見まねで始めたこの小説ですがやっとこさ原作突入です。作者は思いついたまま文章を打つせいで見苦しかったら申し訳ありません。』

ここで一つお詫びです。作者は非常に打ち間違い、誤字脱字が多いです。これの前の話「生徒の為…」でも4箇所くらいありました。一応見つけたところから直していますが、作者自身も気づかないところがあったりしますのでお気づきになった場合ご指摘いただけたら大変助かります。作者もなるべく無いように気をつけるのでこれからもお願いいたします。 by グニル』

つて…後書きでやれやあ！」

テ「何と言うか…」

デ「作者もめちゃくちゃだな」

ケ「見にくい」

デ「なんか言っただかケリア？」

エ「デギオンとテディアが並んでしゃべるとテとテで見分けにくいってね」

デ「マジかよ」

草「よっしゃあ占めるぞー！」

「相変わらず急なことじゃ」

草「それでは本編でまたお会いしましょう」「ノシ

作者の為にオリキャラ紹介を成す…（本編ではないので注意）（後書き）

（＾Ｏ＾） 三ちよつと原作読み直してくる

変えた原作の為…（前書き）

追記、6月19日修正

変えた原作の為…

Side 草薙亮

「ふつむ…」

麻帆良大学病院…

俺がこの病院に担ぎ込まれてちょうど一週間。退院の日だ。なのに俺の目の前には頭のレントゲン写真と睨めっこしている医者が生がいます。

「むー…」

さっきからずっと唸っている。状況によってはこの人の一言でまた病室に戻る可能性もある。

「えっと…なにか問題でも?」

意を決して聞いてみる。そういうと医者はこちらに向き直る。

「いや、これと言って問題はないですな」

「は?」

じゃあなんで?

「というより逆なんですわ。この怪我本当は1月くらいかかる怪我なんですがねえ」

「そうなんですか」

そういわれて思い当たる節がある。あの鬼の攻撃を防御した際に俺は意識的に頭部の直撃する部分と腕だけに気を集中した。それでも防ぎきれなかったのだが、集中した気が怪我を治すのを早くしたらしい。気での治療と言うのはよく聞く話なので、俺は無自覚でそれをやっていたことになる。

むう、戦闘センスも込みってことか？それとも火事場の馬鹿力か・・・まあ命有つてのなんとやらだ。

「まあもう退院しても問題はありません。ただし、傷の方はまた開く可能性があるので注意してください」

「はあ」

「一応今日は大事を取って休むように」

そういつと医者診断書を俺に渡してきた。

「分かりました」

俺は一度礼をすると病院から出た。

本当は今日来るはずの子供先生を実際この目で見たかったのだが仕方ない。

そう割り切ると俺は診断書を見せるために学園長室に歩き出した。

.....

「そうか、残念じゃのう」

「申し訳ありません」

学園長室で俺は診断書を学園長に渡す。

「ふむ、だが焦ることもないわい。どうせ明日には会うんじゃ。今日はゆっくり体を休めとくれい」

「ありがとうございます。では自分はこれで」

「そういえばさっきから何で敬語なんじゃ？前会ったときはもう少し砕けておったじゃろ」

「一応これを伝えるまでは仕事ですから」

「そうか、まあそこが君のいいところかの？」

「つつ訳で俺はもう行くけどいいんだよな？」

「ひょ！？急に变えるのう」

「じゃあ今日は適当に休みを満喫させてもらおう」

「あまり生徒に見られんようにの」

学園長室を出る。とりあえず今日一日は確保したわけで…でも生徒に見られるわけには行かないわけであって…

「学園都市で生徒に見られないようにするのはほぼ不可能じゃね？」

結果俺は図書館島に向かうことにした。前回来たのは高畑さんに案内された時、しかも表だけしか見れなかったのでいい機会だ。

橋を渡り麻帆良湖中央に立てられた巨大な建物の中に入る。流石世界最大規模。一回来ていても圧倒される。

入口には大きな張り紙が張っており『図書館探検部部員募集！』とある。

なんでもこの図書館。地下がものすごい広くてそこを探検しマップを作るといふ部活があるらしい。

そういえば2・Aのクラスの何人かもこの部活（部とあるがサークルらしい）に参加していたな。

「おお…」

流石世界最大規模（大事なことなので二階言いました）。ちょっと奥に入るだけで既に目もくらむような本の山が現れる。

「これ管理とかどうしてるんだ？やっぱ魔法でしてるのか？」

軽く頭を捻ってみるが分かるはずもないのでとりあえず本を読むことにする。

ちなみに俺は歴史好きだ。特に戦国時代なんかは心躍る。

「えっと、戦国時代戦国時代：あった！『その時歴史が変わった
18巻 戦国時代編』：なんかどっかで聞いたような？」

まあいいか。む、結構独自の解釈が多いな。でもちゃんと理論立
てて無理のない書き方だ。中々この作者は読み応えあるな。

「む…ここで続くなのか。えっとー、次は25巻…」

いつの間にか7冊ほど読んでいた。様子見で18、19と読んで
ら面白かったので一気に5冊ほど抜き出して持って行ったのだ。

元の場所に戻し隣を見ると…

「25巻が…ない!？」

そこには25巻だけなかった。次の26巻からはまたズラーっと
シリーズが並んでいるのだが…

それもそうだろう。ここは図書館だ。誰かが借りて行くなんてい
うのは珍しくない…ないんだけど！

「ダメだ…続きが気になる…」

その場で蹲ってウンウン唸り始める。こんなことしてもなにも変
わらないんだけど…

諦めて気を取り直すと出口に向かって歩き出した。

「はあ…つか疲れたな…今何時だ？」

図書館島は基本的に本が焼けないように日が届かないよう設計されているらしい。明るさが本を読みやすい程度一定に保たれており、入口付近しか日が分からない。

欠伸をしながら角を曲がる。

「うお！」

「きゃ！」

欠伸をしていて目を瞑っていたせいで反応が遅れた。出会い頭の人と接触してしまい尻餅をつく。

「いてて、ごめん。大丈夫…か！？」

そこには本の山に埋もれた人がいた。どうやら接触した拍子に本棚にぶつかり本が崩れたらしい。人がいるのかどうかは本の山の下からちよこんと足が出ているからだ。

慌てて本の山をどけると気を失った生徒が出てきた。

「宮崎？」

それは2・Aの宮崎のどかだった。そういえば名簿に書いてあったけど宮崎も図書館探検部だったな。

とりあえず体に怪我がないかを確認。目立った外傷なし。打ち身になる可能性はあるかもしれないがそこまで重い本もなかったから大丈夫だろう。

おそらく驚いて気を失っただけだ。

「おい、宮崎ー。大丈夫かー」

声をかけながら上半身を抱き起こす。ふむ、体温も正常、脈も異常なし。放っておけば目を覚ますかもしれないが流石にこんな場所に置いておくわけにもいかない。

持ち上げようとして足元に手を持っていったとき

「のどかに何をしてるですか！」

後ろからそんな声が聞こえた、瞬間に後頭部に何か重量のあるものが直撃する。

「ぐ、おおおおおおおおおおお……」

傷が！傷があああああああ！！

いや、塞がってはいるんだけどモロに傷のあるところにこれはキツイ！

あまりの痛みにも声も出ない。

ぶつかった部分に手を持っていきたいがここで手を放すと宮崎を地面に落としてしまう。

「誰だ！」

涙目になりながら顔だけ振り返る。

「く、草薙先生？」

「綾瀬？」

そこにいたのは綾瀬夕映だった。手には振りかぶった状態の分厚い本『六法全書 初代』。ちなみに後頭部に当たって落ちた本は『日本国語辞典』。

おいおい、次はそれを投げるつもりだったのか！？ていうかあの細腕あの威力か・・・

「せ、先生！のどかに何をするつもりだったんですか！」

何か壮絶な勘違いをしているなこいつ。

とりあえず説得するために宮崎を下ろして綾瀬に事情を説明しようとするよ…

「ゆえ〜？のどか見つかった？」

明るい声が聞こえ本棚の向こうからその主が現れた。

「ハルナ」

「早乙女が」

早乙女ハルナである。俺ははっきり言ってこいつの雰囲気には付いていけない。

「む？草薙先生ジャン。なんでこんなところにいるの？のどかも伸びちゃってるし…」

そこまで状況を見て早乙女の目が妖しく光った。やばい…あれは何か絶対とんでもないことを言い出す目だ！

「なるほど、つまりはこういうことか！今日草薙先生がいなかった理由は図書館で生徒を待ち伏せして事故と見せかけてその毒牙にかけると言う恐ろしい計画だったのか！」

だあああああ！だからこいつは苦手なんだー！

「そしてのどかは最初の犠牲者ね！もうあんなことやこんなことも…」

「断じてそんなことはない！」

「草薙先生…不潔です…」

「綾瀬も早乙女のことを信じるんじゃない！」

「冗談で言ってるとしてもやめて欲しい。冗談だよな？冗談といっ
てくれマジで…」

「こっしちやいられない！このことを朝倉に報告しなくては！」

「うるあ！早乙女！いい加減にしないか！」

俺がいい加減に頭に来て怒ると早乙女は出していた携帯をしまう。

「ちょっとした冗談じゃーん。少しは柔軟に行こうよ先生」

「お前の冗談は冗談に聞こえないんだよ……」

まあまあ、とかいいつつ肩を叩いてくる。お前の性なただけどな！

「う……ん」

「お、丁度いいや。のどかだ目を覚ますみたいだよ」

宮崎の目が開いてあたりを確認する

「あれ？ゆえ、パル……草薙先生？」

「よかった、どこか異常はないか？」

「え？え？」

宮崎はまだ状況を把握してないみたいだ。

「のどか。何があつたか分かりますか？」

「えつと……本を返しに来て、新しい本を見てたら前を見てなくて、角にいた草薙先生とぶつかって……その先は……」

「覚えてないのですね？」

「う、うん」

「マジかよ」

「ふふふ、草薙先生。ピーンチ」

早乙女が後ろでにやけているのが見えるようだよ。

俺が頭を抱えていると綾瀬が話しかけてきた。

「とりあえずこのことは保留にしましょう。今は早く教室に戻らなければなりません」

「そついえばお前ら授業はどうした？」

まだ授業中のはずだ。パルはともかく宮崎や綾瀬は抜け出しなくてしないはずだが。

「え？草薙先生ボケてるの？もう放課後じゃん」

「マジで？」

「そんなことで冗談なんて言わないっての」

ほれ、と見せ付けられた携帯にはしっかりと放課後の時刻が示されている。しかも大分経っている。

「あちゃあ、夢中になりすぎたな」

「携帯電話も持ってないなんて先生としてどうなのよ？」

「今日はたまたま持ってなかったただけだ。それから早乙女、図書館

内で携帯は禁止」

「だから少しは柔軟にいこうって」

「あの一、何がなんだか…」

宮崎がオロオロして聞いてくる。そういえば言ってなかったな。

「草薙先生がのどかを手籠めにしようとしたのよ」

「エ・・・ええええええええええ!!」

「早乙女え!!」

「にはははははは!!」

走り出した早乙女を俺が追いかける!

後には綾瀬と宮崎が残された。

Side out

Side 宮崎のどか

「い、行っちゃたね」

「とりあえず教室にもどりましょう。ネギ先生の歓迎会に間に合わなくなりますよ」

「そ、そうだね」

草薙先生とパルが行った後を歩きながら教室に向かう。

「ゆえ？さっきのパルの話本当？」

「嘘です」

ゆえに聞くと即そう返してきた。

「草薙先生は学校にいるとき以外は不真面目なことが多いですが比較的真面目な部類の人間です。そういうことはしないと思います」

「そっか」

「はい。状況から見るとのどかが気絶してるのを草薙先生は介抱してくれてたようです」

それきり会話がなくなってしまった。そか、草薙先生助けてくれたんだ。後でお礼言っておかないと…

入口まで戻るとパルと草薙先生が何故か正座していて司書さんに頭を下げている。

「ど、どうしたんだらう…」

「どうせ走っていたところを捕まっただんでしょ」

近くに行くとゆえに言うとおりの司書さんが図書館の利用方法につ

いて厳しく注意している。

5分くらい待っているとようやく二人はようやく解放されたみたい。

「早乙女…もうやめようか…」

「そつだね草薙先生…足痛いし逆に時間食っちゃった」

どうやら二人は仲直りしたみたいです。あ、そつだ。さっきのお礼…

「あの、草薙先しえい…」

あ、う、噛んじやった…恥ずかしい。

「ん？どうした宮崎」

「あ、あの…さっきは助けていただいてありがとうございます…！」

良かった。言えた…

「あれ？俺そのこと言ったっけ？」

「えと、ゆえが…」

「綾瀬…やっぱりお前分かってたんじゃないか」

「ハルナも言っていました。草薙先生はもう少し冗談を通じるようにするべきです」

あ、落ち込んでしまいました。ものすごい勢いで地面に」の」の字を書いています。

「ちくしょう…どうせ俺が悪いんですよー…」

えっと、こつこつ場合どうしたらいいんでしょう。

「ほら！そろそろ行かないとネギ先生の歓迎会遅れるよ」

「今からやるのか」

「あつたりまえじゃん！歓迎会はその日のうちに開くのが礼儀ってもんでしよう。当然草薙先生も参加ねー」

「へいへい」

あつ…言葉が出なかった…やっぱり男の人と話すのは苦手だな。

「のどか、私たちもいくですよ」

「あつ…」

「のどか？」

「あ、どうしたのゆえ」

「ですから私たちももう行かないと…」

「そ、そうだね。行かないと歓迎会に間に合わないもんね」

「そ、そのとおりです」

ネギ先生の歓迎会…

そういえばさっきのネギ先生…かつこよかったなー…急に現れて私を助けてくれて…

何故か急にアスナさんに連れられて行っちゃったけどネギ先生にもちやんとお礼言わなきゃ…

Side out

Side 草薙亮

「……………ようこそ！ネギ先生……………！！！！」

教室に戻ったときは俺たちはぎりぎり間に合った。ネギ君とアスナが入ってきたのはその3分後だったからな。

しかしまあこのクラスはお祭り騒ぎが好きだな。なにかあれば絶対こういうことやるみたいだし。

ネギ君は教室の中央に連行されていく。とりあえず挨拶もしてないし、自己紹介位してくるか。

「椎名、ちょっと場所いいか？」

「あ、草薙先生。どうぞどうぞ」

ネギ君と話をしていた椎名桜子に場所を変わってもらおう。

「やあ、初めまして」

「あ、は、初めまして。えっと貴方は？」

「俺は草薙亮。このクラスの副担任と歴史の授業を担当している」

「あ、ネギ・スプリングフィールドです。今日からこのクラスの担当を任せられました。あの副担任って言うことは…」

「俺はこのクラスの副担任を任せられた。だから君の副担任ってことだよ」

「そうですか。よろしくお願いします」

「あー、それからな」

俺はネギ君の頭を撫でる振りをして口を一瞬だけ耳元に引き寄せ
る。

「俺も魔法関係の人間だ…」

「エ!?!」

「まあなにか困ったことがあったら相談してきな。可能な限り手助けはするよ」

存在ばらしちゃったけどまあいいか。こっちの方が後になってな
んやら揉めるより断然早い。

「せんせー！今度は僕たちと変わってー！」

「お姉ちゃん！先生にそんな風に言っちゃだめだよー！」

「おう鳴滝姉妹。いや、俺も今話が終わったところだ。ここでいい
なら変わってやるよ」

「わーい！ほら、史伽！」

「あ、すみませんです」

後ろからやってきた二人と場所が変わる。

その後は結局いつもの宴会騒ぎだ。宮崎がネギ君になにか渡して
いるのを見られて周りがはしゃぎだし、雪広がいつ作ったのかネギ
君の銅像を取り出しそれをアスナがからかって戦い&トトカルチヨ
が始まる。

つか俺のときとほぼ同じパターンじゃん

「全くこのクラスは変わらないねえ高畑先生、しずな先生」

「そつだね」

「ですけどそれがこのクラスのいいところですよ」

高畑さんとしずな先生のところに行ってたわいな雑談を交わす。その内騒ぎの中からネギ君がやってきた。

「いやー、なかなかうまくやれなくて」

「ははは、まあ次からがんばればいいさ」

「そうそう、俺も最初はこのクラスの雰囲気には付いていけなかったからな」

「そうなんですか？」

「そう、だからネギ先生が気にする必要はあまりないかな」

「わ、分かりました。がんばります」

ネギ君は軽く決心を決めたような顔だった。と、急に何か思い出したようにタカミチに向き直る。

「ところでタカミチ」

そっぴいながら手をタカミチの額に当てた。

「アスナさんのことどう思ってる？」

思わずズッコケた。

向こうのほうでこちらの様子を伺っていたのかアスナもズッコケている。おーおー睨んでる睨んでる。

そういつのを見てるとネギ君がアスナのところに駆けていく。

なんでアスナはショック受けてんだ？

そんなことを見ているとまたネギ君がタカミチの額に手を当てに戻ってきた。

そしてまたまたアスナのところに戻っていく。

あ、またショック受けてる。

「あ、アスナさん！」

とつとつ逃げちゃったよ…どついつことなんだか？どつちにする苦勞しそつだな…

「高畑さん…」

「つん？」

「俺…できる限りネギ君の手助けがんばってみるよ」

「つん、頼む」

こうして俺は原作に介入した。さて、俺が介入したことでもうなるか楽しみだな。

いつもの部屋に戻ると俺の部屋には荷物がなかった。

「エ…なんで？」

部屋中探しても何も無い。訳が分からなくて間違えたのかと思い一回扉の外に出る。

「ん？張り紙？」

そこには一枚の張り紙があった。

「えっと？『君には今日から女子寮の管理人室に住んでもらうぞい。荷物と手続きはもう済んでいるから今日からそっちに行ってくれい

by 近衛 近右衛門』」

またあの爺かー！しかも俺女子寮への道覚えてねえ！

結局俺はそこから女子寮を探して1時間近く学園内を歩き回る破目になった。

S i d e o u t

日常の為…（前書き）

追記、6月19日修正

日常の為…

Side 草薙亮

忘れていかもしれないが俺は学園広域指導員だ。一応前の怪我の一件で正式にそのことが決定したらしい。

その前も高畑さんが付いて回っていたとはいえその仕事はしていた。もっぱら高畑さんの後ろで連絡取る係りだったけどやり方は見ている。

今日からは一人での見回りだがまあ大丈夫だろう。

そんなことを思っていた時期が…俺にもありました…

目の前に広がるのは屈強な男たちが左右に別れてにらみ合っている。その数約50人ずつ総勢約100人

今にも一触即発状態で俺も手が出せない。俺のほうが強いことは分かるのだがこれだけの数となると一気に制圧するのは難しい。

「こんな人前じゃ召喚もできないしなあ…」

デギオンかエクイス辺りを召喚できたら早いんだが…

しかも事の発端が両方悪意がないことが厄介だ。

寝技と間接技なんてどっちが上とかないだろうがよう！

そんなことを考えてるうちに両者とも距離が詰まっていく。

ええい！なるようになれ！

「両者とも動くな！」

俺が口を挟むと百人分の視線が一気にこちらに向いた。とりあえず接触しそつになつてた

「ああ？誰だ兄ちゃん」

「こいつ一月ほど前に学園に赴任してきた草薙って先生だぜ」

「まずいよあつちゃん！こいつ広域学園指導員だ！」

ほっ、どうやら俺の名前もそこそこ知れ渡っているようだ。これで両者が引いてくれれば…

「いや、こいつが戦ってる姿は見たことない！いつもデスメガネの後ろにいた奴だ！きつとたいしたことはない！」

「そつだ！一緒にやつちまえ！」

うわー、そついう考えに行き着くのか。

「くたばれえ！」

「死ねやあ！」

リーダー格らしい二人が拳を振り上げる。もう間接も寝技も関係

ないー！

仕方ねえ！

「ほっ！」

両方の男の手首を見切って捕まえる。

「なっ！」

「は、離しやがれ！」

手首をねじり上げて、

「「いてててて！」」

そのまま足を払う！二人の男の体が丸で糸に釣られたようにひっくり返った。

なんのことはない。足払いをした瞬間に手首を捻りながら倒れる方向に回転をかけてやればあとは重力に任せて背中を地面に落とす寸法だ。

一応意識は落ちていないが10分くらいは動けないだろう。

「よくも部長を！」

「やっちまえ！」

あーもー！

「お前ら全員かかってこいや！」

.....

30分後

「こいつ化け物か!？」

「あれだけいた人数がたったこれだけに……」

「誰だよあいつが弱いなんて言った奴！」

「そこで延びてるよ!！」

怪我をさせないように戦闘不能にするってのは仕留めるより骨が折れるな。とりあえず残り20人か。

肩で息をしながら乱れた服装を整えなおす。実際俺が止めたのは60人くらいだ。あとの20人くらいは元々の面子で戦い合っていたのでもう半分になっている。

「こりゃ喧嘩してる場合じゃないぜ……」

「ここにいる奴ら全員でかからないと勝てねえぞ!！」

「よし、とりあえず休戦だ!あいつを倒すぞ」

とりあえず元の原因は断ったようだ。これで俺の役目は終わりのはずなんだけど…

「逃げられないよねー…」

残りの視線は全員俺に向いている。逃げられるわけがない。

「一斉にかかれ！」

「「「「「うおおおおおおお！！」「」「」「」

全方向から男たちが襲い掛かってくる。

最初のストレートを避け、相手の袖をつかんで他の奴らを巻き込むように投げ飛ばす。これで4人は減った！

二人同時の攻撃を片方だけ抑える。片方は当たる部分に気を集中して防御する。

「痛っ！」

攻撃を当てた方が次の攻撃に移る前に無視して抑えたほうの男を一本背負いで投げる。もう一度攻撃しようとしていた男はその投げた方をもろに受け止めて倒れこんだ。

「おお！」

気合の声とともに振るってきた腕を上半身をそらして避けるとそのままそらした勢いを利用し、逆立ちになる。両手を捻って回転力を加えて男の腹部を思い切り蹴り飛ばす。

見よう見まねカポエイラだ。これも我流なので本場の人が見たら

怒るだろう。

そのまま回転維持しつつ近くにいた二人をまとまって人がいる方に蹴り飛ばす。

「「「ぎゃああああ！」「」」

立ち上がると立っているのは俺だけだった。

「ひいー！」

俺が近づくと男たちは一斉にあとずさる。

「あー、なんだ。そのなあ、もうこんなこと起こすなよ？」

そういつと首を激しく縦に振って頷いた。

「よし！解散！」

俺はそう言ってその場を去った。気絶してる奴や打ち身になってる奴がいても怪我した奴はいないはずだ。多分…

「痛ててて…さすがに攻撃受けすぎた」

体の節々が痛い。昼休みもほとんど終わってしまっている。食事をする暇もない。

ん？なんか騒がしいな…まさかまた広域指導員の出番とかいうんじゃないかねえだろうな…

騒がしいのは校舎前の広場。とにかく広いの昼休みにはスポーツやら弁当を食いにくる生徒が大勢いる。騒ぎはその広場の中央だ。

「あれは？」

いるのは大河内アキラと明石裕奈だ。向かい合っている違う制服の人たちは高等部か。どうやら場所のことで揉めているようだ。

あ、ボール当てやがった…

うーん、場所のことくらいで出張るのはどうかと思うが年上だからって威張るのはあまり好ましい行為ではないなあ。

軽く注意してやるか。

「コラー、君達まちなさーい！」

うん？なんか校舎の方から最近聞きなれた声だ。

やっぱりネギ君だ。

「僕のクラスの生徒をいじめるのは誰ですか？ い、いじめはよくないことですよっ！？」 僕、担任だし怒りますよ！」

ふむ、ネギ君が出てきたのなら俺の出る幕はないかな？とりあえず様子見だな。

あ、揉みくちやにされ始めた。

ありや完全にぬいぐるみ扱いだな…

「おやおや、ネギ君もまだまだだねえ」

「むっ」

後ろからの声に振り向くといつの間にかタカミチがそこにいた。

「まあいくら先生だからってまだ10歳だろ。年上の人に絡まれたらきついつて」

「それを分かってて見てたってことはリョウ君も少しは期待してたんじゃないかい？」

「まあ少しはな…」

お、どこからかボールが飛んできて高等部の生徒に当たったな。

一体どこから…ゲ、アスナと雪広。

よりもよってネギ君ラブの雪広と沸点の低いアスナじゃどう考えてもこの場が収まりそうにない。

「そういえばさっきあつちでさんさんたる状況があつただけなのに知らないかい？」

「…シラナイデスヨ？」

「そうかい、まあいいけどあまり力で解決し内容にね。僕たちは極力話し合いで解決することを心がけなきゃね」

「分かってるんじゃないですか」

あ、なんか喧嘩が始まったぞ…つか女の子が取っ組み合いの喧嘩すんなつつうのに…

「そろそろ俺止めてきますわ」

「僕が行こうか？」

「いや、一応俺も話で止めるって言うのを実践してみたいからさ」

「じゃあ任せてみようかな？」

「おう、任された」

「あ、一つ助言だ。喧嘩って言うのは一回頭を冷やさせて冷静にさせれば収まるものだよ」

「分かった」

冷静にねえ…とりあえずやってみるか。

見ると大河内も明石もアスナたちに加勢しようとしていた。

ちよつとここからだと言距離が離れすぎている。

「じゃあねえ！」

軽く足に気を込めて瞬動術の真似事をする。この程度なら行き過ぎることはない。

「ほいストップ」

二人の頭をポンと軽く手を置いて抑える。

「な、何?…草薙先生?」

「ありや、草薙先生じゃん」

二人とも俺を確認して動きを止める。うん、さすがは聞き分けは良いな。

「状況は見てたから把握してる。とりあえずここで待ってる」

「は、はい…」

「ちよつと！見てたならなんだ…ムググ！」

「ゆるな、ストップ」

何か言おうとしていた明石を大河内が手で抑えた。この場を収めてくれるならいいと思ったのだから。

つかさつきからワーワーギャーギャーと、2対多数でよくやるわ。

「ほれ！両方ともストップだ！」

俺が雪広と神楽坂の肩を強くつかんで押しとどめる。

「ちよつと！何すんの…って草薙先生?」

「く、草薙先生！」

俺を確認した二人が一応動きを止める。暴れている場合この二人を抑えるのは骨だ。

「ったく、女の子が取っ組み合いの喧嘩なんてするもんじゃないぞ二人とも」

「う、でも草薙先生！」

「そ、そうですね！この人たちが！」

「とりあえず一回おちつけっつ！」

何とかなだめて二人を後ろに下げる。二人は渋々といった様子で俺に従ってくれた。

「で？貴方は誰ですの？ここは女子校エリアですわよ」

「あー、そうか。高等部は俺のこと知らないか。俺は草薙亮。一応これでも教師兼広域指導員だ」

高等部のリーダーみたいな女の子に向かって身分証明証を見せる。

「む……」

「さっきから見ていた第三者の視点から言わせてもらう。先に手を出したアスナたちも十分悪いが年上と言うだけでそれを特権のように振舞うのは上級生としてどうかとおもっぞ？」

「っ……」

大勢の前ではやはり正論に限る。無理に反論すればそれは我侷や屁理屈に成り下がるからだ。しかもこの高等部の生徒は自分に非があることを自覚しているのか押し黙ってしまふ。

冷静にさせたらあとは終わりにさせていいんだよな多分。

「とりあえず喧嘩両成敗ってことでこいつらには俺から言うておくから、君たちも上級生としての器を見せてくれないかな？」

「わ、分かりました。では…」

素直に頭を下げて高等部の生徒たちは去って行った。んー、2・Aが素直なんじゃなくてももしかして学校全体の生徒が素直なんじゃないのか？

高等部の生徒たちが行ったのを見送ると後ろに回した2・Aの面子に向かい直る。

「怪我はないか？」

「う、うん」

「皆さん怪我はないようですわ」

「まったく、面倒かけさせるんだから…」

「む、でも草薙先生！先にちよっかい出してきたのはあっちなんですよー！」

「それでも先に手を出したら負けだ。いきなりボールをぶつけるんじゃないくてできる限り話し合いで解決するよう努力するべきだぞ？」

「う…それは…」

「アスナさん、草薙先生の言うとおりですね。私が付いていながら、申し訳ありませんでした」

「う、ごめんなさい」

雪広が頭を下げると神楽坂も俺に謝った。

「よしよし。分かったなら行ってよし。あ、それと大河内！」

「は、はい」

「さっきボール受け止め損ねてたろ。一応保健室行っておけよ」

「え？」

「それから…ネギ先生！」

大河内の疑問そうな声には答えず、俺はネギ君を呼び寄せる。

「は、はい。なんででしょう草薙先生」

近寄ってきたネギ先生に軽く一括いれるとするか。

「先生があんなことでどうする。来たばかりで慣れないというのはしょうがないが、もう少し毅然とした態度を取るようにな」

「は、はい。精進します」

「よし、これでこの件は終わりだ！ほれ、そろそろ戻れ。次の授業に間に合わなくなるぞ」

一回だけ手を打ってそう言つと「はい」と言いながら全員校舎に戻っていった。

「ふう」

言葉だけで抑えるつてのは大変だな。まあ女の子をさつきみたいに殴つたり蹴つたりするわけにはいかないから俺にもいい経験か。

「やればできるじゃないか」

「うお！高畑先生!？」

いきなりの背後からの声に俺はおもわず飛び上がる。

「次からもその心得をわすれないようにね」

「努力しますよ」

それだけいって高畑さんも校舎に戻っていった。

さて、俺も戻るか…

そう思つて歩こうとした瞬間。

ぐんぐんぐんぐんぐんぐんぐんぐんぐんぐんぐんぐんぐんぐんぐんぐん

俺の腹が悲鳴を上げた。そういえばなににも食ってなかった。

「はらへったなー…」

もう食っている時間も無いし俺はそのまま授業に出ることにした。結局授業中は腹が鳴り捲って生徒にはかなり笑われた。

はあ、今日は疲れるな。もうなんも起きなきゃいいんだが…

俺のそんな小さな願いが通じたのか今日一日は特に何も起こらなかった。

ただ、それは俺の周りだけで、後で高等部の生徒たちと2・Aがドッジボールでひと悶着あったことを俺は知らされる。

S i d e o u t

テストの為に… 前編（前書き）

追記、 6月21日修正

テストの為に… 前編

Side 草薙 亮

期末試験も近づいてきたある日。俺は一人学園長室に呼び出された。

「どうかな？ネギ君の様子は…」

「そうですね。10歳としてはよくやってますよ。歳が近いぶん生徒とも打ち解けてるようですし、教え方なんて俺より上手いくらいです。ただ…」

「ただ？」

「なんていうか…違和感と言うんですかね？これは俺の勘ですが、試験で先生をやっているからかもしれない」

「そうか、そうするとやはり最終課題は必要じゃのう」

「最終課題…ですか？」

「そうじゃ、ネギ君も随分クラスになじめておるようじゃし、4月から正式な先生としても問題はあるまい。ただ『立派な魔法使い（マギステル・マギ）』を目指す者として何事にも極めるくらいの勢いは欲しいところじゃ。それで君から、この課題の書かれた紙をネギ君に渡しておいて欲しいんじゃ」

「はあ、そのくらいならお安い御用ですが」

学園長から小さい手紙を預かる。表には『デカデカと』ネギ教育実習生最終課題』と記されている。

「では、お預かりします」

「うむ、たのんだぞい」

学園長室を出るととりあえず教室に向かう。期末試験が近いせいでどこのクラスもピリピリしている。

2・Aに続く廊下に入ったとき、ちょうど角からネギ君が現れた。

「お、ネギ先生」

「あ、リョウ先生。おはようございます」

「ああ、おはよう」

「草薙せんせい、おっはよー!」

「ちーっす!」

「ああ、ふたりともおはよう。明石、先生に向かってちーっすはな
いと思うぞ?」

ネギ君の後ろには椎名と明石がいた。日直ノートを持っているので恐らく今日の日直なのだろう。

「あ、二人とも先に教室に行ってくれ。俺はネギ先生に話がある」

「えー、内緒話？」

「ずるいずるーいー！」

「仕事の話だ。聞いててもつまらんぞ」

「ちえー」

「じゃあ二人とも。私たちは先にいつてるねー」

何でも興味持つのはいいことだが好奇心は猫をも殺すって言うぞ二人とも。特に魔法についてはな。

「で、お話ってなんでしよう」

「ああ、学園長からこれを預かっている。確認してくれ」

俺はそついうと預かっていた手紙をネギ君に渡した。

「さ、最終課題！？」

んー、びびってるびびってる。そんな顔しなくてもあの学園長のことだから変な課題なんだろうけどなー。

ネギ君が手紙を開けるのを見て俺も後ろから覗き見る。

『ネギ君へ。次の期末試験で2-Aが最下位脱出できたら正式な先生にしてあげる。近衛 近右衛門』

.....

「な、なーんだ！簡単そうじゃないですか！びっくりしたー！」

「ん？これだけなのか？」

あの学園長が出すには随分簡単な課題だな。しかしまあ妥当ではある。学生の本分はなんと言っても学業にある。いくら授業が出来て、生徒と慣れ親しんだとしても生徒の成績が悪いのでは意味がない。それではただの友達ごっこだ。

実際にかんばるのは学生自体だがどう上手くやる気を引き出すことや、要領よく教えられるかなどは非常に重要だろう。

「まあ俺も可能な限り手伝わせてもらおうよ」

「は、はい！よろしくお願いします」

ネギ君はどうやら気合が入ったようだ。しかしこんな温い課題って…

ん？さてよ。そういえば2・Aってテスト毎回最下位なんだっけか？

こりゃ思ったより苦戦するかもな。

そう考えたら期末試験まで後3日の時点でこの課題を出すあたりやはり学園長は狸なのかもしれない。

てか無理じゃね？

いつも以上に気合の入ったホームルームが始まる。

「分かってると思います。が来週から期末試験ですね…」

ネギ君。それはもう3回目だ。そしていい加減現実逃避している奴らは現実を見る…

以前成績を確認したことがあるがこのクラス、決して頭が悪いわけではない。むしろ学年トップ10以内が3人もいるのでこの条件だけ聞いたら最下位を取るほうが難しいと思うのだが、それを見事に打ち消し、尚且つマイナスにしている5人組がいる。

通称麻帆良のバカレンジャー

バカブラック綾瀬夕映、バカレッド神楽坂明日菜、バカイエロー古菲、バカピンク佐々木まき絵、バカブルー長瀬楓だ。

そういえば俺の授業の小テストでもこの5人抜群に成績が非常に悪かった。

現在もあさつての方向に目を向けたまま前を向こうとしないのも主にこの5人だ。

何故本の虫の綾瀬が入っているのか前気になって聞いてみたことがあるが、本人曰く勉強が嫌いらしい。別にやるのが苦なのではなく他のことをやっているほうが楽しいしためになるからだと言う。

まあ分からなくはないがな。実際中学の勉強なんて英語以外は基礎以外使わないことが多い。

ホームルームが終わったあと、俺はとりあえずあの5人用に特別

テストを作ること考えていた。

Side out

Side 近衛 木乃香

大浴場『涼風』

「ねえこのか聞いた？」

頭を洗っているとハルナが話しかけてきた。

「なんえー？」

「ネギ君があんなに気合入れてた理由」

そう言えばなんか今日のネギ君は気合はいつとたなー。

「噂だと最下位のクラスは解散らしいよ」

「え、ハルナそれ本当なん？」

それが本当だとしたら大変やん！

「一応噂程度の話ですが」

「あ、ゆえ。いつの間に」

「あー、私もいます」

いつの間にかゆえとのかか後ろにいた。

「まあそうんだけど結構確かなことらしいよ」

「それって一大事やん！アスナー、アスナー！大変やー！」

急いでアスナのいる浴場に歩き出す。

「なに？このかー」

「お、ちょうどバカレンジャーそろつとるな。反省会か？」

「反省会ってなんの？」

「試験のにきまとるやんか」

「なんでそんなことしなきゃいけないのよ」

「あら」

思わずがくつときてしまった。「ここまでくると何かこつちがアホみたいやなー」

「実はウワサなんやけどな…次の期末で最下位を取ったクラスは…」

「えーーーーーーー!!」

「最下位のクラスは解散ー!?!」

や、やっと自体の深刻さが分かってくれたみたいや。一応ここは発破をかけておこか。

「なんかおじ…学園長が本気で怒っとるらしいんや。ホラ、ウチらずっと最下位やし…」

「その上特に悪かった人は留年!!どころか小学生からやり直しとか!」

ちよ、ちよっとハルナ。さすがにそれは…

「ちよ、ちよっと待つてよー!!!」

「そんなの嘘よーーーーー!!」

あ、信じてる…さすがバカレンジャーやな。よし、ここでもう一回押しや。

「今のクラス結構面白いしバラバラになんのイヤやわー、アスナー」

よし!これでいくらアスナでもやる気を出してくれるはずや!アスナはやる気さえ出せば出来るんやからこれで…

「ここはやはり…アレを探すしかないようですね」

ん?ゆえがなんか言い出したけど…アレってなんやろ?

「実は図書館島の深部に読めば頭の良くなる『魔法の本』というものがあらしのです」

魔法？あー、そんなんあつたなー。なんや胡散臭い感じやなーってあんまり興味湧かんかったけど。

って占い研の部長のウチが言ってもあんまり説得力ないな。

「大方出来のいい参考書の類だとは思いますが…それでも手に入れば強力な武器になります」

なるほどー、参考書か。確かにそれなら納得やけど、なんで魔法っていうんやろう？

「もー、夕映つてば。あれは単なる都市伝説だし…」

「さすがに魔法なんてねー」

「あー、アスナはそういうのぜんぜん信じないんやっただなー」

あれ？アスナがなんか震えてる？なんで？

そう思った瞬間アスナが立ち上がった。

「行こう！図書館島へー！！」

「エ…」

あー！やる気の変な方向に向いてしもたー！

「でも今から行っても図書館しもってるし、間に合わへんのや

ないか？」

「何いつてるですかこのかさ。私たち図書館探検部しか知らない入口からなら今の時間でも入ることは可能です」

ゆえのばかー！

「よし！そうと決まったら善は急げって言うし、早速行くわよー」

「「「「オーーーーーー！！」「」」」

「お、オー」

.....

麻帆良学園図書館島

うう、結局来てしもうた。一応ゆえとウチが付いていくから大丈夫矢とおもっけど…途中からウチらも入ったことのない場所がたくさんあるしなー

「で、なんでアスナはネギ君を連れてきたん？」

準備するといっって解散した後アスナはネギ君をパジャマのまま連れてきていた。

んー、眠そうにしてるネギ君もかわええなー。

「え、えつとほら！一応先生がいたほうがいいかなって思ってた！」

「そうか？逆にバレたらまずいと思っんやけど…」

「ま、まあいいじゃない！ネギもここ初めてだし！案内ついでで、
ね？」

なんであんなに焦る必要があるんやろ？

「それじゃあのだか、ハルナ。連絡と案内たのむえ」

「わ、分かりましたー」

「まっかせなさい！」

とりあえずのどかとハルナを上にも連絡と案内として残す。

場所によっては地図を確認できる場所がなかったりするからしよ
うがないな。

あれ、アスナがなんかすごい慌ててるけどなんかあったんやろか？

「ではいくですよ皆さん」

「「「「おーーーーー！！」」」」

ま、一応久しぶりの活動やからウチも楽しみなんやけどな。

S i d e o u t

S i d e 草薙亮

ピピピピピピ...

んー、誰だよ寝てるのに…今何時…ってまだ夜の11時じゃねえか！

無視しようとも考えたけど警備の仕事だったらまずいから一応出るか。

「はい草薙です」

『あー！よかつた草薙せんせー！』

「あ？早乙女か？なんだよこんな時間にー」

この間連絡先を教えた早乙女からだ。察なら直接来たほうが早い気がするんだが・・・

「い、いいから今から図書館島の前にこれる！？」

電話の相手は早乙女だった。随分焦っている。

『今から？一応大丈夫だけど…お前何してんだ？』

「いいから早く来て！お願い！」

『お、おう分かった。じゃあ切るぞ』

「うん！」

一体なんだってんだ…って厄介ごとに決まってるか。とりあえず素早く動きやすいジーンズとTシャツに着替えて使えそうなものをリュックに突っ込む。

いつもの要領で足に気を溜めて跳躍。

図書館島はここからなら全力で3分だな。

「はー！」

気合の声とともに速度を上げる。

…

ほい到着つと！

さすがに跳躍を見られるわけには行かないので橋の辺りからは走る。図書館の入口では早乙女と宮崎が焦りながらこっちを見ていた。

「はやー！」

「おいおい、お前が急げって言うから急いできたのにその言い草はないんじゃないか？」

「う、ごめん。とりあえずこっち来て！」

「お、おう」

早乙女に引つ張られて図書館島の裏手に連れて行かれる。そこには洋風の崩れかけた入口があった。

「ほー、こんなところあったのか。で、そろそろ何があったか話してくれるよな？」

「う、うん」

早乙女と宮崎の話を総合すると貴重な参考書（魔法の本つてのはさすがに伏せてるか）を探しにバカレンジャーとこのか、それにネギ君が地下に入ったがある場所から通信が途切れてしまったらしい。焦って誰か助けを呼ぼうとしたがこんな時間で俺以外で電話できる人がいなかったらしい。

つかもうとつくに門限だし…

「まあなんとというか…」

「う、ごめんなさい」

宮崎が頭を下げてくる。いや、頭下げられてもなあ…

「あー、事情は分かった。つまりは俺以外に黙って助けてくれそうな人がいないとそういうことだな？」

「そ、そう！」

早乙女の思わずため息が出る。ま、厄介ことには慣れてるけどな。

「分かったよ」

「えー！」

「宮崎も頭を上げる」

「は、はい」

「いいか、この件は俺に任せてお前らは寮に戻れ」

「で、でもー！」

「いいから！もう時間も遅い。お前らまでなんかあったら呼ばれた俺が馬鹿みたいじゃないか」

そういうと二人は少し寂しそうにならずいた。

「よし、地図はあるか？」

「い、一応途中までだけど…」

早乙女が差し出してきた地図を受け取りポケットに突っ込む。

「いいか。あいつらを見つけて連絡が取れるようになったら必ず連絡する。だからお前らは帰って勉強してろ」

「う、うん。分かった」

「あの、草薙先生…よろしくお願いしますー！」

宮崎の言葉を聞いて俺は図書館島へと足を踏み入れた。

地下に降り立つとそこはまさに本の山というほどの本、本、本だった。

「おおー、こりゃすげえ」

つかこれ作った奴はなに考えてんだ……明らかに普通の人じゃ取れない位置や滝の裏側に本がある。

大丈夫かどうか確認するため一つ取ってみると本自体は全く濡れていない。これも魔法なのだろうか？

「おと、いけないいけない。さっさと追いかけねえとな」

そういうのは後回しだ。

右手に魔力を集中。

「来い！騎士！」

その魔力を解き放つと光とともにエクイスが現れた。

「お呼びですか？我が王よ」

「エクイス、状況は把握できているか？」

「問題ありません」

さすが俺の中にいるだけはある。たぶん全員把握しているはずだ。機動力でこいつに勝てる奴はおそらくいないはずだ。

俺が自分で地図を見ながら行くよりエクイスに連れて行ってもら

ったほうが明らかに速い。

「よし、じゃあこの地図どおりに俺を連れて行ってくれ」

「分かりました。では手を出してください。全力でいきます!」

そうやって俺が手を掴んだ直後世界が反転した。

「おおおおおおおおお!?!」

手が!手がもげる!と言うか重力が!Gがああああああ!

「大丈夫ですか!?!」

「大丈夫だ!全力でいけええええええええええええ!」

「は、はい!」

気遣ってくれるのはありがたいが今はそんなことを気にしてる場合じゃない。

そういう状況が10分ほど続いただろうか?急に体にかかるGが消えた。

「エキイスどうした?」

「ここからは貴方を連れて行けません」

見ると道は極端に狭くなっており一人が伏せて通らないと通れないくらいの通路だった。

「分かった。ご苦労さんエクイス」

「いえ、お役に立てて光栄です」

そういうと俺はエクイスを体の中に戻す。

俺はそのまま伏せてそこに入り込んだ。つかこんなところにまで本があるよ。本当になに考えてんだ

明らかに複数の人が通った後がある。こんだけ埃が積もっていれば素人でも追跡できるというものだ。

しばらくそのまま進むと上部から明かりが漏れていた。そこを押し上げると

「おおっ…」

なんとというか…RPGのラスボスが出てきそうな石造りの部屋にたどり着いた。

剣をもった巨大な石像があり、中央の台座を守るように立っている。反対側にも同じような台があるのでもう一つ同じのがあったはずだ。その前には巨大な穴の開いた台座があった。

「ふむ、ここから落ちたか」

「つかなに考えてんだか…」

「学園長！見てるんでしよう！？」

『ふおおおお！気づいておったか！』

俺が言つと目の前の石像が動いた。

「こんだけ大掛かりな仕掛けが学園内にあったらそりゃ疑いますて」

『ふむ、確かにそうかもしれんの』

「で？説明はしてもらえますよね？」

『さてー、どこから話したものが…まず課題のことはしっておるの』
『？』

「そりゃ俺が届けましたからね」

『うむ、ではこの図書館のウワサをしっているかの？』

「いえ、それは知りません」

『図書館探検部には『読めば頭が良くなる』魔法の本』がある』と
いうウワサがあつての。それを頼るようなら仕置きをせねばならん
と思つての』

「なるほど、まあそりゃそうですね」

つか安易に付き合つてきちゃう時点でどうなのよ…ネギ君…

「つか仕置きつてこの穴結構深いけど大丈夫なんでしょうね？」

『そこは心配いらん。ちゃんと怪我しないように仕掛けをしておる
わい』

「そうですね」

『まあ正規ルートでの脱出には3日かかるがの』

「アホですかあんたわー！」

期末試験間に合わんじやないか！

『大丈夫じゃ。下で勉強してれば一時間で脱出できるようになっておる』

「この状況で勉強て…」

『もちろんその対応もしておる。暖房冷房完備！く明るい空間！全教科のテキストにトイレにキッチン、食材も完備！これ以上勉強するのにいい環境はないというほどの環境を整えておる』

「でも普通の本もあるんですよね？」

『それは図書館じゃからの』

「それって本読んで勉強しないんじゃないやありません？」

『…まあそこはネギ君の腕の見せ所と言つことじゃな』

爺さん絶対考えてなかつただろ…

「はあ、不安だから俺も行きます」

『ひょ！？それは助かるのう。いくらテキストがあるといつても先

生が二人いるといたいでは大違いじゃからの』

「でもやり過ぎは勘弁してくださいよ」

『分かった分かった。考慮するわい』

「ではここを降りればいいんですよね？」

『エレベーターと階段もあるが？』

「そっちが裏のルートですか」

『まあ』

「どっちにしるこつちから降りたほうが速いです。怪我はしないんでしょっ？」

『うむ。あ、それとあまり手助けしすぎんようにの。これはあくまでネギ君の課題じゃからの』

「分かってますよ。後のことは頼みます」

それだけ言うと学園長が何か言う前に俺はその穴に飛び込んだ。

「うおおおおおおおおおおおおお！？」

思った以上に深い！本当にこれ怪我しないんだろうな！？つかなんか俺今日叫びまくってるような気がする！

空中を泳ぎながら壁に近づくと木の根が多数生えている。しかしこの勢いで掴んでも千切れるだけだろう。

「あ、そうだ」

ふと思いついた行動を試してみる。両手に気を集中。手袋をかぶせるようなイメージだ。そして壁を…掴む！

気で強化された手は易々と石の壁に突き刺さった。しかし勢いは止まらず石の壁を削りながら俺の体は落ちていく。

「痛でででで！」

さすがに全体重を両手の五指にかけるのは負担が多すぎた！それでも下のほうが明るくなってきた。そこで壁も切れている。

ズボ！

という音とともに俺の体は再び宙に浮いた。

「またかよーーーーー！」

今度はそんなに落ちなかった。

ドボン！

下は水が張り巡らされていたからだ。こういつことかよ。つかさずがに水とは言えあの高度から落下したら痛い！

「げほげほ！」

咽ながら陸に上がる。

しかしこりゃあ…確かにすごいな…

地下であるのに壁が光っていてその明かりのおかげで全体が明るい。気温も人が最も過ごしやすい気温だ。確かにこりゃあ楽園だわ。

「誰か落ちてきたネ！」

ん？この声古菲か？

「草薙先生でござるな」

今度は長瀬か。

「よう、お前ら。元気そうだな」

.....

「かくかくしかじかって訳だ」

ネギ君たちと合流した俺はこれまでの話をした。当然学園長の降りには省いているが。

「そついえばのどか達には心配かけてしもたな」

「まあとりあえず言っておいたから大丈夫だ。お前らは安心して勉強してろ」

「……はい……」

「あ、あの草薙先生」

「どうしたネギ先生？」

「草薙先生が授業をしたほうがいいのでは？」

やっぱり不安があるのだろう。まあ確かに10歳でこの重圧はきついかもしれないが

「このクラスの担任は君だ。それに……」

頭を撫でてやる。

「君の最終課題だ。俺はサポートに回るよ。教え方は君のほうが上手いからね」

「エ……」

「悔しいが君の教え方は俺より上手い。大人しくサポートに回るぞ。ついでに出口も探しておく」

「は、はい！ボクがんばります」

褒められて嬉しかったのかネギ君が気合を入れた。

「あー、近衛！」

「なんえー？草薙先生」

俺はこのかを呼び寄せた。

「お前は食材の調理を頼む。俺はあまり料理が得意じゃないからな」

「ウチは勉強しなくてもええん？」

「このかは学年でもトップクラスだったからな。全くするなと言わないが大丈夫だろう。それより他の奴に思い切り精の付く奴を頼むぜ」

「そうなんかなあ？それなら皆を応援するほうに回らせてもらおうかな？」

近衛はいつもの口調で皆の横で授業の準備をし始めた。

さて、俺も食材探ししますかね。

学園長のことだから出口は見つけやすいところにあるだろうし後でもいいだろう。

S i d e o u t

テストの為に… 前編（後書き）

えー、文章構成上前編後編に別れることになりました。すいません。これも作者の文才の無さを実感させるものです。

はじめてこのかを出したので京都弁をちゃんと出来てるかどうか非常に不安です。間違っているようでしたらご指摘ください。

次は明日の同じくらいの間帯には載せるつもりです。ではではノ
シ

テストの為に… 後半（前書き）

追記、 6月23日修正

テストの為に… 後半

Side 草薙亮

地底図書室に入ってから丸一日。俺が入ったのが土曜日になった直後だったから今は日曜日だ。

地底図書室自体は明るさが一定に保たれているため時間間隔が狂いそう。時々携帯を見て時間を確認する。

「もう昼か…そろそろ脱出の準備をしないとな」

ちなみに出口は滝の裏側にあつた。思いっきり施設の非常口みたいなマークがあつたのは学園長の遊び心だろう。

中は見えていないが恐らく階段になっているはずだ。ここは地下深いが一直線なら数時間で上りきれんだろう。

俺の仕事はこれで主に食材探しと歴史の授業になったわけだが食材なんて何故か冷蔵庫があり、しかも食材も豊富に揃っていたため大してやる事が無かつた。

残りは歴史の授業だが歴史なんてのは結局暗記だ。一応語呂合わせで覚えると言う手もあるがどうしても覚えにくいのは最終的に自分の暗記力になる。

「よし、今日の俺の授業はここまでだ！」

俺が終わりの合図を出すと全員が机（と言う名の箱）にへたり込む。

「や、やっとおわたアルよ…」

「く、草薙先生の授業きついよー」

古菲と佐々木が文句をたれるが一切無視。というより文句を言ってる割には付いてきているんだから大したもんだ。この集中力を多少なりとも通常の授業時に生かせればな…

「本に囲まれてあったかくて、ホント楽園やなー」

歴史が完璧だった近衛が寝転がりながら本を読んでいる。俺は最初に小テストをやって合格点ならば授業は受けなくていいと言う形式を取っていたためだ。受かったのはこのかだけだったけど。

「一生ここにいてもいいくらいです」

って綾瀬！？さっきまで一緒に授業を受けてたはずなのにいつの間にか近衛の横で一緒になって本を読んでいる。

「コラー！ゆえも勉強しなよー！」

佐々木が言うことももつともだ。お前そんな余計な知識詰め込んでテストできなくなっても俺は知らんぞ。

あれ？ネギ君はどこいった？

一旦休憩を挟んだら後はネギ君の仕事だ。俺の仕事は歴史のみ。そっとう約束だ。ちよつと今回の出来を報告して打ち合わせしたいのに…

「おーい、ネギ先生ー」

ちよつと歩くと砂場に小さな足跡を発見した。この大きさは間違
いなくネギ君のだな。

お、なんか向こうのほう騒がしいな。

「げっ…」

そこには長瀬に首根っこをつかまれてまき絵と古菲に囲まれてい
るネギ君がいた。

まあそれだけならいいんだが問題はその3人の格好だ。水浴びを
していたのか3人はタオルを巻きつけているだけだ。

「女の人の体には全然興味ないですからー！」

おおう、言い切ったなネギ君。しかしそれは中学生に言ったら…
ああ、やっぱり凹んでる。流せはそんなに気にしてないみたいだけ
ど。

「じゃ、じゃあそういうことで！」

ネギ君はそういうと走って行ってしまった。魔法使わなくても十
分早いじゃん。

「はあ、先生つつつてもまだまだ子供だなやっぱり」

「で？そういう草薙先生はなにをしているのでござるか？」

…いや、ナンデモナイデスヨ…

なんて言おうと思って不可能なことに気づく。いつの間にか俺は3人に囲まれていたからだ。

「あー、一応聞くけどさ…」

頭をかきながら言う。

「弁解って聞く気ある？」

「「「ない(アル)(でいやる)」」」

「ですよー！」

結局俺は100mくらい吹っ飛ばされた。高畑さんとの戦いでもここまで吹っ飛ばされたことはないぞ…恐るべし女子中学生パワー…

.....

「ひでえ目にあつた…」

ていうか俺は吹っ飛ばされてネギ君はあの扱いってひどくね!?!?これが大人になるってことなのか…

とりあえずもう夕方の時間帯だ。そろそろ地上に戻らなければならぬ。

「結局ネギ先生と話せなかつたしな…」

「キヤーーーーーーーー！！！」

そんなことを考えていると先ほどの場所からまき絵の叫び声が聞こえた。

「な、なんだ!?!」

地面を蹴り一気に跳躍。上から一瞬だが様子を見る。

上で見たゴーレムとは武器の違うゴーレムに佐々木がつかまっていた。

ネギ君が佐々木を助けるために魔法を唱え始め…ってあのバカ!

「くらえ!魔法の矢!」

ゴーレムが一瞬怯んだようだが何も起きない。そりゃまだ封印とけてないんだから当たり前か。そりゃまだ封印と

つかあれやっつたらここにいる全員に魔法ばれてたじゃねえか!秘匿する気あるのか!?

「全員無事か!?!」

跳躍から一気にゴーレムと全員の間に着地する。

「く、草薙先生!?!」

「い、今飛んできた!」

良かった。俺の登場で魔法に関する意識は消えたようだ。

「それは後回しだ！！まき絵を助けるぞネギ先生！」

「エ…でもボク魔法使えないんですよ！」

「魔法？」

だから魔法のこと言っなって言っってたろー！

「あ、みんな、あの石造の首のところを見るです！」

た、助かった…綾瀬のおかげでまた誤魔化せた。言われた部分を見ると首と肩の間に何か辞書みたいな本が引っかかっている。

あれが探しに来ていた魔法の本か。

「本をいただきます！」

おおう、この状況でマジかよ。もしかして原作にはなかったけど綾瀬も戦えるのか！？

「まき絵さん、クーフェさん、楓さん！」

「OK！！バカリーダー！！」

やっぱり人頼みかよ！

団結力早いし…

「中国武術研究会部長の力！見るアルよー！」

そついいながら古菲が石像に突っ込む！

「ば、ばか！不用意に近づくな！」

俺が注意したときには既に古菲は石像の足元に入り込んでいた。
早い…確かにあれだけの速度があつて相手があの大さなら懐に入り込んだほうが有利だ。

「ハイッ！」

気合の声とともに放たれた拳が石像の左足に巨大なヒビを入れる！

「すげえ…」

バランスが崩れたところにまき絵の捕らえられている右手にとび蹴りをして解放、いつの間にかその場にいた長瀬が佐々木を抱きかえた。

なんちゆう連携だ…なんの打ち合わせもなしでここまで息を合わせられるのかよ…

しかもどこから出したのか佐々木がリボンで首もとの本を絡め取った。もはや人間技じゃねえ…

「きゃー！魔法の本取ったよー！」

「よ、よし！全員走れー！」

「言われなくても！」

確かに俺が言う前に全員背を向けて走り出している。

『待つんじゃないー！』

学園長…せめてそのしゃべり方は変えたほうが良いぞ…こいつら
じゃなかったら多分ばれる…

『出口は見つからんと言っておるじゃろーが！諦めてつかまるのじ
ゃー！』

おいおいそりゃあ…あるって言ってるよつなもんだろ。さて、そ
ろそろ時間も無いことだし。

「全員滝の裏側にいけ！さっき非常口があった！先は確認していな
いがそこから出られるはずだ！」

『ふお！？』

「それだ！」

一気に全員が滝の裏側へと走り出す。

「あつた！これです！」

綾瀬の声が聞こえる。どうやら無事に見つけたようだ。さて、後
はお前らの成果の見せ所だぜ。

「う…なにこれ！」

「扉に問題が付いてる！」

また面倒くさいものを仕掛けるな学園長！仕掛け的には単純のはずだから問題を解けば扉は開くはずだ。

「む！これ分かるアルよ！」

今まで石像の足止めをしていた古菲が一目見て問題の答えを言い放った。

「あ、開いたー！」

「みんな早く中へー！」

全員が一斉に中へ入り込む。結構ギリギリだ。といっても捕まえる気はないだろうが自分の何倍もの質量が追ってくるというのは精神的によろしくない。

「うわ、何これ！？」

先頭を走っていたアスナの声が聞こえる。

「ら、螺旋階段！？」

「これ上まで登るん！？」

俺もたどり着いて上を眺めるとはるか頭上に小さな光が見え、円状の空間を端っこに永遠とも思えるほどの階段が続いている。

「皆さん！早く登りましょうー！」

ネギ君が先頭に立って走り出す。全員がその後が続いた。

一階分登りきったところで石像が壁を付き破って入ってきた。

「ゲエ！」

さすが学園長無茶しやがる。

『ならぬならぬ！本を返すのじゃー！』

おおっ、無理やり階段を登ってきやがる。この薄さで壊れないってことはこの階段も魔法でできてんのか？

「べーっだ！」

「もう返さないあるよー！」

佐々木と古菲が振り返ってあかんべーとしている。本来なら可愛い仕草なんだけど。

「さっさと登れつつのー！」

「「キヤー！！」「」

意外と石像の足が速いので二人とも俺が急かすと叫びながら登っていく。

「また石の壁と問題が！」

「今度は数学ー！？」

ほれ、がんばれがんばれ！

「ぼ、ボクがときましようか！」

いや、君がやったら意味ないだろネギ君。

「んー、x||46。かな」

今度は長瀬が答えた。ほう、中々身についてるみたいじゃないか。その後はこれの繰り返しだ。石の壁に書かれた問題を神楽坂たちが交代で解いていく。

「すごいです、バカレンジャーのみんな！」

ネギ君の言葉に俺も同意する。確かにすごい。3日前と同じ人物とは思えない。バカレンジャー卒業も近いかもしれない。

「あっ！」

そう思ったとき綾瀬が転んだ。

「夕映ちゃん！」

どうやら突き出していた木の根に躓いたようだ。俺は一息に近づいて足の様子を見る

「く、草薙先生／＼／」

「黙ってる！」

まあ行き成りストッキングを捲られて恥ずかしいのは分かるが今

は悠長に脱がしている暇なんてない！軽く押して調子確かめる。

「痛いかな？」

「は、はい」

「ダメだな、挫いてる。走るのは無理だ」

右足の見たい目は酷くないが時間がたてば腫れてくるだろう。

「くっ！ネギ先生、草薙先生、皆さん！先に行ってください！この本があれば最下位脱出は……」

「おいおい……」

「だ、ダメですよ夕映さん！」

俺が何か言う前にネギ君が綾瀬を背負う。

「ぼ、ボクがおぶっていきます！」

「大丈夫かネギ先生？」

「だ、だいじょうぶ……で……あつ」

つぶれてしまった。やっぱりだめか。いくら綾瀬が小さくてもネギ君はそれ以上に小さい。背負っていくのは無理がある。

「俺が連れて行く」

俺はネギ君の背中から綾瀬を抱き上げた。一般的なお姫様抱っこ
と言っ奴だ。

「あ、ありがとうございます…」

「く、草薙先生お願いします」

「おう！任された！」

そついつと俺たちはまた走り出した。

Side out

Side 綾瀬夕映

お、男の人に抱きかかえられるなんてされるなんて初めてです…

しかしもう登り始めて一時間以上経ちます。さすがに草薙先生が
大人の男の人だとしてもつらそうな顔をしています。私のせいで…

「草薙先生。だいじょうぶですか？」

ふと私はそんなことを口にしていた。

「あ？」

草薙先生は階段を見たまま私のほうは見ません。

「お、下ろしてもらってもいいのですよ」

本当はいやです。こんなところに置いていかれたらきつとあの石像に捕まってしまうます。でも私のせいで逆に草薙先生が捕まるよ
うなことになれば

「あのなあ…お前らはそんなこと気にしなくて良いんだよ」

相変わらず前を向いたままそう言ってきました。今おまえらって
言いましたか？

「中学生なんだから大人には甘えてろ。その内そんなこと出来なく
なる。俺のこと心配するくらいなら頭の中で復習でもしてろ」

「は、はい…」

そう言われては何も言い返せないではないですか。ずるいです。

「あ…」

ふと見た携帯電話が圏外から電波ありの状態になりました。地上
が近い証拠です

「どつした綾瀬？」

「け、携帯の電波が入りました！」

「なに！」

「地上は近いです！助けを呼ぶので皆さんがんばって！」

携帯電話をかける。相手はもちろんのどかです。

「あ！皆さん見てください！」

先頭のネギ先生が前を指しています。

「地上への直通エレベーターですよ！」

「こゝ、これで地上に帰れるの！？」

なんと…これも神の思し召しと言うものなのでしょうか。無事に戻れたらキリスト教にでも入ってみるのもいいかもしれません。

「みんな！急いで乗って！」

最初にたどり着いたアスナさんたちがエレベーターを開けています。

「だああ！」

エレベーターに入った瞬間草薙先生が崩れ落ちました。エレベーターの中には他と同じで圏外のようにまた携帯が使えなくなりましたがもうそんなことは関係ありません。

「だ、大丈夫ですか…！」

「だ、大丈夫…ちょっと息が…上がっただけ…俺の心配よりも」

やっぱりそう言うんですね。全く…ネギ先生といい貴方と言い…

「はい、テストの心配をします」

私がそう言うと草薙先生は満足したように壁にもたれかかりました。

「よし乗った！」

「やったー！地上1FへGO！」

でも本も手に入れて全員無事で地上へ帰れる。我々の大勝利ですね。

ビーーーーーーー！！

『重量OVERデス』

「な！」

「い、いやあああああああ！！」

重量オーバー！？ここまで来て！？

「まき絵さん！今何キロです！？」

「わ、私は痩せてるよ！それを言うならアスナや長瀬さんのほうがー！」

まき絵さんの言つとおりかもしれない…しかし誰かが降りるなんて…

「だ、誰か降りなきゃいけないわけ!？」

「と、とりあえず持つてるものを全部捨てるのよ皆!」

アスナさんが服を脱いで持つてるものも全てエレベーターの外に投げ捨てました。

「し、仕方ありません…!」

ネギ先生や草薙先生の前ですが背に腹は変えられません。

草薙先生とネギ先生以外服と持ち物をエレベーターの外に投げましたが…

「やっぱりダメアルー…!?!?!」

「もー捨てるものないよー!あとちょっとなのにー!」

ブザーが鳴り止みません!

『ふおふおふお!追い詰めたぞよー!』

こゝ、この声は!

見ると先ほどの石像がもう頭が見えるところまで来ています。

「あ…!」

見るとネギ先生がエレベーターを降りていました。

「ね、ネギ先生！なにを！」

「ボクが降ります！皆さんは先に行って明日の期末を受けてください！」

「エ！」

「ネギ！だってあんた魔法が…」

「た、確かに生徒を守るのが先生の義務かもしれませんが何もそこまで…」

「動く石像め！ボクが相手だ！」

「ネギくーん！」

「ネギ坊主！」

「い、いけません！やはりそんなことは！」

『ふおふおふお、いい度胸じゃ！くらえー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！』

「ああ！ダメです！間に合わない！」

「石像の腕がネギ先生を…」

「つたく…なにやってんだか…」

「捕まえる前にネギ先生がエレベーターの中に投げ込まれました。」

「お前が先生になれるかどうかの課題なんだぜ？お前が見届けない
でどうするよ、ネギ先生」

いつの間にか草薙先生が入口のところにおいてネギ先生を引っ張っ
たようです。

「く、草薙先生！？」

「アスナ。そのアホを上まで連れて行け」

「う、うん！」

「でもこのままじゃエレベーターが！」

「「うううのはな……」

そういうと草薙先生は…

「大人の仕事だ」

扉の閉まるボタンを押しながら外に出ました…

「そのエレベーターは結局俺と本の分だけ重い！ネギ先生が出ても
動かんよ！」

いつの間にか魔法の本も持っています。

「く、草薙先生！」

「ネギ先生！そいつらのことを頼むぞ！」

そういつとエレベーターのドアが閉まりました。

「は、早く開けて!」

「ダメや!草薙先生が押したあと壊してしもたみたいでボタンおせへん!」

「そ、そんな…」

エレベーターが無常にも上へ上がり始める。

「も、戻ってください…」

「ゆえ?」

気づいたらそんな言葉が私から出ていました。

「戻して!私が変わりに!」

「ゆえ、ちよつと落ち着いて!」

「そ、そうだよ!どの道だれか降りなきゃ動かなかつたんだよ!」

「それなら私が!」

「夕映さん、これは草薙先生の望みなんですよ」

「ネギ先生?」

「ボクも先生だから分かるんです。僕たちは先生で…生徒を守らなきゃいけないんです」

「だからってあんなこと！」

そう先生だからって犠牲になっていいわけではない！

「確かに！普通ならそうかもしれません」

「だったら！」

「でも、あの人はそれを選んだんです！僕たちを無事に地上に戻すために残ったんです！僕たちは…彼の思いに答える義務があるんです！」

「う…」

「それとこれはボクの勘ですが…草薙先生は貴方たちが好きなんですよ」

「え？」

「命を賭けてもいくらい貴方たちのことが好きなんです。僕も…そうですから」

ネギ先生も…草薙先生もずるいです…言い返せない正論ばかり…

「それに…草薙先生はきつと大丈夫です」

「え？」

「あの人がさつき飛んできたの見たでしょう？あんなことが出来るんですからきつと大丈夫です」

「…」

確かに飛んできていた…確かに常人とはかけ離れた身体能力を持っていると仮定してもいいかもしれません…

「分かりました…確証はありませんがここは草薙先生とネギ先生を信じてみます」

「ありがとうございます夕映さん」

その時エレベーターが止まりました。扉が地上に付いたみたいで
す。

エレベーターを出た瞬間私の携帯がなりました。相手は…

Side out

Side 草薙亮

「ネギ先生！そいつらのことを頼むぞ！」

そう言い放ってエレベーターのドアは丁度閉じた。目の前には巨大な動く石像。

「で？これでいいんですか学園長？」

『ふおおおお！いやいや、中々見事なものだったぞい草薙先生！』

石像はさつきまでの芝居がかった口調ではなく、いつもの学園長の口ぶりに戻っていた。

「わざわざこんな大掛かりな仕掛けする必要があったんですか？」

『まあネギ君が魔法を封印するのは予想外じゃったからのう』

「そついえばあの時思いつきり魔法の矢とか叫んでましたけど……」

つか石像と普通に会話する俺って第三者がいたら結構狂人だよな……いや、この場合相手も喋ってるんだから別にいいのか？

『それは大丈夫じゃろう。あんだけ忙しければ忘れておるワイ』

「なるほど、それも含めてあれだけしつこかったってことですか」

『そつじゃ』

最後明後日の方向向きながら言ったぞ。てことはガチで追いかけてきてやがったのか

「まあそれはいいです。で、この本はどうしますか？」

『できれば持ってきて欲しいんじゃないかの一』

「冗談言いますよ。この本を持ってたら何人だろうがあのエレベ―

ター重量オーバーになるくせに」

『フオ！気づいておったか！』

そりゃあそうだろう。いくらこの本が重いといったところでネギ君より重いはずがない。

あの時点でもブザーが鳴っていたのはこの本がエレベーターに乗っていたからだ俺は考えていた。

『まあではこの石像の手に乗せてくれればええわい』

「はあ…分かりました」

俺は持っていた本を石像の手のひらに載せる。

『うむ、確かに』

「じゃあ俺も戻ります。あいつら俺が死んだと思ってるかもしれな
いので」

『ああ…そのことじゃがの草薙先生』

「はい」

『しばらくそのエレベーターつかえんぞい』

「はい？」

え、なんで？

『だって先ほど君が壊しておったじゃないか。直るまでは上で止ま
ってしまつて動かんぞい』

「マジっすか…」

『マジマジ』

「エ…じゃあ俺はどうやって戻ればいいんですか？」

『そこに非常階段の続きがあるぞい』

石像の指す先を見ると確かにエレベーターの裏に階段が続いてい
た。

『じゃあの一』

「ちょ！」

石像はそれだけ言つと音を立てながら下に戻っていった。

「マジかよー……………」

螺旋階段に俺の声が響き渡つた。

「あ、一応綾瀬に連絡しておくか」

……………

結局俺が地上に戻ったのはその日の真夜中。期末担当は学園長が外してくれたらしいのでゆっくり休むことができた。

ネギ君達はぎりぎりまで復習をしていたそう。試験に遅刻。別室での試験となっらしい。

途中学園長が遅刻組みを別個で採点していたため合計していないというミスが起こりネギ君が故郷に帰りかけたりしたが、結果はなんと学年トップ。俺も発表までには起きだして2・Aのと一緒にそれを味わいたかったのだが寝過ごしていた。

翌日俺を待っていたのはネギ君以外の図書館島に潜入したメンバーから心配かけた罰として鉄拳制裁を受けた。

いや、鉄拳だけならまだいい。

綾瀬や近衛なんて分厚い辞書の角で頭を思い切り叩いてくるのだからたまらない。

しかもその二人を除けば他の面子はどれも馬鹿みたいに強い連中ばかりで…

結果俺はその日を保健室で過ごす羽目になった…

「理不尽だ…」

誰もいない保健室に俺の声が虚しく響き渡った。とりあえずあとで学園長を殴りに行く…

S
i
d
e

o
u
t

求める正義の為…(前書き)

追記、6月26日修正

求める正義の為…

Side 草薙亮

今日は麻帆良学園3学期の終了式だ。今は学園長の話も終わりネギ君が正式に先生になることを知らせるためにネギ君が台の上にいる。

『というわけで、来年度から正式に麻帆良学園の先生となるネギ・スプリングフィールド先生じゃ!』

学園長の声がマイクで講堂に響く。生徒間からは不安などの声も多いようだ。まあそれはそうだろう。俺もそっちの立場だったら不安でたまらない。

『ネギ君先生には引き続き3・Aの担任をしてもらおう予定じゃ。皆よろしく頼むぞ!』

学園長が言い終わるとあたり一面から拍手が巻き起こる。不安も多かったようだ。がやはりかわいいなどの声が多い。この学園はやっぱりそういうのの方が多いんだな。

終了式が終わりもう一度教室に戻る。

「というわけで2・Aの皆さん!3年生になってからもよろしくお願ひします!」

「よろしくー!ネギ先生!」

結局お祭り騒ぎが始まる。このクラスはいつもこんなんだな。まあこの空気がこのクラスのいいところの一つだが。そして何かあれば宴会を始めるのがこのクラスであって…

「これから学年トップおめでとうパーティをやりませんか!？」

「おお!」

「やるやるー!」

「じゃあ暇な人は寮の前の芝生に集合ね!」

当然成績学年トップなどを取ればこうなることは必然だった。と言っても全員がやはり乗り気なわけではない。エヴァンジェリンや刹那、龍宮などは我関せずと言った様子だ。

ちなみにその3人以外にも乗り気でないの一人いる。長谷川千雨である。この異彩を放つ集団の中で唯一常識人とも言える(近衛等は常識人だがその他と馴染んでいるため除外)。

顔を真っ赤にしているのを見ると非常に我慢しているのだろう。次第に体も震えてきている。

ネギ君がそんな長谷川を心配して声をかける。

さすがに前からでは声が聞こえないが長谷川は何かネギ君に言う
と教室を出て行ってしまった。

「長谷川はなんだって?」

「腹痛だそうで帰るそうです…せっかくの終了式なのに…」

ふむ…明らかに嘘だが…本人がそう言ってるんだ、無茶して参加

させるのも…

「あの、僕様子を見てきてもいいですか？」

「うん？」

「前から気になってたんですけど…長谷川さんクラスに馴染めてないような気がするんです。ですからこれを機会にもっと皆と仲良く出来たらなって…」

なるほど、確かにそう見えるかもしれない。俺には自分から関わりたくないように見えたがそう言われれば馴染めてないようにも見えるのか。

ならここはネギ君に任せてみるか。

「分かった。行って来るといい。どうせ寮の前の芝生なんだ。合流はいつでもできるだろうしな」

「は、はい！ではお願いします」

「無理強いはするなよ」

「そんなことしません！」

そう言うとネギ君は教室を出て行った。

「さて、やるのはいいが全員はめを外し過ぎないように…」

『は—————』

「こつこつお祭り騒ぎになるとこいつらは途端に元気になるのもう慣れた。」

「俺とネギ先生は少し遅れていく。準備はそちらで進めておいてくれ」

『えーーーーー！』

「こつこつ言ったらこつこつ反応することもな！」

「俺達は紛いなりにも先生だ。仕事ってものがあるんだ。参加はするから準備は任せる！以上！」

『はーーーーーい！』

渋々だが了承の声が上がる。と言っても終了式後なので俺もネギ君もほとんど仕事はない。あるにはあるがいつでもいい程度の簡単な書類仕事だ。

ただ単にネギ君がこの場にいらないことをごまかす為の言い訳に過ぎない。

教室を後にして屋上に出る。

ちょっと不安になったので気配を探るとネギ君の気配を感知した。っていうかまた空飛んでるし！

毎度のことだがもう少し回りへの考慮ってものをだなあ！

「はあ…しょうがない」

注意する為に追うことにするか。と言っても俺は空は飛べない。なのでエクイスを召喚する為に魔力を右手に集中する。

「来い！騎…」

「少々お待ちを…」

その声を聞いた途端俺は右手の魔力を解放するのをやめた。正確には止めざるを得なかった。

俺の首筋にはいつの間にか野太刀が突きつけられていたからだ。

「えっと…葛葉…先生？」

「なんででしょうか、草薙先生？」

俺に刀を突きつけている女性、葛葉刀子さんに向かって俺は声を掛ける。

確か刹那と同じ神鳴流の使い手でこの学園内では高畑さんに続く実力の持ち主らしい。

「出来ればこの刀を引いていただけると非常に助かるのですが」

「そうですね。貴方が両手を挙げて無抵抗の意思を示せば直ぐにも」

素早く両手を挙げて無抵抗をアピールする。というよりこんなことされることは全く思いつかないんですけど…

「目標は達成したようだな」

「全く、人騒がせなことですわね」

「お姉さまの言うとおりで…」

どこに潜んでいたのか、右からガンドルフィーニさん、左から高音・D・グッドマン、後ろから佐倉愛衣姿を現した。

いつの間にか俺の首筋の刀は引かれていて葛葉さんも俺の正面一歩下がった位置につく。

つまり俺は魔法関係者に4方囲まれた状態である。

「えっと…これってどういうことですか？」

とりあえず葛葉さんに説明を求める。

「この状態になってもまだしらばっくれる気ですか！」

「高音さん…少し黙ってて」

「しかし葛葉先生！」

「いいから」

「う…分かりました」

葛葉さんの言葉に高音が渋々といった様子で言葉を飲み込むが、明らかに敵意の籠った目を向けてくる。

俺はというとイマイチ状況が理解できていない為説明待ちだ。

まあ全員それぞれの獲物を持つって事は大体察しはついてきたけど。

「貴方はご自分の立場を理解していますか？」

「立場…ですか？先生以上のものではないと思っ

「そうですか…私達としての見解は違います」

「といますと？」

ああ、もう聞かなくても分かるけど聞いてしまっ

「貴方は今現在も監視されている、ということですよ」

「早い話が不審者ってことだな」

「それは…簡潔にありがとうございます」

ガンドルフィーニさんが単刀直入に言ってくれた。

「端的に言えばそういうことです。以前刹那を助けてくれたことは感謝していますが…それとこれでは話が別ですので、とりあえず学園長のところまでご同行を願います」

「そうですか。分かりました」

そういうことならば仕方ない。自分の立場を忘れて好き勝手振舞おうとした罰なのだろう。

ああ、でも一つだけ確認で…

「ネギ君は飛んで行ったけど大丈夫なのか？人に見られたりとか…」

「彼はあの『サウザンド・マスター』の息子です。どこの馬の骨とも知れない貴方と一緒にしてもらっては困りますね」

いや高音、それは答えになってない。傍から見ていてそれが伝わったのだろう。葛葉さんが答えてくれた。

「彼はすっかり認識障害の魔法を使って飛んでいます。降りるところさえ見られなければ一般人に空で確認されることはありません」

なるほど、認識障害か。俺は気配探知だけで場所を確認したから分からなかったが一般人には見えない、ということか。

周りを先ほどと同じ風に囲まれて俺は屋上を降りる。

まあ多分学園長前で事情聴取みたいなものを受けるんだろう。

正直言っても俺の話信じてもらえるかは微妙だがな。

誰がネギ君に注意する為だけに魔力を解放するって話だよ。

やっぱり気で追いついた方が…いや、それが無理だからエクイス呼ぼうとしたんじゃない。

そんなことを考えているといつの間にか学園長室の前についていた。

葛葉さんが扉をノックする。

「どつぞ」

「失礼します」

学園長の声と共に全員が中に入る。

「ほ！こんな人数でどうしたのかね？」

「はい、彼が魔力を解放しましたので了承を得て拘束しました」

葛葉さんが簡潔に事態を説明する。

「ふむう。草薙先生、なにか弁解はあるかの？」

「ありません。魔力を解放したことについては私の落ち度ですので」

「なるほど。理由を説明する気はあるかの？」

「言えというのならいいんですが信じてもらえる内容ではありませんよっ。」

「構わん、言ってみたまえ」

「はあ…まあネギ君が飛んでいたんで見つからないように注意する為に追いつこうとしました」

「ふむ、それで？」

「それだけです。魔力解放した時点で拘束されたのでそれ以上のことは何も…」

「ば、バカにしていますの！？」

俺と学園長の会話に予想通り高音が割り込んできた。

うん、そうなるよね。俺もそんなこと言われても信じられないし。

「まあまあ高音君。少し落ち着きたまえ」

「これが落ち着いていられますか！学園長、ここは厳格なる処罰を
お願い致します！」

「ふうむ、と言つてもものう…厳密に言えば魔力解放自体は罪ではな
いし彼は誰にも被害を与えていない」

「そ、それは…」

「それに彼は拘束される時点でも抵抗せずにここまで来たのではな
いかね？」

「確かにそうですが」

「ならば今回は嚴重注意だけで良いじゃろう。皆それで良いな？」

「わ、分かりました。学園長がそうおっしゃるなら今回は引きまし
よう…」

高音が渋々といった様子で引き下がった。他の3人は元々そうい
うことを予想していたのか特に反対する様子もなかった。

とりあえずその場は無闇に魔力を解放しないこと、学園内での召
喚は学園長の許可を取ることで落着した。

召喚のことはあの時監視についていた高畑さんから皆に伝わって
いるらしく大して驚いている様子もなかった。

まあどんなものかは理解していないようだが俺の奥の手はバレて
なくて正直ホツとした。

その後葛葉さんとガンドルフィーニさんは仕事へ戻るということ
でその場で解放ということになった。

なったのだが…

「なんで二人はまだ付いて来るんだ？」

俺の後ろには未だに高音と佐倉がいる。

「お気になさらず。寮に帰るだけですのぞ」

嘘付け、中等部の佐倉はともかく高等部の高音は違う場所じゃねえか。

明らかに監視目的なのがバレバレだ。

まあ気にしても仕方ない。どうせ今更ネギ君には追いつけないし今日は魔力を使うことはもうないだろう。

その時ポケットの携帯が震えた。そういえばマナーモード解除してなかった。

早乙女？

「はいはい、どうした？」

『いやー、遅いからどうしたのかなってねー』

「ちょっと仕事でな。もう出たからもうちよっとかかるって伝えてくれ。なんなら先に始めてくれてもいい」

『ありや、そうなの？だったら少し買い物頼んでもいいかなあ？』

「そつちが本命か…まあいい。で何がいるんだ？」

頼まれたのはお菓子と飲み物全般。

近くのコンビニに寄って今はカゴに物を詰め込んでいるところだ。

「あいつら元々集る気だったんじゃないだろうなあ」

大いに有り得る。と言っても大して金を使うこともない今日この頃。たまには出費しても大したことはない。

さつき金は卸してきたし多めに買っても問題ないだろう。というわけで目に付くお菓子を適当にカゴに突っ込んでいく。

しかし…

「あいつらまだついてくるのか」

高音と佐倉は未だに一緒にいる。別に行動を共にしているわけではないが遠くから俺を監視している状態だ。

今も棚の向こうから品物を選ぶフリをして時々俺の方を見ている。どうでもいいのだが気になるものは気になる。意識しなければいいのだが一度気づいてしまうと気にしないというのは難しい。

さつさと寮まで戻ればあの二人も解散するのだろうか…

二人とはほぼ会話もしたことはなければ夜の哨戒でも組んだことはない。

一応携帯の番号は知っているものの用事もないのに掛けることはまずないしな。

「こんなもんか」

レジで清算してコンビニを出ると少ししてから高音と佐倉は付いてきた。

仕方ないのは分かってる…分かってるんだが…
理解するのと気にしないというのは全く別物だ。一回気になりだすと気が散って仕方ない。

「おい、二人とも」

こんな状況で声を掛けてしまうのだから俺も相当参っていたんだろう。

どうせ電車でもこんなになるなら今から3人で寮まで行った方がまだマシだ。

「なんでしょうか草薙先生？」

「……………」

高音は返事をしたが佐倉は後ろで少し様子を見ている感じだ。しかしその表情はどっちかというと怯えてる風に見えてしまう。

高音に至ってはもう完全に嫌味丸出しだし…元々隠す気がないんだろうけど…

まあいいや。聞きたいこと聞いてさっさと寮へ戻ろう。

「さつきも言っていたが…『サウンドマスター』ってなんだ？」

「……………」

佐倉だけでなく今度は高音も絶句した。いや、なんか変なこと聞いたか？

「あ、あ、あ、あ…」

「あ？」「あ？」

「貴方本当に知らないんですの!？」

高音がいきなり叫んだ。

「お、おう…知らん」

「ありえませんか…こんな無知な人が魔法関係者だなんて…いえ、そもそも魔法使いですらも怪しいと…」

「お、おーい…」

高音が何か別の世界に逃避してしまった…

「ほ、本当に知らないんですか？」

佐倉が話しかけてきた。どうやら俺の話を多少なりと信じてくれているらしい。

「まあな。正直言うと魔法使えるようになったのも最近でそこら辺の事情には疎いんだよ」

「そ、そうですか」

佐倉は少し考え事をした後に話し始めた。

「では最初から、ということでもいいんですね？」

「ああ、出来ればそっちのほうがありがたい」

「分かりました」

『サウザンド・マスター（千の呪文の男）』

本名をナギ・スプリングフィールド。

千の魔法を使いこなすと謳われた事実上史上最強の魔法使い。

20年前の魔法世界の戦いにおいて「完全なる世界」「リスマエンテレイクイア」一派、さら

にその背後に存在していた「造物主」ライフメーカーらを倒し文字通り世界を救った英雄。

「大分省略しましたがこんなものかと」

「なるほど、その『サウザンドマスター』がネギ君のお父さんだと
「はい」

なるほど、そりゃあ確かに憧れになるのも分かるわ。

そう考えると魔法使いが『立派な魔法使い』というのを目指すのも理解できる。

しかし…

「そう！『立派な魔法使い』こそ我々魔法使いの目指すべき場所なのです！お分かりになりましたか？」

あ、高音が復活した。

「それはともかく、分かっているとは思いますが私たちは寮まで貴方の監視命令を受けています。こんな所で油を売ってないで早く行きますよ」

「は、はい。お姉さま！」

何で俺生徒に先行されてるんだ…まあいつか。

電車に乗って寮の前の駅で降りる。後は寮まで少し歩くだけだ。

その間に会話は一切ない。それでもまださつきみたいに距離を取って監視されるよりはマシだ。

なまじ気配探知なんて身に付けてしまうからああいうのを無意識にも感じ取ってしまう。

『サウザンドマスター』に『立派な魔法使い』…世のため、人のために陰ながらその力を使う、魔法世界でも最も尊敬される仕事の一つ…か。

改めて考えてみるとネギ君の父親は魔法世界にとっては英雄だ。その息子が英雄視されるのも分かる。

そのことについてはネギ君も誇りに思っているようだし、そのことを悪いとも思わない。

ただ一つ…これだけは不安だ…

「なあ二人とも」

「なんででしょうか？」

前を歩いている高音が振り返って答える。

「二人も当然『立派な魔法使い』を…簡単に言えば正義の味方を目指してるんだよな？」

「？なにを当たり前のことを…」

「それはそうですね？」

「じゃあさあ…その正義って言うのは誰が決めてるんだ？」

「「?????」

ああ、二人とも顔見合わせてる…言ってる意味が分かりづらかったか？

「つまりだな…お前達の言う正義の味方って定義は誰が決めてるんだ？」

「それは…私達魔法使いが間違っているとしても？」

高音の声色が明らかに変わったのが分かるが、これは確認せずには要られない。

「俺は別にそれを目指してるわけじゃないから分からんが…その『立派な魔法使い』とやらは世のため、人のために陰ながらその力を使う…ではその人のためって言うのは誰が決める？どこまでが人の為になる？」

「おっしやってる意味が…」

「別にそれが悪いというわけじゃない。現に警察だつて従っているのは国の正義だ。それが悪いわけじゃない。だけど…その正義は他人によつては悪と成りえる。そも絶対的な正義なんて無いことぐらいは分かつてるだろ？」

「そこまです…」

高音がこちらに右手を向けている。明らかに魔力の集中をその手に感じる。これ以上言うのなら戦闘も辞さないということだろう。

「お、お姉さま！まずいですよ！」

「黙りなさい！これ以上の侮辱がありますか！この男は今、私達魔法使いの目標を侮辱したのですよ！」

「そ、それはそうですけど…」

あー、そう取られちゃったかあ。もう少し俺も言い方つてものがあつたかなあ。

しかしいくら人目が無いとはいえ街中で魔法発動しようとするとは…案外激情家か？

「あー、なんだ。気に障つたのなら謝る…とりあえず魔法はやめろ。ここから学園長のところに戻るのには面倒すぎる」

「くっ！では先ほどの言葉を撤回してください！」

んー、ここで撤回するのは簡単だけど…それはこいつらにとっても考えさせるチャンスなのではないだろうか？

それが分からないで将来利用されるよりは今考えさせたほうがいい。

「なら一つだけ質問だ。これに答えられたら撤回でも何でもしよう」「いいでしょう」

「じゃあ聞く。一人の銀行強盗が2人の一般人を人質に取ったとする一応人質も設定付けておくか。母親とその子供ってことにしよう。その銀行強盗は武装済み、何もしなければ人質は殺される。二人を同時に助けることは不可能。じゃあこの状態で一人だけ救えるとしたら誰を助ける？」

「な…そんなの…」

「選べるわけ無いですよ…」

二人が答える。

「これに答えられないんじゃ俺は先ほどの言葉を撤回することは出来ないな。お前らの目指してるのはその程度で揺らぐものってことだ。それに最初に行った通り何もしなければ殺される」

「そもそも！この質問に答えはあるのですか！？」

「あるぞ？…どんなの…て言うのは言わんがな」

数分、二人は悩んだ挙句答えを出した。

「やはり子供の方を救うべきでは…」

「ですわね。母親の観点からいってもおそらくそれが一番だと……」
「それでいいのか？」

沈黙、肯定の意でいいだろう。

「不正解だ」

「なっ！」

「じゃあ母親の方を救ったらどうなるんです!？」

「それも不正解だ」

「な、なんですのそれは! 正解など無いのでは意味が無いではないですか!」

「答えはある」

「ではそれはなんですか! 何もしなければ人質は殺される。二人を同時に助けることは不可能! この時点で片方しか救うことが出来ないじゃないですか!」

やっぱりそうか……やっぱりそうなるよな……

「正解は……強盗を救う、だ」

「「は?」」

うん、予想通りの反応。思いつきもしなかったみたいだな

「な、な……」

「そ、それって」

「そんな問題は卑怯です!」

「おいおい人聞きの悪いこと言うな。俺の質問はあの状態で一人だけ救えるとしたら誰を助ける？だ。誰とは聞いたがそれに誰かを指定した覚えは無いぞ？救うの内容も言っていない。強盗を救えば必然的に二人は解放される。一件落着だ」

「た、確かに理屈ではそうですが…」

「まあこんなのは頓知みたいなものだが…凝り固まった正義は思考を停止させる。人の正義は柔軟であるべきなんだよ。全ては自分の赴くまま、自分の中の正義に動かされてこそその正義だ。それ以外は偽善以外の何者でもない。正義は掲げてればなんでも許される免罪符じゃない」

「う…」

「それは…」

二人とも黙ってしまった。ひたすら目指してきた正義がこんな簡単に打ち砕かれるのは予想外だろう。そもそも一辺倒の正義は人を固執させる。

正しいことがすべての人にとって正しいことではないし、その正義で泣く人がいるということもこの二人には理解して欲しかった。

それでも目指すのをやめないというのであればそれは二人の目指した道だ。俺がどういう言う問題じゃない。

「ま、そこら辺よく考えてみる」

話が終わると丁度寮の前までついたところだった。

二人は黙ったままだ。

まあ…言い負かされたせいで敵意は十分なんだけど……

俺ってこういう諭す系の先生向いてないのかなあ…

Side out

Side 佐倉 愛衣

布団に倒れこみながら考える…

自分が目指していたのは『立派な魔法使い』…世のため、人のために陰ながらその力を使う、魔法世界でも最も尊敬される仕事の…のはず。

なのにあの人の問いには答えられなかった。

(凝り固まった正義は思考を停止させる。人の正義は柔軟であるべきなんだよ。全ては自分の赴くまま、自分の中の正義に動かされてこそ正義だ。それ以外は偽善以外の何者でもない。正義は掲げればなんでも許される免罪符じゃない)

草薙さんの最後の言葉が再度頭の中に再生される。

今までそんなこと考えたこと無かった。自分の行いは絶対正しいと思っただけだったし、人のためになつてるって実感もあった。

今までの私の行いが誰かを苦しめていると…

うっん、そんなはずない！私は誰かのために行動してきた！

それでも…草薙さんの言葉が離れない。

私は本当に正しいことをしてきたんでしょうか。

「お姉様…」

お姉様も悩んでいた。聞いても答えは出てないと思う。
それ以前に、このところは自分で答えを出すべき問題だと…私は思
った。

答えは出てない。今は自分のできることをやるしかない。
それでも…今はやれることをやるしか…

S i d e o u t

日常の為…2（前書き）

追記、6月27日修正

日常の為…2

Side 草薙 亮

「しっ！」

現在は春休み。副担任の仕事もひとまず休みだ。となると俺の仕事は警備と寮の管理だけになるわけだ…

現在は麻帆良学園の中の森で一人で修行している。自分でやろうと思ったのはカポエイラ。地味な競技だがこれをやってみると中々に奥が深い。以前の学生間の争いごとを止めたときに足技を使ったのがきっかけだ。

カポエイラを調べてみると格闘技とダンスの中間みたいなものらしい。鍛え方によっては相手を傷つけないで無効化したり、殺人級の威力を持たせたりできるということだ。

一般的にはボクシングのようなスタイルが基本で漫画や書籍のよくな常に逆立ちしながら蹴りを繰り返す、というものは間違いらしい。

と言ってもやるのは我流だ。本を見てそこから大体の蹴りを出していく。というのも俺は自分自身でこれを極める気はなく、相手を牽制兼勘違いさせられたらいいという程度の心構えだ。実際の戦いは我流カポエイラを含めた喧嘩殺法である。

「せいー！」

木に自分の大きさと同じくらいのところに線を引いて蹴りの高さの参考にする。あごの位置への上段蹴りから側転して木から距離をとり同じ位置に助走をつけたかかと落とし。

「痛って！」

さすがに気で強化しないで蹴るのは無理がある。というより本来こういう動きは実戦を想定してやらなければならぬので技だけ動かないもの相手にやっても仕方ない。

「こんな時に刹那も高畑さんもないんだもんなー」

高畑さんは出張、刹那はどこにいったか不明だ。どうせ近衛の影で見守ってるんだろっけど…

他の古菲や長瀬、龍宮に頼んでもいいのだが今の時点で古菲や長瀬に俺が魔法使いだとばらす訳にはいかない龍宮だと戦闘スタイルが違いすぎて練習にはならない。結果俺は自分ひとりで練習してるのだ。

エヴァンジェリンなんて更に論外だ。敵対する可能性のあるやつに自分から手の内を晒すことはない。

「うーん…あ！」

今思いついた…もしかしたらあいつらを利用出来るかもしれない。思い立ったが吉日ってな…

おっと…危ない危ない。

このまま呼んだらまた葛葉さん辺りが飛んできてしまう。

携帯を取り出して学園長に電話をかける。

数コールの後に学園長が電話に出た。

『ほいほい、なんじゃね?』

「えっと、修行の相手が欲しいので召喚で相手してもらおうと思うんですけど…」

『なるほどの、それでワシの許可を?』

「その通りです」

『ふむ、よかろう。ただし今の場をあまり移動しないようにな』

「了解しました」

電話を切って再びポケットに入れる。

許可軽いなあ…いいのかあんなので?

まあそれは俺が気にすることではないか。

「来い!兵士!」

俺が魔力を放つとデギオンが姿を現した…んだけどなんでこいつこんなやる気ないんだ?

「どうしたデギオン?」

「いやー、初めての仕事がこれだとなあ…」

「そういわずに頼むぜ。お前しかいないんだ」

俺の考えは単純明快。格闘専用のデギオンに俺の相手をしてもらおうというものだ。

「まあいいけど、俺はあんまり手加減できないから頼むぜ」

「おう、あんま手加減されると練習にならんからな」

.....

「だから手加減できないって言ったろ？」

はい、はつきり言って甘く見てました。終止デギオンはつまらなさそうに俺の攻撃を受け止めて、攻撃をある程度当ててくるだけ。手も足も出ないとは正にこのこと。付け焼刃の蹴り技じゃ練習にもなりやしない。

「ごめんなさいでした……」

「まあいいけどな。これからは実戦で呼んでくれよ？出番なくて調子悪いんだ」

「おーけー分かった」

そついうとデギオンを戻す。

確かに練習にはならなかったが気づく部分はあった。蹴り技は威力がある分見切られるとカウンターを受けやすいのだ。完全に決め

られるとき以外は小技で相手を牽制していくのが正しい戦い方だろう。

「そろそろ戻るか…」

気づいたら空がもう赤い。いつの間にか夕方になっていたようだ。森から出て歩いて寮に戻ったときは既に夜に近い時刻になっていた。

「あー！管理人さんが門限破りだー！」

鳴滝風香が俺のほうを見て指をさしている。

「あほ、管理人には見回りも仕事に入ってたよ」

「へへへー、僕知ってるもんねー。さっき森から出てくるのみたもん！」

む、見られていたか。いや、でもデギオンはとっくにしまっていたから問題ないか…

ん？

「てことはお前も俺と同じくらいの時間に帰ってきたってことじゃないのか？」

「うー！」

やっぱり凶星みたいだ。顔をあさっての方向に向けて上手くない口笛なんか吹いている。

「で、でも僕は管理人さんに見られてないからセーフだもん！」

「んー、まあそういつちゃそうだが…」

というより門限なんてあつてないようなものだ。学園内だったら管理人の俺に一声かけて何時くらいに帰るか言えばいいだけだから許可証なんてものも必要ない。

「でしょー！むふふふ、どうしようかなー、見なかったことにしてあげてもいいんだけどー」

これはあれか、集りつてやつか…しょうがないやつだ…

「それでは風香さん？私の部屋のケーキを差し上げるのでこのことは黙っていていただけませんか？」

「ケーキ!？」

途端に目が光りだす。ちょろいな鳴滝姉!と思ったがなにか考え出した。

「どうした？」

「んー…もう一声!」

「なに!」

ふむ、中々商売上手なやつだ。むー…

「では俺の分もやろう」

「もういっちょ！」

こいつ…そんなに食う気なのか…

「じゃあない…予備もだそう。それ以上は俺も出せんぞ」

「うん！それで交渉成立って事で！あ、ちょっと僕よってくるところがあるから管理人室で待ってて！」

そういうと風香はあっという間にどこかに行ってしまった。

「この間に俺がいなくなるとかは考えないんだな」

まあ逃げる気なんてさらさらない。ちなみに何故そんなにケーキがあるかというところ…俺が甘党なだけだ。それに疲れた時は甘いものがいいというし前もって買っておいただけ。

近くに安くて上手いケーキ屋があったから別々のを3種類買ってきたんだが…まあ買ったときは一人じゃ新鮮度落ちるから誰かに分けようと思ってたけど、まさか全部持つていかれることになるとはな…

部屋に戻ってケーキを冷蔵庫から出してお茶の準備をする。さすがにケーキだけ出して出て行けともいえない。

コンコン

とドアがノックされた。

「開いてるぞー！」

そう言っただけはお茶の準備を続ける。紅茶…いや、ジュースのほうがいいんだらうか？

「お邪魔しますー！」

「お邪魔します…！」

「お邪魔するでござる」

なぜに3人分の声が聞こえるのでしょうか？

入口を見ると鳴滝風香、史伽と長瀬楓が部屋に入ってきていた。

「風香、ちょっと…」

「はいはい」

キッチンへ呼び寄せる。これで入口からは見えない。タタツと近寄ってきた風香の服の襟を掴んで持ち上げる。猫のようになってしまっているがこの際仕方ない。

「なのであの二人がいるんだ…」

「いいじゃん別にー！僕が貰うものを僕がどうしようと思えばいいよー！」

「なるほどね…」

3人分まで粘ったのは自分の分だけじゃなくてあの二人のことも考えてたってことか。

「中々策士だな」

「へへー」

「褒めてないぞ」

「エ！」

褒めてると思ってたんかい…

「ま、そこは友達思いつてことにしといてやる。ただ今度からそういうのは先に言えよ。お茶の準備もできんじゃないか」

「ごめんなさーい」

俺は風香を床に降ろす。

「話はすんだでござるかな？」

「あのあの！お邪魔でしたら帰りますけど…」

楓と史伽がこちらに声をかけてきた。さすがに待たせすぎたか。

「いや、大丈夫だ。入ってくれ」

そういえばこいつら同室だったな。背の高さも相まって同年代とは思えない。しかも二人とも長瀬のこと、かえで姉って呼ぶし…

「でも良かったんですか？」

史伽が言ってきた。

「だってお姉ちゃんの我がままに付き合わされてそれに私たちまで
ふむ、どっちが姉だか分からんな鳴滝姉妹。俺はその頭に手を置
いて軽く撫でてやる。」

「大丈夫だよ。ちょっと買いきちやってね。誰かに分けようと思
ってたんだ。それ以前にそんなこと君たちは気にしなくても大丈夫
だよ」

「こ、子ども扱いしないで下さい」

そんなこと言っても背が低いのだから中々俺の手を振り払えない。
しかも本気で振り払おうとしてないから可愛い。

「何言ってるんだ。俺から見りゃ楓もお前ら姉妹も子供だよ」

「エ！かえで姉と私たちが？」

「そうだよ。背丈や雰囲気なんて関係ない。まだまだ子供さ」

「やったー！へへへ、かえで姉も僕たちといっしょだってー！」

いつの間にか風香が長瀬の背中に乗っていた。

「じぶんら、降りるぞい」

「へへー、一緒一緒ー!」

んー、やっぱり訂正しようかな。

「ほれ、さつさと食わないと新鮮度が落ちるぞ」

「「はーい」」

そういつと鳴滝姉妹は部屋の中央にあるちゃぶ台に座る。

「やっぱり訂正かな……」

「ふむ、拙者と鳴滝姉妹がおなじでござるか」

長瀬が鳴滝姉妹を見ながら言うてきた。背がほとんど同じだから本当に中学生かと疑いたくなる。

「そうさ。いくら態度が大人びていてそれに伴う技術があったとしてもまだ14、5年しか生きてない子供だ」

「それを言ったら草薙殿もまだ21年しか生きていないのではないでござらんか?」

「ま、それを言ったらおしまいだけだな。さ、お前も座れ。あの二人に食われちまうぞ」

「あいあい」

.....

「はー、美味しかったー！」

「ごちそうさまでした」

よく食うわ本当に……風香も史伽も一つだけじゃ足りなくて長瀬のを貰ってたし。

「じゃあ史伽、そろそろ戻ろうか」

「うん、じゃあ草薙さん。今日はありがとうございました」

「いいっていいって。また遊びに来てくれ。一人じゃ暇なんだよ」

「だってさ史伽」

お前はもう少し気にしろ。

「じゃあかえで姉、行こう！」

「あ、拙者は少し話があるから先に言っているでござる」

「うん？分かった、先に行ってるね」

「じゃあ草薙さん、おやすみなさい」

そついうと鳴滝姉妹は先に部屋を出て行った。

「で？俺に話ってな…」

残った長瀬に俺は話しかける。

「ちょっと待つでござる」

長瀬は俺の言葉を遮るとドアを開けた。

「あう！」

「きゃ！」

そこにはどこから出したのかコップを手に持った鳴滝姉妹がいた。

「まず！逃げるよ史伽！」

「ま、待ってよー！お姉ちゃん！」

なるほど、盗み聞きね…

「待たせたでござるな」

「いや、そこまでするってことは聞かれちゃまずい話だろ？」

「まあ大した話ではないのでござるが…」

そこまで言つと長瀬はこちらに向き直る。

「昼間に森の中でなにをしていたのか少々気になったのでござるが…なにをしていたのでござるか？」

げ、見られてたのか。あ…てことはデギオンも…

「ちなみにどこまで見た？」

「いや、通りがかりで見ただけでござるから木を蹴ってるのしか見てないでござるが？」

「そうか」

それなら話していいか…

「まあ俺は学園広域指導員だしな。体は鍛えなきゃいかんわけよ」

「そうでござるか。それなら拙者と修行してみてはどうでござるか？」

「お前と？」

「うむ、拙者は休みのとき郊外の山で修行をしているのでござるが…手合わせの相手がいないとどうにも張り合いがないのでござるよ」

「なるほど、まあ楓がいいのなら俺はその言葉に甘えさせてもらうが」

忍びの長瀬なら接近戦の練習にもなるだろう。まあ魔法使わなければいいだけの話か。それなら最初からそうすればよかった…

「じゃあ明日辺りに手合わせ願うでござるよ」

「おっけ。分かった」

「では拙者もこれで」

「おう、気をつけていけよ」

「ここは寮の中でござるよ？」

「あー、そういえばそうだったな」

思わず笑ってしまった。楓も微笑している。長瀬がドアの外に出てドアを閉めようとして…ちよつとだけあけた状態でとめた。

「そうそう、草薙殿」

「ん？どうした？」

「機会があれば是非あの突然現れた御仁の紹介もして欲しいでござるな」

「げっ…」

しっかり見てんじゃねえかよ！

「まあ…機会があればな」

「では」

全く…忍びつてのは厄介だな。

Side out

Side 長瀬 楓

ふむ、カマをかけてもあまり反応はなし…と。やはりそこまでの秘密ではないのでござろうか？

動揺は走ったようでもござったが、ただずっと見られてたことに対してかもしれないでござるしな。

「謎の多い御仁でござるよ、草薙先生は」

それにあの急に現れた御仁も…草薙先生は決して弱いわけでもないのにその彼が手も足も出ないとは。

「世界は広いのでござるなあ」

拙者ももつと精進しなければ。

とりあえず…あそこで角に隠れて罨を張ってる二人組みにはお仕置が必要でござるかな？

Side out

新たな学年の為…（前書き）

追記、6月27日修正

新たな学年の為…

Side 草薙亮

春休みもあっという間で明日からは新学期だ。

「眠い…」

俺はというとこんな直前に大してやることもなく、朝から部屋でテレビを見ている。朝のこの時間帯は最近メッキリ静かだったのだが何故か今日に限っては騒がしかった。

「なんかあったのか？」

まあどうせまた2・Aの面子が何かやらかしてネギ君が振り回されているんだろう。

はつきり言ってネギ君が絡んでくれたほうがまだいい。2・Aの生徒たちは皆元気が有り余りすぎていて困る。ネギ君には可哀そうだがいてくれたほうがそっちに興味が向いてくれるのでその分被害は少なくて済むのだ。

ちなみにこの春休みの間だけでも蛍光灯10本、風呂場の水道2か所、トイレ1か所、裏手の花壇等々様々な被害が出ている。しかもそのほとんどが2・A関連…

そんなことのためにため息をつきつつテレビの続きに集中。そろそろお天気おねえさんが…

「草薙先生！ニュースニュース！」

おiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiii!

ろっ。

「で？用件はなんだ。つまらない用事だったら一時間正座追加な」

「鬼だ…鬼がいる」

「もう二時間追加してやろっかな」

「ひい！言います言います！」

まあ別にそこまではさせないけどな。俺の部屋でそんなにさせたらなんか訴えられそうだし…

「実はネギ君のことなんだけどさ…」

…まさか魔法がばれたんじゃねえだろうな…ネギ君は結構使うこと躊躇しないしそれを悪いことだと思っていないからなあ…

「噂ではネギ君はどこかの国の王子様でパートナー探しに日本に来たんだって！」

…まあ魔法のことばれてないだけいいでしょうか。というかどうかからそんな話が出たんだよ。

「まさか朝から騒いでるのはそれが原因か？」

「そう、もう皆ネギ君を探し回っちゃっていいんちよなんてもう鬼の形相だよ」

なるほどね。パートナーが恋人みたいに伝わっちゃってるわけか。

まあ魔法を知らない一般人はパートナーって聞いたらすう思いつくだろうな。

そもそも俺もパートナーのことは良く知らないがそういうのではなく魔法の相方みたいなものというのは分かる。

魔法は呪文を唱える際、術士は無防備だ。それを守る為の盾、相手を牽制する剣、それがパートナーのはずだ。

「そんでもって私も捜査に駆り出されてるわけ。草薙先生にも教えてちよつと手伝ってもらおうかなって」

「とりあえず話は分かったが、その先生っていつのをやめろ」

「へ？なんで？」

「仕事してないときにまで先生なんて呼ばれたくない。呼びにくいなら名前でもいいから先生はつけないでくれ」

仕事は仕事、それ以外のときはOFFにしていたのが基本だ。いつも先生なんて呼ばれると肩が張ってしまう。

「おっけー草薙さん。で、ネギ君の行方知らない？」

「んーにゃ。朝玄関を開けた時以外部屋にいたからな。見てないぞ」

「そっかー。ん、ありがとう。見かけたら私に連絡頂戴。お礼ははずむから」

そういつと朝倉はぱっぱと部屋を出て行った。しかしまあ毎度毎度厄介事を持ち込むもんだ。

はつきり言つてこの広い学園都市から一人の人間を探し出すことは不可能に近い。いくらネギ君が目立つからといって一、二時間で見つかるものでもないだろう。

どうせ朝倉の言うお礼とやらも食券だろう。

必要なときは必要だが別に俺自身は普通に給料も出ているので大した必要性は感じない。

まあ最近長瀬と手合わせの際と修行にしか外に出ていなかったので散歩ついでにはちょうどいいかもしれない。ちなみに楓とのサイバイバル風手合わせは非常に有意義なものだ。

つい最近やったものを例に挙げると土日と期限二日で山の中でのサイバイバル。その間相手に一本でも有効打を入れたほうが勝ち。俺はハンデとして3本入れられないと負けにならない。とこんな感じだ。

と言つても山を知り尽くしている長瀬と俺では勝負にならないため俺は基本広い所で待つしかない。結果は言うまでもなく惨敗。一度だけ惜しい場面もあったがそれ以外はてんでダメだった。てか分身とかひどくね？

久しぶりにのんびり歩く学園は本当に平和で…春先の日差しは眠気を誘うのには十分だ。

「眠い…」

今日何回目かのその言葉をつぶやく。とりあえずどこか搜索をさぼってても見つからないところに行きたい…

「とするとやっぱり校舎かなー」

春休みの校舎なんて生徒は基本近づかないし、いるのも学園長と一握りの先生くらいだ。

一週間以上も校舎に來なかつたのは久しぶりだ。

校舎への階段が上がっているときに一瞬影が通り過ぎた。

鳥に過ぎては大きすぎる影に顔を上げると…

「あのアホ…」

そこには杖に乗っているネギくんがいる。全く、見られたらどうすんだよ。

前に聞いた話では認識阻害の魔法というのを使っているらしいが、降りる時は解いているのだろう。

そう思っているとネギ君は校舎の入口付近で降りた。この位置からでは階段で見えないがちょっと注意しなきゃダメかな

駆け足で階段を登りきると…そこには着物を着た可愛い女の子がネギくんを見ているという考えられる最悪の状況が展開されていた。

「ネギくん…」愁傷様」

とりあえずオコジヨにされて強制送還は間違いないだろう。

「ど、どこのどなたか存じませんが！今は、あの〜その〜…」

ネギ君が慌てて弁解しようとしてしどろもどろになっている。この状況での言い訳など高が知れている…

「アレです！今、流行のワイヤーワークっていうか・・・そう！CGなんです！」

ネギ君：CGならまだワイヤーワークの方がいいぞ。

「そっか〜CGなんか〜。なるほろ〜」

信じるんかいその少女！確かに格線が作れるくらいの技術があるんだからCGくらいはお手の物なんだろうか？今度葉加瀬 に聞いてみるか。

ていうかこの声聞いたことあるな。

「ネギ君ネギ君」

「ネギ君って、えっとどちらさまでしょうか？」

「もー、ひどいなあ。今日も朝ごはん作ってあげたやん」

「エ…こ、このかさん!？」

ほー、あれが近衛か。全然違うな。

「あ、草薙さんもおるやん。おーい」

ネギ君の後ろで様子を見ていた俺にこのかが気づいて手を振ってくる。とりあえず呼ばれておいてなんなので俺も二人の近くに行っ

た。

「なあなあ二人はこんなところで何しとるん？」

「え？えっと…」

ネギ君はこのかの問いにしどろもどろになっている。まあいきなり偶然居合わせた二人が何してるかなんて聞かれたら普通は戸惑う。

「さっきネギ君がCGって言ってただろ？俺はそれを見させてもらったんだよ」

「そ、そうなんです！草薙さんには付き合ってもらって悪いと思っただんですけど…」

俺があらかじめ用意していた嘘にネギ君も便乗する。この場合はまあ乗るのが普通だ。

「そかそか。二人も大変なんやねえ」

「ん？二人も？」

『も』ってことはこのかも今大変なのか？そう聞こうとしたとき校舎の廊下が騒がしくなった。

「このかお嬢様ー！」「どこですかー！」

黒服のいかにもSPと言った感じの男たちが近衛を探していた。

「あかん！ネギ君、草薙さん！うち逃げな！」

「あ、ぼ、僕も！」

何故か一緒に逃げ出すネギ君。とりあえず言いたいこともあるので二人に続く。

「蹴散らしていいんだつたら蹴散らそうか？」

とりあえず近衛に提案。

「あかん！怪我させたらあかんよ！」

「やっぱだめか」

分かっていたがやっぱり却下された。とりあえず見つかる前にその場を離れたのが良かったのか撒くことは出来たようだ。

空き教室の一つに逃げ込む。

近衛は和服、ネギ君は魔法なしだと10歳の少年なので二人とも息が切れている。辺りを警戒しながら二人の呼吸が整うのが待つ。

「で？そろそろ事情を説明して欲しいんだが？」

「実はな」

.....

「エーーーーーー！このかさんがお見あムググ！」

「バカ！声がでかい！」

大声を上げるネギ君を俺が無理やり押さえつける。

「ウチのおじーちゃんはお見合いが趣味でな、いつも無理やり進められるんよ」

「なんて迷惑な趣味なんだ…」

「草薙さんもそう思う！？せやろ？うちも迷惑なんよ。そんで今日はそのお見合いのための写真撮るいうてな、途中で逃げてきたんよ」

「そうか。そりゃ俺らより近衛の方がよっぽど大変だな」

「そうかな？ところで草薙さん？」

このかは俺の服の裾を引いて…こんなこと思っちゃダメなんだがその仕草は可愛くて…衣装と化粧だけでこれだけ人って変わるものなのか。

「ネギ君の顔青くなってるけど大丈夫なん？」

「あ…」

さっきから口元を押さえたままだった。ネギ君は既に顔が真っ青になっただけだったので慌てて手を離す

「すまん、大丈夫か？」

「だ、大丈夫ねす・・・」

やばい、呂律が回ってない。

「ま、とりあえず休んどけ」

「は、はい」

それだけ言うとネギ君はその場でぐったりとしてしまう。しかも寝息を立て始めた。相当疲れてたんだな。

「うちまだ中学2年生やで？将来のパートナーを決めるなんて早いとおもわへん？ほら、お見合い写真もこんなよーけあるんよ」

そうやってこのかはどこに持っていたのか10冊ほどのお見合いを取り出す。中には医者や弁護士など中々将来有望な人の名前が並んでいる。ただ…

「こりゃ年が離れすぎだな」

ほとんどが30代や20代後半。このかとは倍も年が離れているような人ばかりだ。さすがにこれではこのかも尻込みする。いやまあこのかがアスナ並みの胆力を持っているとはいわないが。

「せやろ？なんでお爺ちゃんお見合いさせたがるんやろ？」

「そりやお前」

うーん、これは言ってもいいのだろうか？年端もいかない少女の前でこんなこと言うのは憚られるのだが。

「なに？分かったことがあるん？」

「あー…まあ今度な」

「いけずやわ〜。別に怒らへんからいつてーやー」

「んー、じゃあ良いけど怒るなよ？」

「約束は守るえ」

これだけ言われて言わないわけにもいかない。

「あんな、学園長はお前が子供を作ってその顔が見たいんだよ」

「へ？」

思いもよらぬ答えだったのか近衛がポカンとしてしまう。

「まあこのかの幸せも願ってるのが一番だろうが、なるべく生きて
いるうちに孫、ひ孫の顔を見たいって言うのは親なら誰でも思うこ
とだろうしな」

あの学園長の場合はどっちか知らないが多分幸せになって欲しい
ほうが本音だろう。

「エ…子供って…え？」

近衛は未だに混乱してるが次第に顔が真っ赤になってくる。次第
に耳まで赤くなってしまい俯いてしまう。

「あー、そのな…」

近衛を落ち着かせようと肩に手を触れる。というよりそういう行為自体を考えたことがあるんだろつか。相当恥ずかしがりやなのか耳年増なのか。

「あ…」

俺の手が肩に触れた瞬間近衛が後ろに下がる。その時近衛が着物の端を踏んでバランスを崩してしまう。その後ろには机があり…

「きゃー！」

「危ない！」

倒れる寸前に近衛の手を握って引き寄せた。机に倒れる前に両手でこのかの頭を庇う。

ガシャーン！

と大きな音が教室に響き渡る。手に机の角が当たって痛かったがその程度だ。

「近衛、大丈夫か？」

瞑った目を開ける。そこにはすごい距離にこのかの顔があった。

「う、うん。大丈夫…」

目を開けた近衛と目が合った。やばい…これは非常にまずい…第三者から見たら俺が近衛を押し倒してる状況に見えるわけで、それに俺も一応健全な男な訳で。

心臓の鼓動が聞こえてなければいいのだが…

「えと…怪我は無いか？」

「う、うん。ちょっと背中打っただけやから」

それだけ言っただけでまた沈黙…

「と、とりあず退くな」

「うん」

近衛の頭を庇っていた手を抜く。

「あ！怪我しとるやん！」

「え？」

その手を見たこのかが言ってくる。見ると大した傷ではないが左手の甲から血が出ている。

「こんくらい唾つけておけば治るよ」

「あかん！化膿したら大変なんやから！」

近衛は俺の手をとると取り出したハンカチで俺の左手を縛る。

「これで大丈夫や。帰ったらちゃんと洗って消毒せなあかんえ？」

「あ、ああ。すまないな近衛」

「名前」

「うん？」

「このかであえで。あとこついう時は謝るんやなくてお礼や」

「そついいながら近衛が、このかが俺のおでこを指で弾いた。」

「そつか、ありがとうこのか」

「はいな」

「あれ？なにかあったんですか？」

「後ろからネギ君の声が聞こえた。どうやら今の音で起きたようだ。」

「いや、なんでもないえ？な、草薙さん」

「お、おう。なんもないぞ」

「？そつですか」

「ふむ、なぜ隠すかは知らないが女性が秘密にするときは素直に従っておいたほうがいいだろう。」

「ふふふ…ようやく見つけましたわよ！」

その時教室の入口から声がした。振り返ると雪広と神楽坂が仁王立ちしている。

その風格やまさに仁王！

「ふん！」

「あだ！」

何故か神楽坂に頭を殴られた。

「なぜに俺が叩かれなきゃならんだ！」

「なんか今失礼なこと考えたでしょ！」

すげえ、エスパーかこいつ。

「木乃香さん…貴方という人は大人しそうな顔をしてネギ先生をこんなところに連れ込むなんて…」

「いやな、いいんちよ違うねん！これはな…」

雪広に至ってはネギ君がこのかと一緒にいるというところにして目が行っていないようで俺のことは完全無視だ。巻き込まれるよりはいいがちよっと傷つくぞ。

「ん？」

何か廊下から多数の足音が聞こえてきた。

「ネギ王子ー！」

「ネギ君はっけーん！」

「うお！なんだなんだ！」

次々と突入してくる2 - Aの面子。

「このかお嬢様ー！」

それと何故か黒服の方々も一緒に…入口付近は大混雑だ。

「はあ…」

もつため息しか出てこない。

「このか、行くぞ？」

「へ？行くって…きゃー！」

俺はこのかを抱き上げる。

「下手に決心付いてないのにお見合いするのはいやなんだろ？」

「う、うん…！」

このかのその声を聞いて俺は教室の窓を開ける。

「ちょっと木乃香さん！まだ話は終わっていないよ！」

雪広：そこまで眼中に入っていないと俺本当に凹む…

「ごめんないんちよ！また今度な！」

「喋ってる舌噛むぞ！」

「エ！本当にいくん！？つて…きゃあああああ！」

俺がこのかを抱えたまま窓を飛び降りる。二階程度なので気を集中すれば人一人抱えてても怪我しない程度は余裕だ。

「ちょ！草薙さん！大丈夫ですか！？」

取り残されたネギ君が窓からこちらを見下ろしている。

「こっちは大丈夫だ！それより自分の心配をしたほうがいいぞ！」

「へ？」

「ネギ君GET！」

「う、うわーーーーー！！！」

案の定ネギ君は追ってきた面々に飲み込まれた。まあオコジヨにされなかっただけマシだと思ってもらうしかないな。あ、結局魔法のことに関する注意するの忘れてた。

ま、いいか。自分で反省するだろ。

「く、草薙さん？そろそろ降ろしてほしいんやけど」

「あ？ああすまん」

そう言ってきたのでこのかを地面に降ろす。ふむ、やはり痛かったかな？と言っかなんか顔が赤い。

「このか？」

「な、なんえ？」

このかがこつちを振り向いたのに合わせてこのかのおでこに俺のおでこをくつつける。

「ひゃ！」

「ふむ、熱はなし…と」

「あ、あのあの！草薙さん！？」

「と言っても明日からは3年生だ。体調管理は怠るなよ」

「あつあつ…」

しかし何で顔がこんな真っ赤になってるんだか…

「ほ、ほなもうウチ行くな！」

「おう、また明日な」

そういうところのかは走っていった。よくあの着物であそこまで速度が出せるものだ。

「うわーん！助けてくださーい！」

「はあ、しょうがねえなあ……」

上から聞こえるネギ君の声を聞いて俺は再び校舎内に戻った。

S i d e o u t

新たな学年の為…（後書き）

えー、やっとこさ原作二巻目まで終わりました。次回からはエヴァ編に入ります。

下手にフラグは立てたくないのですがさすがに原作と全く同じではつまらないのでそこら辺はご了承ください。これからもよろしくお願ひしますorz

決戦の為…（前書き）

追記、6月28日修正

決戦の為…

Side 草薙亮

ついに学園が新学期を向かえた。とつてもクラス替えもないし教室もそのまま名前を取り替えるだけなので基本は何も変わらない。

そしてこのクラスがこんな日に何もやらない訳は無く。

「さんねー……ん！Aぐみ……」

「……ネギせんせい！」「……くさなぎせんせい！」「」

某ドラマのオープニングみたいな挨拶だ。

とりあえず今からの予定は身体測定だ。ちなみに麻帆良学園の身体測定はクラスごとにその器具が持ち込まれ、生徒同士が計るという特殊な身体測定となっている。楽しくできるからいいかもしれないがそれって改ざんとかすごいできそうだ。

「ネギく、先生。そろそろ身体測定の時間だ」

俺が予定表を見ながらネギ君に告げる。ちなみに最近先生というより君という方が慣れてしまっている。

「あ、分かりました。それでは皆さん…えと…今すぐ脱いで準備してください！」

「アホかあ！」

思わずネギ君の頭をぶったたいてしまった。

「ネギ先生のエッチー！」

教室中からそんな声上がる。こればかりは庇ってやれない。というか庇ったらこっちにまで被害が及ぶ。とりあえず南無阿弥陀仏とだけ言っておこう。

「バカなこといつてないで俺たちは廊下で待機だ」

「は、はい」…」

頭を押さえつつなみだ目になったネギ君を連れて廊下に出る。

そういえば…

「今日佐々木はどうしたんだ？いなかったみたいだが…」

朝の出席の時に確認したが風邪の報告は受けていないし、ルームメイトの和泉の話だと朝からいなかったらしい。

「僕のほうにも連絡はないんです。始業式に休むような人じゃないんですけど」

俺もそう思う。というより2 - A…いや、今は3 - Aか。こんな重大な日に休むようなやつはいない。這ってでも来るはずだ。

「ふーむ、そういえば朝に寮でも見なかったな」

「そうなんですか？」

「うん、忙しかったから先に行つたのかと思つてたんだが」

そういうやりとりをしていると廊下から保険委員でクラスにいなかった和泉亜子が走つてきた。

「せんせー！大変や！まき絵が、まき絵がー！」

「おい、和泉、とりあえず落ち着け。それと廊下は走るな」

「草薙せんせ、そんなこと言つてる場合じゃないんやてー！」

「何！？」

「まき絵がどうしたつて?!」

「お前らも服着てから出て来い！」

まき絵という単語を聞きつけた3・Aの面々が一齐に廊下に飛び出してきたのでとりあえず押し込めた。

.....

とりあえず全員が着替え終わってから保健室へ向かう。保健室の

ベッドでは佐々木が気持ちよさそうに眠っていた。

「まき絵さんはどうしたんですか？」

ネギ君がしずな先生に尋ねる。

「なにか桜どおりで眠っているのを発見されたいいんだけど……なぜそこで寝ていたまでは……」

「そうですね」

しずな先生も頭をかしげている。

佐々木は見た目には何も問題はなかった。ただ一か所を除いては……

「こりゃあ……」

首のところに小さい傷が二つ。しかも微かに魔力の気配が残っている。

（草薙先生、これは？）

（俺もわからんがとりあえず今は取り繕っておく必要があるだろう）

ネギ君がアイコンタクトしてきたのでし返す。とりあえず今佐々木を心配して見に来ている奴らに魔法を知らすわけにはいかない。

「ねえ、ネギ。まき絵ちゃん大丈夫なの？」

俺たちと一緒に来た神楽坂がネギ君に問いかける。

「は、はい。軽い貧血みたいです。少し休めば問題ないでしょう。それから僕は今日遅くなるのでご飯はいらないますよ」

そこまで言わなくていいつつうの。何かあるって言うてるようなもんじゃねえか。

「え？」

「ネギ君ご飯いらへんの？」

神楽坂とこのかが不思議そうに首をかしげている。フォローしておくか。

「ちよつと俺とやることがあつてな。仕事の一環だ、お前たちの気にすることじゃないぞ」

「そ、そう」

神楽坂はそれを聞くと納得した様子だった。

「ほれ、戻った戻った。さっさと身体測定終わらせて来い。佐々木kは俺とネギ君で見ておくから」

「くくくはーい」「くくく」

見に来ていた面子を追い返すと保健室のドアを閉める。

「草薙さん…微かですけど魔法の力を感じます」

「ああ、ここからだな」

ネギ君も気づいていたが、佐々木の髪を上げて二つの小さい傷跡を見せる。

「これは…虫刺され、ではないですよね」

「ああ。時にネギ先生、桜通りの噂は知ってるか？」

「噂？」

「ああ、俺も聞いたときは眉唾だったんだが…吸血鬼が出るそうだし」

「それって…」

「ああ、桜どおりの吸血鬼の噂は噂なんかじゃない。本物だったことだよ」

そう言って黙ったとき春にしては冷たい風が窓から保健室に入り込んできた…

Side out

Side エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル

「ふん、やっと見つけてくれたか」

保健室に走っていく面々を見てそう呟く。

内心このまま貧血や酔いで済まされたらどうしようかとも思ったが、坊やとあいつが行ったのならそんな結論には至るまい。わざと魔力を感じる程度に残してやっておいたんだからな。

「茶々丸、予定通り今夜仕掛けるぞ」

「はいマスター」

さて、今夜は満月だ…今から血が騒ぐな。

桜通り

見事に丸い月が空には浮かんでいる。それと共に体にわずかな魔力がともるのを感じる。

「相変わらず脆弱な魔力だ」

自分の体としては呆れてしまうほどの弱い魔力。この脆弱な魔力でさえも満月の夜しか発揮できず、普段は人間と変わらない生活を余儀なくされる。

「ふん、吸血鬼の噂があるのに一人で通るとは、運が悪いのか能天気なのか」

目の前を歩いているのは27番 宮崎のどか。女子供を殺す事はないが…

「悪いがその血を少し分けてもらおうか！」

自分の顔が見られないようにマントで顔を覆ってから木をとり降りる。

む、襲いかかる前に気絶したか。まあそれはそれで好都合だ。

「ま、待て！」

ほう、坊やが来たか。流石に自分の生徒を二人も襲われるという失態は逃れたようだな。

「僕の生徒に何をしますか！」

そういいながら魔法を唱えている。あの呪文は…

「『魔法の射手・戒めの風矢』！！」

「ふん、『氷楯』」

魔法薬を投げながら呪文を唱える。捕まえるのに特化したあの呪文程度なら一本で十分だ。

すさまじい音と共に出来上がった氷の楯に風の矢がぶつかる。

ふ、この呪文でこの攻撃力か！中々楽しめそうだな

「驚いたよ、すさまじい魔力だな」

「エ、エヴァンジェリンさん！？」

草薙亮から私のことについては聞いていないのか。まあ一度改めて自己紹介しておいても問題あるまい。面倒だな。

「新学期に入ったし改めて挨拶しておこうか先生…いや、ネギ・スプリングフィールド」

む、先ほどの楯を抜かれたか。少し指先から血が出ているな。その血をなめながらも言葉は続ける。

「10歳にしてこの力、さすがはく奴の息子だよ」

ふむ、やはりナギのことについての情報に対しては敏感なようだ。名前を出したわけでもないのに雰囲気が変わったか。極端なやつだ。

「な、何者なんですかあなたは！何でこんなことを！」

それをここで聞くのか？状況判断ができないのかそれともタダのあまちゃんか両方が…

「この世にはな、いい魔法使いと悪い魔法使いがいるんだよネギ先生」

今の坊やになら二本で様子見か…

魔法薬を投げつつ魔法を唱える

「『氷結・武装解除』！」

様子見とはいっても今の魔力なら本気でやっても坊やを突破は出来ないだろうがな！

「抵抗^{レジスト}するか、やはりこの程度では無理か」

防御に回したほうの左腕の服だけが吹き飛んだだけ。抱えてるほうの宮崎のどかは障壁も張ってないから裸になってしまっているがそんなこと私には関係ない。

「なんや今の音！」

「このか、こつち！」

む？この声、爺の孫と神楽坂アスナか。一緒に巻き込んでやってもいいが爺にとやかく言われるのは面倒だな。

「ここは予定より少し早いけど退かせて貰おう」

坊やには聞こえるか聞こえないか程度の声で言つと私はその後にする。この程度の誤差なら茶々丸は余裕で修正できる。

「いた！」

ほう、もう追いついてきたか。そういえば坊やは風が得意だったな。だとしたら速度では負けているか。

「ついてきな坊や」

そう言つと私は地面を蹴って宙へと舞い上がる。やはり着いてくるか。やはり振り切るのは無理だな。元々振り切る気もなかったがこの距離だと追いつかれる可能性があるか…

む？なぜ攻撃してこない？

「エヴァンジェリンさん！どうしてこんなことするんですか！先生

としても許しませんよ!」

なるほど、甘ちゃんの方だったというわけか。自分の圧倒的有利に立っているのにもかかわらず敵を目の前にして理由を知りたがるなんてな。このままなら楽だが少々つまらんな。

「先生はく奴>のことを知りたいんだろう! く奴>の話を知りたくはないのか! 私を捕まえたら教えてやるよ!」

ふむ、やはり顔つきが変わるか。坊やに対してく奴>に関する挑発は有効だな。

「本当ですね…」

そうつぶやいた瞬間魔法を唱えたようだ。一気に坊やと同じ質量の固体が8体現れる。

「分身…違うな、精霊召喚か」

風の中位精霊による複製、しかも同時に8体か。なるほど、10歳の見習いと甘く見たら痛い目を見るといふことか。

懐から魔法薬を取り出して投げつける。

「ちっ」

やはり一体一本か。普通の魔法先生相手なら1本で3体は止められるはずなのだがな。

だが三体程度ならゼロ距離でも競り負けるほど弱くはないぞ!

もう一本魔法薬を展開。魔力を込めて近づいてきた精霊を叩き潰す。

「追い詰めた！これで終わりです！」

回り込まれた！？なるほど、考えたな。

「『風花・武装解除』！！」

ふん、ここまで来て武装解除か。つくづく甘いな。

「やるじゃないか先生」

「こ、これで僕の勝ちですね。約束どおりなんでこんなことしたのか、それにお父さんことも教えてもらいますよ」

「お前の親父、『サウザンドマスター』のことが」

ふん、目の前の敵のことより見えない父親のことを気にかけるか。まあいいがな。

片手で顔を抑えながらこちらに顔を向けているのは武装解除の魔法によって全てを飛ばされた私は下着姿だからなのだろうが。

10歳程度の小僧が笑わせる。

「と、とにかくっ！ 魔力もなく、マントも触媒もないアナタに勝ち目はないですよ！ 素直に……」

しかもこの程度で勝ったと思ってるのだから更に、だ…

「……これで勝ったつもりなのか？」

後ろに何かが降り立つ気配。見るまでもない。茶々丸だ。

「さあ、お前の得意な呪文を唱えて見るがいい」

仲間がいたのは予想外だったのか呪文を唱え始める。

「『風の精霊11人 縛鎖となりて敵を捕まえろ』」

この時点でもまだ攻撃魔法を唱えないか。甘いを通り越してもはやバカだな。2対1、既にこの時点で劣勢なのにこの距離で捕縛魔法か。せめて攻撃魔法ならまだ救いがいがあったものを…

しかもこの時点でまだ誰も来ないということは『魔法使いの従者』もないか。魔法使いとしての根本ができていないのか？

「ふん…」

私が指示を出すまでもなく茶々丸が動く。呪文が完成する直前に坊やの頭にデコピンを入れた。

おい、殺す気はないがそこまで手を抜けとも言っていないぞ。

「……紹介をしよう。私のパートナー、3-A、出席番号10番。『魔法使いの従者』、絡繰茶々丸だ」

「え………なっ！ ええーっ！？ 茶々丸さんがアナタのパートナーー!?」

ま、驚くのも無理はないか。私と茶々丸との接点なんて探したって見つからないからな。それから律儀に頭を下げるな茶々丸。

「そう言う事だ。パートナーのいないお前では私には勝てんぞ」

「なっ……、パートナーくらいいなくなつて、『風の精霊11人』」
「この瞬間にバカからクズに格下げだな。自分が何でも出来ると思
いこんでいる。どうせ魔法学校では何でもできた口だろうがそんな
もの外では通用せんぞ。」

結果は先ほどと同じで茶々丸にデコピンを貰って呪文詠唱を邪魔
される。

「まだ状況を理解できないのか？元々、『魔法使いの従者』とは戦
いの為の道具だ。われわれ魔法使い呪文詠唱中、完全に無防備とな
り、その間、攻撃を受ければ呪文は完成できない。そこを盾となり
剣となって守護するのが従者本来の使命だ。つまり…パートナーの
いないお前は、我々二人には勝てないということさ」

ふん、本当に知らなかったようだ。魔法学校の質も落ちたもの
だ。もういい、この程度ならわざわざ戦いを挑むまでもなかったな。

「茶々丸」

「申し訳ありません、ネギ先生。マスターの命令ですので」

茶々丸は瞬時に間合いを詰め、坊やの首を背後から締め上げ動き
を封じる。近接戦闘の技術もなしか。まあ普通は教えないが…

「……ようやくこの日が来たか。お前がこの学園に来てから今日と
いう日を待ちわびていたぞ。お前が学園に来ると聞いてからの半年
間、ひよっこ魔法使いのお前に対抗できる力をつけるため危険を冒
してまで学園生徒を襲い血を集めた甲斐があった…。これで奴が私

にかけた呪いも解ける」

「え…、の、呪い！？…ですか？」

これ知らないのか…いや、こっちは坊やが生まれる前の話だ。知らないのも無理はない。＜奴＞がこのことに関して話すとも考えにくいしな。

「そうだ、真祖にして最強の魔法使い。闇の世界でも恐れられた…この私がなめた苦汁…」

く、まずい、思い出したら怒りが混みあがってきた。

「私はお前の父。つまりサウザンドマスターに敗れて以来つ、魔力も極限まで封じられっ！15年間もあの教室で日本の能天気な女子中学生と一緒に勉強させられてるんだよっ！！」

気づいたら私は叫びながら坊やに掴みかかっていた。

「そんな……僕、知らな…」

息が詰まっているのか声が途切れ途切れだ。ち、昂ぶりすぎたか。我に返って手を離すと坊やは軽く咳き込んだ。

「この馬鹿げた呪いを解くには奴の血縁たるお前の血が大量に必要なんだ…悪いが死ぬまで吸わせてもらう！」

と言っても殺す気はない。とりあえずこの『登校地獄の呪い』さえ解ければいいという考えからだ。結界が解けない限り私の魔力は戻らないのだから今呪いを解いてもあまり意味はないのだが…

今日の前にチャンスが転がっているのだ。これを利用しない手は無い。

首筋に牙を立てようとして…

「よお、綺麗な月だな吸血鬼」

忌々しい奴の聲が上から響いた。

Side out

Side 草薙亮

学校が終わったあと俺はネギ君と別れて警備をしていた。思えば1人きりの警備は初めてかもしれない。正式な警備じゃないため誰の力も借りることはできない。

正式な警備じゃないせいで人数はおらず、しかもネギ君と一緒に警備してもよかったのだがそれでは警備する範囲が狭くなってしまふ。既に周囲は暗くなってきており見通しも悪い。

その時何かが視界の脇を通り過ぎた。

「お、お前は！」

そこにいたのは…以前刹那と一緒に警備していたとき逃げ出してしまった猫だった。

「よしよし、こっちおいでー」

しゃがんでちゅちゅと舌を鳴らす。すると猫はこっちも興味があ

るのが近づいてきて俺の手に触れる。あまり警戒心はないな。誰かから餌とか貰ってるんだろっか。

「おー、可愛いなあ。憂い奴憂い奴」

撫でてやると猫は気持ちよさそうに目を細めている。

「よーしよしよしよし」

某動物好きの人のように首の裏や腹のあたりを撫でてやるとより気持ちいいのか猫は俺の手を拒もうとしない。

その時遠くのほうで魔力が発生するのを感じた。

「む？」

片方はネギ君のだがもう一つはひどく弱弱い。これは…以前感じたな。エヴァンジェリンか？ということは件の吸血鬼はエヴァンジェリンということか。

まあ襲われた時から普通の生徒とは思っていなかったが吸血鬼とは…は…

「まあこの程度なら遅れを取ることもないだろ」

ネギ君は魔法や戦術に関しては10歳とは思えない考えを出したりするからな。魔力はネギ君よりも圧倒的に少なく、さらにスピードもネギ君のほうが上のようだ。

気配だけで詳しく分からないがエヴァンジェリンを圧倒していると分かる。

「ナー」

「おお、「ごめん」ごめん」

考え事していて手を止めていたため猫が不満そうな声を上げる。再び撫で始めると猫は寝転がる。

「癒されるわ〜」

しばらくそんなことをしていると場所が移動したようだ。

「この場所は…寮か？」

あの野郎ども…一般人の多い寮でやりあつつもりか!？
バレル能性が大きくなるな。一応加勢に行った方がいいか。

「ニャウー!」

「お、お前も行くか？」

足元の猫が俺の腕に掴まってきた。しかし危険に巻き込むわけにも…

「すまんがお前を連れて行くわけにはいかないんだ」

「ニョウ…」

「すまんな」

最後に頭をなでてやると俺は跳躍する。いい加減空飛べるようになりてえ。じゃないときついぜ。

寮に着いたがそこには誰もいない。瞬間上で何かが弾けるような音がした。

顔を向けると大量のコウモリが屋上から去っていのくが見えた。どうやら戦闘は屋根の上らしい。

「おいおい……」

思わず声が出てしまった。

ちなみに寮の半分は屋上はないためドアもない。

「やるしかないな！」

俺は再び地面を蹴る。そして二階の窓枠を蹴った。そのまま3階、4階の窓枠を蹴りあがっていく。

4階の窓枠から屋上までは距離があるが気を込めればなんとかなりそうだ。

「よつとー！」

思い切り窓枠に力を入れて踏み込むと何か割れる音がした。多分窓枠が逝ったんだらう。

後で直すから勘弁ってことで！

屋上に降り立つと丁度エヴァンジェリンがネギ君の首筋に噛み付こうとしていた。ま、ぎりぎりセーフってところかな。

「よお、綺麗な月だな吸血鬼」

あの時言われた台詞を言い返す。結構気持ちいいこの台詞。

「貴様か、草薙亮」

格線が俺を見てエヴァンジェリンに近づく。否定無しってことは吸血鬼認定でいいのかな？

「そういえば前は聞き損ねたけどお前らどういつ関係？」

「茶々丸は私の『魔法使いの従者』だよ。よもやお前までこれで意味がわからないというつもりじゃないだろうな」

「いや、それだけで十分だよ」

なるほど、そりゃあ手が出ないはずだ。ネギ君の作戦負けだな。ここまで誘い込まれるほうが悪い。

面倒だ。多分だけど今の俺では格線に勝てなくもないが瞬殺は出来ないだろうし、ネギ君は今にも血を吸われそうな状況だ。

とりあえずはったりだな。

「で？状況は2対2だけど退く気は？」

「バカか貴様は？一人は既に私の手の中だ。2対1という状況は変わらない」

まあそりゃそうか。

「く、草薙先生……」

「あー、少し待ってる。なんとかかすつから」

ネギ君がうめき声を上げる。と言っても流石に前みたい行くとは

思えない。召喚は前に見せた。恐らく召喚する暇はないだろう。なら戦闘中に召喚するしかないのだが…なぜかさつきから気を張りながらだと上手く魔力が練れない。気と魔力は同時に使えないのか…

気をとけば魔法は使えるがその間身体能力はガタ落ち、恐らく茶々丸相手だと3分も持たない。つか負ける。それに召喚する際も与えてくれるとは思わない。

気だけだと茶々丸は相手をできるかもしれないがエヴァンジェリンの魔法が飛んでくる。それ以前にこの二人相手だと全力を出さなければいけないから怪我をさせることになる。先生の身としては生徒を傷つけるといふ行為だけはしたくない。

「どうすつかねー…」

「ふん、坊やよりは状況がわかってるようだな。逃げてもいいんだぞ？」

「冗談。子供を大人が見捨てるわけにもいかんだろ」

「ならばここで貴様の血も頂くまでだ！ちゃちゃま…」

「コラーツ！ この変質者どもーっ！！」

この声…神楽坂か！？そう思って声のほうを確認した瞬間…

「ウチの居候になにすんのよーっ！！」

神楽坂のとび蹴りがエヴァンジェリンの顔面に直撃した。

おいおい、仮にも魔力障壁張ってるだろうにそれを易々と抜いてやるなよ！

どついつ蹴りだ!?

「なっ! か、神楽坂明日菜!」

「あっ、あれー?」

エヴァンジェリンが神楽坂をにらみつける。神楽坂はというとネギ君を襲っていた相手が予想外だったのか素っ頓狂な声を上げた。とりあえず今がチャンスだ。屋根を移動してネギ君とアスナを庇うように二人の前に立つ。

「く、草薙先生?」

「よう神楽坂。いい蹴りだったぞ」

「なんで草薙先生が!」

「まあその話は後でな。それと学校以外では先生はやめる」

ここに来てしまった以上あとで神楽坂にはちゃんとした説明をしなければならぬだろう。クラスの担任、副担任が魔法使い関係なんて神楽坂はびっくりするだろうがな。

「しかもあの二人って、ウチのクラスの…どーなってるのよ! ま、まさかあの二人が今回の事件の犯人なの!?」

「元気いいのは結構だがちょっと黙っておけ」

「う、でも!」

「いいから」

怒鳴る神楽坂をなだめつつエヴァンジェリンを見ると既に体制を戻していた。

「形勢逆転かな？これで2対3だ。今なら逃げてもいいんだぞ？」

徹底して挑発する。感情的になるタイプとはあまり思えないがここで逃げられるのも何か癪だ。

「く、おのれ…」

お、意外と乗りやすいタイプか？いや、頬を押さえてるあたり神楽坂のとび蹴りのほうが頭にきているのかもな。

「マスター」

「分かっている！退くぞ茶々丸」

やっぱり退くか。って！

「お、おい！」

「あ！」

神楽坂と俺が同時に叫んだ。二人は屋上から飛び降りたのだ！ここ8階だぞ！

急いで淵に駆け寄ると下にも二人の姿はなくなっていた。逃げたか。一応無駄だとは思いが探してみるか。

「神楽坂、ネギ君を頼む。俺はあいつらを追う」

「エー!? ちょっと待ってよ。私にも何がなんだか…」

「混乱するのも分かるが後でちゃんと説明する。今はここを頼む！」

「ちょ、ちょっと〜!」

まだ何か言いたそうな神楽坂を無視して俺も飛び降りた。来るときと同じように窓枠を段差として利用しながら降りる。地面に着いたと同時に気配を探るが…

「ダメか…」

エヴァンジェリンは気配を消しているし格闘はロボットなのでそもそも気配そのものがない。近くにいるときは分かるがこう離れてしまっただけでは探知できない。

「面倒なことになってきたな…」

今日はこれでいいかもしれないが召喚と気での戦闘ができないのがつらすぎる。やはり咸卦法は必須のようだ。練習しておく必要がある。

「とりあえず今日は帰るか」

そう考えると俺は寮へと足を向けた。

S
i
d
e

o
u
t

覚悟の為に…（前書き）

追記、6月28日修正

覚悟の為に…

Side 草薙亮

エヴァンジェリン襲撃から翌日。

「おはよーございまーす」

「おう、おはよう。あ、佐々木。もう平気か？」

「うん！もう全然！」

「何も覚えてないらしいんです」

教室に入ったら元気な声が聞こえる。宮崎も佐々木も元気で問題なさそうだ。しかし覚えてない？忘却魔法かなにかか。

ふと気になってエヴァンジェリンと絡繰の席を見る。エヴァンジェリンの姿はないが絡繰の姿はある。ということはサボっているのだろう。

さすがに白昼堂々と襲ってくることもないだろうし一先ずは安心のはずだ。問題は…

「みんなおはよー……………」

「ま、まだ心の準備がー！」

来たか。教室の入口を見ると神楽坂、このか、ネギ君が教室に入ってきたところだった。

神楽坂は佐々木に無事を確認していた。そういつところは面倒見がいい。

「あ、いない…エヴァンジェリンさん」

ネギ君はエヴァンジェリンの席を見ていないのを安心している。先生としてどうなのよそれ。

「マスターは学校には来ています。すなわちサボタージユです」

いつの間にか席を離れて近づいてきていた絡繰が俺とネギ君に言い放った。

「わ…わあ!」

それを聞いてネギ君が飛び上がる。そろそろへたれって呼んでやろうかな…

「お呼びしましょうか？先生」

「い、いや!とんでもな…」

「エヴァンジェリンはどこにいる?」

「え?」

ネギ君がこつちを見てなんで?という顔をしている。うーん、流石にそろそろ頭に来るぞ。

そんなネギ君を無視して俺は絡繰の答えを待つ。

「マスターは現在屋上にいます」

「ネギ先生。俺はちょっと行ってくるからあと宜しく」

「あ、は、はい…」

そついい残すと俺は教室を出る。何故か絡繰が付いてきた。

「何か用か？」

「いえ、別に…」

マスター思いなことだ。今の状況で襲われたらエヴァンジェリンが危険だと分かっているからだ。

結局絡繰は屋上まで付いてきた。屋上に上がるとエヴァンジェリンが日陰に入って眠そうにしている。

「よう、吸血鬼」

「む、何故ここにそいつがいる茶々丸」

俺の呼びかけに無視してエヴァンジェリンは絡繰に話しかける。

「場所を聞かれたのでお教えしましたらここに…」

「なんで教えるんだお前は…」

エヴァンジェリンが嫌そうな顔をする。まあ分からなくはないが。

「で、用件はなんだ。昨日の件か？」

「いや、別に昨日の件は関係ない」

「は？」

怪訝そうな顔をするエヴァンジェリンに近づくと俺は襟首をつかみ猫のように掴みあげる。

「な、何をする！」

「あ……」

バタバタと手足をバタつかせるが何分身長差がありすぎる。本当に猫みたいだ。絡繰も俺が何をするのかと戦う雰囲気を見せたが俺が戦う気はないと判るとその場で止まった。

「何って授業に出るんだよ」

「ふん！何を言い出すかと思えば……私はお前たちからみれば厄介者だろう。そんな厄介者なぞいないほうが貴様とあの坊やにとって都合なのではないのか？」

「まあ確かに厄介者だな」

「だったら降ろせ！」

「まあ確かに厄介者なんだけど……」

「今お前は襲ってくる気はあるのか？」

「む…」

「満月じゃなきゃ碌に魔法使えない今の状況なら俺でもお前を倒せるぞ」

現に今何の抵抗も出来ずに首根っこ掴まれているしな。

「というわけで、お前は今は厄介者じゃなくてただの不良というわけだ」

「な！今の会話でどこがというわけなんだ！」

「細かいことは気にすんな」

「ええい！茶々丸、見てないで助ける」

遂に自分だけじゃなんとも出来ない悟り絡繰に助けを求めろ。

「マスター、草薙先生の言うことも一理あると思われませう」

「な、何？」

「今のマスターは学生です。不本意とはいえ学生の本分は勉強です。ならば授業に出るのは義務であるともいえます」

お、なんか絡繰がエヴァンジェリンに反論してる。機械だから忠実に従うものかと思ったが意外と感情があるんだな。

「もう15年も授業を受けているんだ！今更学ぶことなどないわ！」

「だったら教室で寝てる。俺の目の黒いうちはお前がサボることは許さんからそのつもりで」

「責様〜！」

時々手と足が当たるが大して痛くない。可愛いやつめ。

「な、何をする〜！」

「はっ〜！」

気づいたら俺はエヴァンジェリンの頭を撫でていた。いやだってねえ…

「すまん、無意識に…」

「く〜もう逃げんから降ろせ！これ以上掴まれていたら何をされるか分からん！」

む、失礼な…でもまあ約束を違えるような性格でもないだろ。そう思うと俺はエヴァンジェリンを解放した。

「ふん〜いくぞ茶々丸」

「はい、マスター」

エヴァンジェリンは俺を一瞥すると絡線を連れて降りていった。ネギ君には悪いがこれも試練だ。先生として更正させてみる。

そのあと神楽坂に聞いた話だとネギ君の授業は全く授業にならない

かったという。やはり荒療治は無理だったか…

.....

女子寮管理人室

授業が終わって時刻は夕方。俺の部屋には現在神楽坂がいる。理由は当然昨日のことについてだ。

「まあぶっちゃけると俺もネギ君と同じ側だったって訳だ」

「ぶっちゃけすぎでしょ…」

アスナは呆れるしかないようだ。まあ説明もくそもないんだけど。アスナはこの部屋で話をする時点で名前がいいと言われた。なんでも苗字だとムズムズするらしい。

呼ばれなれないのだろう。

「まあ草薙さんが魔法先生って言うのは分かったわ。考えてみれば図書館島の時点で只者ではないって気づくべきだったのよね」

「つかよく気づけなかったもんだと俺も思うよ」

実際あの時は飛んだり跳ねたりめちゃくちゃしてたからな。それにネギ君にいたってははつきり『魔法』という単語を言っていたし。と余裕がなかったのもそうだが俺も秘匿する意識が低かったのかもしれない。

「で、聞きたいのがそれだけではないんだろ？」

「う、うん。昨日の、エヴァちゃんと茶々丸さんは…」

「あいつらも魔法使いの側さ」

俺がはつきり言い切ったことが以外だったのか目をパチクリさせている。

俺もここまで言うのはどうかと思ったがどうせアスナはここまで入り込んでいる。黙っているほうが危険だという俺の勝手な判断だ。いざとなったら俺が怒られればいい。

まだ黙っているのはネギ君のことが心配だからだろうか？

「まあ心配は要らない。あいつは満月の夜以外魔力がガタ落ちするからな。後一月は襲ってこないよ」

「そうなの？」

二ヶ月前から今まで襲ってこなかったのがその証拠だ。ちなみに一ヶ月前は俺もネギ君も図書館島の地下にいたので襲おうと思っても出来なかったのだろう。

「じゃあ俺の話はこれで終わりだ」

「え？もう？」

「他に何か聞きたいことがあるのか？あるなら聞くが」

アスナは少し考えるような素振りを見せてから聞いてきた。

「あのさ…草薙さんはあの二人のことどう思ってるの？」

「エヴァンジェリンと茶々丸か？」

「うん」

いきなり難しい質問をしてくるもんだ。

「それは先生としてか？それとも魔法関係者としてか？」

「ど、どっちも」

「そうだな…先生の立場から言わせてもらえば副担任とはいえどっちも俺の生徒だ。エヴァンジェリンのほうにはもう少しまともにしてもらいたいかな」

「魔法関係者としては？」

恐らくこっちが本音だろうな。明らかに聞く体制が違う。俺も先生の意見としては自分の意見を言ったただけだし参考になるとも思っ
てなかった。

「今のところは何とも言えんな」

「な、何ともって…人が襲われてるのよ！なんとかしようと思わな
いわけ！」

「落ち着けて」

「う…うん」

勢いで立ち上がったアスナをなだめる。まあキチンと説明しておかなかった俺が悪いか。

「その件については俺から学園長に既に報告している。学園長からの警告ならあいつも従わざるをえないだろう？」

「うん」

「そうならばあいつも人を襲うことはない。だったら俺の出る出番は全くないってことだ」

「それはそうだけど…じゃ、じゃあネギのことは！」

ふーん、気にしない振りしててもやっぱり同室だと気になるのかね？

「状況によりけりだ」

「え？」

「基本俺は何もしない」

「そ、そんな…」

「ネギ君から俺に泣きついてくるならまだしも、何も無いうちから俺が手を貸すなんてのは論外だ」

「だってあいつはまだ！」

「確かにネギ君は子供だ。だがそれとこれとは別問題なんだよ。これは魔法使いの問題だ。一般人の常識とはかけ離れている」

「だからって…」

ち、そろそろ鬱陶しいな。

「アスナ…お前はどっち側の人間のつもりなんだ？」

「え？」

俺の急な質問の意味が分からなかったらしい。だがこれはいずれ問われることだ。今から言っておいても遅すぎるほどじゃない。

「お前は魔法使い側の人間なのか、それとも普通の学生なのかってことだよ」

「そんなの学生に決まってるじゃない」

「だったらこれ以上こっちの世界に首を突っ込まないことだ」

「な！」

要するに俺は『学生をしたいならネギ君との関わりを切れ』と言いつつ切ったのだ。今の時点でそこまでアスナが割り切れるとは思っていない。しかし考えさせておくことぐらいは出来るはずだ。

「まあ首を突っ込もうが突っ込むまいが俺には関係ないんだが…」

いや、生徒だから一応関係はあるのか？

「これだけ聞いておく」

「な、何？」

「お前…命を懸ける覚悟はあるのか？」

「い、いのち？」

やはり考えたことはなかったみたいだ。14歳で命を掛ける状況なんて余程のことがない限り考えない

「こつちの世界に関わるといふことはそういうことだ。そこら辺よく考えておけよ。ほれ、もう帰れ」

面倒になってこんな質問をしたのも確かだがこれは俺の本音だ。ただの学生がいきなり命のやり取りを出来るはずがない。

実際俺も一度死にかけた。あれ以来魔法関係のことには覚悟を決めている。だが誰にもそんな覚悟を決める機会があるとは思えない。俺の場合は運良くそれを考える機会があったただけだ。

「ちょ、ちよつと！」

「いつでもいい。答えが出たら俺のところに来い」

そういうと俺はアスナを部屋の外に押し出した。これで考え直してくれればいいんだが…無理だろうなあ…

「む？」

なんだこの変な気配…人間じゃないな…でもひどく弱弱い。

「くそ、また面倒ごとか？でもこの程度なら俺が出張らなくてもいいな」

そう考えると俺は部屋に寝転がった。

Side out

Side 神楽坂明日菜

「お前…命を懸ける覚悟はあるのか？」

その言葉を聞いたとき一度思考が停止してしまった。

「い、いのち？」

気が付くと私はその言葉を呟っていた。

「こつちの世界に関わるということとはそういうことだ。そこから辺よく考えておけよ。ほね、もう帰れ」

考えるまもなく草薙さんに部屋を追い出される。

「ちよ、ちよつと?!」

「いつでもいい。答えが出たら俺のところ来い」

それだけ言うと草薙さんは扉を閉めてしまった。残ったのは静かな廊下とそこに立っている私だけ。

「覚悟つて…命ってなんなのよ…」

当然そんなこと考えたことなかった。というよりこの年でそんなこと気にする方がどうかしている。考えても考えても答えは出ない。

「あ—————も—————！なんだってのよー—————！」

気が付けば私は叫んでいた。自慢ではないが考えるのは苦手なのだ。こういうのはそれこそネギにでも任せておけばいい！

「うん！」

そう決めた！とりあえず部屋に戻ろう。

部屋の扉を開けると電気がついている。もうこのかかネギが帰っているのだろうか。

「で……………なんス…よ」

「そつ……………たい…なんだ」

誰かの話し声がある。片方はネギの声だけでもう一つは聞いたことがない。

「誰かお客さん？」

なんとなく忍び足になって部屋の中に入る。声はだんだんはつきり聞こえてくる。やっぱり二人分の声がする。

角から首を出すとそこには机の正面に座っているネギしかない。しかしネギはその机と熱心にしゃべっている。というか机のほうから声も聞こえる…なんで？

気づかれないようにネギの後ろからそれを除くと…

「あ！」

「うわ！あ、アスナさん!？」

思わず声を上げてしまった。それにつられてネギも声を上げる。机にいたのは…

「お、オコジヨがしゃべってる?」

今までネギと会話をしていた白いオコジヨだった。

.....

「ふーん、オコジヨ妖精ねえ」

「おう、アルベール・カモミールってんだ！よろしくな姐さん」

「誰が姐さんよ…」

このオコジヨ、アルベール・カモミール…長いからカモでいいわね。カモは昔ネギの故郷で助けられたことがあるらしい。それで恩返しがしたくてわざわざ故郷からやってきたという。てかオコジヨがタバコ吸うな！

「まあ任せてくれよお二人さん！俺っちが必ず兄貴のパートナーを探し出してやんよ！」

しかもカモはネギのお姉さんに頼まれてパートナー探しの手伝いとしてきたらしい。

「なんやー？誰か来とるん？」

「やばっ！このか！？こんな喋るオコジヨ見せたらなんて思われるか！」

「ネギ！」

「う、うん。カモ君喋っちゃダメだからね！」

「？」

そんなことをやってる内にこのかが入ってきた。どうやら二度風呂の後だったみたい。バスタオル一枚で体からは湯気が出ている。

「あー！何これ！可愛ええなあ、真っ白なオコジヨやん！」

このかはそう言うとカモに抱きついた。苦しそうでも声を上げないのはやっぱり魔法秘匿っていうのをカモもちゃんと理解している

からなのかしらね。

「みんなー！これみてやー！」

「あー！」

「ちよつとこのかー！」

そんなことを考えていたらこのかはカモを抱えたまま部屋を飛び出す。他の部屋からは騒ぎを聞きつけてクラスの面々がこのかとカモを中心に群がっていた。

「ネギ君のペットなんやて」

「なに？フェレット？」

「オコジヨだよー」

もみくちやにされているがまあ助けなくても大丈夫だと、思う多分。

「あ…コレ飼ってもいいんですか？」

「いーんじゃない？」

「この寮ペットおーけーだしね！」

「じゃあウチ許可とって来るなー！」

このかってこういうのは行動力高いのよね。ま、当面の問題はこ

れで回避できたつと。

と言つてもまたこんな居候が増えて厄介ごとに巻き込まれそうな気がするけど…

(お前…命を懸ける覚悟はあるのか?)

ふと草薙さんの言葉がよみがえってきた。

(こつちの世界に関わるということとはそういうことだ。そこから辺よく考えておけよ)

頭を振つてその考えを消そうとするがああ言葉が離れない…

覚悟つて…どうすりゃいいのよ…

.....

まあ次の日にカモは下着泥棒常習者で本国から逃げてきたことが分かつただけど…その理由がなんともまあ妹に寢床を作るつて言うお涙頂戴のB級くらい理由だつたわけで…

突っ込もうと思つたらネギが勝手に涙流し始めて雇つことに決めちゃつた。

まあいいんだけどね…

というか、草薙さんの言つてた覚悟つてこんなゆるい感じのでもいいわけ？

Side out

Side 草薙亮

「草薙さん」

「うん？」

部屋の外から聞きなれた声が聞こえる。このかがこんな時間になんのようにだ？

「はいはい」

扉を開けると予想通りこのかがいた。何かとても楽しそうな表情をしている。

「どうした？」

「あのな、ペット用の許可書が欲しいねん」

「ペット用？何か飼うのか？」

このかがペットを飼うなんて以外だな。まあこのかなら小鳥とか似合いそうだけど。

「ちやうちやう、ネギ君のや」

「ネギ君の？」

「せや。ネギ君なんか白いオコジヨ連れとつてな。飼いたいんやて」
白いオコジヨ…？んー、まあ大丈夫か。書類にはオコジヨ禁止つて書いてないし。

「分かった。取ってくるからちょっと待ってる」

「うん」

俺は一旦部屋に戻ると寮関係の引き出しを開ける。一応ほとんどの書類は一つの引き出しにまとめておいている。パラパラと捲ると『ペット申請書』という紙が見つかったので入口に戻る。

「ほい、これに必要な事項を書き込んで俺のところに持ってきてくれ」

「おおきにな」

「これも仕事だからな」

「じゃあウチ戻るわ」

そう言つとこのかはスキップしそうな感じで戻っていった。そんなに可愛いんだらうか？ちなみに俺は猫派だ。それ以外はあまり興味がない。

…とりあえず寝るか。

.....

.....

あ……今日警備の日じゃん！

俺は急いで飛び起きると急いで世界樹の元へ向かった。

結局俺は30分以上遅刻し相方だった刹那にこっぴどく怒られることになる。

もう行く時声くらい掛けて言ってくれないかなあ……

.....

翌日

学園長室

「……というわけですので、エヴァンジェリンの方には学園長から一言言っていたいただけると幸いです」

俺は学園長室に二日前の報告に来ていた。学園長は既にこの件については知っていたが一応報告義務という奴だ。ちなみにアスナに話した時点ではまだ学園長には話していなかったのは内緒だ。

いや！嘘をついたわけじゃないぞ！先のことを話したただけだ！

「そうじゃの。無関係な生徒が襲われるのはこれ以上避けたいもの

じゃ。ワシの方から警告しておこう」

「よろしくお願いします。それからいくつか質問をいいですか？」

「ワシに答えられる範囲ならの」

「エヴァンジェリンは吸血鬼ということ間違いないですよ？」

「うむ、真祖の吸血鬼じゃな」

「真祖？」

真祖って言えばよく本なんかでは吸血鬼の先祖とされる存在だ。

その分強力な魔力と力を持ち他を寄せ付けない圧倒的な力が特徴のはず。なんだけど…

「それって危険性はないんですよね？例えば噛まれた人が吸血鬼化するとか…」

「それに関しては心配いらん。半吸血鬼化はするが魔法で治せるからの」

それを聞いて俺は肩の荷が少し下りた。とりあえず佐々木は大丈夫だということだ。

「後真祖っていうならなんで今のエヴァンジェリンはあんなに弱弱しいんですか？」

「ふむっ、副担任の君には話しておく必要があるかのう」

なんでもエヴァンジェリンとネギ君の父であるナギ・スプリング

フィールドは色々因縁があるらしく、15年前にここに魔力を封じられ、呪いを掛けられたそう。その名も『登校地獄』…

その名の通りずっと学校に通い続けなければいけないらしい。卒業する頃には呪いを解いてくれる約束だったらしいのだが、彼が現れる事はなく5年後に彼は公式記録上死亡となり、呪いを解けるものは誰もいなくなり、現在まで15年間学生生活を送り続けているということだ。

ネギ君を狙った理由としては、呪いを解くにはその呪いを掛けた親族の血、つまりナギ・スプリングフィールドの血縁の血が必要とのことだ。

それだけ聞くとネギ君が危なさそうだが、エヴァンジェリンは、女、子供は殺さないのを信条としているのらしいので危険はないとのこと。

「なるほど、つまり放っておいても大丈夫、と？」

「うむ、君にもネギ先生の経験のためになるべく手は出さないで欲しいのじ」

「はあ、分かりました。よほどのことが起きない限りは手は出さないと約束します。喧嘩を売られた時は別ですけど」

「結構結構。降りかかる火の粉は払ってもらって構わんよ」

あいつに喧嘩売られたら火の粉っていうか火炎放射浴びせられるみたいなものだと思っけど…

「では自分はそろそろ行きます。わざわざありがとございました」

頭を下げて学園長室を後にする。

「今度から報告はもうちょっとはやくのー」

扉を閉める寸前そんな声が聞こえた。まあそれに関してはこちらの不備だ。言い返すことも出来ない。廊下に出て真っ直ぐ教室に向かう。ちなみに時刻は既に放課後。生徒たちもほとんどが部活関係の生徒しか残っていない。

「草薙さん」

そんな中背後から声がかげられた。

「なんだ、刹那か」

俺が振り向くとそこには刹那がいた。いつもどおり背中の竹刀袋に夕凧を入れている。

「今から部活か？」

「はい、そうです」

刹那は剣道部のエースだ。本職が本職だからな。これで他の部員に遅れを取るようでは神鳴流を名乗れないだろう。

「少々お聞きしたいことがあるのですが」

「うん？」

「エヴァンジェリンさんのことです」

なるほど、そういうことが…

「今回の件で…」

「大丈夫だ。このかには危険は行かないし行かせもしない。そこは俺が約束するよ」

「そうですか」

それだけ聞くと刹那は安心したように肩を降ろした。

「それでは私はこれで…」

「おう」

こいつはいつつも心配性だな。前よりはマシだが依然として抜き身の刀のような感覚は抜けない。結局自分よりこのかの命を重んじている感じだ。

その去っていく背中は無自覚だろうとそういう物を感じさせた。こればかりは当人たちの問題だ。俺がいくら言葉で言っても刹那は聞かないし自分の信念を曲げない。

結局機会を待つしかないようだ。

「はあ…なんか先を知ってるっていうのも楽なことばかりじゃないな」

知らずに俺は深くため息をついていた。

S
i
d
e

o
u
t

決別の為…前編（前書き）

追記、7月3日修正

決別の為…前編

S i d e 絡繰 茶々丸

「ネギ・スプリングフィールドに助言者がついたかも知れん。しばらく私の側を離れるなよ」

茶道部の帰り道にマスターが唐突に私に言います。恐らくは朝ネギ先生の肩にいた白いオコジヨのことでしょう。喋ってはいませんでしたがオコジヨ妖精といったところでしょうか。

「はいマスター」

それにしても最近マスターは何かイライラしているようです。原因は十中八九草薙さんでしょう。この間の襲撃が上手くいかなかったせいでまた一月待たねばなりませんからそう考えると当然かも知れません。

しかも以前現れたあの巨漢の人、草薙さんはケリアと呼んでいましたが、あの方は完全にマスターの魔法を無効化していました。マスターの最盛期分の魔力がないとは言え普通の人なら重傷を負っていてもおかしくない威力の『魔法の矢』をです。ということは草薙さんは召喚だけでマスターと互角に並べる方を従えているということになります。

つまりそれは今の封印状態のマスターでは草薙先生がいる限りほぼ100パーセントの確立で襲撃は失敗するということ。

「……おーい、エヴァ」

マスターを呼ぶ声がする。

そちらを見てみると高畑先生がこちらに向かって手を振って歩いてきていました。

私はそれに礼をして応える。

「何か用か」

いつもどおり無愛想にマスターが答えます。やはりその声にはイライラが出ているように感じました。

「学園長がお呼びだ。一人で来い、だつてさ」

このタイミングでの呼び出し、まずネギ先生を襲った件でしょう。

「分かった。すぐ行くと伝える。茶々丸、すぐ戻る。必ず人目のある所を歩くんだぞ」

マスターはこちらを向き、そう忠告すると高畑先生と二人で行ってしまう。ネギ先生に助言者が付いたとなれば各個撃破を狙うのは当然のこと。しかしあちらも魔法使いゆえに人目が付く位置では魔法が使えない。マスターの忠告はそれを見越してのことでしょう。

「お気をつけて、マスター」

高畑先生と一緒に去るマスターに私は聞こえない声をかけました。

この間の一件でネギ先生は『魔法使いの従者』の本来の意味を知った、ということは次は二人で来る可能性が高い。もしかしたらその二人に草薙先生が加わるかもしれない。そうなければいくら私とマ

スターが協力しても苦戦は必死だ。

「草薙さんだけでもなんとかならないでしょうか…」

草薙さんは基本的に生徒に手を出したがる。いや、普通は自分の生徒に怪我をさせようなんてことは先生は考えないので。魔法世界に関してはそれは当てはまりません。命が危なければ自分より年下のもでも平気で手に掛けるくらいの覚悟がないとダメな世界です。

逆に年下の魔法使いでもネギ先生のように潜在能力が高く悪の側に染まる者もいます。そのため一瞬の甘さ、相手への情などは魔法使いは持つてはいけないもの、と私はマスターに教えられました。そういう点でネギ先生はマスターから見れば魔法使い失格らしいです。

目的の場所へ向かう道中。川原には4月らしく桜が咲き誇っていました。生まれて二年、3回目の春はまだ私にとって新鮮なものです。

ふと気が付くと小さな女の子が泣いているのを見つけた。上を見上げてみると風船が木に引っかかっているのが見えます。

私は無言で背中のパニアを吹かして飛び上がるとその風船を手にとって女の子に手渡しました。

「お姉ちゃん、ありがとう」

女の子は満面の笑みで受け取って私を見上げてくる。感謝されるまでもなくこれは当然のことだ。私は人間に生み出された存在。その人間に対して尽くすのは当然のことなのだ。

「バイバイ」

可愛らしく手を振る女の子に、手を振り返してその場を離れます。そんな私を呼びかける声が聞こえます。

「あ、茶々丸だー！」

「茶々丸ー」

見ると前に何度かあったことのある男の子たちでした。しきりに乗せて空を飛んでくれとせがまれますがそればかりは承認できません。何かあつたら私はともかくこの子達が怪我をするかもしれないから。

またしばらく歩くと歩道橋を苦勞しながら上っているお婆さんを見かけた。私はお婆さんに近づくと背中に背負って渡るのを手伝います。このお婆さんも前に何度かこうやって渡るのを手伝ったことがある人です。

「いつもありがとうございます」

お婆さんがいつものようにお礼を言ってきましたがこれも当然のこと。

お婆さんと別れて目的地に向かってまた歩き出します。

「茶々丸乗せてー！」

「お婆ちゃんだけずるいー！」

確かに子供たちの言うことにも一理ありますが背負うのとそのまま飛ぶのではやはり違うので丁寧に拒否します

不意に喧騒のようなものが聞こえました。前を見てみると人だかりが出来ていて川の流れを見えています。

皆さんしきりに不安を口にしています。疑問に思い視線が集まる場所を確認してみる。するとそこには川の流れて流された小さな箱が流れていました。

それだけならそんな注目を集めるはずもなく、問題はその中身です。

「あ……」

中には子猫が入っていたのです。躊躇うこともなく私は川に足を入れると子猫の下にたどり着いて拾い上げました。

箱は思った以上に頑丈だったようで浸水もないようです。子猫自身も怪我はなくどうやら本当に流されていただけらしい。

箱を抱え上げて陸へと帰るとそれを見ていた皆さんは私を拍手で迎えてくれた。

賞賛されるようなことではない。私は人工物なので替えが聞きませんが命は本来一つだけのもの。すべての物事に優先されるものです。男の子たちと別れて再び目的地に向かいます。助けた子猫は私の頭の上が気に入ったのか放熱用なので暖かいのがいいのか落ちることもなくのんびりと欠伸をしています。

リンゴーリン、リンゴーリン

もうこんな時間ですか。少し遅くなってしまいました。子猫が落ちない程度の早歩きで目的地に急ぐ。

いつもの場所に着くと、建物の影から猫達が顔を覗かせた。一匹出てくるとそれに続くように一匹、また一匹と引き寄せられるように集まり、私の周りに摺り寄ってきた。

「ちょっと待っててね…」

集まってきた猫たちにそう言うと下げていた袋から猫缶を取り出してえさ皿に中身を取り出していく。猫たちはお腹が空いているだろうがそれが終わるのをじっと待っている。

「ほら、あなたも」

頭の上に乗っていた子猫を地面に下ろしてやる。周りは大人の猫ばかりなので新人が受け入れられるか少し心配だ。

「さ、お食べ」

えさ皿を差し出すと猫たちは待つてましたと言わんばかりに顔を突っ込んでえさを食べ始める。子猫のほうを見ると一匹の猫がえさ皿から子猫の分を分けていました。

どうやら仲間に入れてもらえたようです。

しばらくその光景を見ていたらいつの間にか餌は綺麗になくなっていった。猫たちは満足したように自由に動き回っています。しかし何故私に擦り寄ってくる猫が多いのでしょうか？

体温を持たない私の体など触っても暖かくないのに…

ゴーーーーー

遠くのほうで鐘の音が聞こえるとそれを合図に猫たちもそれぞれのねぐらに帰っていく。

「また明日ね」

分かるはずのない言葉をその背中にかける。意味はないがこう言っておくと明日もまたココに来てくれるような気がするから不思議です。

猫たちが食べた皿と空の缶を片付けて帰る準備をする。

その時、視界の端に入る人影があった。

「こんにちは、ネギ先生、神楽坂さん」

そこにいたのはネギ先生と神楽坂さん。マスターに言われていたのにここまで接近を許してしまうとは…

こちらから仕掛けたのだからこういう可能性は十分あったのにやはり油断があったようです。

「…油断しました。でも、お相手はします…」

頭部のネジをはずして戦いの体制を整える。

「茶々丸さん、あの…僕を狙うのはやめていただけませんか？」

ネギ先生が懇願するようにこちらを見てきますが…

「申し訳ありませんネギ先生。マスターの命令は絶対ですので」
きっぱりとした拒絶の言葉とともに頭を下げた。

「うつつ…仕方ないです…では、茶々丸さん」

「…ごめんね」

二人とも謝ってくるがその必要はないはずです。こちらから仕掛けた以上その逆もまた然り、狙われる覚悟は出来ています。そういう意味ではマスターが甘いと言っていたのもうなずけるかもしれません。

「神楽坂明日菜さん…、いいパートナーを見つけましたね」

神楽坂明日菜さんはこの間のとび蹴りといい授業中の身のこなしといい素人とは思えない身体能力を見せる。彼女がパートナーというのは正解かもしれない。

「行きます！『契約執行10秒間！！ネギの従者『神楽坂明日菜』』！！」

魔力供給を受けた明日菜さんが突っ込んでくる。

速い…身体能力を強化されていてもこのスピードは予想外だ。迫ってくる右手を咄嗟に左手で弾く。続けて左手が顔を狙ってきたので右手で防ごうとすると…

「えい！」

そのガードをすり抜けて左手の指が私の頭部を打って体制を崩される。

「早い！素人とは思えない動き……」

予想戦力の上方修正を開始……

「！？」

視界の端に映ったのはネギ先生……あの呪文は……！

「『光の精霊11柱………集い来たりて……』」

魔法の矢！ネギ先生を中心に小さい光の塊が11個漂い始める。
明日菜さんに足払いをかけて回避を！

「うつつ……魔法の射手・連弾・光の11矢……！！」

『追尾型魔法、至近弾、多数』

「よけきれません……」

体制を崩した状態からの足払いはやはり無理があったようです……
今から回避に入っても間に合いません。死の恐怖はありません。ロボットである私にそんな感情は不要です。ただ心残りなのはマスターとこれ以上共に行動できないということでしょうか……

「すみません、マスター。もし、私が動かなくなったらネコのエサ

を……」

.....

Side out

Side 草薙亮

右手に気……自身の気を右手に集中しそれを維持…

左手に魔力……同じように魔力を左手に集中…

高まりあったそれらを手を合わせることで…合成！

「ぬっっっっっっっっっっっっ！！」

ものすごい反発力が両手にかかる。一瞬でも気を抜けば両手は弾かれてまた一からやり直した。

近くにあったノートや紙が漏れ出した余波で壁にたたきつけられる。

ぶしっ…

「ずあ！？」

何か切れる音とともに俺の両手は左右反対に投げ出された。

失敗だ…

「痛つてえ…」

両手を見るとその手は朱に染まっている。反発力に耐えきれなかった血管がいくつか切れたようだ。先ほどの音は血管の切れる音だったらしい。これでは今日の練習はこれくらいにするしかない。

以前高畑先生の本気を一度だけ見たことがある。気と魔力の融合、確かこんな感じだったと思うんだが…今度コツを聞いてみようか。

水道で手に付いた血を洗い流す。水の冷たさが傷に沁みるが我慢するしかない。洗い流した手には意外と傷は少なく出血が派手なだけだったとわかった。この程度なら包帯をする必要はないだろう。

今日はこれで5回目…1回目2回目はまともに気と魔力を分けることができなかったのだから相当な進歩だと自分では思う。むしろ5回でここまで行けたほうを褒めるべきだろう。

時刻はそろそろ夕方だ。夕飯を作らなければならない。そう思って冷蔵庫を確認すると…

「ありゃ」

中身は空だったのを思い出した。冷蔵庫の中には調味料と牛乳くらいしか残っていない。

久しぶりに買い物に行くしかない。そう思って財布を持って立ちあがる。手をついたときに痛みが走るが動かせないほどではない。明日になれば普通に過ごすこともできるはずだ。

「あ、草薙さん出かけるの？」

玄関まで出てきたところで今部活帰りなのか明石が正面にいた。

「ああ、ちよつと冷蔵庫が空なのを忘れててな。今から買い物だ」

「ふーん、そういえばちよつと遠いけどどっかで特売やってたよう
な…」

「マジか！」

こういう急な用事もたまには悪くないかもしれない。俺は明石に場所を聞いて礼を言つとその店に向かう。場所は学園都市の端の方だがその分一般の主婦とかも買い物に来るのでそういう特売が多いようだ。

ちなみに最近は学校でも俺のことを「草薙さん」と呼ぶ生徒が増えてきて少し困っている。公私混同しないのがモットーなので注意はしているのだが生徒からすれば「さん」で呼ぶほうが親しみやすいのかもしれない。ネギ君も学校でそう呼ばれてるし…

いや、ネギ君の場合は元々か。

遠くのほうで夕方を伝える鐘が鳴っている。そろそろ暗くなるころだ。いくら春とはいえ暗くなるのは早い。

少し歩くと魔力の高鳴りを感じた。

「あ？」

場所はすぐ近く。この魔力は…ネギ君？

「何やってんだあのアホ」

まさかまた人前で魔法を使う気じゃないだろうか：そう考えた俺は気を足に込めて地面を蹴る。最近はこの移動も慣れてきて使いこなせるようになってきている。

近くの建物の屋根を蹴りながら最短距離で目的地に到達するとそこにはネギとアスナが格闘と戦っていた。

結局アスナはこの世界と関わりと決めたとようだ。その判断自体俺は何も言えない。俺には止める権利も義務もないしそれで死ねばそれまでだ。

だが俺はその光景を見てフツフツと怒りがわきあがってくるのを抑えられなかった。

「あのクソガキ……」

当然その怒りはネギ：いや、クソガキに向いていてる。各個撃破を狙うのは戦術として間違っていない。強者を弱者が倒すためには奇襲や奇策をするしかないのだからそれは認めよう。だが………：先生が生徒を進んで傷つけるようなことがあってはならない。

「『光の精霊11柱：集い来りて……』」

しかも唱えているのはエヴァンジェリンの時さえ唱えなかった攻撃魔法！？

アスナに格闘が足払いし、体制を崩したところに向かって魔法を完成させる。

「『魔法の射手！連弾、光の11矢！』」

体制を崩している茶々丸は当然避けられないし迫りくる魔法の矢を見ることしかできない。格線の口元が動いているのが一瞬だけ見えた。

「……私が動かなくなったらネコのエサを……」

それを見た瞬間脳は動かなくても体は本能で動いていた。全力全開の瞬動。足の筋が悲鳴をあげるが一瞬だけ耐えられればいい！

瞬間的に格線の眼前に立つと気を込めた足で魔法の矢の迎撃を開始する！

迫ってくる魔法の矢は11本、明らかに手数は足りないが…

「おらあ！」

瞬動で悲鳴を上げていた足を更に強化、ハイキックをはなった瞬間…

ぶちっ！

明らかに血管の音ではない何か切れる音が体に響いたがそんなこと今は関係ない。振りぬいた右足は予想を上回る本数の魔法の矢を巻き込んで爆発し辺りに砂埃を撒き散らす。

が、そこまでだ。消せたのは7本で残りの4本は消せていない。それらは意思を持つように…俺の体を穿った。

腹部に2発、軸足にしていた左足に1発、体制が崩れた…頭部に1発。最後の1発を受けて俺は後方に…茶々丸に向かって吹き飛んだ。

「草薙さん!？」

格線が驚きの声をあげて俺を受け止めたのを感じた。女の子に受け止められるなんて…格好つかないな…

格線は声からしてどうやら無事だ。撃ちもらしがあったらまずいと思っていたがどうやら心配なかったようだ。

目をあけるとそこには何も映っていなかった。いや正確には映っていなかったわけではない。そこに見えたのは…紅蓮。俺の視界を染め上げているのは赤一色だった。それを見て俺はまるで他人事のようにこれは俺の血だと理解した。

体は動かない。相当なダメージを負っているのは確かだ。特に酷使した右足はひどい。魔法を受けた全身よりこっちの方が問題だ。それに加えてこの出血。何らかの障害が残るのは覚悟しなければならぬ。いや、そもそも俺がこの後生きていればの話だが…手を上に伸ばすと何かに触れた。恐らく茶々丸だろう。

(君があの世界で何を成し遂げるのか。それとも何もしないのか。天から見届けさせてもらうよ)

ふいに神様の言葉が頭をよぎった。

「(一応…生徒は守ったよ…)」

そう思った直後に俺の意識は消えた。

Side out

決別の為…前編（後書き）

後編は12時か13時くらいに投稿します。

決別の為…後編(前書き)

追記、7月3日修正

決別の為…後編

Side 絡繰 茶々丸

私は夢でも見ているのだろうか…

魔法の矢が当たる瞬間、草薙さんが私の前にいきなり現れました。なぜなのだろう…彼はネギ先生の味方で私たちとは敵対する関係にある彼が何故私を庇うのだろうか？

草薙さんは気を込めた蹴りでいくつかは打ち消したようでしたが、消しきれなかったそれらを全身に受け吹き飛んだ。

「草薙さん!？」

飛んできた草薙さんを受け止める。大人の男性を受け止めれば普通は一緒に転がる場所だが私にはそのようなことはない。この身を作ってくれた人たちに感謝しなくてはいけない。

急な状況に追い込まれて思考を停止した私に無情にも頭に搭載されているコンピュータが機能し始める。

状況 - クリア 損傷無し。

当然だ。草薙さんが庇ってくれた

敵戦力二名、戦意喪失、該当理由不明

そんな情報はどうでもいい

（現在地に置ける負傷者を確認

最初から確認している！

負傷者、全身打撲、頭部に裂傷による出血を確認、危険レベル

そう、目の前草薙さんの顔は頭部から流れ出る血で真っ赤に染まっている。草薙さんの目が…開いた！？

「草薙さん！」

私の呼びかけが聞こえたのか草薙さんの右手が持ち上がった。しかし目は流れ出た血により見えていない。その手は何かを求めるように…私の頬に触れた。それを感じ取ったのか草薙さんの顔が笑顔を作る。まるで自分は心配いらなくても言うように…

その手は少し私の顔を確認するように撫でた後…落ちた。その手は血が付いているが手自体に傷は少ない。草薙さんの頭部から流れ落ちた血が既に腕を伝って手先まで流れてきているのだ。

「く、草薙さん！？」

「そんな…なんで！」

向こうの方でネギ先生とアスナさんが叫んでいるのが聞こえますが今はそんなことどうでもいい。

「くっ！」

ハンカチを取り出すと頭部にきつく巻きつける。当然その程度では出血は収まらない。あくまで出血を緩めるためのものだ。急いで病院に運ばなければならない。

負傷者の体温、脈拍低下を確認

こういう時は搭載されたコンピュータがありがたい。いや、それでも病院には間に合わない。運び込むころには草薙さんの命は燃え尽きてしまう…

しかし学校の医務室ではこの出血に対応できる設備はない。対応できるとすれば

「草薙さん、失礼します！」

草薙さんを抱えあげると私は最速で空に飛びあがる。向かうのはマスターの家。医務室よりは遠いが病院よりは近い。それにマスターなら治療用の魔法薬を持っていたはずだ。マスターが敵側の人間だからといって見捨てるようなら私にも手はありませんがそこは賭けるしかありません。

後ろでネギ先生とアスナさんが何か叫んでいましたがそれを聞いている暇はありません。今は何よりこの人の命が第一！

家にたどり着くと扉に手をかける。

「あ…」

扉には鍵がかかっていた。ということはまだマスターは戻っていない…

絶望しながらも扉の鍵を開けて草薙さんをソファに横たえる。やはりハンカチでは時間稼ぎにもならない。すぐさま頭を横たえている部分が赤く染まっていく。

急いで救急箱を取り出し包帯を巻きなおすがそれでも包帯はすぐに血を吸収してしまつて止血できていない。漏れ出した血がソファを先ほどと大して変わらない速度で赤く染まつていく。急いで魔法薬を探さなければならぬ。

確かマスターが管理していたはずだ。失礼とは思いつつもマスターの部屋まで駆け上がり棚を漁るが…ない、机の引き出しも、タンスも、棚の下も中もどこにもない…考えられるとしたら…

「別荘！」

思いついて地下に駆け降りようとしたその時…

「茶々丸、外の血はなんだ？」

玄関からマスターの音がしました。良かった、帰ってきた！

「む？なんだこれは…おい茶々丸！」

マスターも草薙さんを見たようです。一階に降りてきた私と目が合いました。

「どういふことだ、説明しろ！」

「草薙さんが…とにかく治療を！」

「ちい…茶々丸、別荘に運べ！」

説明をしている暇がないと分かつてくれたのかマスターが私に怒

鳴ります。

別荘のダイオラ魔法球。本来はその名前通り別荘として使うものだが今はその場所で治療が続いていた。

「茶々丸、そっちの薬をとってくれ」

「はい、マスター」

私は言われた通りの薬をマスターに手渡す。今は既に小康状態に入っていて、ベッドの上では草薙さんの胸が上下に規則正しく動いています。マスター自身は不老不死なので治療魔法は不得意ですが魔法薬や薬草学、医療学などには精通しています。

当初あれだけ出血の止まらなかった頭部の傷もマスターが持ってきた薬を塗ると直ぐに収まり血が止まりました。外の病院ではここまで早急な治療はできないでしょう。やはりここに連れてきたのは間違いではなかったようです。

今マスターに渡したのは増血薬。出血が収まったからといって直ぐに血が戻るわけもなく、圧倒的に血が足りない草薙さんに輸血する物もないので造血薬を使うしかないのです。

薬を飲ませ終わったマスターが空になった瓶を投げ捨てました。どうやら終わったようです。

「茶々丸、今度はそれだ」

「？もう治療は終わったのでは？」

「頭部の傷はな」

マスターが指をさす方向には草薙さんの右足がありました。一見異常がないように見えますが…

「筋肉も神経も切れている。このまま放っておけばこいつは歩けなくなる。何をやればここまでなるんだか…」

「な…」

「分かったらさっさとそれをよこせ」

慌てて言われた通りマスターの指示したものを手渡します。それらを飲ませた瞬間草薙さんが大きく跳ね上がりました。

「ま、マスター…いったい何を」

「ふん、一番強力な治療薬を飲ませただけだよ。神経や筋肉系は普通の人間の治癒能力じゃまず治らないからな。数日は動けないだろうがこれで完治するだろうよ」

そういつとマスターはそれらの瓶も投げ捨て私に向かい直ります。

「さて茶々丸、そろそろ話してもらおうか。敵であるこいつが何故こんな怪我を負ってお前が運んできたのかを…」

「はい」

その目は全てを見通すような目をしていて…私は包み隠さず全てを話しました。

「ふうん、こいつがお前をなあ…」

「はい」

話を聞き終わったマスターは心底呆れつつ、草薙さんの頭を一回拳骨で殴りました

「ま、マスター！」

「ま、どんな理由があったにせよこいつにはさつさと目を覚まして説明してもらわなければなるまいよ。私の秘蔵の魔法薬まで使わせたんだ。つまらない理由なら私が直々に殺してやる」

そう言いながらマスターは気を失っている草薙さんの頭にチョップをいれ続けています。さ、さすがに治ったとはいえそれはまずいのでは…

「ふうん…」

「お、目が覚めたか？」

偶然でしょうか…18回目のチョップを入れたときに草薙さんから声が漏れました。それでも声が漏れただけで目を覚まそうとはしません。やはりまだ…

「ほれ、さつさと起きんか」

ビシビシと先ほどより強くマスターがチョップを入れます。何故か草薙さんの目が開きました。あのチョップにも癒しの効果があるのでしょうか？草薙さんの目がきよろきよろと動き私とマスターを捉えました。

「よう、エヴァンジェリン、格繰」

その声はひどく弱弱しいものでしたがしつかりとしたものでした。もう心配はいらないようです。

「ふん、面倒かけおって」

マスターがそう言いながらベッドの上の草薙先生を見下ろしています。

「格繰、起こしてくれ」

「しかし草薙さん…」

「年下に見下ろされるのは趣味じゃないんだ」

無理やり笑顔を作ってそう私に言いました。なんとというか…私もあきれるしかありません。

「失礼します」

草薙先生の上半身を支えるとベッドから起き上がらせます。どうやら薬の副作用というのは強力らしく手も動かせないみたいです。

「世話をかけたみたいだな」

「全くだ」

「ありがとう」

草薙さんが頭を下げました。

「お礼を言うのは私の方です。あの時はありがとうございました」

慌てて私も頭を下げる。そう、お礼を言うべきなのは私の方だ。

あの時マスターからの魔力供給がなかった私はあの威力の魔法の矢なら粉々になっていてもおかしくなかった。草薙さんが来なかったら今の私はいないでしょう。

「ま、確かに茶々丸を救ってくれたことには礼を言わせてもらおうよ、草薙亮」

マスターがそっぽを向きながら言いました。照れているのでしょうか？

「でだ、話は聞かせてもらったがどうにも納得いかないことがある」

「なんだ？」

草薙さんが頭をかしげています。

「何故茶々丸を助けた。私たちは敵同士だ。あのまま茶々丸がやられていた方がお前たちにとっては得だろう。そこだけが分からん」

草薙さんが『訳が分からない』といった顔をしています。ようやく笑いが収まったマスターがお腹を押さえながら立ち上がりました。「こ、これが可笑しくないわけなからう！いくら生徒だからといって一度襲ってきた相手を襲うでもなく命を賭けて助けるとは…お前も坊やに並ぶ甘ちゃんだな！」

「む、あのガキと一緒にされるのは心外だぞ」

草薙さんは心底嫌そうな顔をしました。

「ほう、あの坊やと貴様が違つと？」

「当たり前だ。俺は自分から生徒を傷つけるようなことはしない。そんなことは先生としてやっちゃいけない」

確かに草薙さんは自分から仕掛けてきたことはありません。いつも自己防衛や他者を守るための闘いはしていたように思いますが…

「ではありえないが例えだが私が助けてと言ってきたらどうする？」

「助ける」

迷いもなく言い切りました。ここまでくるとなにか清々しさを感じます。

「ほう、それでは私がこの呪いから解かれないのに力を貸してくれと懇願したらどうする？」

「断る」

「ほう、それは生徒を助けるのを無視したことにはならないのか？」

「それは魔法使いのお前としての『助けて』だろうが。題目をすり替えようとするな」

確かに途中の問答は完全にマスターの私欲のためでしたが迷いもなく断るとは。

「頭のほうはそこそこ回るか…では貴様は生徒のためには命を賭けると？」

「無論」

隣でマスターを見る目は疲れていましたがまっすぐで…嘘はないように見えました。

マスターはしばらくその目を見ていましたが一つ息を吐くと後ろの椅子に座りました。どうやら草薙さんを殺すという選択肢はなくなつたようなので一安心です。

「あのさあ、格線。一つ俺からも聞きたいんだけど…」

「なんででしょうか？」

「じじじじじ」

Side out

ダイオラマ魔法球。そこが今、俺がいる場所の中だ。通常エヴァンジェリンの別荘。外の1時間が中では1日となる魔法具。

チート…それが聞いた時の感想だった。

俺は現在その中の砂浜を歩いている。隣には巨大な円形の構造物、春先だというのにジリジリと太陽が肌を焦がし、頬を撫でる風はまさに夏のそれだ。

ちなみに既にここに入ってから4日経つ。つまり外の世界ではあれから4時間しか経っていないということだ。

「チートだよな…」

ついついつぶやいてしまう。

俺は現在リハビリ中だ。昨日の時点で感覚さえなかった右足が少し動くようになってきたので松葉杖をつけて歩く練習をしている。周囲には誰もいない。エヴァンジェリンも茶々丸も家のほうに戻ってしまった。まあ既に意識はあったしもう危険な箇所は過ぎたのだから当然といえば当然だろう。それに経過を見るのであれば外で1時間過ごしてまた入ってきたほうが早く見れる。

だがまだまともに歩けない俺には当然お守り役みたいなのがいるわけ…

「ヨウ、ドコニ行ツタカト思エバコンナトコロニヤガッタ」

頭上からの声と共に俺の頭が重くなった。

「いい加減頭の上に乗るのはやめて欲しいんだが」

頭の上に乗った奴を俺が掴もうとするとそれは俺の手をすり抜けて眼前に下りてきた。

「マア固イコト言ウナ。コチトラオ前ノオ守リヲ命ジラレテ暇でシヨウガネエンダ。チョットクライ弄ラセロ」

身長70cmほどの人形。見た目は昔のホラー映画の殺人人形といえは分かりやすいだろう。名前はチャチャゼロ。エヴァンジェリンの昔からの従者で茶々丸の姉…らしい。

チャチャゼロはエヴァンジェリンが俺の世話役としてここに置いていった。チャチャゼロ本人としては会話から読み取れるように不満たらたらな訳だが主人の命令に従うのはやぶさかではないらしい。

ちなみに二日目の夜にふと目が覚めたときこいつが枕元でナイフを振り上げていたのは一生思い出したくない光景だ。下手なB級映画よりよっぽど怖かった。しかもその後舌打ちしてたし本気で殺す気だったんじゃないだろうか？

「デ、ドウダ。治ツタナラオレト一丁殺ラナイカ？」

「ウホ、いい人形…」

「ア？」

「すまん、失言だ。忘れてくれ」

なんか前世のある漫画の1シーンが思い浮かんでしまったが頭を振ってそれを打ち消す。なんか色々とまずい気がしてならない。

「ドウナンダヨ」

チャチャゼロはどこから出したのか刃渡り18cmほどの巨大なサバイバルナイフ二本を暇そうにお手玉している。あの小さい体のどこにあんな力があるのやら。チャチャゼロは普段エヴァンジェリンの魔力が低いせいで動けないがこの別荘の中では魔力が多量にあるので動ける。だからこういう時は思い切り動きたいのだろう。

俺も出来れば付き合ってやりたいがこいつと殺しあった場合今の俺ではミンチ確定だ。こいつに手加減なんて言葉はない。ただ単純に俺を切りたくてウズウズしているのだ。

もうお前映画に出るよ。

「いや、まだ動けるようになっただけでチャチャゼロの期待できる動きが出来るわけじゃないから遠慮しておくよ。お前もほとんど力のない相手を切ってもつままないだろ？」

「マアソウナンダケドヨ…ア、貧乏クジヒイタゼ」

チャチャゼロは投げっていたナイフを壁に投げつけるとフワフワと建物の上へ飛んで上がっていった。ナイフを見ると石の壁に柄の部分まで突き刺さっている。マジ勘弁……

階段を頂上まで上がる。普段は変哲のない階段でも片足が使えないとなれば急に苦しくなる。上がりきる頃には俺の息は切れて肩で息をしていた。

「今日はこんなもんか…腹減ったなあ」

その場で俺は横になる。明日になれば足も少しは動くようになるだろう。その時この魔法球の入口が光った。誰かが入ってきたようだ。

「草薙さん」

「茶々丸？」

俺は入ってきた茶々丸を見て体を起こす。ちなみに茶々丸も名前で呼ぶことを了承してくれた。この学園の生徒は意外と心が広いのか…

「何かようか？」

「はい、マスターが様子を見てこいと」

そりゃあわざわざご苦労様なことだが…

「そんなことのためにわざわざ入ってきたのか？」

ダイオラマ魔法球は一回入ると中の時間で一日経たないと外に出れない。外の時間では一時間でも体感時間は24時間だ。俺はもう4日いるから平気だが茶々丸はこの程度のことを伝えるために24時間中で待たなければならない。

「大したことではありません。シャットダウンすれば24時間程度は直ぐです」

「そ、そうか…そういえばロボットだったな」

「はい、そういう訳ですので草薙さんはお気になさらず」

うーん…でも何か礼くらいはしたいな。そう考えた瞬間俺の腹が盛大に鳴った。

「ア…はははは…」

「お腹が空いているのですか？」

「うん、まあ…ね」

俺の顔が真っ赤になるのを感じる。恥ずかしいっいたらありゃしない。

「よければ何か作りましょうか？」

「外はいいのか？」

「お腹の空いた状態だと人は怒りやすいのだと教わりましたので」

茶々丸らしい。そういう所では全然ロボットらしくないな。

「それならお願いしようかな」

「オウ妹。俺ノモ頼ムゼ」

いつから聞いていたのかチャチャゼロが俺の頭に乗った。

「だから頭に乗るなって」

「イイジャネエカ。減ルモンジャネエンダシ」

「お前に頭の上を取られるのは不安でしょうがない」

何せさつきまで殺させろといっていた奴だ。そんな奴を冗談でも急所の近くにおいておくほど俺も肝が据わっていない。

「チ、ツレネエナ」

そう言いながらもチャチャゼロは俺の頭を降りると俺の横に浮かぶ。

「では二人分作りましょう。少々お時間はかかりますが」

「ん？茶々丸は食べないのか？」

二人分ということは一人分足りない。恐らく茶々丸は自分の分を排除しているのだろう。

「私に食事は必要ありませんので」

そう言い放った。まあロボットだからそうなのかもしれないが。

「食べることは出来ないのか？」

「食べる機能は付いていますがそれらを栄養にしたりすることは出来ません。あくまで内部に留めるだけです」

「でも食べられるんだよね？」

「ええ、それは可能ですが」

「なら茶々丸も食べ」

「え？」

茶々丸が心底不思議そうに首をかしげる。俺は何か変なことを言っているんだろうか？

「俺たちが食べるのに一人だけ見ているのなんて食べにくくてしょうがねえよ。それに食事は大勢で取ったほうが上手く感じるもんだ」

「そういうものなのでしょうか？」

「そういうものだ」

再び首をかしげた茶々丸を俺は無理やり納得させる。

「いいのでしょうか？」

「イインジャネエノ？俺八構ワネエゼ」

チャチャゼロに至ってはノータッチのようだ。多分上手い飯が食べればどっちでもいいんだろう。

「そんじゃ3人分よろしく」

「分かりました」

茶々丸は一つお辞儀をして厨房へ向かう。

食事が終わったのは一時間後だった。と言っても現実世界では24分の1の速度なので茶々丸が入ってから大して時間は経っていないだろう。

「さて、俺はそろそろ一回外に出るよ」

いくら外の時間が4時間しか経ってないと言われても人づての情報なんて中々信じられるものじゃない。言っておくが俺は自分で見たことしか信じられないタイプだ。一回外に出て確認してみなければ…

「そうですか、ではお気をつけて」

茶々丸が食器を片付ける手を止めてお辞儀をしてくる。

「ケケケ、死ンダトキハオレガ解体シテヤルヨ」

「冗談でもそうというのはやめてくれ…」

チャチャゼロの冗談は冗談に聞こえない…「冗談ダヨネ？」

魔方陣を通り外に出る。あの時は夕方だったのであれから4時間ということ今は夜ということだ。魔法球が置いてあるのは地下なので時間が分からない。一階に上がるとそこは真っ暗だった。一応月明かりが入ってきてはいるが先ほどまで魔法球の中は太陽が出ていて明るかったので目がなれない。どうやら本当に4時間ほどしかたっていないらしい。

「なんだ、出てきたのか。」

不意に階段の上から声が聞こえた。

「その様子だと動けるくらいには回復したようだな。茶々丸を向かわせた意味はあまりなかったか」

「いや、おかげで上手い食事になりつかせてもらったよ」

階段の上から降りてきたエヴァンジェリンに向かって軽く頭を下げる。

「といつても貴様はまだ満足に動けるわけではないはずだぞ？今から寮に帰る気か？」

そう、今の魔方陣まで移動して一階が上がってくるまでも結構体力を使っている。この状態では寮にたどり着く前に力尽きてしまおうだろう。

「ついでだ、朝まで泊まっていけ」

「いいのか？」

「途中でくたばられでもしたら私の苦勞が無駄になるからな」

エヴァンジェリンも自分では『悪の魔法使い』と言っているがこれはこれで面倒見がいいのかもしれない。

いや、茶々丸を助けた礼のつもりなのかも……ならば今はそれに甘えさせてもらおう。

「そうか、ならその言葉に甘えようかな」

「ちなみにベッドなんてものはないからそこで寝るよ」

そう言っつてエヴァンジェリンはリビングのソファを指差した。まあそれでも十分だ。もう一つのソファは俺を寝かせたせいなのか一部だけがどす黒く染まっている。ちょっと自分の血でも気分悪いな。

「ちなみに許可なく二階に上がってきてみる。私直々に貴様の命をとめてやる」

「肝に銘じます」

まあそんな気はさらさらないんだけどな。俺ロリコンじゃないし幼女に興味は…

「ナゼニマハウノヤヲテンカイシテイルノデスカ？」

「いや、何か失礼なことを考えなかったか？」

「ソナナコトミジンモナイデスヨ？」

何かエスパーっぽい人が多いよこの学園。いや、エヴァンジェリンは吸血鬼か。てか満月じゃないと魔法使えないんじゃないのか！？

「せめて布団が欲しいです」

「勝手に風邪でも引け。どうせ明日は休みだ。学校なんてないだろ」

仰るとおりで…ま、押しかけの分際でそこまで望むのは贅沢って

もんか。

「じゃあな」

「ああ、お休み」

俺がそういつとエヴァンジェリンは何も言わずに上入を上げていった。さて、俺も寝なくては…

.....

三時間後…

「『別荘』で寝すぎたせいで寝れねえよ…」

結局俺は次の日の朝方まで起きていた。

決別の為…後編（後書き）

一応次でエヴァンジェリン戦を締める予定です。締まるんだろっか
…下手したらもう一話挟む可能性も…
なんとかするようになんばってみます。

自らの想いの為… 前編（前書き）

追記、7月3日修正

自らの想いの為… 前編

Side 草薙亮

日曜日モエヴァンジェリン宅にお世話になった。特に理由は無いがあのがキと一緒にのところにいたくないというのが本音だ。特にやることも無かったのでエヴァンエリンに魔法を教えてくださいと頼んだと云う…

「貴様の前呼び出した奴の正体を教えたら教えてやる」

と言われたので丁重にお断りした。流石に切り札をホイホイ教えるほど俺は強くない。ただ別荘は好きに使っていいと言われたのでリハビリのためにまた4日ほど使わせてもらった。一応問題だった右足も問題ないようだ。これならいつもどおり動けるし行動できるだろう。

そんなこんなで月曜日…

エヴァンジェリンが風邪を引いた…

「ワロスｗｗｗｗｗｗ」

俺の目の前には息遣いを荒くして顔を真っ赤にしながら俺を睨んでいるエヴァンジェリンがいる。表現だけ聞くとエロイが決してそんなことは無い。ちなみに口には体温計を咥えている。

「38度5分か…完全な風邪だな」

「う…うるさい…ズズズ…」

「ちなみにマスターは花粉症も患っています」

「こいつ本当に吸血鬼か!？」

後ろで氷囊を持ってきた茶々丸の言葉に俺は思わず大声を上げました。

「だ…うるさ…」

「あ、すまんすまん」

声を上げるのもつらそうなのに無理をさせてしまった。ちなみに俺は既に学園のほうには連絡している。学園長に直接電話したら『それなら今日は大丈夫じゃろ』なんて言っただけだった。

この学園大丈夫か？まあそのおかげで俺はエヴァンジェリンの看病できるんだけど。

その時外の呼び鈴がなる音がした…この魔力反応って…

「あのクソガキ…何の用だ？」

外にいるのはあのガキだ。しかも「誰かいませんか？」とか言っ

て入ってきやがった。不法侵入って言葉を知らんのか！

「茶々丸、頼む」

「はい、リヨウさん」

そういつと茶々丸は対応する為に下に降りていった。ついでに言うとなぜか茶々丸はこの家の中のみメイド服だ。エヴァンジェリンの趣味らしい。そういえば下の部屋もそういつ人形ばかりだったな。

そしていつの間にか俺のことを『リヨウさん』と呼ぶ様になっていた。まあ呼びにくいなら名前でもいいって言ったのは俺だけだね。

「う…」

「あ、おい！」

声が出たので見てみるとエヴァンジェリンが起き上がろうとしている。慌てて支えてやるがその手を払いのけられた。

「どうするつもりだ」

「決まっているだろう…坊やの相手をするのさ…」

「その体でやるつもりかよ…」

「当然だ…そこをどけ」

そう言いながらエヴァンジェリンは枕元の魔法薬を手にとって階段へ向かっている。無理やりとめることは出来たがあそこまで覚悟

を出しているものを止めるのは俺としてはやりたくない。

悪の魔法使いも大変なんだな…

階段を下りていったエヴァンジェリンを見送ってすぐ何かを言い争うような声が聞こえ、その後魔力反応がわきあがる。本気でやるつもりか!?

「わーーーーーーー!」

と思った瞬間エヴァンジェリンの方の魔力が消えた。同時に聞こえてきたのはガキの声。どうやらエヴァンジェリンは力尽きたようだ…

おお、エヴァンジェリンよ。死んでしまつとは情けない。言ってる場合じゃなかった。顔は合わせたくないがこの際言っていられない。階段を下りるとそこには倒れたエヴァンジェリンを抱えているガキと茶々丸がいた当然目が合ってしまう。

「ア……………」

「ちつちと運ぶぞ」

「は、はい…」

見るからに気落ちしている。一応責任は感じているといったところか。まあこの後の対応はいただいな…

エヴァンジェリンを抱えあげると再びベッドに横たえる。

「ではリョウさん。私はツテのある大学でよく効く薬を貰ってきてますのでマスターをお願いします」

「ああ、気をつけてな」

「では、ネギ先生も」

そういつと茶々丸は家を出て行った。そこに残っているのは眠っているエヴァンジェリンと俺とガキ。当然会話なんてあるわけも無く、気まずい沈黙がその場を覆っていく。

「あ、あの…僕…」

その空気に耐えられなくなったのかガキが立ち上がる。ここで帰るなんていつたらぶん殴っているところだが…

「すみませんでした！」

いきなり頭を下げてきた。この場合はちょっと違うんだがな…

「いきなりだな。病人の横だ。下に降りるぞ」

「はい」

一応言い分くらい聞いてもいいだろう。そう判断して階段を下りる。ソファに腰掛けるとその正面にガキも腰掛ける。

「あの…怪我のほうは…」

「エヴァンジェリンに治してもらった。あの時は死にかけたけどな」

「あつ…」

思いつきり嫌味を込めた台詞を投げつける。

「さて、じゃあ言い訳を聞こうかガキ」

「ち、違つんです。僕は……」

「俺じゃなくて茶々丸を狙つたつてか？」

「う……」

百面相じゃねえんだから少しは覚悟決めて聞けよ……

「つまりお前は自分の敵だから先に殺してしまおうとそういっわけだな？」

「……………」

だんまりか……まあ言い返すことも出来ないってことなんだろうな。

「確かにお前とエヴァンジェリンの差は歴然だ。正面から倒そうと思つても倒せないかもしれない。格闘撃破は弱者が強者を倒す上では基本だ。それを否定するつもりは微塵もない。だがな……それでもお前は先生なんだ」

先生と言う言葉にガキの体が反応する。

「お前の行動が魔法使いとしては最良の選択だとしよう。だが教師と言つ立場から見ればお前は不良が気に入らないから殺してしまおうと言つ殺人者と変わらないんだよ」

はつきり言つてこいつは幼い。体はもちろん精神も…だがこの冷酷な現実を受け入れてもらわなくてはならない。この時点で逃げ出さないのは驚きだ。ある程度覚悟は決めてたと言つことだろう。だが彼にはこれ以上の覚悟ケジメが必要だ。

「それに…茶々丸を殺してしまった場合エヴァンジェリンが復讐に来る可能性を考えなかつたのか？」

「そ、それは…」

「エヴァンジェリンが弱かつたから茶々丸さえいなければ勝てるとも思つたか？そうだとしたらお前は屑同然だ。相手の力量も見抜けない、教師として生徒を殺しかける、おまけに考えも浅慮極まりない」

「う…う…う…」

さすがに涙腺が耐え切れなかつたのか涙を流し始める。

「何故逃げる。何故立ち向かわない」

「え？」

涙でシワクシャの顔を上げてきた。俺の言つたことを理解できていないのか。それとも聞こえなかつたのか…

「お前はまだ幼い。壁にぶち当たることもあるだろう。だからこそ逃げるな、目を背けるな。それを乗り越えてこそ掴める物もあるかもしれない。少なくとも『立派な魔法使い』は逃げないんじゃないのか？」

『立派な魔法使い』という名前が出た瞬間ガ…ネギ君の顔つきが変わった。

まあ高音たちに偉そうに説教した身分ではあるがここではそれが一番効くだろう。

「ま、とりあえずエヴァンジェリンの件は俺は介入せん。自分の力で何とかしてみろ」

「は、はい！」

涙をグジグジと袖で拭いてあげてきた顔には先ほどよりは覚悟があるように見えた。これで今後こういうことがなければいいんだがまあこれから期待か。良くも悪くもまだ子供、今からだな。

.....

ネギ君と俺はエヴァンジェリンの枕元で様子を見ていた。

「そっいえばエヴァンジェリンさんはなんで風邪なんか引いてるんですか？不老不死なのに」

「魔力が減ったエヴァンジェリンの体は元の10歳の体のままなんだ。だから季節の変わり目にはよくあるらしいぞ」

「…そう…なんですか？」

と言つても俺も茶々丸からの受け売りだ。本当かどうかなんて知らん。

その後は二人で普通に看病していた。のどが渴いたときは血しか飲まないのでネギ君の血を飲ませたり、暑いといったらカーテンをして日差しを遮る。

「う…寒い」

わがままな奴だ。今度は寒いかこんちくしょう！

「汗でパジャマが…着替えさせないと！」

そついいながら何故か目隠しをはじめめるネギ。

「何してんだ？」

「い、イギリス紳士として女性の裸を見るわけには」

「アホか。こんなもんはな…」

そついうと俺はエヴァンジェリンの服をすべて引っぺがして裸にする。

「わ……………!!」

ネギが声を上げて顔をふさぐがロリコンじゃない俺には関係ない！

「ちやつちやと着替えさせれば終わりだろうが！」

神業とも言える速さで全ての服を着せさせた。ネギが「ほえー」とか言って目を見張っている。大人になったら親戚の小さい子供の着せ替えなどお安い御用だ。

さて、目を覚ましたときのことを考えてお粥でも作ってやるかね。

「じゃあネギ君。後は任せた」

「え？ぼくがですか？」

「もうやることも無いだろ。俺は下でお粥作るから見といてくれ」

「わ、分かりました」

そう言う俺は厨房へ向かう。そこには既に茶々丸が作るうとしていたのかお粥の材料がそろっていた。これなら後は混ぜるだけだと思つたら米が炊けていなかった。茶々丸も意外とうっかりなのか、それとも俺が作ることを予想してなくて自分の帰ってくる時間に合わせてるのかもしれない。

「…ちよつと寝よう」

朝早くから看病しているので少々眠気が来ている。俺はそう思うと目を閉じた。

.....

ドタドタドタドタ…！

「うあ？」

騒がしい音に目を覚ました。時間は…1時間くらいか。しかし何やってんだ？

「殺す！今殺す！」

「うひい……………！！！」

何故か元気なエヴァンジェリンとネギ君が上から駆け下りてきた。ネギはそのままドアから逃げ出していつてしまう。

「もう治ったのか？」

扉のところで肩を上下させているエヴァンジェリンに近づいて声をかける。その目が俺を『きっ！』睨んだ。

「貴様も治ったらさっさと帰らんかあ！」

「なんでじゃああああああアアアア！！！」

所謂八つ当たりだった…

扉を出たところで茶々丸と遭遇した。

「お、おかえり茶々丸」

「はい、リョウウさん。マスターはもう？」

「アア、元気になったみたいだ」

「そうですね。ありがとうございます」

そういつと茶々丸は頭を下げてくる。つか特に俺も何もしてないんだけど…

「まあ今日一日は様子見て明日来れそうなら来てくれってエヴァンジェリンには伝えてくれ」

「承りました」

そういつと俺は茶々丸と別れて寮に向かった。

翌日、朝職員会議

いつもより早い時間に始まった職員会議は今夜の話になっている。

「というわけで、年二回のメンテナンスの為今夜の8時から12時の間学園都市一体は停電となります。教員一同お忘れなき用に。特に初めての草薙先生とネギ先生は気をつけてください」

メガネをかけた、いかにも教師といった風の中年の男性、新田先生が注意を促してくる。

俺は話を聞きながら今日の予定を考える。とりあえず夕方までは通常授業だ。大停電となればこの学園に侵入する敵も増えるはずだ。多分警備に狩り出される。

と言ってもこちらには最強レベルの高畑さんがいるし、他の魔法先生たちも全て警備に借り出されているはずだから大した心配はないだろう。

「では本日の職員会議はこれまでとします。いつも以上に引き締めて授業を行ってください」

新田先生の声で会議が終わる。ネギ君のほうを見ると心ここにあらずと言った感じだ。エヴァンジェリンのことでも考えてるのだと思う。まあ任せると言ったし任せるか。結局放課後まで特に何もなくいっつもと同じ風に時間は過ぎていった。授業が終わった途端生徒たちが停電を楽しみだといった風に散っていくのは少し呆れたが、平凡な学生生活に年二回のこういうイベントは刺激的なのだろう。

寮に帰る途中ではあちこちで停電用のろうそくやらなんやらを売っていた。たった4時間の停電にそんな蝋燭とか使わないだろうとか思っていたら学生はすごい買っていた。蝋燭10本とかカンパンとか買つてどうするんだよ…

しかしまあ天気が悪い。雨は降らなさそうだが雲が厚いのだ。湿気はないのにこの空気は正直参る。

「あ、草薙さんや」

「やつほー」

「こんばんわ」

寮の廊下で声をかけられた。和泉、明石、大河内、佐々木が寮から出てくる所だった。持っているものからすると今から大浴場に行くのだろう。

「今から大浴場に行くのか？」

「そつやで」

「停電までに間に合うのか？」

時刻は既に7時前。いくら寮内にあるからと言って今から大浴場に向かつて出てくると8時は回ってしまう。一時間は長いと思うかもしれないが古今東西女の人の風呂は長いと決まっている。つまり停電時間までには帰ってこれない計算だ。

「ダイジョブダイジョブ。何とかなるって」

「こつ言つてまき絵が聞かないんです」

佐々木の能天気な答えにアキラがあきれているを。なんていうかまあ……ご愁傷様。

「そつか、早く戻つて来いよ。危ないからな」

「はい」

「ほなな〜」

「じゃねー」

「なんなら草薙さんも一緒に……」「ゆーな!」「冗談じゃんかよー」

「……………」

「あれ?草薙さん?」

「……いや、その申し出っけよっ」

「はい?」

「だから風呂」

「……………」

あー、まずい何か壮絶な勘違いの予感。

「お前ら何か勘違いしてるようだが言っておくが単に危ないから外で待ってるだけだぞ?」

「そ、そうだよね」

「そっだよまき絵!何考えてんのさ!」

「び、びっくりした……」

「あっあっあっ……」

4者4様の反応を返してくれる……それから和泉、何で顔真っ赤にしてあっあっ言ってたんだ。話聞いてたか?まあ俺の言い方も悪かったけど全員和泉ほどではないが赤くしているので年相応ってところ

かな。

「そんじゃま行きますか」

俺はそんな4人を置いて先行する。なるべく早いほうがいいが…女性の風呂は長いからな。絶対8時は回るだろう。さっさと済ませてくださいいいんだが、古今東西女の（ry

浴場の前まで着くと俺は4人が中に入るのを見送る。

「見ちゃダメだよ」

「さっさと入ってさっさと出て来い」

「ちゃんと待っててね、管理人さん」

明石がいつもの軽口を叩いたがスパツと断ち切る。にやははは、と笑いつつまき絵と一緒に中に入っていった。和泉はチラチラと俺を見ながら入っていくし…俺なんかしたかなあ？宮崎と同じように男が苦手なんて話は聞いたことないんだが。

「あの、草薙さん。ありがとうございます」

一人その場に残っていた大河内が頭を下げて礼を言ってくる。

「これも管理人としての勤めだ。礼を言われる必要はないよ。それならさっき明石にも言ったが素早く入って出て来い」

「はい」

そう言う大河内も中に入って浴場の扉を閉めた。どうせ時間は

かかるだろうから近くの自販機でコーヒーを買って煽ったあと、さつき部屋に帰ったときポケットに突っ込んでいた本を取り出して読み始める。時間をつぶすにはやっぱり本を読むことだ。知識にもなるし無駄にならない。ちなみに読んでいるのは『日本神話 ポケット版』だ。この間本屋に寄ったとき衝動買いしてしまったがこれで中々内容は面白い。リョウメンスクナノカミのような妖怪からアマテラスオオミカミとかの神様までの一覧が簡潔に載っている。

『こちらは放送部です…これより学園内は停電となります』

っと、もうそんな時間か…結局あいつら出てこなかったな。

『学園生徒の皆さんは極力外出を控えるようにしてください…』

一瞬のノイズの後廊下の電気が落ちて闇が周囲を包む。自販機まで電気が消えてる。中身大丈夫なのだろうか…

持ってきていた懐中電灯を付けて辺りを照らす。流石に出てくる生徒はいないようだ。近くの部屋の中から声が聞こえるがそれだけ。てかこの暗さだと中に入った奴ら何も見えないんじゃないだろうか。でも流石の中に入るわけにもいかないし…

頭をかきながら考える。入って変態と罵られながらも一応管理人としての仕事を果たすか、ここで待っていて変態ではないが白状者と言われるか…あれ？結局俺ダメな選択肢しかないね？

「なっ！」

そんな考えが一瞬で吹き飛んだ。学園内の一箇所に見れた極大の魔力反応。ネギ君の比ではない。明らかに学園にいきなり現れたも

のだ。しかも完璧にこちらに移動し始めている。

……これがエヴァンジェリン!? 『闇の福音』^{ダイク・エヴァンジェル}の名は伊達じゃない
ってことか!

しかしどうやって封印を解いた? しかも何故こちらに来る!?

「くっそ!」

疑問は尽きないが考えてる暇はなさそうだ。

もはや世間体を気にしている場合ではない。一刻も早くあいつらを外に出さなくては!

俺はそう考えると大浴場のドアに手をかけた。

S i d e o u t

自らの想いの為… 前編（後書き）

続きます。とうか次が長いです。
一応1時に投稿予定。

自らの想いの為… 後編(前書き)

長いです。前編の3倍近くあります。

追記、7月4日修正

自らの想いの為… 後編

Side 和泉 亜子

「キヤーッ！」

「あちゃー、消えちゃったよー」

「まだおフロはいつとるのにー」

やっぱり草薙さんの言うとおり今日は止めておいたほうが良かったんや。ていうか何も見えへん！一応天井は窓になってるから月明かりはあるけどさっきまで電気ついてたから目が慣れてけえへん

「まき絵が無理やりおフロ入るなんていうからだよー」

「そつやよまき絵」

ゆーなの言うとおりまき絵が無理やり入ろうなんていうから……あれ？まき絵どうしたんやろ？停電が起きてから立ち尽くして全然動かへん。いつもなら真っ先に何か行動するし私とゆーなの言葉にも文句くらい言ってくるはずなのに…

「どうしたまき絵？」

少々不審に思っとならアキラがまき絵を心配して肩に手をかけるのが見えた。そろそろ大分目も慣れてきたかな。

「痛っ！」

「え？」

その慣れてきた目を疑った。まき絵が肩に手をかけられたアキラの手を『噛んだ』。アキラの手からは一筋の液体が…こつという時は停電していて良かったかも…間違いなくあれは だ。

「アキラ！」

「大丈夫、亜子は見ないほうが…」

そこまで言つとアキラの動きが止まった…まるでさっきのまき絵と同じように…

「ちよつとまき絵！あんた何してるの！」

「あ、ゆー…」

ゆーながまき絵に詰め寄るのを止めようとする。ダメ、何か今は近づいたらアカンって心が言ってる。なのに声が出ない…だって…詰め寄ったゆーなの首筋にまき絵が噛み付いたから。

「うー！」

「ゆーな！」

慌ててお湯を掻き分けてゆーなに駆け寄ろうとするとゆーなが手を広げて私を止めた。

「ダメ、今亜子が来たら…」

そう言つとゆうーなの声が途中で途切れた。さっきのアキラと同じ風に。慌ててアキラのいた方を見るとアキラの姿が消えとる。まき絵の方も見るとまき絵の姿もあらへん。確認できるのは立ち尽くしているゆうーなだけ…

「あ、アキラ？まき絵？」

いくら目が慣れたといつてもまだ遠くまでは見渡せん。浴場の中で友達を呼ぶという変な行動をとるのは初めてやないやろうか？

一応浴場全体に聞こえるようなくらいの声は出したのに何も反応がない…まき絵はともかくアキラがこんな悪戯をするとは考えにくい。それに悪戯だとしても時間が経ちすぎや。

「ひゃう！」

天井から落ちてきた水が首筋を打つたみたい…びっくりして声を上げてしまった…それでも反応がない。いつもならゆうーなもまき絵もアキラも何かしら言ってくるのに。

「ねえゆうーな？」

心に溜まる不安を振り払うように目の前のゆうーなに話しかけるが反応はない。目の前にいるのに反応がないというのはここまで怖いものなんやるか？

そんな時いきなりゆうーながこっちを見た。ほっとしたのも一瞬…私は後ずさりしてしもうた。そこには異様に長くなつた犬歯を光らせるゆうーなが笑っていた。

「あれ？亜子、なんで逃げるの？」

ゆーなの声が怖い…感情がないと言ったらええんやるか？思わず2歩、3歩と後ずさりしてしまう。そんな背中に何かがぶつかつた。

「だいじょうぶ？ゆーな」

「アキっ…」

声だけで分かるが思わず振り返った先には…ゆーなと同じように犬歯を光らせるアキラがおつた。思わず方向を変えて後ろに下がる。

「どうしたの亜子？」

「ねえ、変だよね？クスクス」

二人が笑う…その声は異様に冷たくて…

「あーこ」

そんな私の肩に誰かの手が触れた。考えるまでもあらへん。ここにいたのは4人。あとの一人は…

「まき…絵」

肩を掴まれているので体を向けるわけもいかずに顔だけで振り返る。やはり同じように口からは異様に長い犬歯が覗いている。

怖い…「ワイ…」…こわいこわいこわい！

「いやー！」

思わず手を振り払ってしもうた。

「いったいなー亜子」

まき絵が振り切ったほうの手を振りながら笑っている。三人に囲まれて後ろにしか下がれない…

「いや…こないで…」

自然とそんな声が出ていた。友達に言うべき言葉ではない。でも今はそれしか言えない…

「ありやりや、嫌われちゃった？」

「じゃあ私たちの仲間にしちやおつか？」

「ご主人様も待ってるしね」

仲間？なんのこと？ご主人様？誰や？その人が3人にこんなことさせてるの？あかん、思考が安定せえへん。

「あー！」

タイルに足を取られて、転んだ。3人がそのままウチのことを見下ろしている…

「たす…けて…誰か…」

まき絵が手を伸ばしてくる。

「誰か…」

手が掴まれてその腕にまき絵が噛みつくべく大きく口を開けて犬歯をさらけ出す。その様子をアキラとゆうーなはクスクスと笑いながら見ている。叫んでも聞こえるわけではない。でも…

「助けて！誰か！」

聞こえるわけではない。誰もいない。こんな停電のときに浴場にいる人なんていない…ウチは来るべき痛みに備えて目を瞑って…

「呼んだか？」

掴まれていた腕が離される。当然来るべき痛みもない。ていうか誰や？この声って…目をゆっくりとあけるとそこには…

「くさなぎ…さん？」

さつき浴場の前で待ってると思っていた管理人さんの背中があった。

S i d e o u t

S i d e 草薙亮

声の方向に来てみれば和泉が他の3人に囲まれて腕を噛まかけるというありえない光景に遭遇したので咄嗟に助けてしまった。

考えうる最悪の状況だ：見れば目の前にはエヴァンジェリンに操られていると思われる佐々木、明石、大河内。対してこっちは護衛対象ありの俺とその護衛対象の和泉。

おそらくだが半吸血鬼化している3人相手だと守りきれぬ自信がない。あのタイミングでしか助けられなかったとは言えこれは余計なピンチを招いてしまったのかもしれない。

「立てるか和泉」

「は、はい」

後ろは見ないで声をかけるとお湯から立ち上がる音がある。

「もー、先生が女湯に入ってきたらダメじゃん」

「変態〜」

「不潔です」

さらにやりにくいのが全員裸だったことだ：和泉はタオルを持っていたが正面の3人は一糸纏わない姿なわけで：目のやり場に非常に困る。

中学生だが発展途上中の体は意外と豊満な部分もあったりするもので：つつか明石と佐々木の差がありすぎる。同じ中学生なのか？

「そんな先生にはお仕置きだ〜」

「ちっ！」

佐々木が跳躍して襲い掛かってくる。身体能力もやはり向上しているようでかなり早い！

掴まれたらアウトだ。迫る手を右手で弾き噛み付こうとしてくる顔を左手でそらす。本気で蹴るわけにもいかないので正直きつい。足払いをかけて転ばせる。

「和泉！」

「ひゃ、ひゃい！」

「扉まで走れ！」

守りながらでは流石に無理だ。はっきり言ってしまうえば足手まとい。無力化するにも限界がある。

そのことまでは理解してないだろうが俺の言うことは理解したようであらうから走る音が聞こえる。とりあえずは安心だ…後はこの3人を…2人！？

「きゃあアアアア！」

「和泉！？」

和泉の叫び声に走っていったほうを見ると明石が扉の前に立ちふさがっていた。退路も封じられたか。

「余所見はいけませんよ」

いつの間にか大河内が懐に入り込んでいる。迫ってくる手を咄嗟に引き上げた膝で受け止める。その大河内の手が俺の膝を掴む。普通ならば振り切れるはずなのだが大河内の手は俺の膝を離さない。そのまま俺は宙に放り投げられた。

「おいおいおいおい！」

いくら半吸血鬼化してるからって人一人投げ飛ばすなんて無茶苦茶だろ！

しかも追撃する為に大河内と佐々木が跳躍してくる。また俺を掴もうとした大河内の手首を咄嗟に掴んで佐々木の正面に持つてくる。これで一応は盾になるはず。

攻撃がこないことを確認すると着水する前に大河内を明石の方向に投げ飛ばした。狙いは変わらず和泉の首筋を噛もうとしていた明石に直撃する。明石と大河内は一緒に弾き飛ばされて扉に強かに打ちつけられた。

二人とも、すまん！

「大丈夫か」

「な、何とか…」

和泉の隣に移動して無事を確認した。なんとか噛まれてはいないようだ。しかし扉に投げた為に完全に脱出が不可能になってしまった。これでは和泉だけでも逃がすことが出来ない。

ふと先ほどから佐々木が襲って来ないことに気づいた。見るとまき絵は扉から出て行くところだった。あの格好のまま外に出るのか、など場違いなことを思ってしまう。

それに大河内も明石もこちらの様子を伺うだけで襲ってくる様子

がない。

「中々やるじゃないか、草薙先生」

どこかで聞いた声が大浴場に響き渡った。その方向を確認する前に二人が大浴場中央の休憩小屋の屋根へと飛び上がる。

「吸血鬼が現れるにはいい夜だ」

視線を向けた先にいたのは…美しい女性だった…

服装は黒い外套に露出の高いボンテージに近い服。その黒を際立たせるような腰まで伸びた金髪は月明かりに照らされて美しく光る。その金髪が霞むかのように両の目が宝石のように輝いている。もはや美しいと言うのも失礼なほどの美女がそこには立っていた。

その顔が妖艶とも取れるほどの笑みを浮かべる。

「どうだ？貴様、私のものにならないか？」

そう言っつてその手が伸ばされた。頭に霧がかかったようだ。何も考えられない…いや、考える必要はない…俺はその女性の手に手を伸ばして…

「…や…くや…ん…ぎさん！」

誰かが呼んでいる。邪魔しないでくれ、今は…

「草薙さん！しっかりしてや！」

「ア…」

思い切り腰に誰かがしがみついで来たため我に返った。頭にかかっていた霧が晴れるように思考がクリアになる。

見ると和泉が俺にすっかりとしがみついていた。タオルでしか覆っていない体なのに男の俺にしがみ付くなんて…全く、この学園は女性が強いな。右手を和泉の頭にやり軽く撫でてやる。

「ありがとう、もう大丈夫だ」

「う……う……」

浮かべていた涙が頬を落ちる。流石に目のやり場に困るので羽織っていた上着をかけてやる。気が抜けたように和泉は膝をついてしまった。この状況でよく今まで持った方がむしろ叫喚に値する。和泉を背中に庇いつつ美女に向かい直る。

「ほう、私の『魅了』^{チャーム}を破るとは…」

その言葉には驚きなどといった感じは全くなくむしろ嘲笑している。

「『魅了』^{チャーム}とは中々味な真似してくれるな」

先ほどの感覚はおそらくそれだ。異性を虜にし意のままに操る術。和泉がいなかったら危なかったな。

「ふふ、そう怒るな。あのままでも楽園のような世界が味わえたのだぞ？」

「自分の意思じゃなく人を好きになるなんてのは御免被るな」

さて、これからどうするか…和泉は気が抜けてしまつて動けない。目の前には先ほど現れた美女と大河内と明石。とてもじゃないが逃げ切れない。というか逃がしてくれるとは思えない。

何しろその美女からはとてつもない魔力が溢れているのだから。

「で、あんた何者だ？」

とりあえず分かっているが聞いておこう。あ、こけた…

「私だ！」

ボンっ！という音と共に金髪の幼女…エヴァンジェリンが現れる。幻術か。

「あー、エヴァンジェリンか。つか満月以外魔法は使えないんじゃないのか？」

「それについては嘘じゃないさ。だが説明してやる義務もないな」

「そりゃ残念」

「貴様がいるのは予想外だったが舞台を盛り上げるためには役者が多いほうがいい。貴様も私と坊やのための劇の役者になってもらおう」

坊やってか…ネギ君を襲うのは確定事項らしい。てか俺のことは役者扱いだよ。言っておくが俺なんて大根役者にも失礼なほどの演劇しか出来ねえぞ。

手は出さないと学園長と約束はしたが…やっぱり火炎放射は確定らしい。いや、自ら首を突っ込んだんだから自業自得か。多分エヴ

アンジエリンもネギ君の足止めだけにしか使うつもりは無いのだろ
う…

この場を乗り切るには……エヴァンジエリンのような魔法使いが
相手なら同じ魔法使いのミトム、もしくは接近戦をこなせるデギオ
ンかエクイスだ。魔力を右手に集中。

茶々丸がないこの場なら選ぶのはミトム！

「おっと、それはさせんぞ」

そう言った瞬間大浴場の入口から何か動き、迫る気配を感じた。
咄嗟に身を捻ったところを影が通り過ぎる。その影はそのままエ
ヴァンジエリンの後ろに降り立ち畏まった。

「茶々丸か…」

そこにはメイド服姿の茶々丸が立っていた。手には大きな袋を持
っている。茶々丸はその袋から自分と同じメイド服を取り出すとア
キラと裕奈に着せていく。

「貴様の召喚には前回不意を突かれたからな。今回は封じさせても
らう」

4対1…
やっぱりあの時召喚を見せたのは痛かったか。これで戦力的には

「ふ、戻ったか」

いや、今佐々木が戻ってきたから5対1……勘弁してくれ。

「く、草薙さん…ウチ…」

後ろから服の裾を引っ張られた。和泉が心底怯えきった表情で俺にしがみついているが今は何かいってやる余裕が俺にもない。

何とか和泉だけでも…幸い今敵は全員俺の目の前にいる。
今なら出口から逃げる事が可能だ。何とか出口まで行ければ…

「どうやら逃げることを考えているようだが…私が許すとても？」

「やっぱりバレてるよな。相談だが和泉だけでも逃がしてやってくれないか？」

「却下だ。言つたら？役者は多いほどいい」

「さすが『闇の福音』ダイク・エヴァンジェル、いやこの場合は『人形使い（ドールマスター）』か。悪役はお手の物ってか？」

「分かっているじゃないか草薙亮。その通り私は悪い魔法使いさ。だから逃げる事が出来ないのも逃がすことがないのも分かるだろう？？」

イレギュラーだ。一瞬でもイレギュラーが起これば和泉だけでも逃がす事が出来る…だがこの場でイレギュラーを期待するなんてそれこそ奇跡のなせることだ。

そんな事を考えている間にエヴァンジェリン以外の4人が屋根を降りて歩いてくる。和泉と一緒に下がるが直ぐに壁に当たって下がる事が出来なくなる。

和泉だけ逃がす？

無理だ、そんなことすれば和泉はすぐに捕まって半吸血鬼化させ

られる。

一緒に逃げる？

それも無理だ。既に囲まれているのにその選択肢は選べない。

俺だけ逃げる？

論外だ。生徒を…か弱い女の子を置いて俺だけ逃げるなんてのは誇りが許さない。

戦う？

生徒を傷つけないが…半吸血鬼化した奴らの身体能力に期待するしかない！

「やれ、我が僕たちよ」

エヴァンジェリンの声と共に一斉に襲い掛かってきた。覚悟を決めて足に力を込める。

「『風の精霊13人、縛鎖となりて敵を捕まえる！』」

「む？」

「なに！？」

「『魔法の射手・戒めの風矢』！！』」

大浴場の出入り口から唱えられた呪文が咄嗟に避けた茶々丸以外を拘束する。聞きなれた声に思わずガッツポーズをとる。

さすが主人公、ナイスイレギュラー！

「大丈夫ですか！草薙さん！」

走ってきたのは予想通りネギ君だ。何か分からないものをごちゃごちゃと身に付けいかにも魔法使いっぽ外套を纏っている。

俺の隣に立つと杖を構えて再び魔法を唱え始める。和泉がいるがそんなの気にしている場合ではない。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル！『大気よ、水よ、白霧となれ。彼の者らに一時の安息を。眠りの霧』！！！」

発生した霧が捕縛された3人のうち2人を包み込む。霧が発生した瞬間に高速が途切れたせいで佐々木は逃れたが…

「おっと」

「あわわ」

俺が大河内を、ネギ君が明石を受け止めてその場に横たえる。まき絵はそのままエヴァンジェリンの隣まで戻っていた。これで状況は3対2。

「ふふふ、やるじゃないか坊や。そうじゃないと面白くない」

三日月のような口をしたエヴァンジェリンがネギ君に言い放つ。

「え、エヴァンジェリンさん！」

「満月の前で悪いが予定変更だ。今夜中に坊やの血を味合わせてもらおうかな」

エヴァンジェリンが指をはじくとまき絵と茶々丸がネギ君の前に降り立つ。

「ひ、ひきょーですよ！生徒を操るなんて！」

「おや？前に言ったろ。私は悪い魔法使いだからな。卑怯なこともなんでもするぞ」

「う……」

さすがにネギ君も生徒に手は出せないか……ジリジリと後ろに後退している。

「和泉、お前は逃げる」

「え？」

和泉にだけ聞こえる様に言って俺はネギ君のほうに助けに……

「おっとー！」

踏み出そうとした足元に氷の矢が突き刺さった。

「おいおい、私の舞台を壊さないで貰いたいな」

「こんな趣味の悪い舞台は勘弁願いたいね」

エヴァンジェリンがさらに複数の氷の矢を展開している。どうやら助けに行くことは出来なさそうだ。

それにまだ和泉もいる。エヴァンジェリンが女子供を傷つけるこ

とをしないとというのは分かっているが、俺が離れた瞬間佐々木のよ
うに直接操られるかもしれない。

故に今俺がこの場を離れることは出来ない。せめて逃げるまで時
間が稼げれば……ネギ君には悪いが自分で何とかしてもらおうしかな
い。

「さあ、しばしの間私と共に踊ってくれよ先生？」

「悪役は舞台では負ける運命だぞ！」

「問題ない。今日の舞台の脚本家は私自身だからな！」

「そりゃ都合のよろしいことで！」

言った瞬間17本の氷の矢が放たれる。腰を捻った回し蹴りで半
分を打ち落とす。残りの半分が迫るがそのまま遠心力をつけて逆側
の足で迎撃する。

「そら！まだまだ行くぞ！！『氷神の鉄槌』！！！」

魔法を唱えた瞬間俺の頭上に巨大な氷の塊が発生し俺を押し潰そ
うと落下してくる。当たればアウトだが……

多数よりこういうのを迎撃するほうが俺は楽だ！

「ちよいさぁ！」

全力の気を込めた右足を迫った氷塊に向かって思い切り振り上げ
る。氷塊はその衝撃に耐え切れず足を中心に真っ二つに割れた。

その氷塊に連続して蹴りを当てて砕きいくつかの塊にすると、エ

ヴァンジェリンの方へ蹴り上げる。

「返すぜ！」

「ふん、『氷楯』」

迫る氷の礫をなんともないように右手で楯を展開して防ぐエヴァンジェリン。

俺もこの程度で何とかなるなんて微塵も思っていない。防がれる瞬間には上へと跳躍している。

エヴァンジェリンの真上まで飛び上がるとその場で気をブースター代わりにして縦に回転を始め、勢いをそのままに滑降する。

「鷹襲おとり襲！！」

遠心力と重力、さらに気によって加速した踵落としを放つ！

「はっ！中々の威力だ！」

平然と答えるエヴァンジェリン。俺の踵はエヴァンジェリンに届く寸前に左手の魔法物理障壁によって防がれていた。

さすがにまともにも受けるとは思っていないが全く突破できないとは…今俺の持つ技のうち最も威力の大きい技だっただけにちとシヨックだな。

「これほどの威力を放つとは…脇役から準主役に格上げしてやってもいいぞ？」

「そりゃあどうも！」

追撃が来る前に後ろに跳び浴槽の中に着地する。さすがにもう濡れているとはいえ浴槽の水は冷た……冷たい!?

馬鹿な!いくら春先とはいえ先ほどまでお湯だった水がここまで冷たくなるはずはない!

「やばっ!」

「ふふふ、『解放』」

浴槽から出ようとしたが…遅い。エヴァンジェリンが言葉を紡いだ瞬間浴槽が光ると共に足が固定される感覚がする。

光が収まると大浴場の水が全て氷と化していた。

当然浴槽に立っていた俺の両足はその場に固定される。つつか冷たい!むしろ痛い!

「い、いつの間にも!?呪文は唱えていなかったはず!」

「ディレイ・スベル遅延呪文だよ。先ほどの踵落としは中々良かったが…先を読む能力がなければいくら力を持っていても宝の持ち腐れだぞ?」

「ディレイ・スベル遅延呪文」、名前に先に唱えて後で出すってことか…?いや、今はそんなことどうでもいい!

そう言いながらエヴァンジェリンは俺の前に降り立つ。つまり俺は最初からエヴァンジェリンに踊らされていたというわけだ。

さすがは『人形使い(ドールマスター)』だな。両足に目いっぱい気を込める。この程度の氷ならこれで割れるはず…だったのが割れない。

「割ろうとしても無駄さ。この氷は私の魔力を込めたものだからな」

俺の心を読んだかのように語りかけてくる。ネギ君は佐々木を眠らせたようだが未だに茶々丸と戦っている。さっきまでつけていた装備はそこかしこに散らばっているし、今もほとんど杖でぎりぎり防いでいるといった状態だ。こいつは万事休すか……

「まあ貴様は良くやったよ。二流役者としては十分楽しめた」

「まだだ！右手に魔力を集中……しようとした途端右手をエヴァンジェリンに掴まれた。」

「最初の言葉を忘れたか？召喚はさせんとな」

「これも想定済みって訳ね……」

「これも先ほど言ったぞ？先を読む能力がなければ力を持っていても宝の持ち腐れだとな」

エヴァンジェリンの顔が俺の顔に触れるほど近くにある。ペロリと舌で唇をなめあげた。

「さて、そろそろ貴様には私の人形になってもらおうか。なに貴様ならあいつ等よりいい役者になれるさ」

「拒否権は？」

「当然なしだ」

そう言ってエヴァンジェリンの口が俺の首筋に触った……

「だめ……」

「むっ！」

叫び声と共にエヴァンジェリンが飛びのく。どうやら何かを避けたようだが……ネギ君はまだ茶々丸と戦っている。ということは……

「和泉!？」

そこにはネギ君の魔力銃を構える和泉がいた。

Side out

Side 和泉 亜子

な、なんなん!？目の前で起こってることは本当に現実なんか？エヴァちゃんが矢みたいなのをいっぱい投げてきたと思ったら草薙さんはそれを目にも留まらないほどの速さで叩き落してるし、ネギ君と茶々丸さんは空飛んだりエヴァちゃんみたいに矢みたいなの放ってるし……

まき絵は……いつの間にか気を失ってるけど。

「あ……あかん。足が……」

動かへん。心は逃げると叫んでいるのに足は鉛みたいや。せつかく草薙さんがウチを逃がす為に戦っているのに！

「に…逃げな…ひゃう！」

いきなり足元に銃みたいなのが転がってきた。さっきまでネギ君が持っていた光を打ち出す銃…ウチは何故かそれを手に取っていた。

逃げることは出来ないのに何故か手だけはそれを握り締めてる。見た目には玩具の銃みたい…弾を入れるところはないけどなんか液体みたいなのが銃身のところに取り付けられとる。

まじまじとそれを見てると急に浴槽が光った。あまりの光に目をふさぐ。

「な、何？」

目を開けるとそこはさきほどまでの湯気を発するお湯ではなくスケートリンクみたいに凍りついた大浴場があった。浴場の中央には…

「く、草薙さん……」

足が氷に覆われた草薙さんがいた。エヴァちゃんが草薙さんの前に下りてきて何か喋っている。草薙さんが右手を振り上げて何かしようとしたみたいだけどそれも止められてしまった。そのままエヴァちゃんが草薙さんの首筋に口を持っていく……

「だ…ダメ……」

噛まれたら多分まき絵達と同じようになる。同じようになったら？当然まき絵たちと同じように襲ってくる？草薙さんが？首筋に唇が……触れた……

「だめーーーーー！！」

思わず叫んで手の中の銃の引き金を引いてもた。偶然にもそれはエヴァちゃんが先ほどまでいた場所を通り過ぎる。

「和泉亜子……か」

「バカ！なんで逃げてねえんだ！」

二人の視線がこちらに向く。草薙さんが叫んでいる言葉の通り逃げればよかったのに……

なんでやる？さっきまで動いた体は今また鉛みたいに重い。エヴァちゃんがこっちに歩いてくる。

「ふむ、一般人でその度胸は認めるが……時と場は弁えたほうがいぞ？」

「あ……う……」

再び手の銃を構えようとするけど……上がらへん。動いて！お願い動いて！

エヴァちゃんの手が私の頬に触れた。

「ふむ、中々そそる顔をするな。そういう顔も嫌いではない」

そのまま何度か頬を撫でられる。その顔は異様というほどの笑みを浮かべとる。ここまで怖い笑顔には会ったことがない。

「そうだな……お前に草薙亮を襲ってもらうのも一興かもしれんな」

「へ？」

今……………なんて？

「エヴァンジェリン！」

「どうだ草薙亮。中々面白いとは思わんか？お前を助けようとした生徒が操られてお前を襲う。これ以上の悲劇はあるまい？」

「相変わらず胸糞悪い脚本だ」

「気に入らなかったかな？いや、演目というのは大体の物が見て初めて価値が分かるものさ。きつと気に入るぞ」

ウチが……………草薙さんを襲う？うん、そっちのほうがあええ。ウチが草薙さんに襲われるよりは見ないで済むから……………

バリーン！！

な、何？

「ち、いい時にはかり邪魔が入る」

エヴァちゃんが私の頬から手を離す。見ると大浴場の巨大な窓が割れていた。茶々丸さんが私たちのほうに近づいてくる。

「申し訳ありませんマスター。逃げられてしまいました」

「ふん、仕方ない。追うぞ茶々丸」

「はい」

そういうとエヴァちゃんと茶々丸さんは窓枠に足をかける。飛び出そうとしたときこちらを振り返った。

「命拾いしたな草薙亮、和泉亜子」

それだけ言うと二人は外に飛び出していった。ウチら…助かったん？

「は…はは…」

思わず立っていた足が崩れ落ちてしもうた。口から笑いが漏れている。人って緊張が切れたりすると笑うって聞いたことあったけど本当なんやな。

ふと手に持っている銃に目がいった。手離そうとして…離れない？

「あ、あれ？」

右手がまるで吸い付いてしまったかのように持ち手から離れない。左手で無理やりはがそうとするが指を一本一本はなさなければならぬいぐらい。特に引き金を引いた人差し指は全くといっていいほど動かへん。

「く、この…」

離れて…もう終わったんやから…離れて！

そんな悪戦苦闘するウチの手に誰かの手が重ねられた。その手が

人差し指にかかる。

「落ち着け、深呼吸だ。目を閉じて力を抜け」

誰の声かも分からへんけど……とりあえず言うとおりに……目を閉じて深呼吸……力を抜いて……その瞬間右手に今までであった感覚が消えた。目を開けると右手の銃は消えていて、

その代わりに銃を手に持っている草薙さんがそこにいた。

「あ……草薙さん……」

「大丈夫か？」

「あれ？氷は？」

「エヴァンジェリンがいなくなったら水に戻ったよ」

そうなんや、良かった……

「ア……あれ？ウチ……なんで？」

草薙さんの姿を見た瞬間ウチの目から大粒の涙が流れ始めた。

「う……うえ……うえええ……ひっぐ、ぐす」

もう嗚咽しか出てこない。無事でよかったとか、あれはなんなんとか、アキラや裕奈やまき絵は無事なんとか、聞きたいことが山ほどあるのに言葉にならない。

「う……う……あ……あ……う……う……う……う……」

「大丈夫だ。もう」

草薙さんの暖かい手が私を安心させるように撫でた。さっきまで出ていた涙がまた溢れてくる。気が付いたらウチは草薙さんに抱きついていていた。

「うわああああああああああん！」

「泣け泣け。今は好きなだけ泣け」

草薙さんは嫌がるでもなくウチを受け止めてくれた。大浴場にウチの泣き声が響き渡る。こんなに泣いたのは初めてや。それも男の人の前で…でも涙は止まらへん。

数分くらいは泣いたやるか？その間草薙さんはずっとウチの背中を擦っていてくれた。溢れていた涙が収まってきたら今度は恥ずかしくなってきた。

だって男の人の胸で10分も泣いていてそれを受け止めてもらってたやなんて…まるで…

「落ち着いたか？」

「は……はい」

「そうか、じゃあ俺はいくぞ？」

「ふえ？」

耳を疑ってしもつた。

「え？なんで？こんなことになってなんでまだ行くん？」

「そりゃあそれが俺のすべきことだからだよ」

そう言っつて草薙さんがウチを離そうとする。待って……行かんで…

「行かんで…行かんといて！ウチを置いて行かんで！一人にせんとつて！」

「和泉…」

「なんで草薙さんが行かなあかんの？あんな目にあつたばかりやん！草薙さんは自分のこと考えてへんの？！そんなんアホやん！」

「アホつてお前…」

「アホやきアホ言つたんや！自分の命を粗末にしてウチとか助けて…なんで自分のことを大切にせえへんねん！普通の人ならあんな場面に合うたらここは行かへんつて言つやろ！今の一言だけ見ても草薙さんが自分のことを考えてへんアホつてことが丸分かりや！」

草薙さんはウチの言葉を黙つて聞いてたけどウチが言い終わるとポリポリと頭をかいてウチに言った。

「すまん」

「え？」

なんで謝るんやろ？思つた瞬間首筋に軽い衝撃が走つた。意識が

…目が明けておけへん……………

「なん…で……………」

「すまん……………」

その草薙さんの顔は…心底すまなさそうな顔をしていた。

「あ……………ほお……………」

そんな顔するんやったら…初めから…すな……………

Side out

Side 草薙 亮

俺は夜の街をひた走る。

あの後結局和泉の意識を手刀で刈り取ってから4人を各々の部屋に戻してきた。佐々木だけはネギ君の武装解除を食らったのか裸だったので服を着せるのには苦労したが……………

（『自分の命を粗末にしてウチとか助けて……なんで自分のことを大切にせえへんねん!!』）

ふと和泉の言ったことが頭をよぎった。思わず苦笑いをしてしまう。

まさか前世喧嘩すら碌にしない臆病者だった俺が命を粗末にしてるとはね。

一回死んだからか、それとも力を持ったからか、自分の命が希薄になっていたのかもしれない。そんなこと言われても俺はエヴァンジェリンを止めるために魔力反応を追っているのだからまったくお笑い種だ。

和泉は後で説明するか記憶を消さねばならない。と言ってもあそこまで濃い戦闘に巻き込んだのだ。

大幅な記憶消去はその人自身が疑問に思ってしまう可能性があるという。とすれば記憶消去は不可能かもしれない。

まあ今はそんなことを考えていてもしょうがないのだが……

魔力反応は学園都市の端の大橋。ふと腕時計に目をやると既に1時30分。電気の復活まで後30分。寮から大橋までは気で強化した俺でも10分かかる。

到着予定は11時40分。ネギ君が捕らわれているとしたらアウトだ。とづくにもう呪いは解いているだろう。

エクイスを召喚してもいいのだがなんていうか召喚する為に止まる時間が勿体無い。召喚して連れて行った貰ったほうが早いのに体がそれを拒否している。

「熱血も俺のステータスにはなかったはずなんだけどねえ」

熱血というより先ほどの和泉の言葉が引っかかっているのかもしれない。

今エクイスで行けば確実に間に合うが俺はまた命をさらす戦いに行くことになる。

そうなるのを拒んでいる俺がいるということが。死ぬのが怖くないといえば嘘になる……しかしこの世界でイレギュラーな存在の俺が何を今更……

10分かけて大橋にたどり着く。既に状況はクライマックスに至っているようだ。

中心部分では茶々丸対明日菜、エヴァンジェリン対ネギ君という構図が出来上がっている。いや、既に茶々丸と明日菜はエヴァンジェリンとネギ君の戦闘に見入っている。

しかしそれは戦闘と違っていいのだろうか。宙に浮いているエヴァンジェリンはネギ君に合わせて魔法を使い力を図っているように見える。

「『闇の精霊29柱』……」

「う……『光の精霊29柱』……」

「『魔法の射手・連弾・闇の29矢』 『魔法の射手・連弾・光の29矢』」

ほぼ同時に同レベルの魔法が炸裂する。橋の上が魔力同士のぶつかりで発生した爆発で昼のように明るく照らされた。

「ははは！どうした坊や！こんな小手先の魔法で私は倒せんぞ！最強の魔法を撃ってこい！」

「くっ！ラス・テル・マ・スキル・マギステル！」

息が上がっているネギ君に対してエヴァンジェリンは余裕の表情だ。

いつの間にかネギ君の手には先ほどまで持っていたような立派な杖ではなく玩具のような杖を持っている。

挑発を受けたネギ君が始動キーを口にした。その瞬間ネギ君の魔

力が膨張する。先ほどの魔法の矢の比ではない。

「そうだ！それでいい坊や！それでこそこの舞台の終焉に相応しい
たたかい クライマックス
！！リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！」

エヴァンジェリンもその魔力量を感じ取ったのか始動キーを叫ぶ。

「『来れ雷精、風の精』！！」

「『来たれ氷精、闇の精』！！」

唱えているのは同種の魔法。つまりそれは撃ち合う術者同士の魔力量の勝負となる。

「『雷を纏いて吹きすさべ南洋の嵐』！！」

「『闇を従え吹けよ常夜の氷雪』！！」

唱えるスピードもほぼ同時・・・こうなれば勝つのは純粹な魔力の量だ！

「『雷の暴風』！！！！」

「『闇の吹雪』！！！！」

ネギ君の杖から強力な稲妻と旋風が、エヴァンジェリンの手から強烈な吹雪と闇が放たれる。

橋の入口にいる俺にもその魔法の余波が伝わってきた。とにもかくにも近づかなければ話にならない。

風に足を取られそうになりながらも前に出て明日菜と茶々丸の後

るまで前進する。

しかしこれ以上は近づけない。近づけるだけの余裕が全くといてないのだ。後一步でも近づこうものなら吹き飛ばされる！

これを放っている術者への反動はどれほどのものか想像も出来ない。

しばらくは均等していた魔法だが徐々にネギ君の『雷の暴風』が押され始める。

「はは！私の勝ちだな坊や！」

「ぐ…ううううう！」

根性入れる。負けるなら…せめて全力で戦って負ける！

そう思った瞬間…

「は…はつくしよん！」

はい？

「な、なに！」

ネギ君がくしゃみをした瞬間：魔力が暴走した。

暴走した魔力はエヴァンジェリンの『闇の吹雪』を打ち破りエヴァンジェリン自体に襲い掛かり爆発が起こる。

「マスター！」

「ネギ！」

「ネギ君！」

俺も合わせた3人が叫ぶ。橋の上は爆煙と砂埃でまったく見えな
い。前にいて俺に気づかなかったアスナが「え？草薙さん？」なん
て言ってるが今は無視だ。

舞っていた煙が収まっていく。ネギ君は……無事だ。まあ押し勝
つたんだから怪我はしてないだろう。エヴァンジェリンは……

「ふ…ふふふ…」

空から笑い声が聞こえた。見ると煙の中から裸のエヴァンジェリ
ンが現れた。

さっきの魔力の暴走には武装解除が込められていたのだろうか、
相殺した魔法を貫いて武装解除が突き刺さったってところか。

「さすが奴の息子だよ。期待通りだ」

その額には見間違いじゃなければ青筋が浮かんでいる。

まあ、くしゃみで魔法勝負を負けた上に素っ裸にされれば誰でも
怒るか…

「うええええ！？裸！？」

ネギ君がそのエヴァンジェリンを見て顔を赤くしている。しかし
まあくしゃみで魔力暴走とか危なすぎだろ。

「だがまだ終わりではないぞ！……む？」

その目が橋上の俺を確認した。その口が妖しく笑う。

「貴様も来たか草薙亮。丁度いい。二人一緒にかかって来い！」

全員が目が俺に集中される。和泉には悪いがそこまで言われて参加しないわけには行かない。

それ以前に既に魔力をエヴァンジェリンに向けられている。参加しなくても俺に向かって魔法は放たれるだろう。

やっぱり火の粉じゃなくて火炎放射だな。

そんなことを思いつつネギ君の隣に立ったことでネギ君が話しかけてくる。

「草薙さん……」

「すまんネギ君。偉そうなこといった割りには俺も参加することになりそうだ」

「いえ！よろしく願います！」

「おう！」

そう言っつてネギ君は杖を、俺は構えを取る。

この二人が揃った時点で戦略なんて決まっている。

前衛の俺が時間を稼ぎネギ君の呪文のサポートをする。それだけだ。

ネギ君とエヴァンジェリンが再度呪文を唱え始め、俺が地面を蹴るうとした時、後ろから声が上がった。

「いけない！マスター戻って！」

茶々丸の切羽詰った声。全員が何だと確認しようとした瞬間異変が起こった。

「な、何っ!?!」

エヴァンジェリンが最もそれに驚いた声を上げた。それは俺らにとっても驚く異変だった。

橋を照らす電灯が明々と俺たち全員を照らし出したのだ。遠くの学園自体もポツポツと電気がつき始めている。

「予定より7分27秒も停電の復旧が早い!!マスター!」

「ちっ……、いい加減な仕事をしおって!」

悪態をつきながらエヴァンジェリンが橋に戻ろうとしている。だが橋の手すりに足が届くかと届かないかといったところで……

「キャン…!」

バシン、という激しい音と共に、エヴァンジェリンの身体を稲妻のような何かが襲った。

「なに!?!」「え?」「あ!」

茶々丸以外の全員が声を上げる。

「停電の復旧でマスターへの封印が復活したのです!魔力が無くなればマスターはただの子供……このままでは湖へ……!ちなみにマスターは泳げません!」

そう言いながら茶々丸がエヴァンジェリンに向かって突進していく。そうだ、なぜ忘れていたのだろう。やっぱり頭に血が上っていたに違いない。

俺もネギ君もアスナも走るが茶々丸より出遅れているのに届くわけがない。

気を失っているのかエヴァンジェリンは声も発さずに湖に向かって落ちていく。

「ちい！」

手すりに足をかけて飛び降りようとした俺の横何かが通り過ぎた。ネギ君が俺より先に飛んでいたのだ。俺と茶々丸もそれを追うように手すりを蹴る。

「ネギ！草薙さん！茶々丸さん！」

アスナが手すりから身を乗り出してこちらに叫んでいる。

「エヴァンジェリンさん！」

ネギ君がエヴァンジェリンの手を掴んだ。だが湖はすぐ目の前だ。俺も茶々丸もこのタイミングでは間に合わない！

そう思った瞬間ネギ君が急停止した。見ると手にはさっきまで持っていたいなかったいつもの大きいほうの杖を持っている。

「うお！」

そんな横を浮遊術を使えるはずもない俺が通り過ぎる。当然下は湖なわけで……

どぼー！ー！ー！ー！

激しい水しぶきの音と共に俺は湖に落ちた。

「だ、大丈夫ですか草薙さん！」

浮き上がってきた俺に杖にエヴァンジェリンを乗せたネギ君が寄ってきた。エヴァンジェリンはぐったりとしながらも俺のほうを見て笑っている。

ちなみに茶々丸はブースターで水面ギリギリを浮いていた。ナイスハイテク……

「はは、無様だな草薙亮」

「うるせえー！」

「あ、あの、掴まってください」

ネギ君が会話をさえぎって俺の手が届く範囲まで降下してくる。両手で杖をつかむとそのまま橋の上まで持ち上げられた。

「だ、大丈夫か？」

「大丈夫です……」

というネギ君の声には余裕がない。エヴァンジェリンと俺、さらに水を吸った衣服分を合わせれば相当な重さだ。杖の操作も余裕がない。

なんとか橋の上に戻ると三人そろって地面に降り立った。

「なぜ助けた…」

「え？」

エヴァンジェリンがネギ君に詰め寄る。

「だってエヴァンジェリンさんは僕の生徒じゃないですか。先生が生徒を助けるのに理由なんてありませんよ」

「う…き、貴様もそんなことを……」

多分前に俺と話したことを思い出しているのだろう。

「はっはっは！諦めるエヴァンジェリン。教師っていうのはそういう生き物だ」

笑いながら俺はエヴァンジェリンの頭をワシワシと撫でた。

「ええい触るな！髪が濡れる！」

手を払われたけど先ほどまでの感覚はない。本当に魔力は抑えられているようだ。

「ふん、まあ助けてもらったしな。二人には一応礼だけは言っておくよ」

そっぽを向いて学園に向かってエヴァンジェリンが歩き出す。その後を俺たちは慌ててついていった。

ネギ君がエヴァンジェリンの横に立つと何か言い出した。

「これで僕の勝ちですね、エヴァンジェリンさん。約束通り父さんのこと教えてもらいますよ?」

「……ちっ、わかったよ。そういう約束だったからな……」

そんな約束してたのか。ちっとも知らなかった。まあネギ君にとって父親は自分の生涯の目標みたいなものらしいし知ってる人がいれば聞きたいのは当然か。

「あと、悪い事もやめて授業にもしっかり出てもらいますからね」

なにかおどけているように感じたのは俺だけだろうか。

つうかあんだだけの戦いをした後なのに元気だな。そんなに勝ったのが嬉しいのか?

「ちよつと待て! 私はそんな約束はしてないぞ!? 悪い事をしないと云うのは分からんでもないが、何故そこで出席の話が出てくるんだ!??」

「え? だって僕が勝ったんだし……」

「それは認めてやらんでもないが……」

「それに助けたのは僕ですし……」

「ぐっ! そこでそれを持ち出すか!??くそ、分かったよ、確かに借りができたからな……」

「すげえ、あのエヴァンジェリンを借りありとはいえ言い負かしたよ。」

「えへへ……、あ、そうだ！名簿のところに僕が勝ったって書いておこ〜」

「き、貴様何をしている！やめろっ！大体停電が続いていれば私が勝っていた筈なんだからなっ!？」

名簿をどこから取り出したネギ君をエヴァンジェリンが必死に阻止している。なんか心和む光景だ。

「む！貴様今何か失礼なことを考えただろ！」

「いやいやそんなことは……」

だからなんでこんなに鋭いんだよ。やっぱりエスパーだろ。

「それで、茶々丸は一体さつきからなにをやってるんだ？」

先ほどから茶々丸は瞬きもせずエヴァンジェリンとネギ君の方を向いている。ロボットだから瞬きはしないのか？

「録画です」

「あ、そう……」

「そういえばなんか『ジーーーーーー』とかいう音が茶々丸から聞こえている。これ録画の音だったのか。」

「えー……っと、仲直りつてコトでいいの？」

アスナが騒ぐ二人を指差しながら茶々丸と俺に聞く。

「あ、アスナいたのか」

「殴るわよ……」

「ゴメンナサイ」

拳を振り上げられたのでさっさと謝る。「そりゃあ私だって空気だと思つて……」となんか訳の分からんことを言っているが無視しよう。

「で？どうなの？」

「……どうなんでしょうか？」

茶々丸は視線はそのまま先ほどのアスナに答えた。エヴァンジェリンとネギ君の取っ組み合いはまだ続いている。

「だ、大丈夫ですよエヴァンジェリンさん。呪いの事なら僕が、うんと勉強して『立派な魔法使い（マギステル・マギ）』になれたら解いてあげますから。そしたらもっと大きくなれますよ！」

「私は元々コレが素なんだよっ！悪かったな！ええいつ、そんないつになるか分からんモノを待つより貴様の血を吸えばすぐに解けるんだよ！」

「あ、そうだ。まき絵さん達を治しに行かなきゃ」

「それなら俺が寮の部屋に運んでおいたぞ」

「そうなんですか？ありがとうございます」

「いやいや、これも俺の役目さ」

「無視すんなっ！いいか坊や、私はあきらめた訳じゃないからな！
？満月の晩は背中に注意しておけよ！貴様もだ草薙亮！次やるときは貴様を絶対従者にしてくれる！」

「お前の従者ってマジ勘弁wwwwww」

「貴様あああああ！」

怒ってるのにエヴァンジェリンはどこか楽しそうだ。殴りかかってくるエヴァンジェリンの頭を手で押さえてやる。漫画であるように身長差があるので手だけ振り回している感じだ。

それ以前に俺を従者って…なにが気に入ったんだ？固有スキルの召喚が目当てなんだろうか？

「ねえ……エヴァンジェリンっていつもこうなの？」

「いえ、こんなに楽しそうなのはお二人が来てからです」

後ろで二人が何か言ってるがまあいいか。

「ええい！この手を離せ！そして殴らせろ！」

「HAHAHAHAHA！」

「その笑いもやめんか！」

しばらくそんな風になっているといつの間にか学園都市の中心まで歩いてきていた。

その間俺とネギ君はずっとエヴァンジェリンをからかっていたし、茶々丸はエヴァンジェリンを援護することもなくずっと録画していたようだ。

アスナに至ってはあくびを先ほどから連発している。

「じゃあここでお別れですね」

「はい、ネギ先生。おやすみなさい」

「ふん、まあ精々頑張るといいさ」

そういうと茶々丸とエヴァンジェリンは自宅へと帰っていった。俺たちは特に会話もなく寮まで到着する。言うまでもなくエヴァンジェリンたちがいなくなって気が抜けたせいで疲れが襲ってきたのだ。寮の玄関を開けるとアスナが特大の欠伸をする。

「あたしもうダメ。先に戻るわね」

「あ、じゃあ僕もまき絵さんたちを治したらもう戻ります」

「そうか、じゃあ二人とも、また明日な」

「はい」

「おやすみ」

そういつと二人は廊下の角に消えた。俺も管理人室に戻ると急激な眠気が襲ってきた。急いで濡れた衣服を洗濯機に突っ込み寝巻きに着替えると布団に倒れこむ。

ちなみに俺はほとんど万年床だ。干すことはあってもしまうことはほとんどない。布団に倒れこんだ瞬間俺は睡魔に負けた。

- - - - -

次の日…

春先にずぶ濡れで歩き回った俺は当然のように風邪を引いた……

S i d e o u t

自らの想いの為： 後編（後書き）

ちよい予定をオーバーしました。申し訳ないです。これにてエヴァンジェリン戦は終了ですが如何でしたでしょうか？

大浴場での戦闘は完全オリジナルなのですごい悩みました。エヴァンジェリンが遅延呪文使えるなんて描写ないもので入れようか迷いましたが、ネギが使えるのに師匠であるエヴァンジェリンが使えるいのもどうかと思ひまして最終的に入れました。

ちなみに仲良し4人組は最初から誰かに魔法ばらそうと思つてたんですが和泉亜子に決定しました。

理由は……作者が好きだからつていう理由しかありません！これからガンガン絡ませるつもりです。ネギ（大）とのフラグなんて叩き折つてやんよ！

ちなみに作者は関東人なため近衛木乃香みたいな京都風の関西弁や和泉亜子のような関西弁がいまいちわかりません。間違つてる部分があればご指摘ください。

一応言つておく！和泉は俺の嫁！

えー、ここから少しアンケート的なものを…

修学旅行編前に一話か二話くらい入れたいんですが誰の話がいいでしょうか？

とりあえず和泉亜子への説明、魔法関係介入イベントは決めてるんですが他が未定です。一応3、4個決めてるんですが絞れません。皆さんのご意見を聞かせてください。

1、部活動4人組（明石裕奈、和泉亜子、大河内アキラ、佐々木まき絵）との部活巡り

- 2、刹那と一緒にこのかをストーキング
- 3、古菲&楓と修行
- 4、エヴァンジェリン一家と模擬戦闘

是非ご意見をお願いします。

ではではまた次回。

真実の為… 前編（前書き）

お待たせしました。やっとこさ構想がまとまりましたんで書き上げてみました。

今回も分割ですがよろしくお願いします。

追記、7月6日修正

真実の為… 前編

Side 草薙 亮

「あ …… ダルい…」

エヴァンジェリンとの戦いの次の日俺は絶賛風邪を引いていた。原因はというと単純明快。湖に落ちたあとその服を乾かすことなく長時間歩いたせいだ。結果俺は38度近い熱を出し、休まざるを得なくなっている。

こればかりは自業自得なので誰かを責めるわけにもいかない。ちなみに現在は夕方の4時。そろそろ授業が終わって帰宅部の生徒が帰ってくるころだ。先ほどまで寝ていたため今は熱も下がりつつあるがダルさは消えない。ふと気付いたが寝巻が汗でビショビショである。

「…………… 着替えるか」

これでまた冷えてぶり返してはたまらない。そう思うと俺は布団を出ると筆筒の引き出しを開けて着替えを取り出して着替え始める。そういえば和泉はどうしたんだろうか？ふとネギ君に詰め寄る和泉とポロつと本音を吐いていそうなネギ君が思い浮かんだ…

ないと言いつつ切れないのが怖い…………… なんかまた頭痛くなってきた。

「とりあえずもっかい寝よ……………」

とにもかくにもこの風邪を治さなければならぬ。着替えて布団に再び入ると…………… 盛大に腹がなった。そういえば朝から何も食べていない。それを無視して寝ようとするが腹の虫は収まらない。

むしる腹が減って寝むれない。無視する 腹が鳴る 無視する、
の繰り返し。

無限ループって怖くね？

「無理！」

結局起きだして台所に向かう。とりあえず米は冷凍して置いてあるのでそれをとりだして電子レンジに放り込む。後はおかずだが……

「なんもねえよ……」

冷蔵庫の中は特に何も無い。以前買い物に行こうとしていた時は茶々丸を助けたときであり結局その後学校近くの店で済ましていたからだ。こんな時にはかりツケが回ってくる

「マジ勘弁……」

自然と口からは泣き言が出る。こんなコンディション最悪の中外に買い物に行かねばならないのだ。さすがに寮生に食事をくれと管理人が言うわけにもいかない。

腹を決めて上着を羽織る。一応着替えたのはジャージだったので上着さえ羽織れば外に出ることはできる。

扉をあけて外に出るがまだチラホラと生徒が帰ってきているだけで廊下は静かだ。寮の玄関を開けて外に出た。夕日が顔を刺して暗い部屋に慣れた視界が一瞬潰れる。その状態で一歩足を踏み出すと……

「キヤ！」

「おお？」

誰かがぶつかる感じがした。どうやら寮の角から出てきたところとぶつかってしまったようだ。

ようやく目が少し慣れてきた。顔は見えないけど全体の輪郭は見えるようになってきている。俺はその影に向かって手を差し伸べた。

「すまん、大丈夫か？」

「あ、はい。大丈夫で……」

あれ？なんかこの声聞いたことある気がする？

「あ　　！！！！」

「うお！」

耳が！頭がああああああああああ！

近距離で叫ばれたせいでさっきまで収まっていた頭痛がぶり返してしまった。

ガンガンする……オエ、気持ち悪い……

頭痛のせいで頭が働かないが視界は元に戻った。

聞いたことがあるのは当然。そこには尻もちをついた状態の和泉が俺を見上げていた。

場所は再び俺の部屋。和泉は俺の部屋の台所で料理をしている。俺の風邪がまだ治っていないのを確認すると俺が遠慮するのにもかかわらず自分の部屋から材料を取ってきて雑炊を作り始めたのだ。

お粥でいいと言ったら雑炊のほうが栄養とれるからそっちのほうがいいということだ。

なんというか……保健委員というより看護婦って感じた。

でも和泉って以前は距離を置いていた気がするんだけど……だから未だに和泉のことは名字で呼んでいる。

「はい、どうぞ」

10分くらいして和泉は井に雑炊をよそってきた。

「和泉は食わないのか？」

「今何時やと思うとるんです？まだウチはお腹空いてませんから」

「そっか、じゃあいただきます」

「どうぞ」

確かに時刻は4時半でまだ夕飯時には幾分早い時間帯だ。蓮華で雑炊をすくって口に運ぶ。熱いほどの米に野菜や玉子が絶妙な具合で絡まっている。風邪で味が薄いと感じなければと思うほどだ。

「む、うまい」

「ほんま？良かったー」

そう言いながら和泉は笑顔を浮かべる。しかしこの娘は昨日のことと聞かないのだろうか？

さつきから俺が食べるのを正面に座って見ているだけだ。普通なら寮の玄関で俺を確認した時点で詰め寄りたりするのは……

まあ詰め寄られないだけ今の俺にはありがたい。もしかしたら聞きたいけど俺の体調を考慮しているのかもしれない。

とりあえず一人が食べているので会話がなし……
なんとなく気まずいので話題を振ってみる。

「和泉は料理がうまいんだな」

「え？そんなことあらへんよ。寮に住んどつたら自然と上手くなるもんや」

「じゃあ同室の佐々木も上手いのか？」

「うん、まき絵は上手いよ。あー、でもアスナは苦手みたいやね」

「あそこはいつもこのかが作ってるらしいからな」

「アスナも女の子なんやから料理ぐらいしたらええのに」

「でもあいつの料理って言われて出されても……」

「ちょっと怖いな」

「何気に和泉もひどいな」

「草薙さんかて」

アスナには悪いが場の空気が軽くなった気がした。彼女にはそういう効果があるのだろうか？

気のせいかもしれないが和泉もどこか先ほどより明るくなった気がする。その後は他愛のない会話がずっと続いていた。

その間にいつの間にか井は空になってしまった。

「あ、もうないのか…」

「八分目くらいがええんです。あまり満腹にすると逆に体に悪くなるで」

「そうか、すまないな和泉」

「な、なんで謝るんです？」

「いや、わざわざ俺のために時間とって食事作ってくれて」

「もう、それなら謝らないでお礼を言って欲しいわ」

「それもそうだな。ありがとう」

「きにせんといてーや。ウチが好きでやったことなんやから」

そういうと和泉は空の食器を持つと台所に行きそれらを洗い始めた。その間に俺は落ち着いた思考をまとめ始める。

おそらく和泉がここまでしてくれるのは自身の性格もあるのだろうが半分ほどは昨日のことを聞きたいという部分があるだろう。しかし言いだせないでいるのはこれも性格である押しの弱いところのせいだと思う。昨日大浴場で俺に怒ったがあの場合で性格云々言える

状況ではない。とすれば俺が言いだすのを待っているところか……

ここで俺に与えられる選択肢は三つ。

一つは魔法について喋る。

喋るならば和泉がこちらの世界に関わることになる。一般の生活はもう出来なくなるだろう。

こればかりは俺の判断で言うわけにはいかないなので今の時点では却下。

二つ目は魔法については語らず誤魔化す。

これできれば一番いいのだが、しかし誤魔化すにしては派手に動きすぎた。氷の矢や魔力銃は言い訳できるとしても浴槽全体が凍りついたことなど物理的に説明ができない。

最後の三つ目は和泉の記憶自身を消す、だ。

しかし俺は記憶消去の魔法は使えないので誰かに頼むしかない。しかしそうなるとその人物に必然的に和泉が魔法を知ったということが知られることになる。

俺だけならまだしもそこからネギ君に繋がるのは極力避けたい。俺の責任は俺自身が取らなければならぬからだ。

「……………さん？…ぎさん」

こう考えるとどれも出来そうで出来ない状況だ。有効なのはやはり誤魔化すか最後の記憶の消去だが、言い訳は不可能だし大幅な記憶改竄は悪影響を与える場合があるため避けたい。しかし……………

「草薙さん！」

「うおー！」

いつの間にか俺の目の前に和泉がいた。

「どうしたん？何度呼んでも返事ないから心配したやん」

「あ……ああ、すまない。ちょっとボーっとしててな。少し熱が出てきたのかもしれない」

「どれどれ？」

そういうと和泉は俺の額に手を当ててもう片方の手で自分の額を触り、熱を計っている。

「うーん、少し熱いかな？無理したらあかんよ」

「ありがとう、今日はもう休むとするよ」

「うん、ウチももう部屋に戻るわ。移されたら敵んしな」

「ふん、言ってる」

「ほななー」

そういうと和泉はを出て行くために扉へ向かう。結局和泉は何も聞いてこなかった。夢だと思っっているのだろうか？

それならそれでありがたいのだが実際大浴場の窓は修理中（当然魔法ではなく事故ということだ）だし合致する点が多い……まあ今考えても仕方ないことだ。だがこのまま行かせてもいいものだろうか……

このまま知らせないのも手なのだがそれだとこれからの和泉の日常に対して非常に危険が増す気がする……いや、間違いない増すだろう。そうなれば心構えがあるのと無いのでは全く対応が変わってくる……

「和泉！」

気づいたときに俺は和泉を呼び止めていた。

「はい？」

「お前、昨日のこと知りたいか？」

気づけば俺はこんなことを口走っていた。

たっぷり一分は沈黙が続いただろうか。

和泉が小さく……俯いた。

やっぱり夢とは思ってなかったか。聞いておいて良かったかもしれない。

「どうだ？」

「ウチは……分からへん……」

そういつと和泉は再び俺の前に座った。その顔はひどく不安定だ。不安を顔に出したらきつとこんな顔になるのだろうかという程暗い顔をしている。

「ウチ……知りたいけど……知りたくないって言うてるウチもいるねん。何か、真実を知ったらそこから今の日常に戻れなくなるような気がして……だって人があんな風に飛んだり水を凍らせたり……普

通ありえへんやん。まき絵たちは何も覚えてへんかったからのぼせ
た言つて誤魔化してんけど……」

そうか、佐々木たちが何も言つてこないと思つたら和泉が誤魔化
しててくれたのか。和泉なりに友達を気遣つたのだろう。

その判断は正しい。好奇心は猫をも殺す。

大河内はともかく明石や佐々木は積極的に魔法世界マジックに突っ込んで
こよつとするだろう。

いや、明石のお父さんも魔法先生なんだけど……

「でもウチはその場において、その場面を見てしもつた……草薙さん、
ウチな、忘れようとしたんよ？今日の朝起きてから草薙さんに呼び
止められるまでずっと……でも、アカン」

そう言つと和泉は泣き出してしまふ。ずっと言葉を我慢していた
のだろう。泣いているのに俺への言葉は止まらない。

「草薙さんに雑炊作つてる間も、食べてる間も、雑談してる間もず
つと昨日のことを聞きたくて……でも、昨日のことが夢じゃないつ
て認めたくもなくて……なあ……草薙さん。ウチはどうしたらいい
ん？真実を知つたらいいんか？それともあれは夢なん？」

和泉は俺の服の裾を握ると俯いてしまった。そのため大きな雫が
床にしみを作り出す。よくもまあこれだけのことを周りの友達にも
言わず、気を使って黙っていたものだ。常人ならとつくに喋ってい
るか聞いてくるはずだ。

「なあ和泉」

俺は肩を持ちつつ和泉の顔を上げさせる。その顔は涙でぐしゃぐ

しゃだ。

う……女の子の涙は結構来るなあ。前世でも目の前で泣かれたことはなかったからどうしていいのかよく分かん。

「それは俺には決められない。夢のまま自分の中に閉じ込めるか、それとも真実として俺に聞くのか。それは和泉……いや、亜子自身が決めなければならない」

ここまで言われて最早苗字で呼ぶのもなんだと思っただため名前です呼ぶ。

別に問題はないのか、それとも反応できてないのか亜子は俺の顔を見上げて俺の言葉を聞いている。

「お前の選択を…俺は尊重する。でも俺が決めた選択肢でお前が何かに巻き込まれた場合、俺はお前に対する責任を俺は負える自信がない」

「そんな、責任なんて！」

「そう、確かにお前は問題ないかもしれない。だがな、こっちの世界はそういう世界なんだ」

もうあれが真実だと言ってるがそれはしょうがない。だが今ならまだ戻れる。ここが最終ラインだ。これから先を聞くなら亜子は本当に戻れなくなる。

「亜子、いつでもいい。決めておいてくれ。そして真実を知りたい場合……決死の覚悟を抱いてこい」

亜子の肩を掴みながら目をしっかりと見て言い放つ。何の覚悟か

なんてあの場にいた亜子には必要ないだろう。言っまでもなく命を賭けられる覚悟だ。

「う……………うん」

「よし、じゃあほれ涙を拭け。そんなんじゃ佐々木になんて言われるか分からんぞ」

「は、はい…」

差し出したティッシュで亜子は目を拭く。短時間だが大泣きした目は腫れていたが涙は止まっていた。

「よし、じゃあ返事は言ったとおりいつでもでもいい。じっくり考えて返事をしてくれ」

そう言って亜子の手を引いて立ち上がらせた。

「あの……………ウチ……………」

「無理に返事をするな。よく考える。とりあえず今日は部屋に戻れ」

「わ、分かりました」

亜子は半分ほど混乱した様子だったがとりあえずは納得してくれたようて扉から出て行った。あの状況の亜子が魔法のことを話してしまうという可能性も無くはないがそこまで言っておいて今更記憶を消去するのはフェアじゃない。さて、亜子はどうするかね……………

Side out

Side 和泉 亜子

「はっ……」

草薙さんの部屋から自分の部屋に戻ってきてからウチはベッドへ飛び込んだ。

「覚悟やて………どういう意味なんやろ」

当然意味は分かっとなる。昨日の夜のようなことを知るのはその場に飛び込むのも同じことや。ということはあの夜のようなことに巻き込まれる可能性も十分高くなる。草薙さんが言った責任とはそういうことだと思う。でも……

「草薙さん……ウチはどうしたらええんやろ……」

「むふふふふ、草薙さんがなんだって〜？」

「っ まき絵！？部活とちやうの！？」

「にははは、今日休みなのを忘れててね」

後ろを振り返るとものすごい笑顔のまき絵がおった。話しかけられるまで全然気づかなかった………ていうか扉の開く音がせんかったってことは最初から部屋におったんか！？

「い、いったいどこに！？」

「お風呂場にねー」

そう言われてみるとお風呂場の扉が開いている。何ていうか……ウチが帰ってくるまで隠れてたんか。呆れるわ……

「で？草薙さんがどうしたって？」

「な、なんでもあらへんよ？」

「しらばっくれても無駄だよ〜ん。ほい、再生」

そう言つとまき絵は携帯電話を取り出してボタンを押す。

『草薙さん……ウチはどうしたらええんやろ……』

「な……／＼／＼」

「ふっふっふっふっふっ……これでもしらばっくれるのかな〜？」

流れてくるのはウチの声。さっきベッドに倒れこんだときに漏らした言葉……って！

「いつから聞いてたんや！」

「えへへ〜。眩きを聞いたのは今だよ？」

えへへ〜やない！うわ、めっちゃはずい！幸い覚悟云々のところ
は聞かれて無いみたいやけど……

「いや、違うねん。これは別になにかあるわけやのうて…」

「むゝ、まだ隠す気なんだな！ならば……親分、おやぶゝん！」

「お、親分？」

「話は聞かせてもらった！」

「ひゃあー！」

なんかクローゼットからゆーなが出てきた！

「ゆ、ゆーな！？あんたも部活は！？」

「いやゝ、ジャンケン負けて場所とられちったんだよねゝ。だから今日はなし！」

そういえばウチのバスケット部って弱小やったつけ。そのせいでいつもほかの部とジャンケンして勝った部が体育館使えるって聞いたことあるような…じゃなくて！

「なんでクローゼットの中にいるん！」

「まき絵が面白そうだからってね。いやゝこの中暑いねゝ」

「まゝきゝ絵ゝ……………」

ジト目でまき絵を見てもまき絵はケラケラと笑うばかりや。この状況では暖簾に腕押しと言わんばかりや。というかゆーなもいるって事は…

「まさかアキラもいるんやないやろうな……」

「ふふふふ」

「^^ ^^ ^^」

「ま、まさか本当に……」

「さあ！出でよ我らの慈愛の女神！」

「このおませな少女に祝福を！」

……

「あれ？」

「まあ流石にアキラはいません」

「やーい引つかかったー！」

「アンタらな！……！」

「やばい！逃げるまき絵！」

「合点だ親分！」

瞬く間に部屋を後にする二人。まったくあの二人は！

でもやっぱり昨日のことは覚えてへんみたい。アキラも朝から何

も言つてこないってことはあの二人と同じで覚えてないってことやと思う。

アキラはともかくまき絵とゆうーななああいう事を知ったら真つ先に突っ込んでいくタイプや。そりゃあ多少は悩むかも知れへんけど関わることは間違いあらへん。

「うん…やっぱり……」

明日草薙さんに聞きに行こう。ウチがしつかりした対策法さえ持つてればまた何かあつたときに対応できるし……

せつかく忘れてる三人をあんな世界には関わらせとつない。そりゃ確かにまだ命を懸ける覚悟があるか？なんて問いには答えられんと思う。でもこういう気持ちは本物やから……

Side out

Side 草薙 亮

翌日昼休み、学園長室

「で、俺はネギ先生のサポートをすればいいんですね？」

「そうじゃ。君も副担任じゃし修学旅行には同行してもらつたので」

風邪が治つた俺は学園長の前で話を聞いていた。なんでも来週行く修学旅行で関西祝術協会との和解のために、ネギ君に使者として親書を渡してもらいたいそうだ。

そんでもって俺はそのサポートを今お願いされると……

ちなみにエヴァンジェリンの件は学園長が手を打っておいてくれたらしい。他の魔法関係者はうるさかったただらうけど、やっぱりこの人の積み重ねてきた信頼度は高い。

「それでも妨害はあると考えるのが妥当でしょう。俺とネギ先生だけで大丈夫なんですか？」

「うむ、あちらも一応一般人の前で仕掛けてくるような馬鹿な真似はせんと思うのじゃが、一応瀬流彦先生にも行ってもらおう。それ以上はあちら側が拒否しておつての」

瀬流彦先生か。魔法先生の中では俺とネギ君に続いて若い先生だ。実力は未だ戦っているのを見たことが無いため不明だが親しくはある。

年が近いということによく職員室では話をするのだ。しかし……

「31人を3人で護衛ですか。結構きついですよ？」

「ふむ？二人、じゃよ？」

「は？」

ネギ先生、瀬流彦先生、俺を合わせたら3人じゃないのか？

「君はこちらで言う魔法は使えんじゃろ？」

そういうことか。魔法を使えない俺を護衛として回すことで相手に戦力の誤認をさせるってわけね。やっぱり狸だな。

「屁理屈も理屈、ですか」

「まあそういうことじゃ。生徒の安全には変えられんからの」

「まあ分かりました。これも仕事ですし努めは果たします」

「ああ、それともうひとつ」

「まだ何かあるのか？」

「ワシの孫の木乃香のことじゃ」

「このかがなにか？」

「うむ、実はあの娘を修学旅行中に守ってやってくれんかの？」

「他の生徒とは別に…ですか？」

俺は少し語尾をきつめに学園長を睨む。いくら自分の孫だからって他の生徒を疎かにするような言動は許せるわけではない。

まあだからと言って守らないわけではないがそういう特別扱いは俺は嫌いだ。

「確かにいくら孫だからとて、この身分として生徒一人を特別扱いするのはいかん。しかし問題は木乃香の素質じゃ」

「素質…ですか？」

「うむ、あの子は関西呪術協会の長の子供での。あちらの親の意向で魔法のことは今まで知らせずに暮らさせてきたんじゃが内包する

魔力は別じゃ。あの子はワシやネギ君をも凌ぐほど魔力を持つておる。それを悪用するために動いている者がいるという情報があるのじゃ」

悪用か。その内包する魔力もそうだが長の子供というのはそれだけで御旗となる。

傀儡として祭り上げた上で別の勢力を作り上げるというのは戦国時代なんかではよくあったことだ。しかし…

「それこそその長さん、このかの親に頼めばいいんじゃないですか？」

「そうなんじゃが婿殿 近衛詠春殿じゃが他の下のものを押さえるのにいっぱいはいだそうじゃ。本山から動くことができません」

「はあ…組織のトップも大変なんですね」

関西呪術協会というの名前のとおり関西一帯を支配、管理しているのだと考えていいだろう。

そういう組織のトップというのは得てして地位に縛られ、自由に動けないのはよくあることだ。

この学園長を見ていればよく分かる。実力だけで言えばこの学園では一番なのだが、実戦は一度も見えていない。

だからこそこの人は自分が責任を取る、ということでの他の先生や生徒達をサポートしている。

「そこで君に頼みたいのじゃ。特別扱いするわけではなく前情報を踏まえた上で見守ってやってくれんかの？」

「分かりました。俺としても生徒の一人が狙われているといわれて

黙ってるわけにもいきません。可能な範囲でカバーしましょう」

「すまんの」

そう言って学園長が頭を下げた。やはりこの人も親であり祖父だ。子供、孫の心配をするのは当然ということか。

「で、ネギ先生にそのことは」

「話してはおらん。ネギ君に話してしまうと過剰に木乃香のことにのみが行きそうな気がするの。彼はよくも悪くもまだ子供じゃ。そこら辺の調整は上手くないじゃろ」

「分かりました。ではいざという時意外このことは黙っておきましよう」

「そのいざという時が来ないことを祈りたいの」

「その通りで……」

会話はそれで終わった。俺は一礼すると学園長室を出て教室に向かう。

結局エヴァンジェリンのことは聞かなかったが予想通りなんだろう。

というよりあそこまで派手な魔力を撒き散らしていたのに何も言っただけだったってことは分かって放置していたのだろう。なにを考えているか知らないがな。

「ん？ありやネギ君とアスナ……とエヴァンジェリンと茶々丸？随分な組み合わせだな」

「一昨日殺し合いをした連中が『STARBOOKS CAFE』
という喫茶店に集まって何か話し合っている。ふむ、ちょっと聞いて
みるかな。」

「おーいお前ら！」

声を上げて手を振りながら近づいていくと全員がこちらを見た。
何故かエヴァンジェリンは目に薄っすらと涙を浮かべている…俺
のせいじゃないよね？

「あ、草薙さん」

「ネギ先生、学校では…」

「あ、すみません。草薙先生」

「うむ」

「で？何のようだ？」

エヴァンジェリンがいつの間にか涙を消して機嫌良さそうに俺に
話しかけてきた。ということは嬉し泣きか？茶々丸はいつもどおり
俺に一礼をしてくる。

「いや、一昨日殺し合いした連中が仲良く何の話してるのかわらな
な」

「こゝ、殺し合いって…」

アスナが俺の言葉に反応する。ネギ君も少し青い顔をしているがエヴァンジェリンと茶々丸はどこ吹く風だ。

「ふん、貴様に話す必要は無いな」

「サウザンドマスターが生きているということのをネギ先生に教えてもらったところです」

「あ！こら茶々丸！」

「サウザンドマスターっていうとネギ先生のお父さんっていつ？」

「はい」

「だから何で話すんだ！」

「話すなどは言われていませんので」

「それを屁理屈というんだ！ええいこのポケロボが！」

「ああ、いけませんそんなに巻いては」

何故かすごい勢いで茶々丸の後頭部のネジを回し始めるエヴァンジェリン。もう訳が分からん。

エヴァンジェリンとじゃ話にならん。そう考えると俺はネギ君とアスナに聞くことにした。

「で？どういふことなの？」

「僕のお父さんのことをエヴァンジェリンさんは死んだって思っ

たそうです。ですけど僕はエヴァンジェリンさんが死んだって言うてる時期より後にお父さんに会ったことがあるんです。だからきくと今も生きてどこかにいるって」

「うん？それでどうしてエヴァンジェリンが嬉しがるんだ？」

「なんでもエヴァちゃんはネギのお父さんのこと好きだったんだって」

「あ、なるほど」

アスナがニヤニヤしてエヴァンジェリンを見ながら言った。エヴァンジェリンはこちらの会話には気づかず未だに茶々丸のネジを巻いている。

ていうかなんか茶々丸が色っぽい声を出しているんだがなんで？

「まあいいか。そういえばそろそろ昼休みも終わりだ。遅れるなよお前ら」

「はい」

「じゃあネギ先生。またHRで」

「はい！」

そう言う俺はネギ君たちと別れて校舎へと向かう。結局最後までエヴァンジェリンは茶々丸のネジを巻いていた。そういえば茶々丸ってネジで動くんだ……それは知らなかった。

ずっと魔力で動いているもんだと思ってたからな。さて、修学旅行までは後一週間か……

「え　と皆さん！来週から僕たち3　Aは京都・奈良へ修学旅行へ行くそーで…！」

現在は放課後のホームルーム中。ネギ君は異様にテンションが高い。なんでもお父さんの手がかりが京都にあるらしくそこに丁度修学旅行の行き先が重なったからだそうだ。それ以前に担任が修学旅行について知らないってどうなのよ。

「も　準備は済みましたか　！？」

「……は　い！」「」「」「」

小学生かこいつら……あ、同じような顔してるやつが何人かいるな。あやかが修学旅行の設定についてネギ君に話している。

ハワイなどから数箇所を選択式でいくら人数多くてもさすがすぎる。普通時期をずらして別々に同じところに行かせるとかしないのか？

留学生が多いということで京都・奈良になったようだが俺なら間違いないハワイだな。

「あ　早く来週が来ないかなー！」

そして一番先生が子供っぽいって……俺護衛しなくなっ

てきた。純粹に修学旅行楽しみたいよ本当に。

「ネギ先生。学園長がお呼びですよ」

その時入り口からしずな先生がネギ先生を呼んだ。

「あ、はい。あ、それじゃあ草薙先生。後をお願いします」

「はいよ」

そう言つとネギ君はしずな先生と一緒に教室を出て行く。このタイミングでの呼び出していることは間違いなく親書の件だろう。ま、さつさと俺もHRを終わらせませますかね。

「よし、さつきも言ったとおりあと一週間で修学旅行だが……」

「「「「「いえ

い！」「」「」

……こいつら……

「ほれ！話は終わってないぞ！浮かれるのはいいが今からハメは外さないように！修学旅行するのは修め学ぶ旅行って意味だ。遊びに行くんじゃないからそこだけは覚悟しとけよ！」

そういうことを言つとまあ遊びたい輩からは文句が出るわけで……

「えー！」

「横暴だ！」

「職権乱用だ！」

「鬼畜！」

そうかそうか…若干関係ないのが混ざっているが……

「よし、お前らの声は分かった！俺も修学旅行ではそんなキツイことは言わん」

「おー！」

「素敵ー！」

「かつこいいー！」

現金な奴らだ……だがそんなことで俺が許すとても思ってたのか！

「という訳で次の授業で京都・奈良のことを知るためにそこら辺の建築物に関するテストやるから勉強してくるようにな！」

「……………え

！……………」

まあ期待通りの反応をしてくれる生徒たちだ。こちらも弄りがいがあるということよ。

「範囲は次の授業で言うからその次の授業でやるからな。ちゃんと勉強してこいよー。ちなみに4分の1以下のやつは初日の見学を全部おれと一緒に回してもらっつからなー」

「……………うええええええ

！……………」

うえええっつておい………だが退かぬ！媚びぬ！省みぬ！

「よし！今日はここまで！解散！」

そう言つと文句を言いながらも教室を出て行く生徒の面々。うむ
うむ、素直な生徒は先生好きだぞ。

さて、俺も乗りで言ってしまったとはいえ問題は作らねばなるま
い。とりあえず帰って教本を見直すか…いざとなったらエヴァンジ
エリンの別荘を……

「あの…草薙さん？」

そんなことを考えていると後ろから呼び止められた。教室にはも
う人はいない。いるのは俺とその生徒だけだ。そしてその生徒とは
……

「亜子が……」

Side out

Side 和泉 亜子

「あの…どこにいくんです？」

「もう少しだ」

教室で話しかけた後ついて来いって言ったきり草薙さんはずっと

こんな感じじゃ。どこに行くか教えてくれへん。ウチの答えもまだ言うてへんのに……

辺りは夕方になってきて森の影が異様に長く伸びてきてちょっと怖いかも…何か出そうな感じじゃ。

「ついたぞ」

いつの間にか森が開けていてそこには一軒のログハウスが立っていた。誰の家やる？夕方に照らされた家は木本来の姿を現しているように見えた。

「この家が目的地なんですか？」

「うーん、というより住んでる人に用事かな」

そういうと草薙さんは遠慮せんでそのログハウスの呼び鈴を鳴らす。2、3回鳴らすと中から人が来る気配がした。草薙さんの用のある人って誰なんやる？

「はい、どなたですか…？」

「よう茶々丸」

中から出てきたのはメイド服姿の茶々丸さんで…って茶々丸さん！？

「リョウさん、和泉さん。こんにちは」

「え？え？え？」

全く内容が把握できへん。何で草薙さんは茶々丸さんに用があるんやろ？

「そっちのマスターはいるか？」

「マスターでしたら今リビングに」

「上がっても？」

「どうぞ」

淡々と会話が進められていく。草薙さんは茶々丸さんじゃなくてそのマスターとかいう人に用があるみたいや。

茶々丸さんが扉の前からどいて中に通してくれる。家の中は外見通り素敵な家だ。でも何故か家の中はものすごい数の人形が並んでいる。

その中に本をめくっている人形が……

「何だ？二人そろって何か用か？」

「に、人形が喋った!？」

「ほう…私が人形だと……」

なんか急に動いたかと思ったたら人形じゃなかったん!?!というよりこの人って……

「ようエヴァンジェリン。ちょっとお前に用事がない」

「え、エヴァちゃん

!？」

な、何でや

S i d e o u t

!!!!!!

真実の為… 前編（後書き）

後編は13か14のうちに上げるつもりですのでよろしく願います。

真実の為… 後編（前書き）

少し過ぎてしまいましたがあんとかあげることが出来ました……
申し訳ありません
続きなんで前編から見てください。

それでは本編をどうぞ。

追記、 7月6日修正

真実の為… 後編

Side 草薙 亮

亜子の顔を見たとき既に言葉はいらないと判断した。その顔には昨日までにあった混乱や戸惑いの表情は無く何かを決意した顔だったからだ。

だからここに連れてきた。はっきり言って俺自身も魔法の世界については詳しいとは言えない。

魔法使いのことは魔法使い。

そう思ったからここ連れてきた。まあ一昨日あんなことがあったばかりだから萎縮するかもしれないが二人とも根はいい奴だししばらくすれば慣れると思ったんだが…

「あうあうあう……………」

当人の亜子はエヴァンジェリンを見るや否や俺の後ろに逃げ込んでさつきからわけの分からないことを口走っている。

流石に荒療治が過ぎただろうか？

ネギ君でも良かったんだがあっちはあっちで『正義の魔法使い』を目指しているからなあ。魔法使いを全て良い人と決め付けていた時点でそれを教えさせるのは少し躊躇われた。

「で？そっちのガキは話にならんようだが？」

「ああ、すまん。ちょっと亜子に魔法のことについて教えてやってほしいんだ」

「は？」

うん、大体予想通りの反応だ。

「何故私がそんな面倒なことをせねばならん。そんなものお前が教えてやればよかるう」

「いや、実を言うと俺もそんなに分かってないんだ」

「はあ!？」

さつきよりでかい言葉だ。まあ魔法に詳しくない魔法先生ってなんだって話だよな。そりゃあ分かるが…

「俺は純粋な魔法は使えないんでな」

「初対面の時の召喚は魔法ではないのか？」

「ありゃほとんど生まれついで和能力なんだ。お前やネギ君みたいな魔法は使えないのさ」

「確かにお前が使ってるのを見たことはないが……」

「マスター、私の記録の関するところでもリョウさんは魔法をお使いになってはおりません。それとあの召喚ですがこの世界では認められない方法での召喚です」

茶々丸が何故かフォローしてくれた。しかしまあこの世界では認められない召喚か……

そうだろうな。あんな魔力放出とイメージだけで召喚魔法ができるなら苦労しない。

「この世界で確認できない魔法？こいつの固有能力ということか？」

「恐らくは……」

「ふむ、確かにそれならば通常の魔法が使えないというのも納得がいかないわけでもないが…勉強しようとは思わなかったわけか？」

「時間がなかったんだ」

「こればかりは嘘じゃない。この世界で暮らし始めてからまだ数ヶ月だからな。」

慣れるためと戦闘技能の習得で魔法なんて覚える暇もなかったし教わる相手もいなかった。

「ふん、21年も生きてきてよくあんな特異な能力が魔法世界の連中の目に留まらなかったものだ」

「それについては運がいいとしか言いようがないな」

「く、草薙さん……魔法とか固有何とかとか話が全然分からへんのやけど」

今まで黙っていた亜子がやっと声を出した。だが未だに顔には怯えの表情が出ている。

「ああ、すまん。それについては今からエヴァンジェリンに説明させるから」

「こら！いつ私が貴様らに説明することになった！」

「いやだつて亜子に魔法のこと理解させちゃったのお前だし…」

「あそこでお前が飛び込んでこなければこいつの記憶も消せてたんだ！っていうか何故記憶を消さん！」

「そりゃあ過程の話で結果はこの通りだ。記憶については個人の意思を俺は尊重したい」

「く…ああ言えばこう言う…」

いい具合にエヴァンジェリンが煮立ってきた。しかしこの程度の挑発乗るってよくまあ生きてこられたもんだ。

真祖っていつくらいだから100年単位は生きてるだろうし。

「ふん、まあいい。だが説明は面倒だ。茶々丸、お前に任せる」

「よろしいのですか？」

「説明だけならお前の記録どおりに話せば大丈夫だ。ついでに別荘にも案内してやれ。言葉で説明するより見せたほうが早いときもある」

「分かりました。ではリョウさん、和泉さん。こちらへ」

そう言うと茶々丸は地下への階段を下りていく。俺も続こうとすると亜子に止められた。

「あの…どこへ？」

「これから関係する世界のことについて教えてもらうんだ。それからいつらはそんなに悪い奴らじゃないぞ?」

「そうなん?でも一昨日は…」

「あれはあの時が特別だったんだよ」

「私は悪い魔法使いだと言ってるだろ!」

後ろのほうでエヴァンジェリンが騒いでいるが自分で悪いという奴に余り悪い奴はいない、多分……

「うん、まあ大丈夫だ。いざとなったら俺が守ってやっから」

「え…あ、はい／＼／」

何故か俯いてしまった。やっぱりまだ怖いのだろうか?しょうがないので亜子が背中にしがみついたまま地下へと降りる。

そこにはダイオラマ魔法球とその前で待つ茶々丸がいた。

「わー、これジオラマ?きれいやな」

亜子がダイオラマ魔法球に近づく。始めてみる人はそう感じるだろう。見た目は大きいボトルにジオラマが入っている感じだからな。

「では和泉さん。その模様の上に立つてください」

茶々丸が近くにあった魔方陣を指して言う。

「これ?」

亜子は少し警戒しながらもその上に乗った。すると亜子の体が光に包まれる。

「え？え？え？」

事態を把握し切れていない亜子はそのまま光に包まれ魔法球の中に入った。

「ではリヨウさん。私たちも」

「そうだな」

茶々丸と一緒に魔方陣に立つと俺たちも光に包まれ目の前の風景が一瞬で変わる。まぶしい光に目を一瞬瞑り、目を開けるとそこには前と一緒に情景が現れていた。

「く、草薙さん……」

涙声に振り返ると亜子が魔方陣の上でへたり込んでいた。

「ああ、すまんすまん。先に説明しておくべきだったかも知れんな」

「……どこなん？」

「あー、それは茶々丸に説明してもらおう。というわけで茶々丸、後は任せた」

「分かりました。とりあえずお二人とも、ここでは何ですのであちらの椅子のほうへ」

茶々丸に進められて建物の椅子まで歩く。その間亜子は周囲の状況を見ていたようで終始感嘆の声を上げていた。椅子に座ると茶々丸が机の前に立って一礼をする。

「本来一般の方々のほとんどはその存在を知りません。しかし魔法は存在します。それは既に和泉さん自身も分かっていると思います」

「う、うん」

「ではこの魔法というものについて説明していきます。分からないことがあったら質問してください」

「分かった。お願いします」

亜子がそう言うと茶々丸は魔法について説明を始めた。

.....

ある程度の魔法のこと、魔法具の説明をして茶々丸は話を一段落させる。

脇で聞いていた俺も非常に勉強になった。

「ほえ〜」

亜子が何度目か分からない感嘆の声を上げた。

「じゃあウチなんかは使えへんかなー」

「いえ、そうとは限りません。人はどんな人でも多少なりとも魔力を持っていきます。マスターやネギ先生のような大きな魔法は無理かもしれませんが、中位の魔法くらいなら修練しだいで和泉さんも使えるようになる可能性もあります」

「そうなん？」

茶々丸の話聞いた亜子が身を乗り出す。まあ魔法が使えるって聞いたら普通の人は嬉しいだろう。俺は少し複雑な心境だ。

「ただし魔力を使うのは精神を削る行為なので使いすぎると気を失ったりしますのでお気をつけください」

「あ、そうなんや」

それは俺も知らなかった。ていうよりさっきから聞いてること知らないことばかりだけど。

「これで一通りの魔法についての説明は終わりです」

「あ、はいはい。ここって結局なんなん？」

「ここはダイオラマ魔法球：先ほどのガラスの球体の中といった方が分かりやすいでしょうか」

「えー!?じゃあこれもさっき言ってた魔法具の一種なん？」

「はい、ちなみにここは一日経たないと出られません」

「えー！」

「おいおい茶々丸。それだけじゃ不十分だろ」

さすがの説明不足に俺が口を出す。

「草薙さん、どういうことなん？」

「そうだな、例えで言うと竜宮城の逆だ。ここでの一日は外の世界で一時間しか経たないんだ」

「す、すごい…魔法ってそんなこともできるんや…」

「ああ、それだけにこれはものすごい価値があるらしいけどな」

「そうなん？」

「はい、数世代が遊んで暮らせるだけの価値はあるそうです」

そう言っつて茶々丸は値段を口にするとそれを聞いて亜子は固まっ
てしまった。大体人間というものは目の前に信じられないものを並
べられると思考が停止する。

この場合は魔法関連のことと時間操作に加えて現実的な値段が出
てきたからだろう。魔法関連のみなら想像で済むが現実世界の値段
は変わらない。

ちなみに時間を操るのは魔法世界でも特異のひとつだ。これさえ
あれば1日を24日まで増やすことが出来る。別に自身の時間の流
れが変わるわけではないので長期間この中にいると自分だけ年を取

っってしまうという現象が起きるわけだ。エヴァンジェリンや茶々丸がポンポン入っているのは吸血鬼の不老不死とロボットという年齢に関係ない体だからだろう。

いい例が高畑さんだ。さっきエヴァンジェリンに聞いたが咸卦法（相反し合う「気」と「魔力」を融合させ身の内と外に纏い、強大な力を得る高難度技法）を習得するためここを何年か使用していたらしい。そのせいで実年齢と見た目が非常に違うのだ。

「リヨウさんは何かご質問は？」

「そうだな……質問ではないが茶々丸が俺に魔法を教えるっていうのはできるか？」

「私が、ですか？」

実際最近魔法が使えないと大変だ。咸卦法が未だに使えない俺では召喚と近接格闘が一緒にこなせないのだ。

近接格闘での技術はできるのだが気が無い状態では強者との戦いするときついていけない。せめて召喚を使っているときでも自分の身を守るくらいの術は欲しいのが正直なところだ。

「出来なくはありませんが…私自身は魔法を使えませんので言葉だけの説明になりますよ？」

「ああ、それでもいい。頼む」

「それには及ばんぞ茶々丸」

後ろから聞き慣れた声が聞こえた。振り返ると魔方陣の方からエヴァンジェリンが歩いてきていた。

「こいつには私が教える」

「は？」

予想外の答えだ。さっきまで説明も面倒だと言ってた奴の台詞だとは思えない。

「なに、別にタダと言うわけじゃない。貴様の召喚には前から興味があったのでな。見せてくれればそれでいい」

「うわゝ…それって俺の奥の手をさらせて言ってるようなものなんだが」

「その分他の戦い方を教えてやるといってるんだ。悪い話ではないと思うぞ？」

確かに悪い話ではないが…奥の手って言うのはあくまで奥の手だからなあ…少し悩むところではあるが…

「それとも何か？貴様私が教え手では不満があるとしても？」

あ、ちよつとキレかけてるな。確かに教師としてはこれ以上適切な人物はいない。

先日の一件だけでもエヴァンジェリンは最強クラスというのを理解しない奴はいないだろう。

ネギ君の多少劣る程度のスペックを持っている俺でも強くなるこ
とが出来るはずだ。そう考えると確かに悪い話ではない。

「確かに断る話ではなさそうだ」

「ふふん、では今日から貴様は私のことをマスターと呼べ」

「それは断る！」

「なにい！」

いや、だって仮にも生徒相手にマスターって呼ぶのはなんと云うか負けた感があるじゃん。

結局云々かんぬん言い合った後結局今までと同じとおりということになった。

理由は俺も召喚を見せるのだから同等だと言ったらそれもそうかというなんかあっけない幕切れだったのだが……準備といってエヴァンジェリンは建物の中に降りていった。

「なあ、草薙さん？」

「どうした？」

亜子が何か決意したような目で俺を見上げている。もう大体なにを言いたいかは分かるがとりあえず言葉を待ってみる。

「あ、あのな……ウチも魔法習いたいんやけど……ええかな？」

やっぱりそう来たか。本来俺はここでNoと言いたところなんだけど……

この世界に関わった以上、自衛の手段くらい持っていたほうがいかもしれない。それに亜子自身あの場で何も出来なかった自分を許せない部分もあるだろう。

そうというのは抱えているより実際にやらせてみたほうがダメな時

も諦めがつくし、上手くいけば儲けものだ。

「いいんじゃないか？亜子がそれでいいなら」

「え？ええの！？」

「なんでそんなに驚くんだ…」

「だって草薙さん、ウチが魔法のこと知るのすごい反対しとったから…」

「確かに反対はしたが知りたいと決めたのは亜子自身だ。言ったら俺はお前の意思を尊重する。お前が魔法を習いたいならそれも尊重するさ。それにこの世界に関わるなら最低でも自分の身は自分で守れるくらいにはならないとな」

「う、うん！おおきにな、草薙さん！」

礼を言われるほどのことでもないんだけど、まあいいか。そのやり取りが終わるとエヴァンジェリンが戻ってきた。亜子も魔法を習いたいということを告げると「また面倒ごとを…」みたいな顔をしていたがまた建物に戻って帰ってきた。

「とりあえずこれだ」

そういうとエヴァンジェリンは俺と亜子に小さな玩具の様な杖を渡してきた。どうやらこれを見つけに行ってたらしい。

「魔法を使うには発動体が必要というのは茶々丸が言っていただろう？本来はそういう風に作られたものなら何でもいいのだがここで

はとりあえずそれを使うといい」

エヴァンジェリン自体は右手の指にはまっている指輪が発動体だということだ。

確かに杖を持ったまま動きまわるといのは効率が悪い。格闘をしないならともかく俺はそっちのほうがいいかもしれない。

「まず初心者用の呪文だ。『プラクテ・ビギ・ナル 火よ灯れ』」

エヴァンジェリンが呟くと指輪の上から小さな炎が灯り、亜子が「おお〜」と言って驚いている。俺自身はエヴァンジェリンの特定の魔法を見ているのでそこまではないが少し感動した。

「これが魔法使いの最初の魔法だ。これが出来ないなら魔法使いへの道はないな」

火を灯すのは魔力の扱いを覚えることと同意だ。これが出来ない
と魔力があっても魔法を使えないと取られてもおかしくない。

それでも魔法学校ならこれだけで数カ月かかる内容だそうだ。

「ま、百聞は一見にしかずというしな。やってみた方が早いだろ。

ここは外よりも魔力が濃いからな。上手くすれば数週間で出来るかも知れんぞ?」

「おう、すまんな」

「勘違いするな。後で貴様の召喚はじっくり見せてもらう。要は等価交換だ。和泉亜子については貴様が教える。私は知らん」

「え、エヴァちゃんが教えてくれるんちゃうの?」

てつきりそう思っていたのだろう。亜子が疑問の声を上げる。

「教えてやってもいいがその分対価をもらうぞ？それこそ一生奴隷、みたいな対価がな」

クツクツクと笑うエヴァンジェリン。こういうところでは悪なんだよな。冗談で言ってるつもりでもないだろうし…ああ、また亜子が怯えてるじゃないか。

エヴァンジェリン自身は興味もないのか欠伸をしながら近くの椅子に歩いていく。

「まあ亜子には俺が教えるってことで我慢してくれ」

「いえ、まだ使えるかも分からへんし、お願いします」

そう言って亜子は頭を下げてくる。さて、とりあえず俺も出来るようにならないければ話にならない。

杖の先に意識を集中…自身の体の魔力を集めて言葉を紡ぐ……

「『プラクテ・ビギ・ナル 火よ灯れ』!」

ぼおおおおおおおおお!!!!

激しい音と共に俺の杖の先から炎が噴射された!

さながら火炎放射だ。

杖を正面に向けていたためその炎は当然椅子に向かっていったエヴァンジェリンに向かう。

「あ……」

俺と亜子の声が重なった。俺が慌てて魔力を止めると炎の中から頭に青筋を浮かべたエヴァンジェリンが現れた。

魔力障壁のため火傷はないみたいだが向かっていた椅子は黒こげになり、机の上に置かれてた本も当然真っ黒だ。

しかもあれはマズイ、絶対切れてる……

「き、き、き、き……」

き？気は使ってないんだが……

「きっさまああああああああ！！私を殺す気かあああああああああ！！」

そう言いながら襟元に飛びかかれ頭を前後に振られる。

「いや死なんだろ」

「そういう事を言ってるんじゃない！しかも初心者用の呪文で何故あそこまでの炎が出せるんだ！あれか！ある意味アホなのか貴様！」

そんなこと言われても俺普通に呪文唱えただけなんだけど……ああ、そろそろ頭振るの止めてくれないと吐きそう……

それが分かったのか分かってないのかエヴァンジェリンは首を振るのを止めてくれた。

「とりあえずその火炎放射をさっきの火くらいまで調整できるようにしておけ！貴様の魔力は坊やより少し劣る位みたいだな。例えればさっきのは蛇口をいっぱいまで捻ってだした水みたいなもんだ。そんなんじゃすぐに魔力が尽きるぞ」

「精進する」

それからはずっと繰り返した。俺は吹き出る炎を抑えるのに手いっぱいであつて、手が回らない。亜子とは言えば……

「『プラクテ・ビギ・ナル 火よ灯れ』！……あつ」

振り上げた杖から何も出ないのを見て肩を落としている。先ほども言った通りこれだけで本来何力月もかかる。

ついさつき魔法を知ったばかりの人が出来たら魔法世界の沽券に關わるというものだ。

俺は出来ちゃったけど……まあ多分俺は本来この世界の住人じゃないからな。

それに何か亜子は焦っているように見える。多分同時に始めた俺があれだけ派手な炎をまき散らしたのに自分は何も出ないのを気にかけているのだろう。

「なあなあ、草薙さん。なんかコツとかないん？」

炎を消して再び俺が呪文を唱えようとしているときに亜子が聞いてきた。

「うーん、コツねえ」

はっきり言ってそんなものない。いきなり一発目で出来てしまったため感覚がつかめていないのだ。

そのせいでまだ俺自身も炎を抑えることが出来ない。強いて言えば集中力くらいだ。しかしそんなもの誰でも分かる。しばらく考えなくても答えは出ない。

「すまん、俺も分からん」

「そうなんや…あ、じゃあ何か考えたりしとる？」

考える…なるほど、違う着眼点だな。

「そうだな。それなら普通にイメージで杖の先に火が灯るのをずっと考えてはいるが…」

「そっか、うん、やってみるわ」

「お、おう」

今ので参考になったのだろうか…少し不安だが亜子自身が納得したならそれでいいだろう。

Side out

Side 和泉 亜子

杖の先に集中して…頭の中で杖の先に火が灯るイメージ…

「『プラクテ・ビギ・ナル 火よ灯れ』！……………うう、またあかん」

3時間もやってなにも出ないとなんか情けなくなってくるわ…草
雑さんはあれだけ大きな炎が出るのに…エヴァちゃんに言わせればあれもダメだって言うと言って小さくせなあかんらしいけど、最初

と比べたら草薙さんかなり抑えられるようになって来とるし…

「なあ亜子」

「なんや？」

そんなウチを見かねたのか草薙さんが話しかけてきた。

「あれだ、案外頭を空っぽにした方が出来るかもしれないぞ？ごちやごちや考えていると逆に集中できないしな」

「頭を空っぽに…？」

「うーん、上手くは言えないんだが…まあ一回試してみる」

頭を空っぽ…：よう分からんけどなにも考えなければいいんやるか？まあここまで出来なかつたら色々試してみた方がいいのかもしれん

何も考えないで頭を真っ白に…

「『プラクテ・ビギ・ナル 火よ灯れ』！……あ！」

今一瞬だけ杖の先が光ったような！

「く、草薙さん！」

「どっした？」

「今一瞬だけ光った！」

「おお！そりゃすごい！もう一回やってみる！」

「う、うん！『プラクテ・ビギ・ナル 火よ灯れ』！……あれ？」

何もでえへん…

「流石にいきなりは無理だよな。俺もさっきからこれ以上火が小さくならなくてな」

そう言いながら草薙さんが呪文を呟くと杖から炎が伸びた。先ほどよりは随分小さくなっとなるけどまだ自分の体より大きいくらいの炎が出ている。

「ウチら二人ともまだまだやね」

「そうだな、ま、いきなり使えるようになってもつまらんしな」

そういうと草薙さんは笑った。釣られてウチも笑ってしまう。結局その日の練習はそれで終りとなった。それでも一日は経っていないので中に泊めてもらうことになった。茶々丸さんが部屋に案内してくれる。

「この部屋をお使いください」

「あ、おおきにな。茶々丸さん」

「いえ、では私はこれで」

茶々丸さんはお辞儀をするとそのまま行ってしまおうとする。

「あ…あの！」

「はい？」

ウチの言葉に茶々丸さんが振り返る。

「あ、あの…ごめんなさい！」

「????？」

茶々丸さんが訳が分からないと言った顔をしている。でもウチは謝られずにはいられへん。

「えつと…昨日のことで勝手に茶々丸さんやエヴァちゃんのこと悪い人つて決めつけて…勝手に怯えて…二人ともとてもええ人やったのに」

「いい人…ですか？私はロボットなのでよく分かりませんが一昨日の件なら謝るのは私のほうです。あんな目に合わせてしまつて…あのことがなければあなたもこの世界に関わることはなかったはずなんです。すいません」

そういうと茶々丸さんは申し訳なさそうに俯いた。最早どっちが謝ってるのか分からへんな。

「えつと…じゃあな、ウチと友達になつてくれへん？」

「え？」

ウチの言葉に茶々丸さんが顔を上げる。ウチは茶々丸さんに近づ

いて手を取った。

「どっちも謝ったんやし、どっちもそのこと気にしてへん。それならいつまでも気にしてるのっておかしいやん。そんなのに気を使うのは時間の無駄やとウチは思っくんよ」

「しかし私と友達というのは……私はロボットですし……」

む、意外と茶々丸さんって頑固なんやな。

「ロボットだからってなんや。ロボットやったら友達になったらあかんなんて誰が決めとるん？」

「え？和泉さん？」

「それもあかん！亜子って呼ぶこと！」

「和泉s……亜子！……亜子……さん」

「うん、じゃあもうウチら友達やね」

そう言っつて手を差し出すと茶々丸さんは何か困惑した表情をしていたが最終的には握手に応じてくれた。良かった、いつまでもあんなん嫌やからな。

「はい、よろしくお願いします」

「うん、よろしゅうな！」

Side out

「いいのかあれ？」

「ふん、どうにでもなれ。私には関係ない」

一連のやり取りを俺とエヴァンジェリンは角から見ていた。
しかしまあ一昨日のことを許して友達って……いいなあ。大人にな
るとそういうの難しいんだよね。

「あ、そうだ！じゃあエヴァちゃんとも友達にならなあかな！」

「な、何！？」

「へえ……」

亜子の声が俺らのところまで聞こえてきた。エヴァンジェリンに
至っては目を白黒させている。

茶々丸は……もう何も言う気がないらしい。

こちらにいつから気付いていたのかこっちを見て首を振っている。

「いいじゃん。お前もこの機会だしクラスに一人や二人くらい友達
作っておけば？」

「ふ、ふざけるな！」

顔を真っ赤にしながら俺に掴みかかってくる。

何を照れているんだか。吸血鬼って言うくらいだから数百年も生きてるんだからその程度のこととて恥ずかしがってどうするんだよ。

「元はと言えば貴様がああああ！」

「おいおい、そんな声出すと……」

「あー！エヴァちゃんおった！」

俺とエヴァンジェリンの声を聞きつけて亜子がこちらに走ってきた。

「げー！」

「で？どうするんだ？」

「ど……どうにかしろ草薙！」

「マジ勘弁ｗｗｗｗｗｗ」

「笑ってる場合か！」

いや、第三者からしたらこれは十分笑ってる場合です。亜子が近づいてくるとエヴァンジェリンはどうしようもないと悟ったのかさっさと廊下の角に消えてしまう。

その後すぐに亜子が俺の隣にやってきた。

「あー、草薙さんあかんやん。ちゃんと捕まえといってくれへんと」

「ああ、すまんすまん。ちょっとからかってみたくてな」

俺にそれだけ言つと亜子はエヴァンジェリンを追いかけて走りだす。

「エヴァちゃん待って〜!」

「来るな〜!!!っていつか何で貴様そんなに早いんだ!」

「サッカー部マネージャー舐めたらアカンよ!」

そう言えばそうだったな。ていつかマネージャーって本来あんなにはやく走れる必要ないんじゃないのか?

本職の人より早いと思うぞあの速度は……

まあ一般人に追いかけるられる吸血鬼って構図を見たから良しとするか。基本的に3-Aはスペック皆高いからな。

「リョウさん」

いつの間にか茶々丸が俺の隣に来ていた。

「よろしかったのですか?」

亜子の件についてだろう。よろしかったのですかって言われてもねえ……

「まあ本人がいいんだからいいんじゃないのか?それともお前は嫌だったか?」

「いえ、そんなことは……」

「だったらいいじゃないか。大体茶々丸って生まれてまだ二年だろ？エヴァンジェリンに尽くすのも結構だがああいう一般人の友達がいってもいいと俺は思うぞ」

「そんなものですか？」

「そんなもんだ。友達が困っていたら助ける、そして助けてもらう。何もない時でも語り合ったり遊んだりできるっていうのは経験しておいて損ではないと思うぞ？」

「そうですか……」

そういうと茶々丸は何か考えるように黙ってしまった。亜子と過ごすことでも少し人間っぽくなれたらと俺も思う。

茶々丸はロボットである（本人はガイノイドということもあるがこっちから見ればどっちも変わらない）ことに重点を置きすぎて自身を軽んじているところがある。

まあ俺も亜子に言われたんだが……自分に代わるものがないということを多少なりとも自覚してくれたらそれが一番いい。

「あゝ！空飛ぶなんてずるいゝ！！」

向こうの方で聞こえた声に顔を向けるとエヴァンジェリンが空へと飛んでいた。当然亜子はそこから見上げるしかできない。エヴァンジェリンについてはなにかホツとした表情をしている。つか最初から飛べよ。

自分じゃどうしようもないと分かって亜子がこちらに走ってくる。

「草薙さん！飛んで！」

「何事!？」

流石に唐突すぎる!

「だからエヴァちゃんのところまでいかんとあかんやろ?」

「いや、流石にまだ俺も空飛ぶとかできないから」

「そうなん?」

「てかお前と一緒に魔法を習い始めたばかりじゃないか」

「あ、そうやった…」

亜子はそれに気付くのがつくりと肩を落とす。いちおう飛ぶじゃなくて跳ぶはできるんだけどそれだと迎撃される可能性大だ。

逃げ切ったせいなのかエヴァンジェリンが上の方で笑っている。

いやもうそれはどうなのよ吸血鬼として…

「あの、亜子さん」

すると茶々丸が亜子に話しかけた。

「私があなただを乗せましょうか?」

「へ?」

そういえば茶々丸って飛べたな。魔法じゃなくて物理的にだけ。

「え、ええの?」

「はい……………友達が……………困っていたら助けるものだと言葉さんが……………」

ふむ、まだ躊躇ってる部分もあるが初めてこれなら上出来だ茶々丸。亜子はその言葉を聞いて顔を明るくする。

「おおきにな、草薙さん！茶々丸さん！ほなお言葉に甘えようかな」

「お、俺も？」

「だって茶々丸さんにそう言ったの草薙さんなんやろ？」

まあ確かにそうだけど……………俺は何もしてないんだけど。茶々丸が自分で言ったことだし。

「では亜子さん。失礼します」

「ひゃあ！」

そう言うと茶々丸がいきなり亜子のことをお姫様抱っこしたため、亜子は顔を真っ赤にしてしまう。

「あ、あの……………背負ってもらった方が……………」

「背中にはブーasterがありますので」

「ほ、ほなしゃあないな……………」

納得しちゃうんだ。それを肯定と受け取った茶々丸がエヴァンジ

エリン向かって飛びあがる。
さつきまで上空で余裕をかましていたエヴァンジェリンが再び慌て始めた。

「茶々丸！お前なんで！」

「いえ、友達が困っていましたので」

「と、友達！？」

「エヴァちゃんも友達になろう！」

「だ、だから来るな！ええい茶々丸！後で覚えておけよ！」

そういいながらエヴァンジェリンが二人から再度逃げ出す。いまさら思ったんだが亜子ってあんなに積極的だったんだ……それとも吹っ切れているのか……どっちもかな？

あ……エヴァンジェリンが魔法打ちやがった……でも茶々丸避けるし……

触らぬ神に祟りなし。そう考えると俺は案内されていた部屋へと足を向けた。

結局あのは茶々丸のパワーが尽きるまで空中鬼ごっこは続いたらしい。なんとというか……ご愁傷さまというべきか亜子を巻き込んだ天罰というべきか……

そういえば今日召喚は見せなかったけど……いっか。忘れてたってことにしよう。

Side out

真実の為… 後編（後書き）

えっと、いかがでしたでしょうか？

やはり完全オリジナルってのはかなり疲れますね。

でも二次創作やる上でオリジナルってのは欠かせませんし、何とか矛盾が出ないようにやっていくのでよろしく願います。

以前のアンケートですが少々変更しながら1でやっていくと思いますので修学旅行までもう少しお待ちください。具体的に言つと買い物かせます。

ではまた次回お会いしましょう。ノシ

追記、しかしまあ先週のマガジンの和泉の能力見ましたがあれはひどいwwwwww

魔法の為…（前書き）

迷走してまして遅くなりました。すいません。

とりあえず本編をどうぞ

追記、7月6日修正

魔法の為…

Side 草薙 亮

修行をし始めてから2週間が経過した。もちろん実際の時間ではなくエヴァンジェリンの別荘を使った時間なので現実世界での時間は修学旅行の2日前。

そして現在は修学旅行の前の最後の修行だ。

「フラマ・ブラスト・マテリアル、『炎の精霊19柱、集い来たりて敵を貫け』!!!」

始動キーを唱え、呪文とともに俺の周囲に19の炎の塊が現れる。目の前に並べられた10数の空き缶に向かって杖を振り上げ呪文を完成させた。

「『魔法の射手・連弾・炎の19矢』!!!」

瞬間19の炎の矢が空き缶に向かって放たれて炸裂し、煙を巻き上げる。

煙が晴れるとそこには2つだけ無傷で転がっている空き缶があるだけで後ははじけ飛んでいた。しかし……

「まだまだだな」

後ろからエヴァンジェリンの声がする。

「やはり命中精度が甘すぎる」

「むっ……」

そう、今のは命中精度を上げる練習なのだ。目標としては正面の一つだけの空き缶。なのにこつも全体に散ってしまつてはあまり意味がない。ちなみに俺の特性は火らしい。

最初の『火よ灯れ』であれだけの炎が出たのもそのせいだということだ。それ以降の『風よ』や『光よ』は普通だった。

それでもあの威力はエヴァンジェリンからしたらおかしいらしいが。

「まあ貴様は破壊力がでかい分そこまで命中精度を気にする必要はないかもしれんがな」

やれやれといった感じで首を左右に振られてしまつと俺としては何も言えないんだけど……

クドクドとエヴァンジェリンの小言を聞いていると向こつこのほうから少し風が吹き俺とエヴァンジェリンの髪をなびかせた。

「ほう、奴も才能はあるみたいだな」

その言葉に顔を向けるとそこには杖を構えた亜子とそれを見守る茶々丸がいた。どうやら『風よ』を成功させたらしい。

亜子については驚くべきことに魔法を使う才能があつたようだ。さすがに直ぐとは行かなかつたが、一週間ほどここで修行していると『火よ灯れ』が使えるようになり、そこからは『風よ』の練習をしていた。一週間にひとつ新しい呪文が使えるようになっていた。

なぜ茶々丸がついているかというと、教えるといつてた俺が既に『魔法の射手』の練習に入ってしまったからだ。ここまで差が開いてしまつと教える内容が違いすぎるため、茶々丸に付けてもらっているのだ。

しかし茶々丸と手を取り合って喜ぶ亜子は本当にうれしそうだ。最初のころは泣きそうだったのが嘘のようだな。

いくらこの中が外より魔力があるからと言ってそれだけで出来るものではない。

亜子の精神面の強さもあるかもしれないが茶々丸の存在も大きい。ほとんど亜子に付きっ切りで見守ってくれているのだ。茶々丸自身も亜子とはまだ自然とまでは行かなくても友達としての接し方を学んでいるように思える。

「では次は『光よ（ルークス）』です」

「よし！プラクテ・ビギ・ナル、『光よ』！！………やっぱり最初はあかん」

「大丈夫です。亜子さんならすぐできるようになります」

「うん！ウチやるえ！」

まあこんな感じだ。亜子が落ち込みそうになっても茶々丸がすぐサポートしてくれる。

なので余ってしまうエヴァンジェリンは自然と俺のほうに来てしまっわけでかなりスパルタなことになっていたりする。

「ほれ！さっさと次の準備をせんか！」

「へいへいー！」

俺の『魔法の射手』最大本数は今のところ19本。さっきからこの本数をずっと出し続けている。

はつきり言っただけ魔力がやばいと言っただけならエヴァンジェ

リンがキれるので言わない。

一昨日の吸血鬼とのリアル鬼ごっこはマジで勘弁願いたかった。

「撃てというとするのが分からのか!」

「分かってるつつつの!……フラマ・ブラスト・マテリアル!」

その日も魔力切れまで結局しごかれた……

.....

次の日、と言っても一時間だが俺と亜子はエヴァンジェリンの家から寮に戻っていた。

ちなみに今は昼前だ。とりあえず8時間ほどは寝てから出てきているため体力と魔力はなんとかなっている。

「草薙さん、大丈夫?」

亜子が心配して聞いてきたが大丈夫だとだけ応えておく。

亜子も俺と同じくらいの時間は訓練しているのだし俺のほうが根を値を上げるわけには行かない。しばらくすると寮の玄関に着いた。

ここで別れて次に会うのは修学旅行の朝だ。

「じゃあな。また明後日、遅れるなよ」

「草薙さんもな」

そう言うと亜子は階段を上がって部屋に向かっていった。

俺も部屋に戻ると修学旅行への準備をする。なにせ京都・奈良とは言え4泊5日の長旅だ。先生は基本スーツだがそれなりの用意は必要だ。

前もって買っておいたキャリーケースに必要なものをついでいく。するといつも通り廊下が騒がしくなってきた。

いつもの事とは言え毎度毎度よくそれだけ騒ぐ内容があるものだ。そう思って俺は無視して準備を続けているといきなり部屋の扉がバン！という音と共に開かれた。

そういえば鍵を掛け忘れてたな、なんて暢気なことを思ってしまった。

管理人になった当初は非常にこの行為は厄介だったが今ではこれも慣れてしまった。

慣れって怖いね。

「やつほぐ、草薙さんいる？」

「なんだ、裕奈とまき絵か」

入ってきたのは裕奈とまき絵といういつもの面子だ。アキラと亜子はいないけど。

こいつらともいつの間にか亜子つながりでいつの間にか名前で呼ぶようになっていた。

「暇でしょ？暇だよね！暇だと言え！」

「答えは聞いてない！」

「ええ」

まき絵と裕奈に交互に言われて俺は何を言う暇もなく暇ということにされてしまった。まあ準備だけなら明日も出来るから暇なんだけど……ここまで我侂だと俺ダメ先生なんじゃないかと思ってしまう。

そんなことを考えているとまき絵が物凄い笑顔で顔を近づけてきた。

「今から修学旅行の買い物に行くんだけど付き合っしてほしいんだ」

「は？まだ準備してなかったのか？」

確かに明日もあるとはいえもう買い物は済んでいてもおかしくない気がするんだが。

「自由行動日に着る服と、ついでに遊びに行くために今日にずらしたんだ。亜子もアキラも行くから一緒に行こうよ」

なるほど。まあそれはずらさないといけないな。

「しかしまあ何で俺なんだ？寮なら暇な奴いっぱいいるだろ」

今は日曜日だ。しかも修学旅行前だから誘えば暇な奴は腐るほどいるはずだ。現にこの二人がここにいっても上の階ではドタバタと音がしている。それを聞いた途端二人がしどろもどろになった。なんかあるのか？

「ええつとそれは……」

「い、いいから！30分後に玄関に集合！いいね！」

「お、おう……」

あまりの迫力に押し切られてしまった。何なんだよ……まあ約束してしまつた以上行かなくてはなるまい。そう考えると俺は出かけるために着替え始めた。

.....

Side 明石 裕奈

ふっふっふ……最近なーんか亜子の行動がおかしいと思つてたんだよねー。そう思つて見てたら草薙さんと2時間くらい出かけてるのを発見してしまつたのだ！

そういえば何か大停電の夜の後くらいから亜子の草薙さんを見る目が熱かつた気がする……

これはもうあれだね！亜子は草薙さんに恋してるね！ラブしてるね！

修学旅行まで待とうと思つたけど暇ついでだしここであの二人をくつつけてしまおうという訳さ！

「やってきました原宿の街！」

「いえーい！」

「何でそんなテンション高いんだ……」

「乗り悪いぞ草薙さん！」

「そーだそーだ！」

ちなみにまき絵とアキラには話済み。このゆるい様に死角はない！アキラはあんまり乗り気じゃなかったけど。

「すみません、なんか無理やりつき合わせちゃって」

「ああ、いいよ。どうせ俺も暇だったしな」

あー、そこでアキラが話しちゃったらダメじゃん！そこは亜子に言わせなきゃ……

亜子は亜子で草薙さんと一番遠い位置にいるし……

むう、やはり恥ずかしいのか遠慮しているのか。そう思うとちよつと早いが作戦は実行に移すべきだろうか……

（まき絵！）

（合点！）

アイコンタクトに即座に対応してくれるまき絵。アキラと亜子はショーウィンドウを見て回っていてこっちは見ていない。まき絵が素早く私の携帯に電話をかける。

チャーチャー、チャチャチャチャーチャー（某星戦争のテーマ）

「もしもし……」

音量最大だから近くににいる全員にこの音は聞こえるはず。案の定最初からこつちを見ているまき絵以外が振り返る。ちなみに電話は既に切つてある！

「え、本当！分かった、すぐ行く！」

そう言つて電話を切る振り。

「ごめん皆！ちよつと部活の方で場所が使えるようになったつて言うから行つてくる！」

「え、今日他のところが使うようになったんちゃうの？」

「そうだったんだけど、何か急に使えるようになったみたい。勿体無いから私も行つてくる」

「そうなんだ、頑張つてねゆーな」

「うん！頑張つてくる！それじゃ草薙さん、今日はごめんね！」

「ああ、お前も部活頑張つて来いよ」

「ありがとね、じゃ！」

そう言つて私は駅のほうへ走り出す。ふ、我ながら完璧な演技！自然とガツポーズが出ちゃうね！さてと、建物の影で見えないところにはまき絵に……

まき絵がこつちに走つてくる。よし、次はアキラつと……

10分後には亜子と草薙さん以外の面子がそろっていた。

「ねえ、本当にいいの？」

「ここまで用意しておいてそれはないよアキラ」

「そうだよー、あの二人にくっついて欲しくないの？」

「でも亜子の気持ちもまだ聞いてないのに……」

「いや、絶対亜子は草薙さんにホレてるね」

「だからその根拠はどこから……」

「あ！二人とも、動くよ！」

まき絵の言葉に振り向くと亜子と草薙さんがどこかに向かって歩き始める。

「追っよ！」

「合点だ！」

「もっ……」

アキラは今も乗り気じゃないみたいだけどこんな面白……じゃなくて亜子のためなことを放っておくわけには行かない。

最初に入るのは洋服屋か。当初の目的を果たすってところかな。二人に見つからないように店に入ってぎりぎり見える位置を取る。

でも3人はきついかも！

「ゆーなきつい！」

「無茶言わないで！」

「わ、私は頭が……」

確かに身長の高いアキラには服屋で隠れるのには無理があるかも

……

「あ、あの〜、お客様？」

「……あ、見てるだけなんで」「」

話しかけてきた店員さんを一蹴する。ていうかアキラも乗り乗りになってきた？

草薙さんと亜子はいい感じだ。時々笑っている顔が見える。さすがに会話は聞こえないけどそこまで近づくとさすがにはれるかな。お、いい感じの服取った。おお！買ってあげるのか草薙さん！

「よし！買った！」

「あーん、亜子いいな〜」

「今は我慢だよまき絵」

嘆くまき絵をなだめつつ店を出る二人を再び追走。次は…スポーツショップ？あ、そういえば前亜子が部活に使う靴欲しいっていつてた気が……

「あ、そういえば私も部活に必要なものあったんだ」

「水泳部って水着以外いらんないんじゃないの？」

「その水着があるんだよ」

へへ。なんか違うのかな？あ、やっぱり靴売り場のところに行っ
た。

「じゃあ私も今のうちに水着を……」

「ダメだったの！見つかったらどうするのさ！」

「いや、靴売り場にいるし……」

「そういう油断が事故を招くんだよ！」

「いや、なんの話……」

「あ、決まったみたいだよ」

もう決めてたみたい。さっさとそれを取って亜子がレジへと向かう。お、草薙さんここでも出すか！いいね、大人の男だよ草薙さん！ウチのおとーさんほどではないけどね！

えっと次は……アクセサリー屋？

「おおっと……」

「まさかまさか!?!」

「え?どうしたの二人とも」

「分かんないかな?アキラ。まき絵、草薙さんやって」

「あいよ」

「草薙さん、この指輪欲しいんやけど」

「ははは、じゃあ買ってあげるよ亜子君」

「本当?じゃあこれかな」

「これかい?少しサイズが小さいんじゃ…」

「薬指ならちようどやから」

「はっ!薬指ってまさか!」

「く、草薙さん結婚して!」

「「みたいな!」」

「……………」

ふふふ、私たちの予想が完璧すぎて怖いかアキラ!当たり前すぎて
いて声も出ないみたいだな!

む、ため息とか失礼だな。しかしあの店は見通しがよくて入れな
いから何買ってるか見えないな。しかしこんなときも無問題!

「ゆなえもん、ここからじゃ何言ってるか聞こえないよ」

「もう、しょうがないなーまき太君は。こんな時は」

「????????」

「ちゃららっちゃらー!とっちよっぎー!」

「ちょーゆーなそれ!」

「出かける時亜子のバックに仕込んでおいたんだ。ちなみに朝倉から貰ったもんだから感度はばっちり。ほいスイッチON」

アキラが焦っているが友達のためなら無問題!盗聴器のスピーカから少しの砂嵐とともにノイズ入り声が聞こえ始める。

『……これ……欲しいんやけど……ならへん?』

『ん……なら……でいいのか?』

「こ、これはまさか芝居100パーセント!?!このままいつちゃうのかー!……!」

「没収」

「ああん、アキラ!」

「今いいところなの!」

「やっぱりこつこつのは良くないよ」

「お堅いなあ」

「だよねえゆうな」

顔を真っ赤にしたアキラに盗聴器を取り上げられた。そんなに聞きたくなけりや聞かなきゃいいのに〜！
でも捨てないでポケットに入れる分気にはなるってことかな？

「ちょ！アキラ伏せて伏せて！」

「わ、わ！まき絵なに？」

「二人とも出てきた！」

お、本当だ。しかもさっきまで持ってなかった紙袋持ってるー！
！！これは……

「指輪キタ

！！！！！」

「決め付けるのはどうかと」

「とりあえず追っつよ！」

「う、うん」

よーし次は……あ、あそここの前雑誌に載ってた喫茶店！ケーキが美味しいって女性に人気だったやつだ。

「よし！行くよ二人とも！」

「まったゆーな！」

「な、なに？アキラ」

「あそこ見通しが良すぎるよ。店に入ったら絶対見つかる」

う………確かあそこ明るくていい感じの店だって書いてあったかも…

「し、仕方ないね」

「まあ二人は窓際に座ってくれたみたいだから見失うことはないね」

まき絵の言うとおり二人は窓際の席に座って注文を受けている。

まあすぐ出てくるでしょ………

.....

「長いー」

「はにゃ〜、ゆーな。私もケーキ食べたいよ〜」

「さ、流石にこれだけ話すとは私も思わなかった………」

もう喫茶店に入って二時間くらいたつ。何をそんなに話すことがあるんやら、流石にみてるこっちも飽きてきた。まき絵は当然だけどアキラでさえ疲れて見える。さすがにこれは………

「アキラ！あれ出して！」

「え？あれって？」

「盗聴器！」

そう、もうこの状況を打開するにはこれしかない！まき絵も気づいたのかガバッと顔を上げる。

「だ、ダメだよ。あんなの」

「ええい！まき絵！やっておしまい！」

「任せろ！」

「ちょ、ちょっと！」

まき絵と二人でアキラを取り押さえにかかる。む、早い！さすが水泳部エース。ただどこっちは！

「まき絵、リボンの使用を許可する！」

「あいあいさー」

「え？きやあああああ！」

まき絵がどこからともなく競技用のリボンを取り出すとアキラを雁字搦めにする。

つむ！なんか縛り方が胸を強調してたり足の下潜ったりしてエロ

いけどG」まき絵！

「さあ、出してもらおうか」

「ひ、ひい…」

あ、なんか楽しいかも。手をワキワキ動かしたりして…

「ふふふ、ここか？ここがええのんか？」

「ちょ、ゆるなやめて！まき絵助けて！」

「ジュルリ」

「ちょ！」

.....

「うっ……ひどい……」

「やりすぎたか…」

「うん、やりすぎたね」

あれはひどかった。とりあえず謝ったけど盗聴器はとりあえず我が手に！さっそくスイッチをON！……あれ？なにも聞こえない？

「あ　　ー！」

「わ！な、なによまき絵」

まき絵がいきなり耳元で叫んだせいで耳が痛い！

「二人がいない！」

「え？！」

「さつきまで二人がいた場所を見ると確かに二人の姿が消えている！しまった、アキラをいじってる隙に！」

「探すよまき絵！」

「うん！」

「うっ……」

「ごめんアキラ！」

Side out

Side 草薙 亮

ふむ、やっと撒いたか。しかしあの3人は一体何がしたかったんだか……まあいいけどな。目的のものも買えたし。

しかしまあ適当に歩いてきたからここがどこか分らん。んー、でかい建物はあるんだけど……

「あ、草薙さん。あれこのかちやう？」

「ん？あー？ネギ君もいるな。寝てるけど」

階段のところでネギ君に膝枕しているこのかがいた。歩いて近づこうとするど…

「」「待ったあ！」「」

「うおー！」

「ひゃあー！」

草むらからいきなり6つの手が出てきて草むらに引きずり込まれた！

て、敵襲……???

あれ？柿崎と釘宮と椎名？

「何か用かお前ら」

あきれながらそう言うと三人とも口到人差し指を当てて黙れとジエスチャーしてくる。亜子はなにがなんだか分からなくて黙っている感じだ。

やれやれ……三人は先ほどこのかとネギ君がいた方を見ている。

どうでもいいけどなんで柿崎と椎名はセーラー服なのに釘宮は学ランなんだ？俺も訳が分からん……???

「ど、どうなってるん？」

「ネギ君と木乃香がデートしてるっぽいの！」

「デート??」

亜子が恐る恐る聞くと柿崎が答えた。その答えに俺たちは二人ともハモってしまう。

いや、でもデートってなあ…アスナいだけで普段からあの二人ってあんな感じだし…

「昼ごろからずっと二人であんな感じなんだよ？」

「ずっとつけてるのかよ…」

椎名の言葉に俺は心底あきれてしまう。つかお前ら何か目的があつて原宿うるつについてたんじゃないのか？

そっちのけで明後日までに準備終わるんだろっな。

「いえ、まあそのなんというか」

釘宮がしどろもどろに言い訳を考えているがまあそんなこと俺にはどうでもいい。

というか準備できなくて自滅するのはお前たちで俺じゃないから俺は知らん！

しばらく見ているとこのかはなんとも穏やかな表情で寝ているネギ君を見ている。なんというか恋人を見る目というかお母さんと言ったほうが似合ってるか？

言っておくが老けてるとかそういう意味じゃない。断じて、それだけは言っておく。

「疲れよ、飛んでけー…なんてな」

このかが声とともに指を軽く振るった。可愛げのある仕草なのが俺は一瞬ビビってしまった。

このかの指が一瞬光ったのだ。

いくら学園長の孫で魔力があるといっても魔法の勉強を一度もしてない身で、しかもあの何気ない仕草で魔法を発動させそうになつたとしたらそれは才能なんてものではない。

「あれ？今指が…」

「ゆ、夕日だろ多分！」

釘宮が見えていたということはこの場の全員がそれを確認しただろう。

なんとか俺が誤魔化したのが内心気が気じゃない。その時このかが何かを思いついたように手の平をポンと叩いた。

「あ、そやカード。ネギ君にキスしたら出てくるんやった！」

カード？仮契約のカードのことか？一応俺と亜子もエヴァンジェリンからそこら辺の大まかなことは聞いている。

というか誰だその間違つた知識与えたの！正確にはキスじゃなくて体液の交換だつつの！まあ俺も茶々丸から聞いたただがこの条件なら汗や血液でもいいはずだ。まあ血液はともかく他人の汗なんて口にしたいくは無いけどな…

そんなことを考えているとこのかがネギ君の顔に顔を近づけていく。

「え！な、キス！？」

「え！？するの！？」

「カードって？」

三者三様の反応を出しているが…と、亜子が俺の背中を突っついてきた。

「あの、まずいんちやいます？」

言いたいことは分かるが…

「いや、今は仮契約の魔方陣はない。キスしても何もでないから大丈夫だ」

「そつやのうて一応先生と生徒がキスって…」

あー、そつち？そんなこと言われてもなあ。恋愛感情なんて俺は個人の自由だと思ってるし…

「いいんじゃない？」

「え、ええんですか／＼／」

なんでそこで顔を赤らめる…

「ちょ………あ

!!」

「このか!!」

なんて言ってる間に状況はクライマックスに突入しているようだ。柿崎たちがこのかを止めようと草むらを飛び出し…

「やっぱやーめた!いくら子供でも寝ているところの唇奪うのはアカンな」

思い直したこのかの言葉に盛大にずっこけた。

まあ…このかなら思いとどまると思ったけどさ。しかし誰があんな知識を……

つかこのかには学園長からの指示で魔法のことは関わらせないんじゃないかったっけ?

ということは外部からか?………はあ、また犯人探しの仕事が増えるな……まさかネギ君が教えたんじゃないだろうな…?

亜子は…ホツとしている。人の恋路ほど面白いものはないと思うんだけどなあ。そういう思考にいたる時点で俺も結構アレだなwww

「コラ

!お待ちなさい

!!!」

聞いたことある声に顔を上げると道の向こうからあやかとアスナが走ってきていた。

ネギ君にこんかが膝枕をしているのを見ると自分がしたいと騒ぎ出した…何しに来たんだよお前ら…

その騒ぎで目が覚めたのかネギ君が顔を上げた。

「あ、あれ!皆さん!?それにアスナさんまで!」

「よし」

「く、草薙さんまで…なんでこんなところに?!」

「いや、俺と亜子は買い物帰りに偶然通りかかったただけだ。な?」

「へ、あ、ああ。うん。そうなんよ」

亜子に振ると何とか話を合わせた。厄介ごとに巻き込まれるのは御免被る!とさえ保険だ。

「ネギ君。どうやら草薙さん以外にはバレてたみたいやな」

「そ、そうなんですか?驚かそうと思ってたのに…」

このかとネギ君がなにか話し始める。?

「じゃあ一日早いですけど…ハイ、アスナさん」

そう言っつてネギ君は何か小さくラッピングされた箱をアスナに手渡した。

「4月21日の誕生日おめでとつございます」

「……………へ?」「……………」

このか、アスナ、ネギ君以外その場の全員の声が重なった。アスナ自身も状況を飲み込めず目を丸くしている。

「今日は朝からずっとこのかさんとプレゼントを選んでたんですよ」

「アスナの好きな曲のオルゴールや。二人で選んだんやで」

「本当は明日渡す予定だったんですけど…」

なるほどね。このかやネギ君らしい考えだ。

ということは柿崎たちは壮大な勘違いで一日潰したことになるが…しかし人の恋路ほど見ていて面白いものもないからしょうがないか。

「ああ　　！そうそう！私たちもプレゼントあるよアスナ！」

そういつと柿崎たちがどこに持っていたのか大量の袋と箱をアスナの腕に乗せていく。

「ふむ」

俺はふと思うと先ほど買ったものを懐から取り出した。

「じゃあ俺と亜子からはこれな。」

その箱の山の上に小さな箱を置く。

「あ、それ…」

「すまんな亜子。後でまた買いに行こう」

「いえ、ウチもアスナに何かあげたかったし、言っとおりまた後で行きましょう」

亜子には非常に申し訳ないが…本人も納得してくれたようなので良しとしよう。

「あ、ありがとうみんな…こんないきなり…わ、私…私うれしいよ」

流石にこの不意打ちはアスナも効いたみたいだ。顔を真っ赤にして目の端には涙を浮かべている。

「あれ？草薙さんたちは買い物に来たんちゃうの？」

「まあそれは大人の事情って奴だ」

このかの問いにそう答える。

「まったくあなた方はいつも人も人騒がせなんですからー!!」

叫び声に顔を向けるとあやかが柿崎たちを追い回していた。どうやら柿崎たちから連絡を貰ってここに来たらしいから展開が違って怒っているのだろう。何もなかったからいいじゃん。

「あ、そうだ！このままカラオケ行ってアスナの誕生会やろうよ！」

「おー！さんせいー!!」

「ごまかすな　　！」

やれやれ…

「じゃあ俺たちは行くよ」

「え？参加していかないんですか？」

「少し用事が出来ちまったんでな、アスナによろしく言っておいてくれ」

そのアスナはというとあやかを止めに入っている。しかしあやかがアスナの誕生日を忘れるとは…あいつとは結構な親友だと思っていたが…まあ俺も前世に友達の誕生日なんて覚えていなかったから人のことは言えないか。

「じゃあ行くぞ」

「あ、はい。じゃあ木乃香、ネギ君。またな」

亜子がそういうと俺はまた原宿の街に向かって歩き始めた。

Side out

Side 和泉 亜子

「ぶっ………」

部屋に帰ってきてきてベッドに倒れこむ。今日は何か色々ありすぎて疲れたわ…んー、眠い。

目を擦りながら着替えるために再び起き上がると上着のポケットから小箱がベッドの上に落ちた。

「あ……」

慌ててそれを拾い上げる。箱を開けて中を確認すると先ほど店で見たのと同じ特に飾りのない無骨な銀の指輪が入ってる。

草薙さんに買ってもらった指輪……草薙さん曰く魔法の発動体として使って欲しいらしいんやけど……

「草薙さん……」

ウチ男の人にプレゼントもらったのって兄貴とお父さん以外初めてかも……しかも最初のプレゼントが指輪って／＼／

「ふふふ」

枕を抱えて自然と出てきた笑いを抑えようとする。何で出てきたかは知らんけど嬉しくてしょうがない。

「あ〜こ〜……」

「ひい!」

ベッドの下から声が!?妖怪?!

「あ〜こ〜」

「うえ!?!」

今度はクローゼットから声が!?!

.....

「つけてきたんや」

「え？」

「帰る振りして付けてきてたんや……」

「いや、そんなことより……」

「つ・け・て・き・て・た・ん・や!」

「「「めんなさい」」」

.....

「全く!」

「じゃはは、めんじゃ〜」

ゆうながまったく悪びれた様子もなく謝ってくる。それなら最初から一緒についてくればいいんやろっけど……はあ、もう溜息しかでえへん。

「もうええよ。済んだことやし」

「あ、じゃあ亜子。しつもん」

本当に反省してるんやろな、まき絵……

「結局あのは草薙さんとどこ行ってたの？あと、アクセサリーショップで何か買った？」

「え……な、何も買ってへんよ？／＼／」

あ、アカン！顔真っ赤になってへんやろつか！？

「おー？顔が赤くなった！」

「しかももった！」

や、やっぱりバレてる！

「さあ白状しろ！」

「どこへ行った！なにを買った！」

「うっ……うわあああああ……！！！！！」

「あ、逃げた！」

「追うよまき絵！」

ウチはその場にいられなくなって部屋から逃げ出した。買ったものも買ったものを思い出して笑ってたなんて恥ずかしくて言えるわけないやろつかあ
！！！！！！！！

Side out

魔法の為…（後書き）

んーんーんーんー、はっきり言って今回微妙です。一週間でこの程度では……

明石のキャラってこんなのでしたっけ…ぶっ壊れてる気がする…

とりあえず主人公の始動キーを決めました。

『フラマ・ブラスト・マテリアル』

意味はラテン語で『炎・爆風・素材』です

マテリアルはチェスの戦略であるマテリアルアドバンテージから持ってきてもいます。

現在使える魔法は『魔法の射手』のみですが今後増えていく予定です。ですのでよろしくお願いします。

さて、次回からはやっとこさ修学旅行編に入ります。

また長くなるかもしれませんが次回もよろしく願いいたします。

ではでは ノシ

修学旅行の為…（前書き）

更新遅くてすいません。

お待たせしました。修学旅行編突入です。

とりあえず本編をどうぞ。

追記、7月8日修正

修学旅行の為…

Side 草薙 亮

修学旅行当日。大宮駅午前6時30分。

「ふあ……」

欠伸が出そうになったので慌ててかみ殺す。既に先生たちはネギ君を除き全員が揃っているからだ。

慌ててかみ殺したとはいえやはり声は聞こえていたらしく瀬流彦先生とせずな先生は笑っているし新田先生に至っては「しっかりなさい」と目で言われてしまった。

それもそのはず。何を考えているのか先生たちより早く集まっている生徒がいるからだ。いくら楽しみでも早く来たから早く始まるわけでもないだろうに……

生徒は生徒で集まってこれから行く修学旅行についてやら枕やらのことを話している。ん？なんで枕持つてるやつがいるんだ？

「わー、皆さん早いですね！」

そんな事していると向こうからネギ君が手を振りながらやってきた。

そこからはしばらくすると他の生徒たちが次々と集まってきた。しかしその中にエヴァンジェリンと茶々丸の姿はない。やはり呪いのせいで来れないみたいだ。

折角だし何かお土産でも買って帰るか。

移動しながら生徒の様子を確認したが皆これから行く京都に心を躍らせている様子だ。ネギ君は別の意味でドキドキしているようだ。

しかし31人を守りながらだどこっちの行動も大きく制限されてしまう。なるべく他の生徒にはばれない様に護衛をしなきゃいけないとは…やっぱり難儀な仕事だ……

『JR新幹線、あさま506号

まもなく発車致します』

おっと、いつの間にか新幹線のホームについていた。考え事しながらだとやっぱり危ないな。他に生徒がいないことを確認してから俺も新幹線に乗り込む。って…

「こらあ！肉まんを売るなあ！」

四葉が後ろの車両の客に肉まんを売っていたので即座にやめさせた。

「固いこと言わないネ。草薙せんせ」

「そうアル。草薙先生もひとつ食べるネ」

「むう！」

超と古菲が俺の口に無理やり四葉の肉まんを突っ込んだ。

「お………美味しい………」

「うむ！四葉の肉まんは絶品ネ！」

これで120円とは…お得だ………じゃなくて！

「さつさと自分の席に行け！」

「怒ったアル〜！」

「まったくあいつらは！無駄にスペックが高いせいで捕まえることさえ出来ない。」

「…はあ、もういいや」

「なんか考えるの面倒になってきた。何か起こってから考えればいいや。今は最後の一班をネギ君が確認しているが…」

「あれ？一班足りないぞ？」

「ネギ先生、草薙先生」

振り返ると刹那とザジが立っていた。通常5人で一班だが3人足りない。えっと…確かここってエヴァンジェリン、茶々丸、相坂、刹那、ザジの班だったか。

「うわ〜、吸血鬼、幽霊、ロボ、退魔士ってどういう組み合わせだよ。濃いな〜。」

「まあ相坂はこの場にいないがエヴァンジェリンと茶々丸はそのままいないためこの班は実質機能していない。」

「私が6班の班長だったので…エヴァンジェリンさんと他二名

が欠席のため二人になりました。どうすればいいですか？」

「そ、そうなんですか？困ったな〜」

まあしょうがないよな。つかそこは考えておこつぜネギ君。考えてない俺もネギ君のことも言えないけど。

「分かりました。ほかの班に入れてもらいますね。えっと〜」

そついつとネギ君は少し考えて結論を出す。

「じゃあいいんちよさんはザジさんを、桜咲さんは……」

「刹那はアスナの班でいいだろ」

「な!」

「あ、そうですね。じゃあアスナさん、桜咲さんをお願いします」

俺の横槍に刹那の顔が一瞬真っ青になった。が、まあこころ関係を修正するいい機会だ。

いっちょアスナ辺りに揉まれて来い刹那。

「あ、せつちゃん。一緒の班やな」

「あ……」

このかが言葉をかけるが刹那は一礼だけするとさっさと席に行ってしまう。

思わずため息が出てしまう。こりゃ思った以上に重症のようだ。

新幹線が駅を離れ、ネギ君が訓辞を述べる。まあそんな大それたものではないが一応そう言っておこう。

その後は京都に着くまで自由時間となるので生徒たちも各自、好きなことをして過ごしている。

あ、車内販売に轢かれた……何やってんだか……

駅を出て10数分後。

『車内販売のお知らせをいたします。これから皆様の席に……』

…さつきも通ったが…今からまた来るのか？そういえば発車してからすぐに来たが……

まあそんな気にすることでもないか。そう思い読んでいた本に再び目をやるつとすると…

「草薙先生」

声を掛けられた。顔を上げるとそこには予想通り刹那が立っていた。

「少しお話が」

「分かった」

そう言っただけ俺は席を立つて刹那の後に続く。二両ほど後ろのトイレのある大きな車間だ。刹那はそこに来ると再び俺に向き直って詰め寄ってきた。

「先ほどのはどういうつもりですか！」

あー、やっぱりこのかと同じ班にしたことか…

「私がどういう立場かあなたは知っているはずですよ！いや、話したことはありませんが草薙さんは知っていますよね！？」

「ナンノコトデシヨウカ??？」

「とぼけないでください！」

ふう、やれやれだ。当の本人がこれじゃあ難しいかなあ。そう思いながらも刹那の肩を軽く叩いて笑って言ってやった。

「まああれだ。頑張れ」

「！！！！！！」

そんな俺に怒っているのか声にならない叫びを上げている。顔を真っ赤にしてアウアウ言ってる姿は可愛いぞ刹那。

しかしその夕風を抜こうとするのはやめない？いやマジでここ新幹線だから！そんなんで切られたら俺死ぬから！それ以前によくその刀新幹線に持ち込めたな！

「むー！」

「あん？」

そんな時、俺と刹那が同時に反応した。前二両、俺たちのいた車

両から多数の気配が発生した。

「刹那、こりゃあ……」

「はい、恐らく西の妨害工作の一つかと」

しかし数は多いがその一つ一つは力のない反応だ。本当に妨害だけで危害を加えるつもりはないらしい。これなら混乱はするが大したことはないだろう。

しかしその内二つがこちらに向かってきた。一つは小さいもの、もう一つは魔力の塊。ネギ君だ。

「こつちに来るな」

「はい、少し離れてください」

「おっけー」

そう言っただけで離れると刹那は夕凧に手をかける。開いたドアの隙間から何かが飛び込んできた。

見た目はまんまツバメであるが口に何かを咥えている。学園長の親書だっけか。取られたのかよ。

刹那は目を閉じる。ツバメは当然刹那の横を通り過ぎ…抜き打ちと共に真つ二つに切れた。

親書は切れておらずツバメだけ切る様はまさに見事としか言いようがない。ツバメは切られた瞬間紙に姿を変え地面に落下する。

俺はその切れ端を持って刹那に聞いた。

「これは？」

「式神の一種ですね。相手は呪符使いでしょう」

「ふーん、これが式神か」

中央で真つ二つにされた鳥型の紙は既にただの紙切れに戻っている。

「待て　　！！！」

刹那が親書を拾った瞬間ネギ君が扉から飛び込んできた。手には小さな携行用の杖を持っている。

まさかまた一般人の前で魔法を使ったんじゃないだろうか……そんな不安が頭によぎる。

「あ、桜咲さん」

「これ、落とし物です」

おいおい、そりゃ無茶があるんじゃないかねえ刹那よ。

そう言おうと顔を向けると睨まれた。ちよつとは協力しようって思えよ……そのまま刹那は元の車両に戻ろうとする。が、ふと振り向いてネギ君にこう言った。

「気をつけたほうがいいですね、先生　　特に……向こうについては……からはね。それでは」

そう言つと刹那は去っていった。どこの隠しキャラだよお前は……あれじゃあ端から見たら悪役と取られかねないぞ。刹那自身は本当の忠告のつもりなんだろうけどな。

ネギ君はというと肩の上に乗っているオコジヨ・・・オコジヨ！？
そう言えばこのかが前ペット申請書を取りに来てたが・・・こいつの
ことだったのか。

「おい」

「ひゃう！く、草薙さん！？」

気づいてなかったのかよ・・・ショックでかいなちくしょう・・・

「ネギ君・・・まさかまた一般人の前で魔法を使おうとしたんじゃない
だろうな」

「い、いえ！そんなことは！」

その言葉に嘘はないようだ。焦ってる分使おうとはしたようだが

.....

「やいやい兄さん！」

肩のオコジヨが・・・喋った。

きつとこの場に人がいたならこういうだろう

キヤアアアシャベッタアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！
！！！！

と・・・

だがまあ・・・俺はそんなことないけど・・・
慣れって怖い・・・

「か、カモ君！」

「なんでえ兄貴！この兄さんは魔法関係者なんだから！だったら大丈夫でい！」

「まあ確かにそうだけどよ」

頬をかいて肯定するがオコジヨと喋るって言うのはなんかこう…
…端から見たらキチ イ？に見えくないか？

「俺の名はアルベール・カモミールってんだ！カモって呼んでくれ、よろしくな兄さん！」

「俺は草薙亮だ。まあ、よろしく」

こうやってオコジヨと握手するのって…やっぱり端から見たらキガイだろこれ。

「それはそうと兄さん！あの女怪しくねえか！？」

「刹那のことか？」

「あいつ西側のスパイかも知れねえぜ！警戒したほうがいいって！」

「理由は？」

「そこに紙型が落ちてるじゃねえか！さっきの女が術者って証拠だよ！」

なんつう浅慮な。それだけで疑いかけられりゃ人間は冤罪だけの

世界になっちまうぜ。

「一応言っておくが刹那は味方だよ」

「そ、そうですよね」

ネギ君が俺の言葉にホッとする。流石に生徒がスパイだと思いたくはないのもあるだろう。

「でもその紙型は！」

「ありや刹那が切り落としたもんだ。術者ならわざわざ切り落とす必要はないだろ」

「むう、言われりゃそうだな」

そんなくらいで納得するなら言うんじゃねえよ…

「とりあえず俺はもう戻る。ネギ君はこれ以上親書を取られないように」

「う、すみません」

そう言っただけで俺は元の車両に戻った。車両に戻ると何故か袋いっばいの蛙を抱えた生徒たちと何人か気絶してる生徒がアタフタと走り回っていた。しかし亜子よ。なぜお前も気絶している……もういや、考えるの面倒だ。寝る。

そう思っただけで席に着くと俺は持つてきていた帽子を深くかぶって視界を閉ざした。まあうるさいから寝るのにはしばらくかかったが……

Side out

Side 桜咲 刹那

や、やっと京都に着いてくれた……恨みますよ草薙さん。新幹線の中は本当に地獄……いや天国だった。木乃香お嬢様が隣の席で常に話しかけてくるしお菓子をくれるしカードゲームは一緒に出来るし……

はっ！ダメだダメだ！私には大切な使命があるのだ！私はお嬢様を影から守ればそれで……

京都に着くと早速バスで清水寺に移動する。京都名所の代名詞とも言える場所だ。

「京都おーっ！」

「これが噂の飛び降りるアレ！」

「誰か！！ 飛び降りれっ」

「では拙者が……」

「おやめなさいっ」

みんなテンション高いなあ……今のところは変な気配はない。流石

にこんな広いところでは仕掛けても来ないか。

「おらあ試験組！こつちこいや！」

「……いやあ……！！」「」「」

草薙さんが京都に着く前に行った試験成績の悪かった人を無理やり集めている。アスナさん、楓、古さん、まき絵さん……って結局いつもの馬鹿レンジャーですね。あれ？綾瀬さんは？

「江戸時代実際に214件もの飛び降り事件が記録されていますが生存率は85パーセントと意外に高く……」

ああ、なるほど。神社仏閣仏像マニアの方でしたか。それはあのテストでは100点でしょうね。綾瀬さんの蘊蓄は止まらず周りの人がずつと「へへ」とか「ほへ」とか言っている。

「あ、いたいた。せつちゃん！」

お、お嬢様！

「あんな、これから班の写真取るねん。せつちゃんも来て」

「あ……す、すみません！」

「あ……」

私はその場を走り去る。木乃香お嬢様の声が少し寂しかった気もするが……うう、少々心苦しい……

ここは……地主神社付近か……ふむ、やはり変な気配はないな。こ

「一応安全か。念のために見回りを……」

ふと階段を上ったところで私の足が止まった。そこにあったのは……

「こゝ、恋占いの石……」

階段のところにある石から20mほど先にある石まで目をつぶって歩いたら想い人との恋が叶うといわれている……い、今の私ならこの程度の距離は余裕で……

目を瞑って一歩、二歩……十歩……十五歩……もう少しのはず……

「こらあ！お前ら逃げるな！」

「へへーん！」

「こゝ、この声は！」

「あれ？桜咲さん？」

「か、神楽坂さん」

振り返ると草薙さんと神楽坂さんたちがいた。どうやら他の人たちより一足先にこっちに来たようだ。

あ……目開けちゃった……

「お、刹那ではござらんか」

「そんなところで何してるネ？」

「し、失礼します！」

はあはあ…まさか見られたか？いや、さっきあそこに来たばかりみたいだから多分大丈夫のはず……

「今度は音羽の滝か……」

三筋に流れる滝は健康、学業、縁結びを司るといわれている。でも、本来の意味は”動・言葉・心の三業の清浄”を表しているのですが……

い、一応…縁結びを……柄杓で掬って口に運ぶ……

「む…？」

美味しい？まさか、ここに流れているのは味なんてないただの地下水のはず……とすれば沸いている場所のほうに仕掛けが？

周囲に人がいないのを確認し屋根に跳ぶとやはりそうだ。屋根の上には樽で日本酒が仕掛けられている。

あ、3-Aの人たちが……いや、いっぱい飲んでも効果は変わらないと思うのですが…というよりそんなにお酒を飲んだら……

はあ、やっぱり酔いつぶれてしまいましたか。

「仕方ないな……」

その後は燦々たる状況だ。クラスの半分ほどが酔いつぶれてしまったため全員をバスに押し込み嵐山の宿に移動。

宿の部屋にそれぞれを移動させて寝かせるという重労働を手伝った。私たちの班は寝込んだ人が宮崎さんと早乙女さんだけだったのである程度は楽だったが……

しかしもうすぐ夜……妨害ではなく本格的に仕掛けてくるのならこの後が本番だ。今のうちに身支度を整えなくては……とりあえずお嬢様たちと鉢合わせないように先にお風呂に入ってしまったおう。

Side out

Side 草薙 亮

マジ勘弁だぜ……西側の妨害工作も中々やるじゃないか……

俺をここまで精神的に追い詰めてくれるとはな！

あの後新田先生に真実を伝えて全員を部屋に押し込むのにどれだけ苦労したのかその西の刺客にも教えてやりたいくらいだぜ！

そして今現在俺は入浴中だ。しずな先生が疲れているだろうと先に入るのを進めてくれた。

いや、それにしてもこんな広い露天風呂は初めてだ。

前世でもこの世でもこれだけの規模のものは中々ないな。一応言っておくが寮の大浴場は俺はほとんど使っていない。まあ女子寮ともなるとひっきりなしに女生徒が使うから男の俺なんて入る暇はないのだ。

しかしこの世の極楽とは正にこのこと。

「あ、草薙さん」

「よ！旦那！」

「なんだ、ネギ君とカモか」

入り口付近で声が聞こえたので見るとネギ君とその肩に乗ったカモがこちらに歩いてきた。恐らくネギ君もしずな先生に言われて来たのだろう。

しかしカモよ、いつの間に俺は旦那になったんだ？

「すごいですねー、これが露天風呂って言うんだあ」

「だろう？これが日本のいい所だ」

「おう！これで桜咲刹那の件が無ければなあ……」

「うん？まだ疑ってるのか？」

「当然ですよ旦那！あいつは京都出身でしかもかみなるりゅう？っていう使い手ですぜ！」

『しんめいりゅう』な、カモ。

しかしまあいくら口だけで言ってもやはり実際に体感しないと分からないか。百聞は一見にしかずとはよく言ったものだ。

その時、ガラガラという音が聞こえてきた。誰かが入ってきたのだろう。しかしなんだ、こつ…嫌な予感がする……

ここは岩場を背にしているため入り口から直接見られることもないがこつちから直接見ることも出来ない。その姿を確認するために俺とネギ君は岩場から顔を出すと……

「なんとまあ……」

噂をすれば影とは昔の人はよく言ったもんだ。そこには一糸纏わぬ姿で湯を浴びようとしている刹那がいた。

肌白いな。大和撫子っていうのはまさにああいうのことを言うんだろうな。

「なななんで！？入り口は男女別なのに中は同じ！？」

「混浴ってんだよ兄貴」

後ろでネギ君がカモと何か言い合いをしている。幸い刹那はまだこちらに気づいていないようだ。上手くすれば気づかれずに風呂場から脱出できる。

「困ったな……魔法使いであるネギ先生なら……何とかしてくれると思っていたのに……草薙さんは草薙さんでマイペースな人だから当てには出来ないし……」

ほう……言ってくれるじゃないか刹那。後でその当てに出来ない奴に助けられたことを掘り返してやるか？

って、殺気！？

微かだが殺気のほうを見るとネギ君が小さな杖を握り締めている。どうやら自分の正体が刹那にバレていたせいで焦ったようだ……

(一の馬鹿！)

声には出さなかったものの叫びそうになってしまふ。当然のよう

に刹那はそれに気づいた。

夜光灯を小石の指弾で割って明かりを消し、どこから取り出したのか夕凧を取り出す。四次元ポットでも体についてんのか!? 明らかに風呂は入ってきたときには持つてなかったぞ!

「誰だ!？」

ネギ君が姿を現さないのを見ると夕凧に気を込める…ってあの構えは…マズイ!？」

「神鳴流奥義…：斬岩剣!！」

ネギ君の隠れていた方の岩が頭ギリギリのところまで真つ二つにされた。その際ネギ君のアホ毛が半ばから切られてしまった! いや、今はそんなことはどうでもいいか。

「『風花・武装解除』!！」

上手いことネギ君が刹那の夕凧を武装解除で弾き飛ばしたが…：…なんでそこで安心するかねえ。相手はまだ突っ込んできてるって言うのに…

刹那は勢いをそのままに右手でネギ君の首を、左手で…：…まあ、なんだ。男の一番の急所と言えば分かるだろう。を鷲掴みにされてしまった。考えただけでもぞつとするわ…：…

「何者だ…：…答えねばひねり潰すぞ?」

ドスの効いた声で刹那がネギ君に迫る。ってかひねり潰すってどこを!？」

「て、アレ？ ネ・・・ネギ先生？」

「あわわわ・・・」

ようやく刹那がネギ君を確認したようだ。慌てて首と急所から手を離してアワアワと手を振る。

「いえ、これはその！ 仕事上急所を狙うのはセオリーで！ ……………えつと…ごっ、ごめんなさい先生！」

「おいおい刹那よ。そこら辺にしとけ」

「く、草薙さん！？」

気づいてなかったか。まあ殺気もやる気も出してなかったからな。殺気のほうを優先するのは当然だろう。

結局そこからは俺が事情を説明したがネギ君とカモは未だに納得できていないようだ。

「ですから私は一応先生の味方です！」

「は、はあ・・・」

「けっ！ いくら口で言っても信じられねえぜ！」

「カモ…お前は少し黙ってる」

「だん…ガボガボガボ！」

カモの首根っこを掴んで湯の中に突っ込む。一々こいつが話を掻き回すと厄介この上ない。

その時女用の脱衣所からこのかの悲鳴が聞こえた。

「こ、この悲鳴は……」

「このかお嬢様!？」

「このかか!」

くっそ!こんなことやってる場合じゃなかった!刹那とネギ君のやり取りに気を取られてこんな距離まで気づかないなんて!

神経を研ぎ澄ますと多数の小さな反応が脱衣所で動き回っている。最もはやく動いた刹那の後に続いて俺とネギ君は女性用脱衣所に突入する。

「大丈夫ですかこのかさん!？」

扉を開けた瞬間呆けてしまった……いやだつてねえ……

小さな大量のサルが明日菜と木乃香の下着を脱がそうとしているのだ。本当に西の刺客は何を考えているのやら……っと、呆けてる場合じゃないな。

近くにいた一匹を軽く踏みつけると直ぐに紙に戻った。やはり式神の一種だ。そんなことを確認していると木乃香がおサルにすっぽんぼんにされた。サル、GJ!じゃなくて!!

「あ!ネギ君、せつちゃん、草薙さん!みんないて……!!」

「……このサルども……!!このかお嬢様になにをするか……!!」

つと、刹那が切れやがった！夕風を鞘から抜き猿を切るうとした所を、何トチ狂ったのかネギ君が可哀想だと止めていた。いや式神だし切ったって紙に戻るだけなんですけど……

そんなことをやってる内に木乃香がサルに連れ去られており、既に露天風呂まで逃げ出している。

つたく何やってんだか！

「人鳥！」
じんちょう

姿勢を低く保ち体を滑らせる。両足で地面を滑りその勢いで足元のサルを一気に蹴り飛ばし、

一瞬だけ浮いたこのかを抱き上げた。う……抱き上げたのはいいが目のやり場に困る……慌てて視線を逸らすとそこには下着姿のアスナが……どうせいつちゆうんじゃ……

「お嬢様！」

「刹那！頼んだ！」

「へ？ひゃあ！」

タイミングよく刹那が来てくれたのでこのかを刹那に押し付ける。一瞬だけ露天風呂の外に変な気配を感じたためその方向に殺気を放つ。

「術者がいたかもしれん！少しだけ追うから後は任せた！」

「は、はい！」

そう言っただけ俺は脚に気を込めて地面を蹴った。既に感じた気配は

ないが念には念だ！

「フラマ・ブラスト・マテリアル！『炎の精霊7柱、集い来たりて敵を貫け』！！」

始動キーを唱えて右手の人差し指の銀の指輪に魔力を込める。

ちなみに普通の指輪では発動体になりえないので既にエヴァンジェリンに亜子と共に改造してもらっている。

「『魔法の射手・連弾・炎の7矢』！！」

展開した炎の矢を気配のした場所と逃げたと思われる直線状に叩き込み林を吹き飛ばす。

ちなみに温度は低めだ。火事が起きたら本末転倒だからな。というより俺の場合燃える前にその周囲を吹き飛ばしているため元々燃えない……

「逃げられたか」

感じた気配はまず間違いなく敵側の術士だろう。一応そのまま襲ってくることも考慮していたがどうやら心配なかったようだ。

露天風呂に降りるとずれかけた腰のタオルを直す。空中で素っ裸なんて笑い話にもならない。

既にネギ君たちの姿はない。このかを連れて中に戻ったのだろう。

着替えて中に戻ると刹那を除いた先ほどの面子が休憩所にいた。

このかの目には薄っすら涙が浮かんでいる。

「よう、どうしたお前ら」

「あ、草薙さん」

3人の顔がこちらを向く。話を聞くとこのかと刹那の幼少期のから今までの生い立ちを聞いていたようだ。本来二人は親友と呼べるほどの仲だったらしい。

だがある日川原で遊んでいる時にこのかが誤って足を滑らせ、川に転落して溺れ掛けた。刹那は当然助けようとしたが……結果的に二人共に大人に助けられてしまう事となる。その中で刹那はこのかを守れなかったことを非常に悔いていたらしい。

その後、刹那は神鳴流の稽古で忙しくなり、このかとは会えなかったということだ。それ以降麻帆帆良学園で再会してからは、このかは刹那に避けられ続けている。恐らく今の厳格な性格も、このかを避けるような仕草も、このか自身を守ろうとする故になのだろうが

……

「ウチ何か悪いことしたんかなあ……せつちゃん昔みたたく話してくれへんよーになってて……」

本人にはそう見えるのだろう。顔は笑顔を作っているがその目には涙が浮かんでいるしその笑顔も非常に悲しいものだ。見ている方が痛々しいほどに……

気づいたときには俺はこのかの頭を撫でていた。

「ふえ！？草薙さん？」

「大丈夫だ。刹那は今もお前のことを大切に思っているさ」

「ほんま？それやったら嬉しいなあ……」

それでも涙は止まらない。伏せたこのかの顔から雫が流れ落ち浴

衣の膝の上にシミを作り出す。昔の親友に嫌われたと思い、それでもその友を信じているこのかの心情なんて俺には分からないしかける言葉も見つからない。

でも今のこのかが悲しいのは分かる。こういう時は休むに限る。この場に居づらくなつたのかネギ君と明日菜は俺に『お願いします』というジェスチャーとともに戻っていった。

「う……ふええ……ぐす……」

このかは何か止まらなくなつたのだらう。今までこの子がここまで泣くというのは見たことがない。よほど刹那のことが好きなのだろう。端から見ても分かるのだから当人の刹那も相当苦しいはずだ。そこまで遠くから見守らなくてもすぐ近くで見守ってやれと思うのだがそこは刹那の不器用さが出てると考えるべきだらう。刹那も好きでこのかを敬遠してるわけではないのだから。

「大丈夫か？」

「うん、ごめんな。草薙さん」

10分ほどしてこのかはえへへと頭を掻きながら顔を上げいつもの笑顔を浮かべた。その顔には先ほどまでの無理した笑顔ではなく自然なものになっている。

「部屋まで送ろう。もうすぐ消灯時間だしな」

「ほならお願いしようかな」

部屋に着くとこのかと別れる。綾瀬が起きていたので任せてきた。まあ綾瀬なら上手くこのかの話を聞いてやれるだらう。

S
i
d
e

o
u
t

修学旅行の為…（後書き）

どうも、ようやく修学旅行編に入りました。

最近学校やら教習所やらで忙しくてまったく書く暇が無かったんですがなんとか書き上げることが出来ました。

でもなんか最近クオリティがエヴァンジェリン戦より下がっている気がしてなりません。大丈夫でしょうか…

多分これからも1週間に一話くらいのペースになると思いますがよろしく願います。

当然早くできればその分早く上げます。

ではまた次回ノシ

守るべき存在の為…（前書き）

なんとか出来ました。

まあ近況や内容については後書きで
とりあえず本編をどうぞ

追記、7月8日修正

守るべき存在の為…

Side 草薙 亮

このかを部屋に戻した後、俺は宿の中の見回りに戻る。とりあえず今のところ変な気配は無い。

ルートのにはこのかのいる部屋を拠点に、決めたところまで行ったら部屋まで戻るといふ往復方法だ。廊下を曲がると部屋に戻ろうとしている明日菜と刹那に出会った。

「お、お前らか」

「あ、草薙さん」

「先ほどはお嬢様を救っていただきありがとうございます」

「どづいたしまして、と言っておこうか」

そう言っつて刹那は頭を下げてくる。そういえばネギ君がいない。

「あれ？ネギ君はどうした？」

「はい、ネギ先生は外の見回りに出られました。私と神楽坂さんは班部屋の守りを」

「ふーん。外回りねえ」

「一応出入り口に簡易の式神返しの際の結界貼っていますので心配ないと思います。破られる可能性はありますがそれならばすぐに

分かりますから」

ふむ、刹那がそこまで言うのであれば信じられるだろう。

「で、私と桜咲さんはそれぞれの班の見回りと、このかの護衛ってわけ」

アスナがそう言った。確かに二人はこのかと同じ班だ。護衛するにしてはこれほどの好条件もないだろう。

考えてなかったがそういう意味では刹那を同じ班にしたのは正解だったようだ。

「ふむ、じゃあ各部屋の見回りは俺がやる。二人は木乃香のことを頼む」

「いえ、各部屋の見回りには私たちも交代で同行したいのですが…」

「む？何でだ？」

「草薙さんの実力は知っていますが、まだ相手の手の内を知りません。不意を突かれた場合一人では敗れる可能性があります。それならば私と神楽坂さんが同行していたほうがいいかと」

なるほど。確かに俺はまだ相手を知らない。刹那の言うとおり不意打ちされた場合は俺の実力では対処できない可能性も多い。

それならば多少このかの護衛が薄くなっても対処できる刹那と魔法無効化能力を持っている明日菜がいた方が大幅に選択肢が増える。

「分かった。じゃあ最初にアスナは木乃香の護衛を、刹那は俺と見回りを頼む」

「分かりました。ではすいませんが神楽坂さん。お嬢様のことを頼みます」

「任せといて。このかのことは付きっ切りで守るから」

拳を固めてアスナが言う。まあなんとというか……一応一般人なんだからそこまで無理をして欲しくはないんだけど、手の足りない今では非常にありがたい存在だ。

アスナを部屋に残して刹那と共に再び宿の見回りを始める。特に異常はないし変な気配も感じない。なんとなく手持ち無沙汰だったので刹那に話しかける。

「なあ、さっきの結界って外からの守り用なんだよな？」

「はい、外側の敵に対しての警戒や弱い式神の進入を防ぐ効果があります」

その言葉に引っかかる部分があった。少々不安になったのでそれをぶつけてみる。

「じゃあ内側から外に出る奴に対しては何もないってことか？」

「?…はい。そういうことです」

俺の言いたいことが今一理解できないのか刹那は首をかしげてそれを肯定する。ってことは……

「さっきこのかが風呂場で襲われただろ？」

「……………はい」

刹那は顔を伏せて唇を噛んでいる。いや、悔しいのは分かるが今はそうじゃなくて……

「あの後術者と思われる気配を俺は感じた。それに向かって魔法を撃ったわけだがとつくに気配は消えていた」

「はい」

「それはつまり相手は気配を消してこの宿に入り込んだって可能性もなくはないんじゃないのか？」

「あ！」

そう。確かにあの時点では入っていないかもしれない。しかし刹那が旅館すべての出入り口に呪符を貼り付けるのにはタイムラグがある。それが終わる前に一箇所でも開いていれば敵方は感知されることなく入り込むことが可能というわけだ。

それに気づいた刹那は顔に冷や汗を浮かべている。

そしてそれをあざ笑うかのように先ほどの式神と同じ気配がした！

「ちい！」

「この気配は！」

俺と刹那が同時に廊下を逆走し、明日菜がいる部屋の前にたどり着く。部屋の戸を引くとその場に座っているアスナと何故かモジモジしている綾瀬がいた。

「神楽坂さん！このかお嬢様は！？」

「え？そのトイレに入ってるけど？」

明日菜が入り口近くのトイレを指す。

「どれ位になりますか！？」

「10分くらいです……二人で昼間の滝の水で晩酌をしていたのでそのせいかも……」

ぴよんぴよんと跳ねながら綾瀬が言う。何やってるかと思ったらトイレを我慢してるのか。

動くと余計きついと思うぞ？って！だから今はそっぴいことじゃなくてだな！

「このかー、入ってるよねー？」

「はいっとなりますえ〜」

「ほらね？」

アスナがトイレのドアを叩くと確かにこのかの声がある。しかし気配はない。つまり中はもぬけの空のはずなのだが……

「どけ！お前ら！」

「う、うん」

ドアの前にいたアスナがどいた瞬間俺は回し蹴りでトイレのドアを蹴り破った。

扉の鍵が激しい音共に吹き飛びドアが内側に開く。

「ちょ！」

「く、草薙さん!？」

俺以外の全員が俺の行動に啞然としている。まあ普段やれば変態のレッテルを貼られるが今は時間をかけるわけにはいかない!

「こ、これは！」

「お札が喋ってる!？」

そこには『はいっとりますえ〜』と繰り返すお札が貼り付けられたトイレがあった。つまりこのか自身はもう既にここにはいない!

「くそ!嵌められた!」

「あ!ちょ、ちよっと!!!」

俺はアスナが止めるのを無視して窓の外に飛び出し、屋根へと跳び上がる。まだそんなに遠くへは行っていないはずだ。

しかし夜の街は当然暗く全く見えない。外回りにいるはずのネギ君に連絡をするため携帯を取り出して電話をかける。コールの時間が非常に長く感じた……

『はい、ネギです』

「ネギ君か！すまん！このかが敵方に誘拐された！」

『ええ！？』

『おい、兄貴！あれ！』

『え？わあ！』

「ネギ君！おい、どうした！？くっそ！」

電話が一時的に途絶える。携帯をポケットに突っ込むとネギ君の気配を探るために神経を集中させた。

ネギ君の魔力は異質だ。探せば一発で分かる。気配はすぐ近く、嵐山の麓に架かる渡月橋だ。屋根を蹴って跳び出す。アスナと刹那はどうやら先に着いてるようだ。恐らくあの後すぐに旅館を飛び出したのだろう。3人の気配が動き出す。

それに先行する謎の気配が一つと慣れた気配が一つ。慣れた気配はこのかだ。ということは一緒に移動しているのは敵だろう。渡月橋を一気に駆け抜けてネギ君たちに追いつく。

「すまん！遅れた！」

「草薙さん！」

「私たちのことは構いません！お嬢様をお願いします！」

「任せろ！」

「頼んだわよ！草薙さん！」

アスナが言ったのと同時に俺は更に地面を蹴って一気に3人を追い抜く。相手は人一人を抱えているからなのか動きは俺たちより遅い。そして向かっているのは確か駅だ。ならば行き先は決まっている。先回りだ！

右手に魔力を込めるとそれを言葉とともに開放した。

「来い、騎士！」

Side out

Side 桜咲 刹那

くっ！まさか修学旅行中にこんな強硬手段に出るなんて！油断していた私の完全なミスだ！『あの時』に私はお嬢様を必ず守ると心に誓ったというのに！電車の中でも一歩間違えればそのまま逃げられていた。自分の不甲斐無さに呆れてしまいが今はこのかお嬢様の奪還が第一！

しかし先行したはずの草薙さんはどこへ……

「せ、刹那さん！ 一体どう言う事ですか！？」

「ただの嫌がらせじゃなかったの！？ なんであのおサル、このか一人を誘拐しようとするのよ！！」

すぐ横を並走するネギ先生と神楽坂さんが聞いてくる。ここまで来た以上話さざるを得ないだろう。これ以上隠していてもデメリットしかない。

「じ……実は、以前より関西呪術協会の中に、このかお嬢様を東の麻帆良学園へやってしまった事を快く思わぬ輩がいて……おそらく、奴らはこのかお嬢様の力を利用して関西呪術協会を牛耳ろうとしているのでは……」

「え……？」

「な、何ですかソレ!？」

二人が驚きの声を上げる。

「私も学園長も甘かったと言わざるを得ません。まさか修学旅行中に誘拐などという暴挙に及ぶとは……。しかし、関西呪術協会は裏の仕事も請け負う組織。このような強行手段に出る者がいてもおかしくはなかったのです」

言っていて悲しくなってくる。これではただの言い訳だ。そんなものでも正に後悔先に立たずというのに……

最早いない人のことを考えても仕方ない。草薙さんのことは一旦置いておくとして賊を追いかけるのに集中しなければ!

「やはりここにも人払いの呪符!やはり最初から計画的な犯行か!」

駅柱に貼り付けられた人払いの呪符を見ながら改札を飛び越える。本来犯罪だがこの際だ。それに呪符のせいで駅員さんすらいない。敵が剥がさないで行ってくれたのはむしろ助かった。

京都駅の大階段の中腹で賊が止まっているのが見えた。逃げ切ることは不可能と判断したのだろう。電車に乗るときに追いついたことを考えれば私たちのほうが早いのは明白だ。

「フフ……よー、ここまで追ってこれましたな……」

「あー！」

「おサルが脱げた!?」

いえ、元々着ぐるみを着ていただけです明日菜さん。しかし賊は女か？腰付近まである黒い長髪、妙齡の眼鏡をかけた姿で先ほどの旅館の制服を着ている。

作業員のフリをして紛れ込んだか……

着ぐるみを脱ぎ捨てて右手には先ほど列車の中で大量の水を放ったものと同種の札を持っている。とすれば先ほどと同種の巨大な魔法！

「そやけどそれもここまでですえ……。三枚目のお札ちゃん、いかせてもらいますえ」

「おのれ！させるか！」

夕凧を構えて階段を疾走する。しかし如何せん距離が離れすぎだ。階段というのも災いして速度がでない。

「お札さん、お札さん。ウチを逃がしておくれやす」

そう女が唱えて札を私に向かって投げつける。その札が瞬間光を放った。まずい！

「喰らいなはれ。『三枚符術京都大文字焼き』！」

光が収まった後、目の前を覆うのは炎。一面の燃える階段だ。

「うあつ！」

切りかかるために疾走していた私の体は止まることもできずその炎に……

「桜咲さん！」

背後から声とともに襟首を引っ張られた。直前まで迫っていた肌を焦がすような炎の熱が引いていく。

た、助かった？

振り向くと私の襟首を持っている神楽坂さんがいた。

し、しかし……神楽坂さんは本当に素人なのだろうかと疑ってしまふ。一般人ならあそこまで巨大な炎を見たら一瞬でも思考が停止するものだ。それを私に追いついて、しかもそれを止めるなんて……

「ホホホ……並みの術者ではその炎は越えられまへんえ。ほな、さいなら」

女が私達を見下すように言ってその場から背を向ける。神楽坂さんは炎の向こう側で背を向けた女に対して睨みながらも私を守るように手をかざしていた。しかしこの光景はなんなのだろうか……大文字焼きというからには上から見たら「大」の字になっているのだろう。燃えない部分があるのも分かる。しかしここは明らかにまだ大文字焼きの範囲の中だ。それなのに神楽坂さんを中心に炎が避けられている。まるで炎そのものが近づけないようだ。

炎は私たちを、いや、神楽坂さんを中心に周りを焦がしている。

一般人である彼女にこんな能力が？そもそも私やネギ先生の移動速度に着いてこれる時点でおかしいと思うべきだったのか？

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル！『吹け、一陣の風』……」
炎の外側から声が聞こえる。ネギ先生だ。

「『風花・風塵乱舞』！」

呪文が完成した瞬間吹き荒れる突風が大文字焼きをすべて吹き飛ばした。

なんとこの魔力……サウザンドマスターの息子というのは伊達ではないということが。

「な、何や　　！？」

背を向けていた女が振り返って驚きの声を上げている。逃げる足が止まった。勝負はこれからだ！

「逃がしませんよ！　このかさんは僕の生徒で……大事な友達です」
「！」

ネギ先生が何かのカードを取り出しつつそう叫ぶ。10歳でこの啖呵……

なるほど、サウザンドマスターの息子というだけではなくこの先生自身の努力の賜物でもある、ということですか。

「契約執行180秒間！！　ネギの従者『神楽坂明日菜』！」

ネギ先生がそう唱えると神楽坂さんの身体は淡い光に包まれる。

この光は一体……

「ネギ先生……神楽坂さん……」

「桜咲さん、行くよ！」

「え……あ、はいっ！」

呆然としていた私の意識が神楽坂さんの一喝で元に戻される。そうだ。考えるのは後でもできる。今は……お嬢様をお助けすることが第一！
気を取り直して夕凧を構える。

「もー……さっきの火、下手したら火傷しちゃうじゃない！ 冗談じゃすまないわよ!?」

いえ、あの時は多分相手も殺す気だったのではと……

「その馬鹿猿女　っ！このかを返しなさいーいーい！」

そう叫んで神楽坂さんが飛び出していく。私も遅れていられない。神楽坂さんが真正面から突っ込んでいくので階段の反対側に飛ぶ。挟み撃ちの形だ。

「アスナさん！パートナーだけが使える専用アイテムを出します！アスナさんのは『ハマノツルギ』！武器だと思います！受け取ってください！」

「武器！？そんなのがあるの？よ、よし。頂戴、ネギ！」

その言葉にネギ先生が先ほどのカードを掲げ何かをつぶやいた。すると神楽坂さんの手に光が集約されていく。光が収まった先に現れたのは……

「……な、何よコレー！ただのハリセンじゃないの　！？」

そう、ハリセンだ。少し転びそうになったのは内緒だ。

しかし、ただのハリセンではないようだ。やはり何らかの気配を感じる。何か特殊能力があると考えていいだろう。

「神楽坂さん！」

私の叫びに再び神楽坂さんが前を向き接近を再開する。

「ええーい！　行つちまえ、姐さん！！」

「もー、しょうがないわねっ！！」

神楽坂さんはほとんど自棄とも取れる声を上げてハリセンを振りかぶると大きく跳躍した。私もそれに合わせる形で女の右から夕凧を振りかぶる。

「！？」

完全に女を捉えていた一撃は一瞬にして現れた大きなクマとサルのヌイグルミによって防がれた。

「うわった……！？な、何これ！動いた！？着ぐるみじゃなかったの！？」

「これは呪符使いの『善鬼』『護鬼』です！間抜けなのは外見だけです！気をつけて、神楽坂さん！」

『善鬼』 『護鬼』 は西洋魔術師の従者と同じ役目を持つ。いくら呪符使いといえど呪文を唱える間は無防備となる弱点は変わらない。そのため上位の術者はこれらのように『善鬼』 『護鬼』 という強力な式神を護衛に付けているのだ。

先ほどの大文字焼きや電車の中での水を発生させた術から術者自身も強力とは分かっていたが……

「ホホホホ。ウチの『猿鬼』と『熊鬼』はなかなか強力ですえ！一生そいつらの相手でもしていなはれ！」

不味い！時間をかければ女に逃げられる！しかしこの『善鬼』 『護鬼』 を打ち破るのには時間が……くそ！

「このか……！こんのおおー！！」

神楽坂さんがお嬢様をつれて逃げようとする女を目にした瞬間、弾かれるように手にしていた得物を式神目掛けて袈裟懸けに薙ぎ払う。気合の声とともに放たれた一撃は変わらずサルの眉間に直撃した。そして、次の瞬間には式を送り返してしまった！

「な……」

呆気にとられて声も出ない。私も倒せなくはないとは言えそれは時間をかけての話だ。ましてや一撃で『送り返す』などと……先ほどの炎が避けたことと合わせると神楽坂さん自身にそういう能力があるのだろうか？

「あ、あれー？消えちゃった……」

神楽坂さんもなにが起こったか一瞬分からなかったらしくハリセ

ンを持ち上げてマジマジと眺めている。

「す、すごい。神楽坂さん」

先ほどの想像が当たっているならこれほど術者やああいっ式に対して相性の悪い相手はいない。

「な、何か良くわかんないけどいけそーよ！桜咲さん！そのクマミたいなのは任せてこのかを！！」

「すみません！ お願いします！！」

そのことには気づいていないのだろうが神楽坂さんが私のほうにいるクマに突っ込んでいく。

迷っている暇は無い。

相性で言えば神楽坂さんが絶対的なものを持っている。神楽坂さんと入れ替わるように女のほうに足場を蹴る。

「このかお嬢様を返せ ！」

もはや守るものはない。術者だけなら切り伏せるのは容易だ。

術者によつては接近戦を得意とするものもいるが先ほどから見る限りこの女は典型的な後衛の術者。勝負は一瞬でつく！

完璧に間合いに捕らえて夕凧を振り下ろす！

「え〜〜い」

間の抜けた声とともにまたも剣が止められた。いや、正確には弾かれた！？

夕風を通して伝わってくるのは明らかに刀同士をぶつけた感触。しかも、この剣筋……神鳴流!?

マズイ! 神鳴流の剣士が護衛についたのかっ!

「あいたたー……。すみません、遅刻してしてもて……。どうも〜、神鳴流です〜。おはつに〜」

目の前にいるのはゴスロリ?というのだろうか。そのような服を全身にまとい眼鏡を掛けた少女。本当に神鳴流の剣士かと疑ってしまつが、受けた剣筋と手にした日本刀がそれを本物だと物語っている。得物は平均的な長さの日本刀と小太刀の二刀。

「え、お、お前が……。神鳴流剣士……?」

「はい〜〜 月詠います〜。見たとこ、あなたは神鳴流の先輩さんみたいですけど……。護衛に雇われたからには本気でいかせてもらいますわ〜」

「こんなのが神鳴流とは……。時代も変わったな……」

確認も取った。信じたくはないが予想は当たっていたようだ。

できれば外れていて欲しかった予想だが……。しかし二刀……。間合いを計りながら距離を取る。

「フ……。甘く見てるとケガしますえ。ほなよろしゅう、月詠はん」

女がそついいながら月詠の後ろに下がる。距離をとるのは自分が巻き込まれないようにする証拠。となれば……

「で、ではいきます。一つお手柔らかに……」

月詠が頭を下げた瞬間、距離を詰めてきた。口調はのんびりしている癖に攻撃は素早い！

間の抜けた声とともに振り下ろされた右手の刀を受け止めるといつの間にか持ち替えたのか逆手に持った左手の小太刀が右胴を裂こうと接近している。その間も右手の刀は止まらない。小太刀を体を最小限に捻って避け、何合か打ち合った後、距離を取ろうとするが距離を取られては不利と分かっているのか中々離れられない。接近戦同士との戦いというのは要するに間合いの勝負だ。間合いの短い二刀流は接近されなければ怖くないが超接近したときの連続攻撃は止めることができない。野立ちは超接近戦には向かないが中距離、または自分より大きいものを相手にするときには有効だ。どちらにせよ、初手で間合いを詰められた時点でかなり不利になっていると言わざるをえない

逆袈裟から刀が迫る。夕風はもう片方の小太刀を受け止めているため使用できない！

「ちい！」

右手のみに夕風を持ち替え左手で月詠の右手首を押さえ斬撃をころうじて止める。が、それを予想していたかのように今度は左手の逆手小太刀がそれを待っていたかのように目の前にかざされている。

「くっ！」

それを月詠の右手首を引き寄せることでなんとか夕風で受け止める。体が泳いだため月詠の連撃も大きく乱れ一瞬手が止まった。

油断したつもりはないがまさかこれほどまでとは……やはり得物の差が…！

「ホホホ、伝統が知らんが神鳴流剣士は化け物相手用のバカでかい野太刀を後生大事に使用さるさかいな……。小回りの効く二刀の相手をイキナリするのは骨やる？」

女の声が聞こえる。確かにその通りだ。二刀流というものがここまで厄介なものとは……

「ざーんがーんけーん！」

「くっ！」

月詠の放った斬岩剣を避けた。振り下ろされた一撃は足元の石段を砕き粉塵を撒き散らす。

「いや　ん！なんなのよこれ　！？」

顔を向けることはできないが神楽坂さんの声がする。どうやら苦戦しているようだ。確かに私たちを上手くは抑えている。しかし……

「　　テル・マ・スキル・マギステル！『風の精霊11人！　縛鎖となりて敵を捕まえろ』！！！」

一手足りなかったようだな猿女。こちらにはまだネギ先生がいる！

「『魔法の射手・戒めの風矢』！！！」

ネギ先生の放った魔法の矢が猿女目掛けて飛来する。これで詰みだ！猿女は完全にネギ先生のこと忘れていたらしく防壁のようなものも張れていない。

「あひいつ!? お助け　　!」

「なっ!」

それをあろうことか女は近場にいたもの……このかお嬢様を盾にしたのだ!

「あっ、曲がれ!」

ネギ先生が当たる直前で魔法の矢を曲げる。

「ほっ……」

「よそ見しててもええんですか? せんぱい」

ほっと息を吐いたところに月詠の連撃が襲い掛かる。相変わらず嵐のような斬撃だ。左右上下から隙間なく来る攻撃は正に一部の隙もない。

「こ、このかさんを離してくださいっ! 卑怯ですよ!」

ネギ先生の相手を非難する声が響く。確かに卑劣で許されざる行為だ。特にお嬢様を盾にするなど、仮にも関西呪術協会の者だろうに!

「は、はは〜ん……。なるほど……読めましたえ。甘ちゃんやな……人質が多少怪我するくらい気にせず打ち抜けばえーのに……ホーホホホ! まったく、この娘は役に立ちますなあ! この調子でこの後も利用させてもらっわ!」

このかお嬢様がいる限りあの女への攻撃は封じられたと言っても過言ではない。現にネギ先生は魔法を唱えることもできずに女を見上げことしかできない。

「こ、このかをどうするつもりなのよ……」

苦しそうな声に顔を向けると神楽坂さんが式神に捕まっていた。

この状態では万事休すか！

私のほうも相変わらず月詠の猛攻は続いているせいでこちらも助けることができない。それでも月詠は先ほどよりつまらなさそうだ。おそらくお嬢様が人質に使われたせいでこちらの本気が出せないのを分かっているのだろう。その証拠に先ほどから私が何度も他に顔を向けているのにその間は切りかかってきていない。

その時、女の楽しそうな声がその場に響いた。

「……せやなー。まずは呪薬と呪符でも使って口を利けんようにして、上手い事ウチらの言うコト聞く操り人形にするのがえーな……。くっくっく……」

その言葉を聞いた瞬間、頭の中で何かが切る音がした。呪薬？呪符？そんなことは……私がさせない！

「あんっ！先輩ったら激しくなってきましたな〜」

月詠の顔が再び楽しそうに笑う。どうやら私の攻撃は先ほどより激しくなっているようだ。だというのに心はひどく落ち着いている。だが月詠も簡単には抜けない。防御に徹しているか先ほどのような攻撃ではなくこちらの攻撃を避けつつ当たるものだけを受け止めている。

これでは…埒が明かない…

あの人の真似をするのは癪だが…今は手段を選んではな
い！

「斬岩剣！」

「おっと〜」

上段に振り上げて思い切り振り夕風を下ろす。当然のように避け
る月詠。避けた技はそのまま石段を砕き、先ほどのように瓦礫と粉
塵を巻き上げる。

「はあああああああああ！」

連続して斬岩剣を振り下ろす。月詠は受け止めることもなく簡単
に避ける。

二刀流というのはこの数分で受けに弱いと分かった。私の渾身の
一撃を月詠は今まで受け止めることは一度もなく、避けるかいなす
かしているからだ。よってこの斬岩剣を受け止めるわけにはいかな
いはず。

「そんな攻撃はあたりませんか？自棄になっただんどすか？」

「自棄などでは……ない！」

再び月詠に斬岩剣を放つ！後ろに一步下がっただけで避けた月詠。
流石にこれだけ連打したことになかったため私は肩で息をして
いる。が、これだけやれば……

「すまないがこれで終わらせてもらおう！」

「ふふふ、今まで無駄に技を放っただけ……どう終わるのか見せてもらいまひよか！」

月詠がこちらの言葉に反応して突っ込んでくる。私は……

「はあっ！」

「ふえっ！」

足元の瓦礫を月詠の顔面めがけて蹴り上げた！

粉々に碎け散っていた瓦礫は月詠の顔面を覆い動きが鈍る。草薙さんが以前敵に対しやっていた目潰しの方法。あの時は卑怯だと彼を罵ったが……今は！

「お前は……邪魔だ！」

「あっ　　！」

夕凧の峰の部分で月詠の頭部を横薙ぎにぶん殴る。咄嗟に月詠は体を引いたようだが当たった感触はした。一瞬とはいえ動けないはず！

女のほうを見上げるとお嬢様のお尻を叩いていた！？

「このかお嬢様に何をするか　　！！！」

「このかになんてことすんのよ　　！！！」

私とともにいつの間にか式を返した神楽坂さんが女に飛び掛って
いくのが見える。だがそれよりも早く……

「あのさあ……一応俺の生徒だから薬とかそういう体罰っぽいことは
やめてくれないかなあ？」

このかお嬢様が女の肩から消えた！？しかもこの声は……

「「草薙さん！？」「」

女の後ろには今まで姿を消していた草薙さんこのかお嬢様を抱っ
こして立っていた。

「な、なんやあんた！いつの間に……！？」

「まあそれは追々でいいじゃん。それより俺のこと見てていいの？」

「へ？」

女が草薙さんの方を見てるうちに私も神楽坂さんも一気に距離を
詰める！

「『風花……武装解除』！！」

「なあ ……！？」

ネギ先生の声とともに女の服が吹き飛び、神楽坂さんが思い切り
ハリセンを頭に振り下ろす！

それでもどこかに隠しておいたのだろう。何かの呪符を取り出し
ているが……最早この距離でそれをさせるわけもない！

「秘剣　　百花繚乱！」

「ぺぽ　　！！！！！！」

溜めた気を開放するとともに夕風を振りぬくと女は間抜けな声を上げて吹き飛んだ。そのまま何度か地面を跳ねると壁に激突する。

「……な、なな……」

ユラユラとふらつきながらも猿女は身体を起こした。顔を上げて私たちを見ると怯えたように後退する。どうやらやっ自分と自分が散々打ちのめされたことが分かったようだ。

「……な、なな、なんでガキがこんなに強いんや……」

「ガキだけじゃねえよ」

そこに草薙さんがお嬢様をおんぶした状態で降りてきた。

「くっっ！」

声とともに式神を呼び出す女。こいつ！ここまでやられてまだやる気なのか！？

警戒しつつ再び夕風を構える。他の人たちも警戒態勢を強めるが

……

「お、おぼえてなはれーっ」

どうやら逃げるために式は呼び出したらしい。女は式に抱えられ

るとそのまま京都の夜に消えていった。月詠もいつの間にかあのサルの式の尻尾を掴んで脱出していくのが見える。

「あいつめ」

神楽坂さんが悔しそうに声を上げる。いくら特異の能力を持っている彼女とはいえ空に大きく跳躍した相手には追いつけないようだ。

「追う必要はありません、神楽坂さん。深追いは禁物です」

「う、それは分かってるけど……悔しいわね」

彼女のことだ。釘を刺しておかなければこのまま追いかねない。神楽坂さんは渋々といった様子でハリセンを下した。

「それより旦那。どこ行ってたんでい！」

「そ、そうです！あの後どこに行ってたんですか！？大変だったんですよ!？」

ネギ先生が草薙さんに詰め寄った。確かに今までどこに行っていたのかは非常に気になる。

「あー、その話は後でな。今はの様子を確かめないと」

そう言いながら草薙さんはお嬢様を背中から下ろした。

S i d e o u t

「そう言えばアイツ、薬や呪符を使うとか言ってたな。このか姉さんは大丈夫か!？」

「……………まさか!」

刹那が慌てて俺が下ろしたこのかに近寄って抱き起こす。一応武装解除を喰らっていないため服は飛んでいないがこの時間で浴衣姿では冷えるだろう。俺の上着をこのかに掛けてやる。見た目には異常はないがそれもあまり当てにはならない。

「このかお嬢様!お嬢様!!!しっかりしてください!!」

「ん……………あれ…せつちゃん…………?」

刹那の言葉に反応したかのように木乃香の目が開いた。目はまだぼんやりとしていて焦点が微妙に定まっていないが、気を失っていたのであればこの程度ではまだ薬などが使われたかは分からない。

ハラハラと見守る俺たちに対してこのかはそのままボンヤリした調子で話し始める。

「あー……………せつちゃん……………ウチ、夢見たえ……………。変なおサルにさらわれて……………。でも、せつちゃんやネギ君やアスナが助けてくれるんや……………」

ふむ、一応大丈夫なようだ。口調は相変わらずだがちゃんと自分の意思でしゃべっている。

「……よかった。もう大丈夫です。このかお嬢様……」

刹那もそれを感じ取ったのだろう。今にも泣き出しそうで、それでいてこれ以上なくらい嬉しそうな顔で言った。それを間近で見たこのかの心境は一体どんなものなのだろうか。

このかの顔はボンヤリした顔からみるみる笑顔に変わっていく。

「よかったー……。せつちゃん……。ウチのこと嫌ってるわけやなかつたんやなー……」

満面の笑みというのは正にこのことを言うのだろう。一転の曇りもない笑顔は見ているこっちが恥ずかしいほどだ。さて、どう答える刹那？

「えっ……。そ、そりゃ私かてこのちゃんと話し……」

刹那は顔を真っ赤にしながらそう言った。ふむ、やはり元の鞘に納まるというのはいいものだ。これを気に二人が元に戻ってくれば……

しかし刹那はそれに答えようとしてハッ！と何かに気づいた。

「し、失礼しました！」

刹那がいきなり距離を取って片手片膝を着いて礼の形を作る。

あちゃー、結局我に返りやがった。あのままこのかが抱擁くらいしていれば陥落していたかも……。まあどっちにしろやれやれだ。思わず頭を手で押さえてしまう。で、そっからどうするんだ……

「わ、私はこのちゃ……。お嬢様をお守りできればそれだけで幸せ……」

…。いや、それもひっそりと陰からお支え出来れば……。それで……。あの……」

いや、まあしどろもどろになりながら言う刹那の姿は可愛いんだけど俺以外全員唾然としてるぞ。

「御免！」

ゲ！よりもよって逃げやがった！あのヘタレめ！普段は強気なくせにこのかのことになると途端に弱気になりやがって！

「あつ……せつちゃん！」

このかが寂しそうな声を上げる。折角仲を戻すチャンスだったつて言うのに、しょうがない、ここは連れ戻してでも……

「桜咲さん！！」

足に力を込めようとした瞬間隣からの大声がそれを止めた。見るとアスナが刹那に手を振りながら声を掛けている。刹那もその声に気づいて足を止めて振り向いた。

「明日の班行動、一緒に回ろうねー、約束だよー！！」

ふむ、やはり明日菜の班に入れたのは正解だったみたいだな。刹那は一瞬ポカーンとしていたが、それを理解したのか一礼だけすると再び駆け出した。

全く不器用すぎるのにも困ったもんだ。

「ま、俺たちも帰るか」

「せやな。あれ？でもなんでウチらこんな所におるん？それに草薙さんもおるし。夢やないん？」

「うえ！？それは、そのー！」

このかは気を失っていたのでここに来るまでの経緯を知らないのだからそれは当然の疑問だろう。ネギ君はなんかワタワタして言い訳しようとしているが……そういうのは逆に怪しまれるってまだ分からないのかねえ。

「とりあえずネギ君。後始末よろしく。こっちは俺が何とかしておくから」

「あ！そうでした！じゃあ草薙さん、お願いします！」

ネギ君の背中を押してやってこの場を離脱させる。ま、言い訳は俺のほうが得意だ。このかはなんやかんやで納得しやすい性格、というか天然な部分があるからなんとかなるだろう。

問題は……

「く〜さ〜な〜ぎ〜さ〜ん！！！」

…後ろからドスの効いた声に振り向くとハリセンを高々と掲げた明日菜が立っていた。

「どこに行ってたのか説明してもらえるんでしょうね……」

「あー、そりゃまあ追々……な？今はだから旅館に……」

「その前に一発叩かせる　　！」

「へぶー！」

アスナの怒りのハリセンが俺の頭部を直撃した。

.....

さて、今の現状を説明しよう。時間は一件の誘拐事件が終わったすぐ後だから……ここ時計見えないな。まあ多分夜中になる前くらいだろう。

場所はホテル嵐山のロビー。そしてこの場には何故か先生なのに正座させられてる俺と仁王立ちするアスナ、密かな怒りを燃やす刹那、訳の分からない風にオロオロするネギ君の4人がいる。

「さて、では聞かせてもらってもよろしいですね？草薙さん？」

「さて、話せばわか」

「発言を許したわけではありません！」

「ごめんなさい」

法廷の被告はこんな気分なんだろうか……いやでも俺は俺で仕事したんやて！まだ弁解できてないだけでちゃんと訳があったんやて！ちなみに刹那はあの後先に旅館に戻っていて俺のことを思い出したようだ。しっかりとロビーで待ち伏せしていやがった。しかも俺が木乃香をちゃんと部屋に戻すのを待つてからだ。ちくしょう……

「そついえば桜咲さんって草薙さんと親しいの？」

「ええ、時々仕事で一緒になりますね」

「ふーん」

いや、そんなことよりはやく裁b……弁解をしたいんですけど。

「あ、あのー、そろそろ草薙さんの話を聞いてあげてもいいと思うんですけど」

グツジョブネギ君。以前はクソガキとか言つてスマンかった！今なら君に忠誠を誓つてもいい！

「はあ、しょうがないわね。発言を許すわ」

アスナがネギ君に「これでいいでしょ？」と振り向く。でも顔は全然許す気ないみたいだけど……

「いや、先回りしてな。人払いのお札があつただろ？あれを剥がして回つてたんだよ」

「お札を？それでどうするのよ？」

それがどうしたと言わんばかりにアスナが近寄ってくるので慌てて手を体の前で振る。

「いや、最後まで話は聞けつて。札がなければ当然人はその場に来れるだろ？となれば相手も街中をピョンピョン跳べないし、あんな目立つサルのぬいぐるみを着てるわけにもいかないし、何より一人を担いでれば逃げ足が遅くなると踏んだわけだ。そんてまあ京都駅周辺に貼つてあつた札を剥していたら先にお前たちがあの女に追いついてたからな。あの場で加勢してもどうせ木乃香を盾に使われるつて分かつてたし、それなら隙を見て木乃香を奪還したほうがいいと思つて気配を隠して隠れてたわけよ」

言い切つて俺は証拠に京都駅周辺から引つpegしてきた10数枚の札を見せる。どうやら京都駅後の経路も入念に計算していたようで辿れば本拠地にいったかもしれないのだが、あの時はそこまでする余裕も無かつたし、今頃では相手は回収し終わっているころだろう。

刹那が俺の手からそれを受け取り確認している。

「確かに人払いの札の一種のようです。そういう事情であれば草薙さんの遅れた理由も致し方ないかと……」

「つたく、それならそうと早く言つてよね」

「いや、問答無用でぶつ叩いたのお前だし」

「う、短気で悪かつたわね！」

頭にできた小さなコブを擦りながら悪態をつく。アスナは顔を真

っ赤にしながらそっぽを向いてしまった。

少しはその性格を戻そうという努力をしないのかお前は…

「は、でもすごいですね。草薙さん」

「ん？」

「だって京都駅周辺ってことは電車よりはるかに早く駅に着いたってことじゃないですか」

「あー、まあ…な」

ネギ君の尊敬の眼差しに歯切れが悪くなる。

最速のエクイスを召喚したからな。新幹線ならともかく通常の電車くらいなら余裕で追い抜ける。召喚のことは話していないし、刹那にも最初以降見せていないので、ネギ君から見たら俺自身がいと見えるのだろう。

実際は俺の力ではないので教えることもできないし。こつこつ目を向けられても正直困ってしまう。

「とりあえず！今日はもう遅い。今後のことは明日考えることにしよう」

「それもそうね。桜咲さん、部屋に戻ろう」

「あ、いえ。私は今日は見回りを……」

「アホ、そんなことは先生の俺とネギ君に任せてお前たちは早く寝る。明日菜、連行」

「了解！」

「あ、神楽坂さん！ちょ、そこは……」

俺の言葉にアスナは敬礼すると刹那の腕をつかんで部屋まで文字通り連行して行った。その場には俺とネギ君だけが残される。

ふと気づいたがネギ君は目をショボショボさせている。やはりまだ10歳だ。大人にはまだ遅いとは言いがたくても十分夜は暮れている。

「じゃあ僕たちも見回りに行きましょうか」

そんな体でこんなことを言うんだから大した奴と思えばいいのか呆れると思えばいいのやら……

どうせ止めても聞かないのだし妥協案を出すとする。

「そうだな、今日はもう来ないと思うから交代で休みながらやろう。ネギ君も疲れてるだろ？」

「そ、そうですね。じゃあ僕が先に」

「ああ、じゃあカモ。ネギ君のことをしっかり見ておいてくれよ」

「合点だ旦那！」

「な、なんでカモ君に頼むんですか〜！」

「それからネギ君も。きついと思ったらすぐに俺の部屋に來い。そんなフラフラな状態で見回りされるとこっちが迷惑だからな」

「う…わ、分かりました」

自分がふらついてるのを指摘されたのが効いたのかネギ君は素直に頷いた。

結果、1時間後には俺の部屋で崩れ落ちるようにネギ君は眠ったのだが、そのことは彼の根性に免じて黙っておいてやろうと思う。

S i d e o u t

守るべき存在の為…（後書き）

このか誘拐編何とか出来ました。

刹那の降り辺りは大体原作通りなので捻りが無くて申し訳ありません。

一応週一ペースではなんとかやれそうなので更新ペースはその方向でお願いします。

しかしまあやつぱりクオリティが落ちてる気がしてならない今日の頃。なんとか元に戻せないかなあ……

次辺りは多分オリジナル話になると思います。

それではまた次回にお会いしましょうノシ

PS

誤字脱字表現のミスの指摘は遠慮なくお願いしますorz

関係の為…（前書き）

お待たせしました。何とかかんとか次話に嗅ぎ付けました。

とりあえず本編へどうぞ。

追記、7月9日修正

関係の為…

Side 草薙 亮

次の日の朝。

ロビーでは先生たちの打ち合わせが行われていた。新田先生を中
心として今日の計画を見直している。

「では本日はそのように」

新田先生の言葉で打ち合わせは終了し、各々が朝食のために大広
間に向かう。

「それでは麻帆良中の皆さん、いただきます」

「……………いただきます……………」

マイクでネギ君が言うと一斉に場が騒がしくなった。特に3 - A
の面子はうるさい。昨日の夜眠ってしまったのを悔いている声が大
半だ。そりゃ初日の夜を眠って過ごすという使い方をしたら嘆くし
かないだろう。

「はは、元気ですねー3 - Aは」

「あつ……うるさくて申し訳ありません」

隣で瀬流彦先生が笑いながら言うのに対して俺は頭を下げるしか
ない。

ちくしょう……ずっと眠ったままなら……いや、それを言うのは酷
だな。一日だけでも大人しくしてもらっただけ運がよかったと思わ
なければ。

まあ、無事こうして朝を迎えられたんだ。微笑ましい光景と言っ
てもいいだろう。少々うるさすぎるのが玉に瑕だが元気のある証拠
だと思えば……

「せつちゃんなんで逃げるん　　！！！」

ドタドタ！

思えば……

「刹那さ　　ん！！！」

ドタドタ！バタバタ！

おも……えは……

「わ、私は別に　　！！！」

ドタバタドタバタ！！

プチン……

あ、なんか切れた。

「てめえら朝食くらい静かに食べねえのかあああああ……!!」

.....

「「「「「ちそうさまー!」「」「」「」

大広間に声が響き渡る。

「うづうづ……」

「あ、足が痛い……」

「も、申し訳ありませんお嬢様!」

「なんで俺まで……」

あの後俺、ネギ君、このか、刹那は朝食の間揃って新田先生に正座させられていた。まあ自業自得といえれば自業自得なんだが……しかし刹那の隣に座らされたこのかは心なしか嬉しそうだったし結果オーライとするか。

「ネギ君　　!今日ウチの班と見学しよ　　!……!」

そんなことを考えていると、まさに

ド

ン!

という擬音が似合う勢いでネギ君が突っ込んできた影と共に吹き飛んだ。

おー、人って飛ぶもんだねえ。まあ散々敵とかを蹴り飛ばしてる俺が言うのもなんだが。

て、なんだ。まき絵か。

最近何かあることに3・Aの生徒だったら納得してしまう自分が怖い。

慣れって(r y

「ちよっ……まき絵さん！ ネギ先生はウチの3班と見学を！」

「あ、何よー！ 私が先に誘ったのにーっ！」

「ずるーい！ だったら僕の班もー！！！」

「あの……」

それに続くようにあやかや鳴滝姉の方がネギ君に突貫していく。それにしても来るわ来るわ。

いやー、人気者はつらいねえ。

俺にはそんな心配が無いからゆったりと回れるかな？

「ネギ先生ぜひ3班に！」

「あの……」

「ネギ君、4班！ 4班！」

「……あ、あのー」

「1班！」

「何々？ またネギ君争奪戦？」

「おーおー、蟻じゃねえんだから一箇所に固まるなお前らー、他の客に迷惑だ。」

「それから釘宮たちは興味ないならこっち来るなー、ややこしくなるから。」

「えっとそれから……」

「ダメだ、突込みが追いつかないorz」

「あ……あのー！ネギ先生！」

いきなり他の誰よりも通る声が響いた。その声にネギ君の取り合いをしている動きが止まる。

声の大きさもそうだろうがその声を上げた人物にその場の全員の視線が釘付けとなる。

「つて宮崎……？」

「よ、よろしければ今日の自由行動……私達と一緒に回りませんか
！？」

いつもは大人しい子がこんな大声を上げるとは思わなかったのだろ。周りが静かになっていたためその誘う声は先ほどよりも一際通った。

さあどつする！どつするよネギ君！

ライフカード

つ1、宮崎と一緒に5班を回る

つ2、他の班と回る

つ3、誰とも回らず単独行動

つ4、旅館に留まる

「え、えーと……あの……」

俺の選択肢ではないだろうがネギ君が何かを探るように視線を動かしている。数秒考えた後ネギ君は答えを出した。

「わかりました宮崎さん！今日は僕、宮崎さんの5班と回ることにします！」

「え……」

宮崎自身も信じられなかったのだろう。周りからも「おおー」「や

ら「本屋が買ったー！」など驚きの声上がる。

「まき絵さん」

「うん、一時休戦だよいいんちよ」

そしてその後ろで密かに手を握る恋敵二人。

「いやー、青春っていいなあ…」

そんなことをつい口に出してしまう。

「なに親父臭いこと言ってるのよ。草薙さんもまだ21のくせに」

後ろから明日菜が声を掛けてきた。刹那もその隣にいる。確かに今の言葉は親父臭かったかな？

「それよりも草薙さん、今日の班別行動ですが…」

そう、班別行動ともなれば護衛対象の生徒の範囲が一気に広がってしまう。護衛するならば一纏まりなってくれてた方がありがたいのだが……そこに文句を言っても仕方ない。

優先順位なんて付けたくないが、一番の対象のこのかには同じ班で刹那とアスナ、更に偶然とはいえネギ君が入っている。とりあえず俺は他に回ったほうがいいだろう。

「おお、そうだったな。敵の情報とかはどうなってる？俺昨日最後しかいなかったから詳しく教えてくれ」

「はい」

刹那はそういうと敵の詳細を教えてくれた。強力な関西の術師が一人。更に神鳴流剣士が一人。

「あの術師の実力も相当のものです。月詠は…その剣士はかなり危険です。神鳴流は表向きは退魔専門ですが、人を相手にすることも無いわけではありません。おそらく月詠はそういう（人斬り）専門の剣士ではないかと…あれは…明らかに人を斬ったことのある太刀筋でした」

隣にいるアスナの喉が、ゴクリと鳴った。

刹那は端的に事実を述べただけだが、ついこの前まで一般人だったアスナの立場からすれば『相手は殺人者だから気をつける』と言われてると大差ない。

正直俺もこんな体じゃなかったら真つ先にこの場から離脱している。

「の、望むところじゃない！神鳴流剣士が何よ！」

なのにこいつは少し青くなった顔でそう言い切りやがった。

全く、どこからこんな胆力が出てくるのか…正直ヤケクソとも取れなくないが改めてアスナの性格に驚嘆してしまった。刹那もそれは同じだったようで目を丸くしてアスナを見つめている。

「まあ私と神楽坂さんは同じ班です。いざとなれば敵は私が抑えますので、お嬢様の方をお願いします」

「う、うん」

一応あっちの役目も決まったみたいなのでこちら辺で打ち切りと

しよつ。

「とりあえずこのかはお前たちに任せていいか？俺は他の班を出来るだけカバーする」

「分かりました。昨日のような失態はもうお見せしません」

「オツケー。他の皆のこと頼むわよ」

二人は力強く頷くと準備をするために部屋に戻っていった。

と言つても敵方も無関係な生徒を巻き込む可能性は低いだろう。新幹線や清水寺では妨害だけ留めたのがいい例だ。夜にあそこまで強硬手段に出たのも他の生徒を巻き込みたくないからだと言つてもいいだろう。

つまり今日は昨日と同じく昼のうちは襲つてこないと考えてもいい。まああまり樂觀視は出来ないが、今のところ人の多い場所で襲ってくることはないはずだ。

とすると…俺はフリーな訳で……

「でも奈良なんて一人で回っていてもつまらないんだよねー」

『溘蓄も、披露できなきや、ただの無駄』

草薙……心の一句。

うーん、季語が無い……3点。

「ぶーむ、とすると俺もどっかの班に混ぜてもらって回ったほうが

いいかな」

「あ、あの……」

「うん？」

先ほどの宮崎ほどではないがオズオズした声に振り返るとそこには亜子がいた。なにやら下を向いてモジモジしている。何か様だろ
うか？

魔法関連かな。そういえば昨日のこと全然話してなかったが……
無意味に話して危険に巻き込むわけにもいかない。

「えっと…その……」

亜子の声がどんどん尻すぼみに小さくなっていく。

「あの一！」

「お、おう！？」

「今日ウチらと一緒に回りませんか！？」

え？それを言うだけのためにこんな時間かけたの？

「あ、ああ。別に構わないが……」

「ホンマ！？じゃあバスから降りたら待っててな！」

顔を明るくした亜子はそう言うと部屋に走り去っていった。うー
ん、よく分からんが……まあいいか。

とりあえず予定は埋まった。そう考えると俺も準備するために部屋に戻った。

Side out

Side 和泉 亜子

「いいから！草薙さん誘いなって！」

「で、でもゆるいな。別に私は……」

「ダメ！いいから誘ってきなさい！」

朝食が終わった後、ネギ君の取り合いが終わってからずっとこの調子や。草薙さんは何か考え事をしているようでアスナと桜咲さんと何か言葉を交わした後ずっと上の空になっている。

「だ、だってウチが誘ったって断られるて！草薙さんも予定あるやろし……」

「だーからー！聞く前からそんなんでどうすんのよ！いいから行きなさいって！」

「そ、そうやけど……ほ、ほら！他の人もウチの都合で人が増えるのは迷惑やろ！」

「ふっふっふ……そんなこともあるつかとー！」

ゆーなが不吉な笑みを浮かべて手をパンパンと打つ。すると廊下の角からアキラ、まき絵、龍宮さんが現れる。もしかしてずっと聞いてた？

「まったく、なんだというんだ」

「まあまあ〜」

「すみません龍宮さん」

て、ゆーなまさか…

「というわけで！全員に聞くけど草薙さんが参加することに異存は？」

「異存なし！」

「私もない…かな」

「私はどっちでもいいぞ」

龍宮さんがこちらを見ながら言う。龍宮さん！どっちでもいいならせめて否定して！

って…笑うとる？こ、この人絶対分かって言うとる！静かな笑みが怖い！

「はいけってーい！というわけで、あんたはさっさと草薙さんを誘ってきなさいー！」

ゆーながウチの背中をドンと押し、ウチは強制的に草薙さんの近

くに押し出された。

ええい！もうヤケヤ！

「あ、あの……」

「うん？」

何か考え事をしていた草薙さんがウチの声で振り返る。あ……やっぱり面と向かうとハズイノノ

「えっと…その……」

あかん、全然声が……いや！ここで終わったらいつもの同じや！

「あの一！」

「お、おう！？」

「今日ウチらと一緒に回りませんか！？」

言った！ウチは言ったで！後は草薙さんの返答次第やけど……

「あ、ああ。別に構わないが……」

「ホンマ！？じゃあバスから降りたら待っててな！」

それだけ言ってウチは部屋に駆け戻る。やった！言えた！って、

なんでウチこんなに嬉しいんやろ……
やっぱりウチ、草薙さんのこと……

「あー！」

「やるじゃん！」

「ひゃああああ！」

部屋に戻った瞬間まき絵とゆうなが抱きついてきた。というより
重い重い！倒れるー！！！！

「二人とも。亜子がつぶれちゃう……」

そういう声と共に二人の重さが消えた。どうやらアキラが二人を
離してくれたみたいや。助かった。

「だってー、これからの展開が気になるじゃない？」

「ねー？龍宮さんも気になるよねえ？」

まき絵が窓のところの椅子に座っている龍宮さんに話しかける。

「うん？私か？そうだな…私は他人の色恋沙汰に興味は無いかな」

い、色恋沙汰／＼／＼／

「えー、つまんないのー」

「で？結局どうしたの？」

「う、うん。一緒に回ってくれて言うてくれた」

「「よっしゃあああああー!」」

な、なんでまき絵とゆーなが喜ぶんやろっ!? 絶対あんたら楽しんでるやろ!

「騒ぐのはいが4人とも、そろそろ時間だぞ?」

龍宮さんの言葉にはっと時計を見るともう集合時刻30分を切っている! あ、あかん! すぐに支度せな! 制服やから服は気にせんでもええけど化粧とか……

「いつも通りでいいんじゃない?」

「そうだね。無駄に飾ると変に見えちゃうよ」

「あ、アキラまで……」

アキラも何かを見守るような温かい目を向けてくる。そ、そんなお母さんみたいな目を向けられても……

「ふう、私は先に行くぞ」

「あ、待って〜! 置いていかんといて!」

この状態で龍宮さんにまで置いていかれるのは勘弁や! ホンマに!

Side out

そんなこんなで奈良公園。俺の前には亜子、アキラ、裕奈、まき絵、龍宮がいる。5人は何かをワイワイと楽しそうに話しながら足を進めていた。なんていうか半分保護者みたいな気分だ。いや、中学生なんだから保護者で合っているのかな。

しかし真名とアキラは女性として、しかも中学生としてはかなり背の高い部類に入る。後ろで見ているからなのかまき絵と亜子と裕奈が小さいからなのかは分からないが、身長差が30センチ近くあると、同じ制服を着ていなければ別の学年に見られても仕方ないくらいい差がある。

ちなみに亜子はまき絵より低いのを気にしているらしい。仕切りにまき絵や裕奈の隣に立ちたがらず端っこ行こうとするが、常にその二人に挟まれて真ん中に戻されている。

左から龍宮、まき絵、亜子、裕奈、アキラという並び順だ。見事に凹の形になっている。

俺はというとなんとなく途中で買って既に空になった缶コーヒ―を片手で弄って5人の後を付いていつている。

はつきり言ってしまうば女子中学生の会話に21の男が入り込む隙間なぞ無いのだ。結果俺はその笑い声を聞きながら後ろを付いていくという状況になっている。

ふと龍宮に目がいった。ストレートの長い黒髪、浅黒い肌、それが似合う180という長身。いつもは凜とした空気を放っていて人を近づけない空気を出しているようだが、女子どおし通じるものがあるのだろ。今だけは彼女も笑みを浮かべている。

なんだ、そういう顔も出来るんじゃないか。

「よっ！」

近くにゴミ箱があったので手に持った缶を放り投げる。が、缶は縁に当たって弾かれてしまった。

カランカラン、と音を立てて缶が地面に落下する。

「あちゃ〜」

これを二度手間という。覚えて置くように……

缶を拾うためにゴミ箱に近づき、缶をその中に突っ込む。そんな俺の横を誰が投げたのか空の缶が飛んできてスッポリとゴミ箱に収まった。

「手のスナップと狙いが甘いよ。草薙さん」

声に顔を向けると真名がこっちを向いていた。今の缶は確実に龍宮が投げたものだろう。

しかしこいつ背中に目があるのか？完全に前を向いているときに俺は投げたと思っただが…

「それより……はい」

「っと、とと」

龍宮がこちらに丸い塊を放り投げて来たのでそれを受け取る。手

の中のものを確認すると……

「煎餅？」

「鹿煎餅だそうだ。色々仕事のある先生はそれでも鹿に上げて癒されるといい」

「はは、ありがたく受け取っておくよ」

「お〜！龍宮さんが草薙さんにアタックか!？」

そんな俺たちを見て裕奈が首を突っ込んできた。

最近こいつは調子乗りすぎだ。

修学旅行前の追跡もそうだし……ちょっとお仕置きしてやるつもりで思っ。

「裕奈、ちょっとこっちへ」

「お、にやにかな〜？草薙さん」

「ご褒美をやるっ」

右手で一枚だけ鹿煎餅を弄りながら裕奈を呼び寄せる。

「ん？でも私何もしてないよ？」

「せい」

「ひゃー!」

右手で砕いた鹿煎餅を裕奈の服に軽く振りかけてやった。粉々になった煎餅は制服の繊維には入り込んだことだろう。

「な、何するんですか」

「お前には鹿にペロペロされるご褒美をくれてやるつもりでな」

「へ？」

裕奈はその言葉に「はっ！」として後ろを振り向く。

そこには俺の砕いた煎餅の匂いに釣られたのか、それとも元から俺たちの煎餅が目的だったのか十数匹の鹿がこちらを見ていた。

その内一匹が裕奈に近づくと…

「ちょ、ちょっと？ひゃう！」

当然のように鹿は裕奈を…服に付いた煎餅をなめとる。

それを見て待機していた鹿たちは一斉に裕奈に向かって群がった！あつという間に鹿に囲まれて逃げ場をなくす裕奈。

「あ！だめ！そこ…ひう！ちょ、そこは…！」

うわー、これは…

あちらこちらから舌で舐められる裕奈は涎でベトベトになっていく。

原因を作った身としてはこう言うてはいけないのだが…「ご愁傷様です。」

「じ、このお〜！喰らえ！」

「おっと」

裕奈が手に握っていた何かを放ったのが見えた。それをギリギリのところまで回避する。

「むっ？これは・・・」

パシッ！という音がしたから多分欠けるようなものなのだろう。振り返ると予想通り飛んできたもの…鹿煎餅を右手で受け止めている龍宮がいた。

つつかあれ投げんなよ……

「ふむ、では彼女から煎餅ももらったことだし……私は向こうで鹿と戯れてこよう」

「集合時間には帰ってこいよー」

龍宮はそういうとその場から背を向けて歩き出す。その背に声をかけると龍宮は振り返らずに手を振って答えた。いくら自由行動といっても自由すぎな気もするが……

まあいいだろう。さっきからそこら辺を班じゃない単位で動き回ってる奴らもいるしな。

裕奈の方が静かになったのでそちらを見てみるとその場に倒れ伏して虫の息の裕奈がいた。鹿は既に舐めきったのかその場にはいない。

しかしまあ見事に全身なめられたものだ。なんと云うか……昔見た映画にこんなドロドロの奴いたかもしれない。

「はにゃ〜、これはひどいねえ」

「ゆーな、大丈夫？」

「う……すごい匂いや……」

まき絵、アキラ、亜子が近づいてきた。遠巻きに見ていたのか？人とも被害はないようだ。

その時裕奈が突然起き上がった！

「……ひい！」「」

「うお！」

何の前ぶれもなかったので全員が声を上げてしまふ。何かブツブツとつぶやきながら、まるでゾンビのようにフラフラとこちらに近づいてくる。

しかし……近づかれて改めて思うが鹿の涎の匂いが酷い……

「人は自分が苦しいと……」

そのまま裕奈は臭いで引いていた亜子を除いて、近場にいたまき絵とアキラに近づくと……

「他人にも同じ苦しみを味わって欲しいんじゃない……」

「ひい！」

「うわ！」

「あー…まあ何とかなるだろ。あの二人に任せておけば。それに何とかするにしても女子の着替えを俺が何とかするわけにはいかんだろ」

「た、確かにそうやね」

あそこまでベトベト&ドロドロになったら一回バスに戻って着替えねばならないだろう。アキラとまき絵には悪いが……
後でなんか奢ってやるか。

Side out

Side 和泉 亜子

／
／
な、なんや草薙さんと二人きりなんて……デートみたいやなあ／

一応後でゆーなにお礼言っておかなあかんかも知れへんな。

今ウチは草薙さんと東大寺の大仏殿におる。目の前には有名な『奈良の大仏』が座っている。

「そつえば『奈良の大仏』の正式名称を知ってるか？」

「え？ううん。知らんなあ」

「正確には盧舎那仏像ろしゃなぶつと言つてな。745年に聖武天皇の発願で制作が開始されて752年に完成したんだ」

「ほえ、752年…そんな前からあるんやなあ……」

「というより亜子は関西の出身だから多少は知ってるんじゃないのか？」

「ウチこついうの全然興味なかつてん」

「それはもつたいないぞ。こついうのは見ているだけでも飽きないもんだ。まあ確かに社会人になったらあまり必要ない知識かもしれないがな」

草薙さんがそう言つて豪快に笑つた。その顔は本当に楽しそうに笑つていて、まるで子供のようやった。ウチもそれに釣られてクスクスと笑つてしまう。

「それでさっきの続きだがな？この大仏は元々奈良じゃなくて甲賀寺……今の滋賀県甲賀市に造られる計画があったらしいんだ。でもその甲賀寺の周辺で山火事とかが相次いで不穏な出来事が連続したせいで造立計画は中止したんだ。その後都が平城京へ戻るとともに、今の東大寺大仏殿がある位置での建設が始まったんだ。ちなみにこの大仏の製造費は現在価値で約4657億円といわれていて……」

で……でもこの蘊蓄は勘弁して欲しいんやけど……

.....

「いや〜！スマンスマン！すっかりつき合わせてしまったな！」

「い、いえ…十分お勉強になりました……」

と言いつつももうホンマに勘弁して欲しいわ……あの後東大寺を丸々つき合わされた後一部一部に物凄い解説を入れてくるから頭の中がクラッschuss寸前や。

今は近くの休憩所で座って、草薙さんが奢ってくれたオレンジジュースを口に運んでいる。草薙さんはさっきも飲んでいた缶コーヒーや。

「それさっきも飲んでましたけど、おいしいんですか？」

「ん？気になるなら飲んでみるか？」

「……え？」

草薙さんはそう言ううち缶コーヒーを渡してきた。

「こ……これって……か、かかかか、かんせつ／＼／＼／＼／＼」

「なんだ？飲まないのか？」

「／＼ええつと／＼／＼じゃあお言葉に甘えて……」

ゴクリ…と自分の喉がなるのを感じる……

缶に口を近づけて……後5cm、3cm、1……

「亜子……」

「ひゃ！ひゃい！あ……」

急に声を掛けられたせいで落としてしまった…缶が地面に落ちて
コーヒーの残りが地面に染み込んで大きな染みを作ってる。

草薙さんを非難しようとして見上げて…言葉を飲み込んだ。

「草薙…さん？」

あんなに楽しそうに笑っていた顔にさっきまでの表情はなくなっ
て怖いくらいに顔が強張っている。

それに額からは尋常じゃないほどの汗が垂れてきとる。

「亜子……俺の後ろに……」

「え？」

「いいから!」

「は、はい!」

有無を言わせないほどの迫力に慌ててウチは草薙さんの背中に回
る。うわ…改めてみると草薙さんの背中って大きいかも…

草薙さんはそれから一言も喋らへん。さっきから正面の一点を集
中して見とるだけで額の汗が地面に垂れて落ちるのも気にせえへん。

流石に気になって背中から顔を出すと……奈良には似合わないフリフリな服、ゴスロリって言うんやっけ？それを着て眼鏡をかけた少女がそこにおった。

「昨日の夜はおおきにな〜、お兄さん？」

「なるべく二度と会いたくはなかったが……月詠……」

「はれ〜？ウチ名乗りましたっけ〜？」

「刹那からちよつとな」

「あ〜、先輩かあ。ほなら納得やなあ」

年は同じくらい……やと思う。口調はおっとりとした京都弁……見た目が和服やったらさぞかし似合うやろうなあ。

草薙さんが月詠と呼んだ少女はクスクスと笑つとる。

「ほんで、貴方のお名前は？当然教えてくれるんやろ〜？」

「……草薙亮だ」

「草薙はんどすか〜。いい名前どすなあ〜。それに昨日のちよつと見ただけやけど先輩より強いんやろ？」

瞬間、少女の目つきが……変わった！？

まるでこちらの一拳手一投足、瞬きすら見逃すこともないと思うほど強力な視線……この感覚ってエヴァちゃんの時にも……

「あ、あれ？」

それに気付いたときにはウチは尻餅をついていた。自分の体が自分のものでないような……体自身が鉛のようになってしまった感覚や。

てことは……この人はあっち（魔法関係）側の人ってこと!？

「あら、申し訳ありません。そっちの子も巻き込んでしもつたみたいやなあ」

「てめえ……」

「ん。でも草薙はんの近くにいるならこっち（裏）側の人間かと思ったんやけど……ほんに堪忍や」

月詠さんがそう言うのと体を覆っていた感覚が消えていく。ゆっくりと立ち上がると月詠さんが再び微笑んで……

「は／＼／＼でもさっきの気迫……心地良かったえ。男の人でもウチ感じてしまいそうや」

ちやう、あれは微笑じゃなくて恍惚や。足をモジモジさせながら顔を真っ赤にして草薙さんを見ている。

あかん、この人はあっち側の人やろうけど違う意味で危ない。

「でも今は待機命令なんよ。そういうわけで今日は挨拶だけさせてもらいます」

「できれば二度と会いたくはないがな」

「あん、連れへんなあ草薙はん。焦されたら燃えて来えへん?」

「戦闘狂が……」

「ほな、また会える日を楽しみにしてますえ〜」

そういつと月詠さんは手を振りながら去っていった。

なんやったんやろう……結局……

草薙さんを見上げるともつ汗は引とつた。それでも表情は変わらないで月詠さんの去っていった方を睨んどる。

せやけどそれも一瞬、笑顔ではないけど幾分顔が柔らかくなりウチの方を向く。

「すまん。大丈夫だったか？」

「は、はい。ウチは大丈夫ですけど……さっきの人は一体……」

「……あまり巻き込みたくはなかったんだが……」

草薙さんはため息をつく、歩きながら話し始めてくれた。

Side out

Side 草薙 亮

「つまりその関西呪術協会？ってところにネギ君がたどり着ければええってこと？」

「んー、まあ端的に言つとそういうことだ」

月詠と出会った休憩所とはまた別の休憩所で亜子はそう言った。道中話ながらだったので俺も亜子も知らず知らずのうちに長いこと歩いていたようだ。

結局流れで要点だけを話すことにした……

「言っておくが今回の件にお前を巻き込むわけにはいかないからそこは承知しておいてくれ」

先にこう釘を刺してから話しているからそこまで深くは話していないし聞いてもこない。

話した内容とはいえ、目的の関西呪術協会への親書の受け渡しと俺の生徒の護衛の話だけ。このかが狙われてることなど危ないところは話していない。

「なんかウチに手伝えることってないんかなあ？」

言つと思つた。亜子の性格からしてこう言い出すことは読めていた。

「最初に言つたら。お前は巻き込めないってな」

「あつ……でもー」

「今回は本当にやばいのが相手だ。俺やネギ君でも、守りながら戦える自信はない。月詠のヤバさは身をもって体験したたる？」

「う……」

俺の真剣な声が伝わったのか亜子がこちらに向けていた顔を伏せて、持っていた缶を握り締める。

こういう性格は損だな。突っ込まなくてもいい所に首を突っ込んでしまう性分は俺と似てる部分もあるかもしれない。

しかし実際に月詠に会っていたことが効いたようだ。会っていないならばここまで考え込むこともないだろう。

「とりあえずもう戻ろう。そろそろ宿に帰る時間だ」

「うん……」

亜子がゆっくりと立ち上がるのを待ってバスへと向かう。裕奈たちは既に先にバスで待っていた。

というより龍宮以外の3人は何故にジャージ？さっきまで制服だったよな？

「死ね！」

何故か裕奈がグーで殴ってきたので避けた。

「避けるなあ！」

「いや、当たったら痛いし」

「ごんのおー！」

とりあえずこいつとじゃ話にならない

「なあ、こいつ、どうした、んだ？」

裕奈の拳を避けながらアキラとまき絵に顔を向けて聞いてみる。

「いけえ！ゆうなそこだあ！」

ダメだ、まき絵もなんかバスの前で拳を振り上げてる。頼みの綱はアキラだけか……

「……………」

アキラの方を見ると胸の前で両手の拳を固めてこちらを見守っている。

ありゃダメだ。諦めて一発殴られた方が早いかもしれない。

でもなあ……………痛いのは嫌だしなあ……………

「当たれえ！」

「よー！」

顔面めがけて放たれた右の拳を見切って手首を掴む。

「何のー！」

「甘いー！」

当然のように振られる左手も手首を掴む。これで一応動きは封じ

……………

キュピーン！

なんか裕奈の目が光った？

「貰ったあー！」

「ぐおおー！」

ものすごい勢いで顎に衝撃を貰った。なにが起こったか分からなかったが…体を空中で一回転させてる裕奈を見て分かった。

サマーソルトだ。掴まれていた腕を軸に無理やり体を回転させたようだ。

「ううわ…ウウワ…ううわ…！」

「ユー、ウィン！」

次はソニックブームでも出すのか……裕奈は華麗に着地を決めるとブイサインを決めていた。

毎度思うがこのクラスは…運動神経よすぎだろ……

.....

「いやー、ごめんごめん。遂ねえ」

「勘弁してくれよ……」

移動しているバスの中で痛む顎をさすりながら笑う裕奈をにらみつける。

「で？なんであんなことしたんだ？」

「心当たりないとは言わせないよ」

「は？」

「すみません、正直ありません。」

「そうかいそうかい、無いと言うのかこの口は！」

「いててててて！」

思い切り頬を抓られた。直ぐに離してくれたけど正直あの捻り方は凶暴すぎる。

「これです」

そんな俺らを見かねてかアキラが何かを渡してきた。ビニールに包まれた服、制服か？

「あ、ここで開けちゃ駄目だよ。臭いすごいから」

席の後ろからまき絵が乗り出してきた。

臭い？あ…

「もしかして…鹿？」

「思い出しましたか？」

「しかし、これ量多くねえか？」

ビニールの中には明らかに裕奈の分だけじゃなく3人分はある。てか今更だが3人ともジャージだ。

「にやはははは」

あー、大体分かった。そういえば裕奈が二人を追いかけていったんだ。大方二人が裕奈に纏わりつかれたって感じだろう。

頭を掻きながら笑う裕奈と呆れている顔のアキラとまき絵を見て俺はそう感じた。亜子も俺と同じことを感じたようだ。

流星に龍宮は逃げおおせたようで口元に軽く笑みを浮かべて顔を伏せている。

3人の顔を見ながらふと今日の出来事を思い返す。

まさかあそこに月詠がいるとは思わなかった……

それとも本当にただあそこにいただけか？

武器は持っていないなかったが神鳴流は武器を選ばない流派（以前剎那に少し聞いたただけだが）、徒手空拳でも十分戦えた。つまりあそこで戦おうと思えば戦えたはずだ。

しかし月詠は何もせずに引き上げた。とすればやはり偶然出くわしたと考える方が自然か。

偵察ということも考えられるが…今の段階では分からない以上放っておくしかないだろう。

また面倒くさいことが起きなければいいのだが……
いや、既に面倒ごとに巻き込まれつつあるか…

S i d e o u t

関係の為…（後書き）

えーっと、とりあえずすいません。

PCのデータ吹っ飛んだせいでこんなに時間がかかってしまいました。

一応携帯の方にも登録したので、今度から更新が止まる場合はちゃんと告知できると思います。

これで最後にもう一度、真に申し訳ありませんでした。

さて、本編の方ですがいかがでしたでしょうか？

この一週間急ピッチで書き上げたものなので正直あまり見直せてません。

一応ここでの亜子たちの行動は明記されてないのでオリジナルで書いてみたんですけど……

こんな自分ですがこれからもよろしくお願いします。

毎度のことですが誤字脱字表現のミスの指摘は遠慮なくお願いします。

ではまた次回お会いしましょう ノシ

波乱の為…（前書き）

お待たせしました。新年一発目です。

ちよい一週間オーバーしましたがとりあえず本編をどうぞ。

追記、7月9日修正

波乱の為…

Side 草薙 亮

旅館に戻って亜子達と別れた後、俺は宿の洗濯機を借りていた。女子の制服を洗うなんてこと中々ないことだ。

それが鹿の涎にまみれていなければ……だが。

「うへ、ひでえ臭い」

これは後で何か裕奈以外の二人にお詫びの品を持っていった方がよさそうだ。裕奈が拳を上げたくなる気持ちは分かる。

乾燥機に制服を突っ込み休憩するためロビーに戻ると…

「ううー……、ああー、どうすればー」

ロビーの通路で身悶えしながらその場に転がりまくっているネギ君（先生）がいた。

「なにやってんだ？」

時折俺の足元の方にまで転がってくるのだが全く気づかないで元の位置まで転がっていき、偶にはっ、としたように立ち上がるがまた転がり始めるといふエンドレスだ。

「旦那、なんとかなんねえすつかあれ」

足元からの声に顔を向けるとカモがネギ君を指しながら言った。

「どつしるってなあ…どつすんだよ」

なにがあつたかは知らないがゴロゴロと転がりまくるネギ君は未だにその珍行動を止める様子がない。というか見てて面白くなってきた。

3・Aの面々もネギ君の様子を心配そうに眺めている。

「とりあえず何があつたか話してくれないか？敵が襲ってきたわけでもないんだろ？」

「あ…なんていうかな。敵とかじゃないんだけど兄貴には一大事って言うかなんていうか…一言で言えばな、青春なんだよ」

敵じゃないなら何が一大事なんだよ。青春ってまた分かりにくい表現をするな。

しかもそれだけで俺からネギ君に何を言えと？

「ネギ先生。どうされたんですの？」

「昼の奈良公園で何かあつたの？ネギ君」

いい加減ネギ君の珍行動に見かねたのが、雪広とまき絵が二人でネギ君に話しかけた。

「うひゃいつ!?!」

うひゃいつてまた変な声を上げるなお前は。

「い、いやあの…別に何も！誰も僕に告つたりなんか…!」

告った！？超爆弾発言！？

そして案外大きい声だったため当然のように騒ぎ出す3-Aの面々。

近くで様子を見守っていた面々もネギ君を囲んで詰め寄っていく。

「いえ、あの…コックさんがコクのあるコックリさんのスープを…」

え？何それ美味しそう。

「ぼ、僕、しずな先生達と打ち合わせがあるのでこれでー！！」

あっという間にロビーから逃げ出すネギ君。

つかはやっ！魔力強化があるとしてもいつもより滅茶苦茶早い！

なるほど、告白ね。10歳の身としてはここ最近の目まぐるしい状況と生徒からの告白なんて持ち込んだら、そりゃあ混乱するだろう。

カモが青春といった意味がようやく理解できた。

「打ち合わせなんてあんなのか、旦那？」

「いや、夕食後までない」

いつの間にか肩に乗っているカモの問いに答える。

さて、俺も他の生徒に打ち合わせ云々言われる前に退散するかね。

再び乾燥機の前に戻ってくると3人分の制服を取り出す。

「おほ！いい趣味してるじゃねえか旦那」

「うるさい黙れ」

肩のカモを握りつぶして廊下にぶん投げる。何か潰れるような音がしたが無視だ無視。

制服を畳むと、外側から見えないビニール袋にそれを入れて裕奈たちの部屋に向かう。

流石に女子の制服を持っているのを他の客や生徒に見られたくないからな。

部屋の前についてノックする。

「はい」

部屋の中から返事が聞こえて扉が開く。中から姿を見せたのはアキラだ。

「あ、草薙さん」

「ほい、これ制服」

「ありがとうございます。わざわざすみません」

制服の入ったビニールを渡すとアキラはペコリと頭を下げた。

「いや、元はといえばこっちのせいだし気にすんな。それより他の面子は？」

「はい、ゆーなとまき絵はロビーに行ってます。龍宮さんはいつの間にかいませんでした。亜子は、何か先ほどから窓際でウンウン唸ってて…」

「あー、そーか。いや、ありがとう」

「あの…私たちとこない間に何かあったんですか？」

「いや、特には何もなかったよ」

「そっ…ですか」

嘘をつくのは少々気を引いてしまいがまさか本当のことを言うわけにもいかないし、しょうがないよな。

しかし意外とこのクラスの生徒は鋭い子もいる。

アキラもその中の一人でバレた可能性はあるが…まあ亜子がばらさなければ自分から首を突っ込んでくることもないだろう。

アキラはまだ魔法という存在を知らないのだから亜子自身も巻き込もうなんて考えないはずだ。

というか元々亜子の魔法を知りたいといった理由から考えれば問い詰められてもばらさないと思うがな。

「あ、そっそう。これ、他の連中が帰ってきたら渡してやってくれ。俺からのお詫びだ」

そっ言っただ俺は持っていたジュースの缶を4つアキラに持たせる。

「え？いえ、お気になさらず…」

「まあ俺の気持ちも納まらないんだ。俺からってことにしなくてもいいからあいつらに渡しておいてくれ」

頼む、と俺が頭を下げるとアキラは

「分かりました」

と微笑みながら頷いてくれた。それだけ言って俺は部屋の前を離れた。

ロビーに戻ると既に先ほどの騒ぎはどこへやら、3・Aの生徒やネギ君はどこにも見当たらなかった。

自販機で飲み物を買おうとして…手が止まった。

……………『サボテンの原液』……………

おそろしく気になる商品名称だがこれを飲んだら何かまずい気がするので隣にある普通のコーヒーを押す……………

ってかこの覽『あつたか〜い』だろ！そんな原液を熱い状態で飲んだらどんな味になるんだよ！

というか買う奴いるのか？まあ俺らみたいな修学旅行生が罰ゲームとして買って行ったりするかもしれないが…

ロビーの端っこにある椅子に座って亜子のことを考える。

悩んでたっことはさっきのことについてだろう。おそらく自分の中ではまだ整理が付いてないに違いない。

しかし俺の言ったこともまた事実だ。今回はどうしようもないし、亜子は魔法を知っているとはいえまだまだ見習いだ。付いてこられた方が逆に足手まといになってしまふことも十分ありえる。

こんなこと本人には当然言っていないが……

何とか亜子にあきらめてもらう方法が無いものかと考えていればもう7時過ぎだ。

てかいつの間にか食事終わってるし……俺無意識で何やってたんだ？この一時間近くそのことばっか考えてて飯の味さえ覚えてない。

流石にまずいので一回リセット。そもそもいい考えなんて考えてぱっと浮かぶものでもないし、考えを後回しにして先生の仕事をしますかね。

見回りをしようと廊下を曲がると聞きなれた大声が後ろから聞こえてきた。

「ええ

！？魔法がバレた

！？」

思わずその大声にずっこけた。

自分でも驚くほどの切り返して今まで歩いてきた廊下を戻ると、風呂場近くにいるネギ君、アスナ、刹那が何か言い合っているのが目に入った。

「アスナあ！」

「え？ムグ！」

俺の声で振り返ったアスナの口を右手の手のひらで思いっきり塞いだ。

「お前何大声でアレがバレたと言ってたんだ！廊下の向こうまで響いたぞ！」

「ムツムムムム（だってこのガキが）！！！」

「ええい、黙れ！いかにこの小僧が軽率であろうとアホであろうとアレの存在をばらそうとお前の声の方が一番危険なんじゃ！」

「ムムムム（離してー）！」

「お前が静かになるまで俺はこの手を離さん！」

「ど、どうして会話が通じてるんでしょっ……」

「さあ？」

ネギ君の声に刹那が首をかしげている。俺はアスナの口を抑えたままネギ君に向き直った。

「で？誰にバレたって？」

「じ、実は……」

思い出しているのか思いっきり下を向いて言葉がなくなってしまう。

「……………です」

「ん？」

滅茶苦茶小さい声で言っているので俺はネギ君の口元まで耳を近づける。

「実は…朝倉さんに魔法のことがバレてしまったんです……」

「はい？」

マジデスカ？

刹那を見ると顔を伏せて少しあきれている。

マジナンデスカ？

アスナを見ると首を縦に振っている

マジナンデスネ、リョウカイシマシタ…

「さようならネギ君。君の事は忘れないよ。いや、オコジヨにされたら俺が飼ってやることも……」

「すごいあっさりと見捨てられた!？」

いや、だってねえ……

朝倉にバレるといふ事は日本に……ひよっとすると世界にバレると言い換えても過言ではない。

その時点で記憶を消さなかったという過失を犯しているネギ君に一体どんな弁護をしるというのか。いやない。

よって選択肢は見捨てるという選択肢しか残っていないのだ!

「あ、あの〜、草薙さん？」

「ん？何だ刹那」

「神楽坂さんが……」

「ア……」

いつの間にか力が入ってしまったのだろう。アスナは顔を真っ青にして既に声も出ない様子だった。

慌てて抑えていた手を離すとアスナは軽く咳き込んでこっちをにらんでくる。

「危うく殺されるところだったわよ！」

「わーっ たわーっ た！悪かったよ！」

なんでこんな大声でるんだよ……まあ無事なのでよかった。

「で？どうしてよりもよってあの朝倉にバレたのよ！」

復帰するや否や掴みかからんばかりの勢いでネギ君に詰め寄る明日菜。

こいつ本当に不死身なんじゃないか？

「し、仕方なかったんです…人助けというかネコ助けというか……」

なんか訳分からんこと言い始めたぞ。テンパリ過ぎて頭おかしくなったか？

「こりゃーダメだ。アンタ、世界中に正体バラてオコジョにされて強制送還だわ」

「そんな〜！？一緒に弁護してくださいよ2人とも〜！」

アスナの つうこん の いちげき！

ネギくん は 999 の ダメージ を うけた！

そして二人つてことは俺には何も無しかい。

まあ最初に見捨てたし当然ちゃ当然だが何かムカつく。

オイオイと泣きながらアスナと刹那に縋り付いているネギ君を見ていると、廊下のほうから話題の張本人が現れた。

「おい、ネギ先生」

「ここにいたか兄貴」

肩にカモを乗せた朝倉がにこやかにこちらに歩いてきた。つか力もモカモで一般人の前で喋るな。

何でこの二人…一人と一匹はこんなに秘匿意識が薄いんだ？別の世界から来た俺の方がまだ意識高いぞ…

「うわっ、朝倉さん！？」

お前、自分の生徒に、ウワッ！はないだろ。

「ちょっと朝倉。アンタ子供イジメてんじゃないわよー」

「イジメ？ なーに言ってるのよ。って言うかあなたの方がガキ嫌いじゃなかったっけ？」

「そうそう、このブンの姉さんは俺らの味方なんだぜ？」

カモが朝倉の肩の上で得意そうに言い放った。

「味方？どういうことだ？」

「おりよ、草薙先生じゃん。ということは草薙先生も魔法関係の人ってこと？」

「なんのことかな？」

「隠さなくてもいいじゃん。いやー、しかし担任が二人とも魔法関係者なんてねえ」

「まあそれは今はいい。それで？味方って言うのは？」

まあこの場に一緒にいる時点でそんなもの関係者ですって言うてるようなものなので適当に言うておく。

朝倉は仰々しく一度咳払いをすると改めてこちらを向き直って言った。

「報道部突撃班、朝倉和美。カモっちの熱意にほだされてネギ先生の秘密を守るエージェントとして協力していくことになったんでヨロシクね？」

最初は固いの終わるころには軽くウインクを決めてるあたり朝倉らしいっちゃらしい。

「え……え……！？ ほ、本当ですかーっ！？」

ネギ君が諸手を挙げて朝倉に駆け寄っていく。

と、本来ならここで一件落着なのだろうがそうは問屋が卸さない

！ちなみにここでの問屋は一応俺ということにしておこう。

「ふおっ！？」

喜ぶネギ君やそれを慰める明日菜たちにはれないように朝倉の肩に乗っていたカモを拉致。

男湯の脱衣所に入り込むと清掃中の札をかけて鍵をかける。

「さて、用件は分かってるよな？アルベール・カモミール？」

「な、なんのことだい旦那？」

首を明らかに明後日の方向に向けてこちらを見ないようにしている。

まあ隠し事があるというのはこの時点で…いや、朝倉の言動のから既にバレバレだ。

「報道班の朝倉がこんな特ダネ逃がすはず無いだろ。なのにいきなり秘密にするってことはそれ以上のものがあるってことだ。さあ、話してもらおうか」

ここまで言うとカモはこちらに向かい直った。言う気になったのか？

「記憶にございません」

思わず滑った。

手の中のおコジョ妖精はまるで思考を止めたような顔をして、こっちが何を言おうと「記憶にございません」を繰り返すだけだ。

どこの政治家だよお前は……

減が分からん。

しかし先ほどまでの態度はどこへやら。今は何でも話す気になっているようだ。

緩んだ手の中で息を整えているカモに再度問いかける。

「で？あの朝倉をどうやって引き入れたんだ？」

「じ、実は朝倉の姉さんには俺らの取材を独占させる代わりにこつちのことに協力してもらおうことになったんです」

「は？それだけ？」

「おう！いい取引だろ？」

「うーむ……」

「いででででで！いやマジでこれ以上のことはないっすから！」

ふむ、再度締め付けてみたがこれ以上のことは無いようだ。しかしなあ……

「それは必然的に朝倉がこつちの世界に関わることになるんだぞ？お前そのこと分かってるのか？」

「でももうバレちまつてるじゃねえか。それなら勝手に動き回られるより俺らの周りに居てもらったほうが安全ってもんじゃねえか？」

「む……」

確かにカモの言うことも一理ある。

確かに朝倉は言っても放っておいてくれる性格ではなく、こつちが拒否すれば秘密裏に動くだろう。そうなればいざとなった場合の対応が取れない。

それならば多少魔法の存在がバレようと近くで動いてもらった方が……悪く言えば監視しやすい。

それに魔法の存在も知っていれば朝倉もその危険性に気づくはずだ。そうなれば朝倉も下手に首を突っ込んでくるということは抑えるようになるだろう。

しかしあくまでこれは俺の楽観的推測だから、後で朝倉に釘を刺しておかねばならないが…

「はあ…まあいっか。それならそれで」

「へ？」

「別に朝倉もそれに納得してるんだろ？ だったら言い方は悪いが俺らの近くで動いてもらった方が監視しやすい」

「い、いいんすか？ それで…」

「もう知れてしまったものはしょうがないだろ。適度な距離さえ保てればな。ただし、お前が朝倉を危険なことに巻き込もうとするなら、俺は容赦なくお前のことを潰すから覚悟はしとけよ？」

「イ、イエッサー………」

多少ドスの効かせた声で力齧すとカモは瞬時に敬礼する。

しかもその手が人間の手みたいになっているのはどういう原理なのか……追求してはいけないんだろうか？

それからもう少し釘を刺してカモを解放。脱衣所を出ると既にネギ君たちの姿はなくなっていた。どうやら意外と時間が経っていたようだ。

俺も先生の業務に戻りましょうかね

現在時刻9時半…就寝時間まで後30分。俺は他の先生たちと一緒にロビーで待機していたのだが……

騒がしい……とにかく騒がしい……

どれだけ騒がしいかと言えば、キヤーキヤードタバタという擬音がピツタリなくらいうるさい。

ロビーで待機してる俺に聞こえるのだから近くにいる先生たちにも丸聞こえだろう。

確かにまだ就寝時間にはなっていないがこれだけ騒がしいと他のお客さんにも迷惑がかかる。

そろそろ注意せねばなるまい……

と、思った瞬間新田先生が腰を上げた。頭にはうつすらと青筋が浮かんでいる……

まずい、これは非常にまずいがとりあえず抑えられるか話しかけてみる。

「えっと…新田先生？ここは私に任せて貰えませんか……」

「いくら草薙先生が3・Aの副担任といえどそれは認めかねますな。学園広域指導員としてこの騒がしさは目に余るものがあります。担任のお二人を連れて行くのも甘やかす原因ですのでご遠慮願いたいところですよ」

「そう…ですか……」

ですよ。

「すまん、俺はお前たちを救うことはできないようだ…できるのはロビーで祈ることだけか……」

「それではお二人とも、行きますよ」

「あ、はい」

新田先生が肩を怒らせながら階段へ向かうのを、瀬流彦先生としずな先生が慌てて続く。

「あ、しずな先生」

「はい？」

「なるべく穏便に済ませられませんかね？」

「そうですね。あの様子だと難しいと思いますよ？」

「なるべくでいいです。お願いします」

「くすっ、分かりました。それにしても草薙先生も生徒思いですね」

「そうですね？」

「自分では気づかないかもしれませんが結構なものだと思いますよ？」

にこやかな笑みを浮かべてしずな先生は新田先生たちの後を追った。

生徒思いねえ。んー…自分じゃ本当に分からんな。

まあしずな先生は嘘を付くような人じゃないしそうなんだろうけど……

「コラア3 - A！いい加減にしなさい！」

考えてた頭に新田先生の声が響き渡った！つか声でか！あんたの声が一番でかいよ新田先生！

この声を間近で聞いている生徒たちを思っつて南無阿弥陀仏と念仏を唱えている俺は端から見ると変人なのだろうか？

というよりやっぱり生徒思いなのかもしれない。

「しかし…何か嫌な予感がするんだよなあ……考えすぎか？」

京都の夜は深く闇に染まる。

S i d e o u t

S i d e ???&???.の会話

「痛てててて……旦那は容赦ねえなあ」

「あ、いたいた。おーいカモっち」

「お、ブンヤの姉さん」

「まったく、あの後どこ行ってたのよ？これからの打ち合わせあるって言ったのカモっちだよ？」

「あの……後……」

「ん？どしたの？」

「ガクガクブルブル（（（；。°（（（ガクガクルルブル」

「うつわ！ちょ、カモっち！？汗と震えヤバイよ！？何があったか知らないけどもう思い出さなくていいから戻ってきて！」

.....

「落ち着いた？」

「すまねえ姉さん取り乱しちまったぜ。で？段取りは？」

「作戦通り。私を誰だと思ってるの？」

「流石だぜ姉さん」

「へへへへへ」「フフフフフ」

「ラブラブキツス大作戦とは仮の姿…その実態は……………仮契約カード大量ゲット作戦さ！」

「ババーン！」

「ほほほー、これが豪華賞品のカードか。これをいっぱい集めればいいんだね？」

「おうよ！オリジナルはネギの兄貴は持つてるけどな。こいつは俺たちの力で作ったパートナー用の複製さ！」

「しかもこの旅館の四方には魔方阵が敷いてある！これで旅館内で兄貴とチューしたらパクテイオー成立！」

「一人につき5枚オコジヨ\$だから儲かるから……………あわわ！俺ら百万長者だぜ姉さん！」

「さらに今回は班&個人の連勝複式トトカルチヨも実施するよ！！」

「もーおいしくて笑いが止まんねーって……………ばよ……………」

「ん？どうしのカモッチ？」

「いや、そういえば旦那のことすっかり忘れてたな……………って……………」

「あー、草薙先生か。確かにバレたら止められるかもね。」

「うむ……………」

「あー！」

「な、何か策があるのか姉さん！」

「モチのロンよ！ちよいと耳を…ゴニョゴニョ」

「フムフム…なるほど！それならこつちも儲かるし旦那も得をする
！」

「その通り！これなら草薙先生も文句は言わないはず！」

「よし！なら姉さん、早速準備を！」

「おっけいカモツチ。ううん、あーあー、テストス。こちらラブラ
ブキツス大作戦実況兼開催者の朝倉和美。各班にルール変更のお知
らせを致します。その内容は……………」

京都の夜は深く闇に……………染まる？

S i d e o u t

波乱の為…（後書き）

はい、オリジナルもクソも無かったですね。申し訳ありません。

なんか最近謝ってばかりのような……

とりあえずどうでしたでしょうか？

次回は作者がネギま！で大好きなイベント、ラブラブキッズ大作戦です。

この話は多分一週間超えると思いますので先に言っておきます。

それでは今回はこの辺で。

また次回お会いしましょう ノシ

誤字脱字表現のミスの指摘は遠慮なくお願いします。

P S .

草薙の記憶が曖昧なのは既にこちらの世界に来てから半年以上経っているのと、原作をそんなに読んでいなかったため自分の興味のあるところ意外はあまり覚えていません。

これまで原作を参考にしたり分かりやすくても原作覚えて無かったりしたのは自分の中でそういう設定だったわけだからです。

今まで草薙の行動が分かりづらかったらすいません。そういう設定でお願いします。

秘めた想いの為…（前書き）

追記、7月9日修正

秘めた想いの為…

Side 草薙 亮

「うん？」

「どうかしましたか？草薙さん」

「ん…いや、気のせいだったみたいだ。なんでもない」

場所はネギ君の個室。時計は午後11時を指そうとしている。今俺たち二人はアスナと刹那の巡回が終わるのを待っている。

既に就寝時間の生徒にこんなことさせるのは気が引けるが、俺たちだけではキツイのも確かだ。そのため二人には先に回ってもらっているのだ。

コンコン……

ノック音と共に襖が開きアスナと刹那が周囲を気にしながら入ってきた。

「二人とも、周囲の見回り行ってきたよ」

「特に異常はありませんでした。それから、一応ですが結界も強化しておきました」

「そうか。お疲れ様」

「それでは次は僕たちが行きましょう。それに今晚は何か変な殺気

みたいなものを感じるんです。あまりここにはいない方がいいよう
な……」

ネギ君も感じていたか。先ほど俺が感じた寒気はネギ君の言う殺
気みたいなものなのだろう。

「確かに言われてみれば異様な気のような感じます……害意はな
いようですが……」

「でもこんな時間に草薙さんとはかくネギがいなくなると先生た
ちが騒がない？」

「ふむ、確かにそうか。なら俺だけで行くか？」

「いえ。いくら結界を強化したといってもやはり一人では見落とし
の可能性もあります……そうだ」

刹那はそういうとポケットから何か人の形をした紙の束を取り出
してネギ君に渡した。

「ネギ先生には『身代わりの紙型』をお貸ししましょう」

「『身代わりの紙型』？」

俺とネギ君の声が重なった。ちょっと恥ずかしかったのは内緒だ…
刹那がその紙型の説明をしようとした瞬間、この部屋の襖に接近
する気配を感じた。

「！？お前ら隠れる」

「え？」「あ！」

明日菜と刹那を襖の前から死角になる位置にどけた。
間一髪で襖が勢いよく開く。

「ネギ先生　　！！そろそろ寝ましたか　　！？」

現れたのは何故か物凄い元気なしずな先生だ。

「あ、しずな先生。今寝るところです」

ナイスネギ君！

「あら？草薙先生も一緒でしたか」

「ええ、ちょっと生徒のことを。担任と副担任で」

「そうですね。あ、ネギ先生？生徒たちの見張りは私たちに任せてくださいね？ネギ先生は10歳なんですからみんなと一緒に寝てください」

「あ…はい」

「草薙先生も、そろそろ見張りに加わってくださいね？」

「分かっています。もう切り上げるところでしたし」

「部屋出ちゃダメですよ　　！！」

そういうとしずな先生はもの凄い勢いで廊下を去っていった。な

んだろう……すごい違和感だ……

「と、とりあえず私たちは今日は休みましょうか」

「そ、そうね。じゃあネギ、草薙さん。後は頼むわよ」

「あ、はい」

「言われるまでもない。二人ともしっかり休めよ」

アスナと刹那は再び周囲を警戒しながら廊下に出て行った。

「じゃあ俺も見回りに行くわ。ネギ君はまたしずな先生（？）が来るかもしれないから別々に行動しよう」

「分かりました。お気をつけて」

「ああ」

そう言つと俺もネギ君の部屋を出る。俺は先生なのでアスナたちと違ってコソコソとはしてないが。

自販機でコーヒーを数本買うつとそのまま旅館を出る。人目が無いのを確認すると、足を気で強化して一気に屋根へと上がった。

侵入者は刹那の結界で直ぐ分かるようになってるが外敵を防げるわけではない。結局外を見張るのが一番手っ取り早いのだ。

意識を集中して旅館周囲の気配を探る。夜中に近い時間帯のためまだチラホラと人はいるようだ。しかしどれも一般人のそれで敵の気配ではない。

しばらくは大丈夫なようだ。

集中を解いて足元に置いておいたコーヒーを開ける。

「ふあ……」

欠伸が出たのでそれを一気に煽る。軽い苦味が体の奥底に燻っていた眠気を押し込めてくれた。

昼にあった月詠は今日は待機命令が出ているということを書いていた。

探った気配とそこから考えても今日はもう襲撃してくることはないと思う。

「冷た！」

その場に座り込もうと腰を下ろしたが、吹きさらしの屋根は思った以上に冷たかった。流石に座布団は持ってきた方が良くかもしれない。

俺は一度屋根を降りると下に敷くものを探すため旅館に戻った。

S i d e o u t

S i d e 和泉 亜子

「なんでこんなことに……」

先ほどから何回目の溜め息やろう。また出た溜め息に気づいて首を振る。

現在の状況だけ挙げると……枕を持った状態でコソコソしながら旅館の廊下を進んでいる。目の前には心底楽しそうに枕を抱えてい

るまき絵がいる。

「ほら！亜子！早くしないと置いていくよー！」

まき絵がまた溜め息が出そうになったウチの横に来て声をかけてくる。無論声の音量は二人にしか聞こえない程度の声。

こうなったのは30分ほど前の和美の放送のせいや…

（30分前）

『こちらラブラブキッス大作戦実況兼開催者の朝倉和美。各班にルール変更のお知らせを致します。その内容は……草薙先生もキス対象に加えます！ネギ先生と違い大人のキスを体験したいと思いの方たちは是非狙ってみてはいかがでしょうか！？そのことを踏まえた上で参加者を決めてください。それでは、アデュー？』

「く、草薙さんも対象になるん！？あ…でももうゆーなが参加登録しちゃってるから………はっ！」

「ひひひひひひ」

「ゆ…ゆーな……さん？」

「朝倉　　！4班明石に変わり和泉は入りまーす！」

「やめて　　！」

「大丈夫！参加できないのはくやしけど友達のお恋路の方が大事だ

から！」

「だからそういうのちゃうって　　！！！！！！」

く以上回想終わりく

そもそもウチ自身かてまだ好きかどうかも分かってへんのに……
で、でも草薙さんとキスか………アカン！やっぱ恥ずい／＼／

「……」？亜子！」

「へ？」

顔を上げると目の前にまき絵の顔があった。

「もう！急に考え込んだから！今襲われたらひとたまりも
なかったよ！」

「い、いじめ？」

そ、そうや。どうせもう参加してしもうてるんやし今は集中せん
と…………

「とりあえずネギ君は教師部屋にいるらしいけど近くには『鬼の新
田』が見張ってるに違いないし……草薙さんに至っては部屋にいな
らしいよ……どうにする？」

「どうするゆーても……ってだからウチは草薙さんのことは……」

「シー！声が大きい！」

「あ、ご、ごめん……」

「とりあえず部屋も見ておこうか」

「う、うん」

そう言ってまき絵とウチは近くの廊下の角を曲がるうとして……

「ん？」

4人の声が重なった。目の前には3班で参加しているいいんちよと長谷川さんが！？

「ぶげらー！」

「ぶも！」

一瞬思考停止していた瞬間にまき絵といいんちよが持っていた枕で相打ちになった！

「えつと……」

「はあ……」

長谷川さんは参加する気はないみたいや。枕を片手に頭を掻いていて寧ろ面倒くさそうにしている。これならウチが参加せんでも大丈夫……かな？

「チャイナビロートリプルアタック！」

「はっ！」

「あや！」

と思つた瞬間階段の上から飛んできた枕に吹っ飛ばされた！痛む頭を抱えながら階段の方を見ると今枕を投げてきた人物が向かってきた。

つて古菲と楓！？

あかん！ウチなんて戦力にならんし、ここは撤退した方がええ！

「まき絵！逃げるで！」

「う、うん！」

「あ！お待ちなさい！」

「逃がさないアルよー！」

ひい！早い！回り込まれた！？っていうか古菲足でも枕搦んでる時点で既に人間離れしとるんやけど！

なんて考えてる内に始まる枕乱闘。攻撃方法が枕のみとはいえもう枕投げでなく枕の上からの殴り合いや。

というより投げたら武器を拾う手間が出る分投げた方が負けみたいなっとなる。

「んー、まき絵殿もいいんちょ殿も中々やるでござるな」

「ひい！」

いつの間にか右隣楓が来ていた。慌てて枕を構えて迎撃体制をとる。

「まあ待つでござる。拙者は無闇に争う気はござらんよ。」

「ほ、ほんま?」

「それ以前に攻撃用の枕は今古に貸してるから攻撃できないでござるよ。」

ほれ、と両の手を広げてみせる。ってことは古菲は4つも枕使ってるってこと?滅茶苦茶やな……

あれ?そういえば長谷川さんは?

「ぎゃぴい　!」

そう思った瞬間廊下の向こうで長谷川さんの悲鳴が聞こえた。いつの間にか離脱していたみたいや。でも悲鳴ってことは……

「やばい、鬼の新田だ!」

「逃げますわよ!皆さん!」

そう言って皆バラバラの方向に逃げ始めようとして……古菲がまき絵の後ろに迫る!

「危ない!」

とっさにまき絵の背を押して古菲から避けさせた。

「およ、避けられたアル」

「とりあえず逃げるでござるよ」

そう言って二人は猛スピードで廊下の角に隠れてしまふ。ひとまずこの場を離れな！

「亜子！はやくはやく！」

「ま、まっつて〜！」

いつの間にか反対側の廊下の角に逃げていたまき絵に合流して走り出す。

「こらあ！誰だ暴れてるのは！」

「ひいー！」

「亜子、止まっちゃダメ！」

まっついでせ

！！！！！

S i d e o u t

二人同時にため息が出る。

「うん？」

と、何か屋根の淵、ダクトの辺りから気配を感じた。

この感じは…敵じゃないな。と言っても放っておくわけにもいかんし……

「敵ではないようですがの」

「分かるのか？」

「一応探知系の魔法は張っておりますでな」

「え、マジ？」

「まあこの旅館の敵味方を判別するくらいのもんですから魔力はほとんど使いませんわい」

そう言いながらフオフオフオッと笑うミトム。案外こいつもいい性格をしているが……一体いつ使ったのか全く気づかなかった。

魔法発動にそういう呪文を必要としないのか…大ききにもよると思っがそれは魔法使いにとって非常に大きなメリットだ。

そういうことならミトムの出番はこれから増えるかもしれない。しかし、なんだ？この寒気みたいなものは……

「敵ではないんだよな？」

「ええ、生徒の誰かだと思いますがの」

「なんでこんな背中に視線を感じるんだ？」

「それは分かりかねますが……まあ殺気ではありませんまい」

「まあ……な」

ガガ！

見に行こうと立ち上がった瞬間淵に左右合計4つの手が生えた！？
と思つたら二つの影が飛び上がって俺の前に立った。

「見つけた(でござる)(アル)!!!」

「古菲と楓？何か用か？」

正面に現れた古菲と楓は何故か異様な雰囲気を滾らせている。そして手には枕……正直イミフ状態だ。その上

「唇頂戴！」

なんて言いながら飛び掛ってきたら余計だ！

「とりあえず意味が分からん！」

いきなりキスしようとしてくる二人に卓袱台をひっくり返して盾にする！

何気にミトムは自分と俺の湯飲みを先に持っているのだから大したものだ。

何とか一旦距離を開けたが……しかし……

「なんで攻撃が枕の上から!？」

「そういうルールアル!」

「でござる!」

なにそのルール…

でもこの二人なら枕だけで必殺の威力をたたき出すという確信がある。いや、間違いなく当たれば気絶悶絶は確定だ。

しかしキスを狙うゲームってなんだ!？なにが目的なんだ!

…いや、分かった…このゲームで唯一得をするやつらを…

仮契約か…

ということは既にその配置も万全ということか。

そう考えて少し気配を探ると旅館を囲むように魔力の塊が配置されているのが感じ取れた。

これが魔方陣か。しかしこれ消してる暇無いなあ…

おそらく…何らかの理由をつけて朝倉とカモが俺を参加させたのだらう。

(あの一人と一匹は殺す…)

他のことをしながら逃げ切れるほど楓も古菲弱くない。というよりむしろこの二人相手だと確実に勝てない！

枕の上からというルールが無ければ最初の奇襲で終わっているはずだ。

なんて心の中で思ってみたがとりあえず今はこの状態を何とかしなくてはならない！

幸い本当に枕でしか攻撃してこない上、距離が取れているのでこの二人相手でも何とかなりそうだ。それでも何とかが付く部分非常に情けないのだが……ここは……

「一時撤退！ミトム、見張りよろしく！」

「逃げたアル！」

「追っでござるよ！」

「りょーかいじゃー」

後ろから聞こえる間の抜けた声に若干不安を残しつつ屋根を走る。そういえば先ほど内部の見回りの時に何故か空いていた非常口のことを思い出した。屋根を蹴って非常口の踊り場に飛び降りる。手をかけてドアノブを捻ると予想通り非常口は開いていた。

上から降って来た枕を辛うじて転がるようにして中に入ることで避け、すばやく立ち上がって走ろうとして……

「」「」「」

「え〜…つと？」

ネギ君の部屋の前で分厚い辞書を振りかぶっている綾瀬と、枕を頭から被せられて涙目になっている鳴滝姉妹と完璧に目が合っていた。

なるほど、非常口はどちらかが開けていたのか。この場合だと綾瀬だろうかなあ。

「大人のキス〜！！」

「ふん！」

「あだっ！」

条件反射で飛びついてきた鳴滝姉をデコピンで弾き返す。こっちも条件反射で手を出したせいで加減できてなかったようだ。

鳴滝姉頭が思い切り後ろに吹っ飛んでその場でうずくまり、そのまま声にならない悲鳴を上げていた。

「まだいるアル！」

やべっ！こんなことしてる間に追いつかれた！そう思った瞬間……

「きゃあああああああああ！！！」

ネギ君の部屋の中から宮崎の悲鳴が響き渡った。その場にいる全員の注意がネギ君の部屋に向く。

(チャンス！)

叫び声を聞いて襖に群がっていく綾瀬らをスルーして俺は廊下の角に身を隠す。端から見れば白状かもしれないが・・・宮崎、すまん。

なんにせよこんなイベントにネギ君が巻き込まれていないはずは無い。ならばここは一人の男としてネギ君があの場合を何とかするのを望むしかない！

さらば友よ！君の事はわす…

「草薙さん」

「うお!？」

逃げた先からいきなり冥福を祈った人間に声を掛けられたら驚かない人間がいるだろうか？いや、いない。

「・・・ネギくん？」

そこにはネギ君がいた。まあ・・・それだけなら可笑しいことはなんら無いんだが、何故か手を取ってきて顔を赤らめている？

「草薙さん・・・」

「えつとお・・・ネギ君？」

「キスしてください」

「はあ!？」

そういいながらキリツ!とした表情になるネギ君。いつもはのほほんとしているけどすっかりした顔してるじゃないか。

うむ、これが中学生くらいだったらそのギャップで落ちるかもしれない。ギャップ萌えと言う奴だ。

だが落ち着け、俺はもう21、そしてなにより男!そっちの趣味はまったくない!

「いや、そもそも俺ら男だぞ!」

「すみません、それでも僕、草薙さんとキスがしたいんです」

いやいや待って待って落ち着け、これは孔明の罠だ。

いや全くこの場に孔明はいないし罠でも何もないんだけど・・・

「草薙さん・・・」

近い!顔が近いぞネギ君!

ああ、こうして俺のファーストキスは10歳の少年に奪われてしまいましたとき。でめたしでめたし・・・

「んなわけあるかあ!」

「もげら!」

ネギ君の顎に俺の右膝が炸裂した!

そのままネギ君は天井に一度ぶつかってから俺の足元にポトツと

いう音共に落下する。

「あ………すまん、つい」

「任務失敗、ネギでした」

「うお！」

足元のネギ君が爆発しその場に紙型だけが落ちてくる。

その紙型を拾い上げ名前を確認すると確かに『ネギ・スプリング
フィールド』と書かれていた。

これ刹那がやってたやつか？

ネギ君エ………これはないだろう……

意識を集中して旅館全域の気配を調べる。今吹き飛ばした偽者で
気配の種類は分かった。

ほぼネギ君と気配も同じだが複数ある以上それは偽者だ……

しかし何故キスが命令されていて、その上気配が複数あるのかも
分からないが……

とりあえず解決せねばなるまい。

ならば取る行動は唯一つ！

二階廊下

「くーふえさん、その……お願いがあつて……その、キスを……」

「へ？」

「はい、ど

ん！」

必殺！

「ひでぶ！」

「ネ、ネギ坊主

！」

「任務失敗、ミギでした」

ど

ん……！！

「にゃ

！」「あいや

！」

「よし2体目え！」

大広間

「いいんちよさん、キスしてください」

「え……キ、キキ、キ、キス……ですか？」

「はい」

「はいそこまで」

滅殺！

「はぎよめぶ！」

「ネ、ネギせんせ」

「任務失敗、ホギでした」

ど
ん……！！

「きゃあああああああああ！」

「3体目え！」

旅館裏庭

「史伽ちゃん……」

「あ！ネギ先生！」

「今から史伽ちゃんの唇を頂きます」

「なっ！」

「あ、あれ？」

紙型と思つて蹴り飛ばしたネギ君は紙型には戻らず『ベシヤリ』
と変な音を立てて変な形で壁に激突した。

え？もしかして・・・本物？

「ネギ・・・君？」

「うう・・・僕の人生に一片の悔い無し・・・」

「君の人生いいのかそれで！？起きろ！傷は深いが致命傷ではないぞ！」

S i d e o u t

S i d e 和泉 亜子

はあ・・・結局草薙さんもネギ君も見当たらんし・・・二人とも
どこ行つてしもたんやろうか？

「にや〜、新田が邪魔で全然探しにいけないよ〜」

隣のまき絵が流石に声を上げる。

新田先生は長谷川さんを正座させた後逃げないように何度かロビー
ーまで戻ってくる。

その道が何故か毎回ウチらのいる道のせいで二人そろってロビー
近くの廊下から動けないでいた。

「言うても見つかったら即アウトやし・・・それにしてもさっきからの爆発音が気になるなあ。何かあったんやろか？」

先ほどから旅館の至る所で爆発音が聞こえとる。その数、実に4回。

その度に新田先生は走って行って新しい生徒を連れてくる。あ、今度はいいんちよや。

しかしなんで全員気絶してるんやろ？

ど

ん!!!

うわ！またや！

今度は裏庭から！？本当に何が起こってるんや！

「ちょ、亜子！顔出したらやばいって！」

「あわわわ！」

まき絵にロビーの角にある観葉植物の陰に引っ張り戻される。その目の前を新田先生が爆発音のした方に走っていった。

「なにやってんの！ここで見つかったら全部台無しだよ！」

「し、ごめん・・・」

「とりあえず今までの爆発どおりだったらまた他の班の人たちが巻き込まれたはずだけど、そうなる・・・」

「残ってるのはウチラを合わせて2班だけやね」

「今のうちにここら辺から抜けた方がいいかも。また新田が戻ってくる前に」

「せやね。なら今のうちに」

手早く方針を決めて観葉植物の裏から静かに廊下へ出る。

「和泉さん……」

「ひやあああああああああ！」

いきなり後ろから声があ！！一体誰が……

「……ね、ネギ君？」

び、びっくりした……心臓が止まるかと思った。ネギ君なら見つかったも……

あ！まき絵！

「ほら！まき絵、チャンスチャンス！」

「う、うん！ネギ君！あ、あのね？私とき、き、きききき……」

「和泉さん！」

「ひゃいー！」

なんや？ネギ君が人の話を遮ってまで話を進めてくるって

「僕と・・・キスしてください！」

「「は？」」

え？何？なんか急展開過ぎて付いていけへんのやけど・・・

「ですから・・・僕とキスを・・・」

「え？え？な、なんでウチ？まき絵とじゃあかんの？」

「すみません。僕は和泉さんとキスがしたいんです」

「そ、そんな・・・」

「ああ、まき絵！」

こんなリアルに orz みたいにならなくても・・・
て！ネギ君顔近い、近い近い！

「ちょ・・・ネギ・・・君？」

「こんな形で・・・すみません」

ちょ・・・ネギ君でこんなに格好よかつたけ？

流されたらアカンって分かってるんやけど・・・

ネ、ネギ君の顔が真正面に・・・あかん、顔見れへん！

「いい加減にせんかいこのアワビがあ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「Y O M O G I !」

「ひゃう!」

なんか物凄い勢いでネギ君が吹っ飛んでいったんやけど!?!もう跳ぶじゃなくて飛んでるんやけど!

というよりなんで飛んでいく声がヨモギ?もう頭こんがらがって意味分からへんよ!!

「亜子!」

「草薙・・・さん?」

どうやらネギ君を吹っ飛ばしたのは草薙さんらしい・・・
ってあの吹っ飛びかたしてネギ君大丈夫なん!?

「あわわわわ!ネ、ネギ君大丈夫!?!」

「おい!近づくな!爆発するぞ!」

「へ?」

爆発って、そんなアホな・・・

「くそ!」

「え？え？ちよつと！ 草薙さん！？」

「なんや知らんけど抱きしめられた！？」

「て、なんかそのまま地面に押し倒されたんやけど！？」

「こっこっこっこっ、これって！」

「ああ、でもウチ心の準備がまだ／＼／

「任務失敗、ヤギでした」

「ほえ？山羊？」

「どーーーーーーん！！！！」

「ひゃあああああ！！！！？」

「ネギ君が爆発した！？」

「草薙さんの言ってたのってこれ！？」

「この体制だと草薙さんが！」

「案の定草薙さんはモロに爆風を受けてこっちに倒れこんでくる！」

「倒れこんで・・・」

「んむっ！」

「そのままウチの唇と草薙さんの唇が重なった・・・」

S
i
d
e

o
u
t

秘めた想いの為…（後書き）

さて、とりあえず生存報告から
既に大地震から二週間ほど経ってようやく普段の生活を取り戻しつ
つある作者です。

停電、断水などはありましたがライフラインが全部止まることは無
く心をなでおろしてるところです。

さて、本文なんです…

お待たせしてしまって申し訳ありません。

前回投稿日：『1月3日』

なんなんだろうねえ…

確かに一週間以上かかるとは言いましたがどまさかほぼ丸々3ヶ月
かかるとは思っていませんでした。

しかもクオリティがorz

まあもう大学4年になるので就活が忙しくなってきたせいなんです
けどそれを差し引いてもかかりすぎですよね…反省してます。

これからも不定期更新になってしまいますが何とか完結だけはさせ
たいと思っていますのでこれからもよろしくお願いいたします。

流れるには亜子と仮契約したので次回はその能力説明と本編に沿っ
た話になると思います。

それでは今回はこの辺で。

ありがとうございます！

動き出す為に…（前書き）

最近サブタイが思いつかなくなってきた・・・

追記、7月11日修正

動き出す為に…

Side 草薙 亮

修学旅行3日目の朝、今は朝食も済み次の行動まで自由時間だ。

なのだが・・・

「困りますよ、草薙先生」

「はい、申し訳ありませんでした」

俺は今新田先生のお叱りの最中だ。ネギ君共々朝まで正座させられてその上お叱りまで受けるのは理不尽な気がするが、ネギ君のサポートをするのが俺の仕事で、責任を取るのは年長者の役目だ。

「以降はこういうことが無いようにお願いしますよ」

「はい」

新田先生も少しの時間で解放してくれた。こっちが本気で反省してるのと、3-Aの対応が難しいと分かってくれているからだろう。

新田先生の部屋を出てロビーへ向かう。

んー、やっぱり朝まで正座は辛い。まだ足が軽く痺れている。まあそれは朝まで見張っていた新田先生も同じくらいの苦勞を味わっているんだが・・・

やはりそういうことを考えると新田先生は教師の鑑なんだと思う。

「で？どうすんのよネギ」

「えうつ！？ 僕ですか！？」

ロビーへ行く途中聞きなれた声が浴場前の休憩所から聞こえた。
見るとアスナに叱られているネギ君、それを見ている刹那、朝倉、カモがいた。

「まあまあ、姐さん」

「そーだよアスナ、二人だけだったけど儲かったってことでいいじゃん」

「朝倉とエロガモは黙っててー！」

「よう、朝から元気だな」

「あ、おはようございます。草薙さん」

刹那が俺の方を向いて一礼してくる。

「ああ、おはよう」

「おはようって・・・そんな場合じゃないでしょ！草薙さんもどうするのよ！これ！」

そう言ってアスナが突きつけてきたのは二枚のカード、仮契約のカードだ。宮崎と亜子の絵柄が入っている。

「まあそう憤るな。ことの発端は俺でもネギ君でもないだろ」

「それはそうだけど・・・」

そう、事の発端は俺たちじゃない。すべてを仕組んだのは・・・

「二人とも、弁解を聞こうか？」

「！！」

発した自分でも分かるくらい声に怒気を孕んでいるのが分かった。多分殺気も出ているだろう。

俺に睨まれた朝倉とカモは顔を真っ青にして口をパクパクしている。他の3人も声が出ない。

心なしか周囲の空気まで重くなった気がする。

「だ、だん・・・」

「お前は朝倉にこの世界に関わる意味を教えた上で敢えてこの手段を選んだんだな」

蛇に睨まれた蛙とは正に今のカモのことを言うのだろう。折角発した言葉も体の奥に引っ込んでしまったようだ。

「で、だ。朝倉。お前が知ることに関して俺は異論はない。そこは個人の意思だ。俺がなんら文句を言うことはない。だが・・・一般人を巻き込んだことに関してはどう思ってる？」

「巻き込むって・・・周囲にバレたら不味いってことなんですよ？」

それでネギ君とかに迷惑がかかるって……」

なるほど……ね

「なら、質問を変える。お前はこれが人の命に関わるような事柄だと分かっているのか？」

「い、命？」

やっぱり分かってなかったか。

最早呆れるしかない……

「こつちの世界に関わるということはそういうことだ。この修学旅行中でも既に俺たちは一度、下手をしたら死んでいてもおかしくない体験をしている」

「え……」

朝倉がネギ君たちの方に視線をやる。全員が顔を伏せているのが肯定と分かったのだらう。青い顔をさらに青くしてしまっていた。

「まああのイベントを止められなかった俺にも責任の一端はある。だがな、どんな理由があればお前はクラスメイトを死の危険性と隣り合わせの世界に引き込んだんだ」

「わ、わたしは……」

「知らなかったと？もし宮崎や亜子が死んで、知らなかったら許してくれとでも家族や友達にでも言うつもりかお前は！」

無意識に俺は朝倉の胸元を掴み上げていた。

「あ……う……！」

朝倉が苦しみの声を上げるが俺はそのまま言葉を続ける。

「バレなければ大丈夫だ？ イベントだ？ 賭けだ？ 楽しそうだ？ ふざけんなよバカヤロウ！ お前は……お前はそんな物のために大切なクラスメイトを……友達を殺す気か！」

「う……あ……」

苦しみとは明らかに違う声が朝倉の口から漏れた。

それは嗚咽。

朝倉の目からはいつも明るい少女とは程遠いほど涙が溢れていた。それを見て俺はようやく朝倉を降ろして座らせる。

「人を巻き込むなら、それに対処できるだけの力を身につける。それまでは……俺が守る」

「え？」

朝倉が未だに泣いている顔を上げた。その顔は涙でグチャグチャで、いつもの面影は全くと言っていいほどない。

その朝倉の頭を思いつきりグシャグシャとかき回してやった。

「うわわわわ!」

「お前があいつらの責任を取れるようになるまで、俺がお前もあいつらも守ってやるって言ってるんだよ!」

朝倉にはまだ責任を取れるだけの力は無い。ならばそう、俺がそれまで代わりに守ってやるだけだ。

それが、俺に唯一できることだから。

「だからお前はそれまでどうやって責任取るかちゃんと考えておけ」

「・・・うん。分かった」

「よし、この話は終わりだ。ほれ、トイレでも行ってその顔直してこい。ひっでえ顔してんぞ?」

「ちょ・・・!乙女の泣き顔見るなんてどんな神経してんのよ!」

「ほら、行った行った!」

「この恥辱は必ず返すから覚えててよね!」

そう言っただけで朝倉は走っていく。最後は見栄だろうが、あいつなりにこっちに気を使ったのかもしれない。

まあ、朝倉についてはこれでいいだろう。本気で反省してる奴にアレ以上言っても逆効果になるだけだし・・・な。

問題は・・・

「そ・・・」

「どこに行くんだあ？」

「ひい！」

逃げ出そうとしてた白いオコジヨの尻尾を捕まえて顔の前まで持つてくる。

「だだだだ、旦那のために飲み物でも買ってこようかと・・・」

「オコジヨの身体でかあ？」

「あわわわわわわわわわ・・・」

ポーヒー！

「ア　　！！！！！！」

デデーン！

「で、だ。これからどうするっ？」

「そ、そのまま進めるんですね・・・」

天井からブランプランと逆さまに吊り下げられているカモを見ながらネギ君が言う。

「こんなので済めば安いものだろ。朝倉と違って、アイツは何さねたって改心しないだろうしな」

「な、何気にひどいこと言うわね、草薙さんって・・・」

アスナはオズオズと話しかけてきた。まあさっきまでの俺の豹変振りを見たらそれも仕方ないかもしれない。

「しかし・・・こつちの世界に関わるのは草薙さんの言うとおり命を賭ける行為です。むしろあれで覚悟が決まってくればいいのではないのでしょうか？」

刹那が俺に賛同してくる。このかが巻き込まないために尽力している刹那にしてみれば朝倉の行動は軽率極まりないものだったからな。

「と、とりあえず宮崎さんと和泉さんには内緒にしておきましょう。イベントの景品ですから複製のカードを渡したのは仕方ないですけど・・・」

ネギ君が言う。俺も概ねその意見に賛同だ。だが・・・亜子はなあ・・・

「あー・・・そのな、言うておくことがあるんだ」

「分かりました。では、和泉さんも極力巻き込まない方向で」

「ああ、よろしく頼む」

「こういう頭の回転はネギ君は速い。流石は飛び級してきた天才だ
けはある。」

「そこからは今日の話し合いだ。」

「今日の行動は班別自由行動。1班ずつ行く場所が違う。」

「じゃあ僕とアスナさんは本部に親書を届けに行くということ
ですか？」

「はい、草薙さんは私と一緒にお客様の護衛をお願いします」

「本当は俺はアスナにも参加はして欲しくはなかったんだがなあ」

「草薙さん、ここまで来てそれはないんじゃない？」

「といいながらアスナはカードをポケットに入れる。」

「これだ。こいつは言っても自分の信念を貫くタイプだ。言われて
帰るようなら元々言わない。」

「しかし……これで大丈夫か？」

「え？」

「俺の疑問にネギ君が疑問を浮かべる。確かにネギ君の従者である」

アスナとネギ君が共に行動するのは当然だろう。
しかし・・・

「本当なら俺も親書を届けるほうに回りたかつたんだよ」

「え？でもそれだとバランスが崩れない？」

「確かに人数は3対1で分かれるが、忘れてないか？刹那は今までこのかを守ったり学園の防衛に付いたり実戦の経験がある。その上神鳴流の使い手、所謂戦いのプロだ。反面俺とネギ君、アスナは実戦経験も少なく戦いの手段も限られている。そう考えると3対1でも良いくらいだ」

「な・・・なるほど」

「確かにそうかも・・・でもじゃあなんでさっきは賛成したの？」

ネギ君は納得したようだがアスナはそこが引つかかったようだ。

「敵の目的が・・・な」

「お嬢様・・・ですか」

今まで黙っていた刹那が的確に答えを射抜いた。

「ああ、敵の狙いは親書、このかの両方だ。どちらかに戦力を集中させてくる可能性がある以上こちららも優先順位をつけるべきなんだ。だが、ネギ君とアスナは行動を共にすると考えるとこのかの護衛から刹那を外すわけにもいかない。ならどうなるかという・・・」

「草薙さんが木乃香さんの護衛に回る、ということですか」

ネギ君の言葉に俺は頷く。

「とりあえず一旦別れて準備が整い次第、大堰川の橋に集合だ。くれぐれも他のやつらに気取られるなよ」

『おー！』

大堰川の橋

(よし、言い訳を聞こうか)

俺の目の前にはネギ君を含めた5班全員の面子+ が存在している。

俺のアスナにだけ聞こえるように言った声にあすなは申し訳無さそうに片手で拝むような格好をして、

(ゴメン。パルに見つかっちゃったのよ……！)

と云ってきやがった……だから気取られるなって言ったのに……

アレですか？お前の耳は飾りなんですか？

(も、申し訳ありません・・・)

刹那も皆に気づかれぬ程度に頭を下げてくる。

(まあもう付いてきてしまったものはしょうだないんだけど・・・)

(あたしの時と反応違うんだけど！)

アスナが反論してくるけどそれは刹那なら気づかれぬで抜けてくれるだろうからこの反応は間違っていないはず。

しかし一番の問題は・・・

「なんで亜子まで5班に引ッ付いてきてるんだっつうことだよ！」

「いいじゃんいいじゃん！細かいこと気にすると禿げるよ草薙さん！」

早乙女が俺の肩をバンバンと叩いてくる。ちくしょう、元凶に励まされるなんて屈辱以外の何者でもない！

そう、何故か5班の面子に混じって亜子までと一緒にいるのだ。あいつらの予定表だと今日はUSJ行く予定だったはずなのにも関わらず！

「なんか朝食の後急にまき絵と裕奈が来て一緒に連れてってやってくれたって言って来てさあ。まあウチも面白そうだから了承しちった」

「お前・・・しちったってお前」

早乙女がテヘツ と舌を出してくる。もう呆れるしかない。

「うん？ということは亜子の意思は無視して連れてきたのか？」

「あー、まあそうだけど・・・でもほら、本人も満更じゃないみたいよ？」

そう言われて早乙女が亜子を指す。俺が顔を向けると亜子は顔を真っ赤にして綾瀬の後ろに隠れてしまった。

う・・・そういう態度とられると俺まで照れるじゃないか／＼

「ひゅーひゅー、熱いねご両人」

「うっさい、大人をからかうな」

早乙女が囁し立ててくる。どうやら俺の顔も赤くなっていたらしい。心なしか顔熱いし・・・

それに、もう来てしまったものはしょうがない。今更亜子一人を合流させようと思っても裕奈たちは既に出発した後だろう。

それに仮契約の説明も出来るから丁度いい。

「よーし！ んじゃ、レッツゴー！」

お前が仕切るな！

そして綾瀬・・・その『サボテンの原液』と書かれた紙パックはあれか！？旅館のか？旅館のなのか！？突っ込み待ちなのか！？ガチなのか！！？

まあそれからは歩き出したわけなのだが・・・

気まずい・・・

俺はワイワイと歩く女子たちの空気を壊さないように班の数歩後ろを歩いてきた訳なのだが・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

なんで亜子は俺の隣を歩いているのだろう。亜子の方から視線を感じるのでそっちに目をやると先ほどのように顔を赤くして俯いてしまう。そんでもってまた前を向くと視線を感じるのだからこの繰り返しだ。

正直こんな時どうやって話しかけたらいいのか全然分からん。ただひたすら俺も亜子も無言で歩いているだけだ。

以前から亜子が多少俺に好意を寄せていたことには気付いていたが、こうまで露骨に顔に出されるとこっちも冗談も言えない。

何故か前方ではアスナが信楽焼の狸に頭突きをかました後、ネギ君のほっぺを引っ張るといつつもなら笑える風景が展開されているのに全く笑えない。

だが何時までもこうしている訳にもいかないし・・・うーむ・・・

「おい、草薙さん、亜子ー！あっちにゲーセンあるから京都記

念にプリクラとろー？」

前方の早乙女から声がかかった。こういつ時にあいつがいてくれて助かった。

いや、そもそもこの状況を作り出したのはあいつなのだが・・・まあこれで許してやろう。

「行くか？」

「は、はい・・・」

今日最初に交わした会話がこれって正直どうなのよ・・・

ゲーセンに入ると内部の音が一気に入ってきて一瞬周りの音が聞こえなくなる。

これ幸いとばかりにアスナとネギ君に軽く耳打ちをした。

(ここで何とか抜け出せ。後は俺が何とかする)

(わ、分かりました)

(オッケー、任せて！)

さて、これでは何とかなるかな・・・

「おーい！3人ともなにやってんの！早く来なよー！」

「おう！今行く！」

既にプリクラを起動している早乙女が俺たちを呼び寄せた。

その後は綾瀬や早乙女がやっているというTCGのゲームセンターバージョンをやるということで筐体の前に集まっていた。

「魔法使いですか。やってみようかなあ・・・」

「おーーーーー」

「よっしゃあ！待ってました！」

「スタートセットをお貸しするですよ」

なんかトントン拍子でネギ君が筐体へ。

ネギ君は初心者なのにそれこそやりこんでいる早乙女や綾瀬に負けないほどの動きを見せていた。

こつこつという戦略系のやつは得意なんだろうか。

「となり、入ってええか？」

「あ、うん。いいよ」

「勝負だよ！大丈夫！？先生！」

「ネギ君頑張れー！」

「地元の子なんかには負けるなー！」

端から見れば非常に迷惑兼失礼な発言だが中学生ならではということで大目に見よう、うん。

結果は半分ほどのライフ差をつけられてネギ君の負けだった。

やはり経験がものを言うところもある。最後のほうは完全に追い詰められていたからな。

「ほなな、ネギ・スプリングフィールド君」

「ど、どうして僕の名前を!？」

その言葉を聞いた瞬間一瞬俺と刹那が殺気を出さないまでも身構えた。

名前を明かしていないのにネギ君の名前を知っている……

少年のような外見だが実際見た目なんて当てにならない。

敵意を感じはしないがこんな人目の多いところでやるつもりか……

・!？

「だってゲーム始めるとき自分で入れたやろ？」

「あ、そか」

ずべっ!

普通自分の名前をゲームに使うか? ドラ エヤポ モンの主人公を自分の名前にするくらい……いや、俺も昔やったなそれ。10歳なら普通か。

少年は既に出口へと向かっていた。

この場は仕方ないが・・・次会ったら話し聞くらいに努力してみるか。

「よし！関西限定レアカード全部集めちゃうよー！」

「おーーー！！！」

早乙女の言葉に綾瀬とこのかが声を上げる。このかも案外このゲーム好きなのな。

そんな中ネギ君とアスナが声をかけてきた。

「じゃあ僕たちは今のうちに」

「ああ、気をつけてな」

「草薙さんも、桜咲さんと一緒にこのかのこと頼むわね」

「はい、二人とも気をつけてください」

それだけ言葉を交わすと二人は外へ出て行った。

「さて・・・」

「はい」

「よし！俺もゲームするぞー！」

「え！？」

「早乙女！俺にスタートパックを貸せ！勝負だ！」

「お！草薙さんもやる気になったね！相手になるよー！」

「刹那！お前も付き合え！」

「ええ！わ、私は・・・」

「せつちゃんもやるん？ほならウチと一緒にやる！」

「お、お嬢様！」

「じゃあウチも・・・」

「では私がお相手するですよ和泉さん」

「う、うん。お手柔らかにな」

亜子もなんとか溶け込めたみたいだ。よかったよかった。

やっぱり平和ってのはいいものだ・・・

それが束の間の平和だと分かっているなら尚更かな

「もらったあ！」

「ちょ！初心者相手にいきなり不意打ちか！？」

「戦いに初心者もなにもないんだよ先生！」

「いっしょに許さん！」

Side out

Side ????

「やっぱり苗字、スプリングフィールドやて」

犬上小太郎が戻ってきた。どうやら偵察の結果は当たりのようだ。

『あの』サウザンドマスターの息子か・・・状況によっては厄介かもしれないな。

「フン、やはり……あのサウザンドマスターの息子やったか……。それやったら相手にとって不足はないなあ……」

天ヶ崎千草がそう呟く。一回負けてる相手に不足もくそもない気もするが・・・それを言うと後が怖いのでやめておこう。

「刹那センパイと草薙はんは一緒に行動するんやろうか・・・せやったら一石二鳥でお得やなあ」

月詠が場の雰囲気似合わない相変わらずの口調で言葉を発した。

白いドレスに身を包んだ様はまるで人形のようなだがその腰には長短一対の刀が下げられている。

神鳴流の二刀剣士。その実力は神鳴流の中でも折り紙つきだ。

神鳴流は本来魔を討つ剣、一般に言う退魔士のようなものだが何事にも例外は存在する。

彼女は魔を討つだけでは無く、対人にも特化した神鳴流の剣士。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

そして先ほどから何も喋らない白髪の少年。フェイト・アーウェルリンクス。月詠と違いその肌自体青白く、感情すらも人形のような謎の少年。実力さえ不明。だが相当な実力者なのは確かだ。

なぜなら西洋魔術師嫌いの陰陽術士は多い。しかも腕が立つものも含めてだ。行動に移る踏ん切りがついていないだけで、誘えば行動を共にしてくれるものもあるだろう。

しかし西洋魔術師を嫌う天ヶ崎千草はなぜかこの少年を引き入れた。それはこの少年が西洋魔術師嫌いを補って余りある戦力なのだろう。でなければわざわざこのような少年に頼む意味が無い。

ならば今は敵に回さないほうが無難だ。

「あんたも自分の役割キツチリこなしてもらいますえ」

「分かってる。俺は俺の目的のためにあんたに協力してるんだ。そのための協力はするさ」

天ヶ崎千草が今更分かりきったことを聞いてくる。そう、俺は俺の目的のためだけに協力している。

正直こいつの考えに賛同したわけでもない。天ヶ崎千草の目的と俺の目的は全く違うが利益が一致しているから行動を共にしているだけだ。

「ふふ・・・坊やたち・・・昨日の力はきっちり返さ
せてもらっえ」

S i d e o u t

動き出す為に…（後書き）

和泉亜子の能力については次回になってしまいましたorz
あと今回から明日菜をアスナとカタカナ表記にしています。

原作でもカタカナの方が多かったのでそっちに沿う感じで（変換面
倒つてのは黙っておこう…）

次回からようやくと物語がクライマックスに入っていきますね。
いつまでかかるか分かりませんがよろしく願います。

誤字脱字表現のミス、矛盾についての指摘は遠慮なく願います。
ではまた次回ノシ

最終決戦の為・・・(前書き)

新キャラ!

追記、7月11日修正

最終決戦の為・・・

Side 草薙 亮

「メトロア極大消滅呪文！」

早乙女が呪文を唱えてくる。その魔法は全てを消し去る最大最強の魔法。

だがそれに対する俺は余裕をもって迎え撃った・・・否、迎え撃つ必要も無かった。

パキーン！

俺の目の前に張られた障壁がその魔法そのものを弾き返したからだ。

「ああ!？」

「覚えておくのだな、これが魔法返し（マホカント）だ」

「……………ン！」

You Win!!

画面からの派手な爆発音の後に俺の画面にデカデカとその文字が映し出された。

「だああああああ！また負けたあ！」

「先ほどから負け続きですね、ハルナ」

早乙女が頭を抱えて唸るのを綾瀬が慰める。さつきからこれで1回目だ。

最初こそ負けていたもののコツを掴んでからは俺は早乙女には勝ち続けている。

成績で言えば三敗十勝。しかもそのたび出るカードがそのままデッキに投入できるようなカードばかり出るのだから運がいい。

「さて、今度のカードは・・・」

「うわ！また先生レアカードじゃん！この筐体おかしんじゃないの!?!」

「流石に5連続レアカードでその他もハズレ無しだと怖くなりますね」

確かに・・・この筐体だけ細工されてるんじゃないかって言うくらいにの封入率だ。

ちなみにこのゲーム、一ゲーム終了ごとにカードが一枚出てくるため一つの筐体に入っているレアカードなどはそんなに多くないはずなのだが・・・

もうこの筐体にレアカードは入ってなんじゃないか？
ちなみに他の連中はというと・・・

「あ・・・」

「あー！またせつちゃん手加減するー！逆に失礼ってわかれへんの！？」

「いえ！そういうわけでは！」

刹那はこのか相手だと勝てる状況になることに手を抜くらしくこんな叫びが隣から聞こえてくる。

「あ・・・うっ！」

「和泉さん、ここは我慢ですよ」

早々に綾瀬にふるぼっこにされた亜子は今交換しながら互いのプレイをアドバイスしあっている。
といつても大体綾瀬の方が強いので綾瀬に亜子が教わっている形なのだが。

― 更に一時間後 ―

「んー！コンプリートオー！」

ゲームセンターを出た早乙女が、手に入れた最後のカードを振り上げて叫ぶ。

この面子・・・既にネギ君、アスナ、宮崎の3人がいないのだが気づく様子は無い。

…しまった…宮崎もいないのは予想外すぎる…恐らくネギ君のペアについていったのだろう。気づかなかった俺の完全なミスだ。

これなら先に二人は別用で抜けるってこと話しておいたほうが簡単だった気がする…もう終わったことを言っても仕方ないことだが。

しかしまあ他の連中も普通気づくだろう・・・親友の綾瀬は宮崎の親友だから恋路を応援する意味でも、気づいていても見ぬ振りするだろうけどな。

いや、案外早乙女も気づかないフリしてるのだろうか・・・うーん・・・

刹那は何か別のことに集中しているようだ。恐らくは式神でネギ君の方の偵察をしているのだろう。先ほどから何か表情が険しい。

「コンー」

どこからか鋭い針が刹那の後頭部に向けて正確に投げつけられた。

「刹那！」

俺の叫びとほぼ同時に刹那が気づき、それをすんでのところで捕

まえる。

あれは・・・飛針か！

刹那が飛針を素早く懐に隠すところかを守れる位置に移動する。
相手は最早隠れる気もないのか殺気を隠すこともなくこちらに向
けてきた。

「大丈夫か！」

「問題ありません！」

「殿は俺がする、振り切るぞ！」

「はい！」

刹那が遊んでいる木乃香の手を掴んで走り出した。それと同時に
俺も二人の後に続く。

それを見た早乙女、綾瀬、亜子もそれを見て続いてくるが今は仕
方ない。狙いはあくまでもこのかであるからだ。

20分は走っただろうか。未だに見えない敵からの飛針での攻撃

は続いている。

ヒュオ！

風を切る音と共に再び針がこのかに向かって複数投げつけられる。何もしなければ直撃するそれを、刹那は全て手で受け止めた。

（くっそ！まさかここまでの本数を正確無比に投げてくるとは・・・！）

先ほどから狙われているのはこのかだけではない。俺たちに追従しているメンバー全員が標的のようだ。恐らく殿の俺をこのかの防御から外そうという魂胆だろう。

流石に手加減しているようだが、このかに飛んでいくものだけは速度も鋭さも違う。

それを打ち落とすでもなく全て受け止めているのだから刹那も大したものだがこのままではジリ貧だ。

そう思い、刹那のスピードにあわせて前に出る。

「せ、せつちゃん、草薙さん、どこ行くん？ 足速いよお」

「ああ！ す、すみません、このかお嬢様」

「今は何も聞いてくれるな！」

（草薙さん！）

(おう！)

並走する俺にだけ聞こえるように刹那が囁いてきた。

(二手に別れましょう！このままではいずれ…)

確かに、俺たちは大丈夫だがこのかの体力がまずい。流石に一人を抱えながらだと他の面子を守ることが出来ない。

(分かった！タイミングを見て…いや、丁度良い！)

正面に見えた建物を見て俺が刹那に合図する。

『太奏シネマ村』

と巨大な看板が出ていた。

「あれ？ここってシネマ村じゃん！」

後ろでも気づいた早乙女が声を上げる。

(ここいっちは俺が引き受ける。お前はこのかを守ることに集中しろ)

(分かりました！そちらも気をつけて！)

そういつと刹那は立ち止まって後ろを振り向いた。

「すみません！皆さん！私このか…さんと二人きりになりたい

んです！ここで別れましょう！」

「「「え！？」」」

早乙女、綾瀬、亜子の声が重なるが、刹那返事を待たずにこのかを抱え上げ・・・

というか刹那、その発言は誤解を生むからやめておけ。

「お嬢様、失礼！」

「ふえ？」

そのまま壁を越えてシネマ村に入って行ってしまった。

誤魔化すこつちの身にもなれよ！…ていうかせめて入り口から入れよ！

「ど…どーゆーことですか？」

「うーん…女の子同士で二人つきりって…」

「あわわわわ…草薙さん、どうするん？」

反応は三者三様だが亜子の声で全員が俺の方を向いた。

んー、まあ放っておくわけにもいかんし…

「とりあえず…入るか、走って疲れたろ。飲み物くらいなら奢ってやるよ」

「おー！流石先生、太っ腹ー！」

「ではお言葉に甘えて…」

早乙女と綾瀬は納得したようだ。つかこれ俺が損する率高いな…
後で刹那に請求しようかなあ。

いや、冗談だけだな。

「え、ええんかな、これで」

「いいんだよ。あの二人を巻き込むわけにはいかんだろ」

「そ、そっやね」

「さ、俺たちも行くぞ。あいつら、ついて行かないと何買つか分からん」

「うん」

亜子もそれで納得したのかそれ以上は追及してこなかった。

Side out

Side 和泉 亜子

「えっと、自分のアーティファクトを出すときはカードを持って『来れ』で、戻すときは『去れ』で……ええんやっけ」

「そ、覚えてたな。関心関心」

近くの御茶屋でウチがカードの複製を見ながら聞くと、横で草薙さんがお茶を啜りながら答えた。

さっきの急に走り出したことは草薙さんが理由を説明してくれた。昨日言ってた連中がまたこのかを狙って襲ってきたらしい。

そんな訳でウチも可能な限り自分の身は自分で守って欲しいって言うことで今仮契約のカードを確認しとる。

「これなんなんやろう」

「どう見ても包帯だろ……」

「それは分かるんやけど」

ウチのカードには包帯が周囲に纏っている制服姿のウチが描かれている。

「流石に能力自体は試してみないと分からんからなあ、ちょっと出してみるか」

「え……ええのかなあ？」

「忘れたか？ここはシネマ村だ。多少光ったりいきなり物が出てくるのは範囲内さ。ほら、あそこでも」

指差された先を見ると通行人を巻き込んだチャンバラがはじまるとった。当然模造刀やしエキストラの人の立ち回りも上手い。

「ほれ、さつさと出さんと二人が戻ってくる」

「う、うん。『来れ』！」

声と共にカードが光りを放つ。光が収まるといつの間にか左右の腕に包帯が巻かれとった。

多分これが茶々丸さんの言ってたアーティファクトになるんやろうけど……

「これ役に立つん？」

解けてる部分から腕に巻かれた部分を取ろうと引っ張ってみる。

「わっ！」

「解けると思ってた包帯がそのまま伸びた!？」

「わ!わ!!!しかもそのままずつと伸びるんやけど!」

「おい、落ち着け」

「あ、ご、ごめんなさい」

草薙さんが肩に手を置いてくれたことで少し落ち着いた。

「で、これどのくらいまで伸びるか分かるか？」

「うづん、わからへん。永遠には伸びひんと思っけど・・・」

「まあとりあえずある程度伸びる包帯と考えておけばいいか。そろそろ帰ってくるだろうし今は元に戻そう」

「そっやね。『去れ』」

声と共に腕の包帯がカードに戻る。やっぱり不思議や。

魔法なんやって言われたらそっつて納得するしかないんやろっけど。

「とりあえず今回はあの二人のお守りな」

「えー!」

「正直今は人手が足りないんだ。綾瀬はともかく早乙女なんかは放っておいたら絶対ついてくるだろうしな」

「そ、そやかてウチだってあの二人を説得できる気はせえへんのやけど・・・」

正直言ってしまえば、ゆえの方は説得できるとしてもパルは絶対ついていくと思う・・・

「つってもなあ・・・さすがにあの二人になんて言えばいいのかなんて俺も分からないしねえ」

「うづん」

流石に二人で声を上げてしまっ。

「昼間から先生と生徒がイチャイチャするのはどうかと思うのですが」

「うおー!」「ひいー!」

「戻りましたよ、草薙先生」

いつの間に戻ってきたのかゆえが後ろに立つとった。パルも少し遅れてやってくる。

「おー、二人ともよく似合ってるぞー」

「えっへへへ、そう?」

「ありがとうございます」

二人はそれこそ時代劇に出てくるような格好をしとった。

シネマ村では無料で時代劇などで使う衣装を貸し出しているらしくて、二人は今着替えから戻ったところやった。

って言うても仮契約カードのことを二人きりで話したくてゆえとパルには進めたんやけど。

ゆえの方はよく神社などで見かけるのとはちよつと違う巫女装束。パルの方は何故か男物の装束に眼帯っていう格好や。

「亜子も草薙さんも着替えてきたら?やらないともつたいないよ」

「です」

「え……でも」

「いいんじゃないか？俺も少しは楽しみたいし」

「う、うん」

「よし決定！衣装は私とゆえにお任せってね！」

「え、ちょ、ちょっとパル!？」

「諦めるですよ和泉さん」

「なんか猛烈に嫌な予感しかせえへんのやけど――――――――――
――――――――――」

「着替えたらここに集合なー」

草薙さんも助けて――――――――――!!

(何がおきたかは想像にお任せします)

「うーん、そしたらこんなもんかなあ」

「です。派手すぎず地味すぎず」

「うっ……ひどい目にあつた」

結局服は桜が描かれている以外は普通の着物になった。
強制的に服脱がされて散々弄られた拳句、結局ウチが最初に選んだやつになるなんて……

「お、草薙さんもういるよ」

パルの言葉に顔を上げる。

「わあ……」

自分でも気づかないうちに思わず声が出た。

こげ茶色の着物と袴、それに似合わない洋靴。腰にはピストルの模型を挿しとる。

それが何故かすごい似合っていると思うてしもつた。

「坂本竜馬ですか。渋いチョイスですね」

「スタッフの人に頼んだから俺の趣味じゃないけどな」

ゆえの声に草薙さんが答える。

「お、亜子も終わったか」

「どうよ？私たちのセンス！」

「お前のセンスじゃなくて亜子のセンスだろ」

「え？分かるん？」

「早乙女が選んだのならもっと派手になるし綾瀬が選んだらもっと地味になるだろ」

ありゃ・・・ちょっと嬉しかったんやけどなあ・・・

「うん、でも亜子には似合ってると思うぞ、それ」

「え・・・そ、そうかなあ」

やっぱり嬉しい・・・かも／＼

その後は4人で刹那さんたちを探しながらいお土産を覗いたり、写真を撮ったり撮られたりしていた。

草薙さんの格好は予想以上に似合っているらしくて、途中何度か一緒に写真に映っていた。

パルは男の扮装をしているから写真を頼んでくる他学校の女の子とかに声をかけていた。全部一発で見抜かれつつたけど・・・

ゆえはゆえでよく分からないジューズを飲んどる。

ん？何か騒がしい？

「なにかあるんですか？」

相談する前に草薙さんが走っていく人を捕まえて話を聞いた。つた。

「なんか日本橋の辺りでお芝居やってるんだとさ」

「芝居？」

「知らないのか？シネマ村じゃ客を巻き込んで芝居をやるんだ。今日はなんでも借金のカタに狙われるお姫様とそれを守る侍だってよ」
それだけ言うと男の人は走っていった。

「ねえねえ！面白そうじゃん！ウチらも行こうよ！」

「だな・・・」

草薙さんの口調が変わった・・・なんかあるんや。

（多分このかを狙った敵だ。気をつける）

（は、はい！）

草薙さんがウチにだけ聞こえる声で囁いてきたのですばやく返した。

ちよつと走ると正面に人だけが見えてきた。どつやらお芝居は橋の上でやってるみたいや。

橋の入り口にはお芝居の参加者と思われる人たちが・・・

「・・・これって偶然なんかなあ？」

「だとしたら最悪だ・・・」

そこには刹那とこのかだけでなくいいんちよ達の班の人たちもいたからや。

Side out

「すみません、通して！」

人ごみを掻き分けて橋まで出ると、遠めに見たとおり雪広たちの班員、那波、村上、朝倉と刹那、このかがいたからだ。ザジと長谷川は騒ぎに巻き込まれないためか遠巻きに人混にまぎれている。

「まあ、草薙先生ではございませんか」

俺を見かけた雪広がこちらに手を振ってくるので近くに駆け寄る。

「草薙先生もお芝居参加するの？」

「ん？あー、そうか。そうだな、そうなるかなあ」

村上の問いにそう答える。どうやらこの場はそう答えておいたほうが無難なようだ。

周囲には相当数のギャラリイがあり、派手な魔法や技は使えそうに無い。しかも橋の中央には既に月詠が待ち構えていた。

「草薙さん」

前に進み出たことで刹那が俺に気づいた。刹那は新撰組の格好をされていて正直言ってしまうと夕凧が非常に浮いてしまっている。

「すみません、いいんちよさんたちまで巻き込んでしまって・・・」

「いや、俺も早乙女と綾瀬を連れてきてしまっているし同じだ。で、状況は？」

「はい、月詠が芝居に託けてお嬢様を攫おうと算段してるようです」

「これだけ目立つと神鳴流も魔法も使いづらいな」

「いえ、この格好ですし剣術や気は使っても問題ないかと。流石に魔法はまずいと思いますが」

「まあ俺も魔法戦は得意じゃないからいいんだが・・・」

「く、草薙さん・・・あの人って昨日の・・・」

俺と刹那の会話に割り込んできたのは亜子だ。俺の背中から月詠を恐る恐る覗き込んでいる。

昨日はさっきだけでへたり込んでしまったのだ。恐怖に感じるのも無理は無いだろう。

「ていうより怖いならなんでついて来るんだ？」

「だ、だってウチ…草薙さんの…パ、パートナーやしノノ」

「そういうのは自分の身が自分で守れるようになってからな」

「もう！子ども扱いせんといて！」

そう言って亜子の頭を撫でてやると手を払ってきた。うん、とりあえず昨日のことで萎縮はしてないみたいだ。

「ま、今回はかりは下がっててくれ。お前を守りながらあいつと戦える自信はないからな」

「わ、分かった」

亜子是不承不承といった感じで雪広たちのところに戻っていく。

「そちらのお話は終わりましたか？」

月詠が橋の上から声をかけてきた。どうやらこっちの話が終わるのを待っていてくれたらしい。

何気に律儀なやつだ。それともただ単に全力で殺し合いしたいだけかもしれない。あいつの性格上絶対後者だと思う。

「嬉しいわ、センパイと草薙はんを相手できるなんて・・・ほんまに一石二鳥やわ」

相変わらず間の抜けた話し方だ。だがその言動とは裏腹に二刀を既に抜き身で持ち、戦闘態勢に移行している。

「草薙さん、お嬢様をお願いします」

「分かった。命に賭けても守って見せるさ」

本来なら俺が、と言いたいところだが月詠が相手では素手の俺は相性が悪すぎる。

刹那は神鳴流の戦い方を熟知している上に一度相対している。月詠の相手には俺より遙かに適しているだろう。

「せつちゃん……なんかあの怖い……気をつけて」

このかが刹那の肩にしがみつきなから懇願するような声を出す。どうやら月詠の発する殺気のようなものに気づいたらしい。

「……安心して下さい、このかお嬢様……何があっても私がお嬢様をお守りします」

「せつちゃん……」

そう言って振り返った刹那は驚くほど優しい笑顔をしていた。このかもその顔を見て安心したらしい。

先ほどまで緊張して肩が張っていたが今は撫で下ろしてほっとしているのが感じられる。

「桜咲さん！私、二人の愛に感動いたしましたわ！」

いつの間に来ていたのか雪広が刹那の手を掴んで涙を流していた。

「私たちも加勢しますわ！一緒に木乃香さんを守りますわよ！」

「おいおいおい……」

「ツクヨミ……と言ったか！この人たちは！」

「はいセンパイ。心得てます」

月詠に喧嘩を売っている雪広を見て慌てて刹那が巻き込まないようにしよとすると月詠はそう返してきた。どうやら他人を巻き込んで戦うほど非常識ではないようだ。

「その人たちはうちの可愛いペットがお相手します　『ひゃきやこ』」

そういいながら大量の札を展開すると式神が現れた。なんとというか、見た目は妖怪なのだが小型ですごいファンシーだ。

しかもそれらが雪広たちの着物を捲っていくのだからよく分からない。まあ巻き込む意思が無いという現われだろう。

俺、刹那、このか、亜子、月詠だけが戦い（？）から離れている状態だ。

「ほな、やりましょ、センパイ」

「草薙さん、お嬢様をお願いします！」

そう言いながら刹那が一步前へ出た。と、同時に月詠が橋の手すりを蹴ってこちらに飛び込んでくる。

亜子に一度だけアイコンタクトすると俺は俺の行動を開始する。

「行くぞ、このか！」

「あ、せつちや・・・！」

「刹那なら大丈夫だ！俺らがいると邪魔になる！」

このかの手を引いて人ごみに紛れ込む。幸いギャラリー雪広たちと刹那たちの戦いに集中してあまりこちらには気を回さなかった。

人混みを抜けて出口へと向かう。

このかはまだ日本橋の方をチラチラと振り返っていた。

「心配か？」

「え？あ、そやね。うん、心配じゃないって言ったら嘘になるかなでも……」

「でも？」

「せつちゃん、嘘ついたことあらへんから」

このかはそう言って俺に笑顔を向けた。

強い奴だよ、こいつも、刹那も……毎回だがたった14とは思えない。

「と」

「ひゃー！」

このかに近づいてきた小さい幽霊を叩き落す。案外しつこいな。

「ど、どこか隠れたほうがいいんとちゃう？」

「ダメだ、バレたら追い込まれる。それより人混みに紛れたほうがいい」

このかの意見はもつともだが、数はあちらの方が多し。追い込まれる可能性がある建物に隠れる気にはならない。

走っていると大通りの一角に出た。ここなら人もたくさんいるし、なんとか抜け出せる……

「と、思ってたんだが・・・」

「な、なんなんこれ？」

そこには人つ子一人いなかった。そう、観光客も、スタッフも、エキストラも・・・

ここだけが別の世界のように静かだ。

ふと近くの建物の柱に貼ってある札が目に入った。

これは初日の夜俺が回収したものと同じ……人払いの結界か！
くっそ、逃げたつもりが完璧に敵の手の内だったってことかよ！

「このか、俺から離れるな」

「う、うん」

このかが服の裾を握ってきた。少し動きづらいが、このくらいが
丁度いい。その時、

・・・ガシャ・・・

音が聞こえた。最初は気のせいかと思った。

・・・ガシャガシャ・・・

だが、それは確実に近づいてきた。金属同士が擦れるような重い音。

・・・ガシャガシャガシャガシャ！

しかも一体ではない。複数だ。それも建物の中から！

「く、草薙さん・・・」

「絶対離れるなよ！」

バン！

建物の戸が勢いよく蹴破られた。中から現れたのは・・・武士だ。具足を身につけ、各々違う武装をした武士がざっと10人。全員が面頬をつけ顔は見えない。

「マジかよ・・・」

しかも身に着けている武器は全て刃の落とされていない正真正銘真剣の真剣だ。直撃すれば致命傷は避けられない。

「あ、危ない！」

「うお!?!?」

このかにいきなり押されたことで体制が崩れた。一瞬遅れて俺の顔があつた場所を矢が通り過ぎ、地面に突き刺さる。

「弓兵か！」

見上げると屋根の上に3人ほどの弓を構えた武士が立っていた。第二射が来る前にそいつらのいる建物の下に潜り込む。

これで矢の脅威は防げたはずだ。だが動ける範囲が限られた。その上既に包囲網が完成しつつある。

「すまん、助かった」

このかにお礼を言いながら手を握る。

「このか、ここを動くな」

「え？」

「お前は、俺が命を賭けてでも守る。そう言つたる！」

「あ、草薙さん！」

このかが止めるのを振り切り建物の影を出る。当然のように矢が降つて来た。一本目を受け止め、二本目を避けた。三本目も…辛うじて避ける！

振り返り際に受け止めた矢を屋根の上にいる一人に投げ返した。狙いはずれたが一人の右足に突き刺さり体制を大きく崩させる。それを確認するかしないかのところで地面を蹴って跳躍した。瞬間今いた場所に二本の槍がスレスレの所の空を切る。

「おっ…らあ！」

飛び上がった勢いを利用してかかって来た二人の内一人の頭に踵を振り下ろす。兜をつけていようがこれだけの衝撃を受け止めることはできなかつたようでそいつは倒れる。

そいつが手放した槍を奪い取り、大きくそれを振り回した。襲ってきたもう一人がそれをモロに首に受けて吹き飛ばす。

「きゃあ！」

悲鳴の方を見ると、一人の武士がこのかの手首を掴んで連れ去るうとしていた。

「このお！」

考えるより先に手に持った槍を手加減無しでそいつに投げつけた。

ドカーン！

槍と鎧が激しくぶつかり、その衝撃を脇腹に受けた相手が建物に叩きつけられる。

持ち上げられていたこのかが宙に舞ったが、ギリギリのところまで地面とこのかの中に滑り込んで受け止める。

「大丈夫か？」

「う、うん。それよりさっきの人・・・」

「ああ、石突の方を投げたから、しばらくは動けないだろうが命に別状は・・・」

言い終わる前に言葉が止まった。

先ほど吹き飛ばした相手がすぐさま起き上がったからだ。

「嘘だろ……」

さっきのは手加減無しに気を込めた投擲だ。いくら相手が重装備でもあの威力で吹き飛んだら普通の人間なら動けるはずが・・・

「ひっ！」

このかが悲鳴を上げた。俺もそれ（・・・）を見て悲鳴を上げそうになるのをなんとか堪える。

武士の頬面が取れていた。そこにあっただのは

…死体…だ。

崩れかけた肉からは骨、神経が見え隠れし、目は既に陥没している。

「まさか・・・」

近づいてきた一人の顔面を蹴り飛ばして頬面の吹き飛ばす。その顔も…やはり死体だった。それは動けるはずだ…こいつらは、屍だ…

痛みなんて感じるはずもない。

「このか、大丈夫か？」

「あ、あんまりあかんかも…」

抱えているこのかの顔は真っ青だ。当然だ。死体と分かっているもあんなものを近距離で見せられれば誰でも気分が悪くなる。俺もひどく気分が悪い。

とにかくこんな痛みも死も知らない連中と戦うのは無駄だ。一刻も早くこの場を去らなければならない。

「草薙さん、あっち空いてる！」

このかが俺の左の脇道を指していった。そこだけ死体武者がいない。

明らかに罠だが…背に腹は変えられない！

「捕まってる！」

「うん！」

このかを抱き上げて足に気を込める。一瞬で最高速度に達し、脇道に体を滑り込ませた。

分かれ道に差し掛かると正面に先ほどの連中が現れる。だが積極

的に攻撃はしてこず、道を塞ぐように立ちふさがっているのが分かる。明らかにどこかへ誘導されている。

「わ！前、前！」

「分かってる！」

このかを抱えた状態では戦うことも出来ないし、戦ってるうちにさっきの連中に追いつかれるかもしれない。

何度もそれを繰り返すうちに、俺たちはシネマ村の名物の城の入り口まで追い込まれていた。

「ご丁寧にも人払いの結界が張ってあるようで人っ子一人いない。」

「あれ？なんか動き止まった？」

だろうな。敵の目的は俺たちをこの城の上に追い上げることだ。ならばこれ以上の追撃は無用だろう。

死なれたら元も子もない。

「立てるか？」

「う、うん」

このかを下ろして囲んでいる集団に一步近づく。

ザン！

長さ3mはあるつかという長槍が一齐に俺に向けられた。おそろくこれ以上進んだら命の保証は無いという絶対線。

俺一人なら突破も可能だが・・・槍兵の後方には弓兵も控えているのが見える。無傷っていうのは難しそうだ。それに・・・このかを残して逃げるなんて選択肢は初めからない。

「とりあえず追ってはこないみたいだ。ここに入ろう」

「そ、そやね」

長い階段をゆっくりと上がる。その先に短い一本道の先に部屋が一つある。

「ここなら隠られるんとちゃう?」

「だといいいけどな」

襖を開ける。誰もいないことを願って...

「ふふ...ようこそこのかお嬢様」

まあそんな都合よく行かないわけで...

その場には天ヶ崎 千草と白髪の少年がいた。それぞれの後ろには前に見た熊と札の張り付いた怪物を従えている。

「あの二人は上手く追い込んでくれはったようやなあ」

あの二人...やはりさっきの連中は月詠が呼び出した連中ではなかったのか。ということは死体を操っていた新手がもう一人。

「さ、お嬢様の担任はん？お嬢様をこちらへ渡してもらおか？」

「残念ながら御免被る」

「ほな、力づくで渡してもらうまでや！」

天ヶ崎千草の声と共にクマが飛び掛ってきた。

「このか！逃げるぞ！」

「ひゃあ！」

抱えたこのかが悲鳴を上げる。

襲ってくるクマには目もくれず城から飛び出そうと手摺に足をかけた。

ドスドスドス！

飛ぼうとした瞬間手摺に複数の矢が突き刺さった。

どうやら外に逃がす気はないらしい。

「くっそお！」

結局逃げ場は屋上しかないのか！

悔しがりながらも屋上へと跳躍する。

そこからはシネマ村が一望できた。日本橋の上では刹那が未だに

月詠と激闘を繰り広げている。
どうやら救援は望めそうも無い。

「逃亡劇もここまでやなあ」

さて、どうする…

天ヶ崎 千草がゆったりと上ってきた。

先ほどの後ろにいた怪物はぱっと見だけでも50キロはあろうかという剛弓を引き絞りこちらを狙っている。

「きーとるか！？お嬢様の護衛、桜咲刹那！！この鬼の矢が二人をピタリと狙っているのが見えるやろ！お嬢様の身を案じるなら手は出さんときー！」

天ヶ崎千草が刹那に叫んだ。どうやら戦わずして刹那を抑えることを選んだということか。

無駄な労力は惜しむタイプらしい。

「ふふ、草薙、とかいうてましたか…一歩でも動いたら射たせてもらいますえ。さあ、大人しくお嬢様を渡してもらおか」

「く、草薙さん…これってお芝居…とちやうよね？」

「残念ながら…な」

確かに残念な状況だ。逃げ道はなし。動けば矢が飛んでくる。だが…ここなら人の目は無い。

遠慮なく奥の手を使わせてもらおう！

右手に魔力を集中…いつもよりゆっくり…気づかれないほど徐々に…

呼ぶのは…ケリアだ。あいつの防御力ならこいつらを十分凌ぎぎれる。

そのとき…

一瞬だが強い風が吹いた。

「ひゃ」

「つとー！」

このかが風に吹かれて体制を崩したので思わず手を伸ばして後ろを向いていた。

「お、おおきにな、草薙さん」

「あ　　！なんで射るんや　　！」

背後から天ヶ崎千草の叫びが聞こえた！

しくじった！

今ので右手の魔力も霧散しているし、何より後ろを向いていて矢の放ったコースが分からない！

「くっそお！」

咄嗟にこのかを覆うように仁王立ちになり来るはずの衝撃に備える！

ダン！

矢が何かに突き刺さる音が響いた…が体に異常がない？

振り返ると、いつの間に来たのか…そこには刹那がいた。

どうやら俺とこのかに当たる前に刹那は割り込んだらしい。

左胸の位置には矢が貫通しており、貫通した鏃が刹那の血で赤く染まっている。

そのまま矢の勢いを殺しきれず刹那はたたらを踏んで数歩後ずさった。が、そこは既に屋根が無かった。

「くっ！」

手を伸ばしたが、すんでの所で届かない！

刹那の体が屋根から見えなくなる。

そして、俺が飛び込もうとするより早く…

「せ……せつちゃん!!!!!!」

このかが屋根から飛び降りた!

「刹那!このか!」

俺の叫びが虚しく当たりに響き渡る。

このかが刹那に追いついてその体を守るように抱きしめたのが見えた。

その時……

辺りが光に包まれた……

このかを中心にその光は発せられていた。このかと刹那は徐々に落下スピードを落とし、堀の水に落ちる前に停止する。

刹那を貫いていた矢は半ばで折られて抜け落ち、穴が開いて血が流れ出ていた傷はいつの間にか塞がっていた。

そのままこのかが刹那を抱えたまま近くの地面に降り立った。

刹那はすぐこのかに何か話しかけているようだ。どうやら完全に完治したらしい。

「あれが……このかの力か」

本来左胸が貫通されれば致命傷と言える傷だ。それを治すなんて・

「ちっ、逃げられてもった」

天ヶ崎千草が呟きが聞こえた。

「しかし・・・あれがこのかお嬢様の力か・・・さすがやな」

そう、まだこいつはこの場を去っていない。今なら捕らえることが出来るかもしれない。

一瞬で考えはまとまった。天ヶ崎千草がこちらに気づく前に叩く！

気を足に纏い一瞬で天ヶ崎千草と距離を詰める。

「なあ！？」

今更気づいた天ヶ崎千草が式神を前に出そうとするが・・・遅い！

相手の式神を避け、気をこめた上段蹴りを放つ。

振るわれた足が天ヶ崎千草の胴を完全に捉えていた・・・が・・・

「はや、お盛んどすなあ」

「ちい！」

いつの間にか月詠が戻ってきていて、俺の蹴りを止めていた。しかも刀ではなく腕で、だ。

「た、助かったで、月詠はん」

「ほな、草薙はん？またの機会に」

「逃がすと思つてんのか？」

月詠が前に出て天ヶ崎千草が後ろに下がる。どうやら撤退してくれるらしい。が、ここで隙を見せれば背後から襲われる可能性もある。

「はい、どうやら目立ちすぎたようで。もうすぐ警備員さんが来るみたいどすえ？草薙はんも厄介ごとには巻き込まれとっないんちやう？」

「一番の厄介ごとが今更何を・・・」

とは言え・・・月詠の言うことも最もだ。この後の行動もあることだし、ここで職務質問なんかを受けて時間を食うのは避けたい。

「ほな、さいなら」

流石に今回は空から逃げるわけではない。二人は人気の無い路地裏のほうに跳躍していった。

完全に気配が消えてから張っていた気を解除すると、俺はその場に座り込んだ。

正直今回は本当にやばかった。

ここで相手が退いてくれなかったらやばかったのはこちらかもし

れない。それにしても戦力の大半は送り込んできたんじゃないだろうか？

「おーい、旦那！」

「うん？」

何か聞き覚えのある声が足元から・・・

「なんだ、カモか」

そこにはいつからいたのかカモがいた。ん？

「お前、ネギ君と一緒にいたんじゃないのか？」

「それなんすけど・・・とりあえず移動しましょうや！さっきの相手が言ってたの本当みたいですよ！」

カモの言葉に耳を澄ますと複数の人間が階段を駆け上がってくる音が聞こえた。どうやら警備員が本当にきたらしい。

「分かった。つかまれ」

「言われなくとも！」

本当に言う前からカモは俺の肩に乗っていた。それを確認すると俺も人気の無い路地に屋根を蹴って跳躍する。

とりあえず刹那たちと合流するのが先と考えて大通りに出ようとすると携帯が鳴った。

刹那からだ。

「怪我は大丈夫だったか？」

『はい、お嬢様のおかげで』

「そうか、これからどうする？」

『追っ手も多いですし、お嬢様の実家に向かいたいと思います』

「分かった。なら後で合流しよう」

『はい、わかりました。では』

そう言って刹那は通話をきった。

「で？お前はこんなところで何してたんだ」

「それがよう・・・」

カモが話した内容を要約するとこうだ。

ネギ君たち一行も襲撃を受け、あわやというところで宮崎が乱入、アーティファクトの能力で犬上小太郎という敵方の少年を退けた。

(なんでもこの少年、ゲームセンターでネギ君に戦いを挑んできた少年らしい)。

その後、ネギ君が刹那から貰っていた式神を使い、カモと共にこちらの様子を見に来たのだが、城に登っていった俺たちを追いかけようとした時、式神自体があゝの死体武士集団に切られたらしい。

後はそのまま上ってきたら月詠たちが撤退する寸前の俺と出会ったということだ。

「いやー、いきなり刀振り上げられたときはマジ死ぬかと思ったぜ」

「とりあえずあっちも無事なんだな」

「おう、オレツチの作戦でバツチりさ！」

肩の上でタバコを吸い始めるカモを見ながらとりあえず俺は肩を撫で下ろす。

宮崎が参戦してしまったのは…あの二人に付いて行ってしまった時点で予想していたとはいえやはり心苦しいところはあるが…怪我が無いならまだいい。

問題はあの武士軍団だ。死体というのは厄介だ。特に魔力で操られてるようなやつらは術士が倒れないと動き続ける点アンデット系の化け物より厄介、らしい。エヴァンジェリンの受け売りだからよくは分らんが…

あいつらの対処法も考えなければなるまい。

「とりあえず行くぞ。案内よろしく！」

「おう！……って旦那！落ちる落ちる！」

S i d e o u t

S i d e ? ? ?

「吹いてた割りに案外簡単に諦めたな」

戻ってきた天ヶ崎千草と月詠を見て俺はそう言い放った。

「ウチは仕事はこなしましたえ」

「それにあの白髪の少年もあまり役に立っていなかったようだが？」

「あゝん、無視せんといってくださいよ」

月詠を無視して話を続ける。

「そんなこと言うたらあんたの死体集団も大して役に立ってなかったようやけど？」

天ヶ崎千草が苦そうな顔をして食いついてくる。

「言つたる、俺の力じゃ魔力が足りないんだ。こんな霊脈でもなんでもないところじゃあれが限界さ。むしろ、追い込んでやったんだから感謝くらいして欲しいものだが？」

「逃がしたら意味無いやろ！はあ・・・ま、今回はこのかお嬢様の力を見れたからええわ。担ぎ上げるのにはいい神輿と分かっただけでもよしとしましょ」

天ヶ崎千草が背を向けて歩き出すのでそれに追従する。

「どつせあいつらは本山に向かうやろ。それまでが勝負……」

「その必要はないよ」

一番後ろを歩いていた白髪の少年が答えた。

「どつという意味や？」

「言ったとおりの意味さ」

「まああんたが言うんやったら何かあるんやろうけど……」

それだけ言うと少年はまた黙り込んでしまう。別に何を考えているわけでもないような目が俺を見ていた。

「何か？」

「いや、なんでも」

いや、見ていたのは俺のほうか……

「とにかく、本山の靈力を利用すればアンタの能力ももっと使えるようになるやろ。今度はもっと頼むわ、赤坂はん」

「ふん」

Side out

最終決戦の為・・・（後書き）

はい、というわけでシネマ村戦でした。

んー、微妙！和泉の力も出せてないし新しい敵の使い方もなんかイマイチのような気が…でもなんかこれ以上思いつかない…
いわゆる限界というやつですか…
やはりまだまだ修行不足のようです。精進します。

さて、今回から新しい敵、屍が出てきますが、これは半自立型の死体人形、みたいな位置づけです。

一応和泉の能力は決定しているので次の話は余談的に解説をいれま
す。
本編じゃなくですいませんが、赤坂の説明も入れる予定ですのでこ
容赦ください。

あ、あと和泉のほかの人の呼び名は完全に作者オリジナルです。早
乙女のことパールって呼んだり綾瀬のことをゆえって呼んだりしてま
すが、自分の呼んだ限りだとこの三人名前を呼びあつてるシーンが
無かったもので・・・
呼びあつてるシーンがあつたとしたら教えてください。作者の調査
不備なのですぐ直します。

誤字脱字表現のミス、矛盾についての指摘は遠慮なくお願いします。
ではまた次回お会いしましょう。ノシ

設定（前書き）

タイトルどおり本編ではありません。

設定

名前、草薙 亮

年齢、21

身長、178cm

体重、67kg

属性、火、風

発動キー、『フラマ・ブラスト・マテリアル』

アーティファクト、無し

容姿、ショート黒髪、茶色の瞳、中肉中背と見た目は至って常人。学校では主にスーツ。私服は非常にラフなものを好む。（例、ジーパンとシャツのみ等）

詳細

本作の主人公。転生者。先代神様のミスで生まれる世界を間違えてそのまま生を受け、21のとき交通事故により死亡。

その後現在の神様の進めにより転生を選択、ネギまの世界に前世界の年齢のまま生を受け、ひよんなことから3-Aの副担任を務めることとなる。

公私混同を一切しないため学校の時と私生活の時の口調が激しく変わる。そのため私生活で先生と呼ばれるのを嫌う。

一度死を経験しているため当初自分の命の価値を他人より軽視していたが和泉の言葉により今の命を実感するようになった。

それでも生徒や知り合いを自身の命より重要視しており、自分の命を賭けてでも守りたいと思っている。

一方的な見方の『立派な魔法使い』を疑問視していて、魔法先生や魔法生徒とは偶に衝突することがある。

戦闘は主に我流の足技での近接戦闘、魔法による遠距離戦闘、召喚による支援戦闘と全距離での戦闘が可能。

使用魔法

・魔法の射手、『炎の連弾』

原作効果通りの初歩の戦闘用魔法。現在の草薙が出せる本数は19本まで可能。

自分の意思で威力調節が可能で、最大火力時はネギの魔法の射手ならば1本で2、3本の魔法の射手を打ち消すことが出来る。

無詠唱で放てるのは現在一本のみで、草薙自身の気を込めた蹴り一発分の威力がある。

・『収束・炎の〜矢』

名前の通り炎の連弾の集中版。連弾と違い多方向に飛ばすのではなく一点に集中することで一点突破に特化した呪文。

一点に集中させる分威力は高いが避けられやすい。そのため草薙は妖怪が集中している部分に放つことでその弱点を補っている。

・『風炎旋風・炎熱旋風壁』

原作の『風花旋風 風障壁』と同系統の呪文。発生時間も3分程度と同じくらい。

術者の周りに巨大な炎の竜巻を発生させることで身を守ることができるが、術者も中心にいるため攻撃を行えない。

特技

・気配探知

意識を集中させることで生き物の気配、魔力を探ることが出来る。意識の集中度合いで気配探知の精度も上下し、最大で自身を中心に麻帆良学園全体程度まで探ることが出来る。

しかし探る相手が気配を消していたり、ロボットやゴーレム無機物だった場合は引つかからない。

オリジナルアーティファクト

使用者 和泉 亜子

名前 『聖母の包帯』

特徴

- ・使用者を中心に半径5mまで自在に伸び、変化する包帯（包帯自体の大きさは通常のものと同変わらない）
- ・使用者の範囲内ならば包帯の長さは無限。
- ・外傷のみの治癒能力があり、傷に巻きつけることで致命傷以外を治すことが出来る。（致命傷であっても止血は可能）
- ・範囲内の人物に巻きつけることで対象者の戦意、敵意を失わせることが出来る。（自身にこれらの感情がないときに限る）
- ・包帯自体にも強力な拘束能力があり、効果範囲5m以内なら相手の動きを制限する使い方も可能。
- ・複数の展開が可能（ただし使用者の能力次第）
- ・効果範囲から外れるとただの包帯と化す。

オリキャラ1

名前、赤坂 一樹

登場時期、修学旅行編にのみ

年齢、25前後

身長、170前後

体重、不明

容姿、痩せ気味。黒髪の長髪を後ろで縛っている。

詳細

死んだものを蘇らせる研究を行っている術士。その過程で死体を使役する術を身に付けた。

自身の力では10体前後の名もない武士を使役するのが精々で力不足に悩んでいた。

禁忌の研究のせいで先祖の代から一族もろとも山奥に監視をつけられて幽閉されていた。

近衛 木乃香の力を使えるという天ヶ崎 千草の話に乗り山を秘密裏に脱出し参戦。

天ヶ崎 千草の目指す関西呪術協会の復興や西洋魔術師を追い出すことなど端から頭になく、自身の研究が完成することを一に望んでいる。

完全な人物の蘇生を目標としているため、死体にも擬似的に神経を再現し人間らしさを表そうとしている。

冷静な戦略家で、足りない魔力を知識で補っている。

屍（死体）

赤坂 一樹の使役する死体。痛覚、触覚などは無いが神経は擬似的に魔力で再現されており、怪我をすると怯んだり動けなくなったりする。

それでも体の一部がなくなっても動きを止めることはない。

召喚されるときは全員が武士姿で頬面をつけているため、初見だ

と死体と気づけない。(相手が倒したと油断させる)

武装は3m前後の長槍、太刀、弓矢など戦国時代の主力武装。

沖田 おきた 総司 そうじ

赤坂一樹が召喚した死体。新撰組の中でも斉藤一と同じく最強の一角を担っていた剣客。

赤坂自身の魔力では足りず、近衛このかの魔力を擬似的に足して召喚された。沖田総司が使っていたとされる業物『大和守安定』を媒体に呼び出されており、その関係上他の死体は呼び出すことが出来なかった。

魔力により擬似的に人格が形成されており、他の死体とは違い自身の意思を持つため赤坂一樹を守ることを第一主命としている。そのため戦わなくていい時は戦わないという赤坂の命令に背く面も見せる。

戦闘時以外は口調の優しい優男だが、神楽坂アスナを躊躇なく殺そうとするなど新撰組らしい非情な一面もある。

気と魔力の保護もなく、女王ディアと剣の技術だけで渡りあうという正に最強の名に恥じない強さを誇り、龍宮の銃弾さえも切り落とす腕を見せた。

最後は殺されそうになっていた赤坂一樹を救い、魔力供給が切れただために体の維持が出来ず消滅。

設定（後書き）

設定集です。

今回以降、細かい設定などはここに随時追記という形で付け足していくのでよろしく願います。

追記する場合はちゃんと本編の前書き、後書きで告知するのでご心配なく。

27話直しました。最終

『最終決戦の為…』

<http://ncode.syosetu.com/n6873n/32/>

を修正しました

注)

見てない人のために簡単に説明します。

自分の小説を読んでいて矛盾点が大きくなってきたので物語が進む前に最初から書き換えることにしました。
ご了承ください。

現在の修正点

・草薙 亮の「原作を覚えているという」設定自体の無効化による文章の修正。

- ・生徒の名前呼びを一部苗字化。
- ・統一性の無かった高畑・T・タカミチの呼び方の統一。
- ・生徒の呼び方の読み方の一部変更。(例、明日菜 アスナ等)

6月15日から修正初めて約一ヶ月、ようやく本編全ての修正を終えることが出来ました！

ここまで作者の勝手にお付き合いくださり本当に申し訳ありません。そしてこんな作品を見続けてくれてありがとうございます！

既に修学旅行編は書き終わっているので誤字脱字の見直し修正が終わり次第上げていきたいと思えます！

これからも至らぬ点はあると思いますがよろしく願います！

偽りの平和の為…（前書き）

お待たせしました。正真正銘本編です。

偽りの平和の為…

Side 草薙 亮

「よう！3人とも無事か！」

「「「草薙さん！」「」」

カモの誘導通り鳥居を抜けてネギ君、アスナ、宮崎のいる場所へとたどり着く。ネギ君は今すぐ杖で飛び出しそうな勢いだっただよっただ。

本来式神ですべて見ていたものを切られたため途中で映像が途切れたためだろう。

宮崎もカモの言ったとおりいるのようだ。後でしっかり覚悟の程を聞いておかねばなるまい。

「カモから話は聞いた。ネギ君、大丈夫だったか？」

「ええ、大分回復できましたしもう大丈夫です。それよりもこのかさんたちは！？」

そう言っただち上がろうとしたネギ君がフラフラとしている。

「おっと」

「あ、す、すいません」

倒れそうになったので左手で抑えてやると弱弱しい声でそう答えた。どうやらかなり消耗したらしい。

今日はこれ以上の連戦は無理かもしれない。

所帯となっている。

もうね、この展開やめねえ？このかがいたとしても刹那のスピードに追いつくとかさあ・・・相変わらずこのクラスはスペック高いやつが多すぎるんだよ！

おまけに・・・

「なんでお前も付いてきてるんだ・・・危ないって言っただろ！」

放っておいた俺にも責任の一端はある。だから早乙女、綾瀬、朝倉はまだいい・・・いや、本当は良くないけどこれは仕方ないとしてよう。

さらに重なるイレギュラー・・・それは和泉亜子がいることである。

「せ、せやかて・・・ウチも草薙さんが心配やったんやもん」

「う・・・だからってなあ・・・」

その涙目で上目遣いはずるい。これはガチでずるい！

涙は女の武器だというのは良く言ったものだ。きつと言ったやつは余程女にこの武器を使われたに違いない。

しかしここまで来た以上ここで帰す訳にはいかない。帰る途中で人質に取られたらそれこそ危険にさらすことになる。

「俺の言うことは絶対聞け。それが条件だ」

「う、うん！おおきにな！」

くっそう・・・嬉しそうな顔しやがって。そんなんじゃ守らざるをえないじゃねえかよ。

「草薙さん、申し訳ありません・・・ついそこで捕まってしまいま

して」

「ああ、うん。お前のせいじゃねえよ。どうせ朝倉あたりの仕業だろ？」

「よ、よく分かりましたね」

刹那が驚きの顔をしているがこいつらの中で追跡能力をもっているのなんて朝倉くらいだ。

「実はこれをカバンに入れられていたらしくて・・・」
「携帯電話？」

ああ、GPSか・・・まあそれは分かったが刹那に気づかれないでバックに携帯を仕込む朝倉もすごい。バカだけどすごい。

「くっしゅん！」

「んー？朝倉風邪？」

「ずず、いや。誰か私の噂してるんじゃない？」

声に出して無くてもそういうのあるんだな。

「まあ次から気をつける」

「は、はあ」

思った以上俺が怒らなかつたのが不思議なのか刹那が不思議そうな声を上げる。これに関しては刹那のせいじゃないしなあ。ここで刹那を怒るのはお門違いというものだ。

しっかし朝倉もなに考えてんだ？

今朝あんだけお灸を据えたのにまさかもう忘れたとか言うわけじゃねえだろっな？

いや、来ているものはしょうがない。朝倉がどんな考えであろう

がそれは朝倉自身が望んだ結果だろう。

ならば俺は朝の宣言どおり守ってやるだけだ。ちょっと重労働かもしれないがああいった手前約束は守る。

むしろこの状況を生み出したのは全て俺のせいなのだ。

今考えれば防ぐ手立てはいくらでもあった。黙ってないで前もって適当に理由を付けていればわざわざこいつらが追ってくることもなかったし、宮崎もネギ君とアスナを追ってくることはなかった。いや、まあこいつらなら内緒で追ってきそうな気もするけどそれはまあ…

うん、ね。

後ろにいる連中に目をやる。

宮崎が今までであったことをしどろもどろになりながらも話しているようだ。魔法のことについては伏せているみたいだけど。

その顔は笑顔だ。綾瀬や早乙女と本当に仲がいいのだと改めて教えさせられるもので、俺も改めてこの笑顔を守りたいと決意を固めるのに十分なものだった。

しばらく歩くと巨大な寺の門にたどり着いた。

どうやら到着らしい。なにか不思議な感じがするのは恐らく本山の結界のせいだと思う。

『よーし！レッツゴー！！』

そして事態を把握してない連中が当然のように突撃していく始末…

うん、まあこのかの父親が関西呪術協会の長だということは学園長から聞いていたがまさかここまでの規模とは・・・

「今、御実家に近づくのは危険だと思っていたのですが……先程はそれが裏目に出してしまったたようですね」

先ほどというとシネマ村のことだな。毎度のことだが刹那はなんでもかんでも自分で背負いすぎる所がある。

責任、といえば聞こえはいいかもしれないが、中学3年生の女の子が背負うものではない。

「アホ」

「く、草薙さん？」

「また自分のせいであ、とか思ってたんだろ？そんなこといったら戦力配分を間違った俺やネギ君にも責任がある」

「し、しかし私は・・・！」

「ま、同じ過ちを繰り返さなきゃいいだけさ。俺もお前もな」

「ちょ！だから頭をかき回すのはやめてください！」

グシャグシャと髪の毛を掻き回してやると刹那はいつもの調子で振り払ってくる。

「ま、まあとりあえず・・・総本山にさえ入ってしまえば安全です」

俺にかき回された髪の毛を直しながら刹那が言った。

まあ確かに。門をくぐってから当然敵意は感じないし総本山ならば腕利きの味方がいるはずだ。それこそ俺たちより強い奴もかなりいるだろう。

実質俺たちの仕事はここまでということだ。

「二人とも、ウチの実家おつきくて引いた？」

このかが少し寂しそうというか、心細そうに尋ねてきた。

「え？ ううんっ……ちょっとビックリしたけどね。私はいいんちよで慣れてるし」

あ、そうか。そういえば雪広は財閥の娘で超がつくお嬢様なんだっけ。昔からアスナと付き合いもあるみたいで前もネギ君と行ったと聞いた。

「んー、俺は覚悟していたつもりだったけど……」

う、このかの視線が気になる……

「この中で鬼ごっことかかくれんぼとかしたら時間かかりそうだなー」

「ほへ？」

気の利かない回答ですんません。

「……く……ふふふ……よ、よりもよって……そんな子供っぽい感想なん？」

「笑うなよ……言った俺が恥ずかしくなってくる」

このかが笑ったから結果オーライってことでいいよね？

しかし広い。坪で数えるよりよくテレビで言う東京ドーム単位で数えたほうがよさそうなくらい広い。

ちなみに東京ドームの面積は46、755平方メートルで……

って言われてもピンとこないな。小さいころ調べてそれだけは覚えてるんだけどな。

とりあえずは関西呪術協会の長兼このかの父親、近衛詠春さんに会うために建物の中に案内された。

建物内はこの時代とは思えないつくりだった。それこそ平安時代をモチーフにした時代劇の中にも迷い込んだようだ。

周りの人も皆式服（巫女服って言ったらまたこのかに笑われた）だし。

謁見の間、とでも言うのだろうか。本殿と思われる建物のただっ広い部屋に案内された。

四方はいつも使ってる教室の由に4倍、5倍はあり、端には等間隔に和楽器を持った人や弓を携えている人など様々だ。

部屋の正面奥には階段があり、おそらくそこから詠春さんが降りてくるのだろう。

「うひょー、こりやすごい歓迎振りだねえ。何かあんの？」

「は、はい。実は僕修学旅行とは別に秘密の任務があつて・・・」
「ネギ君、秘密って意味知ってるか？」

早乙女の言葉にほいほい答えるネギ君の頭に拳骨を落として言う。

「す、すいませえん・・・」

涙目になっているが自業自得だ。

とりあえず部屋の中央部分には人数分の座が用意されているのでこのかに促されて俺たちは適当な場所に座った。

ネギ君が前列の左端に座ったので俺は刹那の隣の右端を選んで正座をする。

前列には右から俺、刹那、このか、アスナ、ネギ君という順番になった。ちなみに後列はあまり関係ない亜子、早乙女、朝倉、綾瀬、宮崎という順番だ。

あまりうるさくするのもどうかと思うのだが後ろの組は周りを見回して色々と喋っている。その気持ちは分からなくもないが少し自重して欲しい。

俺たちが座ってから一分経つか経たないか暗いで正面の階段から木の軋む音と共にメガネをかけた男性が現れた。

装束は他の人たちと同じ式服だ。そして多分この人が近衛詠春さんに違いない。

「お待たせしました。ようこそ明日菜君、このかのクラスメイトの皆さん、そして担任の先生方」

「お父様！ 久しぶりやー！」

「ははは。これこれ、このか」

ふむ、やっぱりそうか。このかがタツクルのように抱きついたのを見て予測が確信となる。

そう思うとこのかと雰囲気似ているような気がする。

「し、渋くてステキかも……」

アスナ・・・お前のオジン趣味は悪いとは言わんが親友の親を好きになるとか言うのだけはやめろよ。

まあでも、アスナの言うとおり詠春さんはぱっと見ても痩せ身で顔の彫りも深い。服さえ変えればかなりいい感じのオジサンとなるだろう。

そんなことを考えているとネギ君が立ち上がって詠春さんの前に進み出た。

「東の長、麻帆良学園学園長、近衛近右衛門から西の長への親書です。お受け取りください」

「確かに受け取りました。ネギ君、大変だったようですね」
「い、いえ」

詠春さんが親書を受け取り中身を確認する。

最後の一枚を見て少し笑ったような困ったような顔をした。どうせまた学園長が変な内容でも送ったんだろ。互いに立場があるといえ義理の息子だ。この状態に言いたいことがたくさんあるんだろうしな。

「……いいでしょう。東の長の意を汲み、私達も東西の仲違いの解消に尽力するとお伝えください。任務御苦労！ ネギ・スプリングフィールド君！！」

そう言っつて詠春さんが微笑んだ。

「あ………はい！」

心底嬉しそうな笑顔でネギ君が答えた。

そしてなんかしらんが朝倉と早乙女に背中をバンバンやられるネギ君。

お前ら絶対中身分かってないだろ。いや、まあいいんだけど。分かったら魔法に関係することになっちゃうしな。

しばらくはそれを見ていたが流石にまだ話の途中だ。

「おい、お前らそろそろ座れ。まだ話は途中だぞ」

「いえ、元気なのは良いことですよ。さて、今から山を降りると日が暮れてしまいます。君達も今日は泊まって行くと良いでしょう。」

「歓迎の宴を御用意致しますよ」

「おおー！」

「なんか知らんがラッキー！」

朝倉と早乙女、お前ら後で説教な。

「あ、でも僕たち修学旅行中なので帰らないと・・・」

「それについては心配ありません。私のほうで身代わりを立てておきましよう」

まあ何にせよこれで終わりだ。色々あったがまあ総じて何とかなつてよかった。

夜、俺たちの目の前には豪勢な料理の数々が並んでいる。正直見るのも恐れ多いほどの中身だ。

学生や俺みたいないな一教師が一生に一度拝めればいいというほどの品物の数々。流石というべきか・・・それともこのかがいるからなのか。

そんなことはどうでもいい。折角出されたものだ。残しては勿体無い。

というかどれも美味いから残すわけではない！

「ん？」

ふと顔を上げると、綾瀬の手元にある飲み物が目に付いた。他の皆が用意された飲み物を飲む中で綾瀬は紙パックが一つ持っていた。そこには・・・旅館で見た『あの』文字が書かれていた。

「『サボテンの原液』・・・・・・・・」

まだ飲んでるのか？ っていうかこの場でも飲んでるのか。いや、確かに綾瀬は毎回微妙な飲み物を飲んでいる。

さっきここに来る道中も『ラストエリクサー 微炭酸』とかいうものを飲んでいたしそれは普通である。いや、周りから見たら普通じゃないのかも知れないがともかく綾瀬にとってそれは普通なのだ。しかし『サボテンの原液』だぞ？ そんなに気に入ったのか？

そんなことを考えていると綾瀬が俺の視線に気づいたのか俺のほうを見た。

そして何を思ったのか自分のバックを漁り始めた。

そこから現れたのは・・・『サボテンの原液』・・・?!
まさかの買いだめ！？ それとも罰ゲーム!?!?!

そんなことを考えていると綾瀬がわざわざ立ち上がって俺のほうに近寄ってきた。

「……………」
「……………」

そして無言で俺に『それ』を差し出してきた

「……………」
「……………」

え！？俺にどうしろと！？

俺が戸惑っているのに気づいたのか綾瀬が口を開いた。

「差し上げます」

「え？」

いや、うん。空気で分かってたけどね？でもなんで？

「いや、悪いよ。綾瀬が自分のために買ったやつなんだろう？」

うん、それに俺はそんなものいらない！そんな怖いものはいらないんだ！マジで！

814

「図書館島の……………」

「うん？」

「図書館島のお礼です。まだ助けてもらってしてませんでしたから」

礼を言うのが恥ずかしいのか綾瀬の頬は少し赤く染まっている。

それはいいんだ……………」

いやまあ確かにそうだけどそんなこと気にすることないって言うか。

「そんな気にすんな。当然のことをしたまでだ」

「貴方はそれでよくても私の気持ち収まらないんです。ですからどうぞ」

「いやだから……………」

「どうぞ」

「綾瀬さん？」

「どうぞ」

「あや・・・」

「どうぞ」

これはあれだ・・・ドラ エでいう無限ループってやつだ。

『はい』 or 『いいえ』の選択肢は出てるのに『はい』を選択するまで終わらないという特有のやつだ！

ちくしょう！いくらド クエの世界に憧れてたとは言えこんなとこまで再現しなくてもいいつつうの！

「ありがたく頂戴します」

「・・・・・・・・ん」

俺の手に渡る『サボテンの原液』・・・

「えっ……と」

そして見つめてくる綾瀬。 えっとまさか飲むところまで見守ると？

「なあ」

「はい？」

「これどんな味すんの？」

「独特な味がします」

「例えて言つと？」

「サボテンの味がします」

お前サボテン食ったことあんのか！？っていう突っ込みは無しにしよう。それに綾瀬なら普通に「あります」と答えそうで怖い。

ええい！ままよ！毒を喰らわば皿までだ！言葉の使い方違つ気がするけど気にするな！

紙パックの横についているストローをブツ刺し心を整える。

途中まで吸い上げて・・・思わず口を離しそうになった・・・

(赤い！？)

そう、赤いのだ。サボテンの葉は緑なのに赤い・・・もしかしてサボテンって摩り下ろすとこんな色になるのだろうか？

乗りかかった船だ。これは飲むしかあるまい！
再び呼吸を整えて一気に吸い上げた！

「むぐ！」

こ・・・これは・・・

(置！？いや、ザリガニ・・・つかザラザラ！？)

思わず吐きそうになるのを思い切り飲み込む。

「どつですか？」

「・・・」
「・・・サボテンだった」

「ですよね」

それ以外にどう言えと！？

隣に座っている刹那が何故かこっちをすごい興味深そうに見ていた。

そして現在俺の頭は現在メダパニ状態だ。というわけで…

「綾瀬、刹那も飲みたいみたいだぞ？」

「うえ！？」

「そうなのですか？ではお一つ」

「い、いいいいいい、いえ！私は・・・！」

クサナギ は こんらん している！

慌てて後ず去る刹那に俺と綾瀬がにじり寄る。

「遠慮することはありません。まだ予備はたくさんありますから」

「だそうだ。是非ともお前もサボテンを味わってみるといい」

「いえ！ですから私は本当に！」

「問答無用。綾瀬、やれ」

「らじゃーです」

逃げようとする刹那を俺が捕まえて、綾瀬が新しい紙パックを開ける。

その間に俺が刹那を後ろから羽交い絞めにする

「ステンバーイステンバーイ」

「や、やめてください！は、離してください！」

「ステンバーイステンバーイ」

「はにゃひいてくだひゃい！」

中々綾瀬もノリがいい。

綾瀬が刹那の口を開けて・・・

「「テイクオフ」」

こういつ時の綾瀬は非常に空気が読めるのです。綾瀬が長さんに一礼して元の席に戻るのを確認してから再び向き直る。

「わざわざ申し訳ありません」

「いえ、あいつらを巻き込むわけにはいきませんから」

詠春さんはそう言って俺から刹那に視線を戻す。

「……この二年間、このかの護衛をありがとうございます。私の個人的な頼みに応え、よくがんばってくれました。苦勞をかけましたね」

なるほど、このかの護衛はこの人の指示だったのか。詠春さんの言葉からは心から労いの言葉を掛けているように感じた。

「ハッ……いえ。お嬢様の護衛は元より私の望みなれば……もったいないお言葉です。し、しかし申し訳ありません。私は結局、今日お嬢様に……」

「話は聞きました。このかが力を使ったそうですね」

「ハイ。重症のハズの私の傷を完全に治癒する程のお力です」

「……それで刹那君が大事に到らなかったのならむしろ幸いでした」
そこで詠春さんはネギ君に視線を向けた。

「フフ……このかの力の発現の切きっかけは君との『仮契約』かな？
ネギ君」

「おそろくは……」

「え!?!」

ンションではしゃいでいた。

え？これって酔っ払ってないか？亜子に至っては目回して潰れてるし……

でもあいつらにアルコールなんて出てないよなあ……

ちなみに俺は成人なのでコップには甘酒が入っている。

んー、よく雰囲気酔うとかは言うけどそういうやつか？ていうか雰囲気酔うって本当にこんな酔っ払いみたいになるのか？

もういいや、考えんの面倒だ。

「君は副担任の草薙君でしたよね」

刹那との話が一通り終わったのか詠春さんが俺に話しかけてきた。さすがにこのままではまずいので立って詠春さんの方に向き直って一礼する。

「はい、挨拶が遅れて申し訳ありません。この3・Aの副担任を務めている草薙亮、と申します」

「関西呪術協会の長を務めさせた頂いております近衛詠春と申します。おっと、この場ではこのかの父、と名乗ったほうがいいかもしれませんね」

そう言いながら詠春さんが右手を差し出してきたのでその手を取り握手をする。

握って気づいた。甲の方はそうでもないが、手の中は剣ダコが出来ている。しかもこれは昔ではなく最近のものだ。

ということはこの人は長という立場になっても剣の鍛錬を怠っていないということだろう。

そういえば詠春さんは俺の名前を知っていた。学園長の方から連絡がいつているのかもしれない。

「貴方もこのかを守っていただいたそうで。ありがとうございます
た」

「ああいえ！そんな！お気になさらずに」

深々と頭を下げられてしまっってこっちの方が恐縮してしまっった。
はつきり言ってしまえば俺は刹那よりも守れていなかったように
思う。まんまと敵に誘導された拳句危険にさらすなど愚行もいいと
ころだっった。

「何か恥じることがおありですか？」

「う・・・分かりますか？」

「顔を見れば」

笑顔のままそう言われてしまっった。そんなに顔に出やすいかな？

「先生としても一個人としても人様の子供を危険に晒すという愚かな行動を選んでしまいました。自分で自分が許せないんですよ」

「でも、結果的に無事だっった。それでいいのでは？」

「そ、そうですね。親御さんが許してくれるというのにこっちが気にしていると・・・」

「ええ、こちらも堅苦しくなりますからね」

「これからはこのようなことが無いように精進します」

「ええ、頑張ってください」

そういつと詠春さんは他の人のほうへ向かって行くこうとして、

「ああ、そうそう。先ほど刹那君にも言っただんですが・・・」

こちらをもう一度振り返った。

「このかが望むのなら・・・それとなく本当のことを教えてやってください」

「よろしいんですか？」

「ええ、本当は普通の子にしたいと思ひ秘密にしてきましたが・・・いずれにせよこうなる日が来るのでは、と思っただけです。それが早まっただけのことですよ」

「分かりました。娘さんが望むならそうします」

「お願いします」

軽く頭を下げると詠春さんは再び背を向けてこの場を去った。

なんていうか・・・親の鑑とはこういう人のことを言うのだろうかと思ってしまった。

宴会が終わって今は風呂上り。なんかまた風呂場でネギ君が一悶着起こしたらしいがそんなことはいつものことだ。

それよりネギ君から聞いたが、詠春さんはネギ君の父親、あのザウザンドマスターの盟友だったそうだ。何でも昔一緒に戦った仲間か。

ふむう、人は見た目によらないというがあの人が正にそうだろう。あんな優しそうな人がそこまで強そうには見えない。

本山の使い手たちは明日には帰還してくるらしいので、天ヶ崎千草は任せて欲しいと詠春さんも先ほど言っていたし問題ないだろう。

「ん・・・」

ちなみに俺は今本殿の屋根の上で晩酌中だ。さっき厨房で一本だけ失礼した。

ここは桜が咲くのが遅いみたいでまだ桜が残っている。辺りは細い三日月の月明かりに照らされた桜が淡いピンク色を放っていて実に幻想的だ。

たまに吹き降ろす風は少し冷たいが風呂上りには丁度いい。それにこの風に乗って舞い上がった桜の花びらが俺の周りを漂っている。

こんな所で俺が飲んでる理由はただひとつ。今も部屋で騒いでいる生徒たちについていけないからだ。

あそこにいると俺まで巻き込まれてしまう。ここでも多少声は聞こえるがそれでもほとんど差し障りのない程度だ。

ふむ・・・遅咲き桜に月見酒。なんとも風流だ。後はこれで一緒に飲める奴がいればなあ・・・

「そこまで望むのは贅沢ってもんか」

そう呟いて手酌した酒を煽る。

「あー！こんなところにおった！」

聞き覚えのある声に後ろを振り返ると屋根の端っこから亜子が上

がっつけていた。

「んー？お前どうやって上ってきたの？」

「あれ借りたんや。草薙さんが屋根の上にいるって聞いてな」

・ 亜子の後ろに目をやると梯子が掛けられていた。良いのかそれで・
・ 屋根の上の上ってる俺が言う言葉じゃないな。

「何してるん？」

「晩酌」

「お酒？一人で？」

「飲める奴がないからな」

そう言っただけ空になった杯に再び酒を注ぐとした時、左手の酒瓶を亜子に奪われた。

「おいおい、飲むなって言うんじゃないだろうな？」

「聞いたことないん？手酌は出世しない言うやろ、ほら」

そう言っただけ亜子が酒瓶を差し出してくる。

「はあ、ならお言葉に甘えようかな」

「どぞどぞ」

「言っておくが飲ませんぞ」

「分かっただけで！」

なんだ、てつきり飲んでみたいからかと思った。しかし生徒に酌をさせるって・・・バレたら非常にまずいんじゃないだろうか？

いいか別に。細かいこと気にしたら禿げるって早乙女も言ってたし、こんな年から禿げるのは御免だ。

特に会話をする必要もなく何度か酌をしてもらった。亜子は隣の隣で飲んでいるのを見ているだけ。

んー、話題がない。

「綺麗やねー」

「ああ、そうだな」

静かになった本殿の屋根の上で亜子の呟きが聞こえた。多分独り言だろうが、俺も独り言のように返したのでどちらもその後の会話は続かない。

だが・・・それでもいつか。

静かだ・・・まるでさっきまでの騒ぎも嘘のようだ・・・

聞こえるのはそれこそ風の音だけ・・・吹き付ける風の音がやけに大きく聞こえる。

・・・

人数は少ないとは言え3・Aの面子が揃っていてこんな状況だ！
騒がないほうがおかしい！

それにこの本山にだって人はいる！なのに人っ子一人の声も音も
聞こえないのは・・・

「く、草薙・・・さん？」

亜子も何か感じ取ったようだ。不安そうにこちらに声をかけてく
る。

「離れるなよ」

嫌な空気だ。風呂の火照りで出た汗とは違う汗が背中を濡らすの
が分かる。

とりあえずここからでは何も分からない。一旦降りるしかなさそ
うだ。

「亜子、降りるぞ」

「う、うん」

屋根の淵まで歩いて亜子を抱え上げた。

「ちょ！草薙さん!?!」

「ああ、悪い悪い。お前ここから飛び降りたら怪我するかもしれな
いじゃん」

「ひ、一言くらいかけて欲しかったん／＼」

「次から気をつける・・・よ!」

庭先に降り立ってから亜子を降ろして辺りを確認。やはり人っ子

一人いない。

神経を集中させて気配を探る。意識が研ぎ澄まされていく気配がはつきりとしていく。

……やはり、この本山から人の存在そのものが消えている。動いているのは俺、亜子を除いて5つ。

「最低な上に最悪な展開だ」

「ど、どうなってるんこれ？」

「どうやら敵らしい」

「でもここって結界とか張ってあるって！」

「破られたんだろ。どうやら相当な使い手がいるらしい」

「そ、そんな」

どうする……とりあえず合流だな。先ほど動いていた気配は風呂場に2つ、そこへ向かう途中の廊下に3つ………ひとつ消えた!?

「くっそ! 亜子、抱えるぞ」

「う、うん!」

再び亜子を抱えると地面を思いつきり蹴り走り出す。先に風呂場に行く前の廊下だ。

既に他の気配二つは無くなっていて、そこには消えた気配の正体……詠春さんがいた。

物言わぬ石像となって……

「こ、これ・・・って、長・・・さん？」

「悪い勘ばかりよく当たる・・・」

思わず歯がギシリと鳴るほどかみ締めてしまう。

気配がしないのも、消えたのも納得だ。石像になってしまえば気配もくそもない。

おそらく他の人たちももう・・・

「な、なんで？これって・・・」

「触るなよ」

手を触れようとした亜子を制止した。

「多分石化の魔術かなんかだ。欠けたら元に戻るモンも戻らなくなるぞ」

「ひー！」

思わず手を引っ込める亜子を見ながらとりあえず今からどうする・

・

詠春さんの腕前は知らないが、老いたとしても神鳴流剣士。実力は相当なものに違いない。その人が敗れたということはこちらが一對一では絶対勝てない敵ということになる。

親書の件は片付いている。今更詠春さんをどうこうしてどうにかなるものではない。

ということとは・・・狙いはこのかしかない。

(考えてる暇は無いな)

「亜子、行くぞー！」

「え？え？このままでええん？！」

「この場においても俺らに出来ることは何もない！それよりネギ君たちと合流する！」

「朝倉たちは！？」

「そっちは問題ない！」

「う、うん」

明らかに嘘だが余計な心配を掛けるわけにはいかない。と思ったが亜子は気づいているようだ。顔色が明らかに悪い。

多分俺の嘘に分かってるが自分でも考えないようにしてるんだろ
う。

一気にトップスピードで風呂場まで駆ける。

途中で正面に見覚えのある背中を二つ確認した。

「ネギ君！刹那！」

「草薙さん！無事でしたか！？亜子さんも」

振り返りながらも二人はスピードを落とさない。立ち止まってる暇が無いのは全員分かっている。

「このかは！？」

「お嬢様はアスナさんと一緒にお風呂場に！」

「まだ無事なんだな？」

「おそろく！」

「よし！なら急ぐぞ！」

風呂場の入り口を破る勢いで中に突入する。

「無事か！二人と・・・」

中には何故か裸のアスナが横たわっていた。いや、非常事態だが

なんか背徳感というかなんというか・・・
思わず顔を背けてしまう。

「あ、アスナさん！？なんで裸・・・！？」

ネギ君は見るなー！

「アスナさん、大丈夫ですか！何があつたんです!？」

「桜咲さん！ちよつとごめん！」

亜子がアスナに近寄つた刹那を少し止めて調べ始める。

「うん、怪我はないな。脈が早いくらいで異常はないで」

流石、保険委員は伊達じゃないか。とりあえずほつと安堵したところ
にアスナが漏らした。

「う・・・ゴメン皆・・・このか攪われちゃつた・・・」

そう言いながらアスナは目からボロボロと涙をこぼす。その顔は
いつもの元気な様子はなく、無力感と後悔がありありと浮かんでい
る。

やはり狙いはこのか・・・いや、当初から本命の狙いはこのかだ
つたのか！

アスナの言葉と共に神経を集中させて気配探知を開始する。
アスナの調子から見れば攪われたのはつい先ほど・・・ならまだ

俺の探知範囲にいるはずだ。
広げてる途中で……

「見つけた！」

「本当ですか！？草薙さん！」

刹那が俺の言葉に素早く反応する。

「ああ、ここから……」

言おうとして……気づいた。風呂場の気配反応……が6つ！？
反応先は……

「刹那！後ろだ！」

「っ！」

俺の言葉に素早く反応した刹那が振り返ると同時に人影が浮かび
上がり白髪の少年が現れる。

こいつは……城の上で天ヶ崎千草の後ろにいた少年だ。という
ことはこいつがこの事件の犯人か。

「へえ、感づかれるとは思わなかったよ。まあ元々おまけみたいな
ものだったから別にいいけど」

「君が……長さんやこのかさんを……」

ネギ君は詠春さんが石化する前に話を聞いていたらしく声が震え
ている。しかしそれは怯えなどではなく怒りで、だ。

「っ、このかさんをどこにやったんですか……」

静かに言っているが握った杖がギリギリと音を立てるくらいに手に力を込めている。

「……みんなを石にして……このかさんをさらって……アスナさんにひどいことまでして。先生として、友達として……僕は…僕は許さないぞ!!!」

感情が・・・爆発した。

10歳の少年が発するような声の張りではなく、それを正面から聞いてしまえば大人でさえ怯みそうな程の怒りの咆哮。それを…

「……それでどうするんだい？ ネギ・スプリングフィールド。僕を倒すのかい？」

あろうことかその少年は眉一つ動かさずにそれを流してみせた。いや、そもそも眼中にないといったほうが正しいのかもしれない。

それはそうだろう。不意打ちだったかもしれないが詠春さんさえ戦闘不能に陥れた相手だ。しかも傷を負っているようには見えない。どう考えてもネギ君が一人で勝てるような相手ではないのはネギ君自身も分かっているはずだ。

まあそれでも怒りをぶつけたのは大したものだがな。

「……やめた方が良い。今の君では無理だ」

そう言って少年の足元にある水が少年に巻きつき・・・次の瞬間には少年は消えた。

「水を利用した『扉』……瞬間移動だぜ兄貴！？ かなりの高等魔法だ……浮遊術も使ってたしな」

「……くっ……」

「くっそ……」

カモの説明に俺とネギ君の声が重なる。あの場で仕掛けようと思えば出来たが……動けばやられていた……つまり動けなかったんだ。

情けないったらない。

「で？これからどうする？」

「どっつて……」

俺の言葉の意味がネギ君は理解してないようだが……

「敵は今の奴も含めて天ヶ崎千草に月詠、さらに死体使いとその軍団。どう見たって勝ち目は1割もない。それでも行くか？」

『当たり前です！』

亜子さえも含めて全員の声が重なった。意気込みは十分。絶望的な戦力差を見ても諦めてるやつは一人もいない。

「だよなあ。俺もそうさ。さっさと行くぞ！」

「は、はい！……アスナさんはここで待っていて下さい。このかさんは僕が……僕達が必ず取り戻します」

「え……う、うん……ってなに言ってるのよ！私も行くからね！」

ネギ君がどこから取り出したのかバスタオルをアスナに掛けてそう言ったがアスナは猛然と言い返した。

もうアスナは諦めようやネギ君。そいつには言うだけ無駄だって理解しよう。

「とにかく追いましょ！気の跡と草薙さんの気配探知があればすぐに追いつけるはずです！」

「しかしよう・・・あのガキ、長のおっさんが言ってた通りタダ者じゃねえぜ。ただ無謀に突っ込んでも・・・」

そこまで言っただけでカモが何かひらめいたように口を止めた。

「どうした？」

「旦那！いい案を思いついたんだよ！」

「その案は？」

「へへへ、刹那の姉さん、ネギの兄貴が旦那の事・・・好きかい？」

「えっ！それ、何の関係が・・・」

「・・・つまりだな、刹那の姉さんと兄貴がチュウすんだよ！」

あ、アスナと亜子がこけた。

「この非常時に何言ってるのよーっ！！」

「ち、違っよ姐さん。仮契約だよ仮契約！！」

「あー・・・」

納得したようにアスナと亜子が手を打つ。

「刹那の姉さんは気が使えるだろ？そこに兄貴の魔力を上乗せすれば一気に倍のスーパーパワーUPって訳さ！」

「無理だ」

「へ？」

俺の答えに全員の視線が向く。

「それなら俺が何度も試している。気と魔力は咸卦法っていう技術

がないと互いが消しあってしまうんだ。多分何か要因があるんだろう。刹那でやつても多分同じだ。それに……一撃の魔法の威力は俺よりネギ君のほうが上だ。いざという時の切り札は温存しておかないと」

「むづ、いい案だと思うんだがなあ」

「と、とにかく！」

顔を真っ赤にした状態で刹那が叫んだ。

「今ここで話し合っても仕方ないです！皆さん」

「そ、そうですね刹那さん！」

「ああ、さっさと行こう！」

「うん！このかを救いに！」

「いや、亜子。お前は残ってくれ」

「へ？」

俺の言葉に亜子が「意味が分からない」という風に声を上げた。

確かにここまで来て置いていくのは酷かもしれないが……

「お前はまだ戦いに出れるほど強くない。今回はお前を守ってやる余裕なんてないんだ。分かってくれ」

「そ、そんな！ウチかてアスナみたいにアーティファクトあるし少しくらい力に……」

「未だに使い道を把握していない物を振り回してどうするつもりだ！」

「う……」
「いいから、今回はダメだ。俺はお前を守りきれない自信がない……お前を戦いに巻き込むわけには行かない」
「……」

沈黙と共に亜子が頷いた。

「すまんな」

「気にせんといて。ウチが実力不足なのは分かっとなるから……その代わり！」

「お、おう……」

「皆でちゃんと帰ってくるよ！草薙さんもやで！」

「約束は……しかねるなあ……」

「もう！こついう時は嘘でも頷くもんやろ！」

ツて言われても……うーん……

あ……

「亜子、今500円玉とかある」

「へ？あ、あるけど？」

「貸して」

訳が分からない風に500円玉を差し出してきたのを受けとると俺はそれを無造作にポケットに突っ込んだ。

「サンキユ」

「え？なんなん？」

「必ず返す。約束だ」

「は？」

「……………」

「……………」

長い沈黙の後…

「ぷ…くっくく…あっははははは！な…なんなんそれ！」

「うるさいな／＼いいだろこれで／＼」

これしか思いつかなかつたんだからしょうがないだろ！
おそらく恥ずかしさでかなり赤くなっているはずだ。

「あはははは！あー、おかし！ほならそれでええよ」

亜子が直ぐに笑い終わると右手の小指を差し出してきた。

「指きり。明日の朝までに返さへんかったら3倍返しな」
「おっ」

笑顔で亜子はそう言い切った。それを見て俺も右手の小指を差し出す。

「指切った！」

そう言って亜子と小指を離す。

「じゃあ、行ってくる」

「うん！」

「よし、行くぞ！」
『はい!』

こうして亜子を残し、俺たちは本山を飛び出した。

「「草薙さんって」「旦那って」
『意外とキザだった(んだ)(のね)(んですね)(だな)』
「ほつとけ!!」

俺だってそう思ってるんだよ!

S i d e o u t

S i d e 赤坂 一樹

「おおっ・・・!やるやないか新入り!?どうやって本山の結界を抜いたんや!？」

俺の目の前で天ヶ崎千草が少年に向かって捲くし立てている。
つい先ほどこの少年がこのかお嬢様を拉致して帰ってきたのには心底驚いた。まさか本山の結界を抜いて追っ手も振り切るとは俺も考えていなかった。

「まあこれでお嬢様は手に入った。後はお嬢様をアノ場所にまで連れて行けばウチラの勝ちやな」

リヨウメンスクナ・・・伝説にもある飛騨の鬼神。その封印を解いてお嬢様の魔力で制御し、関西呪術協会を牛耳り、あわよくば関東も・・・というのが天ヶ崎千草の計画らしい。

確かにリヨウメンスクナを自由自在に操れるなら日本に敵はいないだろう。それは俺も納得している。本当にお嬢様の魔力で操れるのかは俺の知ったことではない。失敗すればその時はその時だ。

「ほな、祭壇に向かいますえ」

「おい・・・」

「分かつとる。全てが終わったときはあんたの約束もちゃんと守つたるわ」

「ならいい」

イマイチ信用度に欠けるが・・・まあいい。その時は保険を使うだけだ。

「待て！」

「あん？」

後ろからの声に振り向く。そこには三人の少女と一人の少年、そして一人の男が立っていた。

連中の内四人は天ヶ崎千草から聞いている。

一人は式神を一撃で返すほどの能力持ち、もう一人は神鳴流の剣士、少年は例の英雄の息子で凄腕の魔法使い、男は魔法を使わない足技使い。男については俺の方が知っているか…重装備の人間を楽々と吹っ飛ばせる力の持ち主だ。

「そこまでだ！お嬢様を放せ！！」
「はっ！またあんたらか」

天ヶ崎千草が見下すように・・・いや、実際見下しているだろう風に言い放つ。

「天ヶ崎千草！明日の朝にはお前を捕らえに応援が来るぞ。無駄な抵抗はやめ、投降するがいい！」

「ふふん……応援がなんぼのもんや。あの場所まで行きさえすれば……」

神鳴流の少女の言葉に天ヶ崎千草が言った。それを聞いて俺は聞こえない程度だが舌打ちをしてしまう。

安易に情報を漏らしすぎだ。こいつらがその場所を近衛から聞いてたらどうするつもりなんだ。目的は可能な限り隠すのが基本だろうに。

「それよりも・・・あんたらにもお嬢様の力の一端を見せたるわ。本山でガタガタ震えてれば良かったと後悔するぞ。お嬢様、失礼を」

そう言いながら天ヶ崎千草は下の池に降り立つとお嬢様の体に召喚用の呪符を貼り付ける。

「オン

「オン キリ キリ ヴァジャラ ウーン
ハッタ 」

呪文を唱えた途端、お嬢様の体が光を放ち、水面に無数の光の柱

が浮かび上がる。その光は徐々に収まりながら、柱の中から様々な異形の者が浮かび上がる。分かるものから鬼、天狗、烏族、妖狐、河童、狗族、その他にも大小様々な妖怪がざっと見て100以上。これが・・・代々伝わる近衛の血の力か・・・これなら俺の研究も完成するかもしれない。

「ちよつとちよつと！　こんなのありなのーっ！！？」

相手が悪かったな。天ヶ崎千草は性格は悪くても優秀な術者だ。魔力さえあればこのくらいは造作もない。

「あんたにはその鬼どもと遊んでもらおか。ま、大半はガキやし、そつちは殺さんよーに“だけ”は言つとくわ。安心しときい」

また甘いことを・・・

「おい」

「なんや？」

「俺もここに残るぞ」

「なんや、足止めを買って出るんかいな」

「まあな」

「ほなよろしゅう」

「代わりにこれも使わせてもらっ」

そつ言つて俺は取り出した札を天ヶ崎千草に投げつける。

「なんやこれ？」

「お前の召喚に使つたのと同じようなもんだ。お嬢様に貼っておけば問題ない」

「ま、そんならいならええやろ。ほな後は頼むで」

そう言っただけがその場に残る。そして、その瞬間俺の体に魔力が溢れ出した。

先ほど渡したのは擬似的に貼った者から俺に魔力を送るもの。まだ完全ではないから送る量は限定されるが…

これだ…

「ふ…」

自然と笑いが漏れてしまった。

俺の努力だけでは絶対に届かない魔力量！これさえあれば俺の研究は完成する！

「『風炎旋風・炎熱旋風壁』！！」

「む？」

先ほどまで連中のいた場所に極大の炎の竜巻が発生した。辺りにいた妖怪たちが弾き飛び、近づこうとした妖怪も近づぐだけで吹き飛ばされている。

しかし動く気配がないということは恐らく時間稼ぎよりの障壁か。丁度いい。俺もこの術には時間がかかるんでな。

それだけ思い立つと俺は腰の刀を引き抜いた。

S i d e o u t

偽りの平和の為…（後書き）

細かい設定は随時『設定』のほうに追加します。
誤字脱字表現の矛盾があればご指摘ください。

追記、『設定』に草薙亮の使用魔法欄を追加

奪還の為…前編

Side 和泉 亜子

「行ってもうた」

皆が飛び出して何分経ったやろうか？

お風呂場はすっかり静かで、辺りは雫が落ちる音だけが響いとる。

急に寂しくなってきたけど…それでも…

「ウチは…足手まといやもんな」

口にして虚しくなる。何のために魔法を教えてもらったんやろう。最初はこれ以上友達を巻き込まないためだった。

でも…いつの間にかそれはアノ人の近くにいるための口実になっていた気がする。

いつでも…いつまでもアノ人の隣に居たいと思った。

だから偶然とはいえ『仮契約』でウチのアーティファクトが手に入ったとき…これでもっとアノ人の近くにいることが出来ると思ってしまった。

アノ人はウチを巻き込まないようにすごい気を使うとるけど…あの時ばかりはうれしかった。

それなのに…こんな大事な局面で役に立つことも出来ず、寧ろ迷惑ばかりかけて…拳句の果てに足手まといや。

アノ人は言わへんかったけどそれくらいはウチでも分かる。
いや、アノ人は足手まといなんて思わへんやろうけどウチがそう
思ってしまう。

所詮ウチは脇役…

一瞬内緒で付いていこうという気が持ち上がったけど…無理やり
それを押し込めた。

そんなことはウチの自己満足でしかないし、今回はこのかの奪回
が目的…それが失敗するような可能性は一つでも減らすべきや。
それに…

「約束、したもんな…」

右手の小指を見下ろすと、頬から生暖かい雫がその小指に知らな
いうちに零れ落ちた…

S i d e o u t

S i d e 草薙 亮

「我らに炎の加護を！『風炎旋風・炎熱旋風壁』！！」

瞬間極大の炎の柱が俺たちを中心に巻き起こり、周囲にあった水
を瞬間的に蒸発させる。

先ほどまでネギ君が同系統の呪文を唱えようとしていたのだが、

温存という意味で俺が発動させたのだ。

一応呪文はエヴァンジェリンから教わっていたし今の俺なら発動できると思っていたが出来てよかった。

「こ、これって!？」

「炎の障壁だ。ただし3分くらいで消えるぞ！」

「なんで熱くないの？」

「中だけだ。外から触ったら火傷じゃすまんらしい」

「よし！ 手短かに作戦立てようぜ!? どうする、こいつはかなり不味い状況だ！」

カモが言うことに全員がうなずく。ざっと見でも敵の数は100から200。それも人間でなく妖怪だ。強さも未知数。

全員がいれば切り抜けることは出来るだろうが、それだと全員が消耗する上に時間を食う。

向こうには先ほどの少年もいるのだ。消耗した面子で当たるより無傷の精鋭を当てるほうが勝率は高い。

となるよ…

「二手に別れる。これしかありません」

刹那が俺が言うより先に意見を出した。

そう、それしかない。問題は…

「編成はどうする？」

これだ。誰がこの場を引き受けるか…に掛かってくる。

あの少年に当てられる最強の駒は今のところネギ君しかいない。ならばネギ君は当然除外だ。

「……私が一人でここに残り鬼達を引き付けます。その間に皆さんでお嬢様を追って下さい」

「ええっ!?!」

「そんな刹那さんっ!」

俺以外の全員が驚きの声を上げる。確かに敵戦力を鑑みればそれくらいの配分でも足りるか分からないくらいだ。だがそれは刹那を見殺しにする、というのと同義だ。そんな選択はできるはずがない。

「任せて下さい。ああいう化け物を退治調伏するのが元々の私の仕事ですから……」

そう答えた刹那の顔は少し自嘲気味に笑っていた。おそらく刹那自身も不可能と分かっているのだろう。

「アホ」

「く、草薙さん？」

俺の答えに刹那が答えた。他の皆も俺のほうを見る。

「どうせお前のことだ。自分が犠牲になってもこのかが助かればいいと思っただらう？」

「……」

沈黙する刹那。だがそれ自身が肯定という答えだ。

「あのなあ……そんなこと俺が許すとも思っただらうのか？」

「それではどうしろと！お嬢様を諦めるとでも言つのですか！？」
「誰がそんなこと言った！」

刹那の答えに俺は思わず怒鳴ってしまった。やばいやばい、冷静に冷静に…

「いいか、俺たちの願いは一つのはずだ。このかを連れ帰って、その上誰一人欠けることなく、全員で学園に帰る。違うか？」

「し、しかし現状でそれは…」

「それ以外は却下だ。そんなこというなら俺がここに一人で残ったほうがマシだよ」

俺の言葉に刹那が言葉を失う。

「旦那。一つ案が…いや、まあこれしかないんだが話してもいいかい？」

「ああ、作戦があるならそれに越したことはない。話してくれ」

カモが俺に促されて説明を開始する。

「ここに残る面子は兄貴以外の面子だ。兄貴の飛行速度で奇襲をかけて一気にこのか姉さんを救出。これっきゃねえぜ」

「なるほど、確かにあの戦力と無理に戦う必要はないな。このかさえ取り返せば後は本山で援軍が着くまで守り抜けば俺らの勝ちか」

「その通りだぜ旦那。問題は姐さんへの魔力供給だが…兄貴、魔力供給を防御とかの最低限にして最大何分まで伸ばせると思っ」

「う……術式が難しいけど5分…いや10分……ううん15分…
…上手くやれば20分は頑張れる！」

「20分か。なんとかギリギリってとこだな」

「よし、作戦は決まったな」

「おう、ネギ君以外の面子はここで時間稼ぎ。ネギ君は一撃離脱でこのかを救出。とり返したら全員で本山へ撤退。これでいいな？」
「……そう上手くいくでしょうか？」

刹那が疑問の声を上げる。その疑問はもつともだ。

そもそもネギ君が奪還出来るかどうかも分からない。途中で敵の待ち伏せがあるかもしれない上に、ここが持ちこたえられる保証もない。

正直行き当たりばつたりの作戦だ。

「分の悪い賭けだつてのは分かっているがそれ以外に代案があるか？」

「時間もなし、代案もない。これで行くしかねえな」

「そう…ですね。分かりました。それで行きましょう」

「決まりだな！！ よし、そうだったら”アレ”もやっとうぜ！
ズバツと、ブチュツとよ！」

カモが興奮気味に捲くし立てた。『アレ』って……もしかしなくても『アレ』のことか！？

「アレって？」

アスナも感づいたのか恐る恐る聞いている

「キッスだよ、キス！ 兄貴と『仮契約』！」

『えええええーっ！？』

「……やっぱり」

「緊急事態だ！ 手札は多い方がいいだろうがよお！ー！」

俺以外の全員が声を上げる。だがまあカモの言うことは一理ある。

手札は多いに越したことはない。それが付け焼刃だとしても。実際刹那はほとんど気で戦うだろうし、本当にアーティファクトのみだな。

「まあやるなら急げ、そろそろ障壁が切れるからな」

ほれ、とアスナの背中を押して二人から背を向けさせる。さすがに人目があるとやりにくいだろう。

「……すみません、ネギ先生」

「い、いえ……あの、こちらこそ……」

声と共に背中を向けてるほうからまばゆい光が放たれる。

恐らく『仮契約』のが無事終わったのだろう。

振り返るとカードを持ったカモと見つめ合う二人がいた。案外絵になると思っるのは俺だけだろうか？

「先生……このかお嬢様を頼みます」

「……はい」

「いちゃつくのもそこら辺にしとけー」

「そろそろこの炎収まりそうよ！」

バツと二人が離れると同時に炎の勢いが弱まってくる。

「やるぞお前ら！ネギ君、俺がぶっ放すからそれに紛れて敵中突破

！このかを頼む！」

「はい！」

「刹那、前衛！敵を蹴散らせ！それからあまりアーティファクトには頼るな！使い慣れてないものはあまり使わないほうがいい！」

「任せました！」

「アスナ、中衛！出来る限り刹那のサポートしてやってくれ！無茶すんなよ！」

「おっけー、任せて！」

「俺は全体をカバーする。全員無事に帰るぞ！」

『はい！』

全員がそれぞれの武器を構えて消えつつある炎の竜巻の正面を見据える。

さあ、まずは俺の出番だな！

「破壊力だけはエヴァンジェリンのお墨付きだつてところを見せてやるぜ。『フラマ・ブラスト・マテリアル』！」

俺が始動キーを口にすると同時にネギ君が杖に跨る。

「『炎の精霊19柱！集い来たりて敵を貫け』！」

「ま、魔法の射手！？旦那本気か！？」

「そんな初歩の魔法で！？」

カモとネギ君が驚きで叫び声を上げる。が、見損なうなって！！19の炎の塊が俺の周囲に展開され、それが俺の正面に徐々に集中していく。

右手を呪文と共に振りかぶり、殴るように腕を突き出した。

「『魔法の射手・収束・炎の19矢』！！！！」

19の炎の矢が一つの巨大な火球となって撃ち出された。

放たれた火球は道筋に存在する妖怪を丸々飲み込み焼け焦がす。

「行け！このかを救ってこい！」
「はい！」

杖に跨って俺の隣を猛スピードで通り抜けたネギ君と言葉を交わす。ネギ君はそのまま火球に続いて妖怪の一団を通り抜けた。

『たまんねえやつがいるもんだな』

『2、30体はもっていかれたか』

『やーれやれ、西洋魔術師にはわびさびってもんがなくてアカン』

妖怪たちのそんな声が聞こえる。

俺西洋魔術師じゃないけど。一応西洋魔術だからどうでもいいか。

さて、一人ぐらい援軍を出しますか。

「刹那、前衛をもう一人置く。そいつと協力して戦ってくれ」

「え？でももうこの場に人は……」

「俺の特殊能力ってやつさ。10秒だけ時間を稼いでくれ」

「は、はい！」

右手に魔力を集中……

残り10秒……

『こいつはこいつは……勇ましい連中やな……』

俺の前に立った刹那がおかしいのか。それともこの人数差で立ち向かうのがおかしいのか。

まあいい。そんな相手の心境なんて知ったことか。俺は俺の出来

ることを成すまでだ！

残り7秒…

「アスナさん、大丈夫です。見た目ほど恐ろしい敵ではありません。せいぜい『街でチンピラ百人に囲まれた程度』、と考えてください」
「それって安心でいいのかしら？」

アスナが苦笑いを返して仮契約カードからハリセンを取り出して構える。

残り3秒…

「まあじゃあ…鬼退治と行きますか！」
「はい！！」

残り…0！

「来い、兵士！！」

「『魔法の射手！連弾、炎の19矢』！！！」

呪文と共に展開された炎の矢が俺の周囲の妖怪を吹き飛ばす。

まだそんなに時間は経ってないだろうがもう何時間も戦ってるよ
うな感覚に陥ってしまう。

倒した数なんて数えていないが既に全員で1000は倒しているはずだ。しかしその戦闘不能の妖怪たちはその度に霧散して跡形さえ残さない。

正確な数は分からないが。だが、視界には敵しか見えない。
なにせ敵が減らないのだ。

倒しても倒しても後ろには次の敵。

しかもその強さがドンドン上がってきているような気がする。

後の敵に精鋭を配置することで疲れきった敵を確実に殲滅する
という戦略の王道。

これが本当の戦だったら前列が弱いと戦列が崩れたりするんだが
そこは妖怪。戦列なんてなく好きに突っ込んでくるんだから対策の
立てようもない。

『もらったぞ術士！』

空から様子を伺っていた天狗の一体が魔法を唱え終わった無防備
な俺に突っ込んでくる。

だがまあ…

それでも王手はまだまだ先だけどな！

「らあ！」

『ぐあー！』

天狗が俺に触れる前に何かに吹っ飛ばされた。

「おいおい、キングがそんな無防備でどうすんだよ」

今まで前線に居たデギオンがいつの間にか俺の隣に戻ってきていた。

「まだ兵士が戦場に居るんだ。余裕だろ」

「もう戻ってこないからな。歩兵は前に出るのが仕事なんだからよ」
「へいへい」

やられた仲間の仇と言わんばかりに空中に待機していた天狗と鳥族がそれぞれの獲物を振り上げて滑空してくる。数は10体！

「『炎の1矢』！」

唯一無詠唱で出せる魔法の射手で1体を撃墜。

振り下ろされた刀を紙一重で避けて上段回し蹴りを天狗の顔面に叩き込む。

「ちい…」

仰け反るだけで一撃で倒せない。最初の頃は気を纏っていないくても倒せていたのだがさっきから一撃では倒れない妖怪が増えてきた。

『この程度か若造！』

倒れなかった天狗が再び刀を振るって来た。普通なら俺は避けるしかないのだがここまでやられても律儀に命令どおり刃の峰のほうで切りつけてくるのだから手段はある。

タイミングを合わせて左腕で思いつきり刀の峰を叩きつける。

「痛つてえ！」

衝撃が殺しきれず左腕が痺れるが、相手もその衝撃に耐えられなかったようで狙い通り剣を叩き落した。

その剣を地面につく前に右足で蹴り上げ、右手で逆手に掴みそのまま天狗の首を両断する。

天狗は霧散したが何故か武器は霧散しない。倒すとき持っている武器以外はその場に残るみたいだ。

思わぬ収穫だ。とりあえずこれで急所を突けば一撃で倒せるようになった。

武器を得た俺を見て槍を持った別の天狗2体が左右から迫る。当然槍も先端の刃は落ちている。それでも直撃すれば骨折は確実だろう。

右の穂先を剣で逸らすと同時に刀を突き出し天狗の心臓を突き刺す。

天狗が消える前に剣を手放してその槍を奪い取り左から迫って来ていた天狗に振り向きざまに突き出した。

槍と槍が途中で交差しギヤリギヤリと鈍い金属音を立てる。

柄に許容量以上の力が加わったせいで二つの槍が中ほど音を立って折れた。

『ちい！』

天狗が槍を投げ捨て腰の刀に手を掛けたところで俺は槍の柄を捨てて…それを右足の甲で蹴り飛ばした。

反応も出来ずに天狗がのど元を貫かれて霧散する。

「遅いゼキング」

声に振り返るとデギオンが最後の1体の烏族の首をへし折ったところだった。どうやら他の7体はこいつが仕留めたらしい。

デギオンが格闘で強いというのは知っていたが強さが異常だ。

先ほどまで刹那と一緒に前線にいたのだがこいつが雄たけび共に腕や足を振るうたび、周りの妖怪だけ宙を舞うように蹴散らされていくのだ。

それで吹き飛ばない巨大な鬼などは拳で相手の体を貫くなど本当に規格外だ。

正直こいつと格闘の練習をしていた俺は相当手加減されていたと今更ながらに実感する。

しかし…デギオンは先ほどまで刹那と一緒に戦っていたはずだ。

「お前、刹那は？」

「あの嬢ちゃんならもう一人の嬢ちゃんと一緒に戦ってるぜ」

ホレ、と指差された先を見ると刹那とアスナが互いの背中を守るように戦っているのが見えた。

あの二人も相当規格外だ。

刹那が強いのは分かる。そもそもがこいつの仕事は本業だ。

なのにアスナはどうだ。実戦なんてほぼ経験したことのない体で何故か相手の攻撃を避け、防ぎ、反撃する。動きも魔力で強化されてるとはいえ素人とは思えない。

しかもあのアーティファクトの特徴なのかアスナの能力なのか、すべての敵がハリセンに触れるだけで霧散するのだ。ノーミス即死のゲームを見てみたいだ。

それでも敵の数は大して減ったように見えない。

やはりあの最奥に居る男が召喚しているのだろうか。様子は見えないが、とりあえずあの男がこの場を率いているのは間違いない。

「行くぞ！」

「あいよ！」

一瞬で俺の意図を汲み取ったデギオンが俺の前に立つ。

敵の密集してるところにデギオンが突っ込み、拳を振るう。その拳が振るわれるたびに文字通り敵が吹き飛んでいくのは見ていて不思議な光景だ。

この調子ならすぐさまあの男のところまでたどり着けると思った矢先：周囲の敵の動きが変わった。

今まで俺たちに積極的に攻撃してきていた妖怪たちが一斉にさがつたのだ。

そればかりか俺たちと刹那とアスナの間に居た妖怪たちも全ていなくなり円陣を組んでこちらの様子を伺うように静観している。

「なんだ？これ……」

「どうするよ？」

「とりあえず二人と合流する。警戒を怠るな」

「りょーかい」

刹那とアスナも疑問に思ったのか回りを警戒しつつ近づいてくる。二人とも細かい傷や打ち身は多いが出血などの大きな怪我はないようだ。

「二人とも、無事か？」

「ええ、こちらは特には」

「それよりこれどういうことよ？なんで急に敵が退いたの？」

「分らん…あの後ろの男の指示だろうが…」

「もうあいつ片付けたほうがいいんじゃないか？そっちの方が手っ取り早いだろ」

「ていうか…」

ん？どうしたアスナ？なにか言いたいことがあるなら言ったほうがいいぞ。この状況を打破する手段ならなお良い。

「さも当然のようにいるけどあんた誰よ！なんかめちゃくちゃ強いし！」

デギオンを指差して叫ぶアスナ。

今更だなー。説明する暇なかったから今更もクソもないんだけどな。

「それは私も聞きたいと思っていました。いきなり現れたと思ったら素手だけあの威力…それに草薙さんのお知り合いのようすし」「細かいことは気にすんな嬢ちゃんたち」

刹那の問いにしれつと言いつつデギオン。

いや、確かにそうだけど細かいことではないと思うぜ。

「まあそれは後でな。今はこの状況を…」

ババン！！バババン！！！！

「何のお…と…」

音と共に一瞬月明かりが途切れ途切れとなる。

不審に思い…見上げる。

「矢か！」

そこには空を覆うほどの…矢。しかも全てが金属の鏃。逃げ場などない死の雨が降り注ぐようにしていた。

殺さないという命令は有効らしく先端は潰されているが…重力を得た矢は鏃が無いとしても肌を容易く貫通する威力は持っているはずだ。

つてことは殺す気満々じゃねえか！

「皆さんさがってください！」

夕凧を構えた刹那が俺らの前に出る。

「どうするつもりだ！」

「全て叩き落します！神鳴流秘剣　五月雨斬り！」

刹那が言うと共に夕凧を振るう。落下してきた矢が瞬時に切り裂き、弾かれ次々と無効化されていくがそれでも降り注ぐ矢が尽きることはない。

「刹那さん！私も…！」

「馬鹿！素人のお前が矢弾きなんて芸当が出来るか！大人しく下がってろ！」

「でも…！あれじゃ刹那さんが！」

アスナの言うことは俺も分かっている。刹那は絶え間なく、それこそ息をつく暇も無いほど夕凧を振るい矢を払ってはいるがこの攻

撃はいつ止むか分からない。そもそも相手が召喚された妖怪の攻撃ならば矢も無限にあるかもしれない。

そうなれば刹那の体力が尽きた瞬間俺たちは全員ハリネズミとなつてあの世行きだ。

「キング、任せてくれ」

「なに？」

後ろで黙っていたデギオンがそう言つて俺とアスナの前、刹那の真後ろに立つ。

「どうする気だ？」

「言つたろ？前に出るのが歩兵の役目だつてな！」

「へ？」

言い終わらない内にデギオンが刹那の襟首を掴んで俺に投げつけた。不意を付かれた刹那が抵抗することなく俺の腕に収まる。

「な、何を…！」

刹那が下がったことにより降り注ぐはずの矢が…

全て受け止められていた。

正面を見ると…巨大な2mの男がその身を覆うほどの巨大な盾を構えている様だった。

その後姿は正に…

「ケ、ケリア！？どうして…俺は呼んでないぞ！？」

「まあ俺だしなあ」

ケリアの格好をした男の声は完全にデギオンだった。

どうということだ！？デギオンがケリアになったってことか！？

「キングは知ってるはずだぜ？敵陣奥深くまで踏み込んだ歩兵はより強力な駒になれるってルール」

それは…兵士の昇格プロモーション！？

「バカな！あれは敵陣の最後まで行って初めて適応されるルールだ！」

「ああ、無茶な発動だったからな。そろそろ盾がやばいぜ」

デギオンの盾を見ると既に無数の矢が貫通していて、盾自体にひびが入り始めている。

「ちょ！？なにこれ！さっきの人は？！」

「一体コレは…」

アスナと刹那が俺の隣で疑問の声を上げるがそれに答える時間はない！

「どれだけ保てる！？」

「後30秒！」

「アスナ！刹那！」

『は、はい!』

俺の声に二人とも疑問の声を引っ込める。この二人の素直さには改めて感謝したい。

「一気に妖怪たちに紛れる! 敵も味方に矢を打ち込む何とことは避けるはずだ。こいつの盾が保っている間に一気に行くぞ!」

「う、うん!」

「分かりました!」

「よおし! 前へ!」

「っしゅあ!」

俺の声と共にデギオンが駆け、俺たちが後に続く。前に進むことに矢だけでなく妖怪たちの槍が投擲されてくるがそれも全て受け止めている。

あと一歩というところ、本当に数mというところで...

盾が...

砕けた!

「ちよ!」

「草薙さん!?!」

瞬間的に刹那とアスナを俺の内側に抱え込み来るべく痛みに備えるが... 他にもいつまで経っても矢は降ってこない?

「何やってる! さっさと行けやあ!」

声に顔を上げると矢を無数に体に受けたデギオンがゆっくりと前進を続けていた。その体は既に死に体だ。後数秒もすれば地面に倒れ伏すのは間違いない。

だが、歩兵はそこに未だ立っていた。

兵士としての意地か、王を守るといふ使命のためか。

人間ならとつくに死んでいる量の矢をその身に受けても兵士は前進をやめない。

刹那とアスナを脇に抱えてデギオンの真後ろにつく。

デギオンが妖怪たちの最前列に倒れこんでいく。その瞬間デギオンの下を通り抜けて妖怪たちの一団に突撃した。

「行くぞお前ら！気合入れろ！」

「あ、あの人は！？」

「心配なら戦いが終わった後に会わせてやる！」

「し、死んじやつたんじゃないのね！？」

「そのとおりだ！」

「分かった・・・草薙さんを信じるからね！」

アスナは眼の端に浮かべた涙を拭き去りながら再びハリセンを構える。いきなり現れた奴のために涙を流せる人間が世の中に何人いるだろうか。

そんなことを思いながら俺は近づいてきた妖狐の頭を気を込めた蹴りで蹴り飛ばす。骨の折れるいやな音と共に妖狐が霧散し入れ替わるように他の妖怪が突撃してくる。

流石に味方に打ち込んでくることは無いようで、矢のない戦場は

再び乱戦と化した。

「神鳴流奥義 百烈桜華斬!!」

「このお！さつきはよくもやってくれたわね！」

刹那とアスナが夕凧とハリセンで次々と妖怪を屠る。

「二人とも！なるべく弓を持ったやつを狙え！またやられると厄介だ！」

「分かっています！」

「さつきの人の借りは倍にして返してやるわよ！」

攻撃のために力を込めた足を踏み出した。

S i d e o u t

S i d e 赤坂 一樹

何だというんだ。

味方は増援も含めて300はくだらない。なのにあの4人…いや、一人は先ほど仕留めたから3人だが、既に味方の数が100を切るほどの奮闘。

並みの人間ではない。そもそも人間なのかと疑ってしまいたくなるような強さだ。

神鳴流を扱う少女が剣を振るうたびに近場の妖怪が寸断され、巨大なハリセンを持つ少女がそのハリセンを振るうたびに触れた妖怪は霧散し、男が蹴りを放つたびに妖怪たちが空中に吹き飛ばす。

まるで何か映画の1シーンをみているような感覚に陥ってしまう。

「案外上手くないかないものだ」

そもそも指揮だけしていればいいと思っていたのが甘く見た結果がこれだ。慌てて増援を召喚したところで焼け石に水か…

まあこいつらが突破されたところで…俺にはこいつ（・・・）がいる。

そう考えて隣にいるそれを見る。

袖口に山形の模様を白く染め抜いた浅葱色の羽織。その羽織の背中には「誠」の文字。年齢は20行っていない青年と言える体つき。顔は美少年と言えるほどの西端さ。腰には良業物『大和守安定』が刺さっている。

「強いですね、彼ら。いいえ、彼女ら…と言ったほうがいいですか？」

青年が答えた。これだけでも格段の進化だ。今まで呼び出してきた奴らは命令に従うだけの人形だ。自我などあるはずがない。

「まあ安心してください。僕がいるんですから」

俺がなにも言わないことを不安と取ったのか青年が屈託のない笑顔を向ける。

この男が新撰組最強などと誰が信じるだろうか。一目だけでは人の好い青年にしか見えないだろう。

新撰組一番隊組長にして人斬り集団最強と恐れられ、その剣技からも若くして病気を患い死んだ悲運の剣客。

こいつ一人を蘇らすだけでも俺一人の魔力では足りず、お嬢様の魔力を付け足し、さらには『大和守安定』まで媒体として使っている。しかも呼び出す過程において他の死体たちは魔力不足の関係か、それともこいつを維持しているからなのか、俺の技術不足なのかは分からないが呼び出すことができない。だが、まあ…

「そつだな。期待している」

沖田総司は現役時、他の組長たちさえ寄せ付けなかった強さを誇るまさに最強の名を冠する剣客。こいつさえいれば俺に負けはない。

戦いの音が迫ってきた。そろそろ奴らの死体を見ることが出来るかもしれない。

妖怪も後方には別格の者たちを揃えて置いた。俺の元には辿り着くことさえできないかもしれないが…

そんなことを考えている内にハリセンの少女が烏族に捕まってハリセンを封じられた。神鳴流の少女のほうも鬼と妖狐に苦戦している男の方も天狗たちの空中攻撃に手も足も出ていない。奴らが未だにあの女の殺さず命令に従っているのは癪だが…

「私が参りましょう」

「なに？」

急な沖田の言葉に思わず聞き返してしまつ。

「ご主君はあの妖たちの行為が気に入らぬ様子でしたので。私があの者たちを斬ればそれでご主君は喜ばれるのでしょうか？」

そう言いながら沖田は既に刀を抜き放ち岩を降りていく。
扱いづらい。

そう思ってしまう。

やはり兵隊は命令に従ってこそだ。自我を持たせ、いずれは人間をも蘇らせてみせる、といった研究は既にこの段階で完成してはいるが、戦いに呼び出すのは不味かったようだ。このように自分の意志で勝手に動かれてはたまらない。止めれば止まるのだろうか…
面倒だ。どうせ無効化するなら抵抗されるより殺した方が早い。

まあ、俺はこれ以上することはないだろう。

そう考えて俺は岩の上に座って戦いの行方を見守ることにした。

S i d e o u t

S i d e 草薙 亮

アスナが烏族にハリセンを持つてる手を掴まれて無力化された。
俺と刹那が助けようとほぼ同時に踏み出した瞬間…

遠くで大きな光の柱が上がった。

「な、なんだ!？」

「あ、あの光の柱は!？」

俺、刹那も一瞬我を忘れてその巨大な柱を見つめていた。

あの柱：何かに似ている…そう、つい先ほど見たあれの縮小版：

「妖怪の召喚か！」

つまりこいつらの目的は全てこの為だったと言っわけか！

親書を狙ったのはついで程度の物事だったのだろう。正真正銘の目的はこのかの魔力を使用したこの妖怪の召喚のため！

あの光の柱が出ているということはもう時間がない！

「どうやらクライアントの千草はんの計画上手くいってるみたいですね。あの可愛い魔法使い君は間に合わんかったんやろか…」

聞き覚えのあるこの場にそぐわない陽気な声が出た。俺と刹那の背後の森からからその場に合わない白いゴスロリな格好の少女が現れた。

「ま、ウチには関係ありまへんけどな…草薙はん、刹那センパイ」

「月…詠！」

隣から明らかに焦った刹那の声が聞こえる。これを最悪と呼ばずに何を最悪と呼ぶのかというくらいに状況だ。

敵はまだざつと50近く、しかも強敵だ。倒せないことはないが一体一体が先ほどまでの比ではない。

さらに俺の予想が当たっているとしたらあの柱から巨大な妖怪が現れるまでもう時間がない。おそらくネギ君は間に合わなかったの

だろう。

とすればあちらに援軍を送るため戦力を分散せねばならないが…

アスナが既に無力化されている。どうやら殺す気はないらしいので助けようと思えば助けられるが…下手に動けば誰かが集中攻撃を受ける。

こっちは動くことが出来ないのにあつちは好きなききに動くことが出来る。

「王手つてか…」

飛車角落ち、王手まであと一手。

どうする…思考を止めるな。何か、何かあるはずだ。何か…

「邪魔ですよ」

どこからの声か…聞こえた瞬間アスナが解放された。いや、掴んでいた烏族の首だけがなくなり霧散したと言ったほうが正しい。いつの間になっていたのか浅葱色の着物を着た青年が先ほどまで烏族のいた後ろで刀を振りぬいた状態で立っていた。

青年は刀を鞘に納めるとアスナに向かって無造作に近づいてくる。

「あ、ありがとう…でいいのかしら？」

アスナが青年に声を掛けたが…何故だろう。嫌な予感が止まらない。戦闘で出た汗とはまた別の汗が噴出してくる。

青年はアスナを一瞥すると、刀に手を掛けた

「へ？」

「アスナ！逃げろ！」

既に居合いの体制に入っている青年。呆然とするアスナ。俺と刹那がほぼ同時に地面を蹴り、跳ぶが一瞬の差で間に合わない！

瞬間、世界の全てがスローモーシヨンになったように錯覚する。

居合いで引き抜かれた刀が月明かりを反射し煌く。次の瞬間にはアスナの胴と首は別れる。

俺は…無力…なのか！

「む…」

振りぬかれた刀がアスナの頭を…掠めた。掠めた刀の切っ先がアスナの髪の毛を数本切り取り宙に舞わせる。

アスナが動いたわけではなく、俺や刹那も何かした訳ではない。

しかし明らかに金属を弾く音が青年の刀から響いた。

また敵の援軍か？それとも味方か？そんなことどうでもいい！今はこの一瞬のチャンスを逃すわけには行かない！

「アスナ！無事か！」

青年からアスナを抱え込むように素早く離れる。

傷一つない。生きている。生きていた！

一瞬だが涙腺を緩むのを感じるがそれを引き締めてアスナの様子を確認する。

「……………」

「アスナ？」

アスナの顔は青というのも生ぬるいほど真っ白くなっていた。茫然自失している。初めての『死』の恐怖に当てられたのか？
とにかく意識が飛んでしまっている。これでは……

『喰らえ！』

いつの間に接近されたのか。巨大な鉄骨を振りかぶった鬼が目の前にいた。アスナの救出に気を向けすぎたらしい。刹那は既に月詠と戦闘を行っていて何かを叫んでいるが一杯一杯だ。

明らかに避けるタイミングを逸している。反射的にアスナを体の内側に入れて衝撃を殺すために気を込める。

「らしくないな。二人とも」

またもどこから聞こえたのか。

ガアン！ガアン！ガアン！

と銃を発砲するような音と共が連続する。放たれた音は俺に振り下ろされかけていた鉄骨をへし折り、その鬼と近くの妖怪たちの急所を次々と貫き霧散させる。

『これは……術を施された弾丸！？……何奴！？』

近くの鬼たちが騒ぎ出す。が、こんな狙撃をやる奴は俺たちの周りで一人しかいない！

「龍宮か！」

「存外手強いのがいるようだ。傭兵を雇う気はあるかな？」

声のほうを確認する。想像通り、いたのは龍宮真名本人だ。どうやってここに来たのかは知らない。が、これ以上ない援軍の登場だ。手に持っているのは恐らくライフル銃だが・・・ボルトアクションというのがなんと龍宮らしい。それでいてあの連射と命中率を誇るのだから恐るべきと言っべきか。

「うひゃー あのデカいの本物アルかー？ 強そうアルねー」

ひょい、と龍宮の後ろからチャイナ服の少女…古菲が顔を出した。後ろにいたのか。今まで気づかなかった。

「生憎今は手持ちないんだけどな」

「なに、学園に帰るまで待つき。その方が吹っかけられそうだし」

お互い口元に笑みが浮かぶ。こんな状態でも軽口を叩けるようになったのは多少でも余裕が出たせいだと信じたい。

「その傭兵、今日一日雇った」

「契約成立と…」

「古菲も帰ってからでいいか？」

「うん？私は面白そうだから真名に付いてきただけアルけど…」

「構わん！手伝ってくれるなら一日言うこと聞いてやる！」

「乗ったアル！」

いきなりやる気になった古菲を見て口が滑ったと思った。

「ほう、それは面白い。草薙さん、私も古と同じもので構わないよ」

ほらこついつことになる！

「あー、もうそれでいいならそれでいいよ。頼むぜ」
「了解した」

「とりあえずぶっ飛ばせばいいアルね？」

簡単に言えばそうだが女の子がぶっ飛ばすってどうなんだ。

「とりあえず草薙さんはアスナを起こしたほうがいい」

「いや、その前に俺も一つやっておくことがある」

とりあえず真名や古菲がそこら辺の妖怪に負けるとは思わないが・
・あの青年。あれは別格だ。

何故かこちらの行動を待っていてくれるようだが・・・
アスナを抱えたまま青年を睨む。

「お前、何者だ」

「何者・・・ですか。人にもものを尋ねるときは自分からというのが
一般では？」

「む・・・」

敵に説かれるとは・・・

「まあ私は既に人間じゃないのでこれは当てはまらないんですけど」

人間じゃない・・・？青年が自嘲気味に笑みを浮かべたのを見て
言葉の意味を考える。

「まあ冥土に行く人にくらい知っておいて貰ってもいいかもしれま
せん。これやるのも久しぶりですけど・・・」

青年が刀を抜く。その瞬間先ほどまでのほほんとした青年の雰囲気
気が不気味なものに変わった。

「一番隊組長、沖田総司…参る」

沖田総司！？あの新撰組最強の剣客か！

ということは死体使いが召喚した駒ってことか。それにしてはシ
ネマ村であった武者鎧はよりずいぶん人間臭いが…

沖田総司が刀を構えて鋭い突きを放ってくる。狙いは俺の首筋。
そのままいけば俺の首は無くなっているだろうが…

今の俺たちには最強の銃使いがいる。俺の背後から銃の発砲音が
響く。

「またですか…」

沖田総司が再び刀の軌道を変えてその銃弾を弾いた。

俺たちが下がるのを援護してくれているのか続けての弾丸の雨に
沖田総司が下がり始める。

時間稼ぎはそれで十分だった。

最早相手の切り札も知った。ならばこちらもジョーカーを切るだ
けだ。

「舞え！女王！」

右手に込めていた魔力を解放。右手から放たれた魔力が眩い光を
放つ。

一瞬意識を持っていかれそうになったがすぐにはつきりと意識が覚醒する。

光が収まるとそこには西洋甲冑に身を包み、長い黒髪を後ろで束ねた長身の女性、テディアが立っていた。

「召喚に応じ推参いたしました、王よ。この場は一切をお任せください」

やはり言葉を発さなくても通っているようだ。

腰の西洋剣を正眼にと抜き放ったテディアが沖田総司に狙いをつける。

「頼む」

「もつたいないお言葉です。では…」

瞬間、テディアが地面を蹴った。

「おい、アスナ！おい！」

「う……ん？」

何度かアスナに呼びかけるとアスナが軽く反応した。もう直ぐ目を覚ましそうだ。

いのよ！」

「まあそれは追々、な…！」

「へ？」

唐突に俺が突き飛ばしたことでアスナが水の中に尻餅をつき、先ほどまでアスナのいた場所に剣が振り下ろされる。

『ちい！』

「話の腰折るんじゃないよ！『炎の1矢』！！」

再度剣を振り上げた烏族の顔面に魔法の矢を叩き込む。

「あ、ありがとう」

「ああ、まだ行けるか？」

「うん、私もまだま…」

アスナが最後まで言い終わる前に、ドン！と地面が揺れた。

「な、なんだ！？」

「ちょ…！皆アレは…！」

アスナが光の柱を指す。

光の柱の中から・・・巨大な鬼のようなシルエットが現れていた。遠くだから大きさは分からないが由に数十mを超える巨大な体に二面四手の…鬼。

しかもそれはまだ上半身しか出ていない。下半身も出てくればどれだけの大きさになるのかは皆目検討もつかない。

「ネギのやつ！間に合わなかったの！？」

「分かりません！でも助けに行かなければ…！」

「アスナ、刹那！お前ら行け！」

「そ、そんな！」

「それでは皆さんが！」

「アレが出ればこのかは助けられなくなる！目的を忘れるな！」

「……………！！！」

「道は俺が作る！」

「分かりました！」

刹那が決意のこもった声で答えた。さつてと、俺の仕事ですな！

「『フラマ・ブラスト・マテリアル！』」

俺が魔法を唱えたのを見てアスナと刹那が俺の左右を妖怪から守るためにつく。

「『炎の精霊19柱。集い来たりて敵を貫け！！魔法の射手！連弾、炎の19矢』！！！」

唱えると共に俺の正面、光の柱方面に群がる妖怪を吹き飛ばし道を作り出す。

「行け！」

「はい！」

「任せたわよ！」

アスナと刹那が直ぐ森の中へと消える。

本来は俺も行きたいところだけど……………流石にこの場に生徒だけを残していくわけにもいかないしな。

「はあああああああ！」
「ふっ！」

様子を見るために振り返った瞬間、その背後で巨大な火花が散った。

二つの影が巨大な火花を上げながらそこかしこでぶつかりあう。形容するならそれは剣の竜巻だ。

近くに寄れば瞬間に細切れにされる竜巻。それは激しく移動しながら近くにいる妖怪たちを切り裂き、岩を両断し、水を巻き上げ激しい剣戟を上げる。

辛うじて目で終えるその影の正体は、テディアと沖田総司だ。

テディアの強さも始めてみるが沖田総司の動きには目を見張るものがある。彼は新撰組最強とはいえかつては一人の人間だ。

そのため機動力ではテディアの足元にも及ばない。むしろ俺よりも遅いくらいだ。

それを・・・彼は剣の腕だけで攻撃を読み、受け止め、反撃までしている。

確かにテディアの攻撃は当たっているが死体という性質上、倒れることはない。

決して攻撃の当たることの無いテディアと攻撃を受けても倒れることのない沖田。

決着のつきそうに無いこの戦いだ。明らかに分が悪いのはテディアだ。

テディアたちが疲労するかどうかは分からないが、それでも目は慣れる。動きが読まれれば沖田のあの必殺の刀がテディアに決まる。それで終わりだ。

古菲と真名は前衛と後衛という見事に役割を分担して月詠を牽制

し、周囲の妖怪を倒している。

あれなら俺の助けはいらんじやないだろうか。まあそれでも
おいていくなんて選択肢は無かったんだけど・・・

ならば俺がするのはただ一つ。術者を倒す、これだけだ！
そう意気込んだ瞬間

坊や、聞こえるか？ 坊や。

頭の中に声が響いた。

S i d e o u t

奪還の為…前編（後書き）

後編も同じくらいの長さです。

夜には上げます。

誤字脱字表現のミス、矛盾についての指摘は遠慮なくお願いします。

奪還の為…後編（前書き）

続きですので前編を先に見てください。

奪還の為…後編

Side 草薙 亮

『わずかだが貴様の戦い、覗かせてもらったぞ……。まだ限界ではない筈だ。坊や！ 意地を見せてみる！ あと一分半、持ち堪えられたなら私が全てを終わらせてやる！』

全てを見下ろすように尊大な、しかし聞き覚えのある少女の声が頭の中に響いた。

『ガキならガキらしく後のことは大人に任せてな！』

そしてどこまでも上から目線のこの言い方。間違いない、エヴァンジェリンだ。

しかし…一分半で全てを終わらせる！？ 呪いと結界で学園から出られないはずのあいつがどうやって…

まあ…妖怪軍団、死体の新撰組、果ては4つ手の巨人まで出てくれば最早出てこないものなんてないじゃないか…
ならばあの巨人は任せてみるのもいいだろう。

『それから草薙！ 聞こえているだろう？』

「うえ！？」

いきなり名指しされたことで変な声を上げてしまった。龍宮と古菲にもきこえているのだろう。

二人が戦いながらこちらに視線を向けたのに気づいた。

ということはここら周辺にいる俺たち全員に聞こえていると考え

た方がいいだろう。

『お前が私に自ら跪く位の實力差を見せてやる。さっさと来い！当然貴様に選択肢は無いからな』

「おいしいiiiiiiii！俺の意思は完全無視か！？」

『来なかった場合は今の私の全力を持って殺してやるさ』

「聞こえてんのかよ！」

俺のツツコミには完全無視で頭の中の声が消える。

あいつは悪者なんてレベルじゃない。吸血鬼になってから精神レベルも成長してないんじゃないかと思うぐらいのワガママ振りだ。

かと言って龍宮と古菲を置いてなんて行けないし、しかし行かなかったら後でエヴァに殺されるだろうし…

理由は知らんが俺を殺す手段なんてあいついくらでもあるだろうしな。

「随分厄介な人に目を付けられたみたいじゃないか」

いつの間に来たのかライフル銃から2丁拳銃に持ち替えた龍宮が背後にいた。

「そうアル。今の声割とホンキだたアルよ？行かないと後がこわいネ」

龍宮と一緒に下がってきたんだろう。古菲も近づいてきた妖怪の顎を掌底で弾き上げながら言う。

「いや、しかしだなあ…」

「そんなに私たちが信用ないかい？」

「む、それは聞き捨てならないアルよ！」

「そついつのじゃないんだが…」

「なに、ここまで数が減っているんだ。あの剣士以外は私たちでも何とかなる」

「それに…」

古菲が言葉を言おうとした瞬間、また背後で激しい剣戟が響いた。

「一番厄介なのは草薙さんのお連れさんが抑えてくれてるネ」

「そついうことだ」

龍宮がニヤリと笑みを向けてくる。

はあ、そこまで言われたら従わない方が悪いみたいじゃないかよ。

「分かった。ならお前たちに任せるとするよ」

「うむ、任された」

「信頼されるのは気分いいネ」

そう言った二人が再度戦闘を再開する。巨大な鬼の方向に集まっている妖怪を蹴散らして俺の離脱する道を作り出してくれた。

「二人とも無茶するなよ！」

「貸し一つってことで構わないよ」

「ワタシもそれで構わないネ」

「それは無事帰ってから考える！」

背中に二人の声を受けて地面を蹴る。

気が使えないせいでもいつものスピードは出ないが、それでも鍛えていた体は常人以上のスピードが出る。

森に入ってから気づいた。

先ほどまで岩の上で様子を見ていた男の姿が無かった。

恐らくあいつが指揮官兼沖田を召喚した男だろうが…一体どこに行っただんだ…？

ちっ、逃がしたのは痛かったか…仕方ない。今は目の前のことを片付ける！

「おや、貴方も離脱ですか？」

背後から急に声が聞こえた。

本能で体を前に倒しつつ上体を捻ると、頬に当たる寸前を何か冷たい物が通り過ぎた。

刀…だ…

反らした上体を更に捻り地面に両手をついてバクテンの要領で慌てて距離を取る。

刀の来たほうを見るとほぼ予想通り、沖田が肩に刀を担いだ状態で立っていた。

「王！ご無事で！？」

一瞬だけ遅れてテディアが俺を守るように沖田との間に降り立つ。

「申し訳ありません、一瞬の隙を突かれました！」

「いや、掠っただけだ。大した問題は無い」

そういいながら左頬を伝ってくる生暖かい血を左手で拭い取るが、

血は次々流れってくる。

痛みは感じないが傷は案外深いようだ。だが今はそんなこと言っている場合ではない。

「ああ、不意打ちの様な真似をして申し訳ありません」
「今更なにを！」

テディアが剣を沖田に向けるが、沖田は全く動じておらず構えも取るうとしない。

「いえ、そちらは僕に構っている暇はないのでは？それにこちらも守るべき主君がこの場にいないのでは戦う理由がありませんので。僕の任務は唯一つ、ご主君をお守りすること。これだけです。命令がない限り手は出さないのです」

やはり沖田はただの操り人形ではない。擬似的なものかもしれないが自分の意思で喋っている。

「では何故先ほど王を斬ろうとした！」
「たまたま僕の行く方向に居たからですよ。あれだけ無防備に背中を晒されると遂…ね」

そういいながら沖田は刀を鞘に納めた。どうやら本気でここで争う気はないようだ。

「そんなデタラメが…！」
「いやいい、テディア」
「し、しかし…」

「こちらも時間がない。確かにこいつくらい強い奴を放っておくのは危険だが目的を忘れるな」

「く…分かりました」

そう言っつてテディアも剣を収める。

「いや、話の分かる御仁で助かります。僕の生きていたころはこう言っつても斬りかかって来る人ばかりで困りましたよ」

「歴史上の人物に会えた貴重な体験中残念だがお前の長話に付き合っつる暇はない。用がないなら俺は行く」

「おや、それは残念ですね」

沖田は肩をすくめると俺達と少し離れた位置から森へと入っつた。

それを見届けて俺は再び巨人に向けて走り出す。テディアもそれに追従してきた。

が、明らかに俺が遅い…

やはり気抜きでは生身と変わらないせいだ。それでも元の世界からすれば桁違いに早い動きなのだが…

「テディア！」

「承知！失礼を！」

言葉を伝える前にテディアの左手が俺の右手を掴んだ。

その瞬間、テディアが一気に加速した。

俺の倍以上の速度を出し、森の木々が一気に視界に入っつては消えていく。

リョウメンスクナとの距離を一気に詰めるとテディアが叫んだ。

「跳びます！」

「おう！」

俺が右手に力を込めるのを確認し、テディアは正面の巨木を一足で天辺まで上りきる。そのまま木の先端を吹き飛ばすほどの脚力でリヨウメンスクナに向かって再度突撃する。

最早跳ぶではなく飛ぶだ。空気を切り裂く音が耳に響く。

空から祭壇を確認。瞬時に状況を確認する。

ネギ君とアスナがあのお白髪の少年と戦闘中、状況は不利。

レーザーの様なものが少年から放たれ、二人を粉塵が覆い隠す！

だが気配は二人とも健在！二人を信じて他の状況確認を優先する！

刹那は…正面？飛んでる！？ていうか羽が生えている！

純白の巨大な羽は月の光と巨人が出てきている光の柱の光が反射し、場違いにも俺は美しいと思ってしまった。

「テディア…」

「は…！」

「どこでもいい、ぶった斬れ。あのカブツは風情がない」

「承知！」

俺の命令を受けテディアが俺を更に上空へ放り投げ、魔力により加速。中空に浮いていた刹那を一瞬で抜き去り巨人に迫る。

テディアの剣が抜かれ、それに莫大な魔力が集中し始めた。それと同時に俺の体内の魔力が一気になくなっていくのを感じる。

一瞬気が遠くなったが、気を失うような無様な真似はしない。テディアがギリギリで抑えてくれるのもあるのだろう。

「はああああああああああああああああああああ！」

ここまでテディアの気合の声が聞こえた。

テディアの剣から巨大な、それこそ5mを超えるような光の剣が魔力により構成された。

その剣が振り上げられたのを見てリヨウメンスクナが迎撃行動を始める。

4つある内の右側の前方の手が剣を潰すべく圧倒的質量と速度でテディアに迫る。

デカイ：ただそれだけ。

それだけがそれこそがリヨウメンスクナの最大の特徴。
表現するなら正に壁が襲ってきているとしか表現できない。

それでもテディアは突撃を止めない。

振りかぶられた剣が今まででより激しい光を発する。

ブオン！

空気を切り裂く音とともに振り下ろされた光の剣が文字通り…

巨人の腕を切り裂いた！

「な、なんやとおおおおおおおおおおお！？」

天ヶ崎千草の声が当たり一面に響き渡る。

光の剣が完全に振り切られるとリヨウメンスクナの前右腕が完全に本体から切り離された。

轟音と共にリヨウメンスクナの腕がスロー再生のようにゆっくりと湖に落下し、妖怪たちと同じように消滅していく。

そしてその隙を逃す刹那ではない。

高速で接近した刹那が一気にこのかを奪還したのをこの目で確認した。

これで当初の目的は果たした！

後はこの場から逃げるのみ！

そう思った時、僅かだが体に微量だが魔力が戻るのを感じた。

それと同時に頭の中に声が響く。

（申し訳ありません。承った魔力を全て使い切りました。体の維持さえも…）

テディアだ。言葉から察するに俺の負担を減らす為に自分を構成している魔力さえも攻撃に転化したのだらう。そのせいで体を維持することが出来なくなっただ。

(いや、ここまでで十分だ。ありがとう)
(もったいないお言葉です)

そして安心感から忘れていた…

俺の体は現在落下中ということに…

まずい！非常にまずい！

気も魔力も、そも体力そのものも限界ギリギリだ！気を張っても無傷で着地できる確証がない！

「死ぬかも…」

ふとそう思った瞬間、体の落下が停止した。

「あれ？」

服の背中部分が何かに支えられている感覚がする。簡単に言えば背中を掴まれた猫みたいな状況だ。

この体制では後ろを確認することが出来ない。

「ご無事で？リョウさん」

そうか、こいつらが来てたんだっけな。
聞き慣れた声を聞いて胸をなでおろした。

「すまんな茶々丸」

「いえ、リョウさんが無茶をなさるのは想定範囲内ですの」

ぐ…まあ、いいか。

とりあえず潰れたカエルになるのだけは避けられた。

見える状況だけを確認しよう。

ネギ君たちのほうは…

ドン！

激しい音とともに水面を何かが吹き飛ばされていくのが一瞬確認できた。

その発信源を辿ると…

「だよなあ…」

予想通りだ。

あの小柄で目立つ金髪。悪役を醸し出すような黒マントを羽織ったエヴァンジェリンがそこには立っていた。

「マスター、結界弾セットアップ……了解」

茶々丸が呟く。おそらくエヴァンジェリンとの交信だろう。

ジャギン！

と俺の右側から大きな金属音がした。後ろは向けないが横は向け

るのでそれを確認すると…
銃…だ。

いや、銃なんて生易しいものではない。平均の人の身長を軽々と超える銃身と特徴的な銃口のそれは明らかにアンチマテリアルライフルだ。種類は分からないけど…

茶々丸はそれを右手だけで軽々と持ち上げるとリヨウメンスクナに構え…

「リヨウさん、耳を塞いだ方がいいですよ」

「へ？」

ドオン！

「うお！」

至近距離での発砲音に一瞬耳がその機能を失う。その音は雷と比較しても大差ない。

一瞬でも茶々丸の指示に従うのが遅かったら鼓膜が破れていたかもしれない。

その弾丸は確実に着弾し、巨大な結界がリヨウメンスクナの動きを止めた。

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

リヨウメンスクナの叫びが聞こえなくなったと思つた耳にさえ響く。
身動きが取れなくなった為結界を破る為に喚いているのだろう。

それを見ていると俺と茶々丸の左側にエヴァンジェリンが飛んできた。

口元は何か呪文を唱えているように見える。

その呪文を唱えるごとに、リヨウメンスクナの出ている湖から極大の氷柱が出現した。

学園で見た氷の矢や氷の塊の比ではない。それこそ氷河自体がいきなり地面から湧き出したようだ。

その氷柱はあつというまにリヨウメンスクナを覆っていく。

ようやく耳が元に戻ってきた。リヨウメンスクナの声も、辺りに響き渡るエヴァンジェリンの声も良く聞こえる。

「『全ての命あるものに等しき死を！其は安らぎ也！』」

リヨウメンスクナが頭の先まで氷付けになり…

「『終わる世界』…砕けるデカブツ」

砕け散った。まるでハンマーで割るように始めは中央に、そして次々に細かいひびが入っていき、あの巨体が砕け散った。

凍り付いている為霧散することなく、その巨体が粉々になりながら湖に落下していく。

「すげえ…」

地上から3mほどの所で茶々丸が俺の服を離す。そのまま自由落下で俺はエヴァンジェリンの隣に着地した。

「草薙さん！」

「ふ、中々無様だな。草薙亮」

「言ってる」

言われると思ってたけどな…こういう人を貶めるネタをこいつが見逃すはずもない。

「ま、貴様の召喚した奴も私には及ばないが中々のものだったな。貴様も相当規格外ということか」

「そうそう！あの人なんだったの！？あの巨人の腕を一回でバサッって！」

アスナが俺とエヴァンジェリンの会話に割り込んできた。

「あ、それ僕も聞きたいです」

ネギ君まで…

「んー、簡単に言うとアスナは知ってると思うがデギオンと同じだ。俺の召喚した使い魔…って言い方はないな。仲間か」

「召喚、ですか？」

「んー、つまりあの鬼とかと同じものってこと？」

「ものすごく簡単に言つとな。まあ学園に帰ったら改めて紹介するよ」

正直今召喚を使つたら一瞬で意識を失う自信がある。

「そういえばエヴァンジェリン、なんでお前ここにいるんだ？呪いと封印で動けないんじゃないの？」

「それについては私からご説明します」

先ほどから思っていた疑問にエヴァンジェリンの後ろに控えていた茶々丸が進み出てきた。

「強力な呪いの精霊を騙し続けるため、今現在複雑高度な儀式魔法の上、学園長自らが5秒に一回『マスターの京都行きは学業の一環である』という書類にハンコを絶えず押し続けているのです」

「今回の報酬として明日私が京都観光を終えるまで、ジジイにはハンコ地獄を続けてもらう。こんな機会は早々ないだろうからな」

「学園長死ぬんじゃないか？」

「ふん、自業自得だ。そもその原因はあのじじいの見通しの甘さにある。この程度の苦勞で済むなら安い程度だろ」

「ま、そうかもなあ」

今回ばかりはエヴァンジェリンの意見に賛成せざるを得ない。

一応ご愁傷様と心の中で祈っておこう。

「登校地獄の呪いと学園結界から逃れた今の私の力はほぼ全盛期と同等、反則気味の最強状態というわけさ」

エヴァンジェリンはそう言うと言と見せ付けるように魔力を解放する。ただ解放しただけなのに視認できるほど魔力を放っているのはその力の証拠だろう。

確かにこれは最強と言っても過言ではない。

「それより……いいか、貴様ら。今回の事を私が暇な時にやってい

る日本のテレビゲームに例えるとだな。最初の方のダンジョンとかで死に掛けてたら、何故かラスボスが助けに来てくれた様な物だ。次にこんな事が起こっても私の力は期待できんぞ。そこん所をよく肝に命じておけよ」

「ハア……ハア……はい……」

「む、流石にキツそうだなぼーや、大丈夫か？」

ネギ君の顔色は蒼白だ。流石に自分より何段階も上の敵を相手にするのはきつかったのだろう。

魔力はとづくに使い果たしているようだし…

そんな時…

「エヴァンジェリンさん！」

ネギ君が切羽詰った声を上げ、エヴァンジェリンに抱きついた。それはただ抱きついたのではなく、それこそ守るように…

一瞬遅れて俺も気づいた。エヴァンジェリンの後ろから現れつつある水の影…

あれは…エヴァンジェリンに吹っ飛ばされたはずの白髪の少年！

「 障壁突破『石の槍』」

少年が呪文を唱えた瞬間人間の腹部を十分貫けるほどの鋭さを持ったそれこそ名前の通り石の槍が高速でエヴァンジェリンとネギ君

に迫る！

「っのおー！」

「正真正銘今日の最後の力だバカヤロウ！」

ありつたけの気を両足に込めて瞬動、これほど上手く決まったこととはなくらい見事に石の槍の真横に回りこんだ。
考えるまもなくほぼ条件反射で気を込めた右足を振り上げる。

ペキーン！

ボギイ！

甲高い音を立てて石の槍が中ほどからへし折れた。
それとともに別のものが折れる音も響いた……俺の右足だ。
石の槍と接触したところから足はありえない方向に曲がっている。
それでも不思議と痛みを感じないのは必死だからなのか、火事場のバカ力というやつだろうか。

「どけ、リヨウー！」

後ろからエヴァンジェリンの声がした。言われなくても、体は自然に倒れこんでいる。既に足で体を支えることは出来ないのだから当然のことだ。

エヴァンジェリンが魔力の籠った手の一撃を放つと少年ごと橋の欄干を吹き飛ばした。

並みの人間ならあの一撃で死んでいるのだろうか…

「なるほど、吸血鬼の真祖ハイデライト・ウォーカーが護衛では分が悪い。今日のところは僕も退がることにするよ……」

いつの間に入れ替わったのか。少年は水へと変わりそのまま地面へと水だけが霧散した。

おそらく幻影かなにかを作って一瞬で離脱したんだろう。

「とお！」

それを見届けた瞬間俺の体は地面に倒れ伏した。先ほどもまでなかった右足の痛みが今は激しいほど感じる。

「リヨウさん、ご無事ですか？」

「草薙さん！大丈夫！？」

「ああ、なんと……っ！」

茶々丸とアスナに大丈夫といおうとしたが痛みで言葉が出ない。

「全く馬鹿なことしたもんだ。私は不死なんだぞ？体を貫かれた程度で死んだりなぞするものか」

エヴァンジェリンが俺の頭の横に立って見下ろすように言い放ったが……

「バカはお前だ。生徒が黙って傷つけられるのを見てる教師がどこにいるってんだよ」

「はあ、またそれが。なら教師という人種は馬鹿しかおらんのか？」
「さあ？俺が大馬鹿なだけかもな」

痛みに耐えながらも無理やり笑って見せると、エヴァンジェリンもいつもの呆れたような笑顔を俺に向けた。

「え、エヴァちゃん。さっきの子……」

「ああ、あのガキ、人間ではないな。動きに人工的なものを感じた。人形か或いは……。どこの手のものかは分からんが修学旅行中は私がいる。貴様達に手は出させんから安心しろ」

エヴァンジェリンの説明を聞いていて、ふと気づいた。いつもなら真っ先に安否を確認しに来る声が聞こえない。

そう思った瞬間、俺の足元から何かが倒れるような音が聞こえた。

「ど、どどどどうしたばーや！」

「ひでえ！兄貴の右半身が石化を！」

エヴァンジェリンが倒れたネギ君を見て慌てふためいている。

カモの言葉どおりネギ君の右半身がほぼ石化しつつあった

そうこうしているうちに祭壇の方から刹那とこのか、森の方から楓、犬上小太郎と思われる少年と綾瀬が走ってきた。楓もいて、綾瀬もいるということは龍宮、古菲、楓の3人は綾瀬が呼んでくれたのだろう。

これで綾瀬にも魔法がばれたか。だが今回はそれに救われた形になっただけな。

少し遅れて龍宮と古菲が合流する。二人とも服がところどころ破けていて傷だらけだが、大きな傷はないようだ。あのくらいなら傷跡は残らないだろう。

上半身だけ起こしてネギ君を抱えている茶々丸に話しかける。

「どうだ、状況は」
「非常に危険な状態です」

茶々丸は抑揚のない声でそう言い切った。

「ネギ先生の魔法抵抗力が高すぎる為、石化の進行速度が非常に遅いのです。このままでは首部分まで石化した時点で呼吸困難になり窒息してしまいます」

「優秀すぎるのが仇となったか……エヴァンジェリン、なんとかならいのか？」

「わ、私はそういう治癒系は苦手なんだ……不死身だから必要なかつたしな……」

流石のエヴァンジェリンも焦りの表情を隠せないでいる。

「気づくのが遅かったか。もう少し早ければ……」

「何か手があったの!？」

アスナが飛び掛るように聞いてくる。

「ここまで進行したら意味がない。しかもハイリスクだったしな」
「なに!」

「呪文をもらった右腕だけ切り落とすんだよ。その後エヴァンジェリンの魔法で凍らせて止血する。右手はなくなるが死ぬことはない」
「そ、そんな……」

俺の言葉にアスナも他の連中も絶句する。

それはそうだろう。俺が言ったのは真正銘最後の手段だ。

そもそもこの呪文は殺す為のものではなく本山の上位の術者なら

治せる程度のものみたいだし…

「お嬢様…」

「うん」

それまで黙っていたこのかが前に進み出てきた。

「あんな、アスナ…：ウチ、ネギ君にチューしてもええ？」

「な！なに言ってるのよこのか！この一大事に…！」

「いや…」

このかの言葉を聞いて取り乱すアスナをよそに俺は思い当たる節があった。刹那が先ほどこのかに囁いたのはこれだろう。

「『仮契約』…：だな？」

「そう、草薙さんの言うそれ…」

「え？」

アスナが俺とこのかを交互に見る。このかはそのままみんなの前に立って話し始めた。

「みんな…：せつちゃんに色々聞きました…：…：ありがとうございます」

このかが深々と頭を下げて誰も言葉を発しない。このかの決意を皆感じ取っているからだろう。

再びこのかが顔を上げた時、先ほどまでであった慌てたような顔はなく、しっかりとした顔のこのかがまっすぐと皆のことを見つめていた。

「今日はこんなにたくさんクラスのみんなにたすけてもらって…

……ウチにはこれくらいしかできひんから……」

そういうところのかは茶々丸と位置が変わってもらいネギ君の上半身を抱き上げる。

『仮契約』には対象の潜在能力を引き出す効果があると以前エヴァンジェリンが言っていた。シネマ村でのこのかの治癒能力を見ればその効果は期待できる。

逆に言えばこれでダメならネギ君の生存はほぼ絶望的だ。
全員が固唾を呑んで見守る中

「ネギ君……しっかり……」

このかとネギ君の唇が重なった……

当たり一面に夜を照らさんばかりの光が溢れる。

「んん……」

ネギ君の声が……聞こえた。

「このか……さん？よかった……無事だったんですね……」

その言葉を聴いた瞬間…全員が安堵の声を上げた。

S i d e o u t

S i d e 赤坂 一樹

夜が明けた…

主戦場から離れた少し拓いた森の一部。俺はそこで上りつつ朝日を寝転がりながら見てボンヤリとそう思った。

やはり天ヶ崎千草に任せたのは失敗だったのかもしれない…いや、結果が出てから過程の話をするのは汚いな…

計画は失敗、俺はまた元の山奥に幽閉されるだろう。禁を破っている分極刑もありえる。

まあ、今更言っても全て詮無きことか…

「赤坂はん!!」

聞き覚えのある声に上半身を起こすとそこには天ヶ崎千草がいた。

「あんさんも無事やったか」

「作戦は失敗のようだな」

「あんな化け物が出てきたらしゃあない。あんさんには悪いが一回仕切りなおしや」

「いや……」

「あ？」

「俺はここで抜けるよ。本山に行く」

「は、はあ！？何言つてはるんや！」

天ヶ崎千草が俺の胸元に掴み掛かってきて捲くし立ててきた。

「あんた自分の犯した罪を忘れたんちゃうやるな！山破りに禁術の使用、お嬢様の誘拐！これだけでも十分極刑もんなんやで！」

「だな」

「ほならもう一回再起計る方が現実的つてもんやる！」

天ヶ崎千草は未だに興奮冷めやらぬようだが俺の方は既にその気がうせてしまっている。

だから…

「すまないが俺の目的はもう果たした。これでお前に協力する必要性もなくなった。それ以上でも以下でもない」

そう、目的は達した。擬似的であるとはいえ沖田総司という歴史上の人物を召喚でき、それを使役できた。

自分の力でない部分が大きいとはいえ技術は全てこれであつているといふ正面は成った。これで俺の目的は果たしている。俺は先祖の研究の成果を確認できればそれでよかった。それだけだ。

そう考えていた俺の胸元から力が消えた。天ヶ崎千草が俺の胸元を離れたようだ。

「ほならもうあなたは邪魔や……ここで死んどき」

そう言いながらどこから抜いたのか抜き身の小太刀が左手に握られていた。

至極まっとうな答えだ。わざわざ情報源を見逃す必要性もないし、下手をしたら俺を懐柔される可能性も、技術が相手に渡る可能性もある。

どっちにしろ俺が抜けることでこいつにはデメリットしかないのだ。

目的を達した俺には生きる目的もない。

というよりさっさと先祖にこのことを報告に行きたい。

振り下ろされつつある小太刀を見つつ……

天ヶ崎千草がその場に倒れ伏した。

ただ単に気絶しているだけのようだ。が……問題は気絶させた人物だ。

俺の魔力は当に枯渇していた。お嬢様に貼り付けていた札もとつくと剥がされたのだろう。

もはや死体を一体たりとも使役する分も残っていない。

だって言うのに……

「なんでお前まだ残ってるんだ？」

目の前には俺の召喚した沖田総司が未だに残っている。手刀で気づかれずに天ヶ崎千草を気絶させたのもこいつだ。

「さあ？何故でしょう？」

召喚主である俺が分からないのに使役されてる側に分かるわけないか…

どうせもう消えるだろう。それよりも…

「すまなかったな。わざわざ呼び出してわずか数時間でまたあの世に戻るのか」

「いえ、中々楽しい相手に会えましたよ。それこそ僕の生きていた時代よりも面白いものを見れました。それに…」

そついいながら沖田は腰に差ししていた刀を差し出してきた

「病気で死んだ僕に最後の戦いの場を与えてくれた。感謝します。ご主君」

「そつか…」

差し出された『大和守安定』を受け取って抜いてみると既に刀身はボロボロだった。

これではまた魔力が足りても媒体がない。『大和守安定』も先祖がいつかの時の為に隠し通してきたものだ。これ以外の替えなどない。

「どうやら本当に最後みたいだな」

沖田に目をやると体ボロボロと崩れつつある。魔力で形成してい

た肉体がそれを失って原形を留めていられないのだ。

「そのようで、ではご主君…最後までご一緒できず、申し訳ありません」

沖田はその場で深々と礼をする。

朝日が昇りきった

眩しさで一瞬目が眩んだ。

明るさに慣れて沖田のいたところを見ると、そこには少量の灰だけが残っていた。

「ナンドヨツマンネエ、久々二手筈エノアル奴ト殺レルト思ッタノニヨウ」
「人形？」

上空から聞こえた声に顔を上げるとそこには小さな人形が自身の二倍ほどはある剣を担いで中空にフヨフヨと浮いていた。

「俺達を殺しにきたのか？」

「アア、ソウダヨ…ッテ言イタイトコロナンドガヨ…生ケ捕リニシ口、ッテノガゴ主人カラノ命令デナ」

「そうか、できれば俺も人形に殺されるなんていう不名誉は避けた

「かつたところだ」

「ンダヨ、抵抗シタラ腕クライ切ッテモ良イッテ言ワレテ来テミレバ…悪党甲斐ノネエ奴ダナ」

そう言いながら人形は剣を空中に放り投げて遊んでいる。

こいつの主人か…術式は知らんが人形に意思を与えるとは……—
体どれほどの力の持ち主なんだ…

「お前、主人の名前は？」

「アア！？俺ノコトヨリゴ主人ノコトカア！？マアイイケドヨ」

いいのかよ

「エヴァンジェリンダヨ。オ前ラ人間二八『闇ノ福音』トカノ方ガワカリヤスイカモナ」

『闇の福音』…そうか、通りで。

敵わないはずだ。上には上がいる。俺ら一族の研究よりもはるか先を行っている。

「すまないな小さな従者殿。では行こう。君の主人が想像通りの人なら朝日はきついだろうからな」

「ナンデテメエガ仕切ッテンダヨ！」

天ヶ崎千草を俺が担ぎ上げると人形は怒りながらも俺らを先導し始めた。

Side out

奪還の為…後編（後書き）

長かった修学旅行辺も次で終わりです。

誤字脱字表現の矛盾があればご指摘ください

追記、『設定』に内容を追加

戻る為…

Side 草薙 亮

昨夜の事件終了から数時間が経過した。

俺の右足はネギ君が治った後このかに治してもらったため、今では違和感があるくらいで問題なく歩くことが出来るようになっていた。ただし沖田から受けた左頬の刀傷は治らなかつた。どうやらこのかの能力は時間で治せたり治せなかつたりするらしい。本山の人にも見てもらったがこの傷は残るそうだ。今は大きなガーゼが当てられているが取ればかなり厳しい顔になるだろう。

亜子になんて言われるか…また泣くかもしれない…

とりあえず白髪の少年によって石化された本山の人たちは長さんも含めて早朝に戻ってきた使い手たちによって解呪されていた。

長さんたちが元に戻った直ぐ後に、気絶した天ヶ崎千草とそれを担いだ死体使い、赤坂一樹と名乗った男がチャチャゼロに連れられて本山へ投降。

犬上小太郎と共に厳重な監視下に置かれている。

白髪の少年と月詠の行方は知れないが、事件は収束に向かいつつあると行って良いだろう。

しかしチャチャゼロが来てるとは思わなかつた…しかも相手を捕まえるなんて…

あいつなら問答無用で敵はぶつた切るタイプだと思ってたから意

外だ。

何故あの白髪の少年が協力したのかは目下捜査中。謎が増えたよ
うな気もするが事件は一応の終結を見た。

そして現在、俺たちは仮眠を取っていた。ほとんどの奴らが不眠
で朝まで戦い抜いたのだ。

いくら大人びていてもそこは中学生。龍宮や長瀬でさえも今は眠
っているはずだ。

それから驚いたことに、俺達が戻った時、亜子は俺達が出て行っ
たときと同じ格好で門柱にもたれかかって眠っていた。

よほど不安だったのだろう。顔には涙が乾いた跡が残っていた。
おそらく俺達が行った後ずっとここで待っていたに違いない。
その亜子も今は他の面子と同じ部屋の布団で眠らせている。まあ
しばらくは起きないと思う。

ちなみに俺だが……眠っていない。体はボロボロ、魔力も限界な
のに何故か目が冴えている。

早朝の朝日というのは非常に明るいのを改めて実感しつつ、本山
の庭を見ながら縁側を散歩する。

「ん？なんだ、寝てないのか貴様」

掛けられた声に前を向くと、柵に腰掛けたエヴァンジェリンとそ
の横に控えた茶々丸がいた。

「ああ、なんか目が覚めてな」

「まああんな戦いの後だ。気分が高揚するのも分からなくはないが

……少しでも寝ておかないと今日がきついぞ」

「なんだ？心配してくれるのか？」

「アホか。今日は私も修学旅行に参加するんだ。案内がいなくてどうする」

「そうかい」

苦笑いしながらエヴァンジェリンの隣に腰掛ける。

「リョウさん、どうぞ」

「ん？ああ、ありがとう」

茶々丸がどこから出したのか緑茶の入った湯飲みを俺に差し出してきたのでありがたく受け取る。エヴァンジェリンも茶々丸から湯飲みを受け取って茶を啜っている。

一口だけ口に含む。

うむ…美味い…

「そういえばまだ礼を言っていなかったな。ありがとう、二人とも」

「貴様に礼を言われる筋合いはない…ギブ& amp・テイクだ。助ける代わりに今日一日は自由っていうな」

「私はマスターについて来ただけです。御礼を言われる必要はありませんよ」

「それでも、さ」

「そんなに礼をしたいなら今日の案内で満足させる。それで十分だ」

エヴァンジェリンはそう言うと茶々丸に茶のお代わりを要求し、茶々丸が手際よく湯飲みに入れた茶を入れる。

数分そんなことをしていると…

「おはようございます…」

庭先から刹那が現れた。右肩にはいつもの竹刀袋とどこかへ行くのか少し大きめの荷物を掛けている。

「草薙さんも起きていたんですね。丁度良かったです」

「なんだ、どっか行くのか？」

「はい、それに関しても話しておかなくてはならないことが…」

刹那の口調はいつも真面目だが今回は異常だ。真面目なのはそうだが…なにか悲しい雰囲気を負っている。

俺が話を聞く姿勢になったのを確認して刹那が口を開いた。

「御三方には…お別れを言いに来ました」

「お別れ？」

意味が分からない…が、エヴァンジェリンは理解しているようだ。相変わらず湯飲みから口を外さない。お茶自体は飲んでいないみたいなので話は聞いているのは分かる。

「なんでまたそんな急に…」

「……………」

刹那が押し黙った…

しかし俺からも掛ける言葉はない。ここは刹那が口を開くまで待つしかない。

「……………」した

「え？」

しばらくの沈黙の後…刹那がポツリと呟いた。それは小さすぎて俺達のところには聞こえないほどの声だったが刹那は下を向いたまま震えている。

あれでも相当の勇氣を持って放った言葉だったのだろうが…聞こえないものはどうしようもない。

「つ……を……お……様に………」

最後の方は聞き取れた。このか関係でなにかあったのだろう。刹那が再び、今度は俺達にも聞こえるほどまで声を出して言った。

「翼を………お嬢様に見られてしまいました………」
「は？」

思わず間抜けな声が出てしまった。翼って…あれだよな。あのこのかを助ける時に刹那の背中から生えていた純白の翼。それが何故俺たちと別れることになるのか全く繋がらない。

「こいつはな、人間と烏族のハーフなんだよ」

「え、エヴァンジェリンさん!？」

「貴様が話す気がないのなら私が話す。一々貴様は面倒だ」

エヴァンジェリンが心底面倒くさそうに俺の方を向いた。

「烏族では人間とのハーフ、しかも白い羽は禁忌とされる存在なんだぞうだ。どうせ昔そのせいで捨てられたか里を追われたりしたんだろ」

「……………」

刹那が押し黙る。反論がないということはそれは肯定ということ

だ。

「はあ、刹那がハーフねえ…」

「で？それが俺達と別れるのにどう関係あるんだ？」

「一族の『掟』なんです…お嬢様にあの姿を見られてしまった以上仕方ないのです。お嬢様を守るといふ誓いも果たし、神鳴流に拾われた私を育ててくれた近衛家への御恩も返すことができました。ついでには草薙さん、お嬢様のことをよろしくお願いしたいのです」

そう言つて右膝を着いて頭を下げてくる刹那を見ながら俺は考える。

『掟』…ねえ。

どうせまたそついうのに限つてすごい面倒くさいのなんだろう。聞いて内容が変わるなら聞くがどうせ俺が聞いても変わるわけはないので俺は聞く気はない。

まあここで言える言葉は一つだけ

「まあお前が行くつてんなら止めないし、このかのことも任されてもいいけど…」

「なんだ、止めんのか？てつきり責様は止めると思つてたが」

「俺は基本本人の意思を尊重したいからな。刹那がどうしてもつて言つたら俺は止めない。ただこれだけ聞いておきたい」

エヴァンジェリンの問いにそう答えると、俺は刹那の方を向く。

刹那がこちらを向いたのを確認して言葉を発した。

「本当にそれで後悔はないな？」

「こつ…かい…？」

「お前がその行為をとつてお前はそれでいいかもしれない。だが残

されるやつらの気持ちを考えたことあるのか？」
「……………」

刹那が言葉に詰まる。刹那が後悔さえないなら俺もそれでいいと思う。

しかし今にも泣きそうな目でこちらを見ている刹那を見ると後悔がないなんて思えるわけではない。

「どうせお前のことだから黙っていくつもりなんだろうけど、残されたこのかはどうする？お前とは幼馴染で、親友で、誰よりも大事な人じゃないのか」
「当たり前です！」

刹那がそればかりは譲れないと叫んだ。

「じゃあ何故途中で放り出す。何で何も言わないで立ち去る」

「で、ですからそれは『掟』で……」

「はつきり言うぞ刹那。それは『逃げ』だ」

「に、逃げ？」

「俺はお前じゃないから分からないが、お前の過去は凄惨なものだろうよ。差別を受けてきたかもしれない。化け物と呼ばれたかもしれない。お前はそれが怖いんだ」

刹那が再び黙るが俺は言葉を続ける。

「お前は今日このかやアスナたちに会ったとき、過去の奴らと同じように自分も差別されるんじゃないか、化け物と呼ばれるんじゃないかと思ってる。それならそういわれる前に『掟』を理由に逃げてしまえば自分の中では友達だった事実は消えない。違うか？」

「ち……ちが……わ、私は……」

刹那の両目から大粒の涙が溢れ出した。肩を震わせ、嗚咽で言葉がうまく出てきていない。

否定したいのに否定できない。過去のトラウマなんて中々払拭できるものじゃない。それが出来るのはもっと大人になってからだ。まだ14歳の少女にそれをしるというのは辛すぎる。それに

「なんで疑う。なんであいつらを信じてやれない」
「……………え？」

涙を流しながらも刹那が顔を上げた。

「どうせ昨日の夜あの場にいた大半のやつはお前の翼を見ているだろう。一緒にいたこのかやアスナなんて特にな。あいつら最初になんて言った？化け物なんて言ったか？俺の推測になるけどあいつら、綺麗だーとか天使みたいだーなんて言ったんじゃないのか？」

「そ、それは……………そうですけど」

ふむ、やっぱり予想通りか。外れたらどうしようかと思っただけであいつらならそういうよな。

「それによく思い出せ。俺の隣にいるエヴァンジェリンは吸血鬼だぞ？こいつが見た目だけでも化け物に見えるか？俺にはただの幼女にしか見えんぞ？」

「殺すぞ貴様……………」

隣からもの凄い魔力の流れを感じる……………ちょっと地雷踏んだ？

「ま、まあエヴァンジェリンのことは置いておくとしても…………俺から見ればお前なんてただの14歳の少女だ。翼が生えていようが生え

ていまいがそれ以上でも以下でもないんだよ」

「……………」
「それに…お前は既に一族を抜けてるんだろ？何でその『掟』に従う必要がある？」

刹那の肩が少し反応したのを見た。後はこいつの覚悟次第だ。

「ま、俺の話は終了だ。せめてこのかには言っていたほうがいいと思うぞ。あいつお前がどうか行ったなんて知ったら飛んでも探しに行きそうだからな。見つからなかったら見つからなかったで俺が宥めるのは無理だろうし」

「そう…ですか……………分かりました。お嬢様に会ってきます…話…してみます」

刹那が右手で両目の涙をグシグシと拭き取ると、俺達に一礼してこのかたちのいる部屋の方へと歩いていった。

「賭けるかエヴァンジェリン。刹那が残るかどうか」

「あれを見た後それを受けるやつがいたらそいつの頭を抜き出して保存してやりたいくらいだよ」

「そうか？案外分かんと思うがな。茶々丸くおかわり」
「はい、どうぞ」

ま、当たるも八卦、当たらぬも八卦。どうなるかはあいつら次第ってな。

エヴァンジェリンの視線を無視しつつ茶々丸に茶のお代わりを貰う。

それを飲むとしたとき、このかたちの部屋の方から声が聞こえてきた。

『せつちゃんせつちゃん、大変やーっ』
『大変よ！刹那さーんっ』

それとともに声の方向が非常に騒がしくなっていく。どうやら他の面子も起きたようだ。

その内その声の中にも刹那の声が混じり始めるのを聞いて俺は自然と笑っていた。

「ほら見る」

エヴァンジェリンがつまらなさそうに湯飲みを一気に煽った。

まあ俺にはこうなる確証はなかった。少々賭けだったが…まあ賭けてよかったと思う。

このかも、刹那も、二人とも小さい時から一緒に今まで親友として生きてきた。その絆があんな翼程度で壊れるわけは無い。

刹那は自分で責任を負い過ぎる気質があるのは知っていた。それがこのかのためというのも…

このかを守る為に自分に厳しくしなければならなかったのだろう。この2年、一緒にいたいのを我慢して泣いた夜もあったはずだ。

でも今からでも…いや、今だからこそそれを取り戻すくらいあいっつには笑って欲しい。

我慢っていうのは報われないと意味が無いと思う。我慢した分くらいは楽しんでもいいはずだ。

「さて、俺達も行くか」

「うん？」

「行くんだろ？京都」

「そつだな、茶番に付き合った代償くらいは楽しませろよ」
「へいへい」

空を見上げると、空が赤から青に変わりつつあった。雲は一つもない。

今日も晴れそつだ…

遠くからアスナたちの元気な声が聞こえてきた。

修学旅行4日目。

約束通り俺はエヴァンジェリンと茶々丸の京都観光に付き合っていた。

エヴァンジェリンは清水寺など俺達が前日までに行っていた有名などころを見たかったらしく、他に強制連行されてきた5班の面子兼朝倉などは文句を言っていた。

まあこれも復習と思えばいいのではないだろうか。

それとこの後今日の本命の用事がある。

ネギ君のお父さん、ナギ・スプリングフィールドが住んでいたとされる京都の隠れ家へ行くのだ。そのために詠春さんと待ち合わせをしている。

エヴァンジェリンにとってはどっちも本命の用事かもしれないが、それ以外の面子はこっちのみが本命だ。

待ち合わせ時間近くなったので観光を切り上げて待ち合わせ場所に向かう。

「ふむ、中々いい案内だったぞ。満足できた」

「まあ一回言ったところだしな」

エヴァンジェリンの言葉にそう答える。エヴァンジェリンは俺が解説するまでもなく結構な知識を持っていたのだが何故か俺に案内させたがった。

人との視点と自分の視点の違いをみたかったのだろうか？何にしても満足いったみたいでよかった。

しかし他の面子もかなり元気だ。全員俺と同じ状況でほとんど寝

ていないにも関わらずワイワイと談笑している。

むむむ、若い…

「やあ皆さん、休めましたか？」

集合場所には既に詠春さんが待っていた。流石に私服ではなく私服でタバコを吸っている。

「彼の家はこの奥の3階建ての狭い建物ですよ。おっと…」

「お父様タバコアカン！」

「ははは、厳しくなつたねこのか」

先導しようとしていた長さんのタバコをこのかが取り上げた。

うーん…：どっからどう見てもそこら辺にいる仲のいい親子にしか見えない。実際仲のいい親子のだが関西呪術協会の長とその娘には見えない。

後続の魔法と関係ない連中が離れたところで長さんが小声で話しかけてきた。

「スクナの再封印は完了しました」

「うむ、ご苦労、近衛詠春。面倒を押し付けて悪いな」

「いえ、こちらこそ。今回は本当に感謝してます」

驚いたことにリョウメンスクナはあそこまで粉々にされても生きている、ということだ。流石に伝説にもなる生物は生命力も伊達ではない。

「長さん、小太郎君は……」

ネギ君がそう言った。同年代として何か通じるところがあったのだろうか。

「それほど重くはならないでしょうがああの少年と赤坂一樹にはそれなりの処罰はあると思います。天ヶ崎千草についても……まあその辺りは私たちにお任せください」

「は、はあ……」

犬上小太郎と赤坂一樹は戦いに参加しただけなので刑罰は軽めなのだろう。しかし主犯格の天ヶ崎千草については極刑は免れないのは目に見えている。

流石に10歳の少年にそのことを言うのは憚られたのか、詠春さんは天ヶ崎千草のことについては言葉を濁していた。

月詠については依然行方が知れず、神鳴流関係者の方でも追えていないらしいのだからどうしようもない。

それに今気になるのはもう終わったことではなく、今もある脅威のことだ。

「詠春さん、それであるの白髪の少年については……」

「それについては現在調査中です。今わかつてるところでは、彼が自ら名乗った『フェイト・アーウェルンクス』という名前と……一月前にイスタンプールの魔法協会から日本へ研修として派遣されたということしか……」

「アーウェルンクス……確か禍を転じて福となすローマの神だったか。どうせ偽名だろうが大仰な名前を名乗るものだ」

エヴァンジェリンがそう言った。当然名前は偽名だろうしイスタンプールの魔法協会も知らないだろう。だがあそこまでの腕前なの

だからそのくらいの名前を名乗ってもあながち間違いでもない気がする。世界を変えられるとは思わないけど…

そんなことを話しているうちに目的地に着いた。天文台らしきものがある草木の生い茂った家。それでも一人暮らしには十分な大きさだ。

「わー！」

中に入ってみると、壁一面の棚に所狭しと本が並べられており、図書館島探検部の面々が喜びの声を上げた。

「お前ら一応人のものだからあんまり手荒に扱うなよ」

「分かっているって！ウチらも泥棒じゃないんだから」

「ハルナのことは私たちで見張るので安心してくださって結構です」

「ちょ、ひど！」

そういいながらも早乙女が早々にかかっている梯子を上っていき目に入った何冊かを取り出し始める。

「すみません…」

「いえ、彼女達も故人のものですし無茶はしませんでしょう」

「それよりもいいのがある」

「一般人の目からは普通の本にしか見えない魔法が張ってあるので問題はありせんよ」

エヴァンジェリンが少しあきれたように言ったが、そこはやはり魔法使いの家。普通に見ても内容は分からないらしい。俺も適当に一冊とって見たが様々な言語で書かれた本が多く、魔法のことと分かるものは素人目には何も無い。

それ以前に日本語で書かれている書物の方が少なく、正直ギリシ

ヤ語とか出されても全く読めない…

「このか、刹那君、こっちへ…アスナ君と草薙君も、あなたたちには色々話しておいた方がいいでしょう」

いつの間にか二階にいた詠春さんが一階のロビーにで談笑していた俺達を呼んだ。

上がっていくとエヴァンジェリン、茶々丸、ネギ君が既にいて机の前に集まって一つの写真を見ている。

「その写真は？」

「サウザンドマスターの戦友達です。ちなみに黒い服を着ているのが私です」

「戦友？」

「ええ、20年前の写真です」

20年前…そういえば前茶々丸から聞いたがそのころ魔法世界で大戦があつたらしい。

「私は、かつての大戦でまだ少年だったナギと共に戦った戦友でした…そして、20年前に平和が戻った時、彼は既に数々の活躍から英雄…サウザンドマスターと呼ばれていたのです。」

なるほど…サウザンドマスターという名称はそこで生まれたのか。皆が憧れる理由もこれで分かった。

活躍がなんなのかは知らないが、おそらくその戦争の原因を断ち切るような働きをしていたのだろう。

意外なことに天ヶ崎千草の両親もその大戦で死亡しているらしい。となればあの執拗なまでの西洋魔術師の恨みも納得できるかもしれない。

「あの大战から、私と彼は無二の友であったと思います。しかし…彼は10年前、突然姿を消す…彼の最後の足取り、彼がどうなったかを知る者はいません。ただし、公式の記録では1993年に、死亡…それ以上のことは私にも…すいません、ネギ君」
「い、いえ…ありがとうございます」

その後、長さんは何か細長い巻かれた紙をネギ君に渡していた。何かは分からないが…ネギ君のお父さんに関する事なんだろう。なら他人の俺がこれ以上首を突っ込んでいいものではない。

…それよりも…詠春さんには聞かなくてはいけないことがある…

「詠春さん？」

「なんででしょうか、草薙君」

「このかたちを呼んだのは…なんとなく分かります。しかしこの場に自分を呼ぶ意味はなかったのでは？」

今の話を聞いていても俺に関係することは出てこない。

「お義父さんから聞いたんですが君は…ふむ、どうもこの世界についての常識があまりないということらしいからね。この機に知っておいて貰おうかと」

「い…」

あ、あの狸爺め…ていうかこの世界って…もしかして俺が別の世界の人間って分かったのか？

「それと…」

「それと？」

「改めてこのかのことをお願いしたかったから、というのも理由かな」

そういうと詠春さんは軽く笑った。なんというか…人を乗せるのがうまい人だ。

「分かりました。責任を持って、娘さんをお預かりいたします」

「おーい！難しい話は終わった！？記念写真撮るから下に集まって」

俺が下げた頭を上げると同時に、部屋の扉を破るような勢いで朝倉が入ってきた。

流されるように下に降りると朝倉はエヴァンジェリンさえも押さえつけて写真を撮ろうとしていた。

忘れているかもしれないが今のエヴァンジェリンは最強状態である。

恐るべきは女子パワー…

その日は後はホテルに戻るだけだった。明日の朝には麻帆良学園に戻る。

たった一週間足らずが何倍にも感じるような怒涛の修学旅行だったが…終わりよければなんとやら。

(今日はゆっくり眠れそうだ)

そして、俺の意識は布団に入った瞬間消えた。

Side out

Side 和泉 亜子

「なんで連れてってくれへんかったん!？」

修学旅行最終日の朝。もう後は帰るだけという日にロビーの一角でウチは草薙さんに食って掛かっていた。

「いや、だってお前寝てたし…」

「起こしてくれればええやん!ウチかて関係者なんやで!それなのに最後にこれってあんまりやん!」

怒っている理由は単純。昨日行ったネギ君のお父さんの隠れ家に連れてってもらえなかったこと。

確かにウチは疲れて昼過ぎまで寝とったけど…ってそれは置いといて!

「それに…」

「それに?」

「まだ500円返してもらってないんやけど」

「あ……」

「やっぱ忘れとったんやあ！」

うっ……もう泣きそうや……

「す、すまん！俺に出来ることならなんでもするから許してくれ！」

そう言っつて草薙さんは頭を下げてきたけど……正直無事に帰ってき
てくれただけでウチはそれ以上なにもないんやけどな。

でもせっかくこう言っつてくれてるし……

「んー、どないしようかなあ？」

……

「な、何でもっつて言っつたよね？」

「ん？あ、ああ。俺に出来る範囲でだが」

う、うん。聞き間違いじゃない……

「ほなら、草薙さん？」

「お、おう」

「麻帆良に戻っつたら……えっと……その……な？」

「？」

「さ、もう行こう。待たせると悪い」
「うん、そうやね」

そう言っただけで草薙さんがロビーからバスに向かって歩き出したのでその隣について歩く。

先ほど指きりをした手がムズムズする。なんか知らんけど

「手…握ってもええかな？」

気づいたらウチはそんなことを口走っていた。

「ん」

草薙さんはこっちを向かないで左手だけ差し出してきた。少し躊躇したけど…ウチはその左手を右手でしっかりと握った。

「あ、1500円は返してな」
「あ…あの3倍有効？」
「約束は守るもんやろ」

少しくらい意地悪してもバチは当たらんよね。

Side out

戻る為…（後書き）

修学旅行編終了です。

誤字脱字表現の矛盾があればご指摘ください。

細かいことはこれから後書きではなく活動報告のほうがいいと思いますので長い後書きは今回で終わりにします。

ではまた…今度は悪魔編でお会いしましょうノシ

サガの為に…（前書き）

実は今日で一周年なんですよね。というわけでなんとか完成させました！

サガの為に…

Side 草薙 亮

今日は修学旅行から帰ってきて最初の日曜日だ。そもそも修学旅行の疲れを落とす為に帰ってきた次の日が日曜日になるよう日程を組んでいたのだから当然なんだが。

生徒も教師も今日は休みだ。ネギ君や他の生徒も今日は休みを取っていることだろう。

俺も今日は休み…と言いたるところだがそうもいかない。何せ俺はこの女子寮の管理人なのだ。

管理人と言っても各部屋の掃除はその部屋の住人がやるし、トイレや大浴場などは専門の清掃員が入る。そもそも男の俺がそんなところ掃除できない。

これだけ見ると楽に見えるが実はそうでもない。施設の故障やちよつとした揉め事、その他の細事は全て管理人に回ってくる。一日の量は時間にして一時間にも満たないものが多く、大したものではないのだが、これが一週間分溜まってしまっているのだ。

つまりこの日曜日、俺は朝7時から普通に起きてそういう細事を片付けている。幸い前の管理人の残っていた相談箱があり、詳細は全て依頼書に書いてもらった上で解決する、という習慣がこの寮全体に染み渡っている。プライバシーの関係で名前を書く、書かないも自由だが基本的に公共の場なら名前は書かないし個人のことなら名前が書いてあり、一々どの誰が、という調べをしなくて済むのは非常に助かる。

前の管理人に本当に感謝だ。

現在は廊下の切れている蛍光灯を取り替える作業だ。単純作業だが結構な量がある。最初は30本ほど入っていた新品の蛍光灯は既に17本が使用されて古いものと交換されている。交換だけならそうでもないのだが何分場所が離れているのが難点だ。

「よし」

小型の梯子から降りて外した蛍光灯を箱の中に入れる。とりあえずこれで報告のあった蛍光灯は全て取り替えた。

近くの掛け時計を確認すると既に12時を回って13時近い。道理で腹が減るわけだ。

一階管理人室の横にある倉庫に箱と梯子を片付けて昼食にしようと部屋へ戻って冷蔵庫を開けると…

「またか…」

カラッポである。修学旅行で一週間も空けるため全て片付けて出たのを忘れていた。ちなみに午前中は修学旅行の帰りに買って食べ切れなかった菓子パンだ。

残っているのはミネラルウォーターと調味料くらい。これでは料理もできない。

インスタント系の食材はやはり買っておくべきだったと今更ながらに後悔してしまう。

「どうするかなあ」

幸い管理人の仕事は午前中頑張ったおかげで相談箱の中は残り2つで終わりだ。内容は見てないが午後にも出来るだろう。

となればやはり外食になるか…

財布を確認すると修学旅行で何かあるか分からなかった為結構な額が入っている。

これはやはり外食するで決定になりそうだ。

そう決めて部屋を出ると、丁度階段を下りてきたネギ君とアスナに鉢合わせた。

「あ、草薙さん」

「こんにちは」

「よう二人とも、今から出かけるのか？」

「ええ、色々とやることありまして」

休みの日だって言うのに、ネギ君はスーツを着て、杖を持っていく。という事は魔法関係の用事だろうか？

警備なら今日は修学旅行に行っていた瀬流彦先生含め俺達3人は休みのはずだが…

「あ、そういえば…」

「うん？」

ネギ君が何か思い出したようで俺に話しかけてきた。

「あの時…このかさんを助けた時ですけど…エヴァンジェリンさんの念話の中で草薙さんのことを呼んでいましたけど、エヴァンジェリンさんとは親しいんですか？」

「あー、あれな。んー、親しいというか俺もネギ君と同じくらいの期間しかあいつのこと知らないし」

「そうなんですか？それにしては随分親しそうでしたけど…」

あの来なければ殺すという脅し文句が親しそうに聞こえるなら今

すぐ耳鼻科に行った方がいいぞネギ君。

「そうだな…強いて言えば修行の時に付き合ってもらってるくらいか」

「あのエヴァちゃんに？」

アスナが疑問の声を上げるが当然だろう。付き合うというよりこっちの魔力、体力限界までやるのが当たり前だからな。修行というより拷問に近い。

実際そのくらいきつくないければ強くはなれないのだろうけど…

「っと、俺は今から外に飯を食いに行くんだがお前らどうだ？一緒に行くか？」

「あー、ありがたいけど部屋で食べてきちゃったのよね」

「そーか。じゃ、またの機会にな」

「はい、ではまた」

そう言うと二人は揃って寮を出て行った。こうやって後姿見ると本当に姉弟にしか見えない。

とりあえず昼飯は無難にラーメンを食べた。

余談だがこの学園都市…ラーメン屋だけでも10数存在している。他にも飲食店は多くの同類が存在しており、どれも味は悪くないらしい。『麻帆良学園を食べ尽くす会』より

ともかくにも最後の一枚。

『屋上への扉の開きが非常に悪くなっています。出来れば早急に直していただけると助かります』

風香のを見ていたせいで拍子抜けしてしまったが本来こういうものだ。

倉庫から油と念のためにドライバー一式を取り出して屋上へと向かう。

必然的に3-Aの近くを通ることになる。

そういえばネギ君たちはもう帰ってきてるんだろうか？

その時…

バン！

とものすごい勢いでアスナとこのかの部屋のドアが開き、中から刹那が飛び出してこちらに向かってきた。その後ろをこのかが何故か猛スピードで追ってくる。

「く、草薙さん！助けてください！」

「は？」

「せっちゃんまってー！」

俺の後ろに回り込む刹那に向かってこのかがダイブしてくる。

「せーつなちゅあーん！」

「へ？あ、ありますけど」

「俺が許可する。このか眠らせちゃって。このままじゃ風紀的にも貞操的にも刹那がまずい」

「は、はあ」

「なんでもいいからはやくー！」

「は、はい！」

刹那の必死な声を聞いてネギ君が練習用の杖を取り出し始動キ―を唱える。

「『大気よ、水よ、白霧となれ。この者に一時の安息を』…『眠りの霧』」

呪文が終わるとこのかにだけ白い霧がかかった。数秒するとこのかは刹那に抱きついたまま静かに寝息を立て始めた。

「た、助かりまし…！」

このかの拘束をほどいて刹那が立ち上がるうとしたがこのかが服をがっちり掴んでしまつて離さない。何とか指を離そうと刹那が頑張っているがこのかは死後硬直したみたいに固まっている。

「刹那、下つてシャツ着てる？」

「着てません／＼」

顔を赤くした刹那が言う。

んー、つまりこのかの拘束を解くには下着になるしかないと…
幸いこのかの部屋はすぐそこだ。

「じゃあこのかを部屋に運んでアスナに服借りてこい」

「そ、そうですね。そうします」

刹那はそう言うところのかを抱え上げて部屋に入ってしまった。その場には俺とネギ君だけが残る。

とりあえずさつき『すいません』と言っていたのでこの騒動の原因の一端はネギ君にあるのだろう。

「ネギ君」

「は、はい！」

怒られると思ったのかネギ君が身を強張らせる。

「ちよつと屋上まで付き合ってくれ」

「へ？は、はあ…」

拍子抜けしたのかネギ君はそのまま俺の後ろについてきた。

屋上へ出るドアの前に着くと俺はノブを回してドアを押す。

なるほど、かなり重い。途中まで開くと蝶番が甲高い音を上げた。どうやら相当錆付いているようだ。一人が出るのに問題は無いが女子が開けるのには結構苦勞するだろう。

「ちよつとこれ支えて」

「は、はい」

ネギ君にドアを支えてもらって、上下の蝶番に着いた錆をドライバで削り、その隙間から油を挿す。

ネギ君と変わってドアを何回か開閉すると先ほどと違いかなり軽くなった。一応はこれで大丈夫のはずだ。

蝶番自身もガタが来てる可能性もあるため後で業者に頼んでおか

ねば。

「悪いね、付き合わせて」

「いえ、管理人って大変なんですね。こんなことまで」

階段を降りつつ他愛の無い会話を交わす。

「で？さっきのこのかは何なんだ？」

「う…じ、実は…以前惚れ薬を失敗したことがあってカモ君にマホネットで出回っているものを頼んでもらったんです…」

「このかがその惚れ薬を食べたと？」

「はい、すいません」

「まあいいけど…魔法道具の扱いは気をつけてな」

いやあんまりよくは無いかど被害は親友同士のかと刹那だし大丈夫だろう。これが赤の他人同士だったら大問題だが。

それだけで会話が終わってしまったせいなのか…ネギ君が声を掛けてきた。

「あ、そういえば僕、エヴァンジェリンさんの弟子入りテストを受けるんです！」

「は？また唐突だな」

話脈絡がなさ過ぎてびっくりだ。

「その…今回の一件で自分なりに力不足を実感して…そしたら土曜日にテストしてやるって」

なるほど、確かに修学旅行の一件は俺も十分自分の無力さを実感

した。何度も命の危険に晒されたし、生徒を晒した。
力が欲しい、と思うのは何もネギ君だけじゃない。

「いいじゃないか。頑張れよ」

「あ、はい！」

「で、テストの内容って？」

グツと拳を握ったネギ君がそのまま目をパチクリさせる。

「えっと…まだ聞いてません」

「え？テストなのに内容が決まってないのか？」

「は、はい。何分急に訪ねたものですからエヴァンジェリンさんも決める時間が無かったのでは…」

なんかこう…非常にまずい気がする…

あのエヴァンジェリンのことだ。絶対無理難題を吹っかけてくることは目に見えている。

そもそも俺への魔法指導だって俺の奥の手の公開との引き換えだ。もしかしたらテストを突破しても難癖つけて反故にする可能性も無きにしも非ず…なにせ相手は自称『悪の魔法使い』だ。

あ、なんか今エヴァンジェリンがすごい悪党面で足の裏なめて忠誠を誓えとか言ってる風景が頭の中に思い浮かんだ…

「ま、まあ頑張れ。応援してるよ」

「あ、はい！ありがとうございます…」

「じゃ俺はこれで」

「はい、また明日」

なんかもう嫌な予感しかしない…

走っていくネギ君の後姿を見て俺は心の中で冥福を祈っていた。

「お、いたネ！おーい草薙さん！」

管理人室に戻る為一階に降りたところに誰かの声が寮の入り口から掛けられた。

古菲…と楓と龍宮？

「どうしたんだ？3-A最強の面々が集まって。学園に戦争でも仕掛けるのか？」

「私はそれでも構わないんだがね。今日は古の用事の付き添いだよ」「右に同じでゴザル」

よく分からんが…

「俺に用事ってことか？」

「そうアル。今からちよつと付き合っしてほしいヨ」

「ああ、この用具置いてからでいいなら」

「ではここで待ってるネ」

そう言っただ俺は用具を倉庫にしまつと古菲たちのところに行く。うーむ、何かいやな予感がする…これ持っていくか…

「で？用事って？」

「ウム。あの修学旅行のときの言葉、覚えてるアルか？」
「言葉って…あの？」

なんでも一つ言うことを聞く、と行ってしまったやつだ。

うーむ、覚悟はしていたが早いぞ？

「まあ俺に可能な範囲で、っていう制限はつくが…それでいいなら
「十分ネ！私と戦って欲しい！それだけネ！」
「は？」

なんか今日は唐突なことが多い…

とりあえず何にするにしても修学旅行のときの話を寮の入り口で
するわけにもいかないのを外で歩きながら会話することに。

詳しく話を聞くとあの修学旅行の以前から古菲は俺と戦ってみた
かったということだ。今までは機会がなかったが俺の言葉で遠慮な
く誘いに来たという。

実際こういうことでもなければ、本来先生と生徒という間柄だ。
俺が知らないうちに手加減してしまうかもしれない、というそうい
う考えでもあったらしい。

「というわけで、全力でお相手願いたいネ」

「まあ、できる限りやってみる。しかし龍宮と楓はなんでいるんだ
？」

この話に二人は全然関係ないように思えるんだが…

「何、折角強者同士が全力で戦うんだ。興味が沸いても可笑しくな
いだろ？」

「拙者も草薙殿の修学旅行の時の戦いは見れなかったでゴザルから

な。興味本位という意味では真名と変わらぬでゴザル」

「一応二人には審判の役も頼んでるアルよ」

「俺は自分がそこまで強いとは思ってないんだけどなあ。まあ分かった。約束だしな。ただし…」

「ただし…なんネ？」

修学旅行の一件があつたとはいえ、未だ俺は魔法関係者から見れば不審者だ。今も監視は付いているかもしれないし、付いていないかもしれない。もし付いていないで前と同じことになったらそれこそ取り返しがつかない。つまり…

「学園長に許可取れたらでいいか？」

許可はあつさりなほど簡単に降りた。場所は指定されたがそれ以外特に制限も無く好きにやってくれて構わないとのこと。

場所は世界樹近くの森の広場だ。一般的な学校のグラウンドほどの大きさはあるため夕方には子供たちが遊びに来ていることも多々あるのだが、今日は人っ子一人いない。やっぱり人払いの結果が張つてあるのだろう。

「で？どうしたら勝ちにする？」

とりあえずルールを決めなければ…

「気絶するかどちらかがギブアップ、もしくは拙者と真名が負けと判断した時ではいかがかな？」

「それで構わないネ！」

「俺もそれでいい。あ、後一つ」

「なんネ？」

「実戦形式でいいんだよな？」

「なんでもありってことアルか？」

「ぶっちゃけて言つとそう言つことだ」

「元々そのつもりだから問題ないネ」

「オツケ。じゃあ楓、合図を頼む」

「アイアイ」

それだけ言つと俺と古菲は10mほど距離を取つて向かい合った。

「それでは行くでござるよ……………始
め！」

楓の始めの声がかかって俺と古菲は動かない。お互い軽く構えを取つたままの姿勢だ。

古菲は中国武術研究会の部長、形意拳と八卦掌の達人というのは学校生活でもよく耳にする。俺は中国武術に関しては全く知識は無いが、古菲は強い。それは分かる。

それは修学旅行の一件もあるが、こうして相對して感じる際の無

さだ。

(こりゃ本当に全力でかからないとまずいな…)

気を引き締めても状況は変わらない。

仕掛けるべきか？

「どうしたネ草薙さん。来ないならこっちから行くヨ？」
「上等！」

そう言った瞬間、古菲が消えた！
違う、俺の…懐！

目で捉えた時には古菲の肘打ちが鳩尾に迫っている。体を咄嗟に後ろに引いて肘の届かない範囲に移動できた！
と思つた瞬間には拳が鳩尾に直撃していた。

「ぐお…」

息が詰まる。何が起きたのかはイマイチ分からないが…追撃はさせない！

右足の踏ん張りを効かせて右の拳を突き出す。全力ではない。牽制の程度のジャブの連打。

それも全て紙一重で避けられている。気で速度も威力も増してるのにどんだけだよ…

その時古菲が右の腕を引くのが見えた。なるほど、さっきのは肘打ちから曲げた肘を伸ばして拳を振り下ろしたのか…

そんなことを思いつつ少し強めのストレートを放つが…

「ほい！」

「げ！」

完全に左手で流された上にその右腕を古菲の左手が伝わって極めようとして来るのだから性質が悪い。

狙いは右腕での後頭部への裏拳！

流石に貰えば気絶確定だろうがそこまでさせる義理はない！

後ろにある右足で軽く古菲の足を払う。立て直すのは直ぐだろうが、古菲のバランスは崩れる。

「およ」

古菲が思わず地面に右腕を着いたのを確認して左足を軸にして回転、遠心力を付けての回し蹴りをかます！

「らあ！」

「む」

予想通りというかなんというか…俺の蹴りが入るより一瞬早く古菲は建て直し両腕でガードされた。更に当たる瞬間思った以上の手ごたえが無かったということは体を引いていたんだろう。とにかくダメージはそんなに無いはずだ。

古菲がバクテンしながらぼ元の位置に戻る。

同じ一発でもダメージが雲泥の差だ。さっきから拳の入った腹が

痛い。

「初撃防がれるとは思わなかつたアル！やっぱり強いネ！」

「結局喰らってちゃ同じだろうが…」

全く楽しそうに笑う。正直長期戦は不利だ。なら…

「今度はこっちから行くぞ！」

「来るネ！」

足に気を込めて全力の瞬動で一気に古菲の後ろに回りこむ。振り向くと同時に右足の中段後ろ回し蹴りを放つが当然防がれた。

狙っているのはカウンター。右足が着いたところに無防備な胴体の狙い撃ち。が、まあそれは読めていた。右足が着くより前に左足は既に地面を蹴っている。

カウンターを狙っていた古菲それを見て右腕をガードに回すのが見えた。左腕は右腕を支える為に添えられている。このままでは…

ガン！

足と腕がぶつかる音ともに左足が予想通り止められる。右足はもう地面に付いているので転びはしなないが勢いは止まる。

が、行ける！

「おおら！」

気合の声とともに受け止められている左足を古菲の腕に軸に右足で後ろ蹴り。簡単に言えばサマーソルトの逆回転だ。

一瞬上下が逆さまになり…確かに見た。

左手でガードした古菲が僅かだが、浮いた。

逆サマーソルトから先に着いた左足を再度後ろ蹴り。当然のように両腕を交差して防がれた、がそれでいい。そもそもこの蹴りでダメーシなど期待していない。目的は浮かせること！
さらに古菲が少し浮いたため向き直る余裕が出来た。

向き直って下から搦り上げるように右足を振り上げる。ガードされる。だが浮かせる！

「おおおおおおおおおおお！」

「おとととととととととと！？これはちょっと…辛いアルよ！」

左足をつけたまま右足の可能な限り高速の蹴りのラッシュ。古菲は上手く両手で防いでいるが、俺は地面につけないように、なるべくカウンターを受けない程度に蹴る。

地面に着地されればこんなチャンス二度とは来ない。正真正銘ラストチャンスだ。

一気に勝負！

右足で強めに蹴り上げ…

危ねえ！ズボンの裾掴まれるところだった！とりあえず何とか…
両手を地面について逆立ち状態。両手両足を思い切り縮めてバネを溜め、タイミングを合わせて両方を伸ばしきること…一番強烈な

蹴りを放つ。

当然古菲は両腕を交差させて防ぐ。

「ふえ？」

遙か上まで飛んだ古菲の変な声が聞こえた。

当然だろう。蹴りの一撃で人が10mほどの距離まで蹴り上げられれば疑問の声も出る。

それと同時に素早く立ち上がり、気を再度足に込めて跳躍。古菲を追い抜きさらに1mほどの距離で反転する。右足の裏から気を放出することで遠心力を生み出し迫ってくる古菲に向かって振り下ろした。

古菲は背中を向けている。完全に決まっ……

「まだアル！」

古菲は俺の回し蹴りが来ることを予想していたのだろう。動けない空中でわずかに軸をずらすことで俺の蹴りを受けた勢いを利用して体を反転、俺の方に向き直ると落下しながらも振りぬきかけていた俺の右足を掴んだ！

「マジか!？」

「やられっぱなしは性に合わないネ！」

古菲の落下するのに引つ張られて俺の体も落下を始めるが、その中でも古菲は次の行動に移っている。

掴んだ俺の右足に両手でつかまると両足を振り上げて膝の部分で俺の腰辺りを挟み込む。さらに足を振り上げた勢いで上下を反転。俺の頭が下になるように持ってきやがった！

これ喰らったら気絶じゃすまないぞ！

漫画でいずな落としを見たことがある人はその場面を思い浮かべてほしい。正にその状態だ。違うのは極められているのが胴体じゃなくて右腕っただけ。

幸い勢いは反転した時の勢いは殺しきれいていない。俺も思い切り体を振ることで位置を反転させようとした。

が、そこは達人。俺の振りと逆回転の振りを行うことで殺すまで行かないものの反転まではさせてくれない。必然的に俺達は空中で向かい合う形になる。しかどちらも頭が下。

「チキンレースか！？」

「面白いネ！」

この状況、先に動いたほうが追い討ちを掛けられるのは明らかだ。だからと言って…

この手はあまり使いたくなかったが…！

服の左袖の中に仕込んでいたものを腕を軽く振ることで左手で受け止め、振り上げた。

「ちょ！ドライバーアルか！？」

左袖から取り出したのは先ほど倉庫に用具を置きに行った時、念のためにと仕込んでおいたマイナスドライバーだ。それを未だに腰

を極めている膝に向かって振り下ろす。
流石にまずいと判断したのか古菲の膝が緩みドライバーを回避する。

その隙に古菲の腹部を蹴り飛ばし離脱、のつもりだったが蹴り飛ばす際に古菲の右膝が俺の左脇腹に入った。

俺も古菲も地面に激突寸前に左右に弾かれたが、地面を転がりながらも受身を取り、再び相対する。

「すまん！こんなもの使って！」

「最初に確認したアル！何でもありって言ってるヨ！問題無しネ！」

お互いかなり限界だ。俺も古菲も肩で息をしている。

勝負は一撃。正直技術の面でかなり不利だが……

ジャリ…と靴が砂を掴む音が響く。

ん？砂？

ということはその手が使える…試してみる価値はあるか！

『勝負！』

申し合わせたように俺と古菲が同時に、地面を蹴った。

「な！？」

古菲の驚きの声が聞こえる。それはそうだろう。

俺は文字通り『地面を蹴った』のだから。

俺が行ったのはただ単純な砂かけた。古菲が突っ込んでくるのに合わせて足で砂を巻き上げたに過ぎないが…

これは流石に古菲も予想外だったようで、砂が目に入ったのか明らかに動きが鈍った。

俺は気配で迎撃しようとする古菲に向かってドライバーを投擲。頬を掠めるほどギリギリの所に投げつけることで古菲の注意がそちらに向いたところで右腕、右肩を掴み捻り上げた上で足払い。流石の古菲も片腕しか使えない状態で後ろから足払いと同時に体重をかけられれば為す術も無く倒れこむしかなかった。

右腕はそのまま俺は古菲の背中に肩膝を置いて体重を掛けることで完全に極まった。

「うむ。勝者、草薙殿！」

楓の宣言があり、俺は古菲の拘束を解いき上からどいた。

「むう、負けてしまったアル」

「すまん。目大丈夫か？」

「今はちよつと無理ぽいネ…」

古菲は立ち上がりながら目をしきりに擦っている。

「いやいや、二人とも見事だったよ」

「うむ、草薙殿の作戦勝ちでござるな」

「ああ、なんでもありのルールじゃなかったら負けてたのは俺の方だったろうな」

ギリギリだ、本当に。

本来なら空中で極められた時点で俺の負け決定だったし、最後の攻撃も純粹な体術だったら俺は負けていただろう。

「それでも負けは負けネ。勝負の最中にも言ったけど問題なしアル」
「それにしてもこのドライバー、いつから仕込んでたんだい？まさかいつも持ち歩いてるわけじゃないだろう？」

わざわざ拾ってくれたんだろう。龍宮が俺にドライバーの柄のほうを差し出しながら聞いてきた。

「いや、お前らに誘われた時点で何かあるなーって思ってな。念のために…」

「危険感知の能力は高くなった様でゴザルな」
「まあお前のおかげだな」

楓とのサバイバル訓練は正直休まる暇が無いからな。

「次は負けないアルよ！」
「次があればな…正直絶対やりたくないけど」

古菲が指を突きつけながらそう宣言してくる。見えてないから誰もいない方向に指差してるが…

けどとはつきり言って二度とやりたくない相手だ。

最初に受けた鳩尾への一撃と左脇腹への膝蹴りのせいでさっきから腹回りが滅茶苦茶痛い。明日絶対後遺症残るわ…

「まあ今日は終わりな。もう日も暮れるし」

「むづ、しょうがないネ」

とりあえず問題の一つは解決した。ただ…もう一人この権利を持った人物の方が問題なのだが…

俺がため息混じりに龍宮を見ると、龍宮は笑っただけだった。

マジで俺が出来るものにしてくれよ…

S i d e o u t

サガの為に…（後書き）

PVが812、037人、アクセス 72、456人

まさかこんなに大勢の人が見ていただけるとは思っていませんでした。

これからもよろしくお願いします。

誤字脱字表現の矛盾があればご指摘ください。

高みの為に…（前書き）

何か切羽詰ってるとここういう文章書きたくなってくる気がしますね。

高みの為に…

Side 草薙 亮

古菲とやり合ってから数日が経過した木曜日。

その関係上俺は古菲からも体術の基礎を教えてもらっていた。と言っても立ち回りや足捌きなど本当に基礎だけで中国拳法などではない。

古菲いわく

『既に戦い方が決まてる人に無理やり型をつけるのは良くないネ。それ以前に草薙さんは我流過ぎて教えることがないアルよ』

ということらしい。まあ教わってた人が高畑さんや楓で、型なんてものは全部自分でやっていたからな…

しかし足捌きや基礎だけでも強化すると良い、ということと結局教わることにしている。古菲が空いてる時間に、という条件付だが。

古菲に言わせれば俺は上半身の力が下半身に比べて弱いということだ。下半身を使うのだから上半身は意味がないように思えるが、非常に重要な意味合いを持つということだ。

例えば足を使うにしても反動や勢いをつけるには上半身の捻りやバランスが必要だし、自分の耐久性を上げるという役割も担うことができる。

というわけで俺は火曜日からだが早朝ランニングを開始。朝の4時ほどに起きて一時間ほどだが麻帆良学園内部を走り、適当なところで上半身を鍛えている。

そういえばネギ君が古菲に弟子入りしたらしい。時間が無いといったのはその関係かもしれない。

俺は弟子じゃなくてあくまで教えてもらってるだけだから弟子を優先するのは当たり前だ。

「うん？」

世界樹の丘近くで、ふと前から近づいてくる二つの人影に気づいた。

「あれ…エヴァンジェリンと茶々丸か？」

見知った顔に思わず足を止めてしまふ。二人もこちらに気づいたようで俺の方に歩いてくる。

「おはよう、3人とも早いな。なんかあったのか？」

「おはようございます、リョウさん」

「用が無ければ出歩いちゃ悪いというわけでもあるまい。別段何も無いさ。ただ単に目が覚めてしまったから散歩をしていただけだな」

茶々丸はしつかり挨拶を返してくれたがエヴァンジェリンはぶっきら棒に用件だけを言った。ちなみに3人と言ったのは遠目だと確認できなかったのだが、茶々丸の頭の上にチャチャゼロがいたからだ。

「そういう貴様はなにをしている？」

「俺はただのランニングさ。少しでも鍛えようと思ってな」

「ふうん、ご苦労なことだ」

エヴァンジェリンは本当に興味なさそうに欠伸をしている。何故

聞いたし。

「授業中には寝るなよ」

「もう15年も同じ授業を受けてるんだぞ？授業など聞かなくても覚えておるわ」

「じゃあなんでいつもテストの点数が赤点ギリギリなんだ」

「それ以上の成績なぞいらん。どうせ卒業できんものだからな」

「あー…」

エヴァンジェリンのテストはいつも赤点ギリギリで…しかもその内容が埋めたところは全て正解で、その上赤点を計算したようにピツタリの問題数しか解いていないのだから何かあると思ってはいたんだが、そういうことか。

あ、そういえば…

「お前ネギ君を弟子に取るらしいな」

「取ると決めたわけじゃない。取る為のテストをしてやると言ったんだ」

「内容も決めてないのか？」

「う…まあ土曜日までは時間があるさ。それまでには考える。それにお前には関係ないだろ」

む、確かにこの内容は俺には関係なかったな。これ以上聞くのは野暮ってものか…

特に何も言うことも無く3人の横に並んで歩き出す。エヴァンジェリン辺りには何か言われそうな気もしたが特に何も言うてこなかったので別に構わないんだと思う。

「うん？」

「どうかしたか？」

「いや、なんか音が…」

世界中の丘広場の近くに来た時、聞きなれない音が響いていた。明らかに自然の音じゃないそれは早朝の静かな建物に反射して余計大きな音となつて聞こえてくる。

「ふむ、確かに」

「お二人とも、世界樹広場からです」

茶々丸が正確に音の出所を察知して教えてくれた。

世界樹広場を見ると確かにそこから音が聞こえてくるし、その音を発している人影も確認できた。

「ありゃあネギ君か？」

「そのようです」

独り言のつもりだったのだが茶々丸は拾ってくれたらしい。茶々丸に聞こえてたということはエヴァンジェリンにも聞こえていたと思うのだが何故かエヴァンジェリンは黙っている。

それが気になってふと目を横にやるとエヴァンジェリンの顔が不機嫌そうになっていた。そう、例えるならとっておきの玩具を取り上げられた子供みたいに…

「草薙、ミディアムとレア、どっちがいい？」

「俺は生肉で結構です」

「ちっ」

意図に気づいてとりあえず無難に答えておく。

絶対エスパーだよー…

「リヨウさんは顔に出やすいところがありますから」

あ、そう？そうなのか…気をつけてみよう。

「気ヲツケテ治ルモンジヤネエト思ウガナ」

もう読まれてるし…

そんなことを考えているとエヴァンジェリンがネギ君の方へと歩き出したので俺達もその後を追う。

近づくとも階段の影で見えなかったのか何故かジャージ姿のまき絵がいた。俺と同じくランニングの途中だったのだろう。

「ね、ね、今のもう一回やってよ」

「あ、はい」

そんな会話が聞こえてきたのでまき絵は少し前から一緒にいるみたいだ。

「フン……カンフーか。随分と熱心じゃないか、坊や」

「あれー？ エヴァさま、茶々丸さん、草薙さん、おはよー」

「あ、お早うございますー！」

「おう、おはよう」

2人がエヴァンジェリンの言葉でこちらに気づいたので軽く手を振って返す。

どうやらネギ君は古菲から習った中国拳法の練習をしていたらしい。先ほどの音は足で地面を踏む音だったようだ。

「カンフーの修行をする事にしたのか？　じゃあ、私への弟子入りの件は白紙と言う事でいいんだな」

挨拶も返さずエヴァンジェリンがそう言い放った。その顔は先ほどと変わらず不機嫌そうだ。

「あつ、いえ、これは、そのつ……あの少年の戦い方の研究をしているだけでっ……」

「いいよ、別に。私は元々弟子を取るつもりなかったしな」

「あわわ！　違つんですーっ！」

なんか他の面子を置いてきぼりにしつつ会話がものすごいスピードで進んでいる。

エヴァンジェリンは既に背中を向けているし、ネギ君は必死に弁解しながらエヴァンジェリンを引きとめようとしていた。

多分だけどエヴァンジェリンは戦い方を教えるに当たって、ネギ君が他の人から先に習っているのが気に入らないのだろう。

優越感とかそういうものと俺は今まで無縁だったから分からないが多分そういう理解でいいと思う。

「どゆこと？　ネギ君」

「えとあのつ、僕、エヴァンジェリンさんの弟子にして貰うつもりだったんですけどーっ」

ネギ君が事情を知らないまき絵に向かってしどろもどろに説明している。

「じゃあな。ま、子供にはカンフーはお似合いだよ」

「あ……待ってくださいーい！」

既に泣きそうになっているネギ君。

うーん、これは相談もなしにやったネギ君のせいかなあ…だとすると何も言えんぞ。

だからって俺にそんな捨てられた子犬みたいな目を向けるんじゃない！

「……ヤキモチですか？ マスター」

「違うわっ！」

茶々丸がそんな事を言つてエヴァンジェリンが怒鳴った。

あれ？もしかしてマジでヤキモチだったりするんだろうか？

「ちよつとー、エヴァちゃん。何でネギ君にイジワルするのー？弟子にくらいしてあげればいーの……何の弟子か知らないけどー」

「ヤキモチだそうです」

「違うっつーのコレ……！」

エヴァンジェリンが茶々丸のネクタイを握つて叫んでいる。

うーん、姉妹だ。当然姉は茶々丸で。

……

お、今回はばれなかったぞ！

「フン、子供の遊びに付き合う趣味はないんだよ。お前みたいなガキっぽいヤツと話すのな、佐々木まき絵」

「なっ………！！ 何よー！ エヴァちゃんだつてお子ちゃま見たいな体型じゃん。ふーーんだっ、いいもんねー！ ネギ君、あーんなに強かつたんだもん。エヴァちゃんなんか教えてもらわなくてもすぐに達人だよーだ……！」

「ぬ……?」

エヴァンジェリンも今の会話の違和感に気づいたようだ。

まき絵は今『あんなに』と言ったのだ。まき絵は魔法のことを知らないしネギ君も教えた様子もない。さっきも一瞬気になったがまき絵はエヴァ『さま』と言った。

しかし本人もそう言ったことに疑問を持っている様子で頭を傾げている。どうやら記憶が断片的に残っているせいで無意識の時だけそういう言葉が出るみたいだ。

これなら特に注意しなくても大丈夫かな？

「……いいだろう。たった今貴様の弟子入りテストの内容を決めたぞ」

エヴァンジェリンはまき絵の言葉を聞いて怪しい笑みを浮かべた。これはまずい……かなりの無理難題を思いついた顔だ。

「そのカンフーもどきで茶々丸に一撃でも入れてみるが良い。それで合格にしてやる。……ただし一対一でだ」

はい、来ましたねー。予想通りかなりの無茶振り！

「いや わかったー！ そんなのネギ君なら楽勝だよー！」

「ま、ま、ま、まき絵さんっ!？」

そしてなぜお前が返事をする佐々木まき絵！しかもなぜ自信满满!？

「もんでやれ、茶々丸」

「ハ、しかし……」

「いいから行け、怪我せん程度でいいから」
「ハイ」

エヴァンジェリンが茶々丸にそう言った。茶々丸は少し躊躇ったようだがやはりマスター命令には逆らわないようだ。

「失礼します、ネギ先生」

そう言った瞬間茶々丸が動いた。一瞬で俺達の横から移動するとネギ君の懐に入り込んでいる。

「へ？」

「く！」

「おー」

最後の声は俺だ。

頭に？を浮かべ何も反応できなかったまき絵と、とっさに反応したネギ君。

茶々丸の裏拳気味の攻撃を辛うじて腕で受けとめた…が、まだまだだ。だ。だ。

茶々丸の右回し蹴りがネギ君に直撃し、吹き飛ばした。ネギ君はそのまま壁に当たって目を回してしまふ。

上半身に目が行き過ぎていて相手全体の動きが目に入っていない証拠だ。

目を回しているに怪我をしていないのは茶々丸の絶妙な力加減のおかげだろう。じゃななければ怪我をするか気絶しないで立ち上がるという結果になる。

「茶々丸に一発も入れられないようならどの道貴様に芽はない。場

所はここ。時刻は日曜日午前0時にまけてやる。ま、せいぜいがんばることだな」

まあ…今を見る限り妥当かな？

反応し切れてないわけじゃない、そもそもエヴァンジェリン辺りに弟子入りするならある程度の格闘訓練も必要だと思う。

やり方についてはまあ…俺がとやかく言うことじゃないな。

「じゃあ俺はここで。ネギ君を連れて帰らないといけないしな」

「申し訳ありません。よろしくお願いします」

「ふん、放っておいたほうが奴の為だぞ」

「そうもいかんだろ」

そう言つてエヴァンジェリンたちはこの場を後にした。

「ネギ!」「ネギ先生!」「ネギ坊主!？」

「ちょ!何があつたの!？」

「しっかりするアル!」

どこで騒動を聞きつけたのか、アスナ、刹那、古菲が向こうから走ってきた。

「よう、お前らも早いな」

「あ、おはようございます」

「草薙さん!一体ネギに何が…」

アスナたちはネギ君を心配そうに見ている。まあいきなり人が倒れてたらびっくりするのは当たり前か。

「落ち着け。とりあえずネギ君を部屋に送らないとな。そこで話そ

う

「う、うん…」

「まき絵も今日はもう戻れ。授業中寝るなよ」

「あ、はい。分かりました」

まき絵は非常に不安そうな顔をしながら去っていった。茶々丸との戦いを自分が安請け合いましたせいだと思っっているのだろう。反省してるようだし今回は保留ってことで。

「カクカクシカジカというわけだな」

時刻は6時、場所はアスナとこのかの部屋で俺は先ほどあったことを簡潔に説明した。

ちなみにこのかは台所で俺達の朝食を準備してくれて、時々楽しそうに調理器具とこのかの鼻歌が聞こえてくる。

「ふむう…それはチトきついアルね」

「ですね。ネギ先生は格闘に関して素人ですから二、三日程度の修練では…」

「てことはエヴァちゃんの弟子入りはダメってこと？」

古菲と刹那が難しい声を上げたのにアスナが聞いた。

「ネギ坊主は飲み込みが早くて才能もあるが…こればかりは難しいと思うアル…」

「まあまるつきり勝ち目がないって訳でもないが…土曜限界までやって勝率10パーセント行けばいいほうじゃないか？」

「10も行きますか？」

「ま、ネギ君の伸び次第だな。下手すればこれより下がる可能性もあるし…」

「そ、そんなに茶々丸さんって強いのか？」

「格闘戦闘に関して言えばネギ君よりは、はるかに格上の相手だな」

俺も含めて全員が黙り込んでしまう。ネギ君は未だに気絶して起きてこないが…

俺みたいになりふり構わない戦術を取るなら多分勝率を5割くらいの確率に上げられるのだがエヴァンジェリンは中国拳法で、と言った。それ以外は認めないだろう。

はつきり言ってしまうえば全てネギ君次第なわけだが。

「皆朝から何暗い顔しとるん？幸せが逃げるで？」

いつからいたのかこのかが御盆に朝食を乗せて立っていた。

「お、お嬢様！申し訳ありません！お手伝いもせずに…」

「ああ、またせつちゃんお嬢様とか呼ぶー！」

「し、しかし…」

それを見て今までの空気が少し和らいだ。皆二人を見て笑っている。

ま、当人の問題を俺達が考えても仕方ない。

期限は後日曜日午前0時。すべてはネギ君の頑張りだ。俺達に来るのはそれを応援すること。それだけだ。

…俺も出来るだけサポートしてやるかな

そんなこんなであつという間に期日のGW土曜の午前0時直前。
なるべく俺もネギ君のサポートに周り実戦形式の模擬戦として相
手をしていた。

付け焼刃の中国拳法がどこまで茶々丸に通用するかは分からない
が…

今俺たちは世界樹の丘に向かって歩いてる。面子は…うん…ネ
ギ君がいるのはいい。アスナも刹那も古菲も関係者だからいいとし
よう…
だが…

(他の面子がなあ…)

思わずため息が出てしまった。この場にはそれ以外にこのか、ま
き絵、アキラ、祐奈、亜子が連れ立っている。総勢10人の団体さ
んだ。

「ため息なんかついちゃってどうしたの先生？暗くなるよー？」

話しかけてきた祐奈に『お前らが原因だ！』と喋ってやる気力も

なく、俺は再びため息をつくしかなかった。

いやまあ差し入れたとか言っただけ、こいつらが練習の途中で見に来た時点で気づいておくべきだったか。

だが今日はネギ君と茶々丸の格闘戦だ。魔法を使うことはないだろうし何とかなるだろう。

この面子が集まった時点でネギ君には魔法を使わないように言い含めておいたし。

「草薙さん？」

「ん？」

隣にいた亜子が話しかけてきた。

「実際ネギ君が勝てるんやろうか？」

「正直難しいな。古菲も言っていたが相手が茶々丸だ。最初の一分で決められないときついときさ」

「そか…」

「それよりお前こそ大丈夫なのか？試験とはいえこれから始まるのは殴り合いだぞ？」

「う…ちょっと自信ないかなあ…」

亜子がそう言って下を向く。優しくくせにどつしてこっ首を突っ込みたがるのか…

俺のせいかな？

「エヴァンジェリンさー…」

先頭にいたネギ君の声が聞こえた。世界樹の丘には既にエヴァンジェリンたちが待っていた。

「ネギ・スプリングフィールド、弟子入りテストを受けに来ました！」

広場の時計は丁度0時を指したところだ。とりあえず臆してはいないようだ。それどころかネギ君の目はまっすぐにエヴァンジェリンたちを捉えている。

いいねいいねー、男だねー。

「よく来たな坊や。では早速始めようか」

エヴァジェリンがネギ君を見下ろしながらそう言った。

「お前のカンフーもどきで茶々丸に一撃でも入れられれば合格。手も足も出ずに貴様がくたばればそれまでだ」

…あれ？突っ込みなし？エヴァンジェリンならこの人数に突っ込んでくると思っただが…

「……その条件でいいんですね？」

ネギ君が含みを待たせたような笑みで笑い返す。

『その条件』……ね。

「ん？ ああ、いいぞ……それよりも」

エヴァンジェリン。言葉には気をつけたほうがいいぞ。今の言葉

しかと聞いたからな。

しかしエヴァンジェリンは何か思うところがあるのかフルフルと肩を振るわせ始めた。

「そのギャラリーは何とかならんかったのか！ワラワラと！！」

「はあ…ついてきちゃって、すいません…」

おお、ようやく突っ込んでくれた。それでこそエヴァンジェリンだ。

ネギ君以外は全員横の階段部分で見学だ。ちなみに俺もそこ。

「ネギ君やったれー！」

「ネギ先生頑張ってー！」

黄色い声援が飛ぶ中、ネギ君と茶々丸が階段の踊り場に立つ。つっても戦うのお前らのクラスメイトなんだけど…なんだかんだ言っつてやっぱり茶々丸は周りとの関係が薄いのだろうか。

「茶々丸さん、お願いします」

「お相手させて頂きます」

二人の準備が整ったのを見てエヴァンジェリンが手を上げ…

「では始めるが良い！！」

振り落ろした。

それと同時に茶々丸がネギ君に一気に接近する。が、ネギ君もそ

の時点で呪文を唱えた。

「契約執行90秒間、『ネギ・スプリングフィールド』!」

その呪文を唱えた瞬間ネギ君の魔力が増大したのを感じた。恐らくアスナたちが仮契約カードから受け取っているものと同じことを自分にしているんだろう。自分で自分にやるのだからかなり強引と言わざるを得ないが…

茶々丸が突っ込んだ勢いのまま左の拳を突き出す。

ネギ君はそれを右肘で払いのけるよう防いだ。

茶々丸は立て続けに右の拳を打ち込む。しかも加速の仕方がおかしい。恐らく右肘にブースターが何か仕込んでいるのだろう。

ネギ君はその拳を左の手で受け流し、その勢いを利用して茶々丸の側面に回りこむと裏拳を放った。

正直言つと…上手い。ここ数日しか近接戦闘を学んだ人間とは思えない動きだ。古菲も言っていたが本当に飲み込むのが早い。

が、それも茶々丸は簡単に防いで見せた。

「お…おお!」

「む…惜しい!」

見ている祐奈たちが声を上げた。まあ一般人から見れば既に二人とも達人レベルの腕前だ。ここまでの戦いは予想していなかったに違いない。

俺だつてこんな体じゃなかったら驚いているだろうしな。

というより現在進行形で驚きだ。本当に今まで格闘を習っていないのか問い詰めたくなってくる。

あれが中国拳法の初心者だといわれて納得する奴はいないだろう。

だが…

「ぐっ！」

茶々丸が回し蹴りでネギ君のガードごと吹き飛ばした。

ガードはしつかりしたがネギ君は後ろに吹っ飛ぶ。踏ん張りが効かずに膝が落ちた。

「ネギ君！」

「いや作戦通り！あれは誘いアル！」

隣にいるまき絵と古菲の言葉が聞こえた。

その言葉どおり、追い討ちをかけようと突っ込んできた茶々丸に對してネギ君の落ちていた膝が上がっていた。そのまま踏ん張りを利かせて茶々丸の右拳を受け流して掴み、自分の方に引き寄せての肘を叩き込もうとした。

そう、した…だ。

タイミングは完璧、普通の人間ならあれで決まっている一撃を…

『な！』

茶々丸は避けた。それを見ていたほぼ全員の声が上がる。

茶々丸は掴まれた腕を支点に半円を描くように大きく跳躍してかわし、そしてそのままの勢いを保ち蹴りを放った。

「かふっ！？」

苦痛の声とともにネギ君が地面を転がっていく。

一瞬障壁に魔力の集中を感じた。ダメージは受けているがまだ動けるはずだが…

これで終わりか？

「残念だったな坊や。だがそれが貴様の器だ。顔を洗って出直して来い」

エヴァンジェリンがこれで終わりだという風に言い放った。

「ネギ！」

「ネギ君！」

全く動かないネギ君を心配してアスナとまき絵が駆け寄ろうとしたので首根っこを掴んで止めた。

「まあ待てお前ら。まだ本人はやる気なのに周りが止めたらまずいだろ」

『へ？』

その声に二人がネギ君の方を向いた。

「……へ、へへ」

倒れたネギ君の指が動いた。ネギ君が笑いながら立ち上がり始めている。

「まだです……まだ僕くたばってませんよ、エヴァンジェリンさん」

先ほどの茶々丸の蹴りが効いているのだろう。足はガクガクと震

え、突っつけば倒れてしまいそんな危うさを残しながらもネギ君は立った。

「ぬ……？何を言っている？勝負はもう着いたぞ、ガキはさっさと帰って寝ろ」

「……でも条件は『僕がくたばるまで』でしたよね。それに確か時間制限もなかったと思いますけど？」

「な、何っ！？まさか貴様……！」

だな、こうなることは予想できたよ。

言葉つてのは厄介だな。そのままの意味で取るとそういう意味になっちまうんだ。

一つ勉強になったなエヴァンジェリン。

「へへ……その通り、一撃当てるまで何時間でも粘らせてもらいます……茶々丸さん続きを！」

「し、しかし先生……、っ!？」

ネギ君が茶々丸に再度突進していくが、先ほどの契約執行が切れたのだらう。スピードも力も先ほどの比ではないほどのガタ落ち。

不意を突いたと言っても茶々丸は簡単にそれをいなして肘打ちを入れる。

それでも立ち上がるネギ君は再度茶々丸に突っ込み、茶々丸はそれを迎撃する。

全く……男には引けない時があるってのは否定しないが10歳でそれをするかよ……

「くくくく……」

「く、草薙さん？」

自然と笑いが漏れてしまっていたようだ。周りの視線が集中するが俺の笑いは止まらない。前世ではこんなこと自分ではやったことないし今もそうだ。

まさか10近くも歳の離れた少年にそれを見せつけられるなんて…年齢なんて関係ない良い証拠だな。

さて、あとは気力の勝負だ。気張れよネギ君。

一時間は経過しただろうか。周囲の建物には打撃音が響き渡り静かな町に反響している。当然打撃音を出しているのは一つだけ。ネギ君が茶々丸に殴られるか蹴られるかの音だ。あれからネギ君は吹っ飛ばされては立ち上がり吹っ飛ばされては立ち上がり、を繰り返している。

ここまで来ると見ている方が辛くなってくるのだろう。俺以外の面子は皆辛そうな顔をしているし何人かは目に涙を浮かべている。イジメでもここまでではないだろう。が、ネギ君は再度立ち上がる。

顔は腫上がり、立ってるのも不思議なほど膝は震えていた。

「お、おい坊や……もういいだろ？ いくら防御に魔力を集中しても限界がある。お前のやる気はわかったから……な？」

けしかけたエヴァンジェリンの方が気を使ってこんなことを言い出した。

まあったく女にや分からんかねえ。

「どうしたどうした！手が下がってるぞネギ君！上げていけ！」
「ちょ！草薙さん！」

アスナを中心に全員の視線が飛んできた。が、まあここは同じ男として言っつてやらねばなるまいよ。それに…

「ひゃ、ひゃい！」

当の本人は俺の言葉に反応した。

口の中が切れているのだろう。ネギ君の言葉ははつきりしないが俺の言葉に反応して下がり気味だった手が再度上がり構えを取る。

その顔は心なしか笑っているように見える。呆れちまっね本当に。当然のようにネギ君は吹っ飛ばされるがまた立ち上がる。

「草薙さん…なんで笑ってられるん？」
「うん？」

隣にいた亜子からそんな声が聞こえた。

「笑ってたか？俺」
「うん、変な笑いやなくて…なんていうか…すごく清清しい感じ…」

…最初はネギ君がやられてるのになんで笑ってるんやって思ってたけど…なんか笑い方が状況に合わなかったというか…」
「ふむ…」

二人を見てるだけだと思っただけど…中々どうして。周りに気を配れるのは難しいんだぞ。

「なんていうのかねえ。まあ亜子の言ったとおり変な笑いじゃなくてだな。うーん、言うのは難しいんだが…」

「うん」

「そうだな…滅茶苦茶簡単に言うとき、試練なんだよ」
「試練？」

「うん。まあ俺も今まで生きてきてあんなに頑張る奴は見たこと無し俺もそこまでじゃない。本当に上手く言葉には出来ないんだが…憧れなんだよ、男にとつてはああいうのがな」

「あんなボロボロになるんが？」

「ああ、違う違う。何か目標を持ってそれに向かって必死になれることがだよ。今のネギ君はエヴァンジェリンの弟子になるっていう目標だけのために動いてる。俺も他の人も何かしら目標はあると思っけどあそこまで必死になれる奴亜子は見たことあるか？」

「ううん…ウチはない」

「だろ？俺もそうさ。だからこそ憧れるんだ。あそこまで必死になれる目標がある。その目標にたどり着くための努力を怠らない。ネギ君は確かに天才かもしれないがそれだけじゃない。努力の天才でもあるのさ」

「努力の…天才…」

亜子はその言葉を聞くと再び二人の方に視線を戻した。

再びネギ君が茶々丸に蹴り飛ばされたが、ネギ君は再び立ち上がった。

「も、もう見てらんない……止めてくる!!」

が…流石に耐え切れなくなったのか、アスナが二人を止める為に飛び出した。

うーん、やはりこの憧れを理解するのは中学女子には難しいか？
しょうがない…羽交い絞めにしても止めて…

「ダメー！ アスナ、止めちゃダメー！ツ！」

俺がアスナを押さえる前にまき絵が叫びながらアスナの前に飛び出した。涙を浮かべた顔で、両手を広げてアスナの前に仁王立ちになる。

「で、でも……あいつあんなにボロボロになって……あそこまで頑張る事じゃないよ！」

「わかってる、わかってるけど……。ここでネギ君を止める方がネギ君にはヒドイと思う！だってネギ君どんな事でも頑張るって言うてたもん!!」

なんだ…分かってる奴いるじゃないか…

「まきちゃ……でもっ……あいつのアレは子供のワガママじゃん！
ただの意地っ張りだよ、止めてあげなきゃ……」

「違うよっ、ネギ君は大人だよ！」

「ま、まきちゃん、シャワー入ってた時もそう言ったけど、あいつどこからどう見たって……」

「子供の意地っ張りであそこまでできないよ。う、上手く言えないけど……。ネ、ネギ君にはカクゴがあると思う……」

「か、覚悟？」

「うん、ネギ君には目的があつて……そのために自分の全部で頑張るって決めてるんだよ。アスナ……自分でも友達でも先輩でも良い男の子の知り合いでもいいけど、ネギ君みたいに目的持つてるって子いる？ あやふやな夢みたいのじゃなくて、ちゃんとこれだつて決めて生きてる人いる？」

「そ、それは……」

まあ覚悟云々は置いておくとして……最後は賛成だ。目的云々は耳が痛いな！。

ネギ君の場合は意地もあるだろうけど……

「ネギ君は大人なんだよ。だって目的持つて頑張ってるんだもん。だから……だから今は止めちゃダメ」

ま、その意地も非常に重要な時もある訳で……

「あ、オイ！ 茶々丸！！」

エヴァンジェリンの叫び声が聞こえ、その声に全員が振り向いた瞬間……

ペチン

なんとも間抜けな音が辺りに響いた。ネギ君の拳が茶々丸の頬に当たった音だった。

「……あ、当たりまふいた……」

それだけ言うとネギ君は糸の切れた人形のように倒れ伏した。倒れる寸前に一瞬だけ見えたネギ君の表情は、確かに笑っていた。

夜が明け始めた。ネギ君はまだ目を覚まさない。俺はネギ君たちとは少し離れてエヴァンジェリンと話をしている。

「全く、とんだ茶番に付き合わされたもんだ」

「まあまあ、お陰で気持ちいいものが見れたじゃないか」

「茶々丸、貴様もだ。手加減するなと言っておいただろう」

「も、申し訳ありません」

エヴァンジェリンは呆れ顔だ。実際茶々丸は手を抜いていたわけだしな。

茶々丸が本気なら魔力供給が切れた時点で気絶させられて終わりだったはずだ。結局今の時点ではそれほどの実力差がある相手だったというわけだ。

ネギ君はまき絵に膝枕されながら意識が戻るのを待っている。体力限界まで戦ったんだからもうしばらく目を覚まさないと思っている。たんだが…

「う…あ、あれ？僕…」

朝霧が晴れつつある中、俺はそんなことを思っていた。

S i d e o u t

高みの為に…（後書き）

正直今回はほぼ原作通りです。

誤字脱字表現の矛盾があればご指摘ください。

未来の為に…（前書き）

一ヶ月ぶりの更新です。とりあえず本編へどうぞ

未来の為に…

Side 草薙 亮

ネギ君の弟子入りが決まったその日の午後。寝たかったところだがここでも仕事だ。

教師の仕事ではなく学園広域指導員としての見回り。今日は高畑さんがいないからその皺寄せが来たということろだ。

その代わり明日はフリー。流石にGWずっと仕事というのは勘弁願いたいところだったからそこは助かったというところ。

そういえば朝、亜子たちがまき絵の大会選抜テスト合格したという事で押しかけてきた。

帰りに何か買って行ってやろうか…いや、まだ選抜に受かっただけだしこういうのはテストが終わった後にしておいたほうがいいかもしれない。

いや、でもやっぱり何かあれば買って行こう。うん、嬉しいことは祝いたいよね。

しかし…何か今日はすごい避けられている気が…いや、気じゃないけど本当に避けられている。

今も目の前から来た女性がそそくさと右へ避けた。

「なんで？」

今の格好といえば黒いＴシャツに青のジーパンという極めてラフな服装。それ以外は何も変なものは身に付けていない。
「なんだけど…」

「分からん」

そして何故二度も普通の警備員の方に職質かけられたのかも分からん。身分証あるから直ぐに解放してくれたけど…まったく分からん。

「はあ、今日は厄日なのだろうか。」

「と、そんな思いは空振りだったのか。前言撤回。厄日ではなかった。」

「いつもならほぼ100%出会ってたかられる3-Aの連中にも一人も会わない。」

「俺の見回り時間中は特に何事もなく終わった。
終わった時間は午後5時。予定通りだ。」

「やっ…」

というわけで足はケーキ屋へ。仕事の最中に亜子にメールしてみたら歯止めが止まらなくなったから買ってきて、と言われた。

お金はまき絵以外は割り勘で出すと書いてあったが流石にそれは遠慮した。元々なんか買っていく予定だったわけだし…

そんなわけで店のドアを潜ってみたのはいいのだが……

どづしてこづなったし…

「どづしてこづなったし！」

「わー!？」

「どうかしたアルか？」

「きつと色々あんのよ。草薙先生なんだから」

その場にいたのはケーキを選んでいる早乙女、超、朝倉というな
んとも統率感のない、そして遠慮のない3人!

なぜここで3・Aの連中に遭遇するのか!

いやそれはいい!よくはないけどとりあえず置いておけ…

なぜこの組み合わせなのか！

それから朝倉！今はオフだ、先生って言うんじゃないねえ！

「なんでもない…気にするな」

「あつそう？じゃあ私これで」

「じゃあ私はこれネ」

「私あれでー」

まあこんな店でクラスの連中に会えばたかられるのは当然なわけ
で…そしてこの3人迷わず一番高いものから順に3つ選ぶわけで！

「つか全員なんで1台丸々なんだ！」

『ルームメイトと食べる（ネ）』

前言撤回を前言撤回する！今日は厄日だ！

畜生、こいつら鬼畜だ！

ちなみにケーキの単位はホールではなく台。覚えておくように。

「1万800円になります」

「さらば諭吉い&漱石い！」

俺のお財布の福沢さんと夏目さんがケーキ屋のレジに亡命されま
した…

「で？お前らどついつ集まりなんだ？」

ケーキ屋を出てほくほくの3人に俺が聞く。

「んー？私は偶然だよ。久しぶりに食べたくなつたから寄つたら朝
倉とちやおりんが一緒にいたの」

「珍しいな。二人が一緒にいるなんて」

クラスで見ている限りこの二人には全然接点が無いように見え
たが。

「あたしはちやおりに呼ばれたんだー。なんでも麻帆良祭につい
てのことで協力してほしいことがあるらしくてさ。まだ話は聞いて
ないんだけど」

「麻帆良祭？って確か6月20日だよな？まだ一ヶ月以上先の話じ
やないか」

麻帆良祭は、麻帆良学園で毎年6月に行われる学園祭の名称らしい。なんでも学園祭としての規模は世界的な大きさだとかなんとか。ちなみに今年は6月20日からの3日間。そして今日はGWの日曜日、つまり5月4日。まだ一ヶ月と一週間近くある。そんなに早く何を協力しろと？

「別に他意はないネ。ただ、知つてのとおり朝倉は報道部『まほら新聞』の記者。麻帆良祭ほどの大きな学園祭になるとスクープには困らないヨ。つまり先に予定を組んでおいてもらわないと協力が得られない。それだけネ」

超が「にやはは」と笑顔でそう言った。

ふむ、確かにそれもそうか。俺は参加したこと無いから分からないが…

俺の後ろで朝倉は大きく頷いているし、早乙女も「あー」とか声を出して納得しているということはそうなんだろう。

歩き出して、気づいた。超の服の背中に『超包子』と書いてある。

「その超の背中に書いてある『超包子』ってなんだ？というかなんて読むんだ？」

「ああ、これアルか？これは『チャオパオズ』と読むネ」

「『チャオパオズ』？」

「あー、そっかあ。草薙さんは去年いなかったから知らないんだね

」

俺の声に早乙女が答えた。

「で？それはなんだ？」

「ちゃおりんが学祭中にやってる屋台のことだよ」

「やー、ちゃおりんがきてから毎年あそこにはお世話になるよー」

朝倉の言葉に早乙女がうんうんと頷いている。いや、説明になってないぞ朝倉。

「毎年と言ってもまだ二年しか経ってないけどネ」

「…超がやってるってどういうことだ？」

正直さっぱり分かん。

「ちゃおりんは、『超包子』のオーナーなんだよ」

「オーナー！？ってマジか！」

「マジもマジ、おおマジネ」

「ってことは全部自分で経営してんのか！？」

「正解アルよ」

「はー…」

いや驚いた。3・A連中のスペックが高いのは知っていたがまさかオーナーとは…

しかしいくら天才とはいえ資金はどうしているのだろうか？雪広や那波のような大手企業の令嬢というわけでもなく、ただの留学生と聞いているが…

そもそも学生の段階で屋台とはいえ経営が出来るとは、流石『麻帆良の最強頭脳』と呼ばれるだけはある。

「と言っても料理のほとんどは四葉が担当してるネ。私はただの手伝いヨ」

「いやー、それでもすげえよ。店を持つってことは小さくても経営概念を理解してないといけないってことだからな。俺なんて大学行つても店を開く自信なんてないってのに…」

「案外やてみたらどうとでもなるものヨ？草薙さんもやてみるヨ口シ。多少なら援助するヨ？」

めいっばいの笑顔を向けてきた超に俺は…

「やめとく」

「なんと！即答アルか！」

即答した。いや、だってねえ

「お前に貸しを作るならともかく借りを作ると後々ひどいことになりそう。それに店が軌道に乗ったらいつの間にか乗っ取られそう

で怖い」

「草薙さん案外いい読みかもよー」

「そうそう、ちゃおりんは怖いからねー」

朝倉と早乙女が左右から肩を組んで耳打ちしてきた。しかしこの距離では当然超にも聞こえてるわけで…

「朝倉と早乙女、二人は学割なして『超包子』の皆に伝えておくヨ」

「「ちょ！」」

いきなりオーナー特権発動。こりゃ学生の身分には逆らえないな。

「お代官様おやめくださいませ！それがねえとウチら飢え死にしてみえやす！」

「どうか！どうかお慈悲をお！」

本当に困ってるのか？こいつら…明らかに芝居がかってるし楽しんでるように見えるぞ。

「一度言った言葉は撤回しないネ！」

なんと男らしい……もといなんと経営者らしいお言葉だ。

内容が内容だけにあまり褒められないけど…

「てわけで草薙さんも学園祭になたら『超包子』の売り上げに貢献してほしいネ」

「考えておくよ」

どついう訳かはこの際聞きません。

「損はさせないアルよ？来てくれたら多少サービスするネ」

「ずるいぞちゃおりん！」

「担任に媚び売って成績上位を狙うつもりだな！」

「いや、そいついつもテスト満点で授業態度いいし…」

媚びもくそも、超の場合普通に成績表オール満点なのだ。そんなことする必要がない。

「それよりいいのか？俺は結構食うぞ」

「これのお礼ネ」

そう言っつて超は俺の買っつてやったケーキ箱を持ち上げた。そこま
で恩を売ったつもりもないんだが…

「それにその分この二人に上乘せするから大丈夫ヨ」

「うえ！？」

「ちよちよちよちよ！」

「そうか？悪いな」

もう便乗しよう。そうだ、そのの方が俺も得できるしいつ也喜欢
勝手やってる二人へ仕返しということだ。

「ご無体なあ！」

「二人が言つと冗談に聞こえないんだけど！」

「冗談じゃない（し）（アル）」

「なお悪いわ！！」

分が悪いと悟つたのか「ちくしょー！」「覚えておけよ！」など
と完全にやられ役のセリフを吐いて駆け出す二人。

おいおい、そんな走るとケーキ崩れるぞ…俺にとってはどうでも…

よくない！あれは俺の福沢さんと夏目さんと汗と涙の結晶なんだ
ぞ！

「はあ…」

「はは、先生つていうのは苦労するネ。草薙さん」

「笑いごとで済まないからな、あいつらは…というか結局お前朝倉
に用事あつたんじゃないのか？」

「あー…まあまた今度でいいアルよ。とりあえず用事があることは伝えられたしネ」

超の言葉に納得して再び歩き出す。そういえば超と二人きりというのは今まで無かったかもしれない。

そのまま10分は歩いただろうか？

「一つ、聞いてもいいかな？」

ふと、超が口を開いた。

「なんだ？テストの中身と成績評価以外でなら相談に乗るぞ。まあお前はそんな内容じゃないと思うが…あー、あと恋愛とか人生とかも却下な」

「それ女子中学生の選択肢狭くしすぎのような…まあいいネ。相談じゃなくて質問、というか答えは無いんだが…」

そこから超は一息置いて言葉を紡ぐ。

「例えば…例えばヨ？ある方法で未来を知った人がいたとする」

随分突拍子のない例えだ。なんかのフラグか？

「そしてそのまま行けばその未来は破滅と絶望に満ちたものだったとするヨ？」

「ああ」

「だけどその時にその人には未来を変える力があるとして、未来を変えるべきか変えるべきじゃないのか…草薙さんはどう考えるかな？」

「ふーむ…映画かなんかの話か？」

「まあ、そんなところネ」

中々面白い題材だな…

「質問いいか？」

「どうぞ」

「その未来はどの程度先なんだ？」

「そうネ……………区切りよく百年程にしておこうか」

「そうなるのは確実なんだな？」

「そうネ」

ふ…ん。なるほど…だがこの場合…

「お前の言う破滅と絶望がどういうものか俺には見当がつかないしこの事柄に答えは無いが敢えて言うなら……………自分と仲間を信じる、かな？」

「八？」

超が随分間の抜けた声を上げた。

「こんな意味不明、と言った超の顔を見たのは初めてかもしれない。俺も言ってること自分で意味不明だしな。」

「まあ言葉に出さなきゃ始まらないか。」

「その人はこのまま行けばその絶望的な未来が待っているとは分かってる。ならその人次第だ。破滅に身を任すのか、未来を変えるのか。それを決めるのはそれこそ当人しか決められない。」

「普通は変えると言わない力？」

「百年先の未来が絶望として…その間にある人たちの幸福はどうする？確かに破滅や絶望は避けるべきだ。だがその間にある幸福を奪い取ってまで無くすことは、その破滅や絶望を生み出している連中と変わらないと俺は思う。」

「100を救うためには1を犠牲に捨てることは必要だと思わない力？」

「確かにな。1を救うために100を見捨てることはダメだ。じゃあどうする？例えに例えを重ねるが、将来的に独裁者になりその100を殺す奴が子供の頃に『君は将来独裁者になるから死んでくれ』って言われて自分が死ぬのを認める奴がいるか？」

「認める人はいないと思うヨ。でも必要ならそれも考えなければダ

メネ」

「だから言った。自分を信じろってな。結局そいつを殺すのも、そいつを矯正しようと考えてるのもそいつ次第さ。出来れば101を救う方法を考えることだが…」

最後に行きつくのは自分だ。自分という壁を乗り越えなければ全ては無に帰す。正しいと思うことをやっていても心が死んでいく。最後には自分のことを押し通す殺人機械の出来上がりだ。

だから…仲間がいる。

「ま、一番いいのは一人で全て抱え込むんじゃなくて、その未来も含めて全ての悩みを共有できるような仲間を作ることかな」

協力者じゃない。仲間がいる。そのことは心の支えになるはずだ。あいつがいるから戻らなければならない。誰かがいるからこれはしなければならない。

「それでは仲間主体にならないかな？」

「だからさ、共通の目的を持った心を許せる仲間。そして間違っただ道を行ったら殴ってでも止めてくれる奴がそいつには必要だと俺は思う。ま、そんな奴一生に一人会えるか会えないかだと思うけどな」

実際俺は前世でそんな奴には会えなかった。親友はいたが自分で今言ったような関係ではなかった。

「そうか」

「最後に言うなら」

「ん？」

「後悔しないように、かな？結局人間そこに行きつくと思うぞ」

「ふむ、参考になたヨ」

話が終わると丁度寮が見えてきた所だった。

しかし超にしては中々ユニークな、そして不毛な質問だったな。

しかも内容結構詰めてきたし…

「お前があんな不毛な例え話するとは思えないんだが…まさかいく
ら天才だからって100年先の事柄がわかったとかいうんじゃない
だろうな？」

「ん？そう言えば言い忘れてたネ。私の居た場所を」

あ？居た場所？

「私は未来の火星から来た未来人ネ」

「は？」

な、何を言い出すんだこの天才は…まさか一周して脳がバカに入れ替わってしまったのだろうか？

確かに天才とバカは紙一重というが…

「なんでおでこを触るネ？」

「いや、熱がないかと思って…」

うん、平熱だ。ということは電波にやられたか？

「ちょ！何でそんな哀れそうな目を向けるアルか！？」

「いや、うん。大丈夫だ。そうだな。未来人で火星人もんな」

「いやいやいや、マジアルよ！これマジ！」

うん、休息は必要だぞ超。

S i d e o u t

S i d e 超 鈴音

結局信じてくれなかつたヨ。まあ今はそれでもいい力。その内嫌でも信じるようになる。

「今もどたよ」

寮の扉を開けてそう言うのは癖みたいなもの。
と言ってもいつもどおり、誰もいないのだが…

「あ、おかえりなさい」

「おお!？」

と思たらいたヨ! 火星人もびつくりネ!

で、なんで電気もつけてないアルか? パソコンだけつけるなんて
目を悪くするヨ?

「葉加瀬が寮に戻てるなんて珍しいネ」

「はあ、大学の人にたまには戻れって怒られちゃいまして」

なんとまあ葉加瀬らしい戻され方だヨ。

この部屋の散らかり様を見ればそう言われるのも納得できるけど
ネ。特にその場に落ちてるこれとか…

「葉加瀬。服のことは言わないけどせめて下着はちゃんと片付けて
おくことをお勧めするヨ?」

「もー、超さんまで向こうの人と同じこと言わないでくださいよー。

少しは女の子らしくしろってうるさくて仕方ないんですから」「いや、それは聞いておくべきと思うが…」

ま、まあ葉加瀬らしいといえはらしいネ。

というより葉加瀬ほどでは無いとはいえ、私もあまり寮には戻らないのだからあまり言えないアルけど…

「あ、そういえば例の件。調べ終わってますよー」

「ム、そうカ」

言いながら葉加瀬がパソコンの画面を指したので、それに近づく。

「やー、まあ茶々丸が調べた後ですから内容的にはほぼ変わらないんですけどねー。もっと奥深く調べてみましたよ。ちょっと驚きでしたけど」

ふむ

「これは…」

「あ、やっぱり思います?」

どうやら葉加瀬も同じことに気づいていたみたいだネ。パソコンの画面一杯に広げられているのは

『草薙 亮』

その人物に関する情報だけ。全国の登録されている同姓同名からあの『草薙 亮』の確率があるのは2人。しかも片方はすでに50過ぎ。年齢が合うのは一人だけ。

とすれば間違いなくこの人で間違いはない…はずなのだが…

「なんていうか、最後以外当たり障り無さ過ぎなんですよねー」

葉加瀬の言うとおり、当たり障り無さ過ぎネ。

小学校から中学、高校、大学と一般的なもので突出したのも何もない。特に何も無いどこにでもいる普通の一般人。

であるのに大学3年で教員免許を取りいきなり中退。教師として麻帆良に赴任、3・Aの副担任としてこの数ヶ月を勤める。

そして何より、この戸籍は草薙亮が現れてから急に『分かる』ようになた情報。以前からあるように上手く偽造されているが調べれば分かるネ。

このことから『草薙亮』の戸籍は作られたものである可能性が非常に高い。

さらに言えば…あの時期、あのタイミングで『草薙亮』という名の人物がこの麻帆良学園ににいるという『記憶』は私にはない。

「イレギュラー…か」

何らかの原因で起こってしまった不安定要素…彼がいることで未来は変わるのかもしれないし変わらないのかもしれない。

そして現在、既に変更してしまった事象がある以上、これから起こることが今までの私の『記憶』どおりにいく確率は100%ではなくなた。

「ですよー。どうします?」

どうも…どうも……

「計画に変更はないネ。上手くすればこっちに引き込めるかもしれない」

「邪魔されたらどうします?魔法先生ですし可能性としては無くはないと思いますけど…」

「その時は…その時ネ」

味方になってくれればそれでよし。

私には時間がない。邪魔するときは…排除するだけネ……

「ところでさつきから気になってたんですけど、その箱なんですか？」

「おお！」

すっかり忘れてたネ！

「これはさつき草薙さんに買ってもらったケーキネ。食べる力？」

「あ、食べます食べます！」

「じゃあ準備するネ」

「案外優しい人かもしれないね」

草薙さんが優しい人…力。考えようによってはそうかもしれないネ。あそこまで厳しい人は逆に私はいないと思うが……

まあ今はあなたがいてよかたと思うことにしておくヨ、草薙さん。

Side out

Side 草薙 亮

避けられるようになった理由が分かる、俺の左頬を見た裕奈の一言

「草薙さんヤクザみたいだねー」

「マジ？」

『うん』

四人揃って言うなよ！

Side out

未来の為に…（後書き）

というわけで前回ほぼ原作どおりだったので今回はオリジナルで。ちよつと早いけど超と接点を持たせました。相変わらず原作を読んでないと分からない展開ですけどご容赦ください！

あと相変わらず就職活動中のため更新は不定期です。え？就職活動前から不定期？言わせるなよ！

誤字脱字指摘、感想・評価お待ちしてます。作者のやる気、テンションに非常に影響しますので出来ればいいのでもらえたら作者がヒヤホイ！します！

ではまた次回 ノシ

平和の為に…（前書き）

またもほほ一ヶ月ぶりの更新！

「そろそろ痛いんだが！」

まき絵のお祝いが終わった次の日、つまりGW最終日の午前中。今はエヴァンジェリンの別荘に行く道中だ。

なのだが…亜子は激しく俺の背中を小突いてくる。しかも昨日のお祝いが終わってからずっと無言で、だ。

俺が何かしたのかと聞いたが、その時は思いっきり向こう脛を蹴られてしまった。

何の前触れもなかったから防御も間に合わず悶絶してるうちに聞きそびれてしまったし未だに原因は不明…

とりあえず原因も分からないせいで叩かれてるしかない。何が悪いのかも分からない。謝ってもいいのだが意味不明の謝罪は誠意に欠けると思う。それに原因を聞かれたらそれで終わりだ。逆上することは間違いない。

「うーん…」

「はあ…本当にわからないんやな」

俺が頭を捻っていると、流石に呆れたような溜息と共に亜子が言った。

「うむ、分からん」

「それやそれ！」

そう言っつて亜子は俺の顔：正確には左頬に指を突きつけてきた。それで分かった。

結局修学旅行終わりのときに思ったことが今起こった。そういうことだ。ただ俺が思っつてた反応が違っただけ。

「今まで大きなガーゼ当てとっつて治るまで待っつてるんかなー？とか思っつてたけどなんやのその傷！」

「……あー」

やっつと合点がいった。今まではずっつとガーゼを貼っつていたのだが昨日初めて外したのだ。とすればその傷を見るのは亜子も含めてみんな初めてなわけで。3・Aの面子は会っつ奴会っつ奴色々事情を聞いっつてくるもんだから非常に困っつた。

ちなみに朝倉は事情を知っつてる組だから聞かれなかつたのはありがたかつたが……

「まあなんというか……なあ。無事帰っつてきたんだからいいじゃないか」

「確かに帰っつてきたけどそれは無事につつて言わんわ！そんな一生もの傷つつけて！」

再びベシベシと背中を小突かれる。

「決めた！今度何かあった時は絶対ウチもついていくからな！」

「な！」

ちよつと待て！それはいくらなんでも…

「そうせな草薙さん絶対無茶するやん！」

「ぐあ…」

ひ、否定できない…

「それにウチやって草薙さんの…パ…パートナーなんやから／＼／」

「ん？何か言ったか？」

最後のほうが尻すぼみでほとんど聞こえなかったが…

「な、何でもあらへんよ！ほら、はよ行こ！」

むう…確かに前より全然魔法はうまくなっているとは言え亜子は依然戦える腕はない。エヴァンジェリン曰く、『そこら辺の魔法学校の生徒より覚えが上』というくらいで実戦レベルではない。今日辺りから『魔法の射手』を教え始めると茶々丸も言っていたがどうなることやら…

Side out

Side 和泉 亜子

明日は午後からネギ君の初めての修行をするって話や。

だからウチらは午前中に別荘で修行の続き。

特に草薙さんはエヴァちゃんとのつきっきりの修行は今日で最後みたいな言い方しとった。

『俺は弟子でもなんでもないからあいつに付き合ってもらうのは今日で最後だろうな』

とかなんとか。まあ確かに聞いてみればその通りなんやけど…草薙さんってやつぱり自分を優先しないところがある。

それでいて今日はあるだけ時間を使ってエヴァちゃんと魔法の練習をするらしい。

今でも時々魔法の音が…

ドオン！

これで何回目やろうか…炎の火柱が上がるのを見るのは…
明らかに『魔法の矢』の威力と違うんやけど。

ウチがさつき言ったことを気にしとるのか、草薙さんの今日の身
の入れ方は何かいつもと違う。

わざわざエヴァちゃんに発破掛けてまで新しい呪文を覚えるとか
何とか言っとった。

でも…あの人はああでも言わんとまた無茶をする。それにあんな
目立つところに傷までつけて…ウチと……

「亜子さん？」

「ひゃい!？」

「どうかしましたか？手が止まっていますか…」

「な、なんでもあらへんよ!」

「そうですか」

び、びっくりしたー…：そういえば茶々丸さんと一緒にいたの忘れ
とった。あかんあかん、草薙さんの足手まといにならんためにも集
中せな!

「そう、マスターから伝言です」

「へ？エヴァちゃんから？」

何やる？

「『そろそろ始動キーを考えておけ』だそうです」

「へ？もうそんな段階なんか？」

「はい、そもそも今使っている『プラクテ・ビギ・ナル』は学童時に与えられる見習い用の始動キーです。始動キーは自分にしっくりくる単語なら何でもいいということですので、今すぐ決めずとも考えておけ。とマスターが」

「なるほど。分かったわ」

んー、始動キーか。本格的に魔法使いみたいやなあ。なんでも良いつて言われても逆に難しいんやけど…折角なんやしかつこいいのとか…

「『ディスク・ナンデス・クサナギサン』などいかがでしょうか？」

「はあなるほど『ディスク』…って何言つとるの茶々丸さん!？」

しかもなんやのその言葉ノノノ

「お困りのようでしたので…お気に召しませんでしたか？」

「お気に召すとか召さんとかそういう問題やのうて…」

茶々丸さんてこんな性格やったかなあ…？

「では『クサナギ・センセイ・アイシテマス』など」

ズルツ！

思わず転びそうになってもうた…

「せやからなんでそうなるんや!？」

「でしたら『スキスキ・キツイテ・クサナギ』むぐぐぐ」

「ストップ！ストーーーーーッップ!」

思わず飛びついて茶々丸さんの口を塞いでしまふ。

あああああああ！なんや自分で言うてるんやないのに顔が
めちゃくちゃ熱いーーーーーノノノ

「なにやってんだ？お前ら」

「ひい！く、くくくくく草薙しゃん！？」

「ひいつて…何焦ってるんだ？」

いつの間にか草薙さんが後ろにおって噛んでもうた…
そ…それはそんな…あんな言ったあとに本人が出たら誰だって
恥ずかしいと…

「ん？顔赤いぞ？調子でも悪いのか？」

「ピ」

「ひゃ…！」

ちよ…！額に額当てるて／／／こんな顔近く／／／

「くくくく、くしゃなぎしゃん？」

「ああ、動くな動くな。熱があるか分からないだろ？」

せやかてこの距離は…この距離はあかん！近い、近いって！
息かかるとるって／／／

「うん、熱はないな。でも調子悪かったら言えよ。無茶して体壊したらなんもならんからな」

「……………」

「どうした？亜子」

「…ホ」

「ん？」

「草薙さんのあほおおおおおおおおおおお！」

「オバマ！？」

恥ずかしさから思いつき草薙さんの弁慶の泣き所を蹴っ飛ばして脱兎の勢いで走り出してしまった。

Side out

Side 草薙 亮

結局あの後ほぼ一日亜子は別荘内を逃げ回り今は二日目だ。今日は…と言っても外では二時間。この感覚は未だに慣れないな。今からはエヴァンジェリン監修の下、初めて『契約執行』を試す。

「よし、じゃあやるぞ」

「う、うん」

「そんな緊張するな。別にお前に何か必要ってわけじゃないんだから」

目の前には亜子が少し緊張した面持ちで立っている。

「『契約執行60秒間！リヨウの従者 和泉 亜子！』」

「ひゃ！？」

俺が呪文を唱えると亜子の体全体が淡い光に包まれた。亜子が不思議そうに顔をキョロキョロ見渡したり自分の体を見たりしている。

「これで終わり？」

「ああ、それで終わりだ。簡単だろ？」

俺の代わりにエヴァンジェリンが答えた。ちなみにこれだけで魔法使いの従者の身体能力を魔法使いの魔力で強化できるらしい。

つまり俺の魔力供給量に比例して亜子はある程度強化されるとい
うことだ。

「ちなみに契約者同士だと召還やら念話やら色々出来るが説明する
のは面倒だ。茶々丸に聞いて覚えろ」

最後ぶん投げたな。まあ言葉だけで言われても分からないし茶々
丸に聞きながら色々試したほうがいいか。

「とりあえず今からは亜子のアーティファクトについてだな」

「ウチの?」

「俺に着いてくるなら使いこなせないと話にならないからな」

「う、うん。せやね。『来れ』!」

亜子の言葉と共に修学旅行のときと同じように両腕に包帯が巻き
つく。

その時エヴァンジェリンが俺の手にあるカードを奪い取った。

「『Sancta Maria quibus...差し詰め』聖母の包
帯『ってどこか。ふん、くだらん」

「おっと」

エヴァンジェリンはつまらなさそうにカードを俺に投げ返してきた。

「なんだよ。別にいいだろ。聖母だろうが神様だろうが」

「私が気に入らないだけさ。聖人やら神様やらなんやらがな。行くぞ茶々丸」

そう言ってエヴァンジェリンは茶々丸と一緒に建物の中に降りて行った。

なんだってんだ？何か恨みでもあるのか？

「あゝ、草薙さん？」

「あ、ああ。悪い悪い」

亜子に言われて気づいた。今はこのアーティファクトの特徴を知ることが重要だ。

「まあエヴァンジェリンがいなくてもやれるし。色々試してみるか」

「うん」

あれからほぼ半日。大体だがこの『聖母の包帯』の能力が分かってきた。

まず包帯の伸びる範囲だが、亜子の半径5m以内。そしてその5m圏内なら無限に伸びるということ。試すために亜子が包帯に埋もれかけたのはこの際置いておこう。

それから5m範囲内であれば亜子のほぼ思い通りに動くし、それなりに高い拘束力を持つ。これは俺とお茶を持ってきてくれた茶々丸で試した。

結果で言えばロケットブースター全開の茶々丸を容易に止め咸卦法を使った俺の力で何とか引きちぎれた程、といった感じだ。

こつという力押しには強いが反面切断系や炎には非常に弱い。簡単に燃えるしよく切れる。それ以外には有効なアーティファクトだ。

ただ一番重要な包帯としての使い道なんだが……

これは俺が手のひらを切って確かめようとしたら亜子に怒られたので試せていない。

いや、だって切ろうとしたら滅茶苦茶怒るんだ。あんなに怒った亜子はあまり見たことない。

てわけで一番重要な部分は分からないままだ。まあわざわざ怪我人出してまで能力試そうって奴じゃなくて良かったかもしれない。

そもそも亜子がそういう性格だからこのアーティファクトが出たのだろうか？

あの拘束力も使用方法によっては簡単に人を窒息させられるものだしな。アーティファクトは人を選ぶのは本当なのか。

ただ単に保険委員だから出てきたんだと思ってた。認識改めないよ。

ちなみに今は別荘内時間で夕方の6時。夕日は既に沈み直ぐに黄昏時が来る。

亜子は疲れたのか俺の膝を枕にして寝息を立てている。

正確には休憩で夕日を見ていたらいつの間にか柱にもたれ掛かって寝てしまったいたので俺が今の状態にしたただけだ。

「草薙さん」

「茶々丸が」

顔だけ振り返って確認すると茶々丸が立っていた。予想通り手には紅茶の入ったカップを二つ持っている。

「丁度良かった。亜子をベッドに運んでやってくれないか？」

「分かりました」

そう言って茶々丸はカップを置くと亜子を持ち上げようとして…

止めた？

「どうした？」

「いえ、亜子さんは離れたくないようなので」

「は？」

言われて茶々丸の見ている位置を確認する。

俺の顔の視点からは死角の位置にある右手はしっかりと俺の服の裾を掴んでいた。

「おいおい……」

「毛布をお持ちしますね」

「ああ、悪いな」

そう言っつて茶々丸は再び階段を降りて行った。

寝てたしずっと眠ってるはずなんだが一体いつ掴んだんだ？
なんとなく……しやすかったので亜子の頭を撫でてしまう。

うん、サラサラだ。

「ま、いいか」

平和なことはいいことだ…うん。

起きたときの亜子の反応が楽しみだ。

S i d e
o u t

平和の為に…（後書き）

お久しぶりです。 亜子、かわいいよ亜子。

ゲフンゲフン！

今回もオリジナル。少々和泉 亜子のアーティファクトについてこの一ヶ月色々考えてました。

なんか知らないけどISの連載始めたり色々ありましたが結構煮詰めました。

あと今回から台詞に入るときは二行、台詞間は一行空けているんですがどうでしょうか？試してこっちのほうを読みやすければこれ以降この書き方で行きたいのですが、以前のほうが読みやすければ以前の書き方に戻しますのでご意見ください。

恐らく悪魔編終わるまで週一で更新できると思っています。

誤字脱字指摘、感想・評価お待ちしてます。

作者のやる気、テンションに非常に影響しますので出来ればいいのでもらえたら作者がうひょおおおお！します！

ではまた次回！

準備の為…（前書き）

予告どおり、本編をどうぞ

準備の為…

Side 草薙 亮

「よし、では始める。刹那、『コンフリクト気』は抑えておけよ。相応の修練をしなければ魔力と気は相反するだけだ」

ネギ君がエヴァンジェリンに無事弟子入りしてから2日。火曜日の夕方。場所は図書館島裏の遺跡。

ネギ君の記念すべき第一回目の修行だ。

「はい、エヴァンジェリンさん」

「いきます！『契約執行180秒間！ネギの従者、近衛 木乃香！

宮崎 のどか！神楽坂 明日菜！桜咲 刹那』！」

開始されたのだが…

「くっ…」

「よし次だ。対物・魔法障壁全方位全力展開！」

「ハイ！」

「次！対魔・魔法障壁全力展開！！」

「ハイ！」

アスナがちらりとネギ君を振り返ったのが見えた。なんだかんだ

言ってるけどネギ君を一番心配してるのはあいつだ。手のかかる弟
って感じなのかねえ？

「そのまま3分持ち堪えた後、北の空へ魔法の射手199本！！結
界張ってあるから遠慮せずやれ！」

「うぐっ…ハ、ハイ！！！」

やっぱりきついなあ。一部エヴァンジェリンに師事してもらって
るからよく分かる。

一回目は限界を知るためかなり無茶苦茶させられて、その後から
正式な修行が始まるのだ。つまりこれはただ魔力を減らすだけの作
業…

しかも内容が多分だが修学旅行以上というスパルタ振り。契約4
人同時で180秒ってなんぞ！？

「『光の精霊199柱 集い来りて敵を射て』！」

呪文と共にネギ君の右手に魔力が集中する。

199本かー。俺にはまだ無理だなあ。

「『魔法の射手 連弾・光の199矢』！！！」

完成した魔法の矢が軌跡を描きながら空に放たれる。

と、すぐ近くにあつた結界に直撃し矢は光の粒となって砕け散つた。

『おおー！』

「キレー……」

「花火みたいやなー」

見た目はな…あれ一発の威力を知ってる俺としてはあれが恐怖の光だ。再び直撃するのだけは本気で避けたい。

「これが魔法…ですか……」

そして何故ナチュラルに綾瀬はいるのか……

「あつう？」

「せんせー！？」

「ネギくん！ー！」

あー、やっぱり無茶だったか…予想通り許容限界を超えたな。しかしよくやる。修学旅行の時も気を失わなかったネギ君があつさり気を失ったことから見てもそれは明らかだろう。やっぱり鬼畜か…

「この程度で気絶とは話にもならんわ！いくらヤツ譲りの強大な魔力があつたとしても使いこなせなければ宝の持ち腐れだ！！」

「よーよーエヴァンジェリンさんよお。そりゃ言い過ぎだろ。兄貴は10歳だぜ？ 4人同時契約3分と魔法の矢199本なんて修学旅行の戦い以上の魔力消費じゃねーか。気絶して当然だぜ。並の術者だつたらこれでも十分……」

「黙れ下等生物が。並の術者程度で満足できるか……煮て喰うぞ……元々貴様不法侵入者だしな」

カモの言葉にエヴァンジェリンが脅しにかかる。

怖っ…顔がやばい顔が……なんていうか悪を超えている。なんていうかは分からんけどな。

そういえばそもそも俺も不法侵入者だけど黙っておこう、うん。俺も煮て食われる。

「いいか坊や。今後私の前でどんな口応えも泣き言も許さん。少しでも弱音を吐けば貴様の生き血、最後の一滴まで吸い尽くしてやる。覚悟しておけ」

滅茶苦茶極悪人面のエヴァンジェリンのセリフに…

「はい！ よろしくお願いします、エヴァンジェリンさん！！」

こう率直に返された。流石のエヴァンジェリンも予想外だったよ

うでやりにくそうな顔をしている。

怯えさせるつもりで言ったんだろうしな、多分。

「わ、私の事は師匠マスターと呼べ」

そんでもってそっぽを向いてそう言うのだから可愛いやつだ。

「は、はい師匠！ あ、あのっ、ところで師匠……ドラゴンを倒せる
ようになるにはどれ位修行すればいいですか？」

「何？」

『は？』

あ、亜子と声被った。

「……もう一回言ってみる」

「ですからドラゴンを……」

ドラゴンってマジでいるのか。マジでファンタジーだなおい。

「ほっほっ、ドラゴンか」

「はい！」

「アホか……！」

「ペプシー……」

あ、殴られた。まあそうだよなあ。

「21世紀の日本でドラゴンなんかと戦う事があるかあ！アホなコト言ってる暇があれば呪文の一つでも覚えておけ！！」

「あつうー！」

「まあいい。今日はここまでだ。解散！」

そもそもその基準のドラゴンってどこから出てきたんだ？

というわけでエヴァンジェリンほどではないが裏に詳しい刹那に聞いてみる。

「刹那？」

「はい、なんでしよう？」

「ドラゴンってマジでいるの？」

「はい」

うわ、あつさりだよ。ものすごいあつさり認めちゃったよ。

「やっぱり強いのか？」

「そうですね。ドラゴンにも種類がありますから一概には言えませんが…基本的にかなり強力です。私も実物は会ったことがあります。が、本部の書物で見たことだけはあります」

「関西呪術協会の？」

「ええ。かなり古い書物でしたが、専門の装備とそれを扱う人、陣地的な場所がそろってそれでも10日かかって仕留めたそうです」

「はー、流石生態系の頂点と呼ばれるだけはあるな」

「それでも人前には滅多に姿を現さないそうですよ。現に日本でドラゴンと対峙する機会など今はないでしょう」

「はえ〜、せつちゃん物知りやなあ」

「お、お嬢様！？聞いてらしたんですか！？」

「んー、最初からや。それより草薙さん」

そう言ったこのかは無言で指をある方向に指した。そこには何かを言い争うネギ君とアスナの姿が……

「あんたが私のことそんな風に思ってたなんて知らなかったわ！ガキ！ チビ！」

「ア、アスナさんこそ大人気ないですー！ 年上のくせにつ！怒りんぼ！ おサル！」

あれはなにやってんだ？痴話喧嘩か？

「あれ止められへん？」

「喧嘩なんてやりたい奴はやらせておけばいいんだ。それにあの二人の喧嘩なんて子供の喧嘩より安全だろ」

「そ、そうでしょうか？」

多少デンジャラスなのは認めるが……

そこだけじゃどつちが悪いか分からん。
喧嘩なんて両成敗が基本なわけだが。

そして最近人が吹っ飛ばされるのを見るのにも慣れてきた俺がいる。

もつやめて…俺の常識を返して……

「草薙さん！あぶないー！」

亜子の言葉に再び顔を上げると何故かネギ君が俺のほうに飛んできた。

軽くよけて地面に激突しないようにパーカーの部分をキャッチ。

「グエー！」

そのまま降ろすと痛いので勢いを殺すためにそのまま何回か回転させて…

「オボボボボボボ！」

勢いがなくなったところで地面に降ろしてやる。

「ガクッ……」

「ありゃ？」

なんてこつたい……意識飛んでやがる。アスナの奴どんな勢いで殴つたんだ？そろそろ手加減を覚えないと人を殺しかねない。

「ちょ、何きつちりとどめさしてるんですか！」

「ネギ君しっかりー！」

とどめ？はてなんのことやら？

介抱はこのかやら宮崎やらに任せて……そもそも話し合いで解決しろよまったく。

肩を疎めることくらいしか出来ないじゃないか。

「原因はなんなんやら……まあ俺には関係ないが……」

「え、ええんかなあそれで」

「あの二人の關係に首を突っ込むと余計なことに巻き込まれるからな。よっぽどじゃない限り放っておくことにした」

「まあそれはそうなんやけど……」

亜子の言葉にそう答える。実際めちやくちや巻き込まれるし間違っていないはずだ。

放っておけばいつの間にか仲直りしてるだろ。一緒の部屋に住ん

でるんだしな。

「おい」

「んあ？」

寮に戻ろうとするとエヴァンジェリンから声がかかった。ああ、逃亡失敗。

「ぼーやと近衛木乃香には話があるんだ。ぼーやをウチにつれて来い」

「俺？」

「お前が気絶させたんだ。当たり前だろ」

へいへい、分かりましたよもう。

場所は変わってエヴァンジェリン邸。

気絶していたネギ君をエヴァンジェリンが文字通り叩き起こして話を始めた。ネギ君の両頬は真っ赤に染まっている…

「よし、話を始めるぞ。私は基本一回しか言わないから聞き逃すなよ」

「ふあい」

正直すまんかったと心の中で謝っておく。

目の前には黒板の前に立って右手を左腕に添え左手にチョークを持ち、メガネをかけたエヴァンジェリンがいる。名づけるなら『エヴァンジェリン先生の魔法講座』というところか。

どんだけ初心者に優しくない講座だそれは…

というわけで俺は隙を見て下の階へ退避。そしてその場に葉加瀬がいるのは何でなの？

「私も協力させてもらってるんですよ。なんて言っただって茶々丸を作ったのは私ですから」

「マジか」

「マジです」

ばねえよ…この学園中学生でロボット作れるのかよ…

そしてその茶々丸は机を挟んで俺の正面に座っている。そして机の上には立派なチェス盤。これは俺の魔力のなんたらではなく元々エヴァンジェリンの家にあったやつを茶々丸に出してもらったやつ

だ。どういう原理かは知らないが、白い水晶と黒い水晶で駒が作られておりすごい綺麗だ。

話が終わるまで暇だったので始めたのだが…

流石茶々丸、めっちゃくちゃ強い。

「当然です！最先端のAIを搭載してるんですから人間程度で勝てるわけはありません！」

「うーん、これで…」

「王手です」

「げ！」

詰んだ orz

「茶々丸…すまんがもう一回」

「はい」

「く、草薙さん？もう20回連敗やけど…」

「まだだ！まだ終わらんよ！」

「ええ…」

亜子の言うとおりに。2時間も経ってないのにチェスで20連敗である意味すごいと思う。

だって…だって勝てないんだ！何度やっても

「これで…」

「その手だと後40〜52手で詰みです」

「ぐお…」

これだ…毎回駒置いた瞬間、あと何手って言われちゃたまらん！
しかもそれがぴったりあたるからマジで止めてほしい！

最初は信じていなかったが、20回も当たれば死の宣告とほぼ同意だ。

「ごおおおお…」

「女王取りですが…」

「構わん、やってくれ」

「では…」

来た、俺の戦略来た！これでかつる！

女王さえも犠牲にした『骨を切らせて首をとる』作戦始動！ふは
はは、茶々丸め！

思い知

「王手です」

「参りました」

らされましたー！ですよねー！
ばれてますよねー！

「に、21連敗…」

「弱いですねー」

ああ、やめて！そんな目で見ないで！

くそう…大学じゃ無双してたのにまさかここまで俺がやられるとは…井の中の蛙とは俺のことだったのか。

「すまん茶々丸、もう一回…」

「何をしとるんだ貴様ら」

声に振り返るとエヴァンジェリンが階段から降りてくるところだった。メガネも取っているということは授業は終了したらしい。

「リヨウさん。申し訳ありませんが…」

「ああ、上の連中へのお茶だろ？俺のはまた今度でいいや」

「申し訳ありません」

そう言っつて茶々丸は台所からティーセットを持って二階に上がっていった。何故か葉加瀬も二階に上がっていく。

「ん？これはチエスか？また懐かしいものを出してきたものだな」

「ば、馬鹿な…私が負けた…」

「あ、危なかった…マジで危なかった…」

盤上に残っているのは白のキング、黒のクイーン、ルーク、キングのみの4駒だけ。そして黒は俺…

つまり俺の勝ち…だ。

「ええい！認められるか！草薙、もう一回やるぞ！」

エヴァンジェリンが再び駒を並べ始めた。まずい、この展開は！

「やなこった！こんな集中力使う勝負なんて二度とやるもんか！どうせお前自分が勝つまでやるつもりだろ！」

「当たり前だ！」

やっぱりかこいつ！

「わざと負けるぞ！」

「手を抜いたら分かるからな！本気でやらんと殺すぞ貴様！」

「ざけんな！」

くさなぎ は にげだした ……

「茶々丸！」

「はいマスター」

ちやちやまる の おうだち！

くさなぎ は にげる こと が できない！！

「てお前いつからいた！」

「リヨウさんがマスターに勝った辺りから」

「ナイスだ茶々丸！」

エヴァンジェリン の いたをはく！

くさなぎ は からめとられた！

「誰が糸を吐いた！私は虫か！」

「お前以外の誰がいるか！つてマジでなんだこの糸！？」

「ははは！私は人形遣いだぞ？これくらい訳ないわ！」

「亜子！助けてくれ！」

「え、えつとあゝ……」

「させるか！」

「へ？い、いやあああああああ！」

エヴァンジェリン の いたをはく！

あこ は からめとられた！

「だから誰が糸を吐いたというのか！」
「痛ででででててて！」

右手の間接！間接逆になる逆に！

「座るか！座ると言え！」
「上等だ！徹夜で手前とデュエルしたるわ！」
「よおし言ったな！」
「だから解け！」
「だが断る！」

なんでじゃい！

「なんでじゃい！」

大事なことなので二回）ry

「さあやるぞ！手は出なくても口は出るだろ。マス目を言えばそこに駒を置いてやる。茶々丸が」

答えるよ！

「そしてお前じゃねえのか！」

「よしはじめるぞ！ほれ、お前の番だ！」

ああ、もう

「ポーンをdの3で

「茶々丸」

「はい、マスター」

「結局やるんやな」

勝負事は負けたくないんでね。

S i d e o u t

S i d e 和泉 亜子

「あのー」

「うるさい！」「静かに！」

「あじ」

ウチにじいじがで縛らなよるぞや...
...

S i d e
o u t

準備の為…（後書き）

前半は原作どおり、後半はオリジナルです。

前回の台詞の試みは台詞間は空けないほうが見やすいということだったので台詞間の隙間はなくしました。

草薙はチエス強いです。

流石にチエス全部書いてるとそれだけでめちゃくちゃ時間かかるので省略しましたw

誤字脱字指摘、感想・評価お待ちしております。

作者のやる気、テンションに非常に影響しますので出来ればいいのでもらえたら作者がぶるあああああ！します！

ではまた次回！

過去の為…(前書き)

シリアル?とりあえず本編へ

過去の為…

Side 草薙 亮

「くっ……！」

エヴァンジェリン別荘の屋上で4つの人影が疾走する。

追いかけるられる一つ、ネギ君が対応に追われて苦痛の声を上げる
が追いかける2つ、茶々丸とチャチャゼロは意に介さず追撃する。

と、どこから接近したのかエヴァンジェリンがネギ君の懐に入り
込んでいた。魔力を込めた右ストレートがネギ君の体を的確に捕ら
えその体を吹き飛ばす。

別荘内ならばエヴァンジェリンは多少なりとも魔法は使える。寸
前でネギ君はガードしたようだがエヴァンジェリンとの実力差を考
えればこれは普通だ。

「ギャウ！」

3回地面をバウンドしてから何とか受身を取ったネギ君に、吹っ
飛んだ時点から追撃をしていた茶々丸とチャチャゼロが迫る。

相手に隙を与えない見事な左右からの挟撃。普通なら避けられな
いがネギ君もそれを見て次の行動に移っている。

「『風花・風障壁』……！」

「あ……」

ネギ君の魔法の選択に思わず声が出てしまった。

『風花・風障壁』は極めて強力な対物魔法障壁を発生させる呪文
で10tトラックの衝突を防ぎ切る程の防御性能を誇る。が、効果

は一瞬。さらに連続で使用することもできない。

確かにあの二人の攻撃を「防ぐ」にはそれしかないんだが…

そこで足止めたらその後どうするんだ？

『風花・風障壁』は止めることは出来ても弾き飛ばすわけではない。二人の攻撃は受け止められたが、『風花・風障壁』が解けると同時に茶々丸がネギ君を地面に叩きつけた。

「ふぎゃー！」

ネギ君の叫び声が響く。まだまだ実戦不足のようだ。後の展開が読めていない。俺も人のことは言えないんだがあれは読めた。

あれなら攻撃を喰らった方が正解だったんじゃないだろうか？茶々丸とチャチャゼロの攻撃力は計算に入れてないけど…

「どうした、たった12秒だぞ。3対1とはいえせめて一分は持たせる。この程度ではあの白髪の少年など相手にもならんぞ」

いつの間にか近づいていたエヴァンジェリンがネギ君の顔を踏みつけながら言った。

エヴァンジェリンの顔は心底楽しそうだ。ものすごいドSっぷりだな。

「更に行くぞ」

「うひゃ!？」

そのままネギ君を右足で蹴り上げた。さらにそれを追って空中でネギ君に追いつく。

左手でネギ君の右手を掴み引き寄せてから右手を胸元に密着させ

「耐えてみる」

エヴァンジェリンは無詠唱の『魔法の射手』を放ち、ネギ君を地面に叩きつけながら次の呪文を唱えている。一瞬雷のように光ったことから多分何時もの氷じゃなく雷系の『魔法の射手』だと思う。

「来たれ、虚空の雷、薙ぎ払え! 『雷の斧』!！」

「ひゃあああああ!」

「ね、ネギくーーーーーん!」

右手から放たれた雷が巨大な斧の様な扇形を取りながらネギ君を覆いつくし、吹き飛んだ周りの石畳が粉塵を巻き上げ、亜子の叫び声が響き渡る。

どうやらギリギリ防いでいたようで粉塵が収まると突っ伏したネギ君が現れた。

「うづう……しび、痺れる」

ネギ君の言葉を聞いて気づいた。だから『魔法の射手』が雷だったのか。相手を一瞬でも痺れさせることができれば隙が出来る。それが一瞬とはいえ戦いの中ではかなり有利になるはずだ。そして次の攻撃を確実に当てる為の計算された攻撃。

うーん、流石だ。

「今のが決めとしてそれなりに有効な、雷系の上位古代語魔法だ。……ちなみに、今のはサウザンドマスターが好んで使っていた連携の一つでもある」

「え……父さんが？」

「覚えておいて損は無いぞ？ まあ、今のお前には無理だがな。一時間後にまた稽古を始めるから復習しておけ。茶々丸、こいつを下に運んでやれ」

「はい、マスター」

「あ、じゃあウチも手伝う！」

エヴァンジェリンがそう言ってこちらに戻ってくる。

そう言うと亜子はネギ君を抱えた茶々丸と一緒に建物の中に入っていた。

俺達が見ていたのは屋上の休憩場所みたいなところだ。始まる前に茶々丸が用意している紅茶があるのでそれを飲みに来たんだろう。

だと思っただけだ……

「何故俺の首筋をめくってるんですか？」

「坊やとの訓練で張り切りすぎた。少し分けてもらおうぞ」

「いやいやいや！なんで俺！？それネギ君との約束だろ！」

エヴァンジェリンはネギ君を弟子に取った際、いくつか約束をしている。その1つが魔力の補給。つまりは吸血行為だ。エヴァンジェリンは吸血することで失った魔力を多少なりとも補給することが出来るらしい。

なんだけどもそれはネギ君との約束であって俺との約束ではない。

「毎回同じ奴からのでは飽きる。それに坊やから取ったら坊やの修行の妨げになるだろ」

「それだけの理由！？魔力だって俺よりネギ君の方が高いだろ！」

「まあ貴様の血の味が気になるというのもある」

そっちが本音か！

「そっちが本音か！」

大事なことなので（ry

「細かいことは気にするな。死ぬまで吸いやせん」

死ぬまでとかマジやめて！

と言ったところでこの別荘内は茶々丸のお姉さんと言われる他の人形も（と言っても人形には見えないんだが…）多数存在する為逃げることが出来ないだろう。

「分かった。分かったから首はやめてくれ。せめて腕で」

「む、首の方が美味いんだが…仕方ない」

エヴァンジェリンはそれくらいは譲歩してくれて首を離してくれた。俺は渋々右腕の服を捲くり…

「違う。左腕を出せ」

「なんで？」

「心臓に近いほうが血が新鮮なんだ」

「そうなのか？」

「そうなんだ」

んー、人間には血の流れとかよく分からんが…

エヴァンジェリンは俺の隣に椅子を持ってきて座ると俺の左腕を持ち上げて少しなぞる。血流が豊富な所を探してるんだろう。

探し当てたのか手をそのままにして口を近づけると俺の腕に噛み付いた。皮膚を牙が貫通する痛みが左腕に響く。

「っ！もう少し優しくだなあ！」

「ふるはい！ひばがふけふ！（うるさい！牙が抜ける！）」

「へいへい……」

なんてわがままな奴なんだ……いやまあ分かつてはいたんだけどさ。そのまま左腕から血を吸われているが……なんていうか不思議な感覚だ。痛かったのは最初だけだが血が吸われるたびに何か別のものも抜けていく感じだ。

まあ魔力を吸っているんだからその感覚は間違っていないのかも……エヴァンジェリンは吸い始めた当初微妙な顔をしていたが、それからは何かを確かめるように吸っていた。

俺の血って不味いんだろうか？

「ふむ……」

エヴァンジェリンは満足したのか口を話し左腕から出る血を舐め上げた。その表情は非常に満足したもので……まあ簡単に言つと艶っぽかったりする。

「最後のは必要なのか？」

「血止めた。あのままでいいなら構わんがな……ふむ」

確かにさっきまで溢れていた血が止まっている。吸血鬼にはこんなことも出来るのか……

エヴァンジェリンは何か疑問な点があるのか顎に手を当てて考え

始めた。

「おい」

「どうした？」

「いや……遠慮するなど私らしくないな。単刀直入に聞く、草薙亮……同じ質問になるが……お前本当に人間なのか？」

は？

「いや、まあ前答えたとおり俺は普通の人間だぞ。なんでだ？」

「今血を吸っていて思ったんだけど……貴様の血液内部の魔力はおかしい。人間には血液型があるだろう？」

「ああ、確かにな」

「貴様の血はそのどれでもない……」

「は？」

「正確に言うと血液内に流れる魔力にも血液型のような違いがある。そしてそれはどうしても似か寄る部分がある。だが貴様は今まで吸ってきた人間のどの血にも該当しない」

「お前が忘れてるか今まで吸ったことの無い人間の血だったんじゃないのか？」

「忘れたのか？私はこれでも数百年生きてるんだ。今では吸血衝動もそこまではないが成り立ての頃は抑えるのに苦労して、数え切れない人間の血を吸ってきたんだ。その私が血の味を忘れるものか」「うん？なりたて？」

なんだその『なりたて』って……

「うん？話していなかったか。私は吸血鬼にさせられた（……）のさ」
「はあ!？」

なんだそのさせられた（……）って！

「ま、貴様には何の関係も無い話だ。気にするな」
「気にするなって……」

そんなこと言われたら余計気になるじゃないかよ。

「そうだな。どうしても知りたいなら対価を貰うぞ」

「対価？」

「貴様のことだ」

「俺？」

「私の昔話をするんだ。貴様の過去も聞かなければ不公平だろう」。

貴様の記録は全てUnknownなのだから本人に聞くしかあるまい」

「う…いや確かにそうだが…」

だが俺が転生者ってばれても…いや…エヴァンジェリンなら大丈夫か。

なんやかんや言ってもいい奴だし、魔法使いから恐れられてるこ

いつの言うことは、言っちゃ悪いが信じられないだろう。

それにもしエヴァンジェリンが信頼されてる人物だとしてもいきなり「転生してるやつがここにいる」って言われて「はいそうですか」と信じる奴はいない。

あれ？そう考えたら超の未来の話も似たようなもんなのか。

「分かった。お前のことも話してもらおうぞ」

「ああ、心配なら……私から話そう」

「そうか。なら頼む」

俺がそう言うとエヴァンジェリンは深く深呼吸して話し出した。

「……遠い昔の話だ。百年戦争というものを知っているか？」

「ああ、一応歴史の先生だからな」

1337年から1453年まで繰り広げられた王位継承権を巡るフランスとイングランドの戦いの総称。

ジャンヌダルクと言えば聞かぬ人はいないだろうが、彼女もその時代後期の人物だ。

「なら話は早いな。私はその時代のとある領主の城で育ち、何不自由ない幼少時代を過ごしていた。その頃の私は真正正銘、ただの人間だった。当然魔法のことなんて一切知らず、戦争はあったが私は

私なりの平穩を享受していた。……だが十の誕生日に目が覚めると……私は既にこの体になっていた」

「なつて……いた？」

「ああ、私が眠っている間にされていたみたいでな。想像できるか？朝起きたら急に日の光が怖くなり、血を飲みたいという衝動に駆られ、人が首からかけている何の変哲も無い十字架に恐怖を覚える……さらには川さえ渡れず、とっておきは鏡に自分の姿が映らなかつたことか……あの時気が狂わなかつたのが不思議なくらいさ」

ある日突然奪われた世界。当たり前前のものが消える恐怖は計り知れない。

普通の人間だったら気が狂っている。実際エヴァンジェリンも同じようになつたのだろう。

言葉や状況だけを聞いている俺達なんかとは正に次元が違う……

「私は神を呪い、私をこんな姿にした男を殺し……城を出た。だからと言って最初から今みたいに力があつたわけじゃない。まあ普通の人間に遅れをとることは無かつたが、最初の数十年は力も弱かつたし、さつき言つたような弱点だつて多かつたせいで生きていく力をつけるまでが一番辛かつたよ。さらに不老不死というのもその時代にとつてはデメリットにしかならなかつたよ。その時代は特に異端審問が盛んでな」

「魔女狩り……か」

「その通りだ。いつまでたつても成長しない子供など、傍から見たら不気味以外の何者でもない。そんな子供がいたら結果は自ずと分かるだろう？一度ミスつて本当に焼かれたこともあつたよ。あの時ほど死ねないのを後悔したことはないな。それにこつちの世界がこつだからといって、魔法使いの国でも私を受け入れる事など無かつ

た」

魔法使いといっても所詮は人間……人間は自分と違う物を忌み嫌い排斥しようとする。魔法使いでもやはり人間は人間だったということか。

そしてそれを語るエヴァンジェリンの顔はなんの感情も無い。ただ淡々と、本の中身を読むように……自分のことではないように語っていく。

「私を殺そうとした者を私は殺した。後は今もやってる戦争と同じさ……一人を殺せばその一人の復讐をしようと次の者が、そいつを殺せばまたそいつの復讐のために……ってな具合でな。終わりの無い憎悪の無限ループさ。まだ選択肢が出る分ゲームの方が親切だろうよ。殺さねば生きられぬ時代もあったし……殺さずに済む数十年もあった。南洋の孤島に居を構え、人と交わずに生きていく術を得て、私に近づいてくる者が命を落とす覚悟がある者達になってからは楽になった」

エヴァンジェリンはそこでいったん話を切ると深いため息をついて俺に向き直った。

「ま、そしてそこからは以前話したとおり、サウザンドマスターに封じられて今に至るって訳さ。これで私の話は終わりだ」

その顔が自嘲気味に、だがようやく笑った。

「お前が悪の魔法使いって名乗るのはその…人を殺したせいかな？」
「その通りだ。状況はどうあれ私は人を殺してきた。そして少なくとも最初の一人は…憎しみを持って殺した」

最初の一人…エヴァンジェリンを吸血鬼にした奴か。

「おい、だからと言ってしょうがないとか言うんじゃないぞ。いくら襲われたからといって逃がすという選択肢もあったわけだしな。殺したのは間違いなく私の意志さ。数え切れないほどの屍の上に今の私はある。それを否定する気はさらさら無い」

未だ自嘲気味に笑いながら話すエヴァンジェリンに向かって俺は…

「さあ、私の話はこれで終わりだ。次は貴様の…むぐっ！」

抱きしめるしか出来なかった。

「き！貴様／＼何を／＼／＼こら、離さんか！」

「すまん…」

「な、すまんと思ってるなら離せよ…」

「……すまん」

「お前……泣いてるのか？」

泣くことしか出来なかった…

いつもは尊大な吸血鬼は、抱きしめると小さく…そして暖かかった…他の誰とも変わらない小さな温もりを確かに感じた。

こんな少女が吸血鬼と化して…手を紅に染め…そのせいで与えられるはずの幸せも与えられない…

そして救うことも出来ない。今の俺は…泣くことしか出来ない…

俺は…無力だ…

これ以上悔しいことが…あつてたまるか…

「すまん…」

「……………はあ…これだから人間は……………」

そついいながらエヴァンジェリンは俺が泣き止むまでそのままですいてくれた。

Side out

Side エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル

「気は晴れたか、おい」

「ああ、すまなかつたな」

全くだから人間は面倒なんだ……他人を排斥する傾向があるくせに
変に他人に感情移入する。

「それより貴様の話だ。さっさとしろ」

「ああ、そうだったな」

これでようやくこいつの馬鹿みたいな能力の一端が聞けるか。

「俺はお前みたいに何か特別な過去があるわけじゃない。普通の家
で普通に育って、両親は早死にしたけど21までは普通に大学に通
う一般人だった」

「21までって今も21じゃないのか？」

「いや、感覚的には21なんだけど……この世界についてはまだ
1年経ってないからな、俺は」

「この世界？やはり魔法世界にいたということか？」

しかしこいつの言い方だとまるで…

「いや、多分こことは全く違うパラレルワールドみたいなのところか
な？」

「やはり……」

「あれ？案外驚かないんだな」

「当たり前だ。そのくらいの予想はしている。そもそも茶々丸に調

べさせて正体不明だったものを同じ世界の住人などと思っちゃおらん」

だが異世界か……これはこれで興味深い。数百年生きてきた私もまだまだ知らないことはあるか……少し楽しくなってきたな。

「で？お前はその異世界の魔法で来たのか？」

「いや、俺の世界に魔法なんてファンタジックなものは無かったよ。あー、俺が知らなかったただけであっただかもしれないけど……とりあえず俺は普通の学生だった」

「では貴様の使える召喚はなんだ？それに才能も十分あるようだが？」

「まあこつからが本題なんだが……エヴァンジェリンは転生って信じたりするか？」

「あ？転生ってあの転生か？」

「多分お前の言ってるので合ってる」

転生……死んだ後に別の存在として生を受け……っっておいまさか……

「ちょっと待て……お前の言い方だとそれは貴様が……」

「そう、お前の予想通り。俺は一回死んだ。そこから転生してこの世界に来たんだ」

「……………」

おいおい…流石の私もそれは予想外だったぞ。

「あー、だから言うの嫌だったんだ。普通信じてもらえないからな」

「当たり前だ。そんな与太話信じる奴がどこにいる。まだ異世界から飛んで来ただけのほうが説得力がある」

「うーん…記憶を見てもらうのが一番手っ取り早いんだけどそんな魔法ないの？」

「記憶を？」

ふむ…いや、確かあったな。

「あるぞ。試してみるか」

「あるのか。それならそれをしてみてくれ。俺の場合はそっちの方が絶対納得できる」

「よし、ならば少し待て」

あの魔法には魔方陣が必要だからな……

ふむ、こんなものか。

「よし、そこに座れ」

「ここか？」

草薙が私の反対側に胡坐を組んで座る。

それを見てから私はこいつの両手を掴んでから額に自分の額を押し当てた

「お、おい／＼／」

「何を赤くなっている。キスするとても思ったか？」

なんだ、中々可愛いところもあるじゃないか。これはこれだからかいがいのある奴だな。

まあそれは後でいいだろう。今はこいつの言ってることを確かめる方が先だ。

「必要なことだ。私と同じ呪文を唱えながらその転生のシーンを思い出せ。それだけでいい」

「あ、ああ……」

「『ムーサ達の母、ムネーモシユネーよ、おのがもとへと我らを誘え』……だ。間違えるなよ」

「ああ……『ムーサ達の母、ムネーモシユネーよ、おのがもとへと我らを誘え』」

草薙が呪文を唱えたと同時に、意識が記憶の中に入り込む……

はずだった…

「な、なんだ…これは？」

確かに呪文は成功したはずだ……事実私の体は裸で宙に浮いている。記憶の中に入ったのは確かだ。

なのになんだ……何故何も無い！？

ただ真っ白な空間が永遠と続いているだけ……空も、地面も、人も、建物も……上も下も無い。

言葉にするならば完全な『無』がそこにある。

『おい！なぜ何も無い！』

『……………』

おまけに奴本人からの返答も無い。

さてどうするか……

この呪文は術者の特定の記憶を見るものだ。よって効力は術者の記憶の長さに依存する。

だがこれは奴が作り出したものではないだろう。

つまり私は擬似的に奴の記憶に精神を閉じ込められたことになる。

脱出は出来る……外部の誰かが私たちの接触を解いてくれればそれでいい。だがそれ以外の方法は皆無だ。そもそも危険な呪文ではないのだから。

『こんなことなら強制的に記憶を見る呪文を使うべきだったな……』

それならわざわざ許可も取らなくて良いし自分の意思で離脱できたものを……

「おや？貴方は？」

『あ？』

不意に後ろから声をかけられた。

そう、掛けられた。

精神体だけの今の私に声なんてかけられるはずはない。そもそも記憶の中だぞ！？過去に起こったことを再生してるだけなのにどうして今の私に話しかけることが出来る！？

「それはまあ、私は神ですから」

振り返った先にいたのはフードで顔まですっぽり覆った男だ。年は多分20前後か？

なんかこいつを見ていると殴りたい衝動に駆られる…

「それはヒドイ言われよう…いや、思われようですね」

うん？こいつまさか…

「ええ、心を読むくらいは出来ますよ？何せ神ですから」

神かどうかは知らんが人様の心を勝手に見るのは関心せんな。

「先ほどまで彼の心を見ようとしてた人物の言葉とは思えませんかね」

『私はいんだよ。何せ私は悪い魔法使いだからな』

「なるほど。それはそうかもしれませんが」

『で？貴様は何者だ？』

「先ほども言いましたよ？神です」

こいつめけぬけと……

「いえいえ、本当のことです。この記憶の持ち主の彼を転生させたのも私ですよ?」

『何か証拠でもあるのか?』

「証拠…と言われると難しいですね。何せ今の貴方は精神体ですから。この状況が証拠ではダメなので?」

『強力な術者なら人の記憶を操るくらいは出来るものだ』
「なるほど。ではどうしたら信じてくれるのです?」

『アホか。神なんて信じるわけなかるう』

「これはこれは…手厳しいお嬢様だ。彼でさえ会った瞬間に信じてくれたというのに。それに貴方は神を恨んでいたのではないのですか?せつかく復讐の対象が目の前にいるというのに」

神と名乗る男がヤレヤレと肩を竦める。

あいつの対応能力の高さは持ち前のものということか…

とすれば前の世界でも相当な苦勞人だったろうな。

『一つ聞く』

「なんなりと」

『何故こんな手の込んだことをする?』

「それは貴方達の世界の者が知るとマズイ事実が隠されているからですよ」

『ほう……世界の真理とやらでも教えてくれるのか?』

「まあ…似たようなものです」

しかし……いつまでもここに居る訳にもいかな。

こいつが神かどうかは置いておいて、この空間を作り出しているのはこいつに間違いない。

ということは出るにはこいつをどうにかするしかないのだろうか…

「直ぐ出しますよ。ただ一つ約束して頂きたいだけで」

『約束だと?』

「ええ、今後彼の記憶を覗き見ないこと。これだけです」

『断つたら?』

「残念ながら貴方をここから出すことは出来ません。私はこれでも忙しい身でしてね。こんな風に一人一人対応してる時間はほとんどないんです。あなたの返答も後30秒で貰わなければ」

『また随分自分勝手な神様だな』

「そこは勘弁して頂きたいところです。何せ神は気まぐれですから」

『ふん、まあいいさ。私もこんな何も無いところで一生過ごすのはゴメンだ』

「それは良かった。今後彼の記憶に入れば貴方はここから出られなくなりますから注意してください」

そう言うと男は背を向ける。なんとというかやっぱり…

『おい』

「は…デウス!?!」

振り返った男の顔面に思い切り拳を叩きつけた。

『ふむ、少しはすつきりしたか』

「痛たたた。神に初対面で拳を向けてきたのは貴方が初めてですよ」

『わざと当たったくせに戯言を』

「気は済みました？」

『望みどおり恨みは晴らした。この程度では全然足りんが…さっさと私を帰らせる』

「分かりました。では約束の件はくれぐれもお忘れなきよう」

男が消えると同時に体が何かに引き込まれる感覚が襲った……

「お……おい……おい……おい！」

揺り起こされて目を開けると草薙の顔が目の前にあった。

「よかった。目が覚めアゲロ！」

それを見た瞬間私は考えるより先に拳が出ていた。その拳は違う事無く草薙の顔面に直撃して、変な声を上げて吹っ飛んだ。

「なじえなぐりやれたし」

「なんとなくだ。気にするな」

草薙は鼻を押さえながら近づいてくる。

「で？信じてもらえたか」

「あれで信じるって言うほうが無理だが…まあ信じるとしよう。一度憎んだやつも殴れたしな」

「それってさつき言ってた神様か？」

「ああ」

「記憶の中でも殴れるのか…」

草薙はそう言いながら頭を抱え込んでいる。本来は記憶者本人も一緒にその記憶を体験して見る筈のだが…やはりあの場にこいつの意識はなかったようだ。

「まあでも一応これで俺の言ったことは真実って分かってもらえたわけだ」

「ああ、お前の記録が何もないのも、魔法に関しての技術を一切知らないのも納得いったよ」

しかし転生とは恐れ入る。まだ他の世界からなんかしらの要因で飛ばされたとかの方がまだ納得できるな。

ふむ、他の世界への移動か。それはそれで面白いかも知れんな。技術的には転生よりも簡単かもしれん。何年かかるかは分からんが

何、私には無限の時間があるのだからゆっくり研究するとしよう。
それに結局肝心なところは分からずじまい…唯一分かったことは…

「お前と私は同じものだってことくらいか」
「は？」

私の呟きに草薙は首を傾げている。

全く同じというわけではないが…どちらも一度人間として死んでいるという意味では大して変わりはない。

600年前に人間でなくなった私と、つい先日死んで転生したこいつと、違いがあるとすれば知識の問題だけだ。どちらも既に人間としての域にいない。

そうか…だからか。

草薙は自分の生徒たちが傷つくことを極端に嫌うのはそのせいか。別世界ということはこの世界に繋がりなどない。

そしてその時、人は生きる意味を求める。私は当時はこんなことになった世界を憎むことで正気を保った。そしてこいつは自身で気づいていないが今の環境を護ることで正気を保とうとしている。

人のためと思いきや全ては自分のためとはな…

「お前も難儀な性格だな」

「なに一人で納得してるのかは知らんが放っておいてくれ」

まあいい。面白いものも見れたし一応復讐という目的も果たすことは出来た。

少しくらいはこいつに力を貸してやるのも一興だろ。

Side out

Side 和泉 亜子

ああ、なに話とるんやろあの二人…なんかすごく親しそうやなあ。いいなあ…

そ、それにエヴァちゃんが倒れる前になんか、き…キキキ、キスしようとした風にも見えたし／＼／＼／

「あれは術者の記憶を見せる魔法ですね」

「うひゃい！」

いつの間にも後ろにおったのか。茶々丸さんがウチの後ろに立つた。

「なので恐らくリョウさんがマスターの記憶をどちらかが見ていたものではないかと」

「そ、そか。わざわざありがとな」

記憶か。うーん、小さい頃の草薙さんとか想像つかへんなあ。

昔からあんなんやったんやろうか？ウチも見れたらもっと草薙さんを理解でき……

「ウチの…過去……」

過去…

ウチの背中にもある…

消えない過去……

「亜子さん？」

「あ…うん！なんでもないえ！」

「そうですか？」

やっぱり止めとこ！うん！

無理に人の過去を聞いたり見たりするのはあかんよね！

そうウチはウチに言い聞かせた。少し…背中が疼いた…

S i d e o u t

過去の為…（後書き）

というわけで、エヴァンジェリンの過去を草薙が知ったらということを書きました。

いつか亜子の背中傷についてもオリジナルで書きたいと思ってるんですけどね。ヒント無さ過ぎてちょい難しいかも…

世界の心理…まあここでバラしますけどこの世界が漫画の世界ってことですよねつまり。

誤字脱字指摘、感想・評価お待ちしております。

作者のやる気、テンションに非常に影響しますので出来ればいいのでもらえたら作者が倍プッシュだ…します！

ではまた来週お待ちしております

知る為に… 前編（前書き）

今回は前編後編分割！とりあえず本編へ！

知る為に… 前編

Side 草薙 亮

今日も今日とて修行のためにエヴァンジェリンの別荘にいる。最近放課後になれば亜子やネギ君と別々にエヴァンジェリンの別荘で合流してから入るのが主になっていた。

外は雨が降り始めていたが、そんなことここには関係ない。何しらずと南国で同じ状態なのだから。

「『風よ』…」

目の前では亜子が魔法で風をおこしている。茶々丸が横についているのは既にお馴染みの光景になりつつある。いつも通り最初から『魔法の射手』は上手いかなかったから息抜きで出来る魔法を使っているのだろう。

エヴァンジェリンとネギ君は現在休憩中…というか吸血中だ。正確には魔力補充と言ったかもしれない。

「うーん…やつぱり『魔法の射手』難しいなあ」

「これが終われば後は応用です。頑張りましょう」

「そやね！プラクテ・ビギ・ナル！」

そうやって練習を続ける二人は本当に仲が良い。これが魔法関係で無かったらよかつたんだろうけど、でも魔法のことが無ければこ

の二人の共通点はなかったんだ。そんなに悪いことでもないか…

ちなみに俺は気配探知の練習中。チャチャゼロに頼んで別荘の中を動き回ってもらってそれを捉えるということを行っている。

チャチャゼロはかなり不服そうだったけど後で相手してやるというたら喜んで行ってくれた。正直後がめちゃくちゃコワイ…

しかしチャチャゼロの搜索はかなりいい訓練だ。何せあいつは姿が小さい上に元々生き物ではないからかなり感じにくい気配を持っている。それを正確に察知できるようになれば他の気配探知もレベルが上がってくるだろう。

しかも別荘全て使って構わないというルールなのだからかなりの集中力を要する。さっきから額の汗が止まらず、足元に小さな汗の水溜りが出来てしまっている。

屋上に気配は二つ…亜子と茶々丸。一つ下の階にネギ君とエヴァンジェリン。さらにその下にはエヴァンジェリンが使役している人形達の気配…

あれ？チャチャゼロは？

「く、草薙さん！後ろ！後ろー！」

「へ？」

亜子に言われて振り返って見たものは…今にも剣を俺めがけて振り下ろそうとしているチャチャゼロだった。

「チツ…オシイ」
「おiiiiiiiiiiiiiiiiiiii!」

あ、危なかった…もう少しいこの世からおさらばするところだった。

「イイジャネエカ。少シクライ」

「いや、毎回言うがお前少しじゃないだろ。後で相手するって言ってるじゃないか」

「長エンダヨ才前二付キ合ウノヨオ」

「はあ…もういいよ。今日はこれで終わりだ」

「オ、ジャア一丁殺ロウゼ」

「後でな。少し疲れた」

「早くシロヨ」

「おう」

命の危機から解放されてほっと安堵の息をつく。が、その瞬間…

「な……ど…ど…ど…ど…なのよ」
「…ッ!」

なんか…非常に聞きなれた声が聞こえた。厄介ごと満載の元気なピンク髪のあいつの声が…

「今の声って…まさかアスナか？」

「はい、あの声紋は間違いありません」

俺に聞こえているんだから当然後ろにいる亜子達にも聞こえていたようだ。

茶々丸も言っているし間違いはない。

しかしどうやってここに…

アスナたちにはこのことは話していなかったはずだ。

「なあ今日って最後に入ってきたの誰だっけ？」

「本日はマスターとネギ先生ですが…」

尾けられたな二人とも……ネギ君は気配探知なんて出来ないし、エヴァンジェリンも外にいるときは普通の少女なのだからしょうがないんだが…

もう少し周囲に気を配るといっかなんと言っか。

「ちょっと見てくるよ。放っておくわけにもいかないしな」

「あ、ウチも行く！」

亜子と一緒に魔方陣の方に向かう。

どうせアスナだけではないだろう。最低でも刹那は一緒にいるはずだ。

と思っていたんだけど……

「うわあ……」

「こ、これはウチも予想外やなあ……」

いるわいるわ…アスナ、刹那、このか、綾瀬、宮崎、古菲、朝倉の総勢7名。修学旅行の関係者がほぼ勢ぞろいだ。

7人は自分達に何が起こったか分からず辺りをキョロキョロと見渡している。全く何しに来たんだが…

「おーい、お前ら」

手を振ってこっちの存在を気づかせてやった。

全員の視線が俺と亜子を捉えて、別荘本体へ至る高い橋を恐る恐るこちらへと歩いてくる。

うん、そこ俺も最初怖かった。手摺り無いんだもんな。

「く、草薙さんと和泉さん？これは一体…いえ、ここは…」

「ちよつとちよつと！これどうなってるの！？どうして二人がいるのよ！というか「こど」！？」

刹那とアスナが捲くし立ててくるが…

「ふん！」

「あだ!」「いた!」

二人の頭に思いっきり拳骨を落とした。

「な、なにすんのよー!」

「く、草薙さん…?」

「連れてきたことはしょうがないが…なんで来た?」

「な、なんでつて……なんか最近ネギが修行2、3時間でやたらと疲れて帰って来るから何してるんだろうつて思つて。それで二人を尾行してたら…いつの間にか皆着いてきちゃつて…」

「も、申し訳ありません。いけないとは分かつていたんですがどうしても気になつて…」

はあ…もつため息しか出てこない…

「ちよつとちよつとー、私たちのこと無視しないでよー」

「そつやでー。ウチも混ぜてー」

「く、草薙さん…結局ここは…」

「何か面白そつなところアルねー」

「これも魔法というものですか…」

おー、7人も揃つと流石にうるさいぞおい……

「あー、分かつた分かつた。説明するからこつちこい。あとお前ら、

「教職の合間にちまちまやっても埒が明かないらしいからな。そういうことだ」

このかの問いに簡潔に答える。

「てことは草薙さんとネギ坊主は一日が二日アルか!？」

「大変すぎやー!」

「状況によつてはもう少しいたりするから実際はもつとだけどな。概ねそんな感じだ」

「はあ……何か……草薙さんとネギ先生の異常なまでの成長スピードはこれが一つの要因だったんですね」

「まあ否定はしないさ」

どうするか……

「ぬあ!？なんだ貴様ら!」

………とりあえず今出てきたエヴァンジェリンへの状況報告か。

「全くどいつもこいつも」

隣でエヴァンジェリンが呟きながらワイングラスを傾けている。

「そもそも尾行されてることに気づかないお前にも責任の一端はある。諦めろ」

「もう諦めている。だから飲まないとやってられんのだ」

そういいながらエヴァンジェリンはグラスの残りを一気に煽った。他の面子は現在食事中。いつの間にかこの広い別荘を調べ上げた拳句、厨房や倉庫からエヴァンジェリン秘蔵の食料や飲み物を拝借してきていた。相変わらずスペックが高い。

しかしこいつらがいるとどこでも宴会騒ぎになるのはなんでなのだろうか？

「きゃー！亜子ちゃんが倒れたー！」

「誰やお酒持ってきたの！」

大丈夫、ここは法も何も無い世界だから大丈夫。

あれは赤いのはサボテンの原液、あの赤いのはサボテン原液。

オサケナンテコトバハキコエマセン。

「エヴァンジェリンさん。少し宜しいでしょうか？」

不意にかけられた声に振り向くと、声をかけてきた本人の綾瀬と、その隣には宮崎が立っていた。その顔は何か真剣な顔つきをしている。

エヴァンジェリンはその顔を見ただけで少し嫌そうな顔をした。

「何か用か貴様ら」

「実はお願いがあるのですが…」

エヴァンジェリンの表情が『やっぱりか』という顔になった。実際そう思っているに違いない。

「私たちに魔法を教えて頂けないですか？」

その言葉を聞いた瞬間俺はある種の哀しみを感じた。そう、哀しみだ。呆れでも無く怒りでもなく…哀しみ。

目の前では綾瀬とエヴァンジェリンの会話が続けているのだろうか全く耳に入っていない。

この哀しみが自分勝手なのは分かっている。

『魔法』…この言葉を聞いて使ってみたいと思う奴はこの世にいないんじゃないかって言うくらいに非日常。

俺だつて魔法が使えるということを知った時は嬉しかった。

だが現実はどうだ。

自分より巨大な鬼に殺されかけ、数百年生きてきた吸血鬼と戦い、京都では何度も死にそうになり、全く関係の無い一般人を巻き込んでいる。現実と憧れを一緒にすることのギャップと後悔。そして一度知れば引き下がることの出来ない状況にいやおう無しに追い込まれる。

だからこそ命を張る覚悟がないこいつらにはこっちに首を突っ込んで欲しくないんだが…

「何で私がそんなメンドクさいことを…向こうに先生がいるんだからそっちに頼め。そこにもいるぞ、魔法先生がな」

エヴァンジェリンが俺に向けて放った言葉でようやく俺は我に帰った。エヴァンジェリンはというと完全に話を聞く気が無いのかベツドに横になって本を読み始めている。

当然綾瀬たちの視線もこちらに向けられる。

「草薙先生…」

何を馬鹿なことを言い出すのかと思えば…

「命を懸ける覚悟があるのか」

いつも俺が掛ける言葉を投げかける。大抵の奴はここで聞き返す。それをこいつは…

「あります」

真顔で言い返しやがった。

それで分かった。

今のこいつに何を言っても無駄だということが。

綾瀬はまだ自分の身が命の危険になる状況に置かれたことが無い。京都での一件は石化はしたが全員が後で治る程度の魔法だったし、ここで見ているのも初歩の初歩、命の危険のないものだ。唯一死にかけたネギ君もこのかの力で助かっている。

楓とは一緒だったらしいが相手は犬上小太郎。楓とでは雲泥の實力差で、そこを魔法の世界と見ている。フェイトとの戦闘を見ていたら軽々しくこんな言葉を吐くことはできないはずだ。

今の綾瀬は以前の俺と同じ、目の前のファンタジーに意思を奪われて冷静な判断が出来ていない。出来ていても後のことまで見通せていない盲目だ。

「却下だ」

「な!？」

そんな奴を知ったからといって巻き込むわけにはいかない。

「な、何故です!？」

「お前は命を懸けるといふ本当の意味を分かってない」

「あ、亜子さんには教えているのではないのですか!？」

「そりゃあそこにいる馬鹿とここで寝そべってるアホと俺というマ
ヌケに巻き込まれた結果だ。お前はまだ戻れる」

後ろで馬鹿騒ぎしている朝倉とカモ、エヴァンジェリンを指差し
てた後、俺自身を指差して言った。

「そうですか…分かりました」

二人はそれを聞くとネギ君の方へと歩いていった。

「なんだ?止めんのか」

「どうせ止めても無駄だろ。最近になってようやく分かったよ。例
え止めても後で絶対ついてくる。そんなんされるなら予め心構えを
していてもらったほうがいい」

「は、貴様もようやくあのクラスのことが見えたみたいだな」

「賛成はできないけどな。命が対価でも着いてくる意思があるなら
止めやしないさ。俺としては悲しい限りだが…」

「あ、あの…」

そんな話をしているとネギ君が俺達のところにやってきた。

「魔法教えてもいいんでしょか……」

「知るか、勝手にしろ。どうなっても私は知らん」

「俺も同じ意見だ。ネギ君が決める。どうせ俺達は教えないんだからな」

「う……うーん」

しばらく悩んだ末結局ネギ君は教えることにしたようだ。回りでは俺たち以外が集まって『火よ灯れ』の練習をしている。

やはり力は必要だ。どうしても……一刻も早く咸卦法を身に付けなければ守れるものも守れなくなる。

「なあエヴァンジェリン？」

「あ？」

「俺はもつと強くなりたい……」

「それでどうするつもりだ？こいつら全員を守る為に命でも賭けるつもりか？」

「それくらい覚悟は必要だろ？何せこの世界で唯一、俺の繋がりなんだ。俺はそれを失いたくない。自己満足だつて言うのは分かってる。でもやっぱり……俺はこいつらが傷つくのを見たくない……」

そう、この間エヴァンジェリンに記憶を見られた後に言われた。そして気づいた。人間は関わっていないように見えても絶対誰かと

繋がっていて自分も誰かと繋がっている。

逆に言えば誰とも繋がってない人間はこの世におらず、繋がりの無い人間はこの世に存在していないも同じ。

そしてこいつらは全員俺の繋がりがだ。両親も親戚も友達もいないこの世界で唯一できた、家族以上と言ってもいい繋がりが。

俺は生徒だから守っていると思うていたが無意識に自分のためを守っていたのだ。

亜子は…いや、ここにいる奴らなら全員が俺の考えを否定するだろうが、俺はそれを守る為なら命を賭けても惜しくは無い。

「やっぱり俺は捨てられないよ」

「生まれ変わっても人の世話とは…苦勞の耐えん奴だな。考えておいてやるよ。私も貴様がどこまで行けるのか見てみたいしな」

「ありがとう」

協力は得られた。あとは俺の…頑張り次第だ。

S i d e o u t

S i d e ????

「ぶつむ…」

「こつもあつさりと侵入できてしまうと拍子抜けだな。麻帆良学園には例の吸血鬼がいるという情報だったが…」

「どうかね？」

『見つけたぜ。学園の近くで返り討ちにした奴だ』

『混乱の魔法が効いたのか女といちゃついてるぜ？』

『一時的な記憶喪失デスネ』

「よろしい、ではそちらから片付けよう」

『犬上小太郎は懲罰により特殊能力を封じられていまマス、気は使えませんが…』

『ま、今なら楽勝ってコツタナ』

「よろしい、では君達は作戦通り事を運びたまえ。分かっているとは思うがハイデライト・ウォーカーに気づかれぬようにな」

『ラジャ』

『ステルス完璧デス』

3人からの念話が途絶えて辺りには再び静寂だけになる。

「やれやれ、では始めるとしましょうか」

傍らにいる男に話しかける。

男は懐からタバコを取り出しマッチで火をつけようとしているが

…この雨では火がつかないでしょうに。

予想通り火がつかないのか…一瞬にしてタバコが燃え上がった。

燃えカスとなったタバコを投げ捨てると男が声を出した。

「勝手にやれ。なんで俺がこんな面倒なことを…」
「と言つても契約はしたのでしょ？」
「確かに。だがなあ…あー、くっそ。なんで引き受けたんだかなあ」

やれやれ……相変わらずなお方だ。

「とにかく我々は始めます」
「おー、勝手にやってくれ。俺は寝てる」
「いいんですかそれで…」
「あーあーあー！うっせえよヘルマン！てめえ俺に指図すんのか！
？今ここで殺してやってもいいんだぞ！」

男から一気に殺気が溢れ出る。並みの人間ならこれだけで死ぬだろうね。

しかしそれも一瞬。次の時にはもう先ほどと同じダルそうな表情に戻っている。

「殺すのもめんどくせえ…さっさと行け」
「はあ、分かりました。邪魔だけはしないで下さいよ」
「そんな面倒なこと俺がすつかよ」

この方の考えはやはり読めん。やる気がなさそうなのに急にやる

気になる時がある。
行動原理が読めん。

『おい、準備できたぜ』
「そうか。では始めてくれ」

今は目の前の仕事に集中するかな。さて、6年ぶりだ……彼の少年はどのように育っているか楽しみだ。

S i d e o u t

知る為に… 前編（後書き）

はい、いよいよ悪魔編ですね。ここまで長かった…

後編は日曜日のお昼にくらいに更新予定。

誤字脱字指摘、感想・評価お待ちしております。
作者のやる気、テンションに非常に影響しますので出来ればいい
のでもらえたら作者がベリーメロン！します！

知る為に…後編（前書き）

後編！前編を見てからご覧ください！

知る為に…後編

Side 草薙 亮

時刻は夜…といつても『別荘』の中での時刻で実際の時刻はまだ夕方のはずだ。

流石のアスナたちも騒ぎ疲れて今は眠っている。起きているのは俺、エヴァンジェリン、茶々丸、チャチャゼロだけだ。

この『別荘』は他に生き物がいない為、人が寝静まれば音は風だけとなる。

今は静かになった状態でエヴァンジェリンの晩酌に付き合っている。テーブルの上にあるのは度数の低いジュースの様な白ワインだ。小さな人形が酒を飲んでいるっていう不思議な光景にも…うん、もう慣れた。

「あー、あかんー…頭痛い……」

苦しそうな声を上げながら亜子が階段を降りてきた。真っ先に潰れた為、他のメンバーより先に目が覚めてしまったんだろう。まだ酔いが醒めてないのか。

「大丈夫か？」

「んー、ちよつとあかんかも…」

「そういう時は迎え酒ってな。ほれ、ちよびつとだけ飲め」

「あ、おおきにな〜」

空いたグラスにワインを少し注いで亜子に渡してやる。亜子はそれをちびちびと口に運ぶ。

「落ち着いたか？」

「うん…あかん。まだちょっと頭痛い…」

「そりゃもう寝るしかないか。さっさと寝て酔いを醒ませ」

「うん、そうする」

亜子はそういうと再び階段を上がって行った。

再び静寂が戻りまた沈黙の中での晩酌が行われる。

チャチャゼロはグラスでは足りないのかビンを丸々ラッパ飲みしている。

明らかにビンの方が要領大きいんだけどあれどこに入ってるんだ…

ふと、風の音を切り裂いて何か自然のものではない音が聞こえた。

耳を澄ますと足を踏むような音と雷の様な小さな音が連続して聞こえてくる。

「坊やめ。静かな夜が台無しだな」

エヴァンジェリンがそう言ってグラスの残りを一気に飲み干す。

「ネギ君が？これ何の音だ？」

「大方昼間教えてやった連携の練習でもしてるんだろっさ。あの後修行がグダグダになったからな。自主練習でもしてるんだろ」
「なるほど」

アスナたちの乱入に魔法の講習、宴会と続けば今日の練習は半分くらい潰れている。ネギ君はそれを自分で取り戻そうとしている。

「行かなくて良いのか？」

「あ？」

「まだ教えてる途中だったんだろ？」

「坊やが自分で自分の戦い方を見つければそれが一番さ。そもそも魔法使いの戦い方など一つじゃないんだ。私は私のやり方を教えてるだけだ。そこから戦い方を見つけるのは坊やの仕事さ」

「ふーん、そんなもんか」

「そんなもんだ。そもそも貴様も戦い方は我流だろ…が、まあ坊やを冷やかしに行くくらいはしてもいいかな」

「結局行くんだな」

「マスターもやはり心配なのですね」

「ケケケ、ソウイウコッタナ」

「お前ら最近おかしくないか！？」

席を立ったエヴァンジェリンのあとに続いて階段を上がる。上がってる途中に先ほどの音は聞こえなくなっていた。もう終わってしまったんだろっか？

屋上に出るとやはりネギ君の姿は無い。

「ネギ先生はいませんね」

「だな。どこいったんだ？」

周囲を見渡すと屋上の端っこの方にネギ君の姿を確認した。そこには何故か膝立ちで向かい合う格好でアスナがいる。床には魔方阵が敷かれているのを見ると何かの魔法を使うようだ。

そしてそれを見守るように隠れているもう一つの人影。ネギ君たちからは見えないんだろうが俺達はその後ろなので丸見えだ。

「あれ宮崎か？」

「はい、宮崎さんに相違ありません」

「何してるんだ？」

「ここからでは……」

「だよな」

茶々丸の答えに答えてとりあえず近くににいる宮崎に近づく。

「……な、何してるんだろー……」

かなり近づいたところで宮崎の声が聞こえた。

というか気づいてないのか？普通どんな人でも背後に立たれると気になると思うんだけど。

「ふむ。アレは意識シンクロの魔法だな」

「うひゃいいっ!？エ、エヴァエヴァエヴァンジェリンさん!？」

「意識シンクロって俺とお前が使ったやつか？」

「ふひよおう!？草薙先生!？」

「先生はよせ」

ふひよおうってすごい声だな。どこから出たその声。

やっぱり宮崎は気づいていなかった。エヴァンジェリンと俺の心に心臓が飛び出るんじゃないかというほどの声を上げていたのだから間違いないだろう。

俺と使ったやつってあれだよな。対象者にその人の過去を見せるってやつ。

「うむ、その通りだ。お前、アレ持ってた。他人の表層意識を探れるアーティファクト」。ちよつと貸してみる。坊やの心をウオツチする」

「おいおい、いいのか？」

『お前のものは俺のもの、俺のものは俺のもの』みたいな言い方だ。

そういえば宮崎のアーティファクトってそんなのだったな。というより今思ったけどそれってチートクラスのすごい代物なんじゃ…

「ええ〜!？ダ、ダメですよそんなの……」

ああ、そうだよな。宮崎がそんな個人的なことに使うわけないし

…「こついつ性格だからあのアーティファクトなのか。
まあ当然エヴァンジェリンは諦めるわけは無い。

「好きな男」の過去を知っておくことはなにかと有利だと思うが
な

「はっ！？な、なぜそれを！」

完全に落としにかかったな。

「ぼーやは他の連中にも話すと言っていたから大丈夫だ。師匠の私
には聞く権利がある。あのぼーやの姉貴面した神楽坂明日菜だけに
聞かれては色々と先を越されてしまつかも知れんぞ？ホラどうする、
宮崎のどか？」

「あ、あのー…えっとー…」

捲くし立てるエヴァンジェリンの言葉に宮崎の目がグルグルと回
り始め…

「ちょ、ちよつとだけなら」

「うむ」

宮崎陥落。時間一分足らず。

流石に600年以上生きてるとたった14歳の少女をかどわか
すのはお手の物みたいだ。

「お前はどつする？」
「見る」

興味ないわけじゃないしな。

エヴァンジェリンが宮崎から本を受け取り開くと、開いたページに絵と文字が浮かび上がってきた。

なんかすごい可愛らしいというかファンシーと言っか…ぶっちやけて言っつと幼い絵だ。

「草薙さん？なにをしてるんですか？」

後ろからの声に振り返ると刹那が立っていた。

「何々？どつしたの？」
「何かやるん？」

刹那だけじゃなくて他の面々も全員いるし…

どつやらこの別荘にいる連中が全員起きだしてしまつたようだ。

「おいおい、これどつすんだよ」
「別に構わんだろ。さっきも言つたが坊やも最初から他の連中にも話す予定だつたみたいだしな」

「嘘じゃなかったのか…」

エヴァンジェリンはそういうと座り込んだ。俺も他の連中と同じようにエヴァンジェリンの後ろから本を囲むように覗き込んだ。

映し出されたのは6年前の光景。イギリス、ウエールズ地方の小さな村。

真っ白な雪が降る景色の中で、ネギ君とネカネと呼ばれたネギ君の姉らしき女性は暮らしていた。

村はどうやら魔法使いの村のようで、いかにも魔法使いといった人々が暮らしている。

ネギ君に両親はおらず、唯一の肉親と呼べるネカネも魔法学校に通っているため長期間は一緒に入れない。

アーニヤという幼馴染に少女がいるとはいえ、夜は小さな家に4歳の少年はほとんど一人で過ごしていた。

その都度考えるのは英雄である父、ナギ・スプリングフィールドのこと。自分がピンチになったら現れると信じて疑わない純真な少年は悪戯と称して自分を追い詰め、危険な目にあう日々を送る。

そしてある日、その悪戯の一環なのかそうでないのか。自ら湖へ入り命を危険に晒す。

ソレを聞きつけたネカネは慌てて学校から駆けつけた。何故そのようなことをしたのかと彼を問い詰めると…

「……だって、ピンチになったらお父さんが助けに来てくれるって
思ってた……」

そしてそれから月日が少し流れて春から冬へ。

村はずれの湖畔で釣りをしていたネギ君はネカネが帰ってくる事
を思い出し村へ向かう。

村を一望できる小高い山へ登ったとき彼が見たものは…炎に包ま
れている村の姿だった。

立ち上る黒煙、炎に包まれる家屋。

その中をネギ君は親しいものの名前を呼びながら自らの危険も省
みず駆け出す。

そうして、すぐに叔父の姿を発見した。物言わぬ石像と化した姿
で、だ。

直ぐに分かる。普通なら聞こえる人々の喧騒、悲鳴が一切聞こえ
なかったのはこのせいだった。他の村人も、近くにいる村人は全て
石像と化している。

「……ぼ、僕が」

それを見た少年の叫びは悲痛だった。

「僕がピンチになったらなんて思ったから？ピンチになったらお父

さんが来てくれるって…僕があんなコト思ったから…！」

誰が聞いても見当違いの考え。しかし幼い彼にはそう思わざるを得なかった。

そしてその声を聞きつけたかのように、地面が浮いた。

そして現れる異形…

人間とは言えない体、羽、翼、角。一言で言ってしまうればそれこそ化物。そしてそれらが次から次へと湧き出てくる。

それを見て少年の動きが止まる。今まで上げていた泣き声もうわ言のように咳いていた言葉も。そこにいるのは英雄の子供などではなく、恐怖に怯えるただの子供。

巨大な一体の化物がその腕を振り上げる。

「お父さん…お父さん…お父さん」

そのままならば振り下ろされるそれで彼の生涯は簡単に幕を閉じるだろう。

力、不条理だが真理のそれが少年に振り下ろされ…

受け止められた。

風に靡く赤い髪とフード付きの白いコートを纏い、左手には杖を持った男がそこには立っていた。

そしてその右手は細腕にも関わらず、倍以上違う巨大な拳を軽々と止めていた。

男を潰そうとした化物が

『雷の斧』！！』

呪文と共に文字通り吹き飛ばし消滅した。それを見た化物の群れが男を仕留めようと襲い掛かる。

数は100はくだらない。

しかしそこから始まったのは戦闘とも言えない蹂躪。

拳の一撃で悪魔を仕留め、蹴りの一撃で吸う獣の化物を吹き飛ばし、腕を一振りすると押し寄せる軍勢を払い散らした。

そして詠唱

『『雷の暴風』！！』

腰ダメ状態から放たれた右手からは極大の雷をまるでレーザー光線のように放出し、その射線上にいた化物を文字通り消滅させた。

最後に生き残った一体の化物の首をへし折った男を見て、恐怖からか少年がその場から逃げ出す。

その場が唯一安全な場所なのだが、その男（化物）といえるのは少年の本能が許さなかったのだろう。

そして逃げ出した先には、まだ生き残っていた化物がいた。その口を機械的に開くとその奥から光りが解き放たれる。

だがそれは少年に届くことは無く、直前に割り込んだネカネとスタンと呼ばれる老魔法使いによって阻止される。

障壁で攻撃を防いだ二人だったがその攻撃の強力さを防ぎきれず、足元から石へと変化していく。

ネカネの方は耐え切れずに足元の石が割れ、上半身が投げ出される。

そして石化させた化物とさらに現れた小型の3体が止めを刺すべく飛び掛ってきた。

「封魔の瓶！」

瞬間、スタンは懐から小瓶を投げつけ、そう叫んだ。その言葉どおり、化物が全てその小瓶の中に吸い込まれ、地面へと落下し、自動的に封印をかける。

だがそれでも石化の進行は止まらない。既にスタンの体のほとんどは石と化していた。

「……逃げるんじゃ坊主。お姉ちゃんを連れてな。ワシヤもう助からん、この石化は強力じゃ。治す方法は……ない……頼む、逃げとくれ。それがどんな事があってもお前だけは守る。それが、死んだあのバカへのワシの誓いなんじゃ……」

最後にネカネを治療できるように、そして逃げるように言ったスタンはそのまま石と化する。

「……お姉ちゃん。起きてお姉ちゃん」

言いつけからなのか、それとも救わないといけないと思ったのか、倒れて気を失った姉を必死に揺り起こそうとする少年。

そしてその背後には先ほどの男（化物）が頭の左から血を出して立っていた。

男はネカネを抱きかかえ、少年と共に村を脱出。安全と思われるところまでくると初めて口を開く。

「……すまない。来るのが遅すぎた」

心底後悔を含んだ言葉と共にネカネの方に一歩踏み出した男の前に少年が守るように立ちふさがる。その手には小さなおもちゃの杖。震えるその手は今にも杖を落としそうで、それでもその手は落とさないように握り締めている。

「お前…そうか」

その行動に気を取られたのか、それともそこで初めてネギ君のこ

とを認識したのか。男が納得したように呟いた。

「お前がネギか」

それを確認するかのように男は近づいてくる

「お姉ちゃんを……守っているつもりか？」

恐怖に怯えるネギ君の頭を、フワリと男の手が撫でた。

「大きくなったな」

「……え？」

「そつだ、お前にこの杖をやるつ。俺の……形見だ」

ネギ君が状況を把握する前に男が言って自分の杖を差し出した。形見。もう二度と会うことが無いのが決まっているような言葉。そしてその言葉が意味することそれは一つしかない……

「……お、お父さん？」

そつ、その言葉は身内でしかあり得ない。

「……もう、時間がない。ネカネは大丈夫だ。石化は止めておいた。あとはゆっくりり治して貰え」

それだけ言うと男は中空へと浮かび上がる。

「悪いな。お前には何もしてやれなくて」

「……………お父さん？」

まるで会話するのが禁止されているかのように……男は一方的に空へと帰っていく。

「こんな事、言えた義理じゃねえが……………元気に育て……幸せにな！」

「お父さ、」

ネギ君が追いかけるが、転ぶ。そして見上げたときはその姿は既に無く、まるで元からそこには何もいなかったかのような冬の雪空が広がっていた。

だが、最後の言葉は……唯一彼が父親と認めた言葉……

「お父、さん」

それを確かめるかのように呟いたネギ君の瞳から大粒の涙が零れ、そして堰が切れたかのように叫んだ。

「……………お父さあ————ん!!!!」

冬の寒空の下にその言葉が木霊した……………

ポタリ…

「あ…」

次のページが濡れる。見ると俺の周りの連中はエヴァンジェリンと茶々丸を除いて全員が涙を流していた。

そしてその涙がページを濡らし、文字を潰していく。

これが…ネギ君の過去か。年齢に不釣り合いなあの性格はこの事件のせいかもしれない。

自分の周りには年上しかいなくなれば礼儀正しくなるのが当たり前だ。むしろトラウマなのかもしれない。

そして父親への異様なまでの固執もこれのせいだろう。これまで

は漠然としていたイメージの父親がいきなり自分の目の前に現れ、さらに救ってくれたとなれば憧れになるのは当然の流れだ。

「うつつ、ネギ君にそんな過去が……」

「ネギ先生……！」

「へ！？み、皆さん！？」

ネギ君が気づいたと同時に全員が感極まったのかネギ君に向けて突進していった。

「き、聞いて……いえ、見てたんですか！？」

「ネギ君！ 私も及ばずながらネギ君のお父さん探しに協力するよ！」

「ウチもー！」

「ウチも協力するわ！」

「ワタシも協力するアルよー！」

「わわわ私も〜」

「協力って……そんなダメですよ！ 師匠、草薙さん！この人たちに何か言っただげて下さい〜っ！」

いや、何とかって……俺たちに助けを求められても……

「ん……いやまあ、私も協力してやらん事もないが……」

「師匠ー！？」

なんかエヴァンジェリンまで感動してるんですけど!?

「んー、俺も協力するぞー」

「草薙さんまで!？」

協力するのは決まってるようなものだしな。そもそも過去なんて見なくても協力する予定だったんだ。

しかし…一つ腑に落ちないことがある。

ネギ君が英雄になっていて父親に憧れるのは分かるし、実際救ってくれたのだから目標にするのも分かる。

だが…父親がいるとしたら母親はどうした?ネギ君だって人の子だ。母親がいるのは当たり前。

なのだが6年前の記憶で母親のことには一切触れていないし誰も喋ろうとはしていない。

ネギ君自身は当然として村人、姉のネカネさん、幼馴染のアーニヤと呼ばれている少女も父親のことについては触れているが母親の生死についてはまったく出てこない。

そこがどうも引っかかる。まるで母親の部分だけがごっそりと抜け落ちているようだ。

「なあネg…」

「よーし!ネギ君のお父さんが見つかることを祈ってもいつちよやるよー!」

「またやる気が貴様らあああああああああ！」

まあ…この空気を壊したくはないし今聞くのはやめておくか。

S i d e o u t

知る為に…後編（後書き）

というわけでネギの過去を知る回でした。

ネギの過去については変えることはないので原作のまんまです。
内容的には色々知る回だったのではと。

最近本当にサブタイトル思いつかないんですよ…

下手したら今更サブタイトル変えるかも知れないですorz

誤字脱字、表現の矛盾の指摘があればよろしくお願いします。

評価、感想をもらえたら作者のテンションがおかわりだぁ！します！

ではまた来週。次回からは対ヘルマンだぁ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6873n/>

魔法先生ネギま！～誰が為に何を成す...～

2011年12月11日10時55分発行